



Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

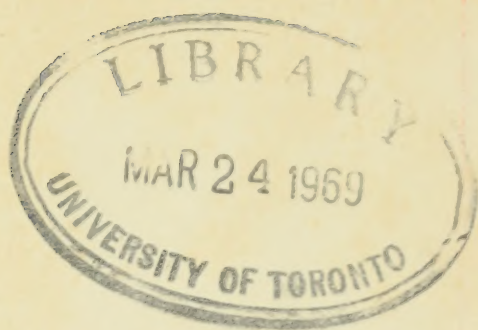
國
本
國
獨
步
集

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

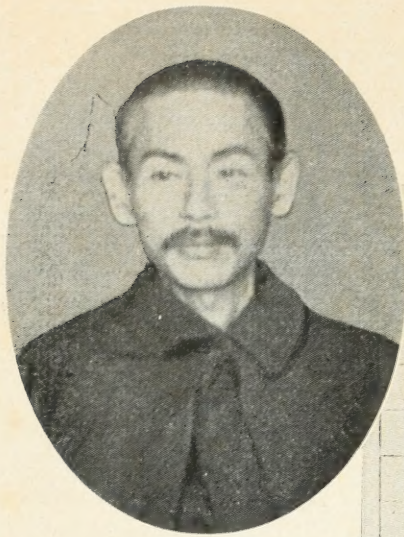
國木田獨步集

杉浦非水裝幀

改
造
社
版



PL
810
U5
1927



國木田獨歩と

その筆蹟

海濱の朝御山の麓まじりは出来上りも
 無二の 歌あはれ人は此の岸に出るの時も
 燈籠と下りた 疲弱、一カに任せて強いて
 鼓動して 春草、少しはゆりてはあはれ
 勝つにはあはれおと文のまゝ
 おとろくさるゝ
 独歩の

木城光村

己の心にまじらす歌

君し忍ばず、われ中か成、
 深きちまひもあたなうん、
 雲を月のあらひは、
 待つ心なき、限みなり。

中ふは歌に音を泣き、
 あしたは神に祈れかし。
 浅く木樹みえ、情をば、
 底の真清水にや深し。

千重くまほま月影は、
 月がおもわを照らす。、
 星王ゆる恋の秋風は、
 已か高嶺のあみだか不。

ますら女のこは世にかた人。
 月さよ女は心にはば、
 忍ぶは、君か誠にて、
 面かむはわれの誇りなり。

世平十一月九日午前三時半
 他人の心をあはれと泣きこゝろ
 詩を作りはげまじ。

「國木田獨歩集」目次

卷頭寫眞(照影一筆蹟)

小 傳

「武藏野」篇

武藏野	一
置土産	三
源をぢ	一七
たき火	二六
詩想	二九
忘れえぬ人々	三〇
鹿狩	三七
「獨歩集」篇	
女難	四三
正直者	五九
湯ヶ原より	六九
少年の悲哀	七一
春の鳥	七六
「運命」篇	
運命論者	八三
巡査	九六
酒中日記	一〇〇
馬上の友	一〇〇
悪魔	一〇七
畫の悲み	一四四
空知川の岸邊	一四八
非凡なる凡人	一五六

「濤聲」篇

二少女	一六三
帽子	一六九
死	一七二
波の音	一七九
號外	一八三
戀を戀する人	一八七
「獨歩集第二」篇	
竹の木戸	一九四
窮死	二〇四
疲勞	二〇九
二老人	二二一
泣き笑ひ	二二六
都の友へ、B生より	二二九
湯ヶ原ゆき	二三二
「渚」篇	
渚	二三八
岡本の手帳	二三二
詩篇	
告天子	二三五
大連灣	二三五
涙川	二三五
冬の山家	二三五
菫	二三六
高峰の雲よ	二三六
限なき空	二三六

驚異	二三六
夏の夜	二三七
春來り冬ゆく	二三七
戀のきはみ	二三七
森に入る	二三七
山林に自由存す	二三七
沖の小島	二三七
故郷の翁に與ふ	二三八
風の音	二三八
山の聲	二三八
わがこゝろ	二三九
水際のすみれ	二三九
夏來りぬ	二三九
そのうた	二三九
雲影	二三九
たき火	三三九
鎌倉妙本寺懷古	三四一
小品、隨筆篇	
無窮	三四二
彼	三四四
吾が土曜日の夜	三四六
沙漠の雨	三四八
落日に對す	三四八
鎌倉の裏山	三四八
畫	三五〇
驟雨	三五三
死	三五五
戀の日記	三五五
わが過去	二五九

趣味について	二五九
青桐	二六〇
憐れなる兒	二六〇
信仰	二六二
「獨歩吟」序	二六三
予の作物と人氣	二六四
「欺かざる記」の緒言	二六五
秋の入日	二六六
海軍從軍記	二六六
主張、感想篇	
ワーツワースの自然主義と余	二六九
奈何にして小説家となりし乎	二七〇
予が作品と事實	二七二
机は部屋の置物	二七五
雜談	二七五
驚異	二七六
人生何をか求むる	二七七
凡人の傳	二七七
空想	二七八
逸文篇	
頭巾二つ	二七九
友愛	二七九
吾が海軍水兵の歌	二八〇
想出るまゝ	二八一
日記、書翰篇	
日記	二八七
書簡	三三三
著作年表	三三一

國木田獨歩小傳

國木田獨歩本名は哲夫、今から十九年前に三十八歳の壯齡を以て世を去つた。彼の生涯が一つの時代であり、彼の事業が一つの傳統として、永く世に留まるべきものであつたことは、回顧によつて殊に明らかになるのであるが、しかも其辛苦の果實に至つては、播ける人自ら之を收穫することを得なかつたのである。

獨歩が物を観る力、敏く感じ鮮やかに語るの才能は、惱み多き自身の生活をさへも、批判の外には遺さなかつた。獨歩吟客の四つの文字以外に、適切に彼が青年期の生活を、説明する名稱は無かつたのである。彼は生れながらにして既に漂遊の兒であつた。世間普通の意味における、故郷といふものは有たなかつた。國木田の家はもと淡路から出たらしい。龍野の藩士にして龍野を知らず、銚子に生れて四つといふ年に出てしまつた。友人の記憶が誤らぬとすれば、彼の父は明治の初年に、海路奥州に赴かんとして銚子の沖に於て破船した。さうして此浦に漂着して本國と音信を絶ち、土地の婦人を娶つて彼兄弟を生むまでの、因縁を結んだといふ

のである。父は快活にして親しみ易く、世相に對する独自の見解を具へて居た。母は病身で幾分か幽鬱であつた。さうして獨歩は其外貌によつて判ずれば、たしかにより多くを父の筋から受繼いで居たやうである。

しかも親の縁は深いとは言へなかつた。少年の日に家と別れて、學校の生活に入つてから、直ちに獨歩の淋しい旅は始まつて、それが年久しく讀いたのである。山口中學の同窓には、現代の名士が多い。其人々の追憶の中には、今でも精神にしてよく反抗した美少年國木田龜吉が往來して居る。喧嘩をしてはよく人を引掻くので、がり龜といふ綽名をさへ付けられた。それを江木翼君に素破抜かれて、大笑ひをしたのも亦二十何年の昔になる。短小虚弱にして意氣のみ徒らに剛なりし彼は、此の如くして其孤獨を防衛しなればならなかつたのである。

早稲田の政治科では校長排斥の運動を企てて退學させられた。さうして自ら好んで難關生活に入つて往つたのである。幸ひにして彼が天分は夙く目ざめた。詩の感激と自然に對する愛情とは、此間に於て著しく成長し且つ彼を柔らげた。その經驗の一つが花の如く鮮麗に、彼が後年の製作の上に咲き亂れて居るこ

とは、讀者の極めて容易に認め得る所であらう。しかも其の精細なる記憶が、當時何等の豫定も無い孤獨無聊の一遊子の、偶然の觀察に出たといふことは、彼を解せざる者には奇跡である。

獨歩は其の無邪氣なる咏歎を以て、美しい多くの山水を友とし得た如く、他の一面には更に明敏なる理解を以て、能く時代の最も重要な知識性格と接觸することが出来た。新宗教と共に齎らされた人間趣味、解放の土に芽ぐんだ活潑なる政治思想、其他ある限りの新機運は、隙も無く彼を教へ且つ刺戟した。詩人も記者も農夫も代議士も、何れも彼を誘ひ又彼に適したかも知れぬが、悲しいかな生涯は限りがあつて、之をすべてのものに分つには足りなかつた。しかも此間に處して必ずしも時流と共に浮沈せず、別に一箇の獨立した立場から、弘く人生を觀て、其の最も幽かなるものの中に、幾多の「忘れ得ぬ人々」を見出したといふことは、勿論時代が彼をして斯くせしめたものでは無かつた。即ちさういふ時代が彼を以て、新たに造り開かれたのであつた。

昭和二年二月

柳田國男

武藏野

(一)

「武藏野の 俤は今纔に入間郡に残れり」と
自分は文政年間に出來た地圖で見た事がある、
そして其地圖に入間郡「小手指原久米川は古戰場なり太平記元弘三年五月十一日源平小手指原にて戦ふ事一日が内に三十餘度日暮れば平家三軍退て久米川に陣を取る明れば源氏久米川の陣へ押寄ると載せたるは此邊なるべし」と書込んであるのを讀んだ事がある。自分は武藏野の跡の纔に残て居る處とは定めて此古戰場あたりではあるまいかと思つて、一度行て見る積りで居て未だ行かないが實際は今も欠張其通りであらうかと危ぶんで居る。兎も角、晝や歌で計り想像して居る武藏野を其俤ばかりでも見たいものとは自分ばかりの願ではあるまい。それほどの武藏野が今は果していかゞであるか、自分は詳はしく此問に答へて自分を満足させたいとの望を起したことは實に一年前の事であつて、今は益々此望が大きくなつて來た。

さて此望が果して自分の力で達せらるゝであらうか。自分は出來ないと言はぬ。容易でないと思つて居る、それ丈け自分は今の武藏野に興味を感じて居る。多分同感の人も少なからぬことと思ふ。

それで今、少しく端緒をこゝに開いて、秋から冬へかけての自分の見て感じた處を書いて自分の望の一少部分を果したい。先づ自分が彼問に下すべき答は武藏野の美今も昔に劣らずとの一語である。昔の武藏野は實地見てどんなに美であつたことやら、それは想像にも及ばむほどであつたに相違あるまいが、自分が今見る武藏野の美しさは斯る誇張的の斷案を下さしむるほどに自分を動かして居るのである。自分は武藏野の美と言つた、美といはんより寧ろ詩趣といひたい、其方が適切と思はれる。

(二)

そこで自分は材料不足の處から自分の日記を種にして見たい。自分は二十九年の秋の初か

ら春の初まで、澁谷村の小な茅屋に住て居た。自分が彼望を起したのも其時の事、又た秋から冬の事のみを今書くといふのも其わけである。

九月七日——昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を拂ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるゝとき林影一時に煌めく、

これが今の武藏野の秋の初である。林はまだ夏の緑の其ままであり乍ら空模様が夏と全く變つてきて雨雲の南風につれて武藏野の空低く頻りに雨を送る。其晴間には日の光水氣を帯びて彼方の林に落ち此方の柱にかゞやく。自分は屢々思つた、こんな日に武藏野を大觀することが出來たら如何に美しい事だらうかと。おかげで九日の日記にも「風強く秋聲野にみつ、浮雲變幻たり」とある。恰度此頃はこんな天氣が續て大空と野との景色が間斷なく變化して日の光は夏らしく雲の色風の音は秋らしく極めて趣味深く自分は感じた。

先づこれを今の武藏野の秋の發端として、自分は冬の終はるころまでの日記を左に並べて、變化の大略と光景の要素とを示して置かんと思ふ。

九月十九日——朝、空曇り風死す、冷露寒

露、蟲聲しげし、天地の心なほ日さめぬが如し。』

同二十一日——『秋天拭ふが如し、木葉火の如くかゝやく。』

十月十九日——『月明かに林影黒し。』

同二十五日——『朝は露深く、午後は晴る。夜に入りて雲の絶間の月さゆ。朝まだき霧の晴れぬ間に家を出て野を歩み林を訪ふ。』

同二十六日——『午後林を訪ふ。林の奥に坐して四顧し、傾聴し、睇視し、默想す。』

十一月四日——『天高く氣澄む、夕暮に獨り風吹く野に立てば、天外の富士近く、國境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一點、暮色漸く到り、林影漸く遠し。』

同十八日——『月を踏で散歩す、青煙地を這ひ月光林に碎く。』

同十九日——『天晴れ、風清く、露冷やかなり。滿目黄葉の中綠樹を雜じ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。獨り歩み默思口吟し、足にまかせて近郊をめぐる。』

同二十二日——『夜更けぬ、戸外は林をわたる風聲ものすごし。滴聲頻なれども雨は已に止みたりとおぼし。』

同二十三日——『昨夜の風雨にて木葉殆ど揺

落せり。稻田も殆ど刈り取らる。冬枯の淋しき様となりぬ。』

同二十四日——『木葉未だ全く落ちず。遠山を望めば、心も消え入らんばかり懐し。』

同二十六日——『夜十時記す。「屋外は風雨の聲ものすごし。滴聲相應ず。今日は終日霧たちこめて野や林や永久の夢に入りたらんごとし。午後犬を伴うて散歩す。林に入り黙坐す。犬眠る。水流林より出で、林に入る、落葉を浮べて流る。をりく時雨しめやかに林を過ぎて落葉の上をわたりゆく音静かなり。』

同二十七日——『昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、日うららかに昇りぬ。屋後の丘に立て望めば富士山眞白るに連山の上に聳ゆ。風清く氣澄めり。』

げに初冬の朝なるかな。田面に水あふれ、林影倒に映れり。』

十二月二日——『今朝霜、雪の如く朝日にきらめきて美事なり。暫くして薄雲かゝり日光寒し。』

同二十二日——『雪初て降る。』

三十年一月十三日——『夜更けぬ。風死し林黙す。雪頻りに降る。燈をかゝげて戸外

をうかゞふ、降雪火氣にきらめきて舞ふ。あゝ武蔵野沈黙す。雨も耳を澄せば遠き彼方の林をわたる風の音す、果して風聲か。』

同十四日——『今朝大雪、葡萄棚落ちぬ。夜更けぬ、霜をわたる風の音清く、あ

あこれ武蔵野の林より林をわたる冬之夜寒の凜なるかな。雪どけの滴聲判をめぐ

る。』

同二十日——『美しき朝。空は片雲なく、地は霜柱白銀の如くきらめく。小鳥梢に囀

ず。梢頭針の如し。』

二月八日——『梅吹きぬ。月漸く美なり。』

三月十三日——『夜十二時、月傾き風急に、雲わき、林鳴る。』

同二十一日——『夜十一時。屋外の風聲をきく、忽ち遠く忽ち近し、春や襲ひし、冬や近れし。』

(三)

昔の武蔵野は葎原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らして居たやうに言ひ傳へてあるが、

今の武蔵野は林である。林は實に今の武蔵野の特色といつても宜い。則ち木は重に椅の類

で冬は悉く落葉し、春は、滴る計りの新緑萌え出づる、其變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ霞に雨に月に風に霧に時雨に雪に、綠蔭に紅葉に、様々の光景を呈する、其妙は一寸西國地方又た東北の者には解し兼ねるのである。元來日本人はこれまで楡の類の落葉林の美を餘り知らなかつた様である。林といへば重に松林のみが日本の文學美術の上に認められて居て、歌にも楡林の奥で時雨を聞くといふ様なことは見當らない。自分も西國に人となつて少年の時學生として初めて東京に上つてから十年になるが、かゝる落葉林の美を解するに至つたのは近來の事である。左の文章が大に自分を教へたのである。

「秋九月中旬といふころ、一日自分がさる楡の林の中に坐してゐたことが有つた。今朝から小雨が降りそゞぎ、その晴れ間にはをりをり生しま暖かな日かけも射してまことに氣まぐれな空合ひ。あはしくしい白ら雲が空ら一面に棚引くかと思ふと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、無理に押し分けたやうな雲間から澄みて伶俐し氣に見える人の眼の如くに朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けて

みた。木の葉が頭上で幽かに戦いだ、その音を聞たばかりでも季節は知られた。それは春先する、面白さうな、笑ふやうなさいめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し聲でもなく、また末の秋のおどくした、うそさぶさうなお饒舌りでもなかつたが、只漸く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語の聲で有つた。そよ吹く風は忍ぶやうに木末を傳つた、照ると曇るとで雨にじめつく林の中のやうすが間斷なく移り變つた、或はそこに在りとある物總て一時に微笑したやうに、黙なくあかみわたつて、さのみ繁くもない楡のほそくとした幹は思ひがけずも白絹めく、やさしい光澤を帯び、地上に散り布いた、細かな落ち葉は俄に日に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしつたやうな一バアボロトニク（蕨の類）のみごとな莖、加之も熱え過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつけて日前に透かして見られた。

或はまた四邊一面俄かに薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいりも見えなくなり、楡の木立ちも、降り積つた儘でまだ日の眼に逢はぬ雪のやうに、白くおぼろに霞む——と

小雨が忍びやかに、怪し氣に、私語するやうにバラ／＼と降つて通つた。楡の木は葉は著しく光澤が褪めても流石に尚ほ青かつた、が只そちこちに立つ楡木のみは總て赤くも黄ろくも色づいて、をり／＼日の光りが今ま雨に濡れた計りの細枝の繁みを漏れて滑りながらに脱けて來るのをあびては、キラ／＼ときらめいた。」

則ちこれはツルゲーネフの書たるものを二葉亭が譯して「あひびき」と題した短篇の冒頭にある一節であつて、自分がかゝる落葉林の趣きを解するに至つたのは此微妙な叙景の筆の力が多い。これは露西亞の景で尚も林は楡の木で、武藏野の林は楡の木、植物帯からいふと甚だ異て居るが落葉林の野は同じ事である。自分は屢々思つた、若し武藏野の林が楡の類でなく、松か何かであつたら極めて平凡な變化に乏しい色彩一様なものとなつて左まで珍重するに足らないだらうと。

楡の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。風が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千萬の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かの如く遠く飛去る。木の葉落ち盡せば、數十里の地域に亘る林が一時に

裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此上に垂れ、武蔵野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の記に、林の奥に坐して四顧し、傾聴し、睇視し、默想すと書た。一あひびき一にも、自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けたとある。此耳を傾けて聞くといふことがどんなに秋の木から冬へかけての、今の武蔵野の心に適つてゐるだらう。秋ならば林のうちより起る音、冬ならば林の彼方遠く響く音。

鳥の羽音、囀る聲、風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲、叢の蔭、林の奥にすづく蟲の音。空車荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠來に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながらゆく村の者のだみ聲、それも何時しか、遠かりゆく、獨り淋しさうに道をいそぐ女の足音、遠く響く砲聲。隣の林でだしぬけに起る銃音、自分が一度犬をつれ、近處の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を讀んで居ると、突然林の奥で物の落ちたやうな音がした。足もとに臥て居た犬が耳を立て、きつと其方を見詰めた。そ

れぎりで有つた。多分葉が落つたのであらう、武蔵野には栗樹も陰分多いから。若し大れ時雨の音に至てはこれほど幽寂のものはない。山家の時雨は我國でも和歌の題にまでなつて居るが、廣い、廣い、野末から野末へと林を越え、社を越え、田を横ぎり、又た林を越えて、しのびやかに通り過ぐ時雨の音の如何にも幽かで、又た驚揚な趣きがあつて、優しく懐しいのは、實に武蔵野の時雨の特色であらう。自分が嘗て北海道の深林で時雨に逢た事がある、これは又た人跡絶無の大森林であるから其趣は更に深いが、其代り、武蔵野の時雨の更に人なつかしく、私語くが如き趣はない。

秋の中ごろから冬の初、試みに中野あたり、或は溝谷、世田ヶ谷、又は小金井の奥の林を訪うて、暫く坐して散歩の疲を休めて見よ。此等の物音、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉なきに落ちて微かな音をし、其も止んだ時、自然の靜肅を感じ、永、遠の呼吸身に迫るを覺ゆるであらう。武蔵野の冬の夜更に星斗闌干たる時、星をも吹き落しさうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分は屢々日記に書た。風の音は人の思を遠くに誘ふ。自分は此物凄い風の音の忽ち近く

忽ち遠きを聞ては、遠い昔からの武蔵野の生活を思ひつゞけた事もある。

熊谷真好の和歌に、

よもすから木葉かたよる音ききは

しのひに風のかよふなりけり

といふがあれど、自分は山家の生活を知て居ながら、此歌の心をげにもと感じたのは、實に武蔵野の冬の村居の時であつた。

林に坐つて居て日の光の尤も美しきを感じるのは、春の末より夏の初であるが、それは今こゝには書くべきでない。其次は黄葉の季節である。半ば廣ろく半ば緑な林の中に歩いて居ると澄みわたつた大空が梢々の隙間からのぞかれて日の光は風に動く葉木々に碎け、其美しき言ひつくされず。日光とか硝氷とか、天下の名所は兎も角、武蔵野の様な廣い平原の林が限なく染まつて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つといふも特異の美觀ではあるまいか。

若し高きに登て一日に此大觀を占めることが出来るなら此上もないこと、よし其れが出来難いにせよ、平原の景の單調なる丈けに、人をしめて其一部を見て全部の廣い、殆ど限らない光景を想像さする者である。其想像に動かされつつ夕照に向て黄葉の中を歩ける丈け歩くこと

がどんなに面白からう。林が盡きると野に出る。

(四)

十月二十五日の記に、野を歩み林を訪ふと書き、又十一月四日の記には、夕暮に獨り風吹く野に立てばと書てある。そこで自分は今一度ツルゲートネフを引く。

「自分はちどまつた、花束を拾ひ上げた、そして林を去つてのらへ出た。日は青々とした空に低く漂つて、射す影も着ぎめて冷かになり、照るとはなく只ジミな水色のぼかしを見るやうに四方に充ちわたつた。日没にはまだ半時間も有らうに、モウゆふやけがほの赤く天末を染めだした。黄ろくからびた刈株をわたつて烈しく吹付ける野分に催されて、そりかへつた細かな落ち葉があわたしく起き上り、林に沿うた往來を掃ぎつて、自分の側を駆け通つた、のらに向つて壁のやうにたつ林の一面は總てざわ／＼ざわつき、細末の玉屑を散らしたやうに煙きはしないがちらつてゐた。また枯れ艸、莠、藁の嫌ひなくそこから一面にからみついた蜘蛛の窠は風に吹き靡かされて波だつてゐた。

自分はちどまつた……心細く成つて来た、眼に遮る物象はサツパリとはしてゐれど、おもしろい氣もをかし氣もなく、さびれはてたうちにも、どうやら間近になつた冬のすさまじきが見透かされるやうに思はれて。小さな鴉が重さうに羽ばたきをして、烈しく風を切りながら、頭上を高く飛び過ぎたが、フト首を回らして、横目で自分をにらめて、急に飛び上つて、聲をちぎるやうに啼きわたりながら、林の向うへかくれてしまつた。鳩が幾羽ともなく群をなして勢込んで穀倉の方から飛んで来た、がフト柱を建てたやうに舞ひ昇つて、さてパツと一齊に野面に散つた——アア秋だ！誰だか香山の向うを通ると見えて、から車の音が虚空に響きわたつた……これは露西亞の野であるが、我武藏野の野の秋から冬へかけての光景も、凡そこんなものである。武藏野には決して香山はない。しかし大洋のうねりの様に高低起伏して居る。それも外見には一面の平原の様で、寧ろ高臺の處々が低く窪んで小さな浅い谷をなして居るといつた方が適當であらう。此谷の底は大概水田である。畑は重に高臺にある、高臺は林と畑とで様々の區劃をなして居る。畑は即ち野であ

る。されば林とても數里にわたるものなく否、恐らく一里にわたるものもあるまい、畑とても一陣數里に續くものはなく一座の林の周囲は畑、一頃の畑の三方は林、といふ様な具合で、農家が其間に散在して更らにこれを分割して居る。即ち野やら林やら、たゞ亂雑に入組んで居るといふ様な風である。それが又た實に武藏野に一種の特色を與へて居て、こゝに自然あり、こゝに生活あり、北海道の様な自然そのまゝの大原野人森林とは異て居て、其趣も特異である。

稲の熟する頃となると、谷々の水田が黄んで来る。稲が刈り取られて林の影が倒さに田面に映る頃となると、大根畑の盛で、大根がそろ／＼抜かれて、彼方此處の水溜又は小さな流の淨で洗はれる様になると、野は麥の新芽で青々となつて来る。或は麥畑の一端、野原のまゝで残り、尾花野菊が風に吹かれて居る。草原の一端が次第に高まつて、其はてが天際をかぎつて居て、そこへ爪先あがりに登て見ると、林の絶え間を國境に連る秩父の諸嶺が黒く横はつて居て、あたかも地平線上を走つては又た地平線下に没して居るやうにも見える。さて

これより又た畑の方へ下るべきか。或は畑の彼方の菅原に身を横へ、強く吹く北風を、積み重ねた枯草で避けながら、南の空をめぐる日の微温き光に顔をさらして畑の横の林が風にざわつき煙き輝くのを眺むべきか。或は又た直ちに彼林へとゆく路をすゝむべきか。自分は斯くためらつた事が屢々ある。自分は困つたか否、決して困らない。自分は武蔵野を縦横に通じてゐる路は、どれを撰で行つても自分を失望ささないことを久しく経験して知て居るから。

(五)

自分の朋友が嘗て其郷里から寄せた手紙の中に「此間も一人夕方に菅原を歩みて考へ申候、此野の中に縦横に通せる十數の徑の上へ何百年の昔より此かた朝の露さやけしといひては出で夕の雪花やかなりといひてはあこがれ何百人のあはれ知る人や逍遙しつらん相悪む人は相避けて異なる道をへだゝりて行き相愛する人は相合して同じ道を手とりつゝかへりつらん」との一節があつた。野原の徑を歩みては斯るいみじき想も起るならんが、武蔵野の路はこれとは異り、相逢はんとて往くとても逢ひそ

これ、相違けんとして歩むも林の回り角で空然出逢ふ事があらう。されば路といふ路、右にめぐり左に轉じ、林を貫き、野を横ぎり、眞直なるこゝと鐵道線路の如きかと思へば、東よりすゝみて又東にかへるやうな迂回の路もあり、林にかくれ、谷にかくれ、野に現はれ、又た林にかくれ、野原の路のやうに能く遠くの別路ゆく人景を見ることが容易でない。しかし野原の徑の想にもまして、武蔵野の路にはいみじき實がある。

武蔵野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へゆけば必ず其處に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武蔵野の美はたゞ其縦横に通ずる數千條の路を當もなく歩くことに由て始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、晝、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞ此路をぶら／＼歩いて思ひつき次第に右し左すれば隨處に吾等を満足させるものがある。これが實に又た、武蔵野第一の特色だらうと自分はしみ／＼感じて居る。武蔵野を除て日本に此様な處が何處にあるか。北海道の原野には無論の事、奈須野にもない、其外何處にあるか。林と野とが斯くも能く入り亂れて、生活と自然とが斯の様に密接して居る

處が何處にあるか。實に武蔵野に斯る特殊の路のあるのは此の故である。

されば君若し、一の小徑を往き、忽ち一條に分るゝ處に出たなら固るに及ばない。君の杖を立て、其倒れた方に往き玉へ。或は其路が君を小さな林に導く。林の中ころに於て又た二つに分れたら、其小なる路を撰んで見玉へ。或は其路が君を妙な處に導く。これは林の奥の古い墓地で苔むす墓が四つ五つ並んで其前に少し計りの空地があつて、其横の方に女郎花など咲て居ることもあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴て居たら君の幸福である。すぐ引きかへして左の路を進んで見玉へ。忽ち林が盡て君の前に見たたしの廣い野が開ける。足元から少しだらだら下りに成り萱が一面に生え、尾花の末が日に光つて居る。菅原の先きが畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、其林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々しい雲が集て居て雲の色にまがひさうな連山が其間に少しづゝ見える。十月小春の日の光のどかに照り、小氣味よい風がそよ／＼と吹く。若し菅原の方へ下りてゆくと、今まで見えた廣い景色が悉く隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく細長い池が菅原と林との間に隠れ

て居たのを發見する。水は清く澄で、大空を横
ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水の淨
には枯蘆が少しばかり生えてゐる。此池の淨の
徑を暫くゆくと又た二つに分れる。右にゆけ
ば林、左にゆけば坂。君は必ず坂をのぼるだ
らう。兎角武藏野を散步するのに高い處高い
處と撰びたくなるのはなんとかして廣い眺望
を求むるからで、それで其の望は容易に達せら
れない。見下ろす様な眺望は決して出來ない。
それは初めからあきらめたがい。

若し君、何かの必要で道を尋ねたく思はゞ、
畑の真中に居る農夫にきゝ玉へ、農夫が四十以
上の人であつたら、大聲をあげて尋ねて見玉
へ、驚て此方（こなた）を向き、大聲で教へて呉れるだ
らう。若し少女であつたら近づいて小聲できゝ
玉へ。若し若者であつたら、帽を取て慇懃に問
ひ玉へ。鷹揚に教へて呉れるだらう。怒つては
ならない、これが東京近在の若者の癖である
から。

教へられた道をゆくと、道が又た二つに分れ
る。教へて呉れた方の道は餘りに小さくて少し
變だと思つても其通りにゆき玉へ、突然農家の
庭先に出るだらう。果して變だと驚てはいけ
ぬ。其時農家で尋ねて見玉へ、門を出るとすぐ往

來ですよと、すげなく答へるだらう。農家の門を
外に出て見ると果して見覚えある往來なる程
これが近路だなど君は思はず微笑をもらす、其
時初て教へて呉れた道の有難さが解るだらう。
眞直な路で、兩側共十分に黄葉した林が四
五丁も續く處に出る事がある。此路を獨り靜
かに歩む事のどんなに樂しからう。右側の林の
頂は夕照鮮かにかゞやいて居る。をり／＼
落葉の音が聞える計り、四邊はしんとして如何
にも淋しい。前にも後にも人影見えず誰にも
遇はず。若し其れが木葉落ちつくした頃ならば、
路は落葉に埋れて、一足毎にがさ／＼と音がす
る、林は奥まで見すかされ、梢の先は針の如く
細く蒼空を指してゐる。猶更ら人に遇はない。
愈々淋しい。落葉をふむ自分の足音ばかり高く、
時に一羽の山鳩あわたゞしく飛び去る。羽音に
驚かされる計り。

同じ路を引きかへして歸るは愚である。道つ
た處が今の武藏野に過ぎない。まさかに行暮
れて困る事もあるまい。歸りも矢張りその方川
をきめて、別な路を當てもなく歩くが妙。さうす
ると思はず落日の美觀をうる事がある。日は
富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士
の中腹に群がる雲は黄念色に染て、見るがうち

に様々の形に變ずる。連山の頂は白銀の鎖
の様な雪が次第に遠く北に走て、終は暗澹たる
雲のうちに没してしまふ。
日が落ちる。野は風が強く吹く、林は鳴る、
武藏野は暮れむとする、寒さが身に沁む、其時
は路をいそぎ玉へ、顧みて思はず新月が枯林の
梢の横に寒い光を放てゐるのを見る。風が今に
も梢から月を吹き落しさうである。突然又た野
に出る。君は其時、
山は暮れ野は黄昏の薄かな
の名句を思ひだすだらう。

(六)

今より三年前の夏のことであつた。自分は或
友と市中の寓居を出で、三崎町の停車場から
境まで乗り、其處で下りて北へ眞直に四五丁ゆ
くと、櫻橋といふ小さな橋がある、それを渡ると
一軒の掛茶屋がある。此茶屋の婆さんが自分に
向て、「今時分、何にしに來たゾア」と問うた事
があつた。
自分は友と顔見合せて笑て、「散歩に來たの
よ、たゞ遊びに來たのだ」と答へると、婆さんも
笑て、それも馬鹿にした様な笑ひかたで、「櫻は
春咲くこと知ねえだね」と言つた。其處で自分は

今より三年前の夏のことであつた。自分は或
友と市中の寓居を出で、三崎町の停車場から
境まで乗り、其處で下りて北へ眞直に四五丁ゆ
くと、櫻橋といふ小さな橋がある、それを渡ると
一軒の掛茶屋がある。此茶屋の婆さんが自分に
向て、「今時分、何にしに來たゾア」と問うた事
があつた。
自分は友と顔見合せて笑て、「散歩に來たの
よ、たゞ遊びに來たのだ」と答へると、婆さんも
笑て、それも馬鹿にした様な笑ひかたで、「櫻は
春咲くこと知ねえだね」と言つた。其處で自分は

今より三年前の夏のことであつた。自分は或
友と市中の寓居を出で、三崎町の停車場から
境まで乗り、其處で下りて北へ眞直に四五丁ゆ
くと、櫻橋といふ小さな橋がある、それを渡ると
一軒の掛茶屋がある。此茶屋の婆さんが自分に
向て、「今時分、何にしに來たゾア」と問うた事
があつた。
自分は友と顔見合せて笑て、「散歩に來たの
よ、たゞ遊びに來たのだ」と答へると、婆さんも
笑て、それも馬鹿にした様な笑ひかたで、「櫻は
春咲くこと知ねえだね」と言つた。其處で自分は

夏の郊外の散歩のどんなに面白いかを婆さんの耳にも解るやうに話して見たが無駄であつた。東京の人は吞氣だといふ一語で消されて仕了つた。自分等は汗をふき、婆さんが剃て呉れる甜瓜を喰ひ、茶屋の横を流れる幅一尺計りの小さな溝で顔を洗ひなどして、其處を立出でた。此溝の水は多分、小金井の水道から引たものらしく、能く澄で居て、青草の間を、さも心地よきさうに流れて、をり／＼こぼ／＼と鳴ては小鳥が来て翼をひたし喉を濕ほすのを待つて居るらしい。しかし婆さんは何とも思はないで此水で朝夕、鍋釜を洗ふやうであつた。

茶屋を出て、自分等は、そろ／＼小金井の堤を、水上の方へとのぼり初めた。あゝ其日の散歩がどんなに楽しかつたらう。成程小金井は櫻の名所、それで夏の盛に其堤をのこ／＼歩くも餘所日には愚かに見えるだらう、しかし其れは未だ今の武蔵野の夏の日の光を知らぬ人の話である。

空は蒸暑い雲が湧きいで、雲の奥に雲が隠れ、雲と雲との間の底に蒼空が現はれ、雲の蒼空に接する處は白銀の色とも雪の色とも譬へ難き純白な透明な、それで何となく穩かな淡々しい色を帯びて居る、其處で蒼空が一段と

奥深く青々と見える。たゞ此ざりなら夏らしきものないが、さて一種の濁色の霞のやうなものが、雲と雲との間をかき亂して、凡べての空の模様を動搖、参差、任放、靡靡の有様と爲し、雲を男く光線と雲より放つ陰翳とか彼方此方に交叉して、不羈の逸の氣が何處ともなく空中に微動して居る。林といふ林、梢といふ梢、草葉の末に至るまでが、光と熱とに溶けて、まどろんで、怠けて、うつら／＼として酔て居る。林の一角、直線に斷たれて其間から廣い野が見える、野良一面、糸遊上騰して永くは見つめて居られない。

自分等は汗をふき乍ら、大空を仰いだり、林の奥をのぞいたり、天際空、林に接するあたりを眺めたりして堤の上を喘ぎ／＼進てゆく。苦しいか? どうして! 身・ちには健康がみちあふれて居る。長堤三里の間、ほとんど人影を見ない。農家の庭先、或は藪の間から突然、犬が現はれて、自分等を怪しきうに見て、そしてあくびをして隠て仕了ふ。林の彼方では高く羽ばたきをして雛鶉が時をつくる、それが米倉の壁や杉の森や林や藪に籠つて、ほがらかに聞える。堤の上にも家雉の音が幾組となく櫻の陰などに遊で居る。カサを遠く眺めると、

一直線に流れてくる水の本に波紋を激たやうな一種の波影のうちに消え、間近くなるにつれてぎ／＼／＼輝て矢の如く走てくる。自分等は或處の上に立て、流れる上と流れるすそと見比べて居た。光線の具合で波の起す絶えず變化して居る。水上が突然薄暗くなるかと思つたと、雲の影か波と共に、瞬／＼間に走て来て自分達の上まで来て、ふと止まつて、急に横にそれて仕了ふことがある。暫くすると水上がまばゆく輝て来て、兩側の林、堤上の櫻、あたかも雨後の春草のやうに鮮かに鉄の光を放つて来る。橋の下では何ともひやらのない優しい水音がする。これは水が兩片に激して發するのでもなく、又た淺瀬のやうな音でもない。たつぷりと水量があつて、それで粘土質の殆ど壁を塗つた様な深い溝を流れるので、水と水とがもつれてからまつて、埒み合せて、自から音を發するのである。何たる人なつかしい音だらう!

Let us natch

This water's pleasant tune

With some old border song, or catch,

"That suits a summer's noon."

の句も思ひ出されて、七十二歳の翁と少年と

が、そこら櫻の木蔭にでも坐つて居ないだらうかと見廻はしたくなる。自分は此流の兩側に散點する農家の者を幸福の人々と思つた。無論、此堤の上を麥藁帽子とステッキ一本で散歩する自分達をも。

(七)

自分と一所に小金井の堤を散歩した朋友は、今は判官になつて地方に行つて居るが、自分の前號の文を讀んで次の如くに書いて送つて来た。自分は便利のためにこれを此處に引用する必要を感じずる——武藏野は俗にいふ關八州の平野でもない。また道灌が傘の代りに山吹の花を貰つたといふ歴史的の原でもない。僕は自分で限界を定めた一種の武藏野を有して居る。其限界は恰も國境又は村境が山や河や、或は古跡や、色々のもので、定めらるゝやうに自ら定められたもので、其定めは次の色々の考から來る。

僕の武藏野の範圍の中には東京がある。しかし之は無論省かなくてはならぬ、なぜなれば我々は農商務省の官衙が魏峨として聳て居たり、鐵管事件の裁判が有つたりする八百八街によつて昔の面影を想像することが出來ない

それに僕が近ごろ知合になつた獨乙婦人の評に、東京は「新しい都」といふことが有つて、今日の光景では假令徳川の江戸で有つたにしろ、此評語を適當と考へられる筋もある。斯様なわけで東京は必ず武藏野から抹殺せねばならぬ。

しかし其市の盡くる處、即ち町外づれは必ず抹殺してはならぬ。僕が考へには武藏野の詩趣を描くには必ず此町外れを、の題目とせねばならぬと思ふ。例へば君が住はれた澁谷の道玄坂の近傍、日黒の行人坂、また君と僕と散歩した事の多い早稲田の鬼子母神邊の町、新宿、白金

また武藏野の味を知るにはその野から富士山、秩父山脈、國府臺等を眺めた考のみでなく、また其中央に包まれて居る首府東京をふり顧つた考で眺めねばならぬ。そこで三里五里の外に出で平原を描くことの必要がある。君の一篇にも生活と自然とが密接して居るといふことが有り、また時々色々なものに出遇ふ面白が描であるが、いかにも左様だ。僕は會て斯ういふことが有る、家弟をつれて多摩川の方へ遠足したときに、一二里行き、また半里行きて家並が有り、また家並に離れ、また家並に出で、

人や動物に接し、また草木ばかりになる、此變化のあるので處々に生活を點綴して居る趣味の面白いことを感じて話したことが有つた。此趣味を描くために武藏野に散在せる驛、驛といかぬまでも家並、即ち製圖家の熟語でいふ輪櫓家屋を描寫するの必要がある。

また多摩川はどうしても武藏野の範圍に入れなければならぬ。六つ玉川などと我々の先祖が名づけたことが有るが武藏の多摩川の様な川が、外にどこにあるか。其川が平な田と低い林とに連接する處の趣味は、恰も首府が郊外と連接する處の趣味と共に無限の意義がある。

また東の方の平面を考へられよ。これは餘りに開けて水田が多くて地下線が少し低い故、除外せられさうなれど矢張武藏野に相違ない。龜井戸の金絲堀のあたりから木下川邊へかけて、水田と立木と茅屋とが趣を成して居る且合は武藏野の一領分である。殊に富士で分ける。富士を高く見せて恰も我々が逗子の一あぶずり一で眺むるやうに見せるのは此邊に限る。又た筑波で分ける。筑波の影が低く遙かなるを見ると我々は關八州の一隅に武藏野が呼吸して居る意味を感じる。

しかし東京の南北にかけては武藏野の領分

が甚だせまい。殆ど無いといつてもよい。是れは地勢の然らしむる處で、日鐵道が通じて居るので、乃ち「東京」が此線路に由て武蔵野を貫いて直接に他の範圍と連接して居るからである。僕はどうも左う感じる。

そこで僕は武蔵野は先づ雜司谷から起つて線を引き見ると、それから板橋の中仙道の西側を通つて川越近傍まで達し、君の一篇に示された入間郡を包んで圓く甲武線の立川驛に來る。此範圍の間に所澤、田無などいふ驛がどんなに趣味が多いか。殊に夏の緑の深い頃は、扱て立川からは多摩川を限界として上丸邊まで下る。八王子は決して武蔵野には入れられない。そして丸子から下目黒に返る。此範圍の間に布田、登戸、二、などのどんなに趣味が多いか。以上は西半面。

東の半面は眞井戸邊より小松川へかけ木下川から堀切を包んで千代近傍へ到て止まる。此範圍は異論が有れば取除いても宜い。併し一種の趣味が有つて武蔵野に相違ない事は前に申し通りである――

（八）

自分は以上の所説に少しの異存もない。殊

に東京市の町外れを題目とせよとの注意は、頗る同意であつて、自分も兼ねて思付て居た事である。町外づれを武蔵野の一部に入れるといへば、少し可笑しく聞えるが、實は不思議はないので、海を拙くに波打ち際を拙くも同じ事である。しかし自分はこれを後述はしにして、小金井堤上の散歩に引きつゞき、先づ今の武蔵野の水流を説くことにした。

第一は多摩川、第二は陣田川、無念此二流のことは十分に書て見たいが、さてこれも後述はしにして、更らに武蔵野を流るゝ水流を求めて見たい。

小金井の流の如き、其一である。此流は東京近郊に及んでは千駄ヶ谷、代々木、角筈などの諸村の間を流れて新宿に入り四谷上水となる。又た井頭池、善福池などより流れ出で、神田上水となる者。目黒邊を流れて品海に入る者。澁谷邊を流れて金杉に出づる者。其他名も知れぬ細流小渠に至るまで、若しこれを他處で見るとなれば格別の妙もなければ、これが今の武蔵野の平地高臺の嫌なく、林をくぐり、野を横切り、隠れつ現はれつして、しかも曲りくねつて（小金井は取除け）流るゝ趣は春夏秋冬に通じて吾等の心を惹くに足るものがある。自

分はもと山多き地方に生長したもので、河といへば随分大きな河でも其水は透明であるかを見慣れたせるか、初は武蔵野の流、多摩川を離れては、恐く濁つて居るの、此だ不快な感を惹いたものであるが、だん／＼慣れて見ると、やはり此少し濁た流れが平原の景色に適つて見えるやうに思はれて來た。

自分が一度、今より四五年前の夏の夜の事であつた、かの友と相携へて近郊を散歩した事を憶えて居る。神田上水のの上流の橋の一つを、夜の八時ごろ通りかゝつた。此夜は月芽えて風清く、野も林も白紗につままれしやうにて、何とも言い難き良夜であつた。かの橋の上には村のもの四五人集つて居て、欄に倚て何事かを語り、何事かを笑ひ、何事かを歌つて居た。其中に一人の老翁が雜て居て、頻りに若い者の話や歌をませつかへして居た。月はさやかに照り、此等の光景を朦朧たる楕圓形の裡に描き出して、田園詩の一節のやうに浮べて居る。自分達も此畫中の人に加はつて欄に倚て月を眺めて居ると、月は緩るやかに流るゝ水面に溶んで映て居る。不意に水が搏つ毎に細紋起つて暫らく月の面に小皺がよる計り。流れは林の間をくねつて出て來り、又た林の間に半圓を描いて隠れて仕了

ふ。林の梢に碎けた月の光が薄暗い水に落ちてきらめいて見える。水蒸気は流れの上、四五尺の處をかすめて居る。

大根の時節に、近郊を散歩すると、此等の細流のほとり、到る處で、農夫が大根の土を洗つて居るのを見る。

(九)

必ずしも道玄坂といはず、又た白金といはず、つまり東京市街の一端、或は甲州街道となり、或は青梅道となり、或は中原道となり、或は世田ヶ谷街道となりて、郊外の林地田圃に突入する處の、市街ともつかず宿驛ともつかず、一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈し居る場處を描寫することが、頗る自分の詩興を喚び起すも妙ではないか。

なぜ斯様な場處が我等の感を惹くだらうか。自分は一言にして答へることが出来る。即ち斯様な町外れの光景は何となく人をして社會といふものゝ縮圖でも見るやうな思をなさしむるからであらう。言葉を換へて言へば、田舎の人にも都會の人にも感興を起こさしむるやうな物語、小さな物語、而も哀れの深い物語、或は抱腹するやうな物語が二つ三つ其處

らの軒先に隠れて居さうに思はれるからであらう。更らに其特點を言へば、大都會の生活の名残と田舎の生活の餘波とが此處で落合つて、緩かにうづを巻いて居るやうにも思はれる。

見給へ、其處に小さな料理屋がある。泣くのとも笑ふのともしらぬ聲を振立てゝわめく女の影法師が障子に映て居る。外は夕闇がこめて、煙の臭とも土の臭ともわかち難き香が流んで居る。大八車が二臺三臺と絶て通る。其空車の轍の響が暗しく起りては絶え、絶えては起りして居る。

見給へ、鐵冶工の前に二頭の駄馬が立て居る、其黒い影の横の方で二三人の男が何事をか密そくと話し合て居るのを。鐵蹄の眞赤になつたのが鐵砧の上に置かれ、火花が夕闇を破て往來の中段まで飛んだ。話して居た人々がどつと何事をか笑つた。月が家並の後ろの高い檜の梢まで昂ると、向う片側の家根が白ろんで来た。

かいてらから黒い油煙が立て居る、其間を村の者町の者十數人駆け廻はつてわめいて居る。

色々の野菜が彼方此方に積んで並べてある。これが小さな野菜市、小さな雜賣場である。

日が暮れると直ぐ寐て仕了ふ家があるかと思ふと夜の二時ごろまで店障子に火影を映して居る家がある。理髮所の裏が百姓家で、牛のうなる聲が往來まで聞える、酒屋の隣家が納豆賣の老翁の住家で、毎朝早く納豆々々と啜聲で呼で都の方へ向て出かける。夏の短夜が間もなく明けると、もう荷車が通りはじめ。ごろごろがた／＼絶え間がない。九時十時となると、蟬が往來から見える高い樹で鳴きだす、だんだん暑くなる。砂埃が馬の蹄、車の轆に煽られて虚空に舞ひ上がる。蠅の群が往來を横ぎつて家から家、馬から馬へ飛んである。

(明治三十一年一月作)

それでも十二時のどんが微かに聞えて、何處となく都の空の彼方で凧の響がする。

置土産

餅は圓形きが普通なるを故意と三角に捻りて客の眼を惹かんと企みしやうなれど實は餅をつむむに手数のかゝらぬ工夫不思議にあたりて、三角餅の名何時しか其近在に廣り、此茶店の小さいに似合ぬ繁盛しかし餅ばかりでは上戸が困るとの若連中の勸告もありて、何はなとも地酒一盃飲めるやうにせしはツイ近頃のことなりと。

戸數五百に足らぬ一筋町の東の外に石橋あり、それを渡れば商家でもなく百姓家でもない藁葺屋根の左右兩側に建並ぶこと一丁ばかり、其處に八幡宮ありて、其鳥井の前からが片側町、三角餅の茶店は此外にあるなり。前は青田、青田が盡きて鹽濱、堤高くして海面こそ見えぬ、間近き沖には大島小島の趣も備はりて、先づ眺望には乏しからぬ好地位を占むるが此店繁盛の一理由なるべし、それに町の出口入口なれば村の者にも町の者にも旅の者にも一休息腰を下すに下しよく、ちよつと一ぶくが一盃となり、章魚の足を肴に一本倒せば其儘横にな

りたく、置座の半分遠慮しながら窮屈さうに寐ころんで前後正體なき、有りうちの事ぞかし。

永年の繁盛ゆゑ、甲斐なき茶店ながらも利得は積んで山林田畑の幾町歩は内々出来て居さうに思はるれど、此處の主人に一の癖あり、兎角鹽濱に手を出したがり餅で儲けた金を鹽の方で失くすといふ始末、俳諧の一もやる風流氣はありながら店に坐つて居て鹽焼く畑の見ゆるだけに直ぐ儲の方に思付くとはよくくの事と親類縁者も今では意見する者なく、店は女房

まかせ、これを助けて働く者はお絹お常とて一人は主人の姪、一人は女房の姪、お絹は瘦形の年上、お常は丸く肥りて色白く、都ならば看板娘の役なれど此二人は衣裳にも振りにも頓着なく、糯米を磨ぐことから小豆を煮ること餅を春くことまで男のやうに働き、其で苦情一つ言はず厭な顔一つせず客には餘計なお世辭の空笑出来ぬ代愛相よく茶も汲で出す、何を樂で斯くも働くことかと問はれさうで問ふ人もなく、感心な女と褒められさうで別に評

判にも上らぬ、何時も御精が出ます、位の定交句の挨拶をかけたれども致しまして、御精く應へて直ぐ鼻唄に移る、昨日も今日も此の如く、斯くて春去り秋逝くとは流石に長閑なる田舎なりけり。

茶店のことと夜に入れば商賣なく冬ならば宵から戸を閉めて了ふなれど夏はさうも出来ず、置座を店の向側なる田の傍まで出しての夕涼、お絹お常もこの時ばかりは全くの用なし主人の姪らしく、八時過には何も片づけて了ひ九時前には湯を済まして白地の浴衣に着更へ團扇を持って置座に出た所は矢張どことなく驚かしく年頃の娘なり。

他處から毎晩のやうに此置座に集り来る者二三人はあり、其一人は八幡宮神主の倅一人は吉次とて油の小賣を小まめに稼ぎ親もなく女房もない氣樂者其他にもちよいと顔を出す者あれど先づ此二人を常連と見て可なるべし。二十七年の夏も半を過ぎて盆の十七日踊の夜、お絹と吉次とが何かこそ親しげに話して田圃の方へ隠れたを見たと、さも怪しきやうに噂せし者ありたれど恐らくそれは誤解ならむ。成程二人は内密話しながら露繁き田道を辿りしやも知れぬど吉次が此頃の胸はそれどころに非

ず、軍夫となりて彼地に渡り一稼大きく儲けて歸り、同じ油を賣るならば資本を下して一構の店を出したき心願、少し偏屈な男ゆる斯る場合に相談相手とする程の友達もなく、打まけて置座會議に上して見るほどの氣輕の天稟にもあらず、いろ／＼獨で考へた末が日頃何かに付けて親切に言うて呉れるお絹お常にだけ明して見ようと先づお絹から初める積にて斯くは穿動ひしまでなり、うたてや吉次は身の上話を少しばかり愚痴のやうに語りしのみにて遂に其夜は軍夫の一件を打ち得ずして止めぬ。何のこゝとぞとお絹も少しは怪しく思ひたれど、さりとて別に氣にもとめざりしやうなり。

其次の夜も次の夜も吉次の姿見え、三日目の夜の十時過ぎて、平時もならば九時前には吉次の出て来る筈なるを、如何した事やら昨日も今日も油さへ賣にあるかぬは、ことによると風邪でも引いたか、明日は一つ様子を見に行てやらうと噂をすれば影もあり／＼と白晝のやうな月の光を浴びて其處に現はれ、
『皆さん今晩は』と平時になき眞面目なる挨拶、黙つて來て黙つて腰をかけた欠伸の一もするが此男の柄なるを、さりととは變なと氣づきし者もあり氣付かない者もあり、其内にもお絹は頗る平

氣にて、

『吉さん如何かしたの。』

『少し風邪を引て二日ばかり休みました』と白から欺き人を誤魔化すことの出来ざる性分の癖に嘘をつけば、人々疑はず、それは／＼然し最早爽然したかねと皆より劬はられて却て狼狽き、

『難有う、最早爽然としました。』

『それは結構だ。時に吉さん女房を持つ氣はないかね』と、突然に可笑な事を言ひ出されて吉次はあきれ、茶店の主人幸衛門の額を覗くやうにして見るに戯談とも思はれぬ處あり。

『へい女房ね』

『女房をサ、何もそんなに感心する事はなからう、今度のやうな一寸とした風邪でも獨身者ならこそ商賣も出来ないが女房が居れば世話もして貰る店で商賣も出来るといふものだ、左うちやアないか』と、尤もなる事を言はれて、二十八歳の若者、これが普通ならば別に赤い顔もせず何分宜しくと眞面目で頼まぬまでも笑顔で應る位は有りさうな處なれど吉次は浮かぬ顔で他所を向き、
『如何して養ひませう今貰つて。』
『アハ、ハ、ハ、麥飯を食はして共稼をすれば可

からう。何も御馳走をして天神様のお馬ぢやアあるまいし大事に飼つて置くこともない。』

『吉さんは必定おかみさんを大事にするよ』と、女は女だけの鑑定をしてお常正直なる處を言へばお絹も同意し、
『さうらしいねエ』と、これもお世辭にあら

ず。
『イヤこれは驚いた、そんなら早い話がお絹さんお常さん何人でも可い、吉さんの處へ押かけるとしたら如何な者だらう』と、神主の悴の若旦那と言はるゝだけに無慮なる言草、お絹は何と聞きしか、
『そんなら私が押かけて行からうか、吉さん不可

ないかね。』

『アハ、ハ、ハ、馬鹿を言つてる、ドラ彼るとしよう、皆さん御ゆつくり』と、幸衛門の叔父さん歳よりも早く禿げし頭を撫でながら内に入りぬ。

『私も歸つて戦兵の夢でも見るかな』と罪のない若旦那の起ちかゝるを止めるやうに、

『戦争は未だ永く續きさうで御座いますかな』と吉次が座興ならぬ口振、軽く受けて續くとも續くとも眞實の戦争はこれからなりと起上り、
『又明日の新聞が樂だ、これで敗軍だと張合

が無いけれど我軍の聲氣が可いのだから同じ待つにも心持が違ふよ。」お察と歸つて了へば後は娘二人と吉次のみ、置座俄に廣うなりぬ。夜は更け月冴えぬれど、そよ吹く風さへ無ければムツとして蒸熱き晩なり。吉次は投げる様に身を横にして手荒く團扇を使ひホツと吐く嘆息を紛らせばお絹、

「吉さん未だ風邪が爽然しないのぢやアないのかね。」

「風邪を引いたといふのは嘘だよ。」

「オヤ嘘なの、そんなら如何したの。」

「如何もしないのだよ。」

「を可笑な人だ人に心配させて」とお絹は笑うて済ますをお常は、

「イヤ何か吉さんは案じて居なさるやうだ。」

「吉さんだつて少しは案事も有らうよ、案事の無いものは馬鹿と馬鹿だといふから。」

未だある若旦那と小さな聲で言ふお常もその仲間なるべし。

それよりか海に行かうとお絹の高い聲に、店の内にて、最早遅いゆゑ止めよといふは叔父なり。

「危険々々遅いから。」

「吉さんに一所に行つて貰ひます。」

「そんなら可いけれども。」

さアと促されて吉次も仕方なく連だつて行けば、お絹は先に立ち往來を外れ田の畔を辿り、堤の腰を廻ると直ぐ海なり。沖はよく和て漣の微もなく高山の黒き影に闇まれて其寂なるは深山の湖水かとも思はるゝばかり、足許まで月影澄み遠浅の砂白く水底に光れり。磯高く曳上げし舟の中にお絹お常は浴衣を脱ぎすて、心地よげに水を踏み、ほんに砂粒まで數へらるゝやうなと、海近く育ちて水に慣れたれば何の可恐いこともなく沖の方へぞん／＼と乳の邊まで出づるを吉次は見つて懐に入れし船甲の櫛二枚紙に包んだまゝをそつと袂に入れ換へて手早く衣服を脱ぎ、さう沖の方へ出ないが可いと言ひ言ひ二人の傍まで行けば、

「吉さん御覽よ、そら足の爪まで見えるから」とお常が言ふに吉次、

「最早こゝらで歸らうよ。」

「背の達かない處まで出ないと游いだ氣がしないから私はもすこし沖へ出るよ」とお絹はお常を誘そつて二人の身體軽く浮て見る／＼十四五間先へ出でぬ。

「佳い心持だ吉さんお來でよ」と呼ぶはお絹なり、吉次は腕を組んで二人の漣を見つめたるまゝ、何とも答へず。平時ならば却て二人に止めらるゝほど沖へ出て此處までお來でとからかひ半分面白う漣ぐだけの遠慮ない件なれど、軍夫を思ひたちてより何事も心に染まず、十七日の晩お絹に話しそこねて後は月知らず此女に氣が置かれ相談出來ず、獨で二日三日商賣も止めて考へた末、愈々明日の朝早く廣島へ向けて立つに決定めはしたものの、館屋の者に全然黙てゆく譯にゆかず、今宵こそ幸衛門にもお絹お常にも大略話して止めても止らぬ覺悟を見せ

ん、運悪く津彈に中るか病氣にでもなるならば歸ぬ旅の見納と悲しいことまで考へて、せめてもの置土産にと色々工夫した結果櫛二枚を買ひ求め懐にして來たのに、幸衛門から女房を貰へと先方は本氣が知らねど自分には戯談よりも詰らぬ話を持出されて先づ言そこね、折角お常から案事のあるらしう言はれたを機会に今ぞと思ふより早く又もくだらぬ方に話を外され、櫛を出す處か、心は愈々重なり、漣ぐ處か、詰らないやら情けないやら今漣ぐならば手足疎縮みて其まゝ魚の餌ともなりなん。

「吉さんお來でよ」と又もやお絹呼びぬ。

「私は先へ歸るよ」と吉次は早々陸へ上る後よりそんなら私達も上る符で居てと叫かけられ、待つ筈の吉次、敵にでも追はれて逃げるやうな心持になり、衣服を着るさへあわただしく、お絹お常の首のみ水より現はれて白銀の波を掻分け陸へと遊ぶをちよつと見やりしのみ、途を更へて堤へ上り左右に繁る音の間を足早に八幡宮の方へと急ぎぬ。

老松樹ちこめて神々しき社なれば月影の洩るゝは丹殿階段の邊のみ、物凄き木下闇を潜りて吉次は階段の下に進み、恭しく俯づきて祈る意に誠をこめ、先づ今日が日までの息災を謝し奉り、これよりは知らぬ國に渡りて軍の甚危きを犯し、露に伏し雨風に打たるゝ身の上を守り給へと祈念し、さて其次には日出度く歸國するまで幸衛門を初めお絹お常等の身に異變なく來年の夏また彼の置座にて夕涼しく圍居する中に我をも加へ給へと祈り終りて暫時は頭を得上ざりしが、ふと氣が付いて懐を探り紙包のまゝ櫛一枚を篋の箱の上に置き、他の人が早く来て拾へば其人に與るばかり彼二人が平時のやうに朝まだき薄暗き中に參詣するならば多分拾うて呉れさらなものと覺來なき事にまで思をのこして悄悄と立去りけり。

お絹とお常は吉次の去つた後そこゝに陸へ上り櫛をふきなながら、
「お常さん、これから一寸吉さんの宅を覗いて見ようよ、様子が變だから私は可憐になる。」
「明日朝早くにお爲よ、お詣を済まして直ぐ廻はつて見ようよ。餘り遅くなると叔父さんに悪いから。」

『さうね』とお絹も強ては勧め兼ね道々二人は肩を指寄せ小聲に節を合はして歌ひながら歸りぬ。
* * * * *

若い者の遊に消えて無くなる、此頃は其幾人といふを知らず大概は軍夫と定まり居れば、吉次も其一人ぞと怪しむ者なく三角餅の茶店の喉も七十五日経過ぬ間に吉次の名さへ消えてなくなりぬ。お絹お常のまめくしき柄振、幸衛門の發句と鱸、神主の悴が新聞の取次、別に變りなく夏過ぎ秋逝きて冬も來にけり、身を切るやうな風吹きて雲降る夜の、まだ宵ながら餅屋では平時よりも早く閉めて、幸衛門は酒一口飲めぬ身の慰藉なく堅い男ゆゑ炬燵へ潜つて寝そべる程の樂もせず火鉢を控へて嚴然と坐り、煙草を吹かしながら頻に首を捻るは句を案

ずるなりけり。
「猿も小蓑をほしげなりといふのは今夜のやうな晩だな。」
「さうね』とお絹が應へしまゝ誰も對手にせず、叔母もお常も針仕事に餘念なし。家内寂然と、八角時計の時を刻む音ばかり外は物凄き風狂へり。

『時に吉さんは如何して居たのよ』と幸衛門が突然の大きな聲に、
「私も今それを口につて居たのよ』とお絹は針の手を止めて叔父の方を見れば叔父も心配らしい眞面目な顔つき。

「叔父さん彼地は大變寒い處だといふぢやア有りませんか』とお常は自分の足袋の底を刺ながら言ひぬ。
「なに吉さんは彼身體だもの寒に申られる様な事もあるまい』と叔父は針の目を通しながら言へり。
「イヤさうも言へない随分汚寒いといふ事だから』と叔父のいふに隨いてお絹、
「大概にして歸つて來なされば可いに、いくらお金が出来ても身體を悪くすれば何にもなりやアしない。」
「ナニ彼男の事だから一度稼ぎに出たからに

は幾十か続つた金を得るまでは歸るまい、堅い珍らしい男だから何卒死なしたくないものだ。」

「眞實にね」とお絹は口の中、叔母は大きな聲で、

「大丈夫、それに役人は大酒を飲むの何のと亂暴は爲ないし」と受合ひ、養の亂を、うるささうに掻きあげし其癖は吉次の置土産、あの情お絹お當の手に入りたるを、お當は神のお授と喜び上等ゆゑ外出行にすると、用筆筒の奥に仕納ひ込み、お絹は叔母に所々されて與へしなり。

二十八年三月の末お絹が親許より二日計暇を貰うて歸り來よとの手紙あり、珍らしき事とお父幸衛門も怪みたれど兎も角も歸つて見るが可からうと三里離れし在所の自宅へお絹は三角餅を上産に久しぶりにて歸りゆきぬ。何ぞと思へば嫁に行けとの相談なり。繼母の腹は言ふまでもなく姉のお絹を外に出して自分の子、妹のお松を後に据たき願、それがあるばかり

にお絹と繼母との間面白からず理窟をつけて叔父幸衛門にお絹は託られ彼是三年の間お絹の我家に歸りしは正月に一度それも機嫌よくは得遇はれざりしを、何の彼のと腹にもない親切を言はれ先方は田が幾町山がこれ程ある、

寄はお前も知つて居る筈と置かれてお絹は何と答へしぞ。就夜七時ごろ町なる某といふ旅人宿の岩者三角餅の茶店に來り、今日これ／＼の客人見え幸衛門さん今から直ぐ御足勞を願ひますとのことなり。幸衛門は多分鹽の方の客宿なれんと早速罷り出でぬ。

次の日奥の一室にて幸衛門罷こまぬき、茫然と考へて居る處へお絹在所より歸り、只今と店に入ればお當は眞面目な顔で、
「叔父さんが奥で待つて居なるとよ、何か話が行るつて。」

お絹にも話あり、いそ／＼と中庭から上れば叔父の顔色たゞならず、お絹も更まつて、
「叔父さん只今、自宅からも宜くと申しました。」

「用事は何で有つたね、縁談ぢやアなかつたか。」

「さうで御座いました、灘波へ嫁にゆけといふのであります。」

「お前は如何して」と問はれてお絹躊躇ひしが、
「叔父さんともよく相談してと生返事をして置きました。」

「さうか」と叔父は嘆息なり。
「叔父さんの御用といふのは何。」

「用といふのでないが、お前覺いては不可んよ、吉さんに彼方で病死したよ。」

「マア」とお絹は若くなりて涙も出ず。

「實は私も驚いて了つたのだ、昨夜何屋の岩者が來て、これ／＼の客人が直ぐ來て呉れるといふから行て見ると、其人は彼地で吉さんと極く懇意にして居た方で、吉さんが病氣を極切に看病して下さつたさうな。それで吉さんの死ぬる時吉さんから二百圓渡されて此を三角餅の幸衛門に渡し幸衛門の手からお前に半分與て呉れる半分は親兄弟の墓を修復する費用にして其世話を頼むとの遺言、私は聞て返事も譯々出来なで唯々承知しましたと泣く／＼歸つて來ました。」

「マア如何したら可からう、可哀さうに」とお絹は泣き伏しぬ。

「それでは遺言通り此百圓はお前に渡すから確に受取つてお呉れ」と叔父の出す手をお絹は押遣つて、

「叔父さん私は確に受取ました吉さんへは私からお禮を言ひます、どうか其で吉さんの後を立派に弔うて下さい、更で私から御頼しますから。」

（明治三十三年九月）

源をぢ

(上)

都より一人の年若き教師下り來りて佐伯の子弟に語學教ふること殆ど一年、秋の中頃來りて夏の中頃去りぬ。夏の初、渠は城下に住むことを厭ひて、半里隔てし、桂と呼ぶ港の岸に移りつ、こゝより校舎に通ひたり。斯くて海邊にとゞまること一月、一月の間に言葉かはす程の人識りしは片手にて數ふるにも足らず。其重なる一人は宿の主人なり。或夕、雨降り風起ちて磯打つ波音もやゝ荒きに、獨を好みて言葉少なき教師もさすがに物淋しく、一階なる一室を下りて主人夫婦が見授げだして涼み居し縁先に來りぬ。夫婦は燈つけんとせし薄暗き中に團扇もて蚊やりつゝ語れり、教師を見て、珍らしやと座を譲りつ。夕開の風、輕ろく雨を吹けば一滴二滴、面を拂を三人は心地よげに受けて四面山の話に入りぬ。

其後教師都に歸りてより幾年の月日経ち、或冬之夜、夜更けて一時を過ぎしに獨小舟に向

ひ手紙認めぬ。そは故郷なる善友の許へと書き送るなり。其物案じがほなる蒼き色、此夜は頗の邊少し赤らみて折々何處ともなく睇視るまなざし、霧に包まれし或物を定かに視んと願ふが如し。

霧の中には一人の翁立ちたり。教師は筆おきて讀みかへしぬ。讀みかへして目を閉ぢたり。眼、外に閉ぢ内に開けば、現れしはまた翁なり。手紙の中に曰く「宿の主人は事もなげに此翁が上を語りぬ。げに珍からぬ人の身の上のみ、かゝる翁を求めんには山の陰水の邊、國々には澤なるべし。されどわれいかで此翁を忘れ得んや。余には此翁たゞ何者をか秘め居て誰一人開く事計はぬ箱の如き思す。こは余が例の怪しき意の作用なるべき歟。さもあらばあれ、われ此翁を懐ふ時は遠き箱の音きゝて故郷戀ふる旅人の情、動きつゝ、又は想高き詩の一節讀み了はりて限りなき大空を仰ぐが如き心地す」と。

されど教師は翁が上を委しく知れるにあら

ず。宿の主人より聞き得しは其あらましののみ。主人は何故に此翁の事を斯くも聞きたゞざるるか、教師が心解し兼ねたれど問はるゝまゝに語れり。

一此港は佐伯町に恰好かるべし。見給ふ如く家といふ家幾十ありや、人数は二十にも足らざるべく、淋しきは何時も今宵の如し。されど源叔父が家一軒たゞ此磯に立ちし事以前の寂さを想ひ給へ。渠が家の積なる松、今は船廣き道路の傍に立ちて夏は涼しき蔭を旅人に借ど十餘年の昔は沖より波寄せて節々思慮方を洗ひぬ。城下より來りて源叔父の舟舳まんものは海に突出し巖に腰を掛けし事しばしばあり、今は火藥の力もて危き崖も裂かれたれど。

否、渠とてもいかで初より獨暮さんや。一妻は美しかりし。名を百合と呼び、大入島の生なり。人の噂を半信と見ても、此事のみは信なりと源叔父が或夜酒に吞まれて語りしを聞けば、彼の年二十八九の頃、春の夜更けて妙見の燈も消えし時、ほとくと打たゝく者あり。源起きいで誰れぞと問ふに、島まで渡し玉へといは女の聲なり。傾きし月の光にすかし見れば筆で見知りし大入島の百合といふ小娘にこそありける。

「その頃渡船を棄となすもの多きうちにも、源が名は流々にまで聞えし。そは心たしかに候氣ある若者なりしが故のみならず、別に深き故あり、けに君にも聞かし度きは其頃の源が聲にぞありける。人々は彼が櫓こぎつゝ歌ふを聴かんとて擗ひて彼が舟に乗りたり。されど言葉少なきは今も昔も變らず。

島の小女は心ありて斯く嘆くも源が舟頼みしか、そは高きより見下し給ひし妙見様ならでは知る者なき秘密なるべし。舟とめて互に何をか語りしと問へど、酔うても言葉少なき彼はただ額に深き二條の皺寄せて笑ふのみ、其笑は何處となく悲しげなるぞうたてき。

一源が歌ふ聲冴えまさりつ。斯くて若き夫婦の幸しき月日は夢よりも淡く過ぎたり。獨子の幸助七歳の時、妻ゆりは二度目の産重くして遂にみまかりぬ。城下の者にて幸助を引取り、ゆくゆくは商人に仕立てやらんと言ひいでしがありしも、可多き妻には死別れ、更に獨子と離るるは忍び難しとて辭しぬ。言葉少き彼は此頃より愈言葉少くなりつ、笑ふことも稀に、櫓こぎにも酒の勢ならでは歌はず、醜陋の人江を夕月の光砕きつゝ朗らかに歌ふ聲さへ哀をそめたり、こは聞くものゝ心にや、あらず、妻

失ひし事は元氣よかりし彼が心を半ば碎き去りたり。雨のそぼ降る日など、淋しき家に幸助一人をのこし置くは不憚なりとて、客と共に舟に乗せゆけば、人々哀れがりぬ。されば子供への土産にと城下にて買ひし菓子の袋開きて此孤兒に分つ母親も少からざりし。父は見知らぬ風にて禮も言はぬが常なり、これも悲しさの餘なるべしと心にとむる者なし。

一斯くて二年過ぎぬ。此港の工事半ば成りし頃吾等夫婦、島より此處に移りて此家を建て今業をはじめぬ。山の端削りて道路開かれ、源叔父が家の前には今の車道でき朝夕二度に涼風の笛鳴りつ、昔は網だに干さぬ荒磯は忽ち今の様と變りぬ。されど源叔父が渡船の業は昔のまゝなり。浦人島人乗せて城下に往來するこゝと前に變らず、港開けて車道でき人通り繁くなりて昔に比ぶれば此處も浮世の仲間入りせしを渠はうれしとて將た悲しとも思はぬ様なりし。

一斯くて又三年過ぎぬ。幸助十二歳の時、子供等と海に遊び、誤りて溺れしを見てありし子供等畏れ逃げて此事を人に告げざりき。夕暮になりて幸助の歸り來ぬに心づき、驚きて吾等も共に捜せし時は言ふまでもなく軍遅れて、哀れの

源は不思議にも源叔父が遺言に洗ひたり。渠は最早や決してらたはざりき、哀しき人々にすら言葉かはすことを遠くるやうになりぬ。物言はず、歌はず、笑はずして年りを送るうちには如何なる人も世より忘れらるゝ者と見たり。源叔父の舟こぎ事は昔に傳へられど、浦人等は源叔父の舟に乗りながら源叔父の世に在ることを忘れしやうになりぬ。斯く語る我身すらをり、源叔父が彼の丸き眼を半ば閉ぢ懸置きて歸り來るを見る時、源叔父はまだ生きてあるよなど思ふことあり。渠は如何なる人ぞと問ひしは君が初めなり。

「さなり、呼びて酒吞ませなば遂には飲ひもすべし。されど其涙の意解し難し。否、渠はつづやかず、續言ならべず、たたをり、太き嘆息するのみ。あはれとおぼさずや。」
宿の主人が教師に語りしはこれに過ぎざりし。教師は都に歸りて後も源叔父が事忘れず。燈下に坐りて雨の音きく夜など、思ひはしばしば此あはれなる翁が上に飛びぬ。思へらく、源叔父今は如何、波の音ききつゝ古き春の夜の事思ひて獨り爐の傍に丸き日ふさぎてやあらん、或は幸助が事のみ思ひつゞけてや居らんと。されど教師は知らざりき、斯く想ひやりし幾年

の後の冬の夜は翁の墓に寒降りつゝありしを。

年若き教師の、詩讀む心にて記憶のページ繰へしつゝある間に、翁が上には更に悲しき事起りつゝ、既に此世の人ならざりしなり。斯くて教師の詩は其最後の一節を缺きたり。

(中)

佐伯の子弟が語學の師を桂港の波止場に送りし年も暮れて翌年一月の末、或日源叔父は所用ありて晝前より城下に出てたり。

其日の寒さ推して知らる。山村水廓の民、河より海より小舟泛べて城下に用を便するが佐伯近在の習慣なれば番匠川の河岸には何時も渡船集ひて乗るもの下るもの、浦人は歌ひ山人はののしり、最と賑々敷けれど今日は淋びしく、河面には漣たち灰色の雲の影落ちたり。大通何れもさび軒端暗く、往來絶え、石多き横町の道は氷れり。城山の麓にて撞く鐘雲に響きて、屋根瓦の苔白き此町の終より終へと物哀しげなる音の漂ふ様は魚住ぬ湖水の真中に石一個投げ入れたる如し。

祭の日などには舞臺振るるべき廣辻あり、

貧しき家の兒等血色なき顔を曝して戯れず、懐手して立てるもあり。此處に來かゝりし乞食あり。子供の一人、『紀州々々』と呼びしが振向きもせで行過ぎんとす。打見には十五六と思はる、蓬なす頭髮は頭を被ひ、顔の長きが上に

贅肉こけたれば頤の骨尖れり。眼の光濁り睡動くこと遅く何處ともなく瞬視るまなざし鈍し。纏ひしは裕一枚、裾は短く襦袢下り濡れしまゝ僅に腰を隠せり。腋よりは蟋蟀の足めきたる肢現はれつゝ、わな／＼と戰慄ひつゝゆけり。此時又彼方より來かゝりしは源叔父なり。二人は辻の真中にて出遇ひぬ。源叔父は其丸き日睨りて乞食を見たり。

『紀州』と呼びかけし翁の聲は低けれども太し。若き乞食は其鈍き目を顔と共にあげて、石なんどを見るやうに源叔父が眼を見たり。二人は暫時目と目見合はして立ちぬ。

源叔父は袂をさぐりて竹の皮包取出し揮飯一つ撮みて紀州の前に突きだせば、乞食は懐より椀をだしてこれを受けぬ。與へしものも言葉なく受けしものも言葉なく、互に嬉れしとも憐れしと思はぬやうなり、紀州はそのまま、行き過ぎて後振向きもせず、源叔父は其後影角をめぐる

りて見えぬなるまで目送りつゝ、大空仰げば降るともなしに降りくるは雪の二片三片なり。今一度乞食のゆきし方を見て太き溜息せり。子供等は笑を忍びて眩つゝき合へど翁は知らず。

源叔父家に歸りしは夕暮なりし。渠が家の窓は道に向へど開かれしことなく、さなきだに闇きを燈つけず、爐の前に坐り指太き兩手を顔に當て、首を垂れて嘆息つきたり。爐には枯枝一握くべあり。細き枝に蠟燭の焰ほどの火燃え移りて代る／＼消えつ燃えつす。然ゆる時は一間の暫時明し。翁の影太く壁に映りて動き、煤けし壁に浮びいづるは錦綉なり。幸助五六歳のころ妻の百合が里歸りして貰ひ來しを其時詔りつけしまゝ十年餘の月日經ち今は薄曇りしやうなり、今宵は風なく波音聞えず。家を轉りてさら／＼と私語く如き物音を翁は耳そばだてて聴きぬ。こは爽の音なり。源叔父は暫時此さびしき音を聞入りしが、太息して家内を見まはしぬ。

豆洋燈つけて戶外に出れば寒さ骨に沁むばかり、冬の夜寒むに櫓こぐをつらしとも思はぬ身ながら粟だつを覺えき。山黒く海暗し。火影及ぶ限りは雪片きらめきて降るが見ゆ。地は堅く氷れり。此時若き男二人物語りつゝ、城下の

方より来し、燈籠を手に立てて、源叔父と今宵の宴は如何にといふ。今は、さなりとのみ答へて日は城下の方に向へり。

や、行き過ぎて若者一人、何時もながら源叔父の今宵の様は如何に、若き女彼顔を見れば其儘絶へんと囁けに指手は、明朝あの松が枝に翁の足のさがれるを見出さんも知れずといふ、二人は身の毛の竈際つを覺えて振向けば翁が門には最早燈火見えざりき。

夜は更けたり。雪は寒と變り寒は雪となり降りつ止みつす。灘山の端を月はなれて雲の海に光を包めば、古城市はさながら乾ける葦原の如し。山々の麓には村あり、村々の奥には墓あり、墓は此間覺め、人は此時眠り、夢の世界にて故入相まみえ泣きつ笑つす。影の如き人今しも廣辻を横りて小橋の上をゆけり。橋の袂に眠りし犬頭をあげて其後影を見たれど吠えず。あはれ此人墓よりや脱け出でし。誰に遇ひ誰れと語らんとて期はさまよふ。渠は紀州なり。

源叔父の獨子幸助海に溺れて失せし同年の秋、一人の女を食日向の方より迷來て佐伯の町に足をとめぬ。件ひしは八歳ばかりの男子なり。母は此子を連れて家々の門に立てば、貴物多く、此地の人の慈悲深きは他國にて見ざ

りし言なれば、子の爲に行末よしと思ひはかりけん、次の年の春、母は子を死して何處にか影を隠したり。

太平府訪てし人歸來ての語に、彼の女を食に肖たるが、苦練着し力士に件ひて鳥井の傍に魂乞ひするを見しといふ。人々皆を思ひ當る節ありといへり。時、若母の情を憐み死されし子をいせ増してあはれかりぬ。若くは母の計當りしと見えし。あらず、村々には寺あれど人々の慈悲には限あり。不憫なりとは語りあへど、眞面目に引取りて末永く育てんといふものなく、時には庭先の掃除など命じ人らしく扱ふものありしかど、永くは續かず。初は童母を慕ひて泣きぬ、人々物與へて慰めたり。童は母を思はずなりぬ、人々の慈悲は童をして母を忘れしめたるのみ。物忘れする子なりともいひ、白痴なりともいひ、不潔なりともいひ、盗すともいふ、口實は様々なれど此童を乞食の境に落しつくし人情の世界の外に葬りし結果は一つなりき。

戯れにいろは教ふればいろはを覚え、戯れに讀本教ふれば其第一節二節を誦誦し、子供等の歌聞て父歌ひ、笑ひ語り戯れて、世の常の子と變らざりき。げに變らず見えたり。生國を紀州な

りと童の言をまゝに「紀州」と可びなされて、はては佐伯町に歸りて源叔父の墓に板はれつ、間に遊ぶ子は此童と共に育ち、斯くて渠が心は人々の知らぬ間に亡び、人々は渠と朝日照り松の影引き親子あり夫婦あり兄弟あり朋友ありある世間に同居せりと思へる間、渠は竹の影無人の島に其滑しき葉を移し此處に其心を留りたり。

渠に物與へても言はずなりぬ。笑はずなりぬ。渠の怒りしを見んは難く渠の泣くを見んは容易からず、渠は恨みも喜ばもせず。たゞ動き、たゞ歩み、たゞ食ふ。食ふ時傍より汁きやと問へばアクセント無き言葉にて甘しと答ふ其聲は地の底にて響くが如し。戯れに替置りあけて渠の頭上に懸せば、笑ふごとき面持してゆるやかに歩を運ぶ様は主人に叱られし犬の尻振りつゝ迷ぐるに似て異り、渠は決して人に入らさげず。世の常の乞食見て憐れと思ふ心もて渠を憐れといふは至らず。浮世の波に漂うて溺るゝ人を憐れと見る眼には渠を見出さんこと難かるべし、渠は波の底を這ふものなれば。

紀州が小橋を彼方に渡りてより間もなく廣辻に來かゝりて四邊を見廻すものあり。手には小さき燈籠提げたり。燈籠の光指す口を彼方此方

と轉らす毎に、薄く積みし雪の上を末廣がりし火影走りて雪は美しく閃き、辻を圍る家々の暗き軒下を丸き火影飛びぬ。此時本町の方より突如と現はれしは巡査なり。づか／＼と歩みりて何者ぞと聲かけ、燈をかゝげて此方の顔を照しぬ。丸き目、深き皺、太き鼻、逞ましき舟子なり。

「源叔父ならずや。」巡査は呆れし様なり。

「さなり。」暖れし聲にて答ふ。

「夜更けて何者をか捜す。」

「紀州を見給はざりしか。」

「今夜は餘りに寒ければ家に伴はんと思ひはべり。」

「されど渠の寢床は犬も知らざるべし、自ら風ひかぬがよし。」

情ある巡査は行きさりぬ。

源叔父は嘆息つきつゝ小橋の上まで來しが、火影落ちし處に足跡あり。今踏みしやうなり。紀州ならで誰か此雪を洗足のまゝ歩まんや。翁は小走りに足跡向きし方へと馳せぬ。

源叔父が紀州を其家に引取りたりといふ事知

(下)

れ渡り、傳へきし人初は眞とせず次に呆れ終は笑はぬものなかりき。此二人が差向ひにて夕餉に就く様こそ見たけれなど滑溜芝居見まほしき心にて嘲る者もありき。近頃は有るか無きかに思はれし源叔父もや人の噂にのぼるやうになりつ。

雪の夜より七日餘り経ちぬ。夕日影あざやかに照り四國地遠く波の上に浮びて見ゆ。鶴見崎の邊眞帆片帆白し。川口の洲には千鳥飛び、源叔父は五人の客乗せて纜解かんとす、二人の若者駈け來りて乗りこめば舟には人満ちたり。

島にかへる娘二人は姉妹らしく、頭に手拭かぶり手に小さき包持ちぬ。残り五人は浦人なり、後れて乗りこみし若者二人の外の一人は老夫婦と連の小兒なり。人々は町の事のみ語りあへり。芝居の事を若者の一人語りいでし時、この度のは衣裳も格別に美しき由島には未だ只物せしもの少けれど噂のみはいと高しと姉なる娘いふ。否さまでならず、たゞ去年のものには少く優れりと打消やうにいふは老婦なり。

併儼の中に久米五郎とて稀なる美男まじれりてふ噂島の娘等が間に高しときゝぬ、いかにと若者姉妹に向て言へば二人は顔赤らめ、老婦は大聲に笑ひぬ。源叔父は櫓こぎつゝ眼を遠き

方にのみ注ぎて、此處にも浮世の笑聲高きを空耳に聞き、一言も雑へず。

「紀州を家に伴へりと聞きぬ、信にや。」若者の一人、何をか思ひ出て問ふ。

「さなり。」翁は見向もせで答へぬ。

「乞食の子を家に入れしは何故ぞ解し難しと怪むもの少からず、獨は餘に淋しければにや。」

「さなり。」

「紀州ならずとも、共に住む程の予島にも浦にも求めんには必ず有るべきに。」

「げに然りと」老婦口を入れて源叔父の顔を見上げぬ。源叔父は物案じ顔にて暫時答へず。西の山懐より眞直に立のぼる煙の末の夕日に輝きて眞青なるを見話しやうなり。

「紀州は親も兄弟も家も無き童なり、我は妻も子もなき翁なり。我渠の父とならば渠我の子となりなん、共に幸ならずや。」獨語のやうに言ふを人々心のうちに驚きぬ、此翁が斯く滑らかに語りいでしを今迄聞きしことなけれは、

げに月日経つことの早さよ、源叔父。ゆり殿が赤兒抱きて襖邊に立てるを視しは、われには昨日の様なる心地す。老婦は嘆息つきて、

は小走りに足跡向きし方へと馳せぬ。

源叔父が紀州を其家に引取りたりといふ事知

源叔父が紀州を其家に引取りたりといふ事知

源叔父が紀州を其家に引取りたりといふ事知

源叔父が紀州を其家に引取りたりといふ事知

源叔父が紀州を其家に引取りたりといふ事知

「幸助殿今無事ならば何哉ぞ」と問ふ。

「紀州よりは二ツ三ツ上なるべし。」さりけなく答へぬ。

「紀州の歳ほど推し難きはあらず、垢にて歳も埋れはてしと覺ゆ、十にや將十八にや。」人々の笑ふ聲暫時止まざりき。

「われも能は知らず、十六七とかいへり。生の母ならで定に知るものあらんや、哀とおぼさずや。」翁は老夫婦が連れし七歳計の孫とも思はるゝ兒を見かへりつゝ言へり。其聲さへ震へるに、人々氣の毒がりて笑ふことを止めつ。

「げに親子の情二人が間に發らば源叔父が行末樂しかるべし。紀州とても人の子なり、源叔父の歸り遅しと門に待つやうなりなば涙流すものは源叔父のみかは。」夫なる老人の取繕ひげにいふも眞意なきにあらず。

「さなり、げに其時はうれしかるべし」と答へし源叔父が言葉には喜充ちたり。

「紀州連れて此度の夢居見る心はなきか。」斯く言ひし若者は源叔父嘲らんとにはあらで、烏の娘の笑顔見たきなり。姉妹は源叔父に氣兼ねて微笑しのみ。老婦は舩たゞき、そは極て面白からんと笑ひぬ。

「阿波十郎兵衛など見せて我子泣かすも益なからん。源叔父は眞顔にていふ。

「我子とは誰ぞ。」老婦は素知らぬ顔にて問ひつ、

「幸助殿は彼處にて潮れしと聞きしに。」振り向て妙見の山影黒き邊を指しぬ、人々皆な彼方を見たり。

「我子とは紀州の事なり。」源叔父は暫時こぐ手を止めて彦岳の方を見やり、顔赤めて言放ちぬ。怒とも悲とも恥とも將た喜ともいひわけ難き情胸を衝きつ。足を舷端にかけ櫓に力加へしと見るや、聲高らかに歌ひいぬ。

海も山も絶えて久しく此聲を聞かざりき。うたふ翁も久しく此聲を聞かざりき。夕風の海面をわたりて此聲の賑ゆるやかに波紋を描きつつ消えゆくとぞ見えし。波紋は渚を打てり。山彦は微に應へせり。翁は久しく此應をきかざりき。三十年前の我、長き眠より醒めて山の彼方より今の我を呼ぶならずや。

老婦は聲も節も昔の如しと賛め、年若き四人は噂に違はざりけりと聽きほれぬ。源叔父は七人の客わが舟に在るを忘れ了てたり。

娘二人を舟に揚げし後は若者等寒しとして毛布被り足を縮めて臥しぬ。老夫婦は孫に菓子與へなどし、家の事どもひそくと語りあへり。

浦に着きし頃は日落ちて夕時村を罩め浦を包みつ。舟は客なかりき。深淵の大江の口を出る時彦岳風身にしみ、れば太白の光に砕け、此方には大人鳥の火影早きらめきそめぬ。靜に櫓こぎ翁の影黒く水に映れり。軸輕く浮べば舟底たゞく水音、あはれ何をか囁く。人の眠催す際なる此水音を源叔父は聞くともなく聞きて様々の樂しき事のみ思ひつゞけ、悲しき事、氣がりの事、胸に浮ぶ時は櫓握る手に力入れて頭振りたり。物を追ひやるやうなり。

家には待つものあり、渠は爐の前に坐りて居眠りてや居らん、乞食せし時に比べて我家のうちの樂しき煖かさに心溶け、思ふこともなく燈火打見やりてや居らん、わが歸るを待て夕餉了へしか、櫓こぎ術教ふべしといひし時、うれしげに點頭きぬ、言葉少く絶えず物思はしげなるは此迄の慣なるべし。月日経ば内付きて頬赤らむ時もあらん、されどされど。源叔父は頭を振りぬ。否々渠も人の子なり、我子なり、吾に習ひて巧にうたひ出る渠が聲こそ聞かまほしけれ。少女一人乗せて月夜に舟こぎ事もあらば渠も人の子なり其少女再び見たき情起さでやむべき、われに其の情見ぬく眼あり必らず他所に

は見じ。

波止場に入りし時、翁は夢みる如きまなざしして問屋の燈火、影長く水にゆらぐを見たり。舟撃ぎ了れば臥席巻きて腋に抱き櫓を肩にして岸に上りぬ。日暮れて間もなきに問屋三軒皆な戸さして人影絶え人聲なし。源叔父は眼閉ぢて歩み我家の前に來りし時、丸き眼睜りて四邊を見廻はしぬ。

「我子よ今歸りしぞ」と呼び櫓置く可き處に櫓置きて内に入りぬ。家内暗し。

「こは如何に、わが子よ今歸りぬ、早く燈點けずや。」寂として應なし。

「紀州々々、道馬のふつどかに啣くあるのみ。翁は狼狽く、懷中よりまつち取出し、一摺すれば一間のうち俄に明くなりつ、入らしき者見えず、暫時して又暗し。陰森の氣床下より起りて翁が懷に入りぬ。手早く豆洋燈に火を移し四邊を見廻はすまなざし鈍く、耳そばだて、「我子よ」と呼びし聲噎れて呼吸も追りぬと覺し。

爐には灰白く冷え夕餉たべしあとだになし。家内燈すまでもなく、たゞ一間の裡を翁はゆるやかに見ればしぬ。煤し壁の四隅は光届き兼つ心ありて見れば、人あるに似たり。源叔父は頬を手に埋め深き嘆息せり。此時もしやと

思ふ事胸を衝きしに、つと起てば大粒の涙流れて頬をつたふを拭はんとはせず、柱に掛けし舳燈に火を移していそがしく家を出で、城下の方指して走りぬ。

蟹田なる鍛冶の夜業の火花闇に散る前を行過んとして立どまり、日暮のころ紀州此前を通らざりしかと問ば、氣つかざりしと植持てる岩者の一人答へて訝しげなる顔す。こは夜業を妨げぬと笑面作つ、又急ぎゆけり。右は畑、左は堤の上を一列に老松並ぶ真直の道を半ば來りし時、行先をゆくものあり。急ぎて燈火さし向くるに後、姿紀州にまぎれなし。渠は兩手を懷にし、身を前に屈めて歩めり。

「紀州ならずや。」呼びかけて其肩に手を掛けつ、

「獨り何處に行かんとはする。」怒、はた喜、はた悲、はた限りなき失望をたゞ此一言に包みしやうなり。紀州は源叔父が顔見て驚きし様もなく、道ゆく人を門に立ちて心なく見やる如き様にて打守りぬ。翁は呆れて暫時言葉なし。

「寒からずや、早く歸れ我子。」いひつゝ紀州の手取りて連れ歸りぬ。みち／＼源叔父は、わが歸りの遅かりしゆゑ淋しさに堪へざりしか、

夕餉は戸棚に調へ置きしものをなどいひく行けり。紀州は一言もいはず、生憎に嘆息もらすは翁なり。

家に歸るや、爐に火を盛に燃て其傍に紀州を坐らせ、戸棚より膳取出して自身は食はず紀州にのみたべさす。紀州は翁の言ふがまゝに翁のものまで食ひ盡しぬ。其間源叔父はをり／＼紀州の顔見ては眼閉ぢ嘆息せり。たべ了りなば火にあたれといひて、うまかりしかと問ふ、紀州は眠氣たる眼にて翁が顔を見て微にうなづきしのみ。源叔父は此様見るや、眠くば寢よと優しくいひ、自から床敷きて布団かけて遣りなどす。紀州の寢し後、翁は一人爐の前に坐り、眼を閉ぢて動かず。爐の火燃えつゝきんとすれども柴くべす、五十年の永き年月を潮風にのみ晒せし顔には赤き焔の影燈東なく漂へり。頬を速ひてきらめくものは涙なるかも。屋根を渡る風の音す、門に立てる松の梢を嘯きて過ぎぬ。

翌朝早く起きいで、源叔父は紀州に朝飯たべさせ自分は頭重く口渴きて堪へ難しと水のみ飲みて何も食はず。暫時して此熱を見よと紀州の手取りて我顔に觸れしめ、少し風邪ひきしやうなりと、遂に床のべて打臥しぬ。源叔

父は

父の疾みて臥するに種なる事なり。

「明日は絶えん、此處に來れ、物替して聞かすべし。」強て打込み、紀州を枕邊に坐らせて、といきつくらん、色々の物語して聞かしぬ。爾は驚てふ恐ろしき角見し事なからんなど七ツ八ツの兒に語るが如し。やゝありて、

「母親、懇しくは思はずや。」紀州の瀬見つゝ問ひぬ。此間を紀州の解し兼し様なれば、

「永く我家に居よ、我を獨の父と思へ、——」尙ほ言ひ絶がんとして苦しげに息す。

「明後日の夜は芝居見に連れゆくべし。外題は阿波十郎兵衛なる由きぬ。そなたに見せなば親懇しと思ふ心、必ず起らん、其時われを父と思へ、そなたの父はわれなり。」

斯くて源叔父は昔見し芝居の筋を語りいで、巡禮諸を徴なる聲にてうたひ聞かせつ、あはれと思はずやといひて自ら泣きぬ。紀州には何事も解し兼ねる様なり。

「よし、話のみにては解し難し、日に見なば爾も必ず泣かん。」言ひ了りて苦しげなる息、ほと吐きたり。語り疲れて暫時まどろみぬ。日さめて枕邊を見しに紀州あらざりき。紀州よ我子よと呼びつゝ、走りゆく程に顔の半を朱に染めし女を食何處よりか現はれて紀州は我子なり

といひしが是る内に年若き一婦、は、いならずや幸助を如何にせしぞ、わが妻りし時に助助何處にか逃げ亡せたり、來り來れ共其に捜せよ、見よ幸助は芥子のなかより大服の褌片掘出すぞと大聲あけて泣けば、後より我子よといふは母なり。母は知れずと指し玉ふ。舞臺には燈燭の光眼を引る計り舞きたり。母が眼もふち赤らめて泣き玉ふを訴しく思ひつ、自分は菓子のみ食ひて遂に母の膝に小さき頭載せ其儘臥入りぬ。母涙ゆり起し玉ふ心通して夢破れたり。源叔父は頭をあげて、

「我子よ今恐ろしき夢みたり。」いひつゝ、枕邊を見たり。紀州居ざりき。

「わが子よ。」暖がれし聲にて呼びぬ。答なし。窓を吹く風の音怪しく鳴りぬ。夢なるか現なるか。翁は布團翻のけ、つと起ちあがりて、紀州よ我子よと呼びし時、目眩みて其儘布團の上

に倒れつ、千尋の底に落入りて波わが頭上に碎けしやうに覺えぬ。

其日源叔父は布團被りしまゝ起出でず、何も食はず、頭を布團の外にすらいださざりき。朝より吹きそめし風次第に荒らく磯打つ浪の音ぞし。今日は浦人も城下に出でず、城下より鳥へ渡る者もなければ渡舟舳みに來る者もなし。

父に入りて波もみれば波止場の崩れしかと怪まるゝとせり。

「い、合羽を首、提打つておぼせへなどして波止場に集りぬ。波止場は事なかりき。風浴ちたれど波高は高、雨は雷の音くやうなる音し磯打波打つて津浪雨の如し。人々荒れを見廻るうち小舟一葉岩の上に乗上けられて半は消けしまゝ、残るを見出しぬ。

「源叔父の舟にまゐりなし。」若者の一人答へぬ。人々驚見合はして音なし。

「誰れにてもよし源叔父町で來らざや。」

「われ白ん。若者は燈籠を地に置いて走りゆきぬ。十歩の先に見るべし。遂に差出でし松が杖より怪しき物さがれり。猶太き若者はづかづかと寄りて眼定めて見たり。給れるは源叔父なりき。」

杜港に程近き山ふところ、小き墓地ありて東に向ひぬ。源叔父の妻ゆり獨り幸助の墓みな此處にあり。池川源太郎之墓と書きし墓標亦此處に建られぬ。幸助を中にして三つの墓並び、冬の夜は寒降ることもあれど、都なる年若き教師は源叔父今も尙一人淋しく磯邊に暮し妻子の

事思ひて泣つゝありと偏に哀れかりし。
 紀州は同く紀州なり、町のものよりは佐伯町
 属の品とし視らるゝこと前の如く、墓より脱け
 出でし人のやうに此古城市の夜半にさまよふこ
 と前の如し。或人渠に向て、源叔父は縊れて死
 たりと告げしに、渠はたゞ其人の顔を打まもり
 のみ。

(同治三十年五月)

たき火

北風を背になし、枯草白き砂山の嶺に腰かけ、足なげいたして、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつ、沖より歸る父の舟遅しと俟つ返子邊の童の心、その淋しき、うら悲しさは如何あるべき。御最後川の岸邊に茂る葦の枯れて、吹く潮風に騒ぐ、其根かたには夜半の瀟沙に人知れず結びし氷、朝の退潮に破られて残り、ひねもす解けもえせず、夕闇に白き線を水際に引く。若し旅人、疲れし足を此渚に停めしとき、何心なく見廻はして、何等の感もなく行過ぎ得べきか。見かへれば彼處なるは哀れを今も、七百年の後にひく六代御前の杜なり。木がらし其梢に鳴りつ。

落葉を浮べて、ゆるやかに流るゝ此沼川を、漕ぎ上る舟、知らず何れの時か心地よき追分の節面白く此舟より響き渡りて霜夜の前ぶれをか爲しつる。あらず、あらず、たゞ見る何時もなく、物言はぬ、笑はざる、歌はざる漢子の、農夫とも漁人とも見分け難きが淋しげに櫓あやつるのみ。

鉄かたげし農夫の影の、橋と共に飄ろに此れに映つる、かの舟、音もなくこれを掻き亂しゆく、見る間に、舟は葦がくれ去るなり。日影のほあふずりの端に跨ゆたふ頃、川口の淺瀬を村の若者二人、はだか馬に跨りて靜かに歩ます、晝めきたるを見ることもあり。かゝる時濱には見わたす限り、人らしきものゝ影なく、ひき上げし舟の舳に止まれる鳥の、聲をも立てて翼打ものうげに鎌倉の方さして飛びゆく。或年の十二月末つ方、年は迫れども童は何時も氣楽なる風の子、十三歳を頭に、九ツまで位が七八人、砂山の麓に集りて何事かを評議まぢく、立てるもあり、砂に版を埋めて炬杖つけるもあり。坐れるもあり。此時日は西に入りぬ。

評議の事定りけん、童等は思ひ／＼に波打際を駆けめぐりはじめぬ。入江の端より端へと、おのがじし、見るが間に分れ散れり。潮遠く引きささりしあとに残るは朽ちたる板、縁缺けたる椀、竹の片、木の片、柄の折れし柄杓などの色

色、皆な一時日の光の名残なるべし。童等は一々これらを拾ひあめぬ。集めて之れを水際を去る程よき處、乾ける砂を撰びて積みたり。つみし物は悉く満ち居たり。

此寒き夕まぐれ、童等は何事を始めたことぞ。日の西に入りてより程経たり、嶺根是柄の上を登むと見えし雲は黄金色にそまりぬ。小坪の清に歸る漁船の、風落ちて陸にければにや、帆を下ろし滑きゆくもあり。

がらす評は失せし鏡の、額縁めきたるを拾ひて、これを焼くは惜しき心地すといふ兒の丸顔、色黒けれど愛らし。されど其は必ず能く燃ゆと此昔の年かさなる子、己のが力に餘る程の太き丸太を置きつゝ言へり。其丸太は燃えじと丸顔の子いふ。いな燃さず置く可きと年上の子いさまきて立ちぬ。傍に一人、今日は獲ものゝ何時になく多き様なりと、喜ばしげに叫びぬ。

わらべ等の願は是等の獲物を燃さんことなり。赤き炎は彼等の狂喜なり。走りて之れを躍り越えんことは互の誇りなり。されば彼等このたびは砂山の彼方より、枯草の類を集め來りぬ。年上の子、先に立ちて此等に火をうつせば、童等は丸く火を取りまきて立ち、竹の節の破る音を今かくと待てり。されど燃ゆもは枯草

のみ。燃えては消えぬ。煙のみ徒らにたちのぼりて木にも竹にも火は容易燃え付かず。鏡のわくは僅かに焦げ、丸太の端よりは怪しげなる音して湯氣を吹けり。童等は交るる砂に頭押しつけ、口を尖らして吹けど生憎に煙眼に入りて皆の顔は泣きたらんごとし。

沖は早や暗うなれり。江の島の影も見わけ難くなりぬ。干潟を鳴きつれて飛ぶ千鳥の聲のみ聞えて彼方此方、ものさびしく、其姿見えすと見れば、夕闇に白きものはそれなり。あわたじしく飛びゆくは鳴かの葦間より立ちけん。

此時、一人の童忽ち叫びていひけるは、見よや、見よや、伊豆の山の火早や見えそめたり、如何なればわれらが火は燃えざるぞと。童等は齊しく立あがりて沖の方を打まもりぬ。げに相模灘を隔て、一點二點の火、鬼火かと怪しまるゝばかり、明滅し、動搖せり。これ正しく伊豆の山人、野火を放ちしなり。冬の旅人の日暮れて途遠きを思ふ時、遙かに望みて泣くは實に此火なり。

伊豆の山燃ゆ、伊豆の山燃ゆと、童等節面白く唄ひ、沖の方のみ見やりて手を拍ち、躍り狂へり。あはれ此罪なき聲、かはたれ時の淋びしき濱に響きわたたりぬ。私語く如き波音、入江の

南の端より白き襦立で、走り來り、これに和したり。潮は満ちそめぬ。

此寒き日暮に何時までか濱に遊ぶぞと呼ぶ聲、砂山の彼方より聞こえぬ。童の心は伊豆の火の方にのみ馳せて、此聲を聞くもの無りき。

歸らずや、歸らずやと二聲、引續きて聞えけるに、一人の幼なき兒、聞きつけて、母呼び給へり、最早打捨て歸らんと言ひ、忽ち彼方に走りゆけば、殘の童等亦た、さなり、さなりと叫びつ、競うて砂山に駆けのぼりぬ。

火の燃え付かざるを口惜く思ひ、かの年かざる童のみは、後振りかへりつゝ馳せゆきけるが、砂山の頂に立ちて、將に彼方に走り下らんとする時、今ひとたび振向きぬ。ちらと眼を射たるは火なり。こは如何に、われらの火燃えつきぬと叫べば、童等驚き怪しみ、たち返へりて砂山の頂に集り、一列に並びて此方を見下ろしぬ。

げに今まで燃え付かざりし拾木の、忽ち風に誘はれて火を起し、濃き煙うづまき上り、紅の炎の舌見えつ隠れつす。竹の節の裂る音聞え火の子舞ひ立ちぬ。火は正しく燃え付きたり。されど童等は最早や此火に遷ることをせず、たゞ喜ばしげに手を拍ち、高く歡聲を

放りて、一齊に砂山の麓なる家路の方へ馳せ下りけり。

今は海祭れ讀も暮れぬ。冬の淋しき夜となりぬ。此淋しき道子の濱に、主なき火にさびしく燃えつ。

忽ち見る、水際をたどりて、火の方へと近づき來る黒き影あり。こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最後川を渡りて濱に出で、濱連ひに小坪街道へと志しぬるなり。火を目がけて小走に歩む其足音重し。

暖れし聲にて、よき火やと幽に叫びつ、杖なげ捨て、いそがしく背の小包を下ろし、兩の手を先づ炎の上にかざしぬ。其手は震ひ、其膝はわななきたり。げに寒き夜かな、言ふ齒の根も合はぬが如し。炎は赤く其顔を照らしぬ。皺の深さよ。眼いたく凹み、其光は濁りて鈍し。

頭髮も髯も胡麻白にて塵にまみれ、鼻の先のみ赤く、頬は土色せり。衰れ何處の誰ぞや、指してゆくさきは何處ぞ、行衛定めぬ旅なるかも。げに寒き夜かな。獨りごちし時、全身を心あげに震ひぬ。斯くて温まりし掌もて心地よげに顔を摩りたり。いたく古びて所々古綿の現はれし衣の、火に近き裾のあたりより湯氣を

放つは、朝の雨に霽ひて、仍ほ乾すことたに得ざりしなるべし。

あな心地よき火や。言ひつゝ、投げやりし杖を拾ひて、これを力に片足を揚げ火の上にかざしぬ。胸絆も足袋も、紺の色あせ、のみならず血色なき小指現はれぬ。一聲高く竹の裂るゝ音して、勢よく燃え上りし炎は足を焦がさんとす、されど翁は足を引かざりき。

げに心地よき火や、たが燃やしつる火ぞ、忝けなし。言ひさして足を替へつ。十とせの昔、樂しき燻見捨てぬるよりこのかた、未だこの様なるうれしき火に遇はざりき。いひつゝ、火の奥を見つむる目なさは遠きものを眺むるが如し。火の奥には過ぎし昔の爐の火、昔のまゝに描かれやしつらん。鮮やかに現はるゝものは兒にや孫にや。昔の火は樂しく、今の火は悲し、あらず、あらず、昔は昔、今は今、心地よき此火や。言ふ聲は震ひぬ。荒らゝしく杖を投げやりつ。火を背になし、沖の方を前にして立ち體をそらせ、雨の拳もて腰をたゝきたり。

仰ぎ見る大ぞら、晴に晴れて、黒澄み、星河霜をつゝみて、遠く伊豆の脚角に垂れたり。

身うち煖くなりまさりゆき、ひぢたる衣の裾も細も乾きぬ。あゝ此火、誰が燃やしつる

火ぞ、誰が爲にとて、誰が燃しつるぞ。今や翁の心は感謝の情にみたされつ、老の眼は涙ぐみたり。風なく波なく、さし来る潮の、しみじみと砂を浸す音を翁は眼閉ぢて聴きぬ。さすらふ旅の憂も此刹那にや忘れはてけん、翁が心、今一たび童の昔にかへりぬ。

あはれ此火、漸らゝに消えなんとす。竹も燃えつき、板も燃え盡きぬ。かの太き丸太のみは尙ほ良く燃えたり。されど翁は最早やこれを惜しとも思はざりき。ただ立去際に名残惜しくてや、兩手もて輪をつくり、抱く様に胸にあたりまで火の上にかざしつ、眼しばだゝきてありしが、いざと計り腰うちのばし、二足三足ゆかんとして立ちかへり、燃えのこりたる木の端端を掻集めて火に加へつ、勢よく燃え上るを見て心地よげに打笑みぬ。

翁のゆきし後、火は紅の光を放ちて、寂寞たる夜の闇のうちに覺束なく燃えたり。夜更け、潮みち、童筆が焼し火も旅の翁が足跡も永久の波に消されぬ。

(明治三十年十一月)

詩想

丘の白雲

大空に漂ふ白雲の一つあり。童、丘にのぼり松の小かげに横はりて、ひたすらこれを眺め居たりしが、そのまゝ寢入りぬ。夢は樂しかりき。雲、童をのせて限りなき蒼空を彼方此方に漂ふ意の閑けさ、童はしみくうれしく思ひぬ。童はいつしか地の上的ことを忘れはてたり。めざめし時に秋の日西に傾きて丘の紅葉火の如くかゞやき、松の梢を吹くともなく吹く風の調は遠き島根に寄せては返へず波の音にも似たり。その静けさ。童は再び夢心地せり。童はいつしか雲のことを忘れはてたり。此後、童も憂き事しげき世の人となりつ、様々のことを彼を憐ましける。そのをり、憶ひ起して涙備ほすは彼の丘の白雲、かの秋の日の丘なりき。

二人の旅客

深き深山の人氣とだえし路を旅客一人ゆき

ぬ。雪いよく深く、路益々色く、寒氣現へ難く成りて遂に倒れぬ。その時又た一人の旅人來りあはし、この様を見て驚き、たすけ起して藥などあたへしかば、先きの旅客、この恩いづれの時かむくゆべき、身を終はるまで忘れじといひて情深き人の手を執りぬ。後の旅人は微笑みて何事もいはずりき。家に歸らば世の人々にも告げて、君が情深き舉動言ひ廣め、文にも書きとめて後の世の人にも君が名歌はさばやと先きの旅客言ひたしぬ。情深き人は微笑みて何事もいはずりき。斯くて此二人は連れだちて途をいそぎぬ。路は愈々危く、道は益々深し。一人躓きぬ。一人あなやと叫びて其手を執りぬ。二人は底知れぬ谷に墜ち失せたり。千秋萬古、遂に此二人が行衛を知るものなく、まして一人の旅客が情の光をや。

映土

美はしき華の穂と、やさしき野菊の穂と、此

二つの一つを石多く水少なく風動く土焦たる地にまき、其一つを春風ふき散らたなびき若水流れ鳥啼き蒼空のはて地に垂る野にまきぬ。一つは枯れて土となり、一つは若葉萌え花咲きて、百年たぬ間に野は華の野となりぬ。この比喩を教へて國民の心の寛からむことを祈りし聖者ははしける。されど其民の土賦せて石多く風動く水少かりしかば、聖者がまきし此の言葉も生育に由なく、花も咲かず實も結び得ず枯れうせたり。而して其國は荒野と變はりつ。

路傍の梅

少女あり、友が宅にて梅の實をたべしに餘りに美味かりしかば、其たねを持ち歸り、我が家の垣根に埋めおきたり。少女は旅人が寄る小さき茶屋の娘なりき、年経て其家倒れ、家ありし邊は草深き野と變はりぬ。されど路傍なる梅の老木の実は益々榮えて、年々花咲き、美味き實を結べば、道ゆく旅客らはちぎりに喰ひ、其渴きし喉をうるほしけり。されど梅ありて、此梅を此處にまきし少女の此世に有りしや否やを知らず。

(明治三十一年四月)

忘れえぬ人々

多摩川の二子の渡をわたつて少しばかり行くと溝口といふ宿場がある。其中程に蘆屋といふ旅人宿がある。恰度三月の初めの頃であつた。此には大空かき曇り北風強く吹いて、さなきだに淋しい。此町が一段と物淋しい陰鬱な寒むさうな光景を呈して居た。昨日降つた雪が未だ残つて居て高低定らぬ茅屋根の前の軒先からは雨滴が風に吹かれて舞うて落ちて居る。草鞋の足痕に溜つた泥水にすら寒むさうな漣が立て居る。日が暮れると間もなく大抵の店は戸を閉めて了つた。闇い一筋町が寂然として了つた。旅人宿だけに蘆屋の店の障子には燈火が明く射して居たが、今宵は客も餘りないと見えて内もひっそりとして、をり／＼雁頭の太さうな煙管で火鉢の縁を敲く音がするばかりである。

突然に障子をあけて一人の男がのつそり入つて來た。長火鉢に寄かゝつて胸算用に餘念も無かつた主人が驚て此方を向く暇もなく、廣い土間を三步ばかりに大股に歩いて、主人の鼻先に突立ツた男は年頃三十には未だ二ツ三ツ

足らざるべく、洋服、脚絆、草鞋の装束で烏打帽をかぶり、右の手に蠅螂を携へ、左に小さな革包を持って其を脇に抱て居た。

「一晩厄介になりたい。」

主人は客の風采を視て居て未だ何とも言はない、其時奥で手の鳴る音がした。

「六番でお手が鳴るよ。」

「何方さまで御座います。」

主人は火鉢に寄かゝつたまゝで問うた。客は肩を聳かして一寸と顔をしがめたが、忽ち口の邊に微笑をもらして、

「僕か、僕は東京。」

「それで何方へお越しで御座います。」

「八王子へ行くのだ。」

と答へて客は其處に腰を掛け脚絆の緒を解きにかゝつた。

「旦那、東京から八王子なら道が變で御座いますねエ。」

主人は不審さうに客の様子を今更のやうに

睨めて、何か言ひたけな口つきをした。客は直ぐ気が付いた。

「いや僕に東京だが、今日東京から來たのぢやアない、今日は晩なつて川崎を出發て來たからこんなに暮れて了つたのさ、一寸と湯をお呉れ。」

「早くお湯を持て來ないか。へえ随分今日はお寒むかつたでせう、八王子の方はまだ／＼寒う御座います。」

といふ主人の言葉は、いそが有つても一體の風つきは極めて無愛嬌である。年は六十ばかり、肥満つた體軀の上に綿の多い半纏を着て居るので肩から直に太い頭が出て幅の廣い福々しい顔の目眦が下がつて居る。それで何處かに氣愧しいところが見えて居る。しかし正直なお爺さんだなど客は直ぐ思つた。

客が足を洗つて了つて、未だ拭ききらぬうち、主人は、

「七番へ御案内申しな！」

と怒鳴つた。それぎりで客へは何の挨拶もしない、其後姿を見送りもしなかつた。眞黒な猫が厨房の方から來て、ソツと主人の高い膝の上に這ひ上がつて丸くなつた。主人はこれを知て居るのか居ないのか、ちつと眼をふさいで居

る。暫時すると、右の手が煙草箱の方へ動いて其太い指が煙草を丸めだした。

「六番さんのお浴湯がすんだら七番のお客さんを御案内申しな！」
膝の猫が喫驚して飛下りた。

「馬鹿！ 貴様に言つたのぢやないわ。」
猫は驚惶して、厨房の方へ駆けて往つて了つた。柱時計がゆるやかに八時を打つた。

「お婆さん、吉藏が眠むさうにして居るぢやないか、早く被中爐を入れてやつてお寝かしな、可愛さうに。」

主人の聲の方が眠むさうである、厨房の方で、吉藏は此處で本を復習して居ますぢやないかね。」

お婆さんの聲らしかつた。
「さうかな。吉藏最うお寝よ、朝早く起きてお復習ひな。お婆さん早く被中爐を入れておやんな。」

「今すぐ入れてやりますよ。」

勝手の方で下婢とお婆さんと顔を見合はしてくすくすと笑つた。店の方で大きな欠伸の聲がした。

「自分が眠いのだよ。」

五十を五つ六つ越えたらしい小さな老母が煤

ぶつた被中爐に火を入れながら呟やいた。

店の障子が風に吹かれてがた／＼すると思ふとパラ／＼と雨を吹きつける音が微かにした。

「もう店の戸を引き寄せて置きな」と主人は怒鳴つて、舌打をして、

「又た降つて来やあがつた。」

と獨言のやうにつぶやいた。成程風が大分強くなつて雨さへ降りだしたやうである。

春先とはいへ、寒い／＼寒まじりの風が廣い武藏野を荒れに荒れて、終夜、眞闇な溝口の町の上を哮え狂つた。

七番の座敷では十二時過ぎても未だ洋燈が耿と輝いて居る。龜屋で起きて居る者といへば此座敷の眞中で、差向かひで話して居る二人の容ばかりである。戸外は風雨の聲いかにも凄まじく、雨戸が絶えず鳴つて居た。

「此の模様では明日のお立は無理でせう。」
と一人が相手の顔を見て言つた。これは六番の客である。

「何に、別に用事はないのだから明日一日位此處で暮らしても可んです。」

二人とも顔を赤くして鼻の先を光からして居る。傍の膳の上には燗陶が二本乗つて居て、盃には酒が残つて居る。二人とも心地よきさうに

體をくつろげて、胡坐をかいて、火鉢を甲にして煙草を吹かして居る、六番の客は袍巻の袖から白い腕を臂まで出して巻煙草の灰を落しては、喫煙して居る。二人の話しぶりは極めて卒直であるものゝ今宵初めて此宿舎で出合つて、何かの口緒から、二口三口襖越しの語があつて、餘りの淋しさに六番の客から押しかけて来て、名刺の交換が済むや、酒を命じ、談話に實が入て来るや、何時しか丁寧な言葉とぞんざいな言葉とを半混に使ふやうに成つたものに違ひない。

七番の客の名刺には大津辨二郎とある、別に何の肩書もない。六番の客の名刺には秋山松之助とあつて、これも肩書がない。

大津とは即ち日が暮れて着た洋服の男である。瘦形なすらりとして色の白い處は相手の秋山とは丸で違つて居る。秋山は二十五か六といふ年輩で、丸く肥満て赤ら顔で、眼元に愛嬌があつて、いつもにこ／＼して居るらしい。大津は無名の文學者で、秋山は無名の畫家で不思議にも同種類の青年が此田舎の旅宿で落合つたのであつた。

「もう寝ようかねエ。随分悪口も言ひつくしたやうだ。」

美術論から文學論から宗教論まで二人は可

なり腕手に饒舌つて、現今の文學者や畫家の大家を手ひどく批評して十一時が打つたのに氣が付かなかつたのである。

『まだ可いさ。どうせ明日は駄目でせうから夜通し話したつてかまはないさ。』

畫家の秋山はにこ／＼しながら言つた。

『しかし何時でせう。』

と大津は投げ出してあつた時計を見て、

『おやもう十一時過ぎだ。』

『どうせ徹夜でさあ。』

秋山は一向平氣である。盃を見つめて、

『しかし君が眠むけれやあ寢てもいゝ。』

『眠くは少ともない、君が疲れて居るだらうと思つてさ。僕は今日晩く川崎を立て三里半ばかりの道を歩いた丈だから何ともないけれど。』

『なに僕だつて何ともないさ、君が寢るならこれを借りて去つて讀で見ようと思ふだけです。』

秋山は半紙十枚ばかりの原稿らしいものを取上げた。其表紙には「忘れ得ぬ人々」と書てある。

『それは眞實に駄目ですよ。つまり君の方でいふと鉛筆で書いたスケッチと同じことで他人にはわからないのだから。』

といつても大津は秋山の手から其原稿を取ら

とは爲なかつた。秋山は一枚二枚開けて見て所々讀んで見て、

『スケッチにはスケッチ支けの面白があるから少こし拜見したいねエ。』

『まア一寸借して見玉へ。』

と大津は秋山の手から原稿を取て、處々あけて見て居たが、二人は暫時無言であつた。戸外の風雨の聲が此時今更らのやうに二人の耳に入つた。大津は自分の書た原稿を見つめたまゝちつと耳を傾けて夢心地になつた。

『こんな晩は君の領分だねエ。』

秋山の聲は大津の耳に入らないらしい。返事もしないで居る。風雨の音を聞て居るのか、原稿を見て居るのか、將た遠く百里の彼方の人を憶つて居るのか、秋山は心のうちで、大津の今の顔、今の眼元は我が領分だと思つた。

『君がこれを讀むよりか、僕が此題で話した方が可さうだ。どうです、君は聴きますか。此原稿はほんの大意を書き止めて置たのだから讀むだつて解らないからねエ。』

夢から寤めたやうな目つきをして大津は眼を秋山の方に轉じた。

『詳細く話して聞かされるなら尙のことさ。』

と秋山が大津の眼を見ると、大津の眼は少し

涙にうるんで居て、異様な光を放つて居た。

『僕はなるべく詳しく話すよ、面白くないと思つたら、遠慮なく注意して呉れ玉へ。その代り僕も遠慮なく話すよ。なんだか僕の方で聞てもらひたい様な心持に成つて来たから始ちやあないか。』

秋山は火鉢に炭をついで、鐵瓶の中へ冷めた燗陶を突込んだ。

『忘れ得ぬ人は必ずしも忘れて叶ふまじき人にあらず、見玉へ僕の此原稿の劈頭第一に書いてあるのは此句である。』

大津は一寸と秋山の前にその原稿を差し出した。

『ね。それで僕は先づ此句の説明をしようと思ふ。さうすれば自から此文の題意が解るだらうから。しかし君には大概わかつて居ると思ふけれど。』

『そんなことを言はないで、ざん／＼遣り玉へよ。僕は世間の讀者の積りで聽て居るから。失敬、横になつて聴くよ。』

秋山は煙草を啣へて横になつた。右の手で頭を支へて大津の顔を見ながら眼元に微笑を流へて居る。

『親とか子とか又は朋友知己其ほか自分の世話

になつた教師先輩の如きは、つまり單に忘れ得ぬ人とのみはいへない。忘れて叶ふまじき人といはなければならぬ、そこで此處に恩愛の契もなければ義理もない、ほんの赤の他人であつて、本來をいふと忘れて了つたところまで人情をも義理をも缺かないで、而も終に忘れて了ふことの出来ない人がある。世間一般の者にさういふ人があるとは言はないが、少くとも僕には有る。恐らくは君にも有るだらう。』

秋山は默然て首肯いた。

「僕が十九の歳の春の半頃と記憶して居るが、少し體軀の具合が悪いので暫時らく保養する氣で東京の學校を退いて國へ歸へる、其歸途のことであつた。大阪から例の瀬戸内通ひの汽船に乗つて春海波平らかな内海を航するのであるが、殆んど一昔も前の事であるから、僕も其時の乗合の客がどんな人であつたやら、船長がどんな男であつたやら、茶菓を運ぶ船奴の顔がどんなであつたやら、そんなことは少しも憶えて居ない。多分僕に茶を注いで呉れた客もあつたらうし、甲板の上で色々と話しかけた人もあつたらうが、何にも記憶に止まつて居ない。『たい其時は健康が思はしくないので餘り浮き浮きしないで物思に沈むで居たに違ひない。絶

えず甲板の上に出で將來の夢を描ては此世に於ける人の身の上のことなどを思ひつゞけてゐたことだけは記憶してゐる。勿論若いもの、薄で其れも不思議はないが、其處で僕は、春の日の閉かな光が油のやうな海面に融け殆んど連も立たぬ中を船の船首が心地よい音をさせて水を切て進行するにつれて、霞たなびく鳥々を迎へては送り、右舷左舷の景色を眺めてゐた。菜の花と麥の青葉とで錦を敷たやうな鳥々が丸で霞の奥に浮いてゐるやうに見える。そのうち船が或る小さな島を右舷に見て其磯から十町とは離れない處を通るので僕は欄に寄り何心なく其島を眺めてゐた。山の根がたの彼處此處に背の低い松が小柱を作つてゐるばかりで、見たところ畑もなく家らしいものも見えない。寂として淋びしい磯の退潮の痕が日に輝つて、小さな波が水際を弄んでゐるらしく長い線が白刃のやうに光つては消えて居る。無人島でない事はその山よりも高い空で雲雀が啼てゐるのが微かに聞えるのでわかる。田畑ある島と知れけりあげ雲雀、これは僕の祖父の句であるが、山の彼方には人家があるに相違ないと僕は思つた。と見るうち退潮の痕の日に輝つてゐる處に一人の人がゐるのが目についた。たしかに男

である。又た子供でもない。何か頻りに拾つては籠か桶かに入れてゐるらしい。二三歩あるいはし、やがみ、そして何か拾ろつてゐる。自分には此淋しい島かげの小さな磯を漁つてゐる此人をぢつと眺めてゐた。船が進むにつれて人影が黒い點のやうになつて了つた、そのうち磯も山も鳥全體が霞の彼方に消えて了つた。その後今日が日まで殆ど十年の間、僕は何度此島かげの顔も知らない此人を憶ひ起したらう。これが僕の「忘れ得ぬ人々」の一人である。

「その次は今から五年ばかり以前、正月元旦を父母の膝下で祝つて直ぐ九州旅行に出かけて、熊本から大分へと九州を横斷した時のことであつた。

「僕は朝早く弟と共に草鞋脚絆で元氣よく熊本を出發つた。其日は未だ日が高い中に立野といふ宿場まで歩いて其處に一泊した。次ぎの日の未だ登らないうち立野を立つて、兼一の驛で、阿蘇山の白煙を日にかけて霜を踏み棧橋を渡り、路を間違へたりして漸く日中時分に絶頂近くまで登り、噴火口に達したのは一時過ぎでもあつただらうか。熊本地方は温暖であるがうへに、風のない好く晴れた日だから、冬ながら六千尺の高山も左までは寒く感じない。高嶽の

絶頂は噴火口から吐き出す水蒸気が凝って白くなつて居たが其外は満山ほとんど雪を見ないで、たゞ枯草白く風にそよぎ、燒土の或は赤き或は黒きが著噴火口の名残を彼處此處に止めて斷崖をなし、その荒涼たる、光景は、筆も口も叶はない、之れを描くのは先づ君の領分だと思ふ。

「僕等は一度噴火口の縁まで登て、暫時は凄まじい穴を覗き込んだり四方の大觀を志にしたりしてゐたが、さすがに頂は風が寒くつて堪らないので、穴から少し下りると阿蘇神社がある其傍に小さな小屋があつて番茶位は吞ませて呉れる、其處へ逃げ込んで剛飯を溜つて元氣をつけて、又た噴火口まで登つた。

「其時は日がもう餘程傾いて肥後の平野を立籠めてゐる霧靄が焦けて赤くなつて恰度其處に見える舊噴火口の斷崖と同じやうな色に染つた。圓錐形に聳えて高く群峰を抜く九重嶺の裾野の高原數里の枯草が一面に夕陽を帯び、空氣が水のやうに澄むでゐるので人馬の行くのも見えさうである。天地寥廓、而も足もものでは凄じい響をして白煙濛々と立騰り眞直ぐに空を衝き急に折れて高嶺を掠め天の一方に消えて了ふ。壯といはんか美といはんか慘といはんか歎、

僕等は黙然たまゝ一言も出さないうで暫く石塚のやうに立て居た。此時大地悠々の感、人間存在の不思議の念などが心の底から湧て來るのは自然のことだらうと思ふ。

「ところで尤も僕等の感を惹いたものは九重嶺と阿蘇山との間の一大窪地であつた。これは兼て世界最大の噴火口の舊跡と聞て居たが成程、九重嶺の高原が急に類こんで居て數里に互る絶壁が此窪地の西を廻つてゐるのが眼下によく見える。男體山麓の噴火口は明媚幽邃の中禪寺湖と變つてゐるが此大噴火口はいつしか五穀實る數千町歩の田圃とかはつて、村落幾個の樹林や麥畑が今しも斜陽靜かに輝やいてゐる。僕等が其夜、疲れた足を踏みのばして罪のない夢を結ぶを樂しむでゐる宮地といふ宿驛も此窪地にあるのである。

「いつそのこと山上の小屋に一泊して噴火の夜の光景を見ようかといふ話も二人の間に出来たが、先きが急がれるので愈々山を下ることに決めて宮地を指して下りた。下りは登りよりかずつと勾配が緩るやかで、山の尾や谷間の枯草の間を此のやうに蜿蜒つてゐる路を辿つて急ぐと、村に近づくに連れて枯草を着けた馬を幾個か逐こした。あたりを見ると彼處此處の山尾

の小路をのどかなる音夕陽を響かして人馬個個となく麓をさして歸りゆくのが數へられる、其はどれも皆な枯草を着けてゐる。其は直きそこに見えてゐても容易には村へ出ないので、日は暮れかゝるし僕等は大意に急いで登つては走つて下りた。

「村を出た時は最早日が暮れて夕照ほのぐらひ頃であつた。村の夕暮のしきははは格別で、壯年男女は一日の仕事のしまひに忙がしく子供は薄暗い垣根の蔭や竈の火の見える軒先に集まつて笑つたり歌つたり泣いたりしてゐる、これは何處の田舎も同じことであるが、僕は荒涼たる阿蘇の草原から駆け下りて突然、この人寰に投じた時ほど、これらの光景に搏たれたことはない。二人は疲れた足を曳きずつて、日暮れて路遠きを感じながらも、懐かしいやうな心持で宮地を今宵の當に歩いた。

「一村離れて林や畑の間を暫らく行くと日はとつぷり暮れて二人の影が明白と地上に印するやうになつた。振向いて西の空を仰ぐと阿蘇の分派の一峰の右に新月が此窪地一帯の村落を我物顔に澄むで若味がついた水のやうな光を放てゐる。二人は氣がついて直ぐ頭の上を仰ぐと、晝間は眞白に立のぼる噴煙が月の光を受

て灰色に染つて碧琉璃の 大空を衝て居るさまが、いかにも凄じく又た美しかった。長さよりも幅の方が長い橋にさしかゝつたから、幸ら二人は噴煙のさまの様に變化するを眺めたり、聞くともなしに村落の人語の遠くに聞こえるを聞いたりしてゐた。すると二人が今来た道の方から空車らしい荷車の音が林なほに反響して虚空に響き渡つて次第に近いて來るのが手に取るやうに聞こえた。

「暫くすると期々な澄むだ聲で流して歩く馬子唄が空車の音につれて漸々と近づいて來た。僕は噴煙を眺めたまゝで耳を傾けて、此聲の近づくの待つともなしに待つてゐた。

「人影が見えたと思ふと一宮地やよいところぢや阿蘇山ふもとといふ俗語を長く引いて丁度僕等が立てゐる橋の少し手前まで流して來た其俗語の意と悲壯な聲とが甚麼に僕の情を動かしたらう。二十四五かと思はれる屈強な壯漢が手綱を牽いて僕等の方を見向きもしないで通つてゆくのを僕はぢつと睥視してゐた。夕月の光を背にしてゐたから其横顔も明亮とは知れなかつたが其逞しげな體軀の黒い輪廓が今も僕の目の底に残つてゐる。

「僕は壯漢の後影をぢつと見送つて、そして阿蘇の噴煙を見あげた。「忘れ得ぬ人々」の一人は則ち此壯漢である。

「其次は四國の三津ヶ濱に一泊して涼船便を待つた時のことであつた。夏の初めと記憶してゐるが僕は朝早く旅宿を出て涼船の來るのは午後と聞たので此港の濱や町を散歩した。奥に松山を控へてゐる丈け此港の繁盛は格別で、分けても朝は魚市が立つので魚市場の近傍の雑沓は非常なものであつた。大空は名残なく晴れて朝日麗らかに輝き、光る物には反射を興へ、色あるものには光を添へて雑沓の光景を更らに殷々しくしてゐた。叫ぶもの呼ぶもの、笑聲嬉々として此處に起れば、歡呼怒罵亂れて彼方に湧くといふ有様で、賣るもの買ふもの、老若男女、何れも忙しさうに面白さうに嬉しさうに、駆けたり追つたりしてゐる。露店が並んで立食の客を待つてゐる。賣つてゐる品は言はずもがなで、喰つてゐる人は大概船頭船方の類にきまつてゐる。鯛や比良日や海鯨や章魚が、其處らに投げ出してある。腥い臭が人々の立騒ぐ袖や裾に煽られて鼻を打つ。

「僕は全くの旅客で此土地には縁もゆかりも無い身だから、知る顔も無ければ見覚えの禿頭

もない。其處で何となく此等の光景が異様な感起させて、世の様を一段鮮かに眺めるやうな心地がした。僕は殆んど自己を忘れて此雑沓の中をぶら／＼と歩るき、やゝ物靜なる街の一端に出た。

「すると直ぐ僕の耳に入つたのは琵琶の音であつた。其處の店先に一人の琵琶僧が立つてゐた。歳の頃四十を五ツバツも越たらしく、幅の廣い四角な顔の丈の低い肥満した漢子であつた。其顔の色、其眼の光は恰度悲しげな琵琶の音に相應しく、あの咽ぶやうな絲の音につれて諳ふ聲が沈んで濁つて流れてゐた。巷の人は一人も此僧を顧みない、家々の者は誰も此琵琶に耳を傾ける風も見せない。朝日は輝く浮世は忙はしい。

「しかし僕はぢつと此琵琶僧を眺めて、其琵琶の音に耳を傾けた。此道幅の狭い軒端の端はな、而も忙しさうな巷の光景が此琵琶僧と此琵琶の音とに調和しない様で而も何處に深い約束があるやうに感ぜられた。あの嗚咽する琵琶の音が巷の軒から軒へと漂つて勇ましくな賣聲や、かしましい鐘の音と雜ざつて、別に一道の清泉が濁波の間を滑つて流れるやうなのを聞いてゐると、嬉れしさうな、浮き／＼し

た、面白ろさらな、忙しさうな類つきをしてゐる巷の人々の心の底の絲が自然の調をかなでてゐるやうに思はれた、一忘れぬ人々の一人は則ち此琵琶僧である。

此處まで話して来て大津は靜かに其原稿を下に置いて暫く考へ込むでゐた。戸外の雨風の響は少しも衰へない。秋山は起き直つて、

「それから、
「もう止さう、餘り更けるから。未だ幾らもある。北海道歌志内の鐵夫、大連灣頭の青年漁夫、番匠川の楠ある舟子など僕が一々北原繪にある丈を詳はしく話すなら夜が明けてしまふよ。兎に角、僕がなぜ此等の人々を忘るゝことが出来ないかといふ、それは憶ひ起すからである。なぜ僕が憶ひ起すだらうか。僕はそれを君に話して見たいがね。

「要するに僕は絶えず人生の問題に苦しむでゐながら又た自己將來の大望に厭せられて自分で苦しんでゐる不幸な男である。

「そこで僕は今夜のやうな晩に獨り夜更に燈に向つてゐると此生の孤立を感じて堪へ難いほどの哀情を併ほして来る。その時僕の自我の角がぼきり折れて了つて、何んだか人懐かしくなつて来る。色々の古い事や友の上を考へだ

す。其時泫然として僕の心に浮むて来るのは則ち此等の人々である。さうでない、此等の人人を見た時の周圍の光景の裡に立つ此等の一人である。我れと他と何の相違があるか、皆な是れ此生を天の一方地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、相携へて無窮の天に歸る者ではないか、といふやうな感が心の底から起つて来て我知らず涙が頬をつたふことがある。其時は實に我もなければ他もない、ただ誰れも彼れも懐かしくつて、忍ばれて来る。

「僕は其時ほど心の平穩を感じることはない、其時ほど自由を感じることはない、其時ほど名利競争の俗念消えて總ての物に對する同情の念の深い時はない。

「僕はどうかして此題目で僕の思ふ存分に書いて見たいと思つてゐる。僕は天下必ず同感の士あることゝ信ずる。」

其後二年経過した。

大津は故あつて東北の或地方に住つてゐた。

溝口の旅宿で初めて遇つた秋山との交際は全く絶えた。恰度、大津が溝口に泊つた時の時候であつたが、雨の降る晩のこと、大津は獨り机に向つて冥想に沈むでゐた。机の上には二年前秋山に示した原稿と同じの「忘れぬ人々」

が置いてあつて、其最後に書き加へてあつたのは龜屋の主人に、あつた。
「秋山」では無かつた。

(明治三十年二月)

鹿

狩

「鹿狩に連れて行かうか」と中根の叔父が突然に言ったので僕は狼狽した。「面白いぞ、連れて行かうか。」人の善い叔父はにこ〜しながら勧めた。

『だつて僕は鐵砲が無いもの。』

「あは〜、馬鹿を言つてる。お前に鐵砲が打てるものか、たゞ見物に行くのだ。」

僕は此時やつと十二であつた。叔父が笑ふのも道理で、鹿狩どころか雀一ツ自分で打つことは出来ない、しかし鹿狩の面白ろい事は幾度も聞いてゐるから、僕はお伴をすることにした。

十二月の三日の夜、同行のものの中根の家に集ることになつてゐた故僕も叔父の家に出かけた、母上は危険からうと止めにかゝつたが、父上は「勇壯活潑の氣を養ふためだから行け」と仰つた。

中根へ行つて見ると最早人が餘程集つて居た。見物人は僕一人、少年も僕一人、あとは三十から上の人はばかりで十人計り皆な僕の故郷では上流の人たちであつた。

第一中根の叔父が銀行の頭取、其外に判事さんも居た、郡長さんもゐた、狭い土地であるから兼ねて此等の人々の交際は親密であるだけ、今人々の談話を聞くと随分粗暴であつた。

玄關の六疊の間に洋燈が一つ釣つてあつて、火桶が三つ四つ出して有る、其周圍に二人三人づゝ寄つてゐて笑ふやら罵るやら煙草の煙がぼらつと立こめて居た。

今井の叔父さんが皆なの中でも一番聲が大きい、一番元氣がある、一番面白ろさうである、一番肥満つてゐる、一番年を取つてゐる、僕に一番氣に入つてゐた。

同勢十一人、夜の十時頃町を出發た。町から小一里も行くとかの字港に出る、そこから船でつづの字崎の浦まで海上五里、夜のうちに乗つて、天明にさの字浦に着く、それから鹿狩を初めるといふのが手順であつた。

「丸で山賊のやうだ！」と今井の叔父さんが其太い聲で笑ひ乍ら怒鳴つた。成程、一同の様子を見ると尋常でない。各々粗末な面も丈夫さ

らな洋服を着て、草鞋脚絆で、鐵砲を各手に持つて、色々な帽子を冠つて——どうしても山賊か一揆の夜討位にしか見えなかつた。

しかし一通りの山賊でない、岡太い山賊で、かの字港まで十人が勝手次第に饒舌つて、随分やかましかつた。僕は一人、仲間外れにされて黙つて、皆なその後から皆な饒舌るのを聞き乍ら歩いた。

大概は獵の話であつた。そして重に手柄話か失敗話であつた。そして矢張り、今井の叔父さんが一番面白いことを話して皆んなを笑はした。皆んなが笑はない時には自分一人で大聲で笑つた。

かの字港に着くと、船頭が最早用意をして待つてゐた。寂寞い小さな港の小さな波止場の内から船を出すと直ぐ帆を張つた、風の具合が宜いので船は少し左舷に傾きながら心持よく馳つた。

冬の寒い夜の暗い晩で、大空の星の数も讀まると計りに鮮かに、舳で水を切てゆく先は波暗く島黒く、僕はこの晩のことを忘れることが出来な

い。船のなかでは酒が初まつた。そして談話は同じく獵の事で、自分は面白ろいと思つて聞いて居

たが何時しか寝て了つた。それは悪やかな罪のない眠で、夢とも現ともなく、鉦鼓を叩く水の音の、その柔かな私語くやうな節々はコロコロと笑ふやうなのを直ぐ耳の下の板一枚を隔て、聞き其心地よさ。時々眼を開けて見ると薄暗い鉦鼓の朧ろげな光の下に圓坐を組むで叔父さん達は愉快にやつて御座る。又た中には酔つて饒舌りくたぶれて鉦側にもたれ乍らうつらうつらと眠つてゐる者もある。相變らず元氣のいゝのが今井の叔父さんで、

『君の鐵砲なら一つで外れたら直ぐ後の一つで打つことが出来るが僕のはさう行かないから困る、なアに、中るやつなら一發で中るからなア』と言つて『あは、ム、ム』と笑つた。

判事の岡さんが何か言つて叔父さんを冷かしたやうであつたが僕は眠つて宜く聞き取れなかつた。

『徳さん〜』と呼ぶ聲がしたと思ふと、太い手が僕の肩を揺つた。僕は直ぐ今井の叔父さんだなと思つた。『徳さん、起きた〜、着いたぞ、さア起きた。』

『眠むいなア。』僕は實際眠かつた。しかし人々が上陸の用意をするやうだから、眼をこすりこすり起きて見ると直ぐ僕の眼に付たのは鎌のやうな月であつた。

船は陸とも島とも分らない山の根近く来て帆を下ろしてゐた。陸の方では燈火一つ見えないで、磯をたゞ波の音がするばかり、暗く寂としてゐる。そして寒氣は刺すやうで、山の端の月の光が氷でゐるやうである。僕は何とも言へなく物凄さを感じた。

船が漸々磯に近くに連れて陸上の様子が少しは知れて来た。此處は兼ねて聞てゐたさの字浦で、つの字崎の片隅であつた。小さな棧橋、棧橋とは言へないのが磯に出来てゐる。船を其に着けて吾等皆な上陸した。

たつた一軒の漁師の家がある、しかし一軒が普通の漁師の五軒ぶりもある家で吾等一組が山賊風でどさ〜入つていくと兼ねて通知して有つたこと、見え、六十ばかりの此家の主人らしい老人が挨拶に出た。

夜が明ける迄で此家で休息することにして、一同は其銃を卸すなど、彼是れ放寛いで東の白むのを待た。其間僕は爐の邊に臥そべつてゐたが、人々のうちには此家の若いもの等が酌むで出す茶碗酒をくび〜やつて居る者もあつた。シカシ今井の叔父さんは流石に倦憊れてか、大きな體軀を僕の傍に横へてぐう〜眠つて

了つた。爐の火が其膩きつた薪を赤く照らしてゐる。

戸外が漸々あかるくなつて来た。人々はそれはし初めた、たゞ今井の叔父さんは前夜不覺の體である。

僕は戸外へ飛び出した。夜見たよりも一段、蕭條たる海邊であつた。家の周圍は鉦が軒の高さ程につるして一面に乾してある。山の窪などには畑が作つてあつて其外は草ばかりで唯だ處々に松が一本二本突出つてゐる。僕はこんな處に鹿がゐるだらうかと思つた。

大空の色と残月の光とで今日の天氣がわかる。風の清いこと寒いこと、月の光の遠いこと空の色の高いこと！僕は必然今日は鹿が獲ると思つた。

『徳さん〜今井の叔父さんを起して呉れ』と誰れか家内で呼ぶから僕は歸つて見ると、皆んな出發に取りかゝつて居たが叔父さんばかり高軒で臥てゐる。僕は、『叔父さん〜』と肩を動揺つたがなかく起きない。頭髪を握つてぐい〜引ばつて漸と起した。此兒はひどい事をする』と言ひ乍ら大欠をして、『サア〜！一番鉦の功名を拙者が仕る、進軍だ〜』とわめいて眞先に飛出した。僕も

直ぐ其後に續いた。恰も從卒のやうに。爪先あがりの小徑を斜に、山の尾を横ぎつて登ると、登りつめた處がつの字崎の背の一部になつてゐて左右が海である、それより此小徑が二つに分れて一は崎の背を通し、其極端に至り一は山の彼方へ下りてなの字浦に出る。此三派の路の集つた處に一本の松が立てゐる。一同は此松の下に休息して、なの字浦の方から來る筈になつてゐた獵師の一組を待ち合はせてゐた。

朝日が日向灘から昇つてつづの字崎の半面は紅霞につゞまれた。茫々たる海の極は遠く太平洋の水と連りて水平線上は雲一つ見えない、又た四國地が波の上に鮮やかに見える。總ての眺望が高遠、壯大で、且つ優美である。

一同は寒氣を防ぐために盛んに焚火をして獵師を待てゐると暫くしてなの字浦の方の路から逞ましい獵犬が十頭ばかり現はれて其後に引續いて六人の獵師が異様な衣装で登つて來る、これこそ眞實の山城らしかつた。

其鐵砲は舊式で粗末なものであるが之れを使用する技術は多年の熟練でなかり巧みなのである。別して鹿狩に就てはつの字崎の地理に詳はしく犬を使ふことが上手ゆゑ、吾等一同

の叔父達と雖も、素人の仲間での黒人ながら、此連中に比べては先生と弟子の相違がある、されば鹿狩の上の手續など凡て獵師の言ふ處に從はなければならなかつた。

さて愈々獵場に踏み込むと、獵場は全く崎の極端に近い山で雜草荆棘生茂つた山の尾の谷である。僕は始終今井の叔父さんの傍を離れないことにした。

人よりも早く犬は獵場に驅け込むだ。僕は叔父さんと一所に山の背を通つてゐると、忽ち烈しく犬の吠える聲を聞いた。

『そら出た、そら彼處を見ろ、どうだ鹿だらう、どうだ、ウン早い、』と叔父さんの指す方を見ると、朝日輝く山の端を一匹の鹿が勢よく彼方へ走つてゆく、其後を餘程後れて二匹の犬、吠え乍ら追つかけて行く。

畫に書いた鹿や死むだ鹿は見たが、現に生た鹿が山を走るのを見たは僕これが始めてだから手を拍つて嬉こんだ。僕の嬉こぶ様を見て今井の叔父さんはにこ／＼笑つて御座つた。

『今に見ろ、彼の鹿を打つて見せるから。』

『だつて逃げて了つたから駄目だ。』

『何處へ逃げられるものか、山の彼方の方へ最早獵師が回つてゐるから』と叔父さんは頗る得意であつた。

さて叔父さん達の持場も定まつて、今井の叔父さんは、今鹿の逃げて行つた方の丘を受持つ事になつたから僕は叔父さんと二人して殆んど足も入れられないやうな草藪の中を掻き分け踏み分け漸の思で程よい處に持場の本陣を据ゑた。

『今に見ろ、此處に待てゐると鹿が逃げて來るから』と叔父さんは言つた。そこで僕は頻りと彼方の丘や此方の谷を眺めて鹿の來るのを待つて居た。

十五六人の人數と十頭の犬で廣い野山谷々を駆け廻はる鹿を打つとは頗る難かしい事やうであるが、元が崎であるから山も谷も海にかざられてゐて鹿とても左まで自由自在に逃げ廻はることは出来ない、又た人里の方へは、全然、高い壁が石で築て有つて畑の荒らされないやうにしてある故、其方へ逃げることも出来ない、更に又た鹿の通路は凡そ獵師に知れてゐるから、たとひ小人數でも大さへ能く狩り出して呉れば、之を打つに左まで難くはないのである。

そこで今井の叔父さんの持場も鹿の逃げ路に當てゐるので、鹿の來るのを待てゐるのも決して

て目的の無いのではない。

叔父さんは今に見ろ／＼と言つて頗る得意の笑を其四角な肥えた浅黒い顔に漲らして鐵砲をかまへて、きよろ／＼と見廻はして又た折耳を立て物音を聞て御座つた。

折々遠くで吠える犬の聲が聞こえた。折々人の影が彼方の山の背此方の山の尾に現はれては隠れた、日は麗らかに輝き、風はそよ／＼と吹き、かしこ此處の小藪が怪しげにざわついた。其度ごとに僕は眼を丸くした。叔父さんは銃を伸直した。

『オイ徳さん。』叔父さんは暫時して言つた、『今しがた銃の音がしたやうであつたが、彼の松のある處へ行つて見なさい、多分一ツ位最早獲てゐるかも知れない。』

僕は叔父さんの言つた處へ行つて見た。其處は僕等が今ゐた處から三四丁離れた山の尾の一段高くなつて頂が少し平な處であつた。果して一頭の鹿が松の枝の、僕の手が届き兼ねる處に釣下げてあつた、そして其處には誰も居なかつた。僕は少年心に少し薄氣味悪く思つたが、松の下に近づいて見ると角のない奴の左まで大きくない鹿で、股に銃丸を受けてゐた。僕は氣の毒に思つた、其柔和な顔つきの未

だ生々した處を見て、無残にも四足を縛られたまゝ松の枝から倒に下つてゐる處を見ると可愛さうでならなかつた。

忽ち小藪を分けてやつて來たのは獵師である。僕を見て、

『坊様、今に馬のやうなのが取れますぞ。』

『未だ取れるだらうか。』

『まだ／＼今日は十四は取れますぞ。』

しかし僕は信じなかつた。十四も取れたら持つて歸ることが出来ないと思つた。獵師は岩に腰を掛けて煙草を二三ぶく吸つてゐたが谷の方で呼子の笛が鳴ると直ぐ小藪の中に隠れて何處かに行つて了つた。僕も急いで叔父さんの處へ歸つて來ると、

『どうだ、取れてゐたか、さうだらう、今に見ろ此處で大きな奴を打つて見せるから。』

彼れは是するうち晝時分になつたが鹿らしいものも來ない。忽ち谷を一つ越えた直ぐ彼方の山の尾で銃の音がしたと思ふと白い煙が見えた。叔父さんも僕もキツとなつて其方を見ると、三人の人影が現はれて、其一人が膝を突て續けさまに二發三發四發と打出した。續て犬が烈しく吠えた。

『せらく海を海を、最早しめた、海を見る、

海を。』叔父さん躍り上がった叫んだ、試行、一寸と見ると何物とも判然しないが、頗りに海を泳ぐ者がある。見てゐるうちに小舟が一艘、磯を離れたと思ふと、舟から一發打ち出す銃音に、遊いでゐた者が見えなくなつた。暫時して小舟が磯に還つた。

『今のは太さうな奴だな、フン、甘い。』叔父さん獨語を言つて上氣嫌である。

『徳さん、腹が減たか。』

『減つた。』

『辨當をやらかさうか。』

そこで叔父さんは辨當を出して二人、草の上足を投げだして喰ひはじめた。僕は此時ほど甘く辨當を食つたことは今までに無い。叔父さんは瓢箪を取出して獨酌をはじめた。さも甘さうに舌打して飲んで御座つた。

『これで乃公が一つ打つと一層酒が甘い。今に見ろ大きな奴を打つて見せるぞ。』瓢箪を振つて見て『その時のに残して置かうか。』

さて辨當を喰ひ了つて、叔父さんは其處にござりと横になつた。此時は恰度午、一時ごろで冬ながら南方温暖の地方ゆゑ、小春日和の日の中のやうで、うらくと照る日影は人の心も筋も融けさうに生あたまかに、山にも枯草雜りの青

葉少なからず日の光に映じてそよ吹く風にきらめき、海の波穏やかな色は雲なき大空の色と相映じて蒼々茫茫、東は際限なく水天互に交はり、北は四國の山々手に取るが如く、更に日向地は右に伸びて其南端を微淡煙浪のうちに抹し去る、僕は少年心にも此の美しい景色を眺めて、恍惚として居たが、何時しか眼瞼が重くなつて来た。傍を見ると叔父さんは酒が順たか銅色の顔を目の方に向けたまゝグウ／＼と喘息をかいてゐた。

此時、小藪を分けて此方に近く者がある、僕はふと其方を見ると、直ぐ其處の小藪の上に枝のある大きな鹿の角が現はれてゐた。鹿だ！僕はどう爲ようかと思つた。叔父さんを起さうとしたが止めた、起すと叔父さんが必定「何だ何だ」と大きな聲を出す、鹿が逃て了ふ、僕は思はず、叔父さんが小松に立てかけて置いた銃をソツと把た。

鹿は少しも人の居るに氣が付かぬかして、小藪の蔭を閉に歩いて此方に近いて来た。手をのばせば銃端が届きさうな處に来て立ち止つた。草藪の蔭で其體はよく見えぬが角ばかりを見た處で非常な大鹿らしい。僕の胸はワク／＼して来た、何故叔父さんを

起さなかつたかと悔むだが最早遅い。十二の少年が銃を把て小馬程の鹿に差し向けた様は如何に可笑かつたやらうか。

しかし僕は戦慄ふ手に力を入れて搬機を引いた。ズドンの音と共に僕自身が後ろに倒れた。叔父さんが飛び起きた。

「何だ／＼危険ない！ 何したツ？」と掬ふやうにして僕を起した。僕は其儘小藪のなかに飛び込んだ。そして叔父さんも續て飛び込むだ。

「打たな！」と叔父さんは鹿を一日見て叫んだ。そして何とも形容のしやうの無い妙な笑を眼元に浮べて僕に抱き付いた。そして眼のうちには涙を浮べてゐた。

* * * * *

此日は獵師が言つた程の大獵では無かつたが併し六頭の鹿を獲て、先づ大獵の方であつた。そして僕のうつた鹿が一番大きかつた、今井の叔父さんは歸り路僕を傍から離さないで、無暗に僕の冒險を褒めた。歸路は二組に分れ一組は船で歸り、一組は陸を徒歩で歸ることにして、僕は叔父さんが離さないで陸を歸つた。

陸の組は叔父さんと僕の外、判事さんなど五人であつた。うの字峠の坂道を來ると、判事さ

んが、ちよつと立止まつて、溪流の岩の上に止つてゐた小さな眞黒な鳥を打つた。僕が走つて行つて之を拾うて來て判事さんに渡すと、判事さんは何か小聲で今井の叔父さんに言つたが、叔父さんは眞面目な顔をして「難有う」と言つて今の鳥を受取つた。僕は不思議に思つたばかりで其時は何の事だか解らなかつた。

其後二月ばかり經つた。其間僕は毎日のやうに今井の叔父さんの家に遊びに行つて、叔父さんの鳥打には必定お作をした。或日僕の父上が外から歸つて來て、今井の鐵也さんが鐵砲腹をやつた」と仰しやつて、母上を初め僕も吃驚した。

鐵也さんといふのは今井の叔父さんの獨子で、不幸にも四五年前から氣が狂つて、亂暴は働かないが全くの癡人であつた。其頃鐵也さんは二十一で、若し満足の人なら叔父さんのためには將來の希望であつた。しかるに叔父さんも其希望が全く無くなつたが爲に、殆ど自棄を起して酒も飲めば遊獵にも耽ける、何處となく自分までが狂氣じみた風に爲られた。それで僕の父上を始めみんな大變に氣の毒に思つてゐられたのである。

處が突然鐵也さんが鐵砲腹をやつて死んで

了つた、獵人は獵人であるが矢張り子に相違ない、これまでに狂氣の快復るといふ薬は何んでも試みて、うの字峠の谷で打つた岩鳥も畢竟は狂氣の薬であつたさうである。それが今は無残の最後を遂げて最早叔父さんの望は全く絶えて了つた。

僕は一月ばかり叔父さんの處に行かなかつた。叔父さんの顔を見るのが氣の毒さに。さうすると或日、僕が學校から歸宅つて見ると、今井の叔父さんが來てゐて父上も奥の座敷で何か話をして御座つた。其夜、父上と母上が大變眞面目な顔をして兄上と何かこそく相談をしたやうであつた。

そして僕は今井に養子に貰はれた。叔父さんが僕の父上になつた、僕は其後何度もお件をして獵に行つたが、岩鳥を見つけるとソツと石を拾つて追つて呉れた、義父が見ると氣嫌を悪くするから。

人の善い優しい、そして勇氣のある剛膽な、義理の堅い情深い、そして氣の毒な義父が亡くなつてから十三年忌に今年が當る、由て記念のために少年の時の鹿狩の物語をしました。

(明治三十一年八月)

(一)

今より四年前の事である、(と或男が話した) 自分は何かの事でも銀座を歩いて居ると、或四辻の隅に一人の男が尺八を吹いて居るのを見た。七八人の人が其前に立て居るので、自分もふと足を止めて聴く人の仲間に加はつた。

頃は春五月の末で、日は西に傾いて西側の家並の影が東側の家の礎から二三尺も上に這ひ上つて居た、それで尺八を吹く男の腰から上は鮮かな夕陽に照されて居たのである。

夕暮近いので、街は一層の雑踏を極め、鐵道馬車の往來、人車の東西に駆けぬける車輪の音、途を急ぐ人足の響きなど、四方は騒然然として居た。此騒がしい場所の騒がしい時に彼男は悠然と尺八を吹いて居たのである。それであるから、自分の目には彼が半身に浴びて居る春の夕陽までが如何にも靜かに、穩やかに見えて、彼の尺八の音の達く限り、其所に悠々たる一寰區が作られて居るやうに思はれたので

ある。

自分は彼が吹き出づる一高一低、絶えんとして絶えざる哀調を聴きながらも、熟々彼の姿を看た。

彼は盲人である。年頃は三十二三でもあらうか、日に焼けて黒いのと、垢に埋れて汚ないのとで年も確とは判じかねるほどであつた。たゞ汚ないばかりでなく、見るからして彼は甚だ憔悴て居た、思ふに晝は街の塵に吹き立てられ、夜は木賃宿の隅に垢染た夜具を被るのであらう。容貌は長い方で、鼻も高く眉毛も濃く、額は櫛を加へたこともない蓬々とした髪で半ば被はれて居るが、見たところ程能く發達し、よく下品な人に見るやうな骨張つた無下に凸起した額ではない。

音の力は恐ろしい者で、如何な下等な男女が弾吹しても、聴く方から思ふと、何となく彈吹者其人までをゆかしく感ずるものである。殊に此盲人は其のむさがるしい姿に反映して何處となく人品の高いところがあるので、猶ほ更ら

自分の心を動かした、恐らく聴いて居る他の人も同感であつたらうと思ふ。其吹き出づる哀樂の曲は彼が運命強なき身の上の舊歡今悲を語るが如くに人々は感じたであらう。聴き捨てにする人は少なく、一錢二錢を彼の手に握らして立去るが多かつた。

(二)

同じ年の夏である。自分は家族を連れて鎌倉に暑を避け、山に近き一小屋を借りて住んで居た、或夜のこと、月影殊に冴て居たので獨り散步して濱に出た。

濱は書間の賑ひに引きかへて、月の景色の妙なるにもかゝはらず人出少し。自分は小川の海に注ぐ汀に立つて波に碎くる白銀の光を眺めて居ると、何處からともなく尺八の音が微に聞えたので、四邊を見廻はすと、笛の音は西の方、程近いところ、漁船の多く曳上げてある邊から起るのである。

近いて見ると、果して一般の小舟の水際より四五間も曳上げてあるを其周圍を取り巻いて、或者は舷に腰かけ、或者は砂上に蹲居り、或者は立ちなど、十人あまりの男女が集まつて居る、其中に一人の男が舷に倚つて尺八を吹

いて居るのである。

自分は、人々の群よりは、離れて聴いて居た。月影は、こんもりと此一群を映して居る、人は一語を發しないで耳を傾けて居た。今しも一曲が終はつたらしい、聴者の三四人は立ち去つた。餘の人々は次の曲を待つて居るけれど吹く男は尺八を膝に突き首を垂れたまゝ身動きも仕ないのである。斯して又四五分も経つた、他の三四人が又立ち去つた。自分は小舟に近いた。

見ると残つて居る聴者の三人は濱の童の一人、村の若者の二人のみ、自分は舷に近く笛吹く男の前に立つた。男は頭を上げた。思ひきや彼は此春、銀座街頭に見たる其盲人ならんとは。されど盲人なる彼れの盲目ならずとも自分を見知るべくもあらず、暫時自分の方を伺いて居たが、やがて又た吹き初めた。指端を弄して低き音の縷の如きを引くこと暫し、突然中止して船端より下りた。自分は卒然、

『盲人さん、私の宅に来て、少し聞かして呉れんか。』

『へい、へい』と彼は驚いたやうに言つて急に自分の顔を見て、そして又頭を垂れ首を傾け『へい、何處様へでも参ります。』

『ウン、それぢや来てお呉れ』と自分は先に立つた。

『お前の眼は全く見えなにかね』と四五歩にして振り返りさまた自分は問うた。

『い、エ、右の方は少し見えるので御座います。』

『少しでも見えれば結構だね。』

『へエ、へ、へ、』と彼は軽く笑つたが『イヤなまじすこしばかり見えるのも能く御座いません、然が生まれてな。』

『オイ橋だぞ』と溝にかけし小橋に注意して『けれども全く見えなくちやアこんなところまで来て稼ぐわけにゆかんではないか。』

『稼ぐのなら宜う御座いますが流がすので。』

『。』

『お前何處だい、生れは。』

『生れは西で御座います、へい。』

『私はお前を此春、銀座で見たことがある、如何いふものか其時から時々お前のことを思ひ出すのだ、だから今もお前の顔を一目見て直ぐ知つた。』

『へい左様で御座いますか、イヤもう行き當りばつたりで足の向き次第、國々を流して歩くので御座いますから何處で何誰様に逢ひます事

やら。』

途で二三の年若い男女に出遇つた。紅雲一片月をかざしたので四邊は眩暈になつた。手風琴の軽い調子が高い窓から響く。間もなく自分の宅に着いた。

（三）

縁邊に席を與へて、先づ麥湯一杯、それから一曲を所望した。自分は尺八の事には全然素人であるから、彼が吹く其曲の善悪、彼の技の巧拙は解らないけれども、心をこめて吹く其音色の脈々として我に迫る時、われ知らず波動したのである。泣かんか、泣くには餘に悲哀深し、吹く彼れは抑も何の感ずることなきか。

曲終れば、音を賣るものゝ常として必ず笑み、必ず謙遜の言葉の二三を吐くなるに反して、彼は默然として控へ、今しも我が吹き終つた音の虚空に消えゆく、消えゆきし、其跡を逐ふかと思はるゝ許りであつた。

自分は彼の言葉つき、其態度に依り、初より其身の上に潜める物語りのあるべきを想像して居たから、遠慮なく切りだ

『尺八は本式に稽古したのだらうか、失敬なことを聞くが』

『イヤ、エ左様ではないので御座います、全く自己流で、たゞ子供の時から好きで吹き慣らしたといふばかりで、人様にお聞かせ申すものではないので御座います、へい。』

『イヤさうでない、全く巧妙いものだ、これほど技があるなら人の門を流して歩かないでも弟子でも取つた方が楽だらうと思ふ、お前獨身者かね?』

『へい、親もなければ妻子もない氣樂な孤獨者で御座います、へッへ、へ、へ。』

『イヤ氣樂でもあるまい、日に焼け雨に打れ、住むところも定まらず國々を流れゆくなどは餘り氣樂でもなからうぢやアないか。けれどもいづれ何か理由のあることだらうと思ふ、身の上話を一ツ聞かして貰ひたいものだ』と思ひ切つて正面から問ひかけた。人の不幸や、零落につけこんで、其祕密まで聞かうとするのは、決して心あるものゝすることではないとは承知しながらも、彼に二度まで遇ひ、其遇うた場所と趣とが少なからず自分を動かしたために、それらを顧慮することが出来なかつたのである。

『へい、お話ししても可しう御座います。今日は如何いふものか頻りと子供の時の事を想ひだして、先程も別荘の坊様達がお庭の中で聲を揃へ

て唱歌を歌つてお居でになるのを聞いた時何だか泣きたくなりしました。

私の九十の頃で御座います、能く母に連れられて城下から三里奥の山里に住んで居る叔母の家を訪ねて、二晩三晩泊つたもので、今日も恰度その頃のことを久ぶりで思ひ出しました。今思ふと、私が十七八の時分他が尺八を吹くのを見て、心を掃られるやうな氣がしましたが今私が九や十の子供の時を想ひ出して堪なくなるのと恰度同じ心持で御座います。

父には五の歳に別れまして、母と祖母との手で育てられ、一反ばかりの廣い屋敷に、山茶花もあり百日紅もあり、黄金色の荔枝の實が袖垣に下つて居たのは今も眼の先にちらつきます。家と屋敷ばかり廣うても貧乏士族で實は喰ふにも困る中を母が手内職で、子供心には何の苦勞もなく日を送つて居たので、ういます。

母も心細いので、山家の里に時々歸へるのが何よりの樂み、朝早く起きて、淋しい士族屋敷の杉垣ばかり並んだ中をとぼくと歩るきだす時の心持は何とも言へませんでした。山路三里は子供には少し難儀で初めの中こそ母よりも先に勇ましく飛んだり跳ねたり、田溝の鮎に石

を投げたりして参りますが峠にかゝる半程で問たれて了ひました。それを母が勵まして絶頂の茶屋に休んで峠餅とか言ひまして茶屋の婆が一人定めの名物を喰はして貰ふのを樂みに、又一呼吸の勇氣を出しました。峠を越して半程まで来ると、直ぐ下に叔母の村里が見えます、春さきは狭い谷々に霞が靨鬱いて書のやうで、ムいしました、村里が見えると最早判着た氣で其處の路傍の石で一休しまして、母は煙草を吸ひ、私は山の岸から落る清水を飲ました。

叔母の家は古い郷土で、其頃は大部分家産が傾いて居たさうですが、それでも私の目には大變金持のやうに見えたので御座います。太い大黒柱や、薄暗い米倉や、藁の這ひ上つた練堀や、深い井戸が私には皆な難有かつたので、下男下女が私のことを城下の旦那様と言つてくれるのがうれしかつたので御座います。

けれども何より嬉しくつて今思ひだしても堪りませんのは同じ年輩の従兄弟と二人で遊ぶことでした。二人は能く山の峽間の溪川に山鱒を釣りに行つたもので、山岸の一方が淵になつて蒼々と湛へ、此方は浅く瀬になつて居ますから、私共は其瀬に立つて糸を淵に投込んで釣るので御座います。見上げると、兩側の山

は切削だやうに突立つて、それに雑木や楮松が暗く茂つて居ますから、下から瞻ると空は帯のやうなのです。聲を立てると山に響いて山が唸ります、黙つて釣つて居ると森として居ます。或日兩人は餘念なく釣つて居ますと、何時の間にか空が變つて、嵐と雨が降て来ました。ところが其日は殊によく釣れるので二人とも歸らうと言はないのです。太い雨が竿に中る、水面は水烟を立て、雨が跳る、見あげると雨の足が山の絶頂から白い絲のやうに長く條白を立て、落るので、衣服はびしよぬれになる、これは大變だと思ふ矢先に、グイ／＼と強く絲を引く、上げると尺にも近い山鱒の紫と紅の條のあるのが釣れるので、暴るやつをグイと握つて籠に押込む時は、水に住む魚までが此雨に濡れて他の時よりも一倍鮮かです。新しいやうに思はれました。

「最早歸らうか」と一人が言つて此方を一寸向きますが、直ぐ又た水面を見ます。「歸らうか」と一人が答へますが、これは見向きません、實際何を自分で言つたのかまるで夢中なので、其内に雷が直ぐ頭の上で鳴りだして、それが山に響いて山が破裂するかと思ふやうな凄音がして来たので、二人は物をも言はずに籠を提るが早いかドン／＼逃げだしました。途中まで来ると下男が迎に来るのに逢ひました。家が歸ると叔母と母とに叱られて、籠を井戸邊に投げ出したまゝ、衣服を着更へ直ぐ物置のやうな二階の一室に入り小さくたつて、源平盛衰記の古本を出して畫を見たものです。けれども母と叔母は對坐で居ても決して笑ひ轉げるやうなことはありません、二人とも言葉の少ない、物案じ顔の、色彩の悪い女でしたが、何か優しい低い聲でひそ／＼話し合つて居ました。一度は母が泣顔をして居る傍で叔母が涙ぐんで居るのを見ましたが、私は別に氣にも留めず、たゞ一寸可恐いやうな氣がして直ぐと茶間を飛び出したことがありました。私は七日も十日も泊つて居たいので、ひますので仕方なしに歸るので、一度は一人残つて居ると強情を張りましたので、母だけ先に歸りましたが、私は日の暮かゝりに縁先に立つて居ますと、叔母の家は山に據つて高く築きあげてありますから山里の暮れゆくのが見下されるです。西の空は夕日の餘光が水のやうに冴えて、山々は薄墨の色にぼけ、蒼い烟が

谷や森の裾に浮いて居ます、何だか裏悲しくなりました。寺の鐘までが平時とは違ふやうに聞え、其長く曳く音が谷々を渡つて遠く消ゆくの聞きましたら、急に母が慙しくなつて、何故一所に歸らなかつたらう、今時分は家に着て祖母さんと何か話して御座るだらうなど思ひますと堪らなくなつて叔母にこれから直ぐ歸へると云ひだしました。叔母は笑つて取合つて呉ません、其中に燈火が點く、従兄弟と挾將棋をやるなどする中に何時か紛れて了りましたが、次の日は下男に突られ直ぐ家に歸りました。又た母と一しよに歸る時など、二人とも出かける時ほどの元氣はありませんで、峠を越す時、母は幾度となく休みます。思ひ出しますのは其時の母の顔で御座います。石に腰を卸してほと呼吸を吐いて言ふに言はれん悲しげな顔容を仕ます、其顔容を見ますと私までが子供心にも悲しいやうな氣がしまして黙つてつくねんと母の傍に腰をかけて居るので、さうすると母が、「お前腹が減きはせんか、腹が減いたら餅をお喰べ、出して上げようか」と言つて合財囊の口を開かけます。私が、「腹は減ない」と言へば、「そんなことを言はないで一つお喰べ、母親も喰べるから」と言つて無理に餅を呉れま

す。さうされますと、私は何故か尙ほ悲しくなつて、母の膝にしがみ附いて泣きたいほどに感じました。

私は今でも母が戀しくつて戀ひしくつて堪らんのでムいます。」

盲人は懷舊の念に堪へずや、急に言葉を止めて頭を垂れて居たが、暫時して聽者の誰人なるかは既に忘れ終てたかの如く熱心に

「けれどもこれは當然でムいます、母は全然私のために生て居ましたので、一人の私をたゞ無暗と可愛がりました。めつたに叱つたこともありません、たまさか叱りましても直ぐに母の方から謝罪のやうに私の氣嫌を取りました、それで私は我儘な剛情者に育ちましたかと言ふにさうではないので、腕白者のすることだけは一通りやりながら氣が弱くて女のやうなところがあつたのでムいます。

これが昔氣負の祖母の氣に入りません、やゝともすると母に向ひまして、

「お前が餘り優しくするから修藏までが氣の弱い兒になつて了ふ。お前からして今少し毅然して男は男らしく育てんと不可ませんぞ」とかく言つたものです。

けれども母の質として如何しても男は男

らしくといふやうな烈い育て方は出来ないのです。たゞ無暗と私が可愛いので、先から先と私の行末を考へては、それを幸福の方には取らないで、不幸なことがかりを想ひ、一層私がふびんで堪ないのでムいました。

或時、母は私の行末を心配する餘りに、善教といふ寺の傍に店を出して居た怪しい賣卜者の所へ私を連れて参りました。

賣卜者の顔は能く憶えて居ります、丸顔の眼の深く落ちこんだ小さな老人で、顔容は薄氣味悪うムいましたが母と話をする其言葉つきは大變に優しくつて丁寧で、

「ア、左様かな、それは心配なことで、御尤も御尤も、能く私が卜て進めます」といふ調子でムいました。

老人は私の顔を天眼鏡で覗いて見たり、窠竹をがちや／＼いはして見たり、まるで人相見と八卦見と一所にやつて居ましたが、やがてのこと、

「イヤ御心配なさるな、此の兒さんは末は必然出世なさるゝ、よほど好い人相だ。けれど一つの難がある、それは女難だ、一生涯女に氣をつけてゆけば必然立派なものになる」と私の頭を撫でまして、「むゝ、好い兒だ」と繁々私

の顔を見ました。

母は大喜びに喜びがまして家に歸へるや直ぐと祖母にこの事を吹聴しました處が祖母は笑ひながら、

「男は劍難の方が、だ男らしいぢやないか、この兒は色が白うて弱々しいから其で卜者から女難があると言はれたのぢや、けれども今から女難もあるまい、早くて十七八、遅くとも二十

ごろから氣をつけるが可い」と申しました。

ところが私には其時十二でした。最早女難があつたので御座います。

こゝまでお話したのでムいますから、これから私の女難の二つ三つ懺悔いたしませう。賣卜者はうまく私の行末を卜ひ當てたのでムいます。

その頃、私の家から三丁ばかり離れて飯塚といふ家がムいましたが其處の娘におきよと申しまして十五ばかりの背のすらりとして可愛らしい兒が居ました。

其兒が途で私を見ると必然我家に遊びに来いと言ふのです。私も初の中は行きませんが、一時間が餘り度々言ふので一度参りますと、一時間も二時間も止めて還さないで膝の上に抱き上げたり、頸にかぢりついたり、頭の髪を丁寧

に

に掻き下して猶ほ可愛くなつたと其柔かな頬を無理に私の顔に押しつけたり、色々な眞似をするので御座います。

さらすると私もそれが嬉れしいやうな気がして、その後は度々遊びに出かけて、おさよの顔を見ないと物足りないやうになりました。

その中、賣卜者から女難のことを言はれ、母からは女難といふことの講釋を聞かされたので、子供心にも、若しか今のが女難ではあるまいかと、甚く可恐くなりましたが、母の前では顔にも出さず、ない／＼心を痛て居ながらも時々おさよの許に遊に参りましたので、今から思ひますと、矢張そのころ私はおさよを慕うて居たに違ひないので、おさよが私を抑て赤兒扱ひにするのを私は表面で嫌がりながら内々はうれしく思ひ、其温たかな柔かい肌で押しつけられた時の心持は今でも忘れないので、居たといつても宜しういませう。

母は毎日のやうに、女は可恐ものだといふ講釋をして聽し、色々と言ひ、城下の若い者の身の上などを例に引いて話すので、安珍清姫のことまで例に引きました。

外面如菩薩内心如夜叉などいふ女句は耳にたこの出来るほど聞かされて、何んでも若い女と見ら鬼か蛇のやうに思ふが可い、親切らしいことを女が言ふのは皆な欺すので、うかと思ふ口に乗らうものなら直ぐ大難に罹りますぞよといふのが母の口癖でありましたので、私は少しも疑ひませんでした。それですからおさよも事に依つたら内心如夜叉ではないかと可恐がりながらも、自分で言譯を作らへて、おさよさんは未だ子供だし自分も未だ子供だからそんな可恐ことはない、おさよさんが自分を可愛がるのは眞實に可愛がるので決して欺すのぢやあないと斯ういふ風に考へて居たので、

ところが或日、日の暮に飯塚の家の前を通るとおさよが飛び出して来て、私を無理に引張り込みました。そして何故此四五日遊びに来なかつたと聞きますから、風邪を引いたといひますと、其は大變だ、最早癒つたかと、私の顔を覗きこんで、未だ顔色が好くない、大事になさいよ、修さんが病氣になつたら私は死んで了ふといつて熱と私の眼を見るので、私は気が弱ういいますから斯ういはれますと何だか

うれしいやら悲しいやらツイ我知ず涙ぐみましたが、それを見ておさよは私を、さかへましたが見るとおさよも眼に一杯涙をもつて居るので、いいます。そして今夜は泪れ母上の代りに私が抱いて寝てあげるからといひます。母上に此られるから嫌だと申しますと、母上には私が今往つて謝つて来るから關はないといひます。其時私が、若し母上に言つたら猶ほ叱られる、おさよさんのとこへ遊びに来るのも内證なんだからと小聲で言ひましたら、卒然私を突き離して、何故内證で来るの、修さんと私も遊んぢやア悪いの、悪いのなら最早来なくつても可う御座んすよと、可恐い顔をして私を睨みつけたので、私は、私は慄るひ上つて縁邊から飛び下り、一日散に飯塚の家から駆け出しました。

それからといふものは決して飯塚に参りません、おさよに途で逢つても逃げ出しました。おさよは私の逃げ出すのを見て何時もたゞ笑つて居ましたから、私は尙ほおさよが自分を欺しかけて居たのだと信じたもので、

（四）

次の女難は私の十九の時御座います。此

時は最早祖母も母も死了し、私は叔母の家の厄介になりながら、村の小學校に出して貰つて月五圓の給料を受けて居ました。祖母の亡くなつたのは十五の春、母は其秋に亡くなりましたから私は急に孤兒になつて了ひ、終に叔母の家から引取られたのでいます。十八の年まで淋しい山里に居て學問といふ學問は何にも爲ないでたゞ城下の中學校に寄宿して居る従兄弟から送つて寄す少年雜誌見たやうなものを讀み、その他は叔母の家に昔から在つた源平盛衰記、太平記、漢楚軍談、忠義水滸傳のやうなものばかり讀んだのでいます。それでですから小學校の教師さへも全くは覺束ないのですけれど、叔母の家が村の舊家で、其威光で無理に雇つて貰つたといふ次第でいました、母の病氣の時、母は呉れくも女に氣をつけると、死ぬる間際まで女難を戒しめ、何卒早く立身して呉れ、草葉の蔭から祈つて居るぞと言つて死にました。けれども如何して立身するか、それは全然母にも見當がつかなくつたので御座います。母は叔母の家から私の學資を出ささうとしたらしくムいました。これが都合よく參りませんものですから、私の立身を堅く信じながらも、たゞそれは漢としたことで、實は内々甚く心痛したも

のと見えます。それでですから母としては唯だ女難をいしめる外に私の立身の方法はなかつたのでいます。私は又性質意氣地が無いのかして自分の立身のこゝには如何いふものか餘り氣をかけませんでした。たゞ母に急に別れたので、其當座の悲しさ、一月二月は叔母の家に居ても、如何かすると人の見ぬところだめそく泣いて居りました。

月日の経つ内に悲もだんく薄ぎ、終には時々思ひ出す位のこと、叔母の親切にほだされ、何時しか叔母を母のやうに思うて目を送るやうになつたのでいます。

十八の歳から、叔母の家を五町ばかり離れた小學校に通つて、同僚の三四人と共に村の子供の世話をして、夜は尺八の稽古に浮身をやつし、此世を面白可笑しく暮すやうになりました。尺八の稽古といへば、そのころ村に老人が居まして、自己流の尺八を吹いて居ましたのを村の若い者が煽つて、大先生のやうにいひふらし、終に私も其弟子分になつたのでいます。けれども元大先生からして自己流ですから弟子も皆な自己流で、たゞ無暗と吹くばかり、その内手が慣れて来れば、やれ誰が巧いとか拙いとか各自に評判をし合つて皆なで天狗になつたのでいます。

私の性質でありませうか、私だけは若い者の中でも別段に凝り固り、間がな隙がな、尺八を手にして、それを吹いてさへ居れば欲も得もなく、朝早く日の昇らぬうちに裏の山に上つて、岩に腰をかけて曉の霧を浴びながら吹いて居ますと、私の尺八の音でもつて朝霧が晴れ、私の轉ばす音につれて日がだんく昇るやうにまで思つたこともあつたのでいます。

それでですから自然と若い者の中でも私が一番巧いといふことになり、老先生までが眞實に稽古すれば日本一の名人になるなどとそゝのかしたものです。その中十九になりました。恰度春の初めのことで御座います。日の暮方で、私は例の通り、尺八を持って村の小川の岸に腰を掛けて、獨り吹き澄まして居ると、後から「修藏様」と呼ぶものがあります。振り回つて見ると武之允といふいかめしい名を守の和尚から附けて貰つた男で、隣村に越す坂の上に住んで居る若い者でした。

何だ。武之允山城守。一
「全く修藏様は尺八が巧よ」とにや／＼笑ふのです。この男は少し變物で、横着物で、随分人をひやかすやうな口振をする奴ですから、

「殴るぞ」と尺八を構へて喝す眞似をしますと、彼奴急に眞面目になりまして、

「一修藏様に是非見て貰ひたいものがあるんだが、見て呉れませんか」と妙なことを言ひ出したので、

「何だらう、私に見て貰ひたいといふのは。」

「何でも可いから、たゞ見て貰へば可いのだ。」

「どんなものだい、品物かい」と問ひますと武の奴、妙な笑ひかたをして、

「貴郎のナすきなものだ。」

「手前はおれを山弄なツ。」

「愚弄るのぢやアない、全く見て貰ひたいので御座んす。私のお頼だから見てやつて下さい」と今度は又大眞面目に言ふので御座います。

「宜しい、見てやらうから出せ。」

「出せつて、今此處にはありません、一寸私の家へ来て貰ひたいので御座います。」

「お家の寶、何とかの劔といふ品物かな」と

私がいひますと今度又た妙に笑ひ出しまして、「先づそんな物で御座います、何しろ寶にや相違ないのだから、ウンさうだ、寶で御座います」と手を拍ちますので私も不思議で堪りません、

私の方からも見たくなりしましたから、

「それぢやこれから一緒に行かう、サア行つて見てやらう」とそれから二人連れ立ちまして、武の家に參りました。

前に申しました通り武の家は小さな坂の頂にあるので、

叔母の家からは七八町もありませうか、其の下に例の尺八の大先生が住んで居るので、

私も坂の下までは始終參りますが、坂に登つたことは三四度しかありません。この坂を越しますと狭い谷間でありまして、

其處に家が十軒とはないので、だから此坂を越すものは荷の者でも澤山はないので、

武の家は一軒の母屋と一軒の物置とありますが、

物置は何時か戸がメ切つてあつて其上に岸から大きな樫の木がおつかぶさつて居ますから見るからして陰氣なので、

母屋も広い割合には人氣が無いかと思はれるばかり、

シンとして居るのです。家に相對つた崖の下に四角の井戸の淺いのがありまして、

いつも清水を湛へて居ました。體の様子が如何も薄氣味の悪い處で、

私は此坂に來て、武の家の前を通る度に直ぐ水滸傳の麻痺藥を思ひ出し、

武松がやられました十字坡などを想ひ出した位です。

それですが、武から妙なこと言はれて大に不

思議に思つて居る上に武の家に参つては、其のすのですから、坂を上りながら内々薄氣味が悪くなつて來たのです。途々、武に何を見せるのだと聞きましたも、武は如何しても言はないばかりか、

メたといふ顔容をして根性の悪い笑ひ方をするので御座いました。

日は全然暮れて、十日頃の月が鮮やかに映して居ましたが、

坂の左右は樹が繁つて居ますから十分光が届かないので、

上りは一町程しかありません、直ぐ武の家の前に出ました。家の前は廣くなつて樹の影がないので、

月影判然と地に印して居ました。障子に燈火がぼんやり映つて、

家の内はひとつそりとして居ます。武は黙つて内庭に入りました。私は足が進みません、

外で躊躇つて居ますと、

「お入なされ！」と暗い處で武が言ひました。其聲は低いけれども底力があつて、

何んだか私を命令するやうでした。「此處で見てやるから持て來い」と私は外から言ひました。「お入なされと言ふに！」今度

は猶ほ強く言ひましたので私も仕方がないから、

のつそり内庭に入りまして、私の人つたのを見て、

あがり茶の間の次ぎに入りました。暫く出て参りません、其様子が内の誰かとこそ話をして居るやうでした。間もなく出て参りまして今度は僣しく、

「お上りなされませ、汚ないけえども一といひますから少しは安心して上りました。そして武の案内で奥の一間に入りますと、此處は案内小奇麗になつて居まして、行燈の火が小さくして部屋の際に置いてありました。しかし先づ私の目につきましたのは其處に一人の娘が坐つて居ることです。私が入ると娘は急に起たうとして又た居住ひを直して頸を横に向きました。私は變ですから坐ることも出来ません、すると武が出抜けに、

「見て貰ひたいと言うたのは是でムいませ」といふや女は突伏て了りました。私は何と言つて可いか、文句が出来ます、呆氣に取られて武の顔を見ると、武も少し顔を赤めて言ひ悪くさうにして居ましたが、

「まあ此處へ坐つて下さりませ、私は一寸出て來ますから」と言ひ捨て、行らうとしますから、

「何だ、何だ、私は嫌だ、一人残るのは」と思はず言ひますと、

「それでは坐つて下さらんのか」と言つて可恐い顔をして私を睨みました。私が歸るといへば直ぐにでも蹶飛しさうな劔幕ですから私も仕方なしに其處に坐つて黙つて居ますと、娘は泣いて居るのです。嗚咽びかへつて居るので、それを見た武の顔は眞實に例へやうがありません、顔に青筋を立て、齒を喰ひしるかと思ふと、泣き出しさうな顔をして眼をまじ／＼させます。何か言ひ出しさうにしては口の邊を手の甲で摩るのでムいませ。

「一體如何したのだ」と私も事の様子を餘り妙なので問ひかけました。しますると武が訥りながらかういふのでムいませ。妹が是非貴様に遇はしてくれと言つて聞かない、色々言ひ聞かした如何しても承知しない、それだから貴様を欺して連れて來たのだ、何卒か不憫な女だと思つて可愛がつてやつて呉れ、私から手を突いて頼むから、と先づかういふ次第なのです。馬鹿々々しい話だとお笑ひもムいませうが、全くさうでしたので、先づ私が村の色男になつたのでムいませ。

其頃私は女難の戒を全て忘れたのではありませんが、何を申すにも山里のことですから、若い者が二三人集れば直ぐ娘の評判でムい

ます。小学校の同僚も何ぞと言へば何處の娘は別嬪だとか、彼娘には最色があるとか、そんな噂をするのは平氣で、全くそれが一ツの楽しみなのです。私も何時か其風に染みまして村の娘にからかつて見たい氣も時々起したのでムいませ。さすが母の戒がありますから、浮とは手も出しませんでした。が、決して心から其實女を恐れて居たのではなく、若し可い機會があつたら必然色の一ツ位出來る筈になつて居たのでムいませ。

ところで武の妹はお幸と申しまして若い者の中で大評判な可愛い娘でムいまして年は其頃十七でした。私も始終顔を見知つて居ましたが言葉交はしたことはなかつたのです。先方では私が叔母の家の者であり、學校の先生といふとこで遇ふ度に禮をして行過ぎるのでムいませ、田舎の娘に似はない色の白い、眼のはつきりとした女で、身體つき能くおまよに似てすきりとして居ました。城下の娘にもあの位なのは少ないなど、村の者が自慢さうに評判して居たのですが全くさうだと私も遇ふ度に思つて居たのでムいませ。でありますから、私も眼の前にお幸を突きつけられて、其兄から代つて口説れましては女難などを思ふとが出來な

かつたのです。それに氣の弱い私ですから、よ
しんば危いことゝ氣が付きまじしたところで、と
ても彼の場合、武とお幸を振り切つて逃げて歸
るといふやうな思切つた所作は私には出来な
いので、ムいしました。

その後は私も二晩置きか三晩置きには必ず
お幸の許に通ひましたが、極く内證にして居ま
したから、誰も氣が付きませんでした。それに兄
の武之允が何かにつけて被保つて呉れますし、
又た武の女房も初から能く事情を知つて居て、
やはり武と同じやうにお幸と私の仲を巧くゆ
くやうにのみ骨を折つてくれましたので、私も
武の家では公然で遊んだもので、ムいます。

二人の仲は武の夫婦から時々冷されるほど好
らうムいました。かれこれする内二月三月も經ち、
忘れもしません六月七日の晩のことです、夜の
八時頃、私は平時のやうにお幸の許に参ります
と、此晩は宵から天氣模様があつたのが十
時頃には降りだして参りました。大降りになら
ぬ内、歸らうと言ひ出しますと、お幸と武の女
房が止めて歸しません、武は不在で、ムいした
が、今に歸るだらうから歸つたら橋まで送らす
からと申しますので、暫時ぐづぐづして居ます
と、武が歸つて参りました。何處で飲んだか大

ぶ酔つて居ましたが、私が奥の部屋に風轉で居
ると、其處へづか／＼入つて來まして、どつか
り大躑坐をかきました。お幸は私の傍に坐つ
て居たので、ムいます。

「外方は大酒な降りで御座りませぬ、今夜はお
泊りなされませぬ」と武は妙に言ひだしました、
と申すのは私がこれまで泊らうとしても武は、
若し泊まつて事が知れたら不味いからと何時も
私を宥めて歸しましたので、私も決して泊つ
たことはなかつたのです。

「イヤ矢張り泊らん方が可からう」と私の言ひ
ますのを、打すやうにして武は、

「實は今夜少しばかり話がありますから、それ
でお泊りなされといふのだから、お泊りなされ
というたらお泊りなされ」と語氣がやゝ暴らう
なつて参りました。舌も少し廻り兼ねる體で、ム
いました。

「話があるつて何だらう、今直ぐ聞いても可い
ぢやアないか。」

「貴様氣が付いて居ますか」と出抜けに聞かれ
ました。

「何をサ？」私は判じ兼ねたので、ムいます。

「だから貴様は不可ませぬ、お幸はこれになり
ましたぜ」と腹に手を當てゝ見せましたので、私

は唖驚して了つたので、ムいます。お幸は起つて
茶の間に逃げました。

「眞實かへ、それは」と思はず聲を小さくしま
した。

「眞實かつて、貴様がそれを知らんといふこと
はない、だけれども知らなかつたらそれまでの
話です、最早貴様も知つて見れば此後の方法を
つけんぢやア。」

「如何すれば可いだらう？」と私は氣が顛倒し
て居ますから、ふことが戦々して居ます、さう
しますと武は可憐い眼をして、

「今になつてそれを聞く法がありますか、初か
ら解りきつて居るぢやありませんか、貴様の方
でもからなればかう、覺悟がある筈ぢや。」

言はれて見れば尤もな次第ですが、全く私
には何の覺悟もなかつたので、たゞ夢中になつ
てお幸の許に通つたばかりですから、かやうに
武から言はれると文句が出ないのです。

私の黙つて居るのを見て、武は口々しきうに
舌打ちしましたが、

「直ぐ公然の女房になされ。」

「女房に？」

「嫌で御座りますか？」

「嫌ぢやないが、今直ぐと言つたところで叔母

「が承知するかせんか解らんぢやないか。」
 「叔母さんが何といはうと貴様が其氣なら何でもない、貴様さへウンと言へば私が明日にでも表向の夫婦にして見せます。何にも此處ばかりが世間ぢやないから、叔母さんや村の者がぐゞ／＼言やア二人で何處へでも出てゆけば可い、人間一匹何をしても飯は喰へますぞ！」とまで云はれて私も急に力が着きましたから、「よろしい、それでは兎も角も一應叔母と相談して、叔母が承知すれば可し、故障を言へばお前のいふ通り、お幸と二人で大阪へでも東京へでも飛び出すばかりだが、お幸は之れを承知だらうか。」

「へん！ そんな事を私に聞くがものは有りませんぢやないか、貴様の行くところなら例ひ火の中、水の底と來まサア！」と指の尖で私の頬を突いて先の劍幕にも似ず上氣嫌なんです。

その晩はそれで歸りましたが、サア此話が如何しても叔母に言ひ出されないので御座います。それと申すのは叔母も私の母より女難の一件を聞いて居ますし、母の死ぬる前に、叔母に女難のことは繰返して頼んで置いたのですから、私の口からお幸のことでも言ひ出さうもの

なら如何なに驚きもし、心配もするが解らないのでういます、次の朝から三日の間、私は今言はうか、最早切り出さうかと叔母の部屋を出たり入つたりしましたが、とう／＼言ふことが出来なかつたのでういます。

叔母に言ふことが出来ないとすれば、お幸と二人で土地を逃げる他に仕方がないと一度は逃亡の仕度をして武の家に掛けましたが、それもイザとなつて踏み出すことが出来ませんでした。と申すのは、「これが女難だな」といふ恐しい考が、次第々々に嵩つて來て、今までお幸の許に通つたことを思ふと「失策つた」といふ念が湧き上るのでういます。それでですから若し、お幸を連れて逃でもすれば、行先如何な苦勞をするかも知れず、それこそ女難のどん底に落ちて了ふと、一念からなりましては缺落も出来なくなつたのでういます。

それで四苦八苦、考へに考へぬいた末が、一人で土地を逃げるといふ了見になりました、忘れも致しません、六月十五日の夜、七日の晩から七日目の晩で御座います、お幸に一日逢ひたいといふ未練は山々でしたが、此處が大事の場合だと、母の法名を念佛のやうに唱へまして、暗に乗じて山里を逃亡いたしました、其晩

あたりは何も知らないお幸が私の來るのを待ち焦れて居たのに違ひありません。女に欺されてはならぬとばかり教へられた私が何時か罪もない女を欺すこととなり、女難を免れる積りで女を捨てた時は最早大女難にかゝつて居るので、其時の私にはそれが解らなかつたのでういます。

叔母の家から持出した金は僅か十圓でういますから東京へ着きますと間もなく尺八を吹いて人の門に立なければならぬ第一となりましてのです。それから二十八の年まで足かけ十年の間、の事は申上げますまい。國とは音信不通、東京には勿論、親族もなければ古い朋友もないので、種々様々の事をやつて參りましたが、何時も女のことで大事の場合を失策つて了ひました。二十八になるまでには公然の妻も一度は持ちましたが半年も續かず、女の方から逃げて了ひました。しかし其妻も私が本郷に下宿して居る中に其處の如と出来やつたのでういます。

二十八の時、女難が私の生涯の終りで、女難と一所に目を亡くして了つたのでういますから、それをお話いたして長物語を切り上げることにいたします。』

二十八の夏でムいました、そのころはやゝ運が向いて参りまして、鐵道局の雇となり月給十八圓貰つて居ました。女には懲りて居ますから女房も持たず、婆さんも雇はず、一人で六畳と三疊の長屋を借りまして自炊しながら局に通つて居つたのでムいます。

住居は愛宕下町の狭い路次で、兩側に長屋が立て居ます。中の其の一軒でした。長屋は兩側とも六軒づゝ仕切つてありましたが、私の住んで居たのは一番奥で、直前には大工の大締者が住んで居たのでムいます。

長屋の者は大通りに住む方とは違ひまして、御承知でもムいませうが、互に親しむのが早いもので、私が十二軒の奥に移りますと間もなく、十二軒の人は皆な私に挨拶するやうになりました。

その中でも前に住む大工は年頃が私と同じで、朝出かける時と、晩歸へる時とが大概同じで御座いますから始終顔を合せますので何時か懇意になり、終には大工の方から度々遊びに来るやうになりました。

大工は名を藤吉と申しましたが、やはり江戸

の職人といふ氣風が何處までも附て廻り、様子がいなせで辯舌が爽かて至極面白い男でムいました。たゞ容貌は餘り立派ではムいせん、鼻の丸い額の狭いなどは殊に目につきました。笑ふ時は何處かに人のよい、悪言へば少し抜けて居るやうな處が見えて、それが亦た此人の愛嬌でムいます。

私のところへ夜遊びに来ると、必然酒の香をぶん／＼させて、いきなり尻をまくつて跣坐をかきます。そして私が酒を呑まぬのを冷かしたものでムいます。

そして又た、頻りと女房を持ってとすゝめました。其序に如何かいたしますと、「君などは女で苦勞をしたこともない唐偏木だから女の難有味を知らないのだ」とやるのです。御本人は如何かと申しますと、餘り苦勞をしたらしくもないので、其女房も、親方が世話をして持してくれたとかいふのでムいます。

けれども私は東京に出てから十年の間、種種な苦勞をしたに似ず、矢張り持つて生れた性質と見えました、烈しい事も出来ず、烈しい言葉すら餘り使はず、見たところ女などには近よることも出来ない野郎天に見えますので、大工の藤吉が唐偏木で女の味も知らぬといふのは

決して無理ではなかつたので、實に私は意氣で女難にかゝつたといふよりか皆んな、溫柔くつて野暮だから却て女難にかゝつたのでムいます。

或夜のことには藤吉が参りまして、洗濯物があつたら、洗濯機を出して申しますから、遠慮なく單衣と袴を出しました。さう致しませぬ。其翌日の夕方に大工の女房が自分で洗濯物を持って参りまして、これだからお前さん早くお持ちなさい、女房の難有味はこれでも解らうと私の膝の上に持て来たのを投げ出して歸りました。この女はお俊と申しまして、年は二十四五でムいます。長屋中でお俊は何時でも喉

にのぼり、又お俊の前でもお前さんは如何見ても意氣だなどと、賞やす山の神がある位です。から私の目にもこれは唯の女ではない位のこととは感づいて居たのでムいます。

藤吉は毎晩のやうに来るやうになりました。それは一ツは私から尺八を習はうといふ熱心であつたのでムいますが、笛とか尺八とかいふものは性質と見えました。藤吉は器用な男でありながら如何しても進歩いたしません。それでも屈せずブウ／＼吹いて居たのでムいます。お俊も遊びに来るやうになりました。初は

二人で押しかけて参りましたが後には日曜日など、藤吉の居ない時は書訓でも一人で遊びに来て、一人で饒舌つて歸つてゆくやうにむつかのてゝいます。私も後には藤吉の家に掛けて夜の十二時までも下らん話をして遊ぶやうになりました。お後は頻りに私の世話を焼いて、彼まで炊て呉れることもあり、菜が出来ると持つて来て呉れる、私の役所から歸らぬ中にちやんと晩の仕度をして呉れることもあり、それですから藤吉が或時にかしまして、

「お前は此頃亭主が二人出来たから忙がしいなア」と言つたことがあります。けれども藤吉は決して私を疑ぐるやうなことはなく、初は隣り交際してしたのが後には、何でも身の上のこを打明けて私に相談するやうになりました。それですから私も其積りで交際して、随分彼奴の力にもなつてやり、時には金の用までたしてやりましたので彼奴は猶ほ私を父ない友と信じ、二日ばかり私が風邪をひいた時など一日は仕事を休んで私の傍に附いて居たことさへ御座います。

それに長屋中皆な私を可愛がつて呉れまして、溫柔い方だ良い方だ、珍しい堅人だと褒めて呉れるのでゝいます。ですからお俊ばかり

でなくお神さん達が頼みもせぬ用を達て呉れるのでゝいます。ところが可笑いのはお俊がこれを焼いて、何を私が附て居るに餘計なお世話だ、お神さん達の目の前で嫌な顔をする、それをお神さん達は猶ほ面白半分私に世話を焼いたこともありましたが、けれども、それで以てお俊と私の相を長屋の者が疑ぐるかといふに決してさうでなく、こんで私をば木か金で作つたの、やうに無類の堅人だと信じて居たのでゝいます。けれどもお俊の方はそれほど信用はないのです。ですからお俊さんはし怪しいが、とても物にはならぬなど、明らかに私に向て言つた山の神さへ居たのでゝいます。

實際、お俊は怪しいと言はれても仕方がありません。或晩のことに私が床を延べて居ますと、お俊が飛で参りまして、「どうせ私ぢやお氣に入りませんよ」と言ひざま布團を引奪つて自分でどんく敷き「サア、旦那様お休みなさい、オー世話を焼ける亭主だ」と言ひながら色氣のある眼元で私を見上げましたことなどは、たゞの仕草ではなかつたのでゝいます。そして其時の私の心持を言ひますと、決して長屋の者が信じて居たほど

の堅固なものでなかつたので、木や石でない限り、矢張り妙な心持でしたのでゝいます。私が或時藤吉に向ひ、「如何もお俊さんは意氣だ。まるで素人ぢやアないやうだ」と申しますと、藤吉にやう、笑つて居ましたが、一巧いところを當てられた、實はあれはさる茶屋で可なり名を賣つた女中であつたのを親方が見つけ出し、本人の心持を聞いて見ると堅氣の職人のところにゆきたいといふので、それこそ幸と私に世話して呉れたのだ」と少々得意の氣味でお俊の身元を打明けたのでゝいます。その時から猶更ら私はお俊の態度を妙に感じて來ました。

けれども先づ平穩無事に日が経ちます中、恰度八月の中頃の馬籠に熱い日の晩でゝいます、長屋の者はみんなぐに居て涼んで居ましたが私だけは前の晩寝冷をしたので身體の具合が悪く、宵から戸を閉めて床に就きました。なんでも十時ごろまで外はがやう、話聲が聞えて居ましたが其内だんく、靜になりお俊もおとなしく内に引込んだらしかつたのです。私は眠れないのと熱つ苦しいとで、床を出まして暫く長火鉢の傍でマツチで烟草を喫つて居ましたが、外へ出て見る氣になり寝衣のまゝ、フイと路

次に飛び出しました。路次には最早誰も居ないので、路次から通りに入りますと、雨が傾いて恰度愛宕山の上にあるのでムいます。外はさすがに少しは風があるので其處をぶらぶら歩いて居ますと、向うから一人の男が、何かぶつ／＼口小言を云ひながらやつて参ります、其様子が酔ばらひらしいので私は道を避けて居ますとよろ／＼と私の前に来て顔を上げたのを見れば藤吉でムいました。

藤吉は私を見るやいきなり、

「イヤ大将、うめえところで遇つた、今これからお前さんとこへ、押かけるとこなんだ。サア家へ歸れ、今夜こそは勘辨ならんだ。如何してもお前さんに聞いて貰ふことがあるんだ」と私の手を取つてグイ／＼路次の方へ引張つて参るのでムいます。

私も酔ばらひと思ひまして「よし／＼、サア歸らう、何でも聞う」と一所に連立つて家に入りました。

藤吉の顔を見ると、怖い程着ぎめて眼が坐つて居るのでムいます。坐るが早い、

「サア聞いて呉れ、私は最早如何しても勘辨がならんだ」と、それから巻んで長々と述べ立てましたところを聞きますと、つまりかうなん

です、藤吉が其日仲間の者四五人と一所に或所で一杯やりますと、仲間の一人が何かの機會から藤吉と口論を初めました。互に悪口雜言を仕合せて居ます内に、相手の男が、親方のお古を頂戴して難有がつて居るやうな意久地なしは黙つて引込めと怒鳴たものと見えます。それが藤吉にグツと續に觸りましたといふものは、これまでに朋輩からお前は親方が手をつけて持餘したのを藤吉に押つけたのだといふ當磨を二度聞かされましたさうで、それを藤吉が人知れず苦にして居た矢先、又もや斯ういうて罵られたものですから言ふに言はれぬ不平が一度に破裂したのでムいます、餘計なお世話だ、親方のお古なら如何した、手前はお古を貰ふことも出来まいと、我鳴りつけたものと見えます。さうすると相手はあざ笑つて、お古ならまだ可い、新しいのだ、今でも月に二三度はお手が附くのだと悪たれたのでムいます。藤吉はこれを聞きませんが早い、よし、見て居る」と直ぐ其處を飛び出して家に歸るとお俊をたゞき出して了ふ了見でぶら／＼と歸る途中、私に逢つたのでムいました。

後が元親方と怪しい關係のあった女であるか、ないか、そんなことは解らないけれど、今ではお前を大層にして立派なお前さんになつて居るのだから出さずほどのことはあるまい、見たところでも親方と怪しいいふ様子もないやうだ、それは私が請合ふと申しますと、藤吉今でも怪しいなら打殺してやるのだ、以前の關係が有ると聞いたゞけで私は承知が出来ぬえの、お俊を追出して親方の横面を数撃つて呉れるのだ、何ぞといへば女房まで世話をしてやつたといふ、大きな面をして無暗に親方風を吹かすからして最早氣に喰はねえで居たのだ、お古を押附て置いて世話も何もあるものか、ふざけるない、私が幾何なだめても聴かないでとうとう宅に歸つて参つたのでムいます。

私も打捨つても置かれぬと、藤吉の後にいつて行かうとしますと、關はないで置いて呉れろと、私を内に入れませんが、仕方なしに外に立つて内の様子を聴て居ました。お俊は最、床に就いて居た様子でしたが、藤吉は引ずり起して怒鳴りつけて居るのでムいます、お俊は何も言はないで聞いて居たやうですが、暫時くしますとツイと外へ出て参りました。私を見て、

「下らないこと言つたらア、酔ばらひに取合つ

ても仕方がないから打捨つて置ませう」と言ひながらズン／＼私の宅に入るののでムいます。私もお俊の後について私宅へ歸りました。一誰が下らないことを焼付けたのだらうねえ、眞實に仕様がないうねえ」とお俊はかう言つて、長火鉢の横に坐つて、其所に置いてあつた煙草を吸て居るのです。

「明日の朝になれば何でもないサ」と私も爲事なしに宥めて居ましたが、お俊が歸りさうにもないので、

「静かになつたやうだから見て来たら可からう」と言ひますと、お俊は黙つて起て出てゆきましたから、私は直ぐ蚊帳の内に入つて了つたのでムいます。ところが間もなくお俊は戻つて参りまして、

「能く寝て居るから外面から戸締をして來ました」と澄して居るのです。

「そしてお前さん如何するのだ」と私は蚊帳の内から問ひました。

「私はかうして朝まで寐ないで居てやるのサ。」

「そんなことが出来るものか、歸つて寐たが可からう」と申しますとお俊は焦慮たさうに「打捨つて置いて下さいよ、酔ばらひだから夜中に又た如何なことをするか解るもんぢやアない、

私や可恐ワ」と平氣で煙草を吸つて居るのです。私も言ひやうがないから黙つて居ますと、お俊も平時のお饒舌に似ず黙つて居るのでムいます。蚊帳の中から透して見ると、薄暗い洋燈の光が房々とした髪から横顔にかけてぼーつとして居ます、夫に蒸暑いのでダラリとした様子が何時にない生めかしい様に私は思つたのでムいます。

其内、かれこれ二十分も経ちましたらうか。

お俊は折り／＼團扇で蚊を追つて居ましたが「オ、ひどい蚊だ」と急に起ち上がりまして、蚊帳の傍に來て、「貴様最早寐たの？」と聞きました。

「最早寐かけて居るところだ」と私は何故か寐ぼけ聲を使ひました。

「一寸と入らして頂戴な、蚊で堪らないから」と言ひま、やつと一人寐の蚊帳の中に入れて來たのでムいます。

朝早くお俊は歸つてゆきましたが、如何いふ風に藤吉の氣嫌を取つたものか、それとも酔が醒めて藤吉が逆戻りしましたのか、温順しく仕事に出で参りました。申際に上口から頭を出して「お早やう」と言ひま、妙に笑つて頭を搔いて見せまして「いづれお謝罪は歸つてか

ら」と、言ひ捨て、出て参りました。其後姿を見送つて「ア、悪いことをした」と私はギツクリ胸に來ましたけれど最早退附ません。それからといふものは、お俊の亭主は眞實に二人になつたのでムいます。

それから一月も経ぬ内に藤吉は又た親方に何か言はれて、ブン／＼怒つて歸つて参りましたが、今度は少しも酔つて居ないのです。お俊と別れて自分は暫く横濱へ稼ぎに行くと言つた様子は甚く覺悟をしたらしいので、私も濱へゆくことは強て止めません、お俊と別れるには及ぶまい、暫く私が預かるから半年も稼いだら歸つて來て又一所になるが可らうと申しますと、藤吉は涙を流してよろこびまして、萬事よろしく頼むと家を疊んでお俊を私の宅に同居させ、横濱へ出かけて了ひました。

最早かうなれば澄したもので、お俊と私は全然夫婦氣取で暮して居たのでムいます。

さうすると一月程たちまして私は眼病にかつたのでムいます。たいしたこともあるまいと初は醫者にもかゝらず、役所には力て通つて居ましたが、段々に悪くなりまして終には役所を休むやうになりました。醫者に見せますと容易ならぬ眼病だと言はれて、それから急に出來

の丈の療治にかゝりましたが治る様子も見えないのでムいます。

お俊はなか／＼氣を注げて看護してくれました。藤吉からは何の消息もありません。私は藤吉のことを思ひますと、あゝ悪いことを爲たと、つく／＼我身の罪を思ふのでムいますが、さればとてお俊を諭して藤吉の後を遂すことを致す程の決心は出ませんので、たゞ悪い／＼と思ひながらお俊の情を受けて居りました。

その内だん／＼眼が悪くなる一方で役所は一月以上も休んで居るし、私は氣が氣でならず、若し盲目になつたらといふ一念が起るたびに、悶え苦しみました。

こゝに怪しいことのムいますのは、お俊の様子子が甚く變つたことでムいます、何となく私を看護する舉動が前のやうでなく、つまらぬことに疝癢を起して私に難く當るのでムいます。そして折り／＼は半日も何處にか出行いて歸らぬこともあるのです。私は口に出してこそ申しませんが、腹の中は面白くなくつて堪りません。ところが或日のことでムいました、御免なさいと太い聲で尋ねて來た者があります。

「居らつしやい」
が、暫く何か其男とこそ／＼話をして居まし

たが、やがて私の枕元に參りまして、「頭領が見えました、何か貴郎にお話したいことがあるさうです。」

何の頭領だらうと思つて居ます中に、其男はづか／＼私の枕元に參りまして、

「お初にお目にかゝります、私ことは大工助次郎と申しますもので、藤吉初めお俊がこれまで色々お世話様になりましたにつきましては、お禮の申上げやうもムいません、別してお俊が厚いお情を被りました儀につきましては藤吉に代りまして、私より十分の御禮を申上げます。就きましては、お俊儀は今日只今より私に就話することになりましたに就ましては早速お宅を立退ことに致します、左様悪からず御承知を願ひ置きます」と切口上でベラ／＼と饒舌立てました、私は文句が出ないので御座います。

それからお俊と頭領がどたばたにござらひをするやうでしたが、間もなくお俊が私の傍に參りまして、「色々事情があるのだから、悪く思つちやアいけませんよ、左様なら、お大事に。」二人は出て行きました。私は泣くことも叫喚することも出来ません、これは皆な罰だと思ひますと、母の憔悴た姿や、孕だま、置去りにして

す。中たお幸の姿などが眼前に現れるのでムいます。

役所は免められ、眼はとう／＼片方が見えなくなり片方は少し見えても物の役には立たず、其内少しの貯蓄は無くなつて了ひました。それから今の姿に零落つてムいますが、今ではこれを悲しいとも思ひません、たゞ自分で吹く尺八の音につれて戀ひしい母のことを思ひ出しますと、いつそ死で了つたらと思ふこともムいます。死が死ぬことも出来ないでムいます。」

盲人は去るに望んで更に一曲を吹いた。自分分は殆ど其哀音悲調を聞くに堪へなかつた。戀の曲、懐舊の情、流轉の哀、うたてや其底に永久の恨をこめて居るではないか。月は西に落ち、盲人は去た。翌日は彼の姿を鎌倉に見ざりし。

(明治三十六年十二月)

正直者

見たところ成程私は正直な人物らしく思はれるでせう。たゞ正直なばかりでなく、人並變つた偏物らしくも見えないでせう。

けれども私は決して正直な者ではないのです。なまじ正直者と他から思はれたばかりに容易ならぬ罪を今日まで成し遂げて生涯の半を送つて来たのであります。

鏡に對へば私にも直ぐ私自身の容貌が能く解ります。私の顔には角といふものがありませぬ。冴えた色がありません。眉毛が濃く、頬鬚が多く、鼻が丸く、唇が厚く、そして何處かに間の脱けたところがあります。笑へば

背に深い皺が寄るのです。それが――淺ましいことには――言ひ知れぬ愛嬌になつて居ます。それに私は随分大きなりですから、何時も着物は裕の足ないのを着て太い手が武骨に出て居るので一見素朴らしくも見られるのであります。身體の小さい人はチヨコマカと才はじて、

身體に重味のないばかりか心の重味までが無いやうに他から推れるものですが、身體の太い男

は、馬鹿でも悪黨でも横着物でも先づ他から重く思はれるのが普通で、私も其例には洩なかつたのであります。

口數多ければ未だしも、私は口無調法でした、けれども滔々と饒舌れないかといふに左様でもないのです。時に由ては随分人並の辯舌は振ふのであります。唯々、これが天稟でせう、大概の場合他人の言ふことのみ聞いて、例の背の皺を見せるばかり、それで居て他人の言ふことは何もかも能く解り、推測もする、邪推もする、裏表も知つて居るのであります。

私のやうな男は世間に随分見受ますが、皆な其身の置かれた境遇、例へば昔でいふ土農工商の境遇に居て、それと面白芝居を打つて居ます。たゞ此種の人には（私も其一人）滅多に其境遇から外には飛び出し得ないものであります。其飛び出し得ないところに彼の重味も着いて、其打つ芝居が愈々巧く當るのであります。

ところで私の境遇の低いのと、それから

私には或特別の天性があるのとで、私の演じて来た芝居が誠に淺ましい、醜いものとなつたのであります。或特別の天性といふのは、今こゝで言はないでも、後で段々に解つて來るでせう。

しかし誤解をふせぐ爲めに一言します。私は決して世の中のこと悉く芝居と同じだといふ説を持って居るのではありません。たゞ前に説きました如き、私其のやうな性質を持って居る連中は、何處かに冷たいところがあつて、身に迫つて來た事柄をも、靜かに傍觀することが出来るのです。それですから極く眞面目な、誠實な顔をしなから、而も克く巧んで物事を處置することが出來ます。既に巧んで處置するといへば、其處に芝居らしい趣があるではありませんんか。

さて、これから私の身の上噺を一ツ二ツお話しします。

私の父は古い英學者で永年中學校の教師を務めて居ましたが、同窓の友ともいふべき人々は皆其の學び得し新知識を利用して社會樞要の地位を占ましたけれど、私の父のみは最初語學の教師となつたざり、終に其職以外に何事をも爲し得ず、私の十二の春まで一教師と

して此世を送り、變則英語の專賣者になつて生涯を終ました。

父の死と共に私は全くの孤兒となりました、といふものは母の額を私は少しも知りません。父は私の母の亡くなつて後は、始終妾同様なものを置いたばかりで、それも七人八人ではなく、私の記憶に存つて居るばかりでも四人ばかりあり、終に眞の家庭らしいものは作らなかつたのです。

何故父は、さる不倫なことをして居たかといふ理由は知りません、けれども父の子なる私の性質から推測しますると、父は唯だ依怙の満足を得るばかりで女を置くことを知つて、家庭などのことには全然心を動かなかつたのだらうと思はれます。

私の知つて居る三四人の妾に就いても父は情愛を以てこれを選した様子は少しもありませんでした。私は少しばかり酒を呑みますが父は決して酒杯を手にしたことなく、また私よりも更に無口で、家に居てもたゞ茫然と火鉢に對つて煙草を吹して居るか、それでなくば机に向つて英書を繙いて居るかで家中は常に寂寞として居ました。

それですから女中兼帯の妾が來ても初の中は

父や私を對手に饒舌りますが、一月二月と経つ中に何時しかこれも無言の業に堪へ得るやうになつて了ふのです。

冷寒い空気が暗鬱な影とが常に立置めて居る中に、私も亦た父と同じやうな性質で、別に悲しいとも辛苦しいとも思はず生育りました。それですから私は父の在る前から既に孤兒同然であつたのであります。

兄もなく弟もなく、頼にすべき親戚もなく、十二歳の少年は父の死と共に父の友なる某中學校の國語の教師の家に引取られました。教師の姓は加藤。其加藤の言葉に依れば私を引取つたのは父が生前の依頼であつたさうです。

加藤が私を親切にして呉れたか如何だかといふことは別に言ふほどのこともありません。普通の學僕同様なことを仕ながら英語の夜學校に通ひ、國語の方は直接に加藤から少しづつ學んで居ましたが、孤獨には慣れて居ますから私の心持では加藤の待遇に就て格別の感じを持たせませんでした。

『お前の父上は至極好人物であつたが、惜いことに活動といふものを仕ないで退居でばかり居なすつたから、折角の利器を懐きながら老朽ちて了はれた。お前は一ツウンと世の中に飛び

出して人に活動しなければならぬ、學問が如何あつても活動といふことが無ければ今の世は用ひられんぢや、加藤は其細い眼を光らして自分に向ひ此言葉を聞いたことは幾度であるか知れませんか。

なるほど左様だ、加藤の叔父さんの言はれる通りだと私も思はぬではないが、天賦は手はれぬもので、重苦しい性質は言葉の彈力や、理想の楨杆では容易に動きませんでした。所謂、なるがままに移つてゆく其境遇に處して唯だ其日々々々をじつくりと暮す、それが私の運命であつたのです。

十九の秋、加藤は病んで床に就き、二十日ばかりで遂に此世を去りました、六十七歳です。から先づ以て長命の方でせう。死ぬ少し前に私を枕許に喚で、斯ういひました。

『お前の父上から私の受取つた金は四百圓足らずであつた、家財や書籍を賣つて二百圓ばかり、都合六百圓に三十圓不足する金を私がお前と一しよに傾かつたのぢや。父上の頼は此金を食料に、金の續く間お前を世話して呉れとのことであつた、それでお前の十二の時から今年までザツと八年の間で、預つた金は大層無くなつて了つたが未だ百圓ばかり残つて居る勘定

になる、それを今お前に此處でお返しするから、お前は私の死だ後、この金を持って獨立して見るが可からうと私は思ふのぢや。」

加藤の言ふことは私に能く飲みこめました。要之、加藤の死だ後、私は百圓の金を持って、加藤の家を出てゆき、如何にもして獨立ちで世の中を渡つて行くことになつたのであります。それでも加藤が私に百圓の金を渡すといふのが今からふと思ひで、實いふとあの時加藤から一文なしで直ぐ立退きを命ぜられても私は文句なしに其言葉に従ひ、文句のないばかりか、當然のことと考へて立退いたのであらうと思はれます。ですから百圓受取つた時は、眞實私はうれしう思ひました。加藤の死でから一週間経つて、私は住みなれた家を、別に大して悲しいとも思はず、出てゆきました。

落着く先は麹町區某小學校の直ぐ近所にある下宿屋の一室です。私は加藤生前の世話で小學校の英語の教師になりましたので、月は十圓、下宿料が七圓ですから差當り食ふに困りませんでした。

其頃の私は今よりも丸顔の、可愛い顔つきをして居ました上に、言葉の少ない、それで愛嬌もある少年でしたから、校長初め同僚からも

可愛がられ、下宿屋のおかみさんからも「澤村さん〜」とちやほやされました。大概のものは斯うなると一寸得意になるものです。まして年からいふと生意氣盛ですから、つい言はないでも可い悪まれ口をたゝいたり、怒んでも可いことに顔を赤くして聲を高めて見たり、かりそめにも先生を鼻の先にぶら下で居るものです。が、私に限つてそれがありません。何時も同やうな顔をして下宿を出て、同じやうな風で歸つて来る、袴を脱ぐと直ぐ疊で納ふ、見たところ實體な感心な青年であつたに違ありません。

下宿屋のかみさんといふのは其ころ四十四ででしたらう、年頃の娘と十四になる男の子と三人暮の後家の内職で、間数は僅に四個、それも立派な部屋は一間もないのです。娘はおかみさんに似て細面の、色の蒼白い、病身らしい子でしたが、眼は黒眼勝のはつきりとしたので、先づ此の特長とでもいひませうか、其眼で熟と人の顔を見て、暫くして微かにほゝむのが此娘の癖でした。名はおしんですから、私どもはしんちゃんと呼んで居たのです。

おかみさんは輕薄な御世辭も言ひませんが、下宿人の誰にも親切であつたやうです。分ても私を可愛がつてくれて二月三月居る中には

親子かと思はれるまでにしてくれました。けれど私は情ないことに、親子の情といふものを知らない人間ですから、うれしいとはひましたが、たいして感動もしなかつたのです。

人の心ほど奇態なものはありません。それほどの親切に對して私が感動もせず、初めて下宿に來た時と少し變らぬ態度を保つて居ましたので、おかみさんの心は益々動き、愈々私に感心して、私をば又とない、正直な、温順な謙遜な青年だと全然信仰して了つたのです。

娘のおしんも同じことで、母のやうに口こそ餘り出して言ひませんが、私を信仰する熱度は母と少し變らぬことが其舉動で私には能く解つて居ました。

今から思ひますと、眞實に正直な、温順な、謙遜な人といふは無論、此私ではなく、此娘でありました。私はおしんをば完全無缺の人間とは思ひませんが、少くとも女として彼の位なのは餘り類がないと今では信じて居るのであります。ひとつは健康のすぐれないためでもありませんが、おしんの起居振舞から言葉から、こゝろばせまでが如何にも穩かた、おつとりとした中に情深いやうなところがありました。

年は二つ過ぎて、先づ同年輩ですが、私は年よりもふけて見える方、おしんは子供らしいところがあつて、二ツも若く思はれるはうでしたから、おしんの私に對する心持は母と同ながら、其うちに何處かあまえるやうな風もあつたのであります。

私が一人一屋にすつこんで居ると能く遊びに参りまして色々な話をして事によると夜を更すこともありましたが、そんなこんな例を申せば或晩のことです、

「あなたの親父はどんな方でムいました」とおしんが訊きましたから、
「どんな人ツ別々に言ひやうもないが、大變煙草が好きでした。」

「きつと好い方でしたらうねえ。」
何故して。」

「だつて貴様の親父ですもの。」
又或時のことです、おしんは私が謝絶のを無に私の衣服を疊ながら、
「貴様は他か話しかけないと、めつたにお口をきましませんねえ。」

「さうですか、自分ではそんな積りもないのだが。」
「でも母もさう申して居ますよ。」

「さうですか、それではこれから氣をつけませう。」
「あら、別段悪いと申したのではムいせんわ。」

「イ、エ、そんなことは善くないことです。私の父な始終黙つて居て、殊に私にも口をきかないで死で了ひました。」

「でも必定お心は優しい方でしたらうよ。なんでも宅の父上のやうであつたらうつて、母が申して居ました。」

「あなたの父上はどんな方です。」
「口数はきませんが、何時でもにこ／＼して居て母でも私でもめつたに叱るなんぞいふことはムいせんでした。」

「私の父はにこ／＼したことはムいせん。」
「まア、それでは可恐い方でしたの。」

「別に可恐くありません、たゞ黙つて居るばかりで小言も言ひませんから。」
母上さんは如何でした——さう／＼貴様は母上さんは御存じなのですねえ」と言つておしんは暫らく黙つて居ましたが、何と考へたか、

「貴様宅の母を如何思つて居つしやいます。」
と訊きました。

「優しい方と思つて居ます。眞實の母のやうに

思ひます。」
「あら、うれしいこと、母が聞いては何なによろこびませう。」

先づ斯ういふ風でしたが、おしんは去年の娘です、母と同じ親切な心ばかりではすみません。月日の計つと共に、親切以上の心で私に近くのが私にも解るやうになりました。

母親も心づいて居たには違ないですが、如何いふものか、それを少しも氣にしないばかりか、娘と一しよになつて私を可愛がつてくれました。さてそれなら私はおしんを如何思ひましたかと言ふと、おしんの情の十分の一も私にはありませんでした、それなら私はおしんを冷かに扱つたかと言ふとさうではありません、おしんの思ふまゝ思はせ、するがままにさせて置きました。

そして其の結果は如何でせう！ 忘れもしません二月十五日の夜のことです。夜の十二時過ぎでした。下宿人は勿論、母も男の子も皆な寝て了つて家の内はシンとして居ましたが、外はドン／＼雪が降りそれに風が出て雨戸をうつ雪の音サラ／＼と折り節し聞えて居ました。

おしんは九時ごろから私の部屋に来てゐたのですが、十二時打つて何分か締ちまして部屋を

出てゆく時、

『ようムいませるか、必定二三日中に母上に言つて頂戴よ、母上は二つ返事で承知しますから、ね、必定言つて頂戴よ』と繰返して言ひました。

その時のおしんの顔は今でも忘れません。

この晩から私とおしんは母親の眼をも忍ぶ伴となりまして、おしんは望を達したといふ満足の様子の外に、深い決心と、かすかながらも言ひ知れぬ恐怖とで、子供のやうに笑ふ時があるかと思へば、若い顔をして吐息をついて居る時もあり、そして私の様子は以前と少し變らるのであります。たゞ竊かに願つて居た欲望、おしんの身體が自分の身體に近づく毎に愈々つゝの欲望、後には機會があつたらとまで熱申して居た欲望が達せられたので大きに満足しましたが、心の平穩なることは以前の通りで自然變つた様子が顔にも舉動にも現はれなかつたのであります。

おしんは身も魂も私にゆだねて了りました。私を愛し私を信じて少しも疑はないのです。それですから、早く母親に打明けて結婚を申込んでくれると言ひましても、私がまア私にまかして置けと申せば、それで安んじて居たのです。

私が前に、自分に特別の天性があると申し

たのは肉慾のことです。私のやうな物に偏らず、冷やかに、其傍を素通りしてゆくことのできる男が、男女の慾となると前後を顧るこゝとが出来ませんでした。それですからおしんの操を一度破りました以後は、おしんの好む好まぬに關はらず、母親の日も同宿の者の眼もくらし得るかぎり、此慾を満しました。それをおしんは私の愛情の猛烈なためだと解して居たのです。

これで私は結婚の積がないかといふに、さうでもないのです。いつそ結婚して了はうかと思つたことも有りましたが、どうもそれをおかみさんに打出していふ決心は起りませんでした。言へばおかみさんは大よろこびで承知することも知つては居ましたけれども、ぐづぐづで二月ばかり経ちました。

ところが四月の末のことです、其日は日曜で私は同僚の一人から是非遊びに來いと招かれまして、宿に歸つたのは夜の八時ごろでした、部屋に入るとおしんが其處に坐つて居ましたが私の顔を見るや直ぐ突伏て了つたので、流石の私も胸がドキリしました、急いで傍に坐わり、

『如何したの、え、如何したの。』

見ればおしんは泣いて居るのです。『え、如何したといふに、しんちゃんやコラしんちゃん。』

『だつてね、母上が餘りなことを言ふのですもの』といひながら舉げた顔を見ますと、なるほど涙は出て居るけれど泣いて居るのか、笑つて居るのか判らないのです。これで私も少しは胸が落着きましたから、

『何て言つたの母上さんが。』

『何とつて別に判然したことは言ひませんけれど、何だか二人のことを母上は感付て居るらしいことよ。』

『それで何とか言つて。』

『お前どうする氣かどしぬけに聞きますから、どうするツて何を、と言ひましたら、母上にはは明言言つておくれお前は澤村さんと約束でも仕たのではないかと言ひますから、私はたゞ黙つて居たのよ。さうすると母上さんが、女といふものは操が大事だとか何とか色々なことを言ふのですよ。私悲しくなつて泣きだしたの。さうするとね、母上さんが、若しお前が澤村さんの妻になる氣なら私も決して否は言はない、澤村さんなら私も氣に入つて居るのだからお前の決心さへちゃんと打明けて呉れ

れば私から今夜にでも澤村さんと相談するが如何かと申しますのよ。私もそんならさうして頭戴と言うかと思つたけれど、若しね、だしぬけに母上さんが貴様にそんなことを言ひだしたら、貴様に考へがあつて其とぶつかるといけなと思ひましたから、何と言つて可いか分らなくなつたから黙つて居ました、さうすると母上さんが黙つて了ひましたから、私尙ほ悲くなつて泣いて居ましたのよ。けれどもね、何とか言はないと思ひましたから、それぢやア母上さん何卒か貴女から澤村さんに聞いて見て下さいと頼みましたの。けれども其前に私から一寸澤村さんに言うて見ますから其後にして下さいと言ひましたのよ。それぢやアお前の可いやうになさいと母上さんは何だか機嫌が悪いのよ。だから私も直ぐお部屋へ来て先刻から待て居ましたの。』

斯う言はれて私はすつかり當惑して了つたのです。これが當前の方なら、『ウンよろしい、それなら私から直ぐ母上さんに相談しよう』と決心するところですけれど、私には其決心が出ないのです。私の性質として、かういふ場合に直ぐ熱することが出来ないのです。『それは困つた』と口を衝いて出るかといふに、さうでもないのです。『それでは母上さんが今に何とか相談に来るでせう、其時よく相談すれば可い』と静かに言つて火鉢にもたれて涙の痕をハンケチで拭いて居るおしんの背を撫でました。すると例の慾情が燃えあがりましたから我知らずおしんに摩寄りました。何と淺ましい人間ではありませぬか。其トタンにツツと障子を開けて入つて来たのが母上さんです。(其頃私はおかみさんと呼ぶ母上さんと言つて居ました、他の下宿人の一人二人もさう呼んで居たのです。) おしんの來て居る時、母上さんの來ることは此二三ヶ月殆ど無いことですから私は喫驚しておしんの傍を飛退きました。おしんは起つて外に出てゆきました。其あとに母上さんは坐りましたから、私も其向に坐わり、二人の仲には小さな長火鉢があるのです。『私少し御相談があるのですが』と先方は直ぐ切りだしました、そして力めて話を眞面目にしよんとする様子ですが、やはり言い悪いと見えて笑を含んで居るのです。『ハア』と言つたぎり私は何とも言葉が出ません。

『大概お察しでも無いませうが。それで貴様のお心持は如何でせうか、それを一應承たまはりませんとね、私も心配でなりませんから。』
『イ、え、最早僕には如何といふ意見もないのですから、母上さんのお心持一つで……』
『それでは私にも別に否應はないので無いませう、あんなものでも貴様が生涯連れ添て下さるといふことなら、私も貴様の御人物は承知して何時も感心して居ますのですから何よりだともよるこびます。』
『なに僕のやうな男が……』
『それでは急に話を決めませうでは無いませんか、それでないと、それでないと、まア貴様に限つて萬々そんなことはありませんけれども、若いもの同志のことですから世間では又た何と申すか分りませんし、さうすると貴様の學校の方も何です……』
『さうです、だから僕も何です、その一應その校長に丈けは打明けて相談して置うと思ひますから……』
『それは可いお考です、校長さんにお話になりまして、校長さんが表面仲に立てくださいれば何よりでいます』とこれで相談は決定たのです。

母は事の成行きを少しも疑ひませんので、校長に相談すれば萬事好結果と呑みこんで了つたのです。私が校長に相談すると言つたのは一方の血路を開いて置いたのです。私のやうな正直者は何時も波に流されながら波に乗つて居るのです。

母上さんが自分の居間へ私は一室しかない二階に居ました。に歸つてゆくや私はごろり寝ころんで二十分ばかり茫然して居ましたが、其間何も考がないので、たゞぼんやりと天井を眺めてまじくと眼瞼を動かして居ればかりです。けれども今一度おしんが来るだらうと待て居たのです。來さうもないから床をのべて寝てしまひました。

翌朝おしんが来て部屋を片附て哭れましたが、すつかり妻といふ變動です。眼だけで物を言つて、口数は多く利きません。袴の皺などを直してくれて、私を出てゆく時、ちひさな聲で、『それでは今日校長さんに相談して下さいな』と言ひました、其聲、其調子、少しも疑はないのです、相談といふのはたゞ一通り話して置くだけのこと、初から決めて居るのでした。

授業が終むと私は校長に少し相談があるからと、一室に連れ込んで、結婚の一條を話し

ました。けれど勿論私とおしんの關係は言ひません、たゞ手短に下宿屋の女主人から娘を貰つて呉れると言はれて居るが如何したものだらうと持込んだだけです。これが他のものなら直ぐ校長に娘との關係を疑はれるのですが、私は信用されて居るから校長も平氣なもので、

『君は結婚する氣かね』と聞きました、先づ。『私は如何でも可いと思ふのです、だから貴下の御意見を伺ひますので』と私も平氣な顔でいひました。

『まア不賛成だねえ、早いよ、せめて二十五六になればだが君は丁年にすら足りないのだからねえ、尤も君は二十五六の者でも及ばぬ確固したところのある人だけれど、矢張年は年だからねえ。』

『兎も角校長に相談してと先方には申して置きましたのですから……』

『宜しい、それぢやア私から謝絶つて上ませう』と校長の言葉は頗る手輕いのです。

『けれど随分先方では熱心なのですから唯だ謝絶るわけにも參らんやうですが。』

『おかみさんが全然君にほれこんで居ると聞いたが愈々事が持上がつたね。まア待ち給へ妙案

があるだらう』と校長は笑味を含んで考がへて居ましたが、

『妙案があるく、君今日歸つて斯ういひ給へ、校長に相談したら可らうと賛成したが、然し校長の言ふには下宿屋に居て下宿の者と結婚するのは不味い、それよりか其處を出て校長の宅に當分厄介になる、そして一月も経つたところ

で校長からお前さんのところの娘を澤村にくれんかと斯う相談を持こむ、さうすれば、人口もよし、勿論儀式にも適ふし、さうし給へと親切に言つてくれたから其處に従はうと思ふ、斯う言ひ給へ。それならおかみさんも尤もだと思ふに違ひない。其處で君は直ぐ私の宅に移

轉し給へ。狭いけれど玄關の三疊に弟が居る、當分あれと同居するサ。それで君は今後下宿屋に立寄らんやうにする、一月も経つたところで私から理窟をつけて謝絶を申込めば先方だつて文句はなしそれなりで君の身の方がつくといふものだ、これだ、これだ、此妙案しか外にあるまい。』

私は其意を奉じて下宿屋に歸りました。そして校長の妙案を持出しますと、母上さんは大よるこびです、おしんは鬱いで居ましたが別に否とも言ふことが出来ません。其晩おしんは十

二時過ぎまで私の室に居ましたが、其いぢらしい風は今も私の目に残つて居ます。繰返へして、どうか一月と言はず一時も早く一緒になつてくれるといひました。そして私が一月の間は遊にも来ないやうにするからと申しましたら、それでは九段の公園あたりで時々會つてくれるといひますから私もそれは承知したのであります。

校長の宅に移つてから一月経ちました、私一度も下宿屋には行きませんでした。けれどもおしんとは四度嬉しくしました。最後のとき、おしんは、

『それでは明日ですよ、きつと明日ですよ。若し明日校長さんが来て呉れないなら貴郎でも可いから来て下さいよ』と言つて、いそぐして私と別れました。

おしんの望通り、其翌日校長は下宿屋を訪ねました。私は如何なることかと、ないく心配で待て居たのです。事によるとおしんとの關係が全然ばれて了ひはせんかと、心配はそれのみでした。間もなく校長は歸宅て來ました。

『案外話が早く着いた。君、あのおかみさんなかく解つて居るなア』と、これを聞いて私

はほつと呼吸を吐きました。

『如何でした、おかみさん何とか申しませんでしたか。』

『何、何を言ふものか。私がこれ／＼で結婚はまだ早いし、それに澤村には未だ勉強がさせたからイヤといふ氣はないけれど、先づ當分見合せてもらひたい、縁があれば何年か先のことだが、何時のことかそれも分らぬから娘さんは良縁のあり次第何時でも嫁にやられたら可らうと言つただけサ。それでもとは言へないぢやアないか。』

『娘が傍に居ましたか。』

『イヤ私が入つたら直ぐ二階へ上つて了つた。』

『おかみさん何と申しました。』

『だから今いつたやうに私が言ふと、顔色を變へて居たが、私ももとは判事の妻です。無理にとは申しません。何卒か澤村さんに宜しく仰つて下さいだつて。判事の後家さんとは知らなかつた。君あれはなかく確固ものだぜ。』

『それから娘を御覽になりましたかお歸りに。』

『イ、ヤ見ない。二階で待て居たのサ。可愛さうに。』

* * * * *

その後私も二度とおしんには遇ひません。破談後一週間経つて、私は夜そつと下宿屋の前を通りましたら戸が閉まつて、「かしやの札が欄の中を薄く張つてあるのを見ましたばかりです。

正直者の仕事の一つがこれです。いづれ其中、外のをもお話いたしませう。

湯ヶ原より

内山君足下

何故さう急に飛び出したかとの君の質問は御尤である。僕は不幸にして之を君に白状してしまはなければならぬことに立到つた。然し

或はこれが僕の幸であるかも知れない、ただ僕の今の心は確かに不幸と感して居るのである、これを幸であつたと知るとは今後のことであらう。しかし將來これを幸であつたと知る時と雖も、たしかに不幸であると感ずるに違ひない。僕は知らないで宜い、唯だ感じたくないものだ。

『こゝに一人の少女あり。』小説は何時でもこんな風に初まるもので、批評家は戀の小説にも飽きくしたとの御註文、然し年若いお互の身に取つては、事の實際が欠張りこんな風に初るのだから致し方がない。僕は批評家の御註文に應ずべく神様が僕及び人類を造つて呉れなかつたことを感謝する。

去十三日の夜、僕は獨り机に倚掛つてぼんやり考へて居た。十時を過ぎ家の者に寢てしま

ひ、外は雨がしとく降つて居る。親も兄弟もない僕の身には、こんな晩は頗る感心しないので、おまけに下宿住、所謂半夜燈前十年事、一時和雨到心頭といふ一件だから堪忍たものでない、まづ僕は泣きだしさうな顔をして凝然と洋燈の傘を見つめて居たと想像し給へ。

此時フと思ひ出したのはお絹のことである、お絹、お絹、君は未だ此名にはお知己でないだらう。君ばかりでない、僕の朋友の中、何人も未だ此名が如何に僕の心に深い、優しい、穩かな響を傳へるかの消息を知らないのである。『こゝに一人の少女あり、其名を絹といふ』と僕は小説批評家への面當に今一度特筆大書する。

僕は此少女を思ひ出すと共に「戀しい」「見たい」「逢ひたい」の情がむらむらとこみ上げて來た。君が何と言はうとも實際さうであつたから仕方がない。此天地間、僕を愛し、又僕が愛する者は唯だ此少女ばかりといふ風な感情が爲て來た。あゝ是れ「浮きたる心」だらうか、何故に自然を愛する心は清く高くして、少女(人

間)を戀ふる心は「浮きたる心」。「いやらしい心」「不健全なる心」だらうか、僕は一念こゝに及べば世の倫理學者、健全先生、批評家、なんといふ動物を地球外に放逐したくなる、西印度の猛烈なる火山よ、何故に爾の熱火を此種の動物の頭上には注がざりしぞ!

僕はお絹が梨をむいて、僕が獨り入ひつて居る浴室に、そつと持て來て呉れたことを思ひ、二人で溪流に沿うて散歩したことを思ひ、其優しい言葉を思ひ、其無邪氣な態度を思ひ、其笑顔をおもひ、思はず机を打つて、「明日の朝に行く!」と叫べんた。

お絹とは何人ぞ、君驚く勿れ、藝者でも女郎でもない、海老茶式部でも鳥田の令嬢でもない、美人でもない、醜婦でもない、たゞの女である、湯ヶ原の温泉宿中西屋の女中である! 今僕の斯う筆を執つて居る家の女中である! 何れか百姓の娘である! 小田原は大都會と心得て居る田舎娘! この娘を僕が知つたのは昨年の夏、君も御存知の如く病後、赤十字社の歸者に勧められて二ヶ月間此湯ヶ原に滞在して居た時である。

十四日の朝僕は支度も勿々たる宿を飛び出した。銀座で半襟、簪、其他娘が喜びさうな

品を貰ひ奪へて汽車に乗つた。僕は今日まで女を喜ばすべく半襟を買はなかつたが、若し彼の嫁に此等の品を興つたら如何に喜ぶだらうと思ふと、僕もうれしくつて堪らなかつた。見榮坊！世には見榮で女に物を興つたり、興らなかつたりする者が澤山ある。僕は心から此貧しい贈物を我愛する田舎娘に呈上する！

夜來の雨はあがつたが、空気が濕つて、空には雲が漂うて居た。夏の初の旅、僕は何よりも是が好で、今日まで数々此季節に旅行した、然し、何等の幸福ぞ、胸に楽しい、嬉れしい空想を懐きながら、今夜は彼の娘に遇はれると思ひながら、今夜は彼の清く澄んだ温泉に入られると思ひながら、此好時節に旅行せんとは、

國府津で下りた時は日光雲間を洩れて、新緑の山も、野も、林も、眼さむるばかり輝いて來た。愉快！電車が暑氣よく走り出す、函嶺諸峰は奥ゆかしく、巖かに、面を壓して近いて來る！軽い、淡々しい雲が沖なる海の上を漂うて居る、鷗が飛ぶ、浪が碎ける、そら雲が目を隠した！薄い影が野の上を、海の上を這ふ、忽ち又明るくなる、此時僕は決して自分を不幸の男とは思はなかつた。又決して厭世家たるの権利は無かつた。

小田原へ着いて何時も感ずるのは、自分もどうせ地上に住むならば此處に住みたいといふことである。古い城、高い山、又に連なる大洋、且つ樹木が繁つて居る。洋館に依つて身を立てようといふ僕の空想としては此處に永住の家を持ちたいといふのも無理ではなからう。

小田原から先は例の人車鐵道。僕は一時も早く湯ヶ原へ着きたいので好きな小田原に半日を送るほどの樂も捨て、電車から下りて晝飯を終るや直ぐ人車に乗つた。人車へ乗ると最早半分湯ヶ原に着いた氣になつた。此人車鐵道の目的が熱海、伊豆山、湯ヶ原の如き温泉地にあるので、これに乗れば最早丈夫といふ氣になるのは温泉行の人々皆な同感であらう。

人車は徐々として小田原の町を離れた。僕は窓から首を出して見て居る。忽ちラツパを勇ましく吹き立て、車は傾斜を飛ぶやうに滑る。空は名残なく晴れた。海風は横さまに窓を吹きつける。顧みると町の旅館の旗が竿頭に白く動いて居る。

僕は頭を轉じて行手を見た。すると軌道に沿うて三人、田舎者が小田原の城下へ出るといふ旅装、赤く見えるのは娘の、白く見えるのは老母の、からげた腰も頑丈らしいのは老父さ

んで、人車の過ぎゆくのを避ける積りで立つて此方に向いて居る。

「オヤお絹！」と思ふ間もなく車は飛ぶ、三人は忽ち窓の下に來た。

「お絹さん！」と僕は思はず手を舉げた、お絹ははにかみながら、さつと顔をすめて、顔をしたのはつこり笑つて、さつと顔をすめて、顔をした。人と車との間は見るとさかつかつた。

若し同車の人が無かつたら僕は地段駄を踏んだらう、轡子をつけつけただらう。僕と向き合つて、眞面目な顔して居る役人らしい先生が居るではないか、僕は唯だがつかりして手を摸ぬいてしまつた。

言はでも知るお絹は最早中西屋に居ないのである、父母の家に歸り、嫁入の仕度に取りかつたのである。昨年の夏も他の女中から小田原のお絹さんなど雇られて居たのを自分は知つて居る、あゝ愈々さうだ！と思ふと僕は嫌になつてしまつた。一口に言へば、海も山もない、沖の大島、彼れが何だらう。大浪小浪の景色、何だ。今の今まで僕をよるこぼして居た自然は、忽ちの中は何の面白味もなくなつてしまつた。

僕とは他人になつてしまつた。湯ヶ原の温泉は僕になじみの深い處であるから、たといお絹が居ないでも僕に取つて興味

のない譯はない、然し既にお絹を知つた後の僕には、お絹の居ないことは寧ろ不愉快の場所となつてしまつたのである。不愉快の人車に搭られて此の淋びしい溪間に送り届けられることは、頗る苦痛であつたが、今更引返へす事も出来ず、其日の午後五時頃、此宿に着いた。突然のことであるから宿の主人を驚かした。主人は忠實な人であるから、非常に歓迎して呉れた。湯に入つて居ると女中の一人が来て、

『小山さんお氣の毒ですね。』

『何故。』
 『お絹さんは最早居ませんよ』と言ひ捨て、ばた／＼と逃げて去つた。哀れなる哉、これが僕の失戀の弔詞である！ 失戀！ 失戀が聞いてあされる。僕は戀して居たのだらうけれども、夢に、實に夢にもお絹をどうしようといふ事はなかつた、お絹も亦た、僕を憎くからず思つて居たらう、決して其以上のことは思はなかつたに違ひない。

處が其夜、女中どもが僕の部屋に集つて、宿の娘も来た、お絹の話が出て、お絹は愈々小田原に嫁にゆくことに定まつた一條を聞かされた時の僕の心持、僕の運命が定つたやうで、今更何とも言へぬ不快でならなかつた。しから

ば矢張失戀であらう！ 僕はお絹を自分の物、自分のみを愛すべき人と、何時の間にか思込んで居たのであらう。

土産物は女中や娘に分配してしまつた。彼等は確かによるこんだ、然し僕は嬉しくも何ともない。

翌日は雨、朝からしよ／＼と降つて陰鬱極まる天氣。溪流の水増してザア／＼と騒々しいこと非常。晝飯に宿の娘が給仕に来て、僕の顔を見て笑ふから、僕も笑はざるを得ない。

『貴所はお絹に逢ひたくつて？』

『可笑しい事を言ひますね、昨年あんなに世話になつた人に會ひたいのは當然だらうと思ふ。』

『逢はして上げませうか？』

『有難いね、何分宜しく。』

『明日きつとお絹さん宅へ來ますよ。』

『來たら宜しく被仰て下さい』と僕が眞實にしないので、娘は黙つて唯だ笑つて居た。お絹は此娘と從姉妹なのである。

午後は降り止んだが晴れさうにもせず雲は地を這ふやうにして飛ぶ、狭い溪は益々狭くなつて、僕は牢獄にでも坐つて居る氣。座敷に坐つたまゝ、爲る事もなく茫然と外を眺めて居たが、ちらと僕の眼を遮つて直ぐ又隣家の軒先で隠

れてしまつた者がある。それがお絹らしい。僕は直ぐ外に出た。

石ばかりごろ／＼した往來の淋しき。僅に十軒ばかりの温泉宿。其外の百姓家とても數へる計り、物を商ふ家も準じて幾軒もない寂寞たる漆間！ この漆間が雨雲に閉されて見る物悉く光を失うた時の光景を想像し給へ。僕は溪流に沿つて此淋しい往來を當もなく歩るいた。

流を下つて行くも二三丁、上れば一丁、其中にペンキで塗つた橋がある、其間を、如何な心地で僕はぶら／＼ついたらう。温泉宿の欄干に倚つて外を眺めて居る人は皆な泣き出しさうな顔付をして居る、軒先で子供を負て居る娘は病人のやうで背の子供はめそ／＼と泣いて居る。陰鬱！ 屈託！ 寂寥！ そして僕の日には何處かに悲惨の影さへも見えるのである。

お絹には出逢はなかつた。當り前である。僕は其翌日降り出しさうな空をも恐れず十國峠へと單身宿を出た。宿の者は總が／＼りて止めたが聞かない、伴を連れて行けと勸めても謝絶。山は雲の中、僕は雲に登る積りて連二無二登つた。

僕は今日まで斯んな凄惨たる光景に出遇つたことはない。足の下から灰色の雲が忽ち現

はれ、忽ち消える。草原をわたる風は物すごく鳴つて耳を揉める、雲の縫間々々から見える者は山又山、天地間僕一人、鳥も鳴かず。僕は暫らく絶頂の石に倚つて居た。この時、戀もなければ、戀もない、たゞ懐舊の感に堪へず、我生の孤獨を泣かざるを得なかつた。

歸路に眞闇に繁つた森の中を通る時、僕は斯んな事を思ひながら歩いた、若し僕が足を踏み滑べらして此溪に落ちる、死んでしまふ、中西屋では僕が歸らぬので大騒ぎを初める。樵夫を就うて僕を索す、此暗い溪底に僕の死體が横つて居る、東京へ電報をうつ、君か淡路君か飛んで来る、そして僕は焼かれてしまふ。天地間最早小山某といふ晝かきの書生は居なくなる！と僕は思つた時、思はず足を止めた。頭の上の眞黒に繁つた枝から水がぼた／＼落ちる、墓穴のやうな溪底では水の激して流れる音が凄く響く。僕は身の毛のよだつを感じた。死人のやうな顔をして僕の歸つて來たのを見ても、宿の者は如何なに驚いたらう。其驚よりも僕の驚いたのは此日お絹が來たが、午後又實家へ歸つたとの事である。其夜から僕は熱が出て今日で三日になるがまだ快然しない。山に登つて風邪を引いたのであ

らう。君よ、君は今の時文評論家でないから、此三日の間、床の中に呻吟して居た時、考へたことを聞いて呉れるだらう。戀は力である、人の抵抗することの出来ない力である。此力を認識せず、又此力を壓へ得ると思ふ人は、未だ此方に觸れなかつた人である。其證據には曾て戀の爲めに苦み悶えた人も、時經つて、普通の人となる時は、何故に彼時自分が戀の爲めに斯くまで苦悶したかを、自分で疑がふ者である。則ち彼は戀の力に觸れて居ないからである。同じ人ですら其通り、況んや曾て戀の力に觸れたことのない人が如何して他人の戀の消息が解らう、その樂が解らう、其苦みが解らう？

戀に迷ふを笑ふ人は、怪しげな傳説、學説に迷はぬがよい。戀は人の至情である。此至情をあざける人は、百萬年も千萬年も生きるが可い、御氣の毒ながら地球の皮は忽ち諸君を吸ひ込むべく待つて居る、泡のかたまり先生諸君、僕は諸君が此不可思議なる大宇宙をも統御して居るやうな瀬構をして居るのを見ると冷笑したくなる。僕は諸君が今少しく眞面目に、謙遜に、嚴肅に、此人生と此天地の問題を見て貰ひたい

のである。諸君が戀を笑ふのは、畢竟、人を笑ふのである、人は諸君が思つてよりも複雑なる動物である。若し人の心に宿る所の戀を知らず、べく信ずべからざる者ならば、人生途に何の價ぞ、人の心ほど虚偽な者は無いではないか。諸君にして若し、月夜齒を聞いて、諸君の心に少しにても、永遠の儂が映るならば、戀を信ぜよ。若し、諸君にして中江兆民先生と同一種であつて、十八里零圓氣を振舞はして満足して居るならば、諸君は何の權威あつて、一寸短し何に不滅の命ぞと云云と歌ふ人の自由に干渉し得るぞ。一若し時は二度はないと稱してあらゆる肉慾を恣まゝにせんとする青年男女の自由に干渉し得るぞ。

内山君足下、先づ此位にして置かう。さて斯の如くに僕は戀其物に隨喜した。これは失禮の賜かも知れない。明後日は僕は歸京する。小田原を通る時、僕は如何な感があるだらう。

小山生

少年の悲哀

少年の歡喜が詩であるならば、少年の悲哀もまた詩である。自然の心に宿る歡喜にして若し歌ふべくんば、自然の心にさゝやく悲哀も亦た歌ふべきであらう。

兔も角、僕は僕の少年の時の悲哀の一ツを語つて見ようと思ふのである。(と一人の男が話しだした。)

僕は八歳の時から十五の時まで叔父の家で生育たので、其頃、僕の父母は東京に居られたのである。

叔父の家は其土地の豪家で、山林田畑を澤山持つて、家に使ふ男女も常に七八人居たのである。

僕は僕の少年の時代を田舎で過ごさして呉れた父母の好意を感謝せざるを得ない、若し僕が八歳の時父母と共に東京に出て居たならば、僕の今日は餘程遊つて居ただらうと思ふ。少くとも僕の智慧は今よりも進んで居た代りに僕の

心は zeroes zeroes 一巻より高遠にして清新なる詩想を受用し得ることが出来なかつただらうと信ずる。

僕は野山を駆け暮らして、我幸福なる七年を送つた。叔父の家は丘の麓に在り、近郊には樹林多く、川あり泉あり池あり、そして程遠からぬ處に瀬戸内々海の入江がある。山にも野にも林にも溪にも海にも川にも僕は不自由を爲なかつたのである。

處が十二の時と記憶する、徳二郎といふ下男が或日僕に今夜面白い處に伴れてゆくが行かぬかと誘そつた。

「何處だ」と僕は訊ねた。

「何處だと聞つしやるな、何處でも可えぢや御座んせんか、徳の伴れてゆく處に面白くない處はない」と徳二郎は微笑を帯びて言つた。此徳二郎といふ男は其頃二十五歳位、屈強な若者で、叔父の家には十一二の年から使はれて居る孤兒である。色の淺黒い、輪廓の正しい立派な男、酒を飲めば必ず歌ふ、飲ざるも亦た

唄ひながら働くといふ至極元氣の可い男であつた。常も樂しさうに見えるばかりか、心事も至て正しいので孤兒には珍しいと叔父をはじめ土地の者皆に感心せられて居たのである。「然し叔父さんにも叔母さんにも内證ですよ」と言つて、徳二郎は唄ひながら裏山に登つてしまつた。

頃は夏の最中、月影鮮やかなる夜であつた。僕は徳二郎の後について田圃に出で、稻の香高き畔路を走つて川の堤に出た。堤は一段高く、此處に上れば廣々とした野面一面を見渡されるのである。未だ宵ながら月は高く澄んで冴えた光を野にも山にも漲ぎらし、野末には鶺鴒かりて夢の如く、林は煙をこめて浮ぶが如く、背の低い川楊の葉末に置く露は珠のやうに輝いて居る。小川の末は間もなく入江、汐は満ちふくらんで居る。船板をつぎ合はして懸けた橋の急に低くなつたやうに見ゆるのは水面の高くなつたので、川楊は半ば水に沈んで居る。

堤の上はそよ吹く風あれど、川面は漣だに立たず、澄み渡る大空の影を映して水の面は鏡のやう。徳二郎は堤を下り、橋の下に繋いである小舟の纜を解いて、ひらりと乗ると今まで静まりかへつて居た水面が俄に波紋を起す。徳

二郎は、
『坊様早く早く！』と僕を促しながら櫓を立
てた。

僕の飛び乗るが早いのか、小舟は入江の方へと
下りはじめた。

入江に近くにつれて川崎次第に廣く、月は川
面に其清光を満し、左右の堤は次第に遠ざか
り、願れば川上は既に霧にかくれて、舟は何
時しか入江に入つて居るのである。

廣々した湖のやうな此入江を横ぎる舟は僕
等の小舟ばかり。徳二郎は平時の朗かな聲に引
きかへ此夜は小聲で唄ひながら静かに櫓を漕い
で居る。潮の退た時は沼とも思はるゝ入江が高
潮と月の光とでまるで様子が變り、僕には平時
見慣れた泥臭い入江のやうな気がしなかつた。

南は山影暗く、倒に映り北と東の平野は月光
蒼茫として何れか陸、何れか水のけじめさへつ
かず、小舟は西の方を指して進むのである。

西は入江の口、水狭くして深く、陸迫りて高
く、此處を港に錨を下ろす船は数こそ少ないが
形は大きく大抵は西洋形の帆前船で、其積荷は
此濱で出来る食鹽、其外土地の者で朝鮮貿易に
従事する者の持船も少からず、内海を往來す
る和船もあり。兩岸の人家低く高く、山に據り

水に臨む其數數百戸。

入江の奥より望めば燈籠高くかゝりて星かと
ばかり、燈影低く映りて金蛇の如く、寂寞たる
山色月影の裡に浮んで恰も畫のやうに見える
のである。

舟の進むにつれて此小な港の聲が次第に聞
えだした。僕は今此港の光景を詳細しく説く
ことは出来ないが、其夜僕の眼に映つて今日尙
ほありくと思ひ浮べることの出来る文を言ふ
と、夏の夜の月明らかな晩であるから船の者は
甲板に出で家の者は戸外に出で、海にのぞむ窓
は悉く開かれ、燈火は風にそよげども水面は
油の如く、笛を吹く者あり、歌ふものあり、三
絃の音につれて笑ひどよめく聲は水に臨める青
樓より起るなど、如何にも楽しさうな花やかな
有様であつたことで、然し同時に此花やかな一
幅の畫圖を包む處の、寂寥たる月色山影水光
を忘るゝことが出来ないのである。

帆前船の暗い影の下を潜り、徳二郎は舟を薄
暗い石段の下に着けた。

『お上りなさい』と徳は僕を促した。堤の下
で『お乗なさい』と言つたぎり彼は舟中僕に一語
を交へなかつたから、僕は何の爲めに徳二郎が
此處に自分を伴うたのか少しも解らない、然し

言ふまゝに舟を出た。

櫓を繋ぐや徳二郎も續いて石段に上り、先に
立つてずん／＼登つて行く、其後から僕も無言
で從て登つた。石段は其間半間より狭く、四方
は高い壁である。石段を登りつめると或家の中
庭らしい處へ出た。四方板敷で圍まれ隅に用水
桶が置いてある、板敷の一方は見越に夏蜜柑の
木らしく暗く繁つたのが其頂を出して居る、
月の光はくつきりと地に印して寂とし人の氣勢
もない。徳二郎は一寸立ち止まつて聽耳を立
てたやうであつたが、つか／＼と右なる方の板
敷に近い向へ押すと此處は潜内になつて居て
黒い戸が音もなく開いた。見ると戸に直ぐ接し
て梯子段がある。戸が開くと同時に足音靜に
梯子段を下りて來て、

「徳さんかえ？」と顔のをぞいたのは若い女
であつた。

「待つたかね？」と徳二郎は女に言つて、更に
僕の方を顧み、

「坊様を連れて來たよ」と言ひ足した。

「坊様お上んなさいナ。早くお前さんも上つて
下さい、此處でぐ／＼して居ると可けないか
ら」と女は徳二郎を促したので、徳二郎は早
くも梯子段を登りはじめ、

「坊様暗う御座いますよ」と言つたがり、女と共に登つて了つたから僕も爲方なしに其後に從いて暗い、狭い、急な梯子段を登つた。

何ぞ知らん此家は青樓の一で、今女に導かれて入つた座敷は海に臨んだ一室、欄に凭れば港内は勿論入江の奥、野の木、さては西なる海は涯までも見渡されるのである。然し座敷は六疊敷の、畳も古び、見るからして餘り立派な室ではなかつた。

一坊様、さア此處へ入つしやい」と女は言つて座布團を欄の下に運び、夏橙、其他の果物菓子などを僕にすゝめた。そして次の間を開けると酒肴の用意がしてある。それを運び込んで女と徳二郎は差向に坐つた。

徳二郎は平常にない慎しい顔をして居たが、女のさす盃を受けて一呼吸に呑み干し、女は「愈々何日と決定つた」と女の顔を熟と見ながら訊ねた。女は十九か二十の年頃、色青ざめて左も力なげなる様は病人ではないかと僕の疑つた位。

「明日、あさつて、明々後日」と女は指を折つて、「明々後日に決定つたの。然しね、私は今になつて又気が迷つて來たのよ」と言ひつゝ首を垂れて居たが、そつと袖で眼を拭つた様子。其間

に徳二郎は手酌で酒をグイグイ煽つて居た。

「今更如何と言つて爲方がないぢやアないか。」

「それはさうだけれど——考へて見ると死んだほうが何程増しだか知れないと思つて。」

「ハツハツ、坊様、此姉様が死ぬと言ひますが如何しませうか。……オイ、約束の坊

様を連れて來たのだ、能く見て呉れないか。」

「先刻から見て居るのよ、成程能く似て居ると思つて感心して居るのよ」と女は言つて笑を

含んで熟と僕の顔を見て居る。

「誰に似て居るのだ」と僕は驚いて訊ねた。

「私の弟にです、坊様を弟に似て居るな

どともつたいない事だけれど、そら、これを御

覽なさい」と女は帯の間から一枚の寫眞を出して僕に見せた。

「坊様、此姉様が其寫眞を徳に見せましたから、

これは宅の坊様と少しも變らんと言ひましたら

是非連れて來て呉れと頼みますから今夜坊様を

連れて來たのだから、澤山御馳走を爲す貰はんと

可けませんぞ」と徳二郎は言ひつゝも止め度

なく飲んで居る。女は僕に拵寄つて、

「サア何でも御馳走しますとも、坊様が可う

御座いますか」と女は優しく言つて莞爾笑つ

た。

「何にもいらぬ」と僕は言つて横を向いた。

「それぢや舟へ乗りませう、私と舟へ乗りませう、え、さう爲ませう」と言つて先に立つて出て行くから僕も言ふまゝに女の後に從いて梯子段を下りた、徳二郎は唯だ笑つて見て居るばかり。

先の石段を下りるや若き女は先僕を乗らして後、繩を解いてひらりと飛び乗り、さも軽々と櫓を採りだした。少年ながらも僕は此女の舉動に驚いた。

岸を離れて見上げると徳二郎は欄に倚つて見下ろして居た、そして内よりは燈が射し、外よりは月の光を受けて彼の姿が明白と見える。

「氣をつけないと危難いぞ」と、徳二郎は上から言つた。

「大丈夫」と女は下から答へて一直ぐ歸るから待て居てお呉れ。」

舟は暫時大船小船六七艘の間を縫うて進んで居たが間もなく廣々とした沖合に出た。月は益々冴えて秋の夜かと思はれるばかり、女は漕手を止めて僕の傍に坐つた。そして月を仰ぎ又四邊を見廻はしながら、

「坊様、あなたは何か歳」と訊ねた。

「十二。」

「私の弟の宮眞も十二の時の時です、今は十六……さうだ十六だけれど十二の時に別れたぎり合はないのだから今でも坊様と同じやうな気がするのですよ」と言つて僕の顔を見つめて居たが忽ち涙ぐんだ。月の光を受けて其顔は猶更蒼ざめて見えた。

「死んだの？」

「否、死んだのなら却て斷念がつきませんが別れた限、如何なつたのか行方が知れないのですよ。両親に早く死別れて唯つた二人の姉弟ですから互に力にして居たのが今では別れ〜になつて生死さへ分らんやうになりました。それに私も近い中朝鮮に伴れて行かれるのだから最早此世で會ふことが出来るか出来ないか分りません」と言つて涙が頬をつたうて流れるのを拭きもしないで僕の顔を見たまゝすゝり泣に泣いた。

僕は陸の方を見ながら黙つて此話を聞いて居た。家々の燈火は水に映つてきら〜と揺らいで居る。櫓の音をゆるやかに軋らせながら大船の傳馬を漕で行く男は澄んだ聲で船歌を流す。僕は此時、少年心にも言ひ知れぬ悲哀を感じた。忽ち小舟を飛ばして近いて來た者がある、

徳二郎であつた。

「酒を持つて來た！」と徳は大聲で二三間先から言つた。

「嬉れしいのねえ、今坊様に弟のことを話して泣いて居たの」と女の言ふ中徳二郎の小舟は傍に來た。

「ハツハツ、大概そんなことだらうと酒を持って來たのだ、飲みなく〜私が歌つてやる！」

と徳二郎は既に酔つて居るらしい。女は徳二郎の渡した大コップに満々と酒をついで呼吸もつかずに飲んだ。

「も一ツ」と今度は徳二郎が注でやつたのを女は又もや一呼吸に飲み干して月に向つて酒氣を嘔と吐いた。

「サアそれで可い、これから私が歌つて聞かせよ。」

「イ、エ徳さん、私は思切つて泣きたい、此處なら誰も見て居ないし聞えもしないから泣かして下さいな。思ひ切つて泣かして下さいな。」

「ハツハツ、そんなら泣きな、坊様と二人で聞くから」と徳二郎は僕を見て笑つた。

女は突伏して大泣に泣いた、さすがに聲は立て得ないから背を波打たして苦しきうであつた。徳二郎は急に眞面目な顔をしてこの有様を

見て居たが、忽ち顔を背向け山の方を見て黙つて居る、僕は暫くして、

「徳、最早歸らう」と言ふや女は急に頭を上げて、

「御免なさいよ、眞實に坊様は私の泣く〇を見て居てもつまりません。……私坊様が來て下さつたので弟に會つたやうな気が致しました。

坊様も御達者で早く大きくなつて豪い方になるのですよ」とおろ／＼聲で言つて「徳さん眞實に餘り遅くなるとお宅に悪いから早く坊様を連れてお歸りよ、私は今泣いたので昨日からくさくさして居た胸がすいたやうだ。」

女は僕等の舟を送つて三四丁も來たが、徳二郎に叱られて漕手を止めた、其中に二般の小舟はだん／＼遠ざかつた。舟の別れんとする時、女は僕に向つて何時までも「私の事を忘れんで居て下さいましナ」と繰返して言つた。

其後十七年の今日まで僕は此夜の光景を明白と憶えて居て忘れようとしても忘るゝことが出来ないものである。今も尙ほ憐れな女の顔が眼のさきにちらつく。そして其夜、淡い霞のやうに僕の心を包んだ一片の哀情は年と共に濃く

なつて、今はたゞ其時の僕の心持を思ひ起して
さへ堪へ難い、深い、静かな、やる瀬のない悲
哀を覚えるのである。

其後徳二郎は僕の叔父の世話で立派な百姓
になり今では二人の兒の父親になつて居る。

流の女は朝鮮に流れ渡つて後、更に何處の
涯に漂泊して其果敢ない生涯を送つて居るや
ら、それとも既に此世を辭して寧ろ靜肅なる死
の國に赴いたことやら、僕は無論知らないし徳
二郎も知らんらしい。

(明治三十五年八月)

春の鳥

(一)

今より六七年前、私は或地方に英語と數學の教師を爲て居たことが御座います。其町に城山といふのがあつて大木暗く繁つた山で、餘り高くはないが甚だ風景に富で居ましたゆゑ私は散歩がてら何時も此山に登りました。

頂上には城址が残つて居ます。高い石垣に葛藟からみ附いて其が眞紅に染つて居る抜擗など得も言はれぬ趣でした。昔は天主閣の建て居た處が平地になつて、何時しか姫小松疎に生ひたち夏草階間なく茂り、見るからに昔を偲ばす衰れた様となつて居ます。

私は草を敷いて身を横たへ、數百年斧の入れたことのない鬱たる深林の上を見越しに近郊の田園を望んで樂んだことも幾度であるか解りませんほどでした。

或日曜の午後と覺えて居ます、時は秋の末で大空は水の如く澄んで居ながら野分吹きすさんで城山の林は烈しく鳴つて居ました。私は

例の如く頂上に登つて、やゝ西に傾いた日影

の遠村近郊を明く染めて居るのを見ながら、持つて來た書籍を讀んで居ますと、突然人の話聲が聞えましたから石垣の端に出て下を見下しました。嗚呼怪しい者でなく三人の小娘が枯枝を拾つて居るのでした。風が烈しいので得物も多いかして澤山背に負たまゝ、猶も四邊をあさつて居る様子です。むつまじげに話しながら樂しげに歌ひながら拾つて居ます、それが何れも十二三、多分何村あたりの農家の子供でせう。

私は暫時見下して居ましたが、又もや書籍の方に眼を移して何時か小娘のことは忘れて了ひました。するとキヤツといふ女の聲、驚いて下を見ますと、三人の子供は何に懼れたのか枯木を背負たまゝ、アタフタと逃げ出して忽ち石垣の彼方に其姿を隠して終ひました。可怪なこと、私は其近處を注意して見下して居ると、薄暗い森の奥から下草を分ながら道もない處を此方へやつて來る者があります。初

は何物とも知れませんでした。森を出て石垣の下に現はれた處を見ると十一か十二歳と思はるゝ男の兒です。箱の筒籠を背て白木綿の兵兒帯をしめて居る様子は農家の兒でも町家の者でもなさゝうででした。

手に太い棒切を持つて四圍をきよろろ見廻して居ましたが、フト石垣の上を見上げた時息はず二人は顔を見合しました。子供は熱と私の顔を見つめて居ましたが、やがてニヤリと笑ひました。其笑が尋常でないのです。生白い丸顔の、眼のぎよろりとした様子までが唯の子供でないと私は直ぐ見て取りました。

「先生、何を爲て居るの」と私を呼びかけましたので私も一寸驚きましたが、元來私の當時教師を務めて居た町は極く小さな城下ですから、私の方では自分の教兒の外の人を餘り知らないでも土地の者は都から來た年若い先生を大概知つて居るので、今此子供が私を呼びかけたも實は不思議はなかつたのです。其處へ氣がつくや私も聲を俄しうして、「書籍を讀んで居るのだよ。此處へ來ませんか」と言ふや、兒童はイキなり石垣に手をかけて猿のやうに登りはじめました。高五間以上もある壁のやうな石垣ですから私は驚いて

止めようとと思つて居る中に早くも中程まで来て、手近の葛に手が届くとすら〜とこれを手繰つて忽ち私の傍に突立ちました。そしてニヤ〜と笑つて居ます。

『名前は何と呼ぶの?』と私は問ひました。

『六』『六?』六さんといふのかね』と問ひます

と、児童は點頭いたまふ例の怪しい笑を洩して口を少し開けたまふ、私の顔を氣味の悪いほど熟視して居るのです。

『何歳かね、歳は?』と私が問ひますと、怪訝な顔を爲して居ますから、今一度問返しました。すると妙な口つきをして唇を動かして居ましたが急に両手を開いて指を屈して一、二、三と讀んで十、十一と飛ばし、顔をあげて眞面目に、

『十一だ』といふ様子は漸と五歳位の兒の、やう〜數を覺えたのと少しも變らないのです。

そこで私も思はず能く知つて居ますね。母上さんに教つたのだ。學校へゆきますか。往かない。何故往かないの?』

児童は頭を傾げて向を見て居ますから考へて居るのだと私は思つて待つて居ました。すると突然児童はワア〜と啞のやうな聲を出して断出しました。『六さん六さん』と驚いて

私が呼止めますと、
『烏々』と叫びながら後も振りむかないで天主臺を駈下りて忽ち其姿を隠くしてしまひました。

(二)

私は其以下宿屋住でしたが何分不自由で困りますから色々人に頼んで、遂に田口といふ人の二階二間を借り、衣食一切のことを任すことにしました。

田口といふは昔の家老職、城山の下に立派な屋敷を昔のまゝに構へて存福に暮して居ましたので此二階を貸し私を世話して呉れたのは少からぬ好意で在たのです。

處で驚いたのは田口に移つた日の翌日、朝早く起きて散歩に出ようとすると城山で逢つた児童が庭を掃いて居たことです。私は、

『六さん、お早う』と聲をかけましたが、児童は私の顔を見てニヤリ笑つたまふ、草幣で落葉を掃き、言葉を出しませんでした。

日の経つ中に此怪しい児童の身の上が次第に解かつて來ました、と言ふのは畢竟私が氣をつけて見たり聞いたりしたからでせう。児童は名を六藏と呼びまして田口の主人には

甥に當り、生れついでの白痴であつたのです。母親といふは四十五六、早く夫に分れまして實家に歸り、二人の兒を連れて兄の世話になつて居たのであります。六歳の姉はおしげと呼び其時十七歳、私を見る處ではこれも亦た白痴と言つてよいほど哀れな女でした。

田口の主人も初の程は白痴のことを隠して居るやうでしたが、何にをいふにも隠し得ること無いのですから終に或夜のこと私の室に來て教育の話の末に甥と姉の白痴であることを話しだし、如何にかしてこれに幾分の教育を加へることは出來ないものかと私に相談をいたしました。

主人の語る處に依ると此哀れなきやうだいの父親といふは非常な大酒家で、其爲に生命をも縮め、家産をも蕩盡したのださうです。そして姉も弟も初の中は小學校に出して居たのが、二人とも何一つ學び得ずいくら教師が骨を折つても無益で、到底他の生徒と同時に教へること出來ず、徒らに他の腕白生徒の嘲弄の道具になるばかりですから、却て氣の毒に思つて退學をさせたのださうです。

或程詳しく聞いて見ると姉も弟も全くの白痴であることが愈々明白になりました。

然に主人の口からは言ひませんが、主人の妹、則ちきやうだいの母親といふも普通から見ると餘程抜けて居る人で、二人の子供の白痴の源因は父の大酒にもよるでせうが、母の遺傳にも因ることは私は直ぐ看破しました。

白痴教育といふが有ることは私も知つて居ますが、これには特別の知識の必要であることですから私も田口の主人の相談には浮かと思ひませんでした。たゞ其容易でないことを話したゞいで止しました。

けれども其後だん／＼おしげと六蔵の様子を見ると、如何にも氣の毒でたまりません。不具の中にもこれほど哀れなものはないと思ひました。嘔、嘔、盲などは不幸には相違ありません。言ふ能はざるもの、聞く能はざる者、見る能はざる者も、尙ほ思ふことは出来ず。思うて感ずることは出来ず。白痴となると、心の嘔、嘔、盲です。人角、人の形をして居るのですから。兎も角、人の形をして居るのですから全く感じがな、譯ではないが普通の人と比べては十の一にも及びません。又た不完全ながらも心の調子が整うて居ればまだしもですが、更に歪になつて出来て居るのですから、様子が一変です。泣くも笑ふも喜ぶも悲も皆な普

通の人から見ると調子が狂つて居るのだから猶ほ哀れです。

おしげは兎も角、六蔵の方は兒童だけに無邪氣なところが有りますから、私は一倍哀れに感じ、人の力で出来ることならば如何にかして少しても其智能の働きの増してやりたいと思ふやうになりました。

すると田口の主人と話してから二週間も経つた後のこと、夜の十時ごろでした、最早床に就うかと思つて居る處へ、

「先生、お寝ですか」と言ひながら私の室に入つて来たのは六蔵の母親です。背の低い、瘦形の、頭の小さい、凸の顔、何時も齒を染めて居る昔風の婦人。口を少し開けて人のよさうな、たわいのない笑を何時も其眼尻と口元に現はして居るのが此人の癖でした。

「そろ／＼寝ようかと思つて居る處です」と私が言ふ中、婦人は火鉢の傍に坐つて、

「先生、私は少しお願が有るのですが」と謂つて言ひ出しにくい様子。「何ですか。」「六蔵のこととで御座います。あのやうな馬鹿ですから將外のこと案じられて、其を思ふと私は自分の馬鹿を棚に上げて、六蔵のことが氣にかゝつてならないので御座います。」

「御尤です。けれどもさうお案じなさるほどのことも有りますまい」とツイ私も慰めの文句を言ふのは矢張人情でせう。

(三)

私は其夜だん／＼と母親の言ふ處を聞きましたが何よりも感じたのは親子の情といふことでした。前にも言つた通り此婦人とても餘程抜けて居ることは一見して解るほどですが、それが我子の白痴を心配することは普通の親と少しも變らないのです。

そして母親も亦た白痴に近いだけ、私は益益憐を深うしました。思はず私も貰き泣きをした位でした。

其處で私は六蔵の教育に骨を折つて見る約束をして氣の毒な婦人を歸へし、其夜は遅くまで、いろ／＼と工夫を凝らしました。さて其翌日からは散歩ごとに六蔵を伴ふことにして、機に應じて幾分かづ、智能の働きの加へることに致しました。

第一に感じたのは六蔵に數の觀念が缺けて居ることです。一から十までの數が如何しても讀めません。幾度も繰返して教へれば、二、三と十まで口で讀み上げるだけのことは爲ますが、

路傍の石塊を拾うて三箇並べて、幾個だとき、ますと考がへてばかり居て返事を爲ないので。無理にきくと初は例の怪しげな笑方をして居ますが後には泣きだしさうになるのです。

私も苦心に苦心を積み、根氣よく務めて居ました。或時は八幡宮の石段を敷へて昇り、一、二、三と進んで七と止り、七だよと言ひ聞して、さて今の行段は幾個だとき、ますと、大きな聲で十と答へる始末です。松の並木を敷へても、菓子を褒美に其敷を教へても、結果は同じことです。一、二、三といふ言葉と、其言葉が示す敷の觀念とは、此兒童の頭に何の關係をも有つて居ないのです。

白痴に敷の觀念の缺けて居ることは聞ては居ましたが、これほどまでとは思ひもよらず、私も或時は泣きたい程に思ひ、兒童の顔を見つめたまゝ、涙が自然に落ちたこともありました。

然るに六藏はなか／＼の腕白者で、悪戯を爲るときは随分人を驚かすことがあるのです。山登りが上手で、城山を駆廻るなどまるで平地を歩くやうに、道のあるところ無い處、サツサと飛ぶのです。ですから従來も田口の者が六藏は何處へ行つたかと心配して居ると書飯を食つ

たまゝ出て日の暮方になつて城山の岨から田口の奥庭にひよつくり飛び下りて歸つて来るのださうです。木拾ひの娘が六藏の姿を見て逃げ出したのは必定これまで幾度となく此白痴の腕白者に嚇されたものと私も思ひ當つたのであります。

けれども又た六藏は直きに泣きます。母親が兄の手前を兼ねて折り／＼痛く叱ることがあり、手の平で打つこともあり、其時は頭をかゝへ身を縮めて泣き叫びます。しかし直ぐと笑つて居る様は打たれたことを全然忘れて終つたらしく、これを見て私は猶更此白痴の痛しいことを感じました。

かゝる有様ですから六藏が歌など知つて居る筈も無さうですが知つて居ます。木拾ひの唄ふやうな俗歌を誦んじて、をり／＼低い聲でやつて居ます。

或日私は一人で城山に登りました、六藏を伴れてと思ひましたが姿が見えなかつたのです。

冬ながら九州は暖國ゆゑ天氣さへ佳ければ極く暖かで、空氣は澄んで居るし、山のぼりには却て冬が可いのです。

落葉を踏んで、頂に達し例の天主臺の下まで

ゆくと、寂々として満山聲なき中に、何者か優しい聲で歌ふのが聞えます、見ると天主臺の石垣の角に六藏が馬乗に跨がつて、兩足をふら／＼動かしながら、眼を遠く放つて俗歌を歌つて居るのでした。

空の色、日の光、古い城址、そして少年、まるで畫です。少年は天使です。此時私の眼には六藏が白痴とは如何して見えます。六藏が白痴と天使、何といふ哀れな對照でせう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の兒であるかと、つく／＼感じました。

今一ツ六藏の妙な癖をいひますと、此兒童は鳥が好で、鳥さへ見れば眼の色を變て騒ぐことです。けれども何を見ても鳥といひ、いくら名を教へても憶えません。もすいを見ても一ひよドリを見ても鳥といひます。可笑いのは或時白鷺を見て鳥といつたことで、鷺を鳥といひ黒めるといふ俗諺が此兒だけには普通なのです。

高い木の頂邊で百舌鳥が鳴いて居るのを見ると六藏は口をあんで聞き、熱と跳めて居ます。そして百舌鳥の飛立つてゆく後を茫然と見送る様は、驚る如く、この兒童には空を自由に飛ぶ鳥が餘程不思議らしく思はれました。

(四)

さて私もこの憐れな兒の爲めには随分骨を折つて見ましたか眼に見えるほどの效能は少しも有りませんでした。

彼は是するうちに翌年の春になり、六蔵の身上に不應の災難が起りました。三月の末で御座いました、或日朝から六蔵の姿が見えませんが、晝過になつて歸りません、遂に日暮になつても歸つて来ませんから田口の家では非常に心配し、殊に母親は居ても起ても居られん様子です。

其處で私は先づ城山を探すが可らうと、田口の僕を一人連れて、提灯の用意をして、心に怪しい想を懐きながら平常の慣れた徑を登つて城址に達しました。

俗に蟲が知らすといふやうな心持で天主臺の下に来て、

『六さん！六さん！』と呼びました。そして私と僕と、申し合はしたやうに耳を聳てました。場所が城址であるだけ、又た索す人が普通の兒童でないだけ、何とも知れない物すごさを感じました。

天主臺の上に出て、石垣の端から下をのぞい

て行く中に北の最も高い角の真下に六蔵の死體が落ちて居るのを發見しました。

怪談でも話すやうですが實際私は六蔵の歸りの餘り遅いと知つてからは、どうも此高い石垣の上から六蔵の墜落して死だやうに感じたのであります。

餘り空想たと笑はれるかも知れませんが、白狀しますと、六蔵は鳥のやうに空を翔け廻る積りで石垣の角から身を躍らしたものと、私には思はれるのです。木の枝に来て、六蔵の眼のまへまで枝から枝へと自在に飛で見せたら、六蔵は必定、自分も其枝に飛びつかうとしたに相違ありません。

死體を葬つた翌々日、私は獨り天主臺に登りました。そして六蔵のことを思ふと、いろいろと人生不思議の思に堪へなかつたのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との關係。生命と死などいふ、問題が年若い私の心に深い、哀を起しました。

英國の有名な詩人の詩に『童なりけり』といふがあります。それは一人の兒童が夕毎に淋しい湖水の畔に立って、兩手の指を組み合はして、梟の啼くまねをすると、湖水の向の山の梟がこれに返事をする、これを其童は樂にして居ま

したが遂に死にまして、静かな墓に葬られ、其靈は自然の懷に還つたといふ意を諷したものであります。

私はこの詩が嗜みて常に讀んで居ましたが、六蔵の死を見て、其生涯を思つて、其白蟻を思ふ時は、この詩よりも六蔵のことは更に意味あるやうに私は感じました。

石垣の上に立つて見て居ると、梟の鳥は自在に飛んで居ます。其一は六蔵ではありますまいか。よし六蔵でないにせよ、六蔵は其鳥とどれだけ異つて居ましたらう。

憐れな母親は其兒の死を却て、兒のために幸福だといひながらも泣いて居ました。

或日のことでした、私は六蔵の新しい墓にお詣りする積りで城山の北にある墓地にゆきますと、母親が先に來て居て頻りと墓の周圍をぐるぐる廻りながら、何か獨語を言つて居る様子です。私の近くののを少しも知らないと思

えて、
『何だつてお前は鳥の眞似なんぞ爲た、え、何だつて石垣から飛んだの……だつて先生がさう言つたよ、六さんは空を飛ぶ積りで天主臺の上から飛んだのだつて。いくら白痴でも鳥の眞

似をする人がありますかね」と言つて少し考へて「けれどもね、お前は死んだほうが可いよ、死んだほうが幸福だよ……」

私に氣がつくや、

「ね、先生。六は死んだほうが幸福で御座いますよ」と言つて涙をハラ／＼とこぼしました。

「さういふ事も有りませんが、何しろ不慮の災難だからあきらめるより致方がありませんよ……」

「けれど何故鳥の眞似なんぞ爲たので御座いますか。」

「それは私の想像ですよ。六さんが必定鳥の眞似を爲て死んだのだか解るものぢやありません。」

「だつて先生はさう言つたぢや有りませぬかと母親は眼をすゑて私の顔を見つめました。」

「六さんは大變鳥が嗜であつたから、さうかも知れないと私が思つただけですよ。」

「ハイ、六は鳥が嗜好でしたよ。鳥を見ると自分の兩手を斯う廣げて、斯して」と母親は鳥の搏翼の眞似をして「斯して其處らを飛び歩きましたよ。ハイ、さうして鳥の啼眞似が上手でした」と眼の色を變て話す様子を見て居て私は思はず眼をふさぎました。

城山の森から一羽の鳥が翼をゆるやかに、二聲三聲鳴きながら飛んで、濱の方へゆくや、白痴の親は急に話を止めて、茫然と我をも忘れて見送つて居ました。

この一羽の鳥を六歳の母親が何と見たでせう。

運命論者

(一)

秋の半過、冬近くなると何れの海濱を阿は
ず、大方は淋れて来る、兼倉も其通りて、自分
のやうに年中住んで居る者の外は、濱へ出て見
ても、甲の子、浦の子、地曳網の男、或は藩
づたひに住通ふ行商を見るばかり、都人士らし
い者の姿を見るは稀なのである。

或日自分は例ものやうに滑川の邊まで散歩
して、さて砂山に登ると、思の外、北風が身に沁
むので直ぐ麓に下りて其處ら日あたりの可い
所、身體を伸して樂に書の讀めさうな所と四
邊を見廻はしたが、思ふやうなところが無いの
で、彼方此方と探し歩いた、すると一個所、面
白い場所を見つけた。

砂山が急に崩れて草の根で僅にこれを支へ、
其下が帆のやうになつて居る、其根方に坐つて
兩足を投げ出すと、背は後の砂山に靠れ、右の
背は傍らの小高いところに懸り、恰度ソハに
倚つたやうで、眞に心持の佳い場處である。

自分は持つて来た小説を懐から出して、心
長閑に讀んで居ると、日は傾かた照り空は高
く晴れ此處よりは海も見えず、人もも聞えず、
打に響かぬ波音の種かに重々しく聞える外は
四圍寂然として居るので、何時しか心を全然書
籍に取られて了つた。

然るにふと物音の爲たやうであるから何心な
く頭を上げると、自分から四五間離れた處に
人が立て居たのである。何時此處へ来て、何處
から現はれたのか少しも氣がつかなくかつたので、
恰も地の底から湧出たかのやうに思はれ、自分
は驚いて能く見ると、年輩は三十ばかり、而長
の鼻の高い男、背はすらりとした瘦形、衣装
といひ品といひ、一見して別荘に來て居る人
か、それとも旅宿を取つて滯留して居る紳士と
知れた。

彼は其處につツ立つて自分の方を凝と視て居
る、其眼つきを見て、自分は更に驚き且つ怪
んだ。敵を見る怒の眼か、それにしては力薄
し。人を疑ふ猜忌の眼か、それにしては光鈍

し、たゞ何心なく身を動かす間にしては、
味を嘗ふ。

妙な奴だと自分も見送して居ること暫し、彼
は忽ち眼を砂の上に轉じて、一寸々々、脚か
に歩きたした。されども此處地の外に出ようと
は爲ないで、たゞ其處をフック／＼歩いて居る、
そして時々凄しい眼で自分の方を見る。一寸の
微子も動かない口で、自分は心持が慙くな
り、場所を變へる積りで其處を起ち、砂山の上
まで来て、後を顧みると、如何だらう怪の男
は早くも自分の坐つて居た場處に身體を投げて
居た。そして自分を見送つて居る筈が、さう
でなく立てた膝の上に腕組をして突伏して顔
腕の間に埋めて居た。

餘りの不思議さに自分は様子を見てやる氣に
なつて、兎ある小陰に枯草を敷いて這ひつくば
ひ、書を見ながら、折々頭を擧げて彼の男を
覗つて居た。

彼はやゝ暫く顔を上げなかつた。けれども
十分とは自分を待たなかつた、彼の起あがるや
病人の如く、何となく力なげであつたが、起
つたと思ふと其儘くるりと後向になつて、砂山
の峰に面と向き、右の手で其麓を掘りはじめ
た。

取り出した物は大きな罎、彼は袂からハンケチを出して罎の砂を拂ひ、更に小さな洋盃様のものを出して、罎の栓を抜くや、一杯々々、三四杯續けさまに飲んだが、罎を静かに下に置き、手に杯を持たまゝ、昂然と頭をあげて大空を眺めて居た。

そして又一杯飲んだ。そして端なく眼を自分の方へ轉したと思ふと、洋杯を手にしたまゝ、自分の方へ大股で歩いて来る、其歩武の氣力ある様は以前の様子と全然違つて居た。

自分は驚いて逃げ出さうかと思つた。然し直ぐ思ひ返して其まゝ横になつて居ると、彼は間もなく自分の傍まで来て、怪げな笑味を浮べながら、

「貴様は今何を爲たか見て居たでせう？」
と言つた聲は少し嘎れて居た。

「見て居ました」と自分は判然答へた。
「貴様は他人の祕密を覗がうて可いと思ひますか」と彼は益々怪げな笑味を深くする。

「可いとは思ひません。」
「それなら何故僕の祕密を覗きました。」
「僕は此處で書籍を読むの自由を持つて居ます。」

「それは別問題です」と彼は一寸眼を自分の書

籍の上に注いだ。

「別問題ではありません。貴様が何にを爲ようと僕が何を爲ようと、それが他人に害を及ぼさぬ限りはお互の自由です。若し貴様に祕密があるなら自ら先づ祕密に爲たら可いでせう。」
彼は急にそはくして左の手で頭の毛を撈るやうに掻きながら、

「さうです、さうです。けれども彼れが僕の做し得るかぎりの祕密なんです」と言つて暫らく言葉途切し、氣を塞めて居たが、

「僕が貴様を責めたのは悪う御座いました、けれども何卒今御覽になつたことを祕密に爲て下さいませんか、お願ひですが。」

「お頼とあれば祕密にします。別に僕の關したことでありませんから。」

「難有う御座います。それで僕も安心しました。イヤ眞に失禮しました、勿卒貴様を詰めました。」

「と彼は人を壓つけようとする最初の氣勢とは打つて變り、如何にも力なげに詫びたのを見て、自分も氣の毒になり、

「何もさう謝るには及びません、僕も實は貴様が先刻僕の前に佇立つて、僕ばかり見て居た時の風が何となく怪かつたから、それで此處へ来て貴様の爲ることを覗うて居たのです。矢

張貴様を覗つたのです。けれども彼の事が貴様の祕密とあれば、堅く僕は其祕密を守りますから御安心なさい。」

彼は黙つて自分の顔を見て居たが、
「貴様は必定守つて下さる方です」と聲をふるはし、

「如何でせう、一つ僕の杯を心けて下さいませんか。」

「酒ですか、酒なら僕は飲まないはうが可いのです。」

「飲まないはうが！ 飲まないはうが！ 無論さうです。もう飲まないで済むことなら僕とも飲まないはうが可いのです。けれども僕は飲むのです。それが僕の祕密なんです。如何でせう、僕と貴様と斯うやつて話をするのも何かの運命です、怪い運命ですから、不思議な縁ですから一つ僕の祕密の杯を受けて下さいませんか、え、如何でせう、受けて下さいませんか」といふ言葉の節々、其聲音、其眼元、其顔色は實に大なる祕密、痛ましい祕密を包んで居るやうに思はれた。

「よろしう御座います、それでは一つ戴きませう」と自分の答ふるや直ぐ彼は先に立つて元の場處へと引返へすので、自分も其後に從

つた。

(一)

『これは上等のブランドーです。自分で上等も無いもんですが、先日上京した時銀座の龜屋へ行つて最上のを買れると内證で三本買って来て此處へ置いて置いたのです。一本は最早たひらげて空櫃は滑川に投げ込みました。これが二本目です、未だ一本この砂の中に埋めてあります、無くなれば又た買つて來ます。』

自分は彼の差した杯を受け、少しづつ啜りながら彼の言ふ處を聞いて居たが、聞くに連れて自分は彼を怪しむ念の益々高まるを禁じ得なかつた。けれども決して彼の祕密に立入らうとは思はなかつた。

『それで先刻僕が此處へ來て見ると、意外にも貴様が既に此場處を占領して居たのです、驚きましたね、怪しからん人もあるものだ、僕の酒庫を犯し、僕の酒宴の筵を奪ひながら平氣で書籍を讀んで居るなんてと、僕はそれで貴様を見つめながら此處を去らなかつたのです』と彼は微笑して言つた。其眼元には心の底に潜んで居る彼の優しい、正直な人柄の光さへ髣髴いて、自分には更に其が慘しげに見えた、其處で

自分も笑を含み、

『さうでせう、それでなければあんな眼つきで僕を御覽になる譯は御座いません。さも恨めしさうでした。』

『イヤ恨めしくは御座いません、情なかつたのです。オヤ、乃公は隠して置いた酒さへも何時か他人の尻の下に敷れて了ふのか、と自分の運命を訊つたのです。訊ふと言へば凄く聞えませんが、實は僕にはそんな凄しい見も亦た氣力もありません。運命が僕を訊うて居るのです。』

『貴様は運命といふことを信じますか？ 運命といふことを、如何です、も一つ』と彼は運命を上げたので、
『イヤ僕は最早戴きますまい』と杯を彼に返し、僕は運命論者ではありません。』
彼は手酌で飲み、酒氣を吐いて、

『それでは偶然論者ですか。』
『原因結果の理法を信するばかりです。』
『けれども其原因は人間の力より發し、そして其結果が人間の頭上に落ち來るばかりでなく、人間の力以上に原因したる結果を人間が受ける場合が澤山ある。その時、貴様は運命といふ人間の力以上の者を感じませんか。』
一感じます、けれども其は自然の力です。そし

て自然界は原因結果の理法以外には働かないものと僕は信じて居ますから、運命といふ如き神祕らしい名目を其力に加へることは出来ません。』

『さうですか、さうですか、解りました。それでは貴様は宇宙に神祕なしと言ふお考えなのです、要之、貴様には此宇宙に寄する此人生の意義が、極く平易明瞭なので、貴様の頭は二々が四で、一切が間に合ふのです。貴様の宇宙は立體でなく平面です。無窮無限といふ事實も貴様には何等、感興と畏懼と沈思とを喚び起す當面の大いなる事實ではなく、數の連續を以てインフニイター(無限を式で示さうとする數學者のお仲間でせう)と言つて苦しうな嘆息を洩し、冷かな、嘲るやうな語氣で、

『けれども、實は其方が幸福なのです。僕の言葉で言へば貴様は運命に祝福されて居る方、貴様の言葉で言へば僕は不幸な結果を身に受けて居る男です。』

『それでは此で失禮します』と自分は起上がつた。すると彼は狼狽で自分を引止め、
『ま、ま、貴様怒つたのですか、若し僕の言つた事がお氣に觸つたら御勘弁を願ひます。つい其の自分で勝手に苦しんで勝手に色々なこと

を、馬鹿な役にも立たん事を考へて居るもんですから、つい見境もなく饒舌のです。否、誰にも斯んなことを言つた事はないのです。けれども何んだか貴様には言つて見たら感じましたから遠慮もなく勝手な熱を吹いたので、貴様には笑はれるかも知れませんが、僕にはやはり怪しの運命が僕と貴様を引着けたやうに感ぜられるのです。不幸な男と思つて、もすこしお話し下さいませんか、もすこし：：」

『けれども別にお話しするやうなことも僕には有りませんが、』

さう言はないで何卒もすこし此處に居て下さいな、もすこし：。噫！如何して斯う僕は無理ばかり言ふのでせう：酔つたのでせうか。運命です、運命です、可う御座います、貴様にお話がないなら僕が話します。僕が話すから聞いて下さい、せめて聴いて下さい、僕の不幸な運命を！

此苦痛の叫びを聞いて何人か心を動かさざらん。自分は其儘止つて、

『聞きませうとも。僕が聴いてお差支へがなければ何事でも承はりませう。』

『聴いて下さいませうか。それならお話しませう、けれども僕は運命の怪しき力に惑うて居る者

です。其積りで聴いて下さい。若し原因結果の理法と貴様が言ふなら、それでも可う御座います。たゞ其原因結果の發展が餘りに人意外に出て居て、其爲に一人の若い男が無限の苦惱に沈んで居る事實を貴様が知りましたなら、それを僕が怪しき運命の力と思ふのも無理の無いことだけは承知下さるだらうと思ひます。貴様に聞きますが、此處に一人の男があつて、其男が何心なく途を歩いて居ると、何處からとも知れず一の石が飛んで来て其男の頭に命中り、即死する、そのために其男の妻は餓に沈み、其爲めに母と子は争ひ、其爲に親子は血を流す程の慘劇を演ずるといふ事實が、此世に有り得ることゝ、貴様は信ずるでせうか。

『實際有ることか無いことかは知りませんが、有り得ることゝは信じます、それは。』

『さうでせう、それなら貴様は人の意表に出た原因のために、ふとした原因のために、非常なる悲惨が動もすれば、人の頭上に落ちてくるといふ事實を認むるのです。僕の身の上の如き、全く其れなので、殆んど信ず可らざる怪しい運命が僕を牽んで居るのです。僕は運命と言ひます。僕には其の外には信じられんですか

ら』と言つて彼は物と嘆息を吐き、

『けれども貴様聴いて呉れますか。』

『聴きますとも！何卒かお話しなさい。』

『それなら先づ手近な酒のことから話させうが、實は世間には有りふれたことで、苦惱を忘れたさの魔酔劑に用ゐて居るのです。砂の中に隠して置くのは隠して飲まなければならぬ

い他の事情があるからなので、その上、此場所はいかに静で且つ快調で、如何な毒々しい運命の魔も身を隠して人を覗ふ暗い陰のないのが僕の氣に入つたからです。此處へ身を横へて酒精の力に身を託し高い大空を仰いで居る間は、僕の心が幾何か自由を得る時です。その中には此激烈な酒精が左なきだに羽り果てた僕の心臓を次第に破つて、遂には首尾よく僕も自滅するだらうと思つて居ます。』

『そんなら貴様は、自殺を願うて居るのですか』

『自分は驚いて問うた

『自殺ぢやアない、自滅です。運命は僕の自殺すら許さないので。貴様、運命の鬼が最も巧く使ふ道具のは、惑へですよ。』

『惑へは悲しみを苦しみに變へます。苦惱を更に自棄させます。自殺は決心です。始終惑のために苦しん

だす。』

『苦しん

で居る者に、如何して此決心が起りませう。だから「惑と、鈍い、重々しい苦惱から脱れるには矢張、自滅といふ運賃な方法しか策がないのです。」

と沁々言ふ彼の顔には明かに絶望の影が動いて居た。

「如何いふ理由があるのか知りませんが、僕は他人の自殺を知つて之を傍觀する譯には行きません。自滅といふも自殺に違ひないのでから」と自分が言ふや、
「けれども自殺は人々の自由でせう」と彼は笑味を含んで言つた。

「さうかも知れません。然し之を止め得るならば、止めるのが又人々の自由なり義務です。」
「可う御座います。僕も決して自滅したくは有りません。若し貴様が僕の物語を悉皆聽いて、其上で僕を救ふの策を立て、下さるのなら僕は此上もない幸福です。」

斯う聞いては自分も黙つて居られない。
「可しい！ 何卒か悉皆聽かして貰ひませう。今度は僕の方からお願ひします。」

（三）

「僕は高橋信造といふ姓名ですが、高橋の姓は

養家」を冒したので、僕の元の姓は大塚といふのです。」

大塚信造と言つた時のことから話しますが、父は大塚舞殿と言つて御存知でも御座いますか、東京控置院の判事としては一寸世間にも名の知れた男で、舞殿の名の示す如く剛直一

通の人物。随分僕を教育する上には苦心したやうでした。けれども如何いふものか僕は小兒の時分から學問が嫌ひで、たゞ物陰に一人引込んで、何を考へるともなく茫然して居ることが何より好きでした。十二歳の時分と覺えて居ます、頃は春の末といふことは庭の櫻が殆んど

散り盡して、色褪せた花露の未だ梢に残つて居たのが、若葉の隙からホロ／＼と一片三片落つる様を今も判然と想ひだすことが出来るので知れます。僕は土藏の石段に腰かけて例の如く茫然と庭の面を眺めて居ますと、夕日が斜

に庭の木の間に射し込んで、さなきだに靜かな庭が、一層肅然として、凝然として、眺めて居ると少年心にも哀しいやうな楽しいやうな、所謂

春愁でせう、そんな心地になりました。
人の心の不思議を知つて居るものは、兒童の胸にも春の靜な夕を感じることの、實際有り得ることを否まぬだらうと思ひます。

兎も角も僕はさういふ少年でした。父の舞殿はこのことを大變者にして、僕のことを「おれい子だと數々小言を言ひ、僧侶なら寺へ與つて了ふなど怒鳴つたこともありませう。それを引きかへ僕の弟の秀雄は腕白小僧で、僕より三四年齡が下でしたが、昔も父に肯て逆しく、氣象はまるで僕とは違つて居たのです。

父が僕を叱る時、母と弟とは何時も笑つて傍で見て居たもので、母といふはお母といひ、言葉の少ない、柔和らしく見えて華圓した氣象の女でしたが、僕を叱つたこととなく、さりとして甘やかす程に可愛がりもせず、言はず寄らず觸らずにして居たやうです。

それで僕の氣象が性來今言つたやうなのであるか、或はさうでなく、僕は小兒の時、早く不自然な境に置かれて、我知らずの孤獨な生活を送つた故かも知れないのです。

成程父は僕のことを苦にしました。けれども其心配はたゞ普通の親が其子の上を憂ふるのとは異つて居たのです。それで父が、一折角男に生れたのなら男らしくなれ、女のやうな男は育て甲斐がない」と黒痴めいた小言を言ふ、其言葉の中にも僕の怪しい運命の穂先が見えて居たのですが、少年の僕には未だ氣が着きません

でした。

言ふことを忘れて居ましたが、其頃は父が岡山地方裁判所長の役で、大塚の一家は岡山の市中に住んで居たので、一家が東京に移つたのは未だ餘程後のことです。

或日のことでした、僕が平時のやうに庭へ出て松の根に腰をかけ茫然して居ると、何時の間にか父が傍に来て、

「お前は何を考へて居るのだ。持つて生れた氣象なら致方もないが、乃公はお前のやうな氣象は大嫌ひだ、最少し確乎しろ」と眞面目の顔で言ひますから、僕は顔も上げ得ないで黙つて居ました。すると父は僕の傍に腰を下して、

「オイ信造」と言つて急に聲を潜め「お前は誰かに何か聞きは爲なかつたか。」

僕には何のことか全然解らないから、驚いて父の顔を仰ぎましたが、不思議にも我知らず涙含みました。それを見て父の顔色は俄に變り、益々聲を潜めて、

一匿すには及ばんぞ、聞いたら聞いたと言ふが可え。そんなら乃公にも考案があるから。サア匿さずに言ふが可え。何か聞いたらう？」

したから、しく／＼泣き出すと、父は益々怖狼へ、

「サア言へ！ 聞いたら聞いたと言へ！ 匿すかお前は」と僕の顔を睨みつけましたから、僕も益々可怕なり、

「御免なさい、御免なさい」とたゞ謝罪りました。

「謝罪れと言ふんぢやない。若し何かお前が妙なことを聞いて、それで茫然考へて居るのぢやないかと思ふから、それで訊くのだ、何にも聞かんのなら其で可え。サア正直に言へ！」と今度は眞實に怒つて言ひますから、僕は何のことか解らず、たゞ非常な悪いことでも爲たのかと、おろ／＼聲で、

「御免なさい、御免なさい。」

「馬鹿！ 大馬鹿者！ 誰が謝罪れと言つた。十二にもなつて男の癖に直ぐ泣く。」

怒鳴られたので僕は吃驚して泣きながら父の顔を見て居ると、父も暫くは黙つて熱と僕の顔を見て居ましたが、急に涙含んで、

「泣かんでも可え、最早乃父も問はんから、サア奥へ歸るが可え」と優しく言つた其言葉は少ないが、慈愛に満ちて居たのです。

其後でした、父が僕のことを餘り言はなくな

つたのは。けれども又其後でした僕の心の底に一片の雲影の沈んだのは。運命の怪しき鬼が其爪を僕の心に打込んだのは實に此時です。

僕は父の言葉が氣になつて堪りませんでした。これも普通の子供なら間もなく忘れて了つただらうと思ひますが、僕は忘れぬ處か、間がな隙がな、何故父は彼のやうな事を問うたのか、父が斯くまでに狼狽した處を見ると、餘程の大事であらうと、少年心に色々考へて、そして其大事は僕の身の上に關することだと信ずるやうになりました。

何故でせう。僕は今でも不思議に思つて居るのです。何故父の問うたことが僕の身の上のことと、自分で信ずるに至つたでせう。

暗黒に住みなれたものは、能く暗黒に物を見るところと同じ事で、不自然なる境に置かれたる少年は何時しか其暗き不自然の底に潜んで居る黒點を認めることが出来たのだらうと思ひます。

けれども僕の其黒點の眞相を捉へ得たのはずつと後のことです。僕は氣にかゝりながらも、これを父に問ひ返すことは出来ず、又抑には猶更ら出来ず、小さな心を痛めたがらも月日を送つて居ました。そして十五の歳に中學校の寄宿舎に入れられました。其前に、ッお話しして置

く事があるのです。

大塚の隣屋敷に廣い桑畑があつて其横に板葺の小さな家がある、それに老人夫婦と其ころ十六七になる娘が住んで居ました。以前は立派な士族で、桑園は則ち其屋敷跡ださうです。此老人が僕の仲善でしたが、或日僕に岡基の遊戯を教へて呉れました。二三回經つて夜食の時、このことを父母に話しました處、何時も遊戯のことは餘り氣にしない父が眼に角を立て、叱り、母すら驚いた眼を張つて僕の顔を見つめました。そして父母が顔を見合はした時の様子の尋常でなかつたので、僕は甚だ妙に感じました。

(四)

僕の十六の時、父は東京に轉任したので大塚一家は父と共に移轉しましたが、僕だけは岡山中學校の寄宿舎に残されました。

僕は其後三年間の生活を想ふと、僕の此世に於ける眞の生活は唯だ彼の學校時代だけで

あつたのを知ります。

學生は皆な僕に親切でした。僕は心の自由を恢復し、惡逆の手より脱れ、身の上の疑惑を懐くこと次第に薄くなり、沈鬱の氣象までが何時しか雪の融ける如く消えて、快濶な青年の氣を帯びて來ました。

然るに十八の秋、突然東京の父から手紙が來て僕に上京を命じたのです。穩な僕の心は急に搔亂され、僕は殆んど父の眞意を知るに苦しみ、返書を出して切めて今一年、卒業の口まで此儘に爲して置いて貰はうかと思ひましたが、思ひ返して直ぐ上京しました。麹町の宅に着くや、父は一室に僕を喚んで「早速だがお前と能く相談したいことが有るのだ。お前これから法律を學ぶ氣はないかね。」

思ひもかけぬ言葉です。僕は驚いて父の顔を見つめたきり容易に口を開くことが出來ない。

「實は手紙で詳しく言つてやらうかとも思つたが、廻りくどいから喚んだのだ。お前も卒業までと思つたらうし、又大學までも志して居たらうけれど、人は一日も早く獨立の生活を營む方が可えことはお前も知つて居るだらう。それでお前これから直ぐ私立の法律學校に入る

のぢや。三年で卒業する。辯護士の試験を受ける。そして喚は私と懇意な辯護士の事務所に世帯してやるから、其處で四五年も實地の勉強をするのぢや。其内に獨立して事務所を開けば、それこそ立派なもの、お前も三十にならん内、堂々たる紳士となること出來る。如何ぢやな、其方が近道ぢやぞ」といふ父の言葉を聽いて居る僕の心の全く顛倒したのも無理はないでせう。

これ實に他人の言葉です。他人の親切です。居候の書生に主人の先生が示す恩愛です。

大塚御藏は何時しか其自然に返つて居たのです。知らず識らず其自然を暴露すに至つたのです。僕を外に置くこと三年、其實子なる秀輔のみを傍に愛撫すること三年、人間が其天真に歸るべき門、墳墓に近づくこと三年、此三年の月日は彼をして自然に返らしたのです。けれど彼は未だ其自然を自認することが出來ず、何處までも自分を以前の父の如く、僕を以前の子の如く見ようとして居るのです。

其處で僕は最早進んで僕の希望を述べるどころではありません、たゞこれ命これ從ふだけのことを手短かに答へて父の部屋を出てしまひました。

父ばかりでなく母の様子も一變して居たので、日の經つに從うて僕は僕のの上の一だ、秘密のあることを益々信ずるやうになり、父母の舉動に氣をつければつけるほど疑惑の増すばかりなのです。

一度は僕も自分の僻見だらうかと思ひましたが、生憎と想起すは十二の時、庭で父から問ひつめられた事で、彼を想ひ、これを思へば、最早自分の身の秘密を疑ふことは出来ないのです。

懊惱の中に神田の法律學校に通つて三月も経ちましたらうか。僕は今日こそ父に向ひ、斷然此方から言ひ出して秘密の有無を訊さうと決心し、學校から日の暮方に歸つて夜食を濟すや、父の居間にゆきました。父はランプの下で手紙を認めて居ましたが、僕を見て、「何ぞ用か」と問ひ、やはり筆を執つて居ます。僕は父の脇の火鉢の傍に坐つて暫く黙つて居ましたが、此時降りかけて居た空が愈々時雨て來たと見え、傘を打つ霰の音がバラ／＼聞えました。父は筆を擱いて徐ら此方に向き、
「何ぞ用でもあるか」と優しく問ひました。
「少し訊ねたいことが有りますので」と僅に口を切るや、父は早くも様子を見て取つたか、

「何ぢや」と嚴かに膝を進めました。
「父様、私は眞實に父様の兒なのでせうか」と豫て思ひ定めて置いた通り、單刀直入に問ひました。

「何ぢや」と父の一言、其眼光の鋭さ！

けれども直ぐ父は顔を柔げて、
「何故お前はそんなことを私に聞くのぢや、何か私共がお前に親らしくないことでもして、それでさういふのか。」

「さういふ譯では御座いませんが、私には昔から如何いふ者か此疑ひがあるので、始終胸を痛めて居るので御座います、知らして益のない秘密だから父上も黙つてお居てになるのでせうけれど、私は是非それが知りたいので御座います」と僕は靜かに、決然と言ひ放ちました。

父は暫時腕組をして考へて居ましたが、徐らに顔を上げて、
「お前が疑つて居ることも私は知つて居たのぢや。私の方から言うた方がと思つたことも此頃ある。それで最早お前から聞かれて見ると猶ほ言うて了ふが可えから言ふことに爲よう」とそれから父は長々と物語りました。

けれども父の知らして呉れた事實はこれだけ

なのです。周防山口の地方裁判所に父が奉職して居た時分、馬場金之助といふ恭客が居て、父と非常に懇親を結び、常に兄弟の如く往來して居たさうです。その馬場といふ人物は一種非凡な處があつて、恭以外に父は其人物を尊敬して居たといふことです。その一子が則ち僕であつたのです。

父は其頃三十八、母は三十四で最早子は出来ぬものと諦めて居ると、馬場が病で歿し、其妻も間もなく夫の後を追うて此世を去り、残つたのは二歳になる男の子、これ幸と父が引取つて自分の兒として養つたので、父からいふと半分は孤兒を救ふ義侠でしたらう。

僕の生の父母は未だ年が若く、父は三十二、母は二十五であつたさうです。けれども母の籍が未だ馬場の籍に入らん内に僕が生れ、其爲でせう、僕の出生届が未だ爲てなかつたので、大塚の父は僕を引取るや直に自分の兒として届け

たのださうです。
以上の事を話して大塚の父のいふには、
「其後私は間もなく山口を去つたから、お前を私の實子でないと知るものは多くないのぢや。私達夫婦は飽くまで實子の積りでこれまで育て、來たのぢや、この先も同じことだからお前

も決して解見根性(げんせい)を起さず、何處までも私道を父母(ふぼ)と思つて老先(らうせん)を見届けて呉れ、秀輔(しゅうほ)は實子(じつこ)ぢやがお前のことは決して知らさんから、お前も眞實(しんじつ)の兄(あに)となつて生涯(しょうがい)彼れ(かれ)の力(ちから)ともなつて呉れ、と、老(らう)の眼(め)に涙(なみだ)を見るより先に僕は最早泣いて居たのです。

其處で養父(やうふ)と僕とは此等の秘密(ひみつ)を隠(かく)して人に洩(も)らさぬ約束(やくそく)をし、又た僕が此先何かの用事(ようじ)で山田(やまだ)にゆくとも、たゞ他所(たそ)ながら父母(ふぼ)の墓(はか)に詣(ま)で、決して公(こう)にはせぬといふことを僕は養父に約(やく)しました。

其後の月日(つきひ)は以前(いぜん)よりも却(かへ)つて穩(やす)かに過ぎたのです。養父(やうふ)も秘密(ひみつ)を明(あ)けて却(かへ)つて安心(あんしん)した様子(ようす)、僕(ぼく)も養父(やうふ)母(ぼ)の高恩(こうおん)を思(おも)ふにつけて、心(こゝろ)を傾(かた)けて敬愛(けいあい)するやうになり、勉學(べんがく)をも勵(たげ)むやうになりました。

そして一日(いちにち)も早く獨立(どくりつ)の生活(せいかつ)を営(い)み得(え)るやうになり、自分(じぶん)は大塚(おほづか)の家(うち)から別(わか)れ、義弟(ぎてい)の秀輔(しゅうほ)に家督(かとく)を譲(ゆづ)りたいものと深く心(こゝろ)に決(けつ)する處(ところ)があつたのです。

三年(さんねん)の月日(つきひ)は忽(たち)ち逝(ゆ)き、僕は首尾(しゆび)よく學校(がくこう)を卒業(そつぎょう)しましたが、猶(なほ)ほ養父(やうふ)の言葉(ことば)に従(したが)ひ、一年(いちねん)間吏(かんし)に勉強(べんきやう)して、さて辯護士(べんごし)の試験(しけん)を受けました處(ところ)、意外(いがい)の上首尾(じやうしゆび)、養父(やうふ)も大(おほ)よろこび

て早速(さつそく)其友(そのとも)なる井上博士(いの上はくし)の法律事務所(はかりじむしょ)に周旋(しゆせん)して呉(ま)りました。

兎も角(とく)も一人前(ひとりまへ)の辯護士(べんごし)となつて日々(ひび)京橋(きやうはし)區(く)なる事務所(じむしょ)に通(か)うて居(ゐ)ましたが、若(わか)し彼のま(ま)まで今日(こんにち)になつたら、養父(やうふ)も其目的(そのとく)の通り(どおり)に僕(ぼく)を始末(しまつ)し、僕(ぼく)も平穩(へいゑん)な月日(つきひ)を送(おく)つて、益々(ますます)前途(ぜんすう)の幸福(きふく)を樂(たの)んで居(ゐ)たでせう。

けれども、僕は如何(いか)しても惡運(あくうん)の兒(こ)であつたのです。殆(たいてい)んど何人(なにびと)も想像(さうぞう)することの出来(でき)ない陥穽(かんじやう)が僕の前に出來(き)て居(ゐ)て、惡運(あくうん)の鬼(おに)は慘酷(さんこく)にも僕(ぼく)を突き落(お)しました。

《五》

井上博士(いの上はくし)は横濱(よこはま)にも一ヶ所(ひとつどころ)事務所(じむしょ)を持つて居(ゐ)ましたが、僕は二十五(にじゅうご)の春(はる)、此事務所(このじむしょ)に詰(つ)めることとなり、名(な)は井上(いの上)の部下(ぶか)であつても其實(じつじやう)は僕(ぼく)が獨立(どくりつ)でやるのと同(おな)じことでした。年齢(ねんれい)の割(わり)合(あ)には早い立身(りつじん)と云(い)つても可(よ)いだらうと思(おも)ひます。

處(ところ)が横濱(よこはま)に高橋(たかはし)といふ雜貨商(ざいさかう)があつて、隨(したが)つて分盛大(ぶんせうたい)にやつて居(ゐ)ましたが、其主人(そのあし)は女(め)で名(な)は梅(うめ)、所天(つてん)は二三年前(にさんねんまへ)に亡(な)なつて一人娘(ひとりむすめ)の里子(さとこ)といふを對手(あいて)に、先(まづ)贅澤(ぜいさく)な暮(くらし)を爲(な)して居(ゐ)たのです。

僕(ぼく)と甲子(かろ)は懇(げん)に成(な)りました。手短(てんたん)かに言(い)ひますすが、半年(はんねん)経(た)たいうちに二人(ふたり)は離(わか)れることの出來(でき)ないほど、進(すす)せ上げたのです。

そして其結果(そのけつこ)は井上博士(いの上はくし)と高橋(たかはし)の養子(やうこ)となり、僕(ぼく)は其家(そのうち)を離(わか)れて高橋(たかはし)の養子(やうこ)となりました。

僕(ぼく)の口(くち)から言(い)ふも變(か)ですが、里子(さとこ)は美人(びじん)といふほどでなくとも随分(ずいぶん)人目(ひとめ)を引(ひ)く體(てい)で、丸顔(まるかほ)の愛嬌(あいせう)のある女(め)です。そして遠慮(えんりょ)なくいひますが、全く(まるごと)僕(ぼく)を愛(あい)して呉(ま)れます、けれども此(こ)愛(あい)は却(かへ)つて今(いま)では僕(ぼく)を苦(くる)しめる一大要素(いちだいようそ)になつて居(ゐ)るので、若(わか)し里子(さとこ)が斯(か)くまでに僕(ぼく)を愛(あい)し、僕(ぼく)が又(また)斯(か)うまで里子(さとこ)を愛(あい)しないならば、僕は

これほどまでに苦(くる)しみは鳴(な)ないのです。養母(やうぼ)の梅(うめ)は今(いま)五十歳(ごじゅうさい)ですが、見た處(ところ)、四十位(よそご)にしか見え、小柄(こがら)の女(め)で美人(びじん)の相(さう)を具(た)へ、なか／＼立派(りつぱ)な婦人(ふじん)です。そして情(じやう)の烈(れつ)しい正直(ちやうじき)な人柄(ひとがら)といへば、智慧(ちゐ)の方はやゝ薄(うす)いといふことは直(す)ぐ解(わか)るでせう。快活(くわいかつ)で能(よ)く笑(わら)ひ能(よ)く語(かた)りますが、如何(いか)かすると恐(おそ)しい程(ほど)沈鬱(ちんいつ)な顔(かほ)をして、半日(はんじつ)何人(なにびと)とも口(くち)を交(まじ)へないことがあり

ます。僕は養子(やうこ)とならぬ以前(いぜん)から此人柄(このひとがら)に氣(き)をつけて居(ゐ)ましたが、里子(さとこ)と結婚(けっこん)して高橋(たかはし)の家(うち)

に寝起することとなりて間もなく、妙なことを発見したのです。

それは夜の九時頃になると、養母は其居間に籠つて了ひ、不動明王ご、心不徳に拜むことで、口に何ごとか念じつゝ、床の間にかけた火炎の像の前に禱拜して十時となり十一時となり、時には夜半過に及ぶのです。書棚の中、沖むいで居た晩は殊にこれが激しいやうでした。

僕も初めは黙つて居ましたが、餘り妙なので或日このことを甲子に訊ねると、甲子は手を掉つて聲を潜め、黙つて居らつしやいよ。あれは二年前から初めたので、あのことを母に話すと母は大勢嫌を思ひますから、成るべく知らん顔をして居たはうが可いんですよ。御覽なさい全然狂氣でせう」と別に氣にもかけぬ様なので、僕も強ひて問ひもしなかつたのです。

けれども其後一月もして或日、僕は事務所から歸り、夜食を終へて雑談して居ると、養母は突然、

「怨靈といふものは何年経つても消えないものだらうか」と問ひました。すると甲子は平氣で、

「怨靈なんて有るもんぢやアないわ」と一言で打消さうとする時、母は向になつて、

「生意氣を言ひなさんな。お前見たことはあるまい。だからそんなことを言ふのだ。」

「そんなら母上は見て？」

「見ましたとも。」

「オヤさう、如何な顔をして居て？ 私も見たいものだ」と甲子は何處までも冷かしてかゝつた。すると母は涙いほど顔色を變へて、

「お前怨靈を見たの、怨靈が見たいの。眞實に生意氣なことをいふよ此人は」と言ひ放ち、つツと起つて自分の部屋に引込んで了つた。僕は思はず、

「母上如何か爲て居なさるよ。氣を附けんと。」

甲子は不安心な顔をして、

「私眞實に氣味が悪いわ。母上は必定何にか妙なことを思つて居るのですよ。」

「ちつと神經を痛めて居なさるやうだね」と僕も言ひましたが、さて翌日になると別に變つた

ことはないのです。變つて居るのは唯だ何時もの通り夜になると不動様を拜むことだけで、僕等もこれは最早見慣れて居るから強ひて氣にもかゝりませんでした。

處が今歳の五月です、僕は例よりかゝる時

間も早く事務所を退いて家へ歸りますと、其日

は曇つて居たので家の中は薄暗い中にも母の室は殊に暗いのです。母に少し用事があつたので別に案内もせず襖を開けて中に入ると、母は火鉢の傍にぼつねんと坐つて居ましたが、僕の顔を見るや、

「ア、ア、アツ、アツ！」と叫んで突起つたかと思ふと、又尻餅を存いて其と僕を見た時の顔色！僕は母が氣絶したのかと喫驚して傍に駆け寄りました。

「如何しました、如何しました」と叫んだ僕の聲を聞いて、母は僅に坐り直し、

「お前だつたか、私は、私は……」と胸を撫つて居ましたが、其間も不思議さうに僕の顔を見て居たのです。僕は驚いて、

「母上如何なさいました」と聞くと、

「お前が出抜に入つて来たので、私は誰かと思つた。お、喫驚した」と直ぐ床を敷して休んで了ひました。

此事の有つた後は母の神經に益々異常を起し、不動明王を拜むばかりでなく、僕などは

名も知らぬ神符を幾枚となく何處からか貰つて来て、自分の居間の所々に貼つけたものです。

そして更に妙なのは、こゝまで自分だけで、勝手に信じて居たのか、僕を見て驚いた後は、僕

に

に向つても不動を信じてるといふので、僕が何故信じなければならぬかと聞くと、

「たゞ黙つて信じてお呉れ。それでないと私がお細い。」

「母上の氣が安まるのなら信仰も爲ませうが、それなら私よりもお里の方が可いでせう。」

「お里では不可ません。彼には關係のないことだから。」

「それでは私には關係があるのですか。」

「まあそんなことを言はないで信仰してお呉れ、後生だから」といふ母の言葉を里子も傍で聞いて居ましたが、呆れて、

「妙ねえ母上、不動様が如何して母上と信造さんとには關係があつて、私には無いのでせう。」

「だから私が頼むのぢやありませんか、理由が言はれる位なら頼みはしません。」

「だつて無理だわ、信造さんに不動様を信仰しろなんて、今時の人にそんなことを勧めたつて……」

「へんなら頼みません！……と母は怒つて了つたので、僕は言葉を柔げ、

「イヤ私だつて不動様を信じないとは限りません。だから母上も其理由を話して下さいな、

如何なことを知りませんが、親子の間だから少しも明されないやうなことは無いでせう」と求めました。それは母の言ふ處に由つて迷信を厭へ神經を靜める方法もあらうかと思つたからです。すると母は暫く考へて居ましたが、吐息をして聲を潜め、

「これ限りの話だよ、誰にも知らしてはなりませんよ。私が未だ若い時分、お里の父上に縁づかない前に或男に言ひ寄られて執着違ひ廻されたのだよ。けれども私は如何しても其男の心に従はなかつたの。さうすると其男が病氣になつて死ぬ間に大變私を怨んで色色なことを言つたさうです。それで私も可い心持は爲なかつたが、此處へ縁づいてからは別に氣にもせんで暮して居ました。ところが所天が死になつてからといふものは、其男の怨靈が如何かすると現はれて、可怖い顔をして私を睨み、今にも私を取殺さうとするのです。それで私が不動様を一心に念ずると其怨靈がだん／＼消えて無くなりませう。それにね」と、母は一層聲を潜め、「この頃は其怨靈が信造に取ついたらしいよ。」

「まあ嫌な！」里子は眉を擡めました。

「だつてね、如何かすると信造の顔が私には怨氣をつくりに見えるのよ。」

それで僕に不動様を信じると勧めるのです。けれども僕にはそんな眞似は出来ないので、里子と共に色々怨靈などいふものゝ有るべきでないことを説いたけれど無益でした。母は堅く信じて疑はないので、僕等も持餘、此鎌倉へ

でも来て居て精神を靜めたらと、無理に勧めて遂に此處の別荘に入れたのは今年の五月のことです。」

高橋信造は此處まで話して来て忽ち頭をあげ、西に傾く日影を愁然と見送つて苦惱に堪へぬ様であつたが、手早く杯をあげて一杯飲み干し、

「この先を詳しく話す勇氣は僕にありません。事實を露骨に手短かに話しますから、其以上は貴様の推察を願ふだけです。」

高橋梅、則ち僕の養母は僕の眞實の母、生の母であつたのです。妻の里子は父を異にした僕の妹であつたのです。如何です、これが奇しい運命でなくて何としませう。斯の如きをも原因結果の理法といへばそれまでです。けれども、かゝる理法の下に知らず識らず此身を置かれた

(六)

僕から言へば、此天地間にかゝる惨劇なる理法すら行はるゝを恨みます。

先づ如何して此等の事實が僕に知れたか、其手續を簡単に言へば、母が鎌倉に来てから一月後、僕は訴訟用で長崎にゆくこととなり、其途中山口、廣島などへ立寄る心組で居ましたから、見舞かたぐい鎌倉へ来て母に此事を話しますと、母は眼の色を變へて、山口などへ寄るなど言ひます。けれども僕の心には生の父母の墓に参る積りがありますから、母には可い加減に言つて置いて、遂に山口に寄つたのです。

豫て大塚の父から聞いて居たから寺は直ぐ分りました。けれども僕は馬場金之助の墓のみ見出して、死んだと聞いた母の墓を見ないので、不審に思つて老僧に遇ひ、右の事を訊ねました。尤も唯だ所縁のものとのみ、僕の身の上は打明けないのです。

すると老僧は馬場金之助の妻お信の墓のあるべき筈はない。彼の女は金之助の病中に、碁の弟子で、町の豪商某の弟と怪しい仲になり、金之助の病氣は其爲め更に重くなつたのを氣の毒とも思はず、遂に乳飲兒を置き去りにして墮落して了つたのだと話しました。

老僧は猶も父が病中母を罵つたこと、死際

に大塚剛藏に其一子を託したことまで語りました。

其お信が高橋梅であるといふことは、誰も知らないのです。僕も證據は持つて居ません。けれども老僧がお信のことを語る中に早くも僕は今の養母が則ちそれであることを確信したのです。

僕は山口で直ぐ死んで了はうかと思ひました。彼の時、實に彼の時、僕が思ひ切つて自殺して了つたら寧ろ僕は幸ひであつたのです。

けれども僕は歸つて來ました。一は何とかし確な證據を得たいため、一は里子に引寄せられたのです。里子は兎も角も妹ですから、僕の結婚の不倫であることは言ふまでもないが、僕は妹として里子を考へることは如何しても出来ないのです。

人の心ほど不思議なものはありません。不倫といふ言葉は愛といふ事實には勝てないので、僕と里子の愛が却つて僕を苦しめると先程言つたのは此事です。

僕は里子を擁して泣きました、幾度も泣きました。僕も亦た母と同じく物狂しくなりました、憐れなるは里子です。總ての事が里子には怪しき謎で、彼はたゞ惑ひに惑ふばかり、遂には母

と同じく怨靈を信ずるやうになり、今も横濱の宅で母と共に不動明王に祈念を凝して居るのです。里子は怨靈の本體を知らず、たゞ母も僕も此怨靈に苦しめられて居るものと信じ、祈念の誠を以て母と所天を救はうとして居るのです。

僕は成るべく母を見ないやうにして居ます。母も僕に遇ふことを好みません。母の眼には成程僕が怨靈の顔と同じく見えるでせうよ。僕は怨靈の兒ですもの！

僕には母を母として愛さなければならん筈です、然し僕は母が僕の父を瀕死の際に捨て、僕を瀕死の父の病床に捨て、密夫と走つたことを思ふと、言ふべからざる怨恨の情が起るので、僕の耳には亡父の怒罵の聲が聞えるのです。

僕の眼には疲れ果てた身體を起して、何も知らない無心の子を擁き、男泣きに泣き給うた様が見えるのです。そして此聲を聞き此様を見る僕には、實に怨靈の氣が乗移るのです。

夕暮の空ほの暗い時に、柱に靠れて居た僕が突然、眼を張り呼吸を凝らして天の一方を睨む様を見た者は母でなくとも逃げ出すでせう。母ならば氣絶するでせう。けれども僕は里子のことを思ふと、恨も怒も

消えて、たゞ限りなき悲哀に沈み、この悲哀の底には愛と絶望が戦うて居るのです。

處が此九月でした、僕は餘りの苦惱に平常殆んど酒杯を手にしぬ僕が、里子の止めるのも肯かず飲めるだけ飲み、居間の中央に大の字になつて居ると、何と思つたか、母が突然鎌倉から歸つて来て里子だけを其居間に呼びつけました。そして僕は酔つて居ながらも直ぐ其理由の尋常でないことを悟つたのです。

一時間ばかり經つと里子は眼を泣き膨らして僕の居間に歸つて来ましたから、
「如何したのだ」と聞くと、里子は僕の傍に突伏して泣きだしました。

一母上が僕を離婚すると云つたのだらう」と僕は思はず怒鳴りました。すると里子は狼狽して、「だからね、母が何と言つても所天決して氣にしないで下さいな。狂氣だと思つて投擲つて置いて下さいな、ね、後生ですから」と泣聲を振はして言ひますから、「さういふことなら投擲つて置く譯に行かない」と僕はいきなり母の居間に突入しました。里子は止める間もなかつたので僕に續いて部屋に入つたのです。僕は母の前で坐るや、
一貴女は私を離婚すると里子に言つたさうで

すが、其理由を聞きませう。離婚するなり爲ても私は平氣です。或は寧ろ私の望む處で御座います。けれども理由を被仰い、是非其の理由を聞きませうと酔に任せて詰寄りました。すると母は口の氣味の餘り鋭いので喫驚して僕の顔を見て居るばかり、一言も發しませぬ。
一サア理由を聞きませう。怨靈が私に乗移つて居るから氣味が悪いといふのでせう。それは氣味が悪いでせうよ。私は怨靈の兒ですもの」と言ひ放ちました。見る／＼母の顔色は變り、物をも言はず部屋の外へ駈け出でて了ひました。僕は其まゝ母の居間に寝て了つたのです。眼が覺めるや酒の酔も醒め、頭の上には里子が心配さうに僕の顔を見て坐つて居ました。母は直ぐ鎌倉に引返したのでした。

其後僕と母とは會はないのです。僕は母に代つて此方に来て、母は今、横濱の宅に居ますが、里子は、兩方を交る／＼介抱して、二人の不幸をば一人で正直に解釋し、たゞ／＼怨靈の業とのみ信じて、二人の胸の中の眞の苦惱を全然知らないのです。

僕は酒を飲むことを里子からも醫師からも禁じられて居ます。けれども如何でせう、此のやうな日に遇つて居る僕がブランデーの隱飲みを

やるのは、果して無理でせうか。
今や僕の力は全く惡運の鬼に押がれて了ひました。自殺の力もな、自滅を待つほどの意

久地のないものと成り果て、居るのです。
如何でせう、以上ザツと話しました僕の今日までの生涯の經過を考へて見て、僕の心持になつて貰ひたいものです。これが唯だ原因結果の理法に過ぎないと數學の式に對するやうな冷かな心持で居られるものでせうか。生の母は父の仇です、最愛の妻は兄妹です。これが冷かなる事實です。そして僕の運命です。
若し此運命から僕を救ひ得る人があるなら、僕は謹んで教へを奉じます。其人は僕の救主です。」

《七》

自分は一言を交へないで以上の物語を聞いた。聞き終つて暫くは一言も發し得なかつた。成程悲惨なる境遇に陥つた人であるとツクツク氣の毒に思つたのである。けれども止むなくんばと、

一斷然離婚なきつたら如何です。
一それは新しき事實を作るばかりです。既に在る事實は其爲めに消えませぬ。」

「けれども其は止むを得ないでせう。」
「だから運命です。離婚した處で生の母が父の仇である事實は消えません。離婚した處で妹を妻として愛する僕の愛は變りません。人の力を以て過去の事實を消すことの出来ない限り、人は到底運命の力より脱るゝことは出来ないでせう。」

自分は握手して、黙禮して、此不幸なる青年紳士と別れた、日は既に落ちて餘光華かに夕の雲を染め、顧みれば我運命論者は淋しき砂山の頂に立つて沖を遙に眺めて居た。

其後自分は此男に遇はないのである。

(明治三十五年十二月)

巡

査

この頃ふとした事から自分は一人の巡査、山田鉄太郎といふのに懇意になつた。年齢は三十四五でもあらうか、骨格の逞しい、背の高い堂々たる偉丈夫である。

自分は人相のことはよく知らぬが、圓い顔の、口髭類髯ともに眞黒で、鼻も眼も大きな、見た處は柔和の相貌とは言へないが、さて實際はなか／＼好人物なのが世間に随分ある、この巡査も其種類に屬するらしい。

若し其人が沈黙であつたなら、斯ういふのは餘り受の可い人相ではない。處が能く語り能く笑ふ、笑ふ時は其眼元に一種の愛嬌がこぼれる。語る時は相手の迷惑もなにも無頓着で、のべつに行る。そこで思ひもつかぬ比喩など用ゐて、それを得意で二度も三度も繰返す、如何だらう、斯ういふ人物は彼の憎悪を受けるだらうか。

或日、明日は非番で宅に居ますから、是非入来しやいと頻りと促がされたから、午後一時ごろ自分は山田巡査を訪ねて見た。

「ね、是非入来しやい、何にもないが寒いから……これをやつて饅舌りませう」とグイ飲の手眞似をして見せた。

指物屋の二階の一室が先生の住居である。仕事場の横から急な狭い梯子段を上ると、直ぐ當面に炭俵が置いてある、靴が藁のやうに一隅に眠つて居る、太い棒が其傍に突立つて番をして居る、多分ステッキといふのだらう。別の一室には書生でも居るか、微吟の聲が洩れて居たが、其前の薄暗い板間を通ると突當の部屋が山田巡査の宇。

「ヤツ、よく入来しやいました。サア此方へ、サア」と言ひながら急に起つて押入から座蒲團を一枚、長火鉢の向へ持出した。

先生一杯やりはじめて、ヤゝ酔の廻つて居る時分であつた。

「獨身者の生活は斯んなものでしてナ。御覽の通りで狭いも狭い、世帯道具一切がこの一室にあるのだから、まア何のことはない豚小屋ですな、豚小屋で……」と其處らをきよる／＼、

何か探して居るやうであつたが、急に前の一杯をグイと呑干して、

「まア一ツ！ 御飯が済んだのなら酒だけ一ツ、この酒は決して頭へ来るやうな酒ぢやア御座いませんから。」

自分は受けてちやぶ茶に置いた。成程狭いが、狭いなりに一室がきちんと整理して居る。作出しの押入が一間、室内にはみ出して其附紙は補修だらけ、壁はきたなく落書がしてある、壁は黒い、障子は燻けて居る、成程むさくるしい部屋であるが、これ又何處となく掃除が届いてサツパリして居る。どうして、豚小屋どころか！

窓の下に机、机の右に書架、横に長火鉢、火鉢に並んでちやぶ茶、右手の壁に滑うて籠籠、鼠入らず、其上に違調、總てが古いが、總てが清潔である。煙草盆、菓子器、茶入、蓋物、鞆入の書籍、總てが其處を得て、行儀よく並んで居る。書籍箱の上には盆栽の小鉢が三ツ四ツ置いてある。

自分は杯を返しながら
「流石鑿官だけに貴株は大變清潔ずきです
ね。」
「ハ、ハ、ハ、イヤ清潔ずきていふのことも

ないが、これが私の性分です。でも、どうも悪い性分です。他人のすることは、氣に入らないうふんだから困つて了ひます。殊に食器です。ナア、茶碗でもなんでも他人に爲て貰ふと如何も心持が悪い、それで悉皆自分でやりますがね……。

『ぢやアいよく、獨身者、謙向といふ性分です。ハ、ハ、ハ、ハ、』

『全くさうです、だから國に女房もあります。が決して呼びません、一人で不自由を感じないんですから。』

『夫人がお有リンなるんですか、さうですか、それぢやア何にも獨身者の館住居を好んでするにやア當らないでせう、そしてお兄さんは？』

『小兒もありません、五歳になる男の兒が一人あります、がです、矢張一人のはうが氣樂です。ナア』と、酌で飲みながら、『尤、私の妻を呼ばないのは他にも理由がありますか。』

『どんな理由がありますか知りませんが、兎も角、妻子があれば一家團樂の樂みを享けないのは嘘でせう。貴様さびしく思ひませんか。』

『イヤ全く孤獨しく感じないこともないです。がナ、ナニ私も時々歸るし、妻もちよいとやつて來ますよ。汽車で日往復が出來ますか。』

らナニ便利な世の中です、御心配には及びません、夜具も二人前備へてあります、ハッハッハッハッ

『ハ、ハ、ハ、先づさう諦めて居れば仔細はありませぬナ。』

『サア何か食つて下さい、ろくなものは御座いませんがね、どうです豆か、蜜柑でも。』

『ちやぶ臺には煮豆、菓子、蜜柑、酢魚といふ風なものが雜然と並べてある。柱にかけた花挿には印ばかりの松ヶ枝、冬の目脚は傾いて西の窓をまともに射し、主人の顔は赤く眼はとろりとして矢張正月は正月らしい。』

主人は専賣特許の厨爐にかけた鐵瓶から徳利を出しながら、

『全く一人のはうが氣樂です。サア然いところを一ツ、それに私は敢へて好んで妻を持つたわけぢやアないんですからナ。ふとした處から養子に貰はれたので、若しそれで無かつたら今でも獨身でサア、第一巡查をして去子を養つて樂みをしようなんて、ちつと出來にく

い養ですナ、蛇の綱渡よりか困難しいことですか、エ、貴様は蛇の綱渡を見たことがありませんか、私は一ツ見ました。姓名は言はれませんが、私どもの仲間に妻と子供の三人と母親

とを養つて、それで小ザツバリと暮して居るものがある、感心なものでせう、尤も酒は呑みません、煙草もやりません。こんな男は例外です。私どもには到底出來ない業です。』

『然し田舎に細君を置いてた處で費るものはおんななさい、細君が可哀さうだ。』

『ハ、ハ、ハ、貴様は人に細君を引だ、イヤ私だつてね、まんざら女房を可愛がらないわけはないんだが、田舎には多少の資産があるんです、それに未だ父母も居ますから知つて妻は

井方に居たはうが双方の便利なんです。まア私なんざア全く道樂で斯んな職をやつて居るんです。サア、イヤになれば直ぐ止めて田舎へ引込んで食ふに困るやうなことはないんですから

ナア。』

『氣樂です。』

『全く氣樂です！ だから酒は石崎から斯うやつて樽で取つてグイグイ飲むのですが、澤之鶴も可いが私どもにはやア少し甘味が勝つて居るやうで却つてキ印の方が口に合います、どうも料理屋の混成酒だけは閉口しますナア。』

到頭木音を吐いちやツた！」

『ハツハツ、、、到頭本音が出ましたね。』

『ハツ、、、』と笑つたが山田巡査は眼を閉ぢたまゝ何を考へるともなく、うつら／＼として居る様子であつた、半分居眠つて居るのである。突然、

『イヤ矢張この方が氣樂だ！』と叫んで、眼を見開き、自分を見て莞爾笑つたが、直ぐ又居眠りを始めた。

自分は暫時く凝然として居たが、起すのも氣の毒と、そつと起つて室を出た。

指物屋の店から四五十間下ると四辻がある、自分は此處に來た時、後を振り向くと、指物屋の二階の窓から山田巡査の髭髯だらけの顔が出て居た。頻りと點頭をして居た。

自分は全然この巡査が氣に入つて了つた。

(明治三十五年二月)

酒中日記

五月三日(明治三十一年)

『あの男は如何なつたか知ら』との噂、よく有ることで、四五人集つて以前の話をすると、消えて去くなつた者の身の上に、ツイ話が移るものである。

この大河今様、恐らく今時分やはり同じやうに噂せられて居るかも知れない。『時に大河は如何したらう。』升屋の老人口をさる。

『最、死んだかも知れない』と誰かど氣の無い返事を爲る。『全くあの男ほど氣の毒な人はないよ』と老人は例の哀れつばい聲。

氣の毒が下さる段は難有い。然し幸か不幸か、大河といふ男今以て生きて居る、而も頗る達者、此先何十年此世に呼吸の音を續けますことやら。憚りながら未だ三十二で御座る。

まさか此、ぼけな島、馬島といふ島、人口百二十三の一人となつて、二十人あるなしの子供を對手に、やはり例の教員、然し今度は私塾なり、アイウエオを教へて居るといふ事は御存知あるまい。無いのが當然で、斯く申す自分すら、

自分の身が流れ流れて思ひもかけぬ此島で斯んな暮を爲るとは夢にも思はなかつたこと。

噂をすれば影とやらで、ひよつくり自分が理はれたなら、升屋の老人嘆驚りして聞いた口がふさがらぬかも知れない。『いつたい君は如何したといふんだ』と漸とのことで辭を出す。それから話して一時間も経つと又嘆驚、今度は腹の中で、『いつたい此男は如何したのだらう、五年見ない間に全然氣象まで變つて了つた。』

驚き給ふな原因がある。第一、日記といふ者書いたことのない自分が斯うやつて、こまめに筆を走らして、如何でもよい自分のやうな男の身の上の有つたことや、有ることを、今日から

ポツ／＼書いて見ようといふ氣になつたのからして、自分は五年前の大河では御座らぬ。

あゝ今は氣樂である。此島や島人はすつかり自分の氣に入つて了つた。瀬戸内にこんな島があつて、自分のやうな男を、兎も角も呑氣に過さして呉れるかと思ふと、正にこれ夢物語の一章一節、と言ひたくなる。

酒を呑んで書くと、少々手がよそへて困る、然し酒を呑まないで書くと心かふるへるかも知れない。『あゝ氣の毒い男』何處に自分が變つて居る、やはりこれが自分の本音だらう。

可愛い／＼お露が遊びに来たから、今日はこれでも筆を擧げる。

五月四日
自分が升屋の老人から百圓受取つて札の抽斗に納つたのは忘れぬせぬ十月二十五日、事の初、が此の日で、其後自分は此日に逢ふごとに腹を締め眼をつぶる。なるべく此日の事を思ひ出さないやうにして居たが、今では平氣なもの。

一件があり／＼と眼の先に浮かんで来る。あの頃の自分は眞面目なもので、酒は飲めても飲まぬやうに、謙嚴正直、いやはや四角張つた男であつた。

老人達、全然惚れ込んでしまつた。一にも大河、二にも大河、公立八雲小學校の事は大河でなければ竹箒一本買ふことも決定するわけにゆかぬ次第。校長になつてから一年日の升屋の老人、遂に女房の世話まで焼いて、お政を自分の妻にした。子が出来た。お政も子供も病身、

酒を呑んで書くと、少々手がよそへて困る、然し酒を呑まないで書くと心かふるへるかも知れない。『あゝ氣の毒い男』何處に自分が變つて居る、やはりこれが自分の本音だらう。

健康な自分ばかり。それでも一家無事に平和に、これぞといふ面白くもない代り、又これぞといふ心離もなく日を送つて居た。

處が日清戦争、連戦連勝、軍隊萬歳、軍人
でなければ夜も日も明けぬお目出度いことゝな
つて、そして自分の母と妹とが墮落した。

母と妹とは自分達夫婦と同様するのが窮屈
で、赤坂區新町に下宿屋を開業。それも表向
ではなく、例の素人下宿。いやに氣位を高くし
て、家が廣いから、それにどうせ遊んで居る身
體、若いものを世話してやるだけのこと、もつ
とも性の知れぬおは御免被るとの觸込み。

自體強者は氣に入らないので、頻りと止めて
見たが、もつゝ強情我慢な母親、妹は我儘
者、母に甘やかされて育てられ、三絃まで仕込
まれて自堕落者に首尾よく成りおぼせた女。お
前たちの厄介にさへならなければ可からうとの
挨拶で、頭から自分の注意は取あげない。

これぞといふ間違もなく半年経ち、日清戦争
となつて、兵隊が下宿する。初は一人の下士
これが導火線、瀬を以て集り、終には酒、歌、
軍歌、日本帝國萬々歳、そして母と妹との
墮落。

「國家の干城たる軍人」が悪いのか、母と妹と

が悪いのか、今更いふべき問題でもないが、た
だ一の動かすべからざる事實あり曰く、娘を持
ちし親々は、それが華族でも、富豪でも、官吏で
も、商人でも、皆な悉く軍人を絆に持ちたい
といふ執望を以て居たのである。

娘は娘で軍人を情夫に持つことは、寧ろ誇
るべきことである、とまで思つて居たらしい。
軍人は軍人で、殊に下士以下は人の娘は勿
論、後家は勿論、或は人の妻をすら歡弄して、
それが當然の權利であり、國民の義務であると
まで済まして居たらしい。

三圓貸せ、五圓貸せ、母はそろゝ自分を攻
め初めた。自分は出来るだけ其の望に應じて、
苦しい中を何とか工夫して出してやつた。
月給十五圓。それで親子三人が食つてゆくの
である。なんで餘裕があらう。小學校の教員は
すべからず焼鹽か何かで三度のめしを食ひ、以
て教場に於ては國家の干城たる軍人を崇拜す
べく、七歳より十三四歳までの兒童に教訓せよ
と時代は命令して居るのである。

唯々として自分は此命令を奉じて居た。
然し母と妹との節操を軍人閣下に献上し、
更に又、此十五圓の中から五圓三圓と割いて、
母と妹とが酔酒の料に捧げなければならぬか

を思ひ、流石お人好の自分も頗る當惑したの
である。
酒が醒めかけて来た！今日はこゝで止める。
五月六日
昨日は若い者が三四人押かけて来て、夜の十
二時過ぎまで飲み、だみ聲を張上げて歌つたの
で疲れて了ひ、何時寝たのか知らぬ間に夜が明
けて今日。それで昨日の日記がお休み。
さても氣樂な教員、酒を飲まうが歌はうが、
お露を可愛がつて抱いて寝ようが、それで先生
の資格なしとやかましく言ふ者は此島に一人も
ない。

特別に自分を尊敬も爲ない代りに、魚あれば
魚、野菜あれば野菜、誰が持つて来たとも知れ
ず臺所に投りこんである。一升徳利をぶらさ
げて先生、憚りながら地酒では御座らぬ、お露
の酌で飲んで見させと縁先へ置いて去く老
人もある。

あゝ氣遣だ、自由だ。母もいらぬ、妹もいらぬ
妻子もいらぬ、慾もなければ得もない。それで居
てお露が無常にも可愛いのには不思議ぢやないか。
何が不思議、可愛いから可愛いので、お露と
ならば何時でも死ぬる。

十日前のこと、自分は縁先に出て月を眺め、

露に霞んで、水のやうな海を見おろしながら、お露の酌で飲んで居ると、ふと死んだ妻のこと、東京の母や妹のことを思ひだし、又此身の流轉を思うて、我知らず涙を落すと、お露は見て居たが、其鈴のやうな眼に涙を一ぱい合ませた。その以前、自分はお露に涙を見せたこととなく、お露も亦た自分に涙を見せたことはいないのである。さても可愛い此娘、此大河なる團栗眼の娘のやうな面をして居る男にも何處か異な處が有るかして、朝夕慕ひ寄り、少女心の限りを盡して親切にして呉れる不慮さ。

自然生の三吉が文句ぢやないが、今となりては、外に望は何にもない、光榮ある歴史もなければ國家の干城たる軍人も居ない此島、此島に生れて此島に死し、死しては彼の、そら今風が鳴つて居る山陰の靜かな墓場に眠る人々の仲間入りして、此島の土となりたばかり。

お露を妻に持つて島の者にならつせ、お前さん一人、遊んで居ても島の者が一生養つて上げまされ、と六兵衛が言つて呉れた時、嬉しいやら情けないやらで泣きたかつた。

そして見ると、自分の周囲には何處かに悲惨の影が取巻いて居て、人の憐愍を自然に惹くのかも知れない。自分の性質には何處かに人なつ

こいところがあつて、自と人の親愛を受けるのかも知れない。

何れにせよ、自分の性質には思ひ切つて人に送らふことの出来る、ピンとした處はないので、心では思つても行に出すことの出来ない場合が幾多もある。

あゝ哀れ氣の毒千萬なる男よ、母の爲め妹の爲めに可くないと思つた下宿の件も遂には止め終せなかつたも當然。母と妹の淺ましい離落を知りつゝも思ひ切つて言ひだし得ず、言ひだしても争ふことの出来なかつたも當然。苦しい中を算段して、いや／＼ながらも母と妹とに婚約の料をさ／＼げたもこれ又當然。

二十四日の晩であつた、母から手紙が来て、明二十五日の午後まかり出るから金五圓至急に調達せよと申込んで来た時、自分は思はず吐息をついて長火鉢の前に坐つたまゝ拱手をして首を垂れた。

「如何なさいました」と病身な妻は驚いて問うた。

「これを御覽」と自分は手紙を妻に渡した。妻は見て居たが、これも黙つて吐息したまゝ手紙を下に置く。

「何故こんな無理ばかり言つて来るだらう。」

「さうですわね……」

「最早一文なしだらう？」

「一圓ばかり有ります。」

「有つたつて其を渡したら家で困つて了ふ。可いよ、明日母上が来たなら私がいればお断絶するから。さう／＼は私達だつて困らね。それも今日母上や妹の露命をつなく爲めとか何とか別に立派な費ひ途でも有るのなら、借金してだつて、衣類を質草に爲たつて五圓や三圓俵なら私の力にても出来して上げるけれど、兵隊に貢ぐのやら譯もわからない金だもの。可いよ、明日こそ私が思ひきり言ふから、それで聴かないなら如何にでも勝手になさいと言つてやるから。」

「言ふのはお止しなさいよ。」

「何故や、言ふよ、明日こそ言ふよ。」

「だつてね母上のことだから又大きな聲をして必定お怒鳴になるから、近處へ聞えても外聞が悪いし、それにね、貴所が思ひ切つたことを被傳ると直ぐ私が恨まれますから。それでなくても私が氣に喰はんから一緒に居たくても爲方なしに別居して嫌な下宿屋までして居るんだつて言ひふらしてお居でになるんですから」とお政は最早泣き聲になつて居る。

「然し實際明日母上が見えたつて渡す金が無いぢやアないか。」

『私が明日のおごまでに如何にか致します。』

『如何にかつて、お前に出来る位なら私にだつて何とか爲りさうなものだが、實際始末にいけないのぢやないか。』

『今度だけ私にまかして下さい、何とか致しますから』と言はれて自分は強ひて争はず、めいり込んだ氣を引きさて、改築事務を少しばかり執つて床に就いた。

五月七日

一寝入したかと思ふと、フト眼が覺めた、眼が覺めたのではなく可怕しい力が闇の底から手を伸して揺り起したのである。

其頃學校改築のことで自分は委員長。自分の外に六名の委員が居ても多くは有名無實で、本氣で世話を焼くものは自分の外に升屋の老人ばかり。豫算から寄附金のことまで自分が先に立つて苦勞する、敷地の買上、其代價の交渉、請負師との掛引、割當てた寄附金の取立、現金の始末まで自分に爲せられるので、自然と算盤が机の上に置かれ通し。持前の性分、間に合はして置くことが出来る、朝から寝るまで心配の絶えない處へ、母と妹とが陥落の件。殊に又

ぞろ母からの無理な申込みで頭を痛めた故か、其夜は寝ぐるしく、怪しい夢ばかり見て我ながら眠つて居るのか、覺めて居るのか全然ぬ位であつた。

何か物音が爲たと思ふと眼が覺めた。さては盗賊と半ば身體を起してきよろ／＼と四邊を見廻したが、森として其様子もない。夢であつたか現であつたか、頭が錯亂して居るので判然しない。

言ふに言はれぬ恐怖さが身内に漲つて、如何しても其儘眠ることが出来ないので、思ひ切つて起上がった。

次の八疊の間の間の襖は故意と一枚開けてあるが、豆洋燈の火は其入口までも達かず、中は眞闇。自分の寢て居る六疊の間すら煤けた天井の影暗く被ひ、靄霧でもかゝつたやうに思はれた。

妻のお政はすや／＼と寝入り、其傍に二歳になる助が其額を小枕に押しつけて愛らしい手を母の腮の下に遠慮なく突込んで居る。お政の顔色の悪さ。さなきだに若ざめて血色悪しき顔に夜目には死人かと怪しまれるばかり。剩へ髪は亂れて頬にかゝり、頬の肉や、落ちて、身體の健かならぬと心に苦勞多きとを示して居

る。自分は音を立てぬやうに其枕元を歩いて、長火鉢の上なる豆洋燈を取上げた。

暫し聽耳を聳て何を聞くともなく突立つて居たのは、猶ほ八疊の間を見分する必要があるかと疑つて居るので。しかし確に箆筒を開ける音がした、障子をする／＼と開ける音を聞いて、夢か現か兎も角と八疊の間に忍足で入つて見た

が、別に異變はない。縁端から、臺所に出て眞闇の中をそつと覗くと、鼻息のある冷たい空氣が氣味悪く顔を掠めた。鼻居に立つて豆洋燈を高くかゝげて眞暗の隅々を照して居たが、襖の横にかくれて黒い風呂敷包が半分出て居るのに目が着いた。不審に思ひ、中を開けて見ると現はれたのが一筋の女帯。

驚くまいことか、これお政が外出の唯一本の帯、升屋の老人が特に祝つて呉れた品である。何故これが此所に隠してあるのだらう。

自分の寢靜まるのを行つて、お政はひそかに箆筒から此帯を引出し、明朝早くこれを質屋に持込んで母への金を作る積りと思は當つた時、自分は實知らず涙が頬を流れるのを拭き得なかつた。

自分は其ま、帯を風呂敷に包んで元の所に置き、寢間に還つて長火鉢の前に坐り、烟草を

吹かしながら物思に沈んだ。自分は果して彼の母の實子だらうかといふやうな怪しい怪ましい考へが起つて来る。既に自分の氣性と母及び妹の氣象とは全然異つて居る。然し父には十年に別れたのであるから、父の氣象に自分が似て生れたといふことも自分には信らない。かすかに覺えて居る所では父は柔和い方で、荒々しく母や自分などを叱つたことはなかつた。母に叱られて柱に縛りつけられたのを父が解いて呉れたことを覺えて居る。其時母が父にも怒り移して慳食に口をきいたことをも思ひ出し、父のこと母のこと、それから其へと思を聯ね、果は親子の愛、兄弟の愛、夫婦の愛などいふことにまで考へ込んで、これまでに知らない深い人情の祕密に觸れたやうな氣にもなつた。

お政は痛ましくは可愛く、父上は戀しく、懐かしく、母と妹は憎くもあり、痛ましくもあり、子供の時など思ひ起しては戀しくもあり、突然寄附金の事を思ひだしては心で堪らず、運動場に敷く小砂利のことまで考へだし、頭はぐら／＼して氣は遠くなり、それで居て神經は何處に／＼した氣味がある……

嗚呼！ 何故彼の時自分は酒を呑まなかつたらう。今は舌打して飲む酒、呑めば酔ひ、酔へ

ば楽しい此酒を何故飲まなかつたらう。

五月八日

明くれば十月二十五日、自分に取つて大厄日。

自分は朝起きて、日曜日のことゆる朝食も急がず、小兒を抱いて庭に出で、其處らをぶらぶら散歩しながら考へた、帯の事を自分から言ひ出して止めようかと。

然し止めて見た處で別に金の工面の出来るでもなし、さりとて斷然母に断つて居ることは、斷つて止める處でもあるし。つまり自分は知らぬ顔をして居て妻の爲すがまゝに任すことに思ひ定めた。

朝食を終るや直ぐ机に向つて改築事務を執つて居ると、升屋の老人、生垣の侍から聲をかけた。

『お早う御座い』と言ひつゝ、縁先に廻つて、『朝ばらから御勉強だね。』

『折角の日曜も此頃はつぶれて御座います。』

『ハハハハッ何に今に遊ばれるよ、學校でも立派に出来あがつた處で、しんみりと黙ひたいものだ、私は今からそれを務めに爲て居る。』

座に着いて老人は烟管を取出した。此老人と自分、外に村の者、町の者、出張所の代診、

派出所の遊戯など五六人の者は其島の仲間、殊に自分と升屋とは四さへあれば氣未な勝負を争つて居たのが、改築の氣から此方、此の者は兎も前、自分は帯と何より嗜好、唯一の道樂であるがすら打ち得なかつたのである。

『来月一ばいは打てさうありません。』

『その代り冬休といふ奴が直ぐ前に控へて居ますからな。左右に火鉢、甘い茶を飲みながら打つ樂は父別だ』といひつゝ、老人は懷中から新紙を一枚出して、急に眞直になり、

『ちよつと是を御覽。』

披げて二面の電氣機を指した。見ると或地方で小學校新築落成式を擧げし當日、廊下の欄倒れて四五十人の兒童庭に墜落し、重傷者二名、輕傷者三十名との珍事の報告である。

『大變ですね。どうしたと言ふんでせう？』

『だから私が言はんことぢやアない。其通りだ。安普請をすると其通りだ。原などは餘り經費がかゝり過ぎるなんて理窟を並べたが、斯ういふ實例が上つて見ると文句はあるまい。全體大切な兒童を幾百人と集るのだから、丈夫な上にも丈夫に建るのが當然だ。今日一つ原に會つて此新聞を見せてやらなければならん。』

『無闇な事も出来ずまいが、今度の設計なら決して高い豫算ぢや御座いませんよ、何にしるあの建坪ですもの、八千圓なら安い位なものです。』

『いや其安價の私や氣に喰はんのだが、先づ御互の議論が通つて彼の豫算で行くのだから、さう安ほい直ぐ欄の倒れるやうな險存なもの出来上らんと思ふがね』と言つて氣を更へ、『其處で寄附金ぢやが未だ大きな口が二三残つては居ないかね?』

『未だ三口ほど残つて居ます。』

『それぢやア私がこれから廻つて見よう。』

『さうですか、それでは大井様を願ひます。今日渡すから人をよこして呉れると云つて來ましたから。』

『百圓だつたね?』と老人は念を推した。

『さうです。』

其處で老人は程遠からぬ華族大井家の方へ廻ると出て行きたるに引きちがへてお政は外から歸つて來た。老人と自分が話して居る間に質屋に行つて來たのである。

『金は出來たらうか』と自分は何處までも知らぬ顔で聞いた。妻は、『出來ました』と言ひつゝ小兒を背から下して

膝に乗せた。

『如何して出來たのだ』と自分は問はざるを得なくなつた。

『如何してゞも可いぢやアありませんか、私が...』と言ひかけて淋しげな笑を洩した。

『さうさ、お前に任したのだから...處で母上さんが見えたら最早下宿屋は止して一緒になつて下さいと言つて見ようぢやないか。』

『言つた處で無益で御座いますよ。』

『無益といふこともあるまい。熱心に説けば...』

『無益ですよ、却つて氣を悪くなさるばかりですよ。』

『それは多少か氣を悪くなさるだらうけれど、言はないで置けばこの後どんなことに成りゆくかも知れないよ。』

『さうですなえ...然し兵隊さんと如何とかいふやうなことは被仰んはうが可う御座いますよ。』

『まさか其んなことまでも言はれも爲まいけれど。』

一時間立たぬうちに升屋の老人は歸つて來て、

『甘く行つたよ』と座に着いた。

『どうも御苦勞様でした。』

『ハイ確かに百圓。渡しましたよ。檢めて下さい』と紙包を自分の前に。

『今日は日曜で銀行がだめですから貴所の宅に預つて下さいませんか。私の家は用心が悪う御座いますから』と自分が言ふを老人は笑つて打消し、

『大丈夫だよ、今夜だけだもの、私宅だつて金庫を備へつけて置くほどの酒屋ぢやアなし、ハツハツ、、、取られる時になりや私の處だつて同じだ。大井様は濟んだとして、後の二軒は誰が行く筈になつて居ます。』

『午後私が廻る積りです。』

升屋の老人は去り、自分は百圓の紙包を机の抽斗に入れた。

五月九日

自分は五年前の事を書いて居るのである。十月二十五日の事を書いて居るのである。厭になつて了つた。書きたくない。

けれど書くと、酒を飲みながら書く。此頃島の若いものとしよに稽古をして居る義太夫。さうだ。玉三でも叱りながら書かう。面白い! — 晝飯を済まして、自分は外出けようとする處へ母が來た。母が來たら自分の歸るまで

待つて貰ふ筈にして置いた處へ。

色の淺黒い、眼に險のある、一見して一癖あるべき面魂といふのが母の人相。背は自分と異つてすらりと高い方、言葉に力がある。

此母の前へ出ると自分の妻などはみじめな者。妻の一言いふ中に母は三言五言いふ。妻は

もぢくしながらいふ。母は號令でもするやうに言ふ。母は三言目には喧嘩腰、妻は罵倒されて着くなつて小さくなる。女でもこれほど異ふものかと怪しまれる位。

母者ひとの御入來。

其處は端近先づこれへとも何とも言はぬ中に、母はつかつかと上つて長火鉢の向うむつとばかり。

『手紙は届いたかね』とは一言で先づ我々の荒唐をひしがれた。

『届きました』と自分は答へた。

『言つて來たことは都合がつくかね?』

『用意して置きました』とお政は小さい聲、母は

はそろ／＼機嫌を改めて、

『あゝ其は難有う。毎度お氣の毒だと思ふんだけれど、ツイね私の方も請取る金が都合よく請取れなかつたりするものだから、此方も困るだらうとは知りつゝ、何處へも言つて行く處

がないし、ツイね』と言つて莞爾。

なく見ると母の顔は決して下品な出来ではない。柔和に構へて、チンとすまして居られると、其險のある眼つきが却つて威を示し、何處の高貴のお部屋様かと受取られるところもある。

『イ、え如何致しまして』とお政は言つたぎり、伏目になつて助の頭を撫で、居る。母はちよつと助を見たが、お世辭にも孫の機嫌を取つて見る母では無さうで、實はさうで無い。時と場合で其なことは如何にでも。

『助の顔色が如何も可くないね、いつたい病身な兒だから餘程氣をつけないと不可ませんよ』と云ひつゝ、今度は自分の方を向いて、

『學校の方は如何だね。』

『如何も多忙しくつて困ります。今日もこれから寄附金のことで出掛ける處でした。』

『さうかね、私にかまはないでお出かけよ、私も今日は日曜だから悠然して居られない。』

『さうでしたね、日曜は兵隊が澤山來る日でしたね』と自分は何心なく言つた。すると母、やはり氣がとがめるかして、少し氣色を更へ、音がカンを帯びて、

『なに私どもの處に下宿して居る方は曹長様ばかりだから、日曜だつて平常だつてそんな

に變らないよ。でもね、日曜は兵が遊びに來るし、それに矢張り上へ立てば酒位飲まして返すからね、自然と私共も忙がしくなる勘定サ。軍人は如何しても暑氣が可いね。』

『さうですかね』と自分は氣の無い挨拶をしたので、母は愈々氣色ばみ、

『だつてさうぢやないかお前、今度の争だつて日本の軍人が豪いから何時も勝つぢやないか。軍人あつての日本だね、私共は軍人が一番すきサ。』

この調子だから自分は遂に同居説を持ちだすことが出来ない。まして品行の噂でも爲て忠告がましいことでも言はうものなら、母は何と言つて怒鳴るかも知れない。妻が自分を止めたも無理でない。

『學校の先生なんテ、私は大嫌ひサ、ぐづ／＼して眼ばかりパチつかして居る處は蚊を捕へ損なつた疣蛙見たやうだ』とは曾て自分を罵つた言葉。

疣蛙が出ない中にと、自分は、

『ちよつと出て來ます、御悠寛』とこそ／＼出て了つた。何と意氣地なき男よ!

思へば母が大威張で自分の金を奪ひ、遂に自分を不幸のドン底まで落したのも無理はない。

自分達夫婦は最初から母に呑まれて居たので、母の爲ることを怒り、恨み、罵つては見る者の、自分達の力では母を如何することも出来ないものであつた。

酒を飲まない奴は飲む者に凹まされると決定つて居るらしい。今の自分であつて見る！ 文句がある。

『母上さん、そりやア貴女軍人が一番好きでせうよ』とじろり其横顔を見てやる。母のことだから、

『オヤ異なことを言ふね、も一度言つて御覽』と眼を釣上げて詰寄るだらう。

『御氣に觸はつたら御用辨。一ツ差上げませう』と杯を奉つる。『草葉の蔭で父上が…』

とそれからさきはりで行く處だが、彼の時は如何して彼の時分はあんなに野暮天だつたらう。

濱を誰か唸つて通る。彼の筋廻しは吉次だ。彼奴聲は全く美しいよ。

五月十日
外から歸つたのが三時頃であつた。妻は突伏して泣いて居る。

『如何したのだ、如何したの？』と自分は驚いて訊いたが、お政のことゆゑ泣くばかりで容易に言ひ得ない。泣くのは此女の持前で、少しの

事にも涙をこぼす。然し今度のは餘程のことが有つたと見えて、自分が聞けば聞くほど益々泣入るばかり。かうなると自分は狼狽へざるを得ない。水を持って来てやりなるとすると、漸くのことで詳しく事情が解つた。

お政の苦心は十分母の満足を得なかつたのである。折角の帯も三圓にしかならず、仕方なしにお政は自分の出て行つた後で此三圓を母に渡すと、母は大立腹。二人の問答は次のやうであつた。

『五圓と言つて來たのだよ。』

『でも只今これだけしか無いのですから…』

『だつて先刻用意してあると言つたぢやないか。』

『ですから三圓だけ漸々作らへましたから…』

『さうお。漸々作らへてお呉れだつたのか。お氣の毒でしたね、色々御心配をかけて。必定七

屋からでも持つて來たお金でせう。そんな思のとツ着いた金なんか借りたくないよ。何だね人面白くも無い。可いよ今藏が歸つて來るのを待つて居るから。今藏に言ふから。』

『イ、え主人では知らないのですから…』
『オヤ今藏は知らないの？ 驚いた、それぢや

お前さんが内證でお貸しなの。嘘を吐きなさんな、嘘を。今藏の奴必定三圓位で追返せとか何とか言つたのだらう。だから自分は私を避けて出て行つたのだらう。可いよ、待つて居るから。暗までだつて待つて居てやるから。』

『宅のは全く、全く知らないの…』と妻は泣いて口がきけない。

『泣かないでも可いぢやアないか。お前さんは亭主の言へつけ通り爲たのだから可いぢやアないか。フン何ぞと言ふと直ぐ泣くのだ。どうせ私は鬼婆だから私が何か言ふと可怕いだらうよ。』

何と言はれても一方は泣くばかり、母は一人で並べて居る。

『だから出來なきや出來ないと言つて寄せせば可いんだ。新町から青山くんだりまで三圓ばかりのお金を取りに來るやうな暇はない身體ですよ。意氣地がないから親一人妹一人養ふことも出來ずさ、下宿屋家業までさして置いて忠孝の道を見童に教へるなんて、随分續つた先生様もあるものだね。然しお政さんなんぞは幸福さ、いくら親に不孝な男でも一房だけは可愛がるからね。お前などのやうに兵隊の嫌嫌まで取つて漸々御飯を戴いていく女もあるから、お

前さんなんぞ決して不足に思つちやなりませんよ。』

皮肉も言ひ盡して、暫く烟草を吹かしながら坐つて居たが、時計を見上げて、

『どうせ避けた位だからちよつと歸つて来ないだらう。歸りませう、私も多忙しい身體だからね。お客様に御飯を上げる仕度も爲なければならんし』と急に起上つて、

『紙と筆を借りるよ。置手紙を書くから』と机の傍に行つた。

此時助が慟しく泣きだしたので、妻は抱いて庭に下りて生垣の外を、自分も半分泣きながら、ぶら／＼歩いて子供を寝かしつけようとして居た。暫くすると急に母は大聲で、

『お政さん！ お政さん！』と呼んだ。妻は座敷に上がると母は眼に角を立て、睨むやうにして、

『お前さんまで逃げないでも可いよ。人を馬鹿にしてらア。手紙なんぞは書かないから、歸つたら然う言つてお呉れ。此三圓も不用いよ』と投げだして、『最早私も決して来ないし、今藏も来ないが可い、親とも思ふな、子とも思はんからと言つてお呉れ！』

非常な劍幕で母は立ち去り、妻は其まゝ泣

伏したのであつた。

自分は一々聴き終つて、今の自分なら、

『宜しい！ 不用けや三圓も上げんばかりだ。泣くな、泣くな、可いぢやないか母上さんの方から母でもない子でも無いといふのなら、致方もないさ。無理も大概にして貰はんなら。』

然し彼の時分はさうでなかつた。不孝の子であるやうに言はれて見ると甚く其が氣にかゝる。氣にかゝるといふには種々の意味が含んで居るので、世間體もあるし、教員といふ第一の資格も缺けて居るやうだし、即ち何となく心に安んじないのである。それに三圓といふことは自分も知らなかつたのだ、其點は此方が悪いやうな氣もするので、

『困つたものだ』と腕組して暫く嘆息をして居たが、

『自分で勝手に下宿屋を行つて居ながら、そんなことを言はれて見ると、全然私共が悪いやうに聞える。可いよ、私が今夜行つて来よう。そして三圓だけ渡して来る。』

五月十一日

今日は朝から雨降り風起りて、湖水のやうな海も流石に波音が高い。山は鳴つて居る。今夜はお露も来ない。先刻まで自分と飲んで

居た若者も歸つてしまつた。自分は可い心持に酔うて居る。酔うて居るものゝ如何も孤獨の感に堪へない。要するに自分は孤獨である。人の一生は何の爲めだらう。自分は哲學者でも宗教家でもないから深い理窟は知らないが、自分の今、今といふ今感ずる所は唯だ儂さだけである。

如何も人生は儂いものに違ひない。理窟は技にして眞實の處は儂いものらしい。

若し果敢いものでないならば、たとひ人は如何な境遇に陥るとして自分が今感ずるやうな深い悲哀は感じない筈だ。

親とか子とか、兄弟とか朋友とか社會とか、人の周圍には人の心を動かすものが出来て居る。まぎらす者が出来て居る。若しこれ等が皆な消え去せて山上に樹つて居る一本松のやうに、たゞ一人、無人島の荒蕪に住んで居たらどうだらう。風は急に雨は暗く海は怪しく叫ぶ時、人の生命、此地の上に住む人の一生を楽しいもの、望あるものと感ずることが出来ようか。

だから人情は人の食物だ。米や肉が人に必要物なる如く親子や男女や朋友の情は人の心の食物だ。これは比喩でなく事實である。だから土地に肥料を施す如く、人は色々な交

句を作つて此等の情を培ふのだ。

さうして見ると神様は甘く人間を作つて御座る。ではない人間は甘く猿から進化して居る。

「オヤ！ 戸をたゞく者があゝ、此雨に。お露だ。可愛いお露だ。」

さうだ。人間は甘く猿から進化して居る。

五月十二日

心細いことを書いてる中にお露が来たので、

昨夜は書き續きの本文に取りかゝらなかつた。

さて――

若しお政が氣の勝つて居る女ならば、自分其夜三圓持つて母を尋ねると言へば、

「質屋から持つて来たお金なんか厭だと被仰つたのだから持つて行かなくなつたつて可う御座いますよ」と言ひ放つて口惜し涙を流す處だが、

お政にはそれが出来ない。母から厭味や皮肉を言はれて泣いたのは唯だ悲しくつて泣いたので、自分が優しく慰むれば心も次第に静まり、

別に文句は無いのである。

處で母は百圓盗んで歸つた。自分は今これを冷やかに書くが、机の抽斗を開けて見て百圓の紙包が紛失して居るのを知つた時は、『オヤ！』

と叫んだきり、容易に二の句が出なかつた。

『お前、此抽斗を開けや爲なかつたか。』

『否！』

『だつて先刻入れて置いた寄附金の包みが見えないよ。』

『まあ！』と言つて妻は眞蒼になつた。自分は狼狽て二の抽斗を抜き放つて中を一々検めたけれど無いものは無い。

『先刻母上さんが置手紙を書つてお開けになりましたよ！』

『さうだ！』と自分は膝を拍つた時、頭から水を浴びたやう。唾を踏外さうとした刹那の心持。

自分は暫ら茫然として机の抽斗を眺めて居たが、我知らず涙が頬をつたうて流れる。

『餘り酷すぎる』と一語僅かに洩し得たばかり、妻は涙の泉も涸れたか唯だ自分の顔を見て、血の氣のない唇をわななくと單はして居る。

『ぢやア母上さんが……』と言ひかけるのを自分は手を振つて打消し、

『黙つてお居で、黙つてお居で』と自分は四邊を見廻して『これから新町まで行つて来る。』

『だつて貴所……』

『否や、母上さんに會つて取返へして来る。餘りだ、餘りだ。親だつて此事だけは黙つて居られるものか。然しどうして其な淺ましい心を

起したのだらう……』

起したのだらう……』

自分は涙を止めることが出来ない。妻も遂に泣きだした。夫婦途方に暮れて實に泣くばかり。思へば母が三圓投出したのも、親子の縁を切るなど突飛なことを怒鳴つて歸つたのも皆な其心が見えなく。

『直ぐ行つて来る。親を盜賊に爲ることが出来ない。お前心配しないで待つてお居で、是非取りかへして来るから』と自分は大意で仕度し、

手箱から亡父の寫眞を取り出して懐中した。

小春日和の日曜とて、青山の通りは人出多く、

大空は澄み渡り、風は砂を立てぬほどに吹き、人々行樂に忙がしい時、不幸の男よ、自分は

夢路を辿る心地で外を歩いた。自分は今も此時を思ひだすと、東京なる都會を惡む心を油さ

ずには居られないのである。

東京御所の横手まで来ると突然、『大河君大河君』と呼ぶ者がある。見れば齋藤といふ、これも建築委員の一人。莞爾しながら近づき、

『如何も相濟まん、僕は全然遊んで居て。寄附金は大概集まつたらうか。』

寄附金といはれて我知らずどぎまぎしたが

『大略集まつた』と僅に答へて直ぐ傍を向いた。

『廻る所があるなら、僕廻つても可いよ。』

「難有う」と言つたぎり自分が躊躇して居るの
で齋藤は不審さうに自分を見て居たが「イヤ失
敬」と言つて去つて終つた。十歩を隔て、彼は
振返つて見たに違ひない。自分は思はず頭を疎
めた。

母に會つたら、何と切出さう。新町に近づく
につれて、これが心配でならぬ。母から反對に
怒鳴つけられたら、如何しようなど思ふと、母の
劍幕が目先に浮んで来て、足は自と立竦む。「若
し如何しても返さなかつたら」の一念が起らう
とする時、自分は胸を壓つけられるやうな氣が
するので、其一念を打消し打消し歩いた。
「大河とみ」の表札。二階建、格子戸、見た處
は小官吏の住宅らしく、女姓名だけに金貨でも
爲さうに見える。一度は引返へして手紙で言は
うかとも思つたが、何しろ一大事と、自分は思
切つて格子戸を潜つた。

五月十三日。

勝手の間に通つて見ると、母は長火鉢の向う
に坐つて居て、可憐い顔して自分を迎へた。鐵
瓶には徳利が入れてある。二階は兵士どもの飲
んで居る最中。然し思つたより前で、妹お光
の浮いた笑聲と、これに伴ふ男の太い聲は二
人か三人。母はじろり自分を見たばかり一言も

言はず、大きな聲で、
「お光、お銚子が出来たよ」と二階の上口を向
いて呼んだ。「ハイ」とお光は下りて来て自分を
見て、

「オヤ兄様」と言つたが笑ひもせず、唯だ意外
といふ顔付き、其風は赤いものづくめ、如何見
ても居酒屋の酌婦としか受取れない。母の可
怕い顔と自分の眞面目な顔とを見比べて居た
が、

「それからね母上さん、お鮪を取つて下さいつ
て。」

「さう。幾價ばかり？」

「幾價だか。可い加減で可いでせう。それから
母上さんにもお入なさいつて。」

「ああ」と母は言つて妙な眼つきでお光の顔を
見たが、お光は其儘自分の方は見向きもしない
で二階へ上つて了つた。自分は唯だ坐つたきり、
母の何とか言ひだすのを待つて居た。

「何しに來たの」と母は突慥食に一言。

「先刻は失禮しました」と自分は出来るだけ氣
を落着けて左あらぬ體に言つた。

「いゝえ如何しました。色々御心配をかけて済
まなかつたね。歸る時お政さんに言つて置いた
ことがあるが聞いてお呉れだつたかね？」と何

處までも冷やかに、憎々しげに言ひながら起上
がつて、「私はお客様の用で出て來るが、用が
あるなら待つて居てお呉れ」と薄唇口から出て
去つて了つた。

自分は唖氣して黙つとして居たが、其母な
がら之れ實に悪婆であるつくづく情なく、あ
あまで済して居る處を見ると、言つたところ
で、無益だと思ふと寧ろのこと公けの沙汰にし
て終はうかとの氣も起る。然し現在の母が子の
抽斗から盗み出したので、假令公金であれ、子の
情として訴へる理由には如何してもゆかない。
訴へることは出来ず、母からは取返へすことも
出来ないなら、竊かに自分で辨償するより外
の手段はない。八千圓ばかりの金高から百圓を
帳面で胡麻化すことは、たとひ自分に爲し得て
も、直ぐ後で發覺する。又自分には左る不正なこ
とは思つて見るだけでも身が震へるやうだ。自
分が辨償するとして其金を自分は何處から持
つて來る？

思へば思ふほど自分は如何して可いか解らな
くなつて來た。これは如何なことでも母から取
返へす外はと、思ひ定めて居ると母は外から歸
つて來て、無言で火鉢の向に坐つたが、
「如何だね、聞いてお呉れだつたかね？」と言つ

て長い烟管を取上げた。

『何をですか』と自分は母の顔を見ながら言つた。

『まあ可いサ聞かなかつたのなら。然しお前の用といふのは何だね?』

自分は懷中から三圓出して火鉢の横に置き、
『これは二圓不足して居ますが、折角お政が作らへて置いたのだから、取つて下さい、さう爲ませんと……』

『最早不用ないよ、だから私も二度とお前達の厄介にはなるまいし、お前達も私のやうなものは親と思はないが可い。その方がお前達のお徳ぢやアないか。』

『母上さん。貴女は何故そんなことを急に被仰るのです』と自分け思はず涙を呑んだ。

『急に言つたのがけ悪りや謝ります。さうだつたね、一年前位に言つたらお前達も幸福だつたのに。』

何といふ皮肉の言葉ぞ、今の自分ならば決然と、

『さうですか、宜しう御座います、それぢや御言葉に従ひまして、親とも思ひますまい、子とも思つて下さいますな。子とお思ひになると飛んだお恨みを受けるやうな事も起るだらうと思

ひますから。就いては今日私の机の抽斗に百圓入れて置きました其が、貴女のお歸りになると同時に紛失したので御座いますが、如何でせう、若しか反古と間違つて、お袂へでもお入になりませんでしたらうか、一應お聞申します』と

腹から出た聲を使つて、グツと急へ一本。
『何だと親を捕へて泥棒呼はり聞き捨てになりませんぞ』と来る所を取つて押へ、片頬に笑味を見せて、

『これは異なこと！ 親子の縁は切れてる筈でせう。イヤお持歸りになりませんなら其で可う御座います、右の次第を届け出るばかりですか』と大きく出れば、いかな母でも半分落城する所だけれど、彼の時の自分に何でこんな芝居が打てよう。

悪々しい皮肉を聞かされて、グツと行きづまつて了ひ、手を拱んだまゝ暫時は頭も得あげず、涙をほろ／＼こぼして居たが、

『母上さん、それは餘りで御座います』とやうに一言、母は何所までも上手、

『何が餘りだね。それは此方の文句だよ。チヨツ泣蟲が揃つてら。面白くもない！』

自分は形無し。又も文句に塞つたが、氣を引きたて、父の寫眞を母の前に置きながら、

『父上さんをお伴れ申してのお願で御座います。母上さん、何卒……お返しを願ひます、それでないと私が……と漸との思ひ言ひだした。母は直ぐ血相變へて、

『オヤそれは何の眞似だえ。可笑しなことをお爲だねえ。父上さんの寫眞が何だといふの?』

『どうか然う被仰らずに何卒お返しを。今日お持返りの物を……』
『先刻からお前可笑しなことを言ふね、私お前に何を借りたえ』

『何にも申しませんから、何卒然う被仰らずにお返しを願ひます、それでないと私の立つ瀬がないのですから……』と言はせも果てず、母は火鉢を横に膝を進めて、

『怪しからんことを言ふよ、それでは私が今日お前の所から何か持つてでも歸つたと言ふのだね、聞き捨てになりませんよ』と聲を高めて乗掛る。

『ま、ま、さう大きな聲で……』と自分はまごまご。

『大きな聲が如何したの、いくらでも大きな聲を出すよ。さア今一度、言つて御覽。事とすべに依ればお光も呼んで立合はすよ』といふ劍幕。此時二階の笑聲もひたりと止んで、下を覗

がひ聞耳をたてゝ居る様子。自分は狼狽へて言葉が出ない。もぢ／＼して居ると臺所口で「お待ちさま」といふ聲がした。母は、

「お光、お光お鮎が来たよ」と呼んだ。お光は下りて来る。格子が開いたと思ふと、「今日は」と入つて来たのが一人の軍曹。自分をちよつと尻目に向け、

「御馳走様」とお光が運ぶ鮎の大皿を見ながら、ひよるついで尻餅をついて、長火鉢の横にぶつ坐つた。

「おやまあ可いお色ですこと」と母は今自分を睨みつけて居た眼に媚を浮べて、「何處で」

「ハツハツ 其は軍事上の秘密に屬します」と軍曹酒氣を吐いて、「お茶を一杯い頂戴。」

「今入れて居るぢやありませんか、性急ない兒だ」と母は湯呑に充滿注いでやつて、自分の居ることは最早忘れたかのやう。二階から大聲で、

「大塚、大塚！」

「貴所下りてお出でなさいよ」と母が呼ぶ、大塚軍曹は上を向いて、

「お光さん、お光さん！」

「最早お歸りかえ。まあ可いぢやアないか。そんなし又お來でよ」と軍曹の前を作つた。外へ出たが直ぐ歸ることも出来ず、きりとて人に相談すべきことではなく、身に降りかゝつた災難を今更の如く悲しんで、氣拔けた人のやうに當もなく歩いて溜池の傍まで来た。全く思案に暮れたが、然し何とか思案を定めなければならぬ。日は暮れかゝり夕飯時になつたけれど何を食はうとも思はない。ふと山王臺の森に鳥の群れ集まるのを見て、暫く彼處のベンチに倚つて靜かに工夫しようと思ふ。日青橋を渡つた。

哀れ氣の毒な先生、「見すばらしげな後影」と言ひたくなる。酒、酒、何で彼の時、蕎麥屋にでも飛込んで、景氣よく一二本も倒さなかつたのだらう。

五月十四日
寂寥として人氣なき森のベンチに倚つたまま、何時の間自分は動かなくなつたらう。日は全く暮れて四邊は眞暗になつたけれど、少しも氣がつかず、たゞ腕組して折り／＼嘆息を洩すばかり、ひたすら物思に沈んで居たのである。

實地に就ての益に立つ考案は出ないで、斯うなると種々な空想を描いては打壊はし、又た満

く、空想から空想、枝から枝が生え、強んじ度がない。

痴情の果から母とお光が軍曹に殺される。一つ思ひ浮べると、其思案の有様が目眩に浮んで来て、母やお光が赤だらけになつて逃げ廻る様子が、あり／＼と見える。今幾々とは逃げながら自分を呼ぶ、自分は逃げ込んで母を助けようとする、一人の兵が自分を捉へて動かさない。アツと思ふと此空想が破れ、

自分が首圓持つて銀行に行、途中で、掏兎に取られた體にして肩け出よう、さう思ふうと考へた、すると警察、自分にかゝり、自分は拘引される、お政と助は拘引中に執死する

など、又々淺ましい方に空想が移る。

校舎落成のこと、其落成式の光景、下屋の老人のよるこぶ敷までが目に浮んで来る。

あゝ百圓あつたらなアと思ふと、これまで金銭のことなど迄まで自分を恨ましたことのないのが、今更の如く其怪しい、恐ろしい力を感じて来る、たゞ百圓、その金銭さへあれば、母も盜賊にはなるまいものを。よし母は盗みを爲した處で、自分に其金銭が有るならば今の場合、自分等夫婦は全く助かるものをなど考へると、金銭といふ者が欲しくもあり、悪くもあり、同

時に其金錢のために少しも憚まされないので、長閑かに此世を送つて居る者が羨ましくもなり、又實に惜々しくもなる。總て是等の苦々しい情は、これまで勤勉にして信用厚き小學教員、大河今藏の心には起つたことはないので、あゝ金錢が欲しいなアと思はず口に出して、熟と嗜い森の奥を見つめた。

すると、がや／＼と男女打雜りつて、ふざけながら上つて来るものがある。

「淋しいぢや有りませぬか、歸りませうよ、最早こんな處つまりませぬわ」といふ女の聲は確にお光。自分はぎよつとして起ちあがりうとしたが、直ぐ其處に近づいて来たので其儘身動きもせず様子を窺がつて居た。人々は全く此處に人あることを気がつかぬらしい。お光が居れば母もと覗つたが、女はお光一人、男は二人。

『ねえ最早歸りませうよ、母上さんが待つて居るから』と甘つたるい聲。

『何故母上さんは一緒に出なかつたのだらう、君知らんかね』と一人の男が言ふと、一人、

『頭が痛むとか言つて居たつけ』といふや三人急に何か小さな聲で囁き合つたが、同時にどつと笑ひ、一人が『ヨイショ』と叫んで手を拍

つた。

面白くない事が到る處、自分に附纏つて来る三人が行き過ぐるや自分は舌打して起ちあがり、そこ／＼と山を下りて表町に出た。

此上は明日中に何とか處置を着ける積り、一方には手紙で母に今一度十分訴へて見、一方には愈々といふ最後の處置は如何するか、妻とも能く相談しよう、進まぬがらも東宮御所の横手まで来て、土手について右に廻り青山の原に出た。原を横ざる方が近いのである。

原を横ざる時、自分は一個の手提革包を拾つた。

五月十五日

如何して手提革包を拾つたか其手續まで詳しく書くにも當るまい。たゞ拾つたので、足にぶつかつたから拾つたので、拾つて取上げて見ると手提革包であつたのである。

拾ふと直ぐ、金錢といふ一念が自分の頭にひらめいた。占めたと思つた、そして何とな夢ではないかとも思つたといふものは實は山王臺で種々の空想を掻いた時、若し千兩も拾つたらなど、恥かしい事だが考へたからで、それが事實となつたららしいからである。革包は容易く開いた。

紙幣の束が三ツ、他に書類などが入つて居る。星光にすかしてこれを見た時、其時自分は全く夢ではないかと思つただけで、それを自分が届け出るとか、横奪することが假廉恥の極だとか、さういふことを考へることは出来なかつた。

たゞ手短かに天の賜と思つた。

不思議なもので一度、良心の力を失ふと、今度は反對に積極的に、不正なこと、思ひがけぬ大罪を成るべく爲し遂げんと務めるものらしい。

自分はそつと革包を私宅の横に積んである材木の間に、巧みに隠匿して、紙幣の一を束懐中して素知らぬ顔をして宅に入った。

自分の足音を聞いただけで妻は飛起きて迎へた。助を寝かし着けて其まゝ横になつて自分の歸宅を待ちあぐんで居たのである。

『如何でした』と自分の顔を見るや、

『取り返して来た』と聞かれ、直ぐ

この答も我知らず出たので、唾を吐、氣もななく吐いたのである。

既に斯うなれば自分は全くの孤立。母の秘密を保つ身は自分自身の秘密に立籠らねばならなくなつた。

「まあ如何して」と妻のうれしさに問ふのを苦笑で受けて、手軽く、

「能く事わけを話したら渡した」とのみ。妻は猶ほ其様子まで詳しく聴きたかつたらしいが自分の進まぬ風を見て、別に深くも訊ねず、

「どんなに心配しましたらう。若しも渡さなかつたらと思つて取越苦勞ばかり爲てみました」と萬斤の重荷を卸したよろこび。自分は懐に片手を入れて一件を握つて居たが、未だ夢の醒めきらぬ心地がして茫然として居る。

「御飯は」

「食つて来た。」

「母上さんの處で？」

「ああ。」

「大變お顔の色が悪う御座いますよ」と妻は自分の顔を見つめて言ふ。

「餘り心配したせみだらう。」

「直ぐお寝みなさいな。」

「イヤ帳簿の調査もあるからお前へ寝てお呉れ」と言つて自分は八疊の間に入り机に向つた。然し妻は容易に寝さうもないので、

「早くお寝みといふに。」

自分はこれまで、これほどの角のある言葉すら妻に向つて發したことはないのである。妻は

不審さうに、自分の方を見て居るやうであつたが、其中屋に就てしまつた。自分は一度殊更に火鉢の傍に行つて烟草を吸つて、間の襖を閉め切つて、漸く秘密の左右を得た。

懐からそつと盗むやうにして紙幣の束を出したが、其様子は母が机の抽斗から、紙幣の紙包を出したのと同じであつたらう。

一回紙幣で百枚。全然註文したやう。これを數へる手はふるへ、數へ終つて自分は洋燈の火を熟と見つめた。直ぐこれを明日銀行に預けて帳簿の表を飾らうと決定たのである。

又盗まれてはと、箆筒に納うて錠を卸すや、今度は提草包の始末。これは妻の寝静まつた後ならではと一先素知らぬ顔で床に入つた。

床に入つて眼を閉ぢて居る時、この時には多少か良心の眼は醒めさうなものだが、實際はさうでなかつた。魔が自分に投げ與へた一目的の爲めに、良心ならぬ猛烈の意志は冷やかに働

らいて、一に妻の鼻息を覗つて居る。斯うして二時間経ち、十二時が打つや、蒼い顔のお政は死人のやうに横つて居るのを見届けて、前夜は

盗賊を疑うて床を脱け出た自分は、今度は自身盗賊のやうに前後よりも更に靜に、更に巧に、寝間を出て、縁側の戸を一分又た一分に開け、

跣足で外間に首尾を出た。

星は宵えに宵え、月は死し、秋の夜の明けき、蟲は鳴きしきつて居る。不思議なるは自分が、此時かゝる目的の爲に外面に出ながら、外面に出て二歩三歩あるいて暫時佇立した時この窸々として靜肅且つ莊嚴なる秋の夜の光景が身の

毛もまだつまでに眼に沁こんだことである。今も其時の空の美しさを忘れない。そして見ると、善にせよ惡にせよ、人の精神漲つて雜念の無い時は、外物の印象を受ける力も亦た強い者と見える。

材木の間から草包を取出し、難なく座敷に持運んで見ると、他の二束も同じく百圓束、都合三百圓の金高が入つて居たのである。書類は諸取の類。薄い帳面もあり、名刺もある。遺失した人は四谷區何町何番地日向とて書類の問屋を業として居る者といふことが解つた。

心の弱い者が悪事を働いた時の常として、何かの言葉を自分が作らねば承知の出来ないが如く、自分は右の遺失した人の住所姓名が解るや直ぐと見事な言葉を自分で作つて、そして殆んど一道の光明を得たかのやうに當んだ。

「先理借！ 先理借！ 先理借して自分の急場を救つた上で、其中に母から取返すとも、自分で工

夫して金を作ることも、何とでもして取った百圓を再び革包に入れ、其まゝ人知れず先方に届ける。

天の賜とは實にこの事と、無上によるこび、それから二百圓を入れたまゝの革包を隠す工夫に取りかゝつた。然し元來狭い家だから別に安全な隠し場の有らう筈がない。思案に盡きて終に自分の書齋、學校の靴箱などばかり入れて置く筆筒の抽斗に入れて其上に書齋を重ね、そして鍵は晝夜自分の肌身より離さないことに決定して漸つと安心した。

床に就いたと思ふと二時が打ち、がっかりして直ぐ寢入つて終つた。

五月十六日
忘れることの出来ない十月二十五日は過ぎた。翌日から自分は平時の通り授業もし改築事務も執り、表面は以前と少しも變らなかつた、母からも亦た何とも言つて来ず、自分も母に手紙で迫る事すら放棄してしまひ、一日一日と無事に過ぎゆいた。

然し自分は到底悪人ではない、又度胸のある男でもない。さればこそ母からも附込まれ、遂に母を盗賊にしてしまひ、遂に自分までが賊になつてしまつたのである。であるから賊になつた

上で又もや悶き初めるのは當然である。總て自分のやうな男は皆な同じ行き方をするので、運命といへば運命。蛙が何時までも蛙であると同じ意味の運命、別に不思議はない。良心とかいふ者が次第に頭を擽けて来た。

そして何時も身に着けて居る鍵が氣になつて堪らなくなつて来た。殊に自分は兒童の教員、又た倫理を受持つて居るので常に忠孝仁義を説かねばならず、善惡邪正を説かねばならず、言行一致が大切ぢやと眞面目な顔で説かねばならず、其度毎に怪しく心が騒ぐ。生徒の質問の中で、折り／＼胸を刺れるやうなのがある。中には自分の秘密を知つてあんな質問をするのではあるまいかと疑ひ、思はず生徒の面を見て直ぐ我顔を背向けることもある。或日の事、十歳ばかりの兒が来て、

「校長先生、岩崎さんが私の鉛筆を拾つて返しません」と訴へて来た。拾つたとか、失つたとか、落したとかいふ事は多數の兒童を集めて居ることゆゑ常に有り勝で怪しむに足らないのが、今突然此訴へに接して、自分はドキリ胸にこたへた。

「貴所が氣をつけんから落したのだ、待つてお居て、今岩崎を呼ぶから」と言つたのは全然こ

れまでの自分にないことで、兒童は喫驚して自分の顔を見た。

岩崎といふ十二歳になる兒童を呼んで、「あなたは鉛筆を拾ひはしなかつたか」と聞くと顔を赤らめてもぢ／＼して居る。

「拾つたでせう。他人の者を拾つたら直ぐ私の所へ持つて出るのが當然なのに、其を自分の者に爲るといふことは流んでも同じことで、甚だ善くないことですよ。其鉛筆を直ぐ此人にお返しなさい」と嚴かに命つけた。

そんならば事故自分は他人の革包を自分の筆筒に隠して置くのであるか。自分は其日校務を了ると直ぐ宅に歸り、一室に屈居んで、悶き苦しんだ。自首して出ようかとも考へ、夫れとも學校の方を辭職して了はうかとも考へた。此の二を選ぶ上に就いて更に又苦しんだけれど、いづれとも決心することが出来な。自首した後での妻子のことを思ひ、

辭職した後での衣食のことを思ひ、衣食のことよりも更に自分を動かしたのは折角これまでに經營して校舎の改築も美々しく落成するものを捨て、終ふは如何にも残念に感じたことである。其處で一日も早く百圓の金を作るが第一と、

今度はそのみに心を砕いたが、當もなんにも

ない。小學教員に百圓の内職は荷が勝も過ぎ

る。たゞ空想ばかりに耽つて居る。起されば金

錢、寝ても百圓、或日のことで自分は女生徒の

一人を連れて郊外散歩に出た。其以前は能く

生徒の三四人を伴つて散歩に出たものである。

美しき秋の目で身も軽く、少女は唱歌を歌

ひながら自分よりか四五歩先を左も愉快さう

に眺ねて行く。路は原の薄を分けてヤ、爪先

上の處まで来ると、ちうと自分の眼に映つたは

草の間から現はれて居る紙包。自分は駆け寄

つて拾ひあげて見ると内に百圓束が一個、自分

は狼狽で懷中にねちこんだ。すると生徒が、

『先生何に？』と寄つて来て問うた。

『何でも宜しい！』

『だつて何に？』拜見な。よう拜見な』と自分

にあまえてぶら下つた。

『可けないと言ふに！』と自分は少女を突飛ば

すと、少女は仰向けに倒れかゝつたので、自分は

思はずアツと叫んで之を支へようとした時、覺

むれば夢であつて、自分は書飯後教員室の椅子

に凭れたまゝ轉寝をして居たのであつた。拾つた金錢の穴を埋めんと悶いて又夢に金錢を拾ふ。自分は醒めた後で、人間の心の浅まし

さを沁々と感じた。

五月十七日

妻のお政は自分の様子の變つたのに驚いて

居るやうである。自分は心にこれほどの苦悶

のあるのを少しも外に見せないなどいふことの

出来る男でない。のみならず若し妻が此秘密

を知つたなら如何しようかと空に在つては其が亦

た苦勞の一で、妻の顔を見ても、感附いては居ま

いかと其眼色を讀む。絶えずキョト／＼して、

そは／＼して安んじないばかりか、心に觸れた

處が有るから何でもないことで妻に角立つた

言葉を使ふことがある。無言で一日暮すことも

あり、自分の性質の特色ともいふべき温和な人

なつこいところは殆ど消え失せ、自分の性質の

裏ともいふべき妙にひねくれた片意地の處ば

かり潮の退いた後の岩のやうに、ごつ／＼と現

はれ残つたので、妻が内心驚いて居るのも決して

不思議ではない。

温和で正直だけが取柄の人間の、其取柄を

失つたほど、不愉快な者はあるまい。溢を抜

いた柿の窠敗りかゝつたやうなもので、とても

近よることは出来ない。妻が自分を面白からず

して驚いては、

これを見るに堪けて自分の心は愈々觸れる

ばかり、然し運命はよく此不幸な男女を弄ば

ず、自分が草包を運した日より一日、十一月

二十五日の夜を以て大劫と爲て呉れた。

此夜自分は學費の用で使川までいき九時頃

七つて見ると、妻が助を背負つたまゝ火鉢の前

に坐つて着い襟といふよりか凄しい顔をして居

る。そして自分が歸つて、挨拶も無い。眼

の邊には泣きたゞらした痕の残つて居るのが明

明地と解る。

此の様子を見て自分は驚いたといふよりか

懼れた。懼れたといふよりか戰慄した。

『オイ如何したの？』お前如何したの？』と急

きこんで問うたが、妻は其凄しい眼で自分をぢ

りて見たばかりで一語も發しない。ふと氣が溜

いて見ると、縮筒を入れた押込、襖が闔け放し

て、襦袢の秘密の抽斗が半分開いて居た。自分は

飛び起つた。

『誰が開けたのだ』と叫んで抽斗に手をかけ

た。

『私が開けました』と妻の汗着き拂つた答。『何故開けた、如何して開けた。』『委員會から帳簿を貸して呉れると言つて来

ましたから開けて渡しました」とちろり自分の顔を見た。

「何だつて私の居ないのに渡した、え何だつて渡した。怪からんことだ」と喚きつゝ、抽斗の中を見ると革包が出て居て両も口を開けたまゝである。

「お前これを見たな」と叫んで、「可し、私にも覺悟がある、覺悟がある」と怒鳴りながら其儘抽斗を閉めて錠を卸し、非常な劍幕で外面に飛び出して了つた。

無我夢中で其處らを歩いて何時しか青山の原に出たが矢張當もなく歩いて居る。けれども結局、妻に秘密を知られたので、別に覺悟も何にも無いのである。たゞ喫驚した餘りに怒鳴り、狼狽へた餘りに喚いたので、外面に飛び出したのは逃げ出したるに過ぎない。

であるから歩いて居る中に次第に心が静まつて來た。斯うなつては何もかも妻に打明けて、この先のことも相談しよう、さうすれば却つて妻と自分との間の今の面白くない有様から逃れ出ることゝ出來ると、急いで宅に歸つた。

何故そんならば革包を拾つて歸つた時に相談しなかつた。と問ふを止めよ。大河今藏の筆法は萬事これなのである。

歸つて見ると妻の姿が見えない。見えないも道理、助を背負たまゝ裏の井戸の中に死んでゐた。

お政はこれまで決して自分の錠を卸して置いた處を開けるやうなことは爲なかつた。然し何時しか自分の舉動で箆筒の中に秘密のあることを推し、帳簿を取りに寄せられたを、幸に無理に開けたに相違ない。錠は用箆筒を用ゐたらしい。革包の中を見て如何なにか驚いたらう。思ふに自分が盗んだものと信じたに違ひない。然し書置などは見當らなかつた。

何故死んだか。誰一人この秘密を知る者はない。升屋の老人の推測は、お政の天性憂鬱である上に病身で頑角健康勝れず、其が爲に氣がふれたに違ひないといふことである。自分の秘密を知らぬものゝ推測としては之が最も當つて居るので、お政の天性と瘦弱なことは確に幾分の原因を爲して居る。若しこれが自分の母の如きであつたなら決して自殺など爲ない。

自分は直ぐ辭表を出した。言ふまでもなく非常に止められたが遂には、此場合無理もない、強ひて止めるのは却つて氣の毒と、三百圓の慰勞金で放免して呉れた。

實際自分は放免して呉れると否とに關らず、

自分には最早何を爲る方も無くなつて了つたのである。人々は死んだ妻よりも生き残つた自分を憐れんだ。其處で三百圓といふ類稀なる慰勞金まで支出したのも、升屋の老人などの發起に成つたのである。

妻子の葬儀には母と妹も來た。そして人々も當然と思ひ、二人も當然らしく舉動つた。自分も母を見ても、妹を見ても、普通の會葬者を見るのと何の變りもなかつた。

三百圓を受けた時は嬉しくもなく難有くもなく又厭とも思はず、其中百圓を葬儀の經費に百圓を革包に返し、残の百圓及び家財家具を賣り拂つた金を旅費として飄然と東京を離れて了つた。立つ前夜密に例の手提革包を四谷の持主に送り届けた。

何時自分が東京を去つたか、何處を指して出たか、何人も知らない。母にも手紙一つ出さず、建前が済んで内部の造作も半ば出來上つた新築校舎にすら一瞥も呉れないで夜竊かに迷ひ出たのである。

大阪に、岡山に、廣島に、西へへと流れて遂に此島に漂着したのが去年の春。妻子の水死後全然失神者となつて東京を出てこの方幾度自殺しようと思つたか知れない。

衣食のために色々の業に従ひ、種々の人間、種々の事柄に出會ひ、雨にも打たれ、風にも探れ、往時を想うて泣き今に當つて苦しみ、そして五年の歲月は澱みながらも絶えず流れて遂に此の今の泡の塊のやうな軽石のやうな人間を作り上げたのである。

三年前までは死んだ赤兒の泣聲がやゝもすると耳に着き、蒼白い妻の水を被つた凄い姿が眼の先にちらついたが、酒のお蔭で遂に追拂つて了つた。然し今でも眞夜中にふと眼を醒ますと酒も大略醒めて居て、眼の先を兒を背負つたお政がぐる／＼廻つて遠くなり近くなり遂に暗の中に消えるやうなことが時々ある。然し別に可怖しくもない。お政も今は横顔だけ自分に見せるばかり。思ふに遠からず彼方向いて去つて了ふだらう。不思議なことには眞面目にお政のことを想ふ時は決して其淺ましい姿など眼に浮ばないで現はれる時は何時も突然である。可愛いお露に比べて見るとお政などは何でもない。母などは更に何でもない。

五月十九日

昨夜は六兵衛が来て遅くまで飲んだ。六兵衛の言ひ草が面白いでないか。

『お露を妻に持ちなせえ。』

『持つても可いなア。』

『持つても可いなんチウことは言はさん、あれほど可愛いがつて居つて未だ文句が有るのか。』

『全く彼の女は可愛いよ、何故斯う可愛いだらう、ハハ、……』

『先方でも其えに言うてら、如何で斯う先生が可愛いのか解らんチウて。』

『左やうさ、私見たやうな男の何處が可いのかお露は無暗と可愛がつて呉れるのが妙だ。これは私にも解らんよ。』

『さうで無えだ、先生のやうな人は誰でも可愛がりますぞ。お露が可愛がるのは無理が無えだ。』

『ハハ、何故や、何故や。』

『何故チウて問はれると困るが、一口に言ふと先生は苦勞人だ。それで居て面白い處があつて優しいところがあるだ。先生と斯う飲んで居ると私でも、四十年前の情話でも爲て見たくなる、先生なら黙つて聽いて呉れさうに思はれるだ。高中先生を好んものは有りましねえで、お露や私を初め。』

『自分は何して斯う老人の氣に入るだらう。』

『老人といへば升屋の老人は今頃誰を對手に碁を打つて居ることやら。』

六兵衛は又斯う言つた。

『先生は一度妻を持つたことが有るに違ひなからう。』

『如何して知れる。』

『如何してチウて、それは老人の眼には知れる。』

『全く有つたよ、然し餘程以前に死んで了つた。』

『ハアそれは氣の毒なことをなされました。』

『けれどもね六兵衛さん、死んだ妻はお露ほど可愛くなかつたよ、何んでも無かつたよ。』

『それは不實だ。先生もなかく／＼浮氣だの、新しいのが可えだ』と言つて老人は笑つた。

『自分も唯だ笑つて答へなかつた。不實か浮氣か、そんなことは知らない。お露は可愛い。お政は氣の毒。』

酒の上の管ではないが、夫婦といふものは大して難有いものではない。別してお政なんぞ、あれは升屋の老人が呉れたので、呉れたから貰つたので、貰つたから子が出来たのだ。

母もさうだ、自分を生んだから自分の母だ、母だから自分を育てたのだ、そこで親子の情があれば眞實の親子であるが、無ければ他人だ

百圓盗んで置きながら親子の縁を切るなど文句

が面白い。初から他人なのだ。

自分は子供の時から母に馴染まなんだ。母も自分には極めて情が薄かつた。

明日は日曜。同勢四五人舟で押出す約束であるが、お露も連れこみたいものだ。

* * * * *

大河今藏の日記は以上にて終りぬ。彼は翌日誤つて舟より落ち遂に水死せるなり。醉に任せ起つて躍り居たるに突然水の面を見入りつ、お政々と連呼して其まゝ顛落せるなりといふ。

記者去年歸省して舊友の小學校教員に會ふ、此日記は彼の手で秘藏され居たるなり。馬島に哀れなる少女あり、大河の死後四月にして兒を生む、これ大河が片身、少女はお露なりとぞ。

猶ほ友の語る處に依れば、お露は美人ならねども其眼に人を動かす力あふれ、小柄なれども強健なる體格を具へ、鳥の若者多くは心ひそかに之を得んものと互に争ひ居たるを、一度大河に少女の心移るや、皆大河のためにこれを祝して敢へて嫉むもの無かりしといふ。

お露は兒のために生き、兒は鳥人の何人にも抱かれ、大河は其望む處を達して島の奥、森蔭

暗き墓場に眠るを得たり。

記者思ふに不幸なる大河の日記に依りて大河の總てを知ること能はず、何となれば日記は則ち大河自身が書き、而して其日記には彼が馬島に於ける生活を多く誌さざればなり。故に余輩は彼を知るに於て、彼の日記を通して彼の過去を知るは勿論、馬島に於ける彼が日常をも推測せざる可らず。

記者は彼を指して不幸なる男よといふのみ、其他を言ふに忍びず、彼も亦た自己を憐れみて、やゝもすれば曰く、あゝ不幸なる男よと。

酒中日記とは大河自から題したるなり。題して酒中日記といふ既に悲惨なり、況んや實際彼の筆を採る必ず醉後に於てせるをや。此日記を讀むに當つて特に記憶すべきは實に又この事實なり。

お政は兒を負う二彼に先ち、お露は彼に残されて兒を負ふ。何れか不幸、何れか悲惨。

(明治三十五年十一月)

馬上の友

「君、最早寝るのか？」と今しも當直を終へて士官室に入つて来た一人の大尉が、自分に問うた。

「寝るには早し、起きて居ても對話者はなし、困つて居た處サ」と自分は起ち、かけて居た腰を更にソファに卸して、「それとも何か珍談が有るかね？」

「大ありだ、まア話したまへ」と言ひつゝ大尉は手早く外套の頭巾を脱ぎ、巻いて居た白い毛糸の頭巻を外し、ハンケチで顔を磨りながら、「鼻の先の感覚が無くなつて了つた。恐ろしい風だ。ボーイ！」聲に應じて使童室の小窓が開き、眠むさうな眼つきをした水兵の顔が現はれた。

「湯が沸いてるなら、一本熱くして呉れ。出来なけア、ウイスキーを持つて来い！」と彼は命じた。

時は明治二十七年十二月の末、我が國の艦隊が、大連灣に集合して、榮城灣上陸の準備の整ふのを待つて居た頃である。自分は新聞記者、

大尉は兼ねて自分と仲よく話して、話も能く合ふ士官の一人である。

ボーイはウイスキーを持つて来た。大尉は自分にも杯を差して、

「是非君に聞いて貰ひたい珍談があるのだ」と頗る愉快げに言つて、彼は其杯を干し、

「聽いて呉れるか？」

「聽くとも、話したまへ。」

夜は更けて一艘の人、其職に在るものゝ外は悉く寝て了ひ、潮風帆綱をたゝいて艦上は物凄く鳴つて居るけれど、室内は極めて靜かである。

士官は其一語一句力ある口調で――

「僕は今日、公務を帯びて運送船備後丸に行つたが、彼の船には君も知つて居る通り、海軍士官が乗つて居る、其士官と用談を済して歸るべく艀門のところまで来たのだ。(大尉は歐文直譯風の口調を使ふのが癖で、而も其癖を彼は得意として居るのである。)すると一人の男が其處に立つて居て他の船員と何事か物語りつゝ、

あつた。彼は何心なく艀門を下りかけると、其男が手を舉げて僕に敬禮するトタン、僕と彼とは互に顔を見合して驚いたといふよりか寧ろ訝かつたといふが適當だらう。

如何も見たことのある男だと僕は思つて、思はず足を止めた。けれども若しも此時、此船のボーイが来て今一度僕を士官の部屋に呼びもどさなかつたならば、僕は不審と思ひつゝも直ちに艀門を下りて其まゝ小蒸汽に乗り、歸艦つて来て了つたらうと思ふ。

運命は僕等を幸ひした。僕が二足三足舷梯を下りかけるとボーイが飛んで来て僕を呼び止め、僕は再びケビンに呼びこまれて、互に失念して居た用務を辨すべく、更に二十分ばかりを費やした。

其用務が済むと直ちに僕は對手の士官に向ひ、顔の四角な、眼のぎよろりとした、口髭の眞黒な、年の頃は二十八九かそれとも三十位な背の高い、此船の事務員らしい男が、彼は何者だと訊ねた。士官は手輕に、

「事務長だらう、それは。」

「名前は何と僕は問うた。」

「糸井といふのが姓だが、名は知らない、今度初めて此船に乗つたので……」

士官の言葉の終らぬ中に僕は「糸井！ 糸井！ 糸井！」と叫んだ。士官は喫驚して、僕の顔を見て居たが、元來、餘り好奇心に誘はれない男、寧ろ其頭の未だ黒い割合には其心が少々固定して居る男だから、僕の此叫聲について左までの注意を拂はず、シガーを口にしたまま、只だ眼を大きく見張つた許りであつた。僕は直ぐケビンを出て甲板にのぼるや、一人の水夫に向つて事務長の部屋に案内しろと命じた。

「事務長は彼處に居ます」と水夫の指さす方を見ると、先の男は欄干に寄つて、たゞ一人茫然と立つて居る。其様が、其男も僕と同じく、或一種の不審に打たれて、それを解くべく心を悩まして居たらしかつた。

僕はツカ／＼と近づいて、言葉靜かに、「貴方は若しか糸井國之助君とは申されませんか、間違つたら失禮ですが」と云うた。そして對手の顔をツク／＼と見た。對手は暫時く口ごもつて居たが、忽ち物慣れた口調と、船の事務員に固有なる感勸の態度を以て、

「私は糸井で御座いますが、さうお仰いますと若か貴方は……」皆まで言はず、僕は直ぐ手を出して、

「野村です、野村勉二郎です」と叫んだ。糸井の手はデツとばかり僕の手を握つて、僕も彼も、暫時く言葉を出し得なかつた。

僕が海軍士官の一人位になつて居る事は別に彼を驚かす程の身の成ゆきではない。けれども糸井其人が日本第一の汽船會社に事務長の役を務め居ることを發見した僕の驚愕は決して尋常ではなかつたのである。

僕と糸井の再會の歡喜が如何なる言葉に依つて互に言ひ交はされたかを詳しく言ふ必要もあるまい。二人は直に食堂に入つて杯をあげ互の健康を祝した。抑も此糸井なる男は何者であるか。まア聽いて呉れたまへ、斯ういふ譯だ——

僕の未だ十五の時だ。さうだ中學校に初めて入つた年の秋のことだ。小春日和の佳い天氣の日であつたが、僕の宅から五六丁もゆくと小さな丘がある、それは他の山脈は全く獨立して居るので恰度瘤のやうに見える、それへ僕は一人で遊びに出かけた。

日曜だから他にも少年が遊びに来て居た。此丘に登ると町が一日で見わたされるので公園にでもすれば持つて來いの場所だが、小けな町には別に公園の必要もないので、たゞ少年等の遊

場になつて居るばかり。

僕は木の根に腰をかけて何心なく下を見て居ると直ぐ目の下の並木道を、一人の少年が馬に乗つて面白さうに駈けて居たが、折り／＼其後が樹の枝に隠れて見えなくなると思ふと又た現はし、少年は三四丁の處に往きつてもどりつして、自在に馬を扱つて居るのである。僕は一心に見て居たが、次第にそれが羨ましくなつて、自分でも乗つて見たくて堪らなくなつた。

直ぐ丘を下りて並木道に出て見ると、少年は恰度僕の前に馬を進めて來た。見れば僕と同年頃の少年で、身には粗末な筒袖の衣服を着て頭の髪は蓬々と生えたまゝ、櫛を入れたこともないらしい、が其顔は丸く肥つて其眼つきは如何にも涼々しげに、其様子が一見して農家の兒とは趣を異にして居るのである。

少年は僕の前を二三度駈け通つたが、忽ち馬首を轉じて、桑園の中に乗り入つて了つた。細い徑が一筋、桑園を通じて一軒の茅屋に達して居る。

僕は茫然と其後姿を見送つて居たが、ふと一策を思ひつき、直ぐ其後について桑園の中に入つて、やゝ暫くゆくと右傍に棒が立つて居て、それにかし馬の三字を筆太に書いた板が釘附

けにしてあるのを發見した。

「かし馬があるといふことを聞いて居たが、さ
てはこの馬かと、僕は其まゝツカ〜と内に入
ると今しもさきの少年が馬から下りて馬を柿の
木に繋いで居るところ。

少年はちよつと僕を振り向いて見たが、黙つ
て内庭に入つて了つた。更廻すと、古ぼけた母
屋は、重い屋根に壓しつけられて今にも壓しつ
ぶされさうである。軒は傾き柱は歪んで居て、
藁葺屋根は名ばかり、緑の苔、白い苔一面に敷
いて其所々に雑草すら生えて居る。物置のや
うな馬小屋に馬が一頭繋いである。

四邊は藁、枯草、木の枝などが散亂して其間
を矮鶏が二三羽餌をあさつて居た。

僕は 木の傍に近づいて馬を見て居ると、
内庭からのそり現はれた男は、年頃五十歳、
目の深く落窪んだ、胡麻白頭の、背の高い人
物。無言で僕を見て居たが、

「貴君は馬に乗れるのか？」と一言、如何にも
人を馬鹿にした口調で問うた。

「乗つたことはないが乗つて見たいと思つて居
るのだ」と僕も平氣で答へてやつた。

「そんなら乗つて見るが可い」と言ひつゝ、彼、
其人は僕が此家の主人と鑑定した、氣難しさう

な老人は直に馬首を捉へて控へて居る。

問ひことの何よりも疑ひな、生意氣なる少年
なる僕は、内心やゝひるんだけれど、先の少年
に置まされて居たから勇氣を鼓して、馬の傍に
寄り、鞍に手をかけた。そして足を鐙に掛けた
までは可いが、なか〜身軀が軽く馬の背に上
らない。中學校の運動場で木馬を飛び越えるこ
とに自慢して居た僕も、生きた馬の背に乗る一
段に及んで頗る當惑して居ると、傍で苦笑をし
て居た意地の悪いお爺さん、遂に見かねたか、
其荒々しい腕を伸して僕の身體をちよいと抱つ
た。と思ふと僕の身體は早くも馬の上にいるを
發見した。

さて馬の背に乗つて見ると、生れてから初め
て馬なる動物に乗つた僕は、馬の丈の今更に高
く、馬の背の今更に幅廣く、しかして我身體が
一種異様な彈力に支へられて居るを感じて
驚いた。

何處までも人の悪いお爺さんは手綱を柿の
木から解いて馬の頭を並木道の方に向け、「そ
ら〜」と言ひさま、その手綱を鞍へ投げかけ
た。人の善さうな馬はのそり〜と、さも面
倒臭さうに其四足を動かははじめた。この時、
此馬が若し、馬の主人のやうな意地悪るならば、

必定思つたに違ひない、生意氣な小僧だ。一ツ
おどかして、泣面かゝしてやらう〜と後足で急
に突立つ位な藝を演じたかも知れない。
けれども元來少年に向つて此だ親なる馬
は、彼の老人よりも僕を愛し、たゞ斯ら思つた、
「やれ〜厄介な物を下負れたことだ、仕方がな
い其所を一周歩いて来てやらう。」
桑園を出て並木道にかゝると、今まで靜かな
並足で歩いて居た馬は、早足になつて其蹄を
鳴らし初めた。僕の身體はヒョイ〜と上に飛
び上がり、恰度、鞍の上で躍つて居るかのやう
である。僕は思つた、他人が馬に乗つて居るの
を見ても又た騎馬の畫を見ても、皆な馬と人と
は恰も一體のやうになつて其運動が如何にも自
由自在らしく見え、甚しきは馬の上で何十貫
目の鐵棒を振り廻すなどいふ豪傑も居る。それ
だのに自分の身體は何故斯う馬の背に着かない
で今にも轉げ落ちさうになるのだらう〜と。

けれども僕は勇氣を奮つて手綱を採つたまゝ
馬の走るに任して置いた。馬は船と異つて彼自
身に感覺があるのだから幾何放擲つて置いても
物に衝突する心配はない。其點は頗る安心な
ものだ。
並木道が盡きると國道に出る、これを左に

廻はると丘を一周して歸ることが出来る、然し其道程は十七八丁以上もある。馬は頭を左に轉じて此一周をやらうとした。蓋し彼は数々かく教へられて居たに違ひない。

此時僕は如何しようかと思つたといふは、十七八丁の道程が恐いのではなく、國道は並木道と異つてやゝ人通が多い、車が通る、荷馬車が通る、其間を首尾よく乗りぬくことは僕に取つて頗る覺束ない役だと思つたからである。けれども馬は遠慮なく其目的通りに歩みだした。馬に乗せられて居る僕は如何することも出来ない。はや國道を三四十間も行くと、後から蹄を鳴らして來た騎馬がある。忽ち僕の傍へ來たのを見ると、先の少年が裸馬に乗つて來たのである。

「何所へゆくのです」と彼は莞爾笑つて問うた。「何所へゆくのだか知らない」と僕は答へざるを得なかつた。少年は笑つて、

「これから馬を洗ひにゆくのだから貴方も私に從いておいでなさい」と國道を右に折れて田圃路に馬を進めた。さうすると僕の乗つて居る馬は恰も若主人の言ふことを解して居るかのやうに、先に立つてゆく馬の後を追うて、やは

り田圃路に下りた。路が狭いので馬を駢べることが出来ない。少年は後を振り向き、靜かに馬を進ませて居る。

「何處へ馬を洗ひにゆくの？」と僕は問うた。「蛇の池です。」
「蛇の池」と僕は驚いた。この池は山の麓にあつて、周圍は老樹叢として繁り、岩々と水を湛へて居るので如何にも物凄さらう見え、少年等も氣味を悪がつてめつたに近づかない所である。

「何時でも蛇の池で馬を洗ふのだらうか。」
「さうです！」と少年は平氣で言ひ放つた、田圃路を十丁もゆくと家數四五十軒もある小村に達する。其村を横ぎると路が爪先上りになつて竹藪の彼方を流れる溪流の音が聞えだした。間もなく池の濤に出ると、少年はひらり馬から下りたので、僕は鞍を捉へてずる／＼と下りた、といふよりも滑り落ちたといふ方が適當だらう。

池の一邊が淺淺になつて居て其處の汀はやや池に突出して居るので、成程馬を洗ふには恰度可い場所だと僕も思つた。
池を挟んで居る兩方の山は峻峻にして見上

ぐるまでに高く、西岸は山の影で暗いけれど、東岸は西に傾いた秋の日を受けて明るく輝いて居る。風の無い日であるから一碧鏡のやうな湖面は山の影、森の影を倒に映し、湖心最も寂なる邊には白雲の影をさへ沈めて居る。

少年は裸馬を牽いて膝のあたりまで水の肩く所に出て、馬を洗ひ初めた。僕は岸からこれを睨めて居る、僕の乗つて來た馬は楊に驚かされたまゝ草を食つて居る。
馬と少年を中心にして波紋が賑々と起り、それに日の光が映つて如何にも綺麗であつた。

「此馬も洗ふのか」と僕は大聲で問うた、其聲を山彦が答へて湖面に響きわたつた、少年は頭を擧げて僕を見て、僕しい笑味の満面に漲らして、首を左右に掉つた。僕は其後、何時までも此時のことを忘れない。今でも眼の先に直ぐ此時の光景を浮べることが出来る。僕の眼の底には此等の光景が書を見るよりも鮮かに残つて居るのである。

暫時して我少年は馬を洗ひ了り、岸にのぼつて來た。
「何故此方の馬は洗はないのだ？」
「鞍を置いて來たから」と少年は答へ、一歸りは二人が此馬に乗つて裸馬の方は牽いて歸るの

「だ」と言ひつゝ、彼は少時休息すべく草の上に足を投出した。僕も其傍に坐り、

「僕でも乗れるやうになれるだらうか。」

「なれますとも。直ぐ乗れるやうになる。」

「君は幾年だ？」

「十五。」

「十五なら僕も同じだ。これから毎日乗りにゆくから教へて呉れたまへ」といふや少年は少し顔を赤らめて、

「私は出来ないから父上に教へてお貰ひなさい。父上は上手だから。」

「父上は馬の先生かえ。」

「先生だ。昔は殿様に馬を教へたのださうだ」と少年は答へて得意の色を示すべく禁じ得なかつた。

これを聞いて僕も少年ながらに、やゝ彼の身の上が讀めて來て、急に尊敬の意が加はり、初から氣に入つた此少年が今更慕しくなつて、何時しか仲の好い以前からの朋友のやうな氣になつて了つた。

「これから毎日遊びにゆくよ。」

「あゝ來たまへ、學校へも何處へも行かないのだから毎日宅に居るから」と彼も既に僕を朋友扱ひにして親しく話すのである。

「何故學校に行かないの？」と僕は無遠慮に問うた。

「父上がやつて呉れないのだ」と少年は前面目に言つて、「もう歸りませう」と立つた。

僕を前に、鞍の上に乗せて少年は後へ乗り、柳馬の手綱を探つて、これを牽き、池の邊を立立つて歸路に就いた。少年は後から巧に馬を御し、馬は心地よく走つて田圃路を過ぎ、國道に出で、國道から並木道に入ると、短い秋の日は既に暮近く、空氣は水の如く澄み、並木の小枝を若空に透して仰げば、星影の二ツ二ツも枯葉の間から覗かれさうな頃となつた。少年は口笛を吹く、二頭の馬は蹄の音を揃へて走る、僕は何時とも知れず、たゞ嬉しくて堪らなかつた。

此日から僕は殆んど毎日のやうに此少年の許に出かけて、二人して馬の頭を並べ、並木道を走らし、丘を一周し、時には蠟の池に馬を洗ひにゆくなど、これまでにない面白い日を送り得ることゝなつたのである。

聞き得たる處に依ると少年の父は糸井專造といひ、以前は藩の馬術の指南役で知行百五十石を領し、随分立派に暮して居たのだが、維新後の零落甚だしく遂に今の有様となり果たといふ事だ。專造の零落は時勢の罪ばかりでな

く、其大部分は彼自身の責任に由ることゝ、僕も彼に近づくにつれて人の噂を聞いたのである。

彼は馬術の外、何の技倆もない殆んど無學文盲な人物であるばかりか、頗る片意地で頑固で、少しも世の成行を見て身の計を立てるといふことを爲ない、そればかりなら未だ可いが、それが尚じて世の成行を諷ひ且つ力めて逆行しようとのみ爲て居たのである。

貧苦の中のかし馬は生業の爲ばかりでなく、一は專造其人の性癖も満足せしむる爲であつたといふ證據は、中學校の生徒、巡查、市の若い者などが馬を借り、彼の許にゆくと、彼は自分弟子でも來たかのやうにこれを扱ひ、馬の乗様が如何だとか、斯うだとか、小言の千百を並べた末が頭ごなしに吠鳴りつけることも度々あるので、氣の弱いものか、氣の短いものは一度で懲りて行かなくなる、それを彼は却つて得意らしく、今の奴等にはとても馬は乗れないと力味のを見ても解る。

專造はそれでも可いが、氣の毒なのは子息の國之助である。父は彼を尋常小學校までやつて退校して了ひ、乗馬術だけ十分に仕こめば祖先に對して申譯は立つと、自分の氣學を悔い

ずして却つて愛兒までを無學に終らしめようと
して居るのである。

僕は國之助を知つてから、其事情を知るにつ
れて少年心にも同情に堪へず、色々の本を貸
して讀ますやうにして居たが、彼は渴けるもの
の水を求めが如く、一書を読み了はれば又一
書と、僕の貸し得る丈けの本は三四ヶ月の間に
大概讀んでしまつた。彼が最も愛讀したのは、
ロビンソン漂流記の和譯と、ジュールベルヌの
海底旅行の和譯、在來の本では源平盛衰記、三
國誌等であつた。

僕は彼に知識の泉を貸したばかりでなく、實
に少年に取つて更に大いなるもの、即ち空想の
翼を貸した。

彼と二人で馬首を並べ田圃路を歩みながらの
物語は一として將來の空想でないことはなくな
つた。彼は或時、

『馬乘になるよりか船乗りになるはうが如何に
愉快か知れない。馬に乗つて五大洲を横行す
ることは出来ないが、船に乗れば地球を一周す
ることが出来る』と言つて、『僕は如何しても船
乗になるのだ』と力味んだ。

翌年の正月の末と記憶する、夜の八時頃僕
は學友の宅に遊びに行つて其歸りがけ、例の並

木道を一人で通りかゝると、糸井國之助にひよ
つくり出遇つた。彼は何時もの快活なるに反
し、屈託した顔つきをして居るから如何したの
だと聴くと、

『今父上と暗嘩したのだ』といふ。

『如何して!』僕は驚いて訊ねた。

『僕は斷然と僕の目的を話して父の賛成を求め
たのだ、今から五六年東京へやつて呉れると頼
んで見た。處が父は非常に怒つて、船乗にな
つて何になるのだ、貴様は武士の子だ、武士の
子が船頭になるなんて見下げ果てた見だ、と
嗔鳴つけた、僕は父の言ひ草が餘り亂暴だから二
言三言争ふと、如何したことか父は泣きだし
て、子息にまで馬鹿にせられるやうになつたと
は情ない、貴様のやうな奴は最早力にしよう
とは思はないから、出てゆくなら何處へでも勝
手に出てゆけ、そのかはり生涯歸つて来て呉れ
るなど言ひだしたのだ。母も傍で泣くし、僕も
とうとう泣いて父に謝罪つたが、考へて見ると
僕ほど不幸なものはないよ……』と言ひさし
て國之助は愁然として頭を垂れた。

『そして君は今何處へゆくのだ。』

『何處へゆく積りもない、たゞ餘りに屈託した
から外へ飛び出したのだ。』

『そんならこれから僕の宅に來たまへ』と彼を
誘うて歸り、言葉盡して慰めてやつた。

實に彼は不幸な少年であつた。彼の兄は幼に
して此世を去り、彼の力とする人は父ばかり、
其父は世間並はづれた頑固者、而も彼の胸底に
は燃ゆるばかりの志が潜んで居る。彼はそれ
を壓へて父の許に朝夕たゞ馬の背に乗つて居な
ければならぬといふ!

彼の心を知るものは僕一人であるから彼は僕
に親しみ、僕を力とし、三日も僕が彼を訪はな
ければ必ず彼は僕を訪ねて來た。

けれども運命は何時までも僕等二人を狭い町
に置いて互に往來することを許さなくなつた。
十六の春の末、僕は叔父に招かれて東京に留學
することとなり、愈々出立といふ四五日前に
僕は此事を國之助に話した。

國之助の驚愕は意想外であつた。初は信じ
なかつたが、遂に事實なることを知るや彼は顔
色を變へて黙つて了つた。

出立の前日、僕の父は愛兒の門出を祝すべ
く學友などを招いて心ばかりの饗宴を開いた
が、其時僕は國之助をも招いたけれど彼は來な
かつた。

其夜、彼から一通の手紙が來た、其文言の意

味は、「君若し東京に去らば僕は最早、友も何もなくなつて了ふ。明日から誰と馬を駢べて乗らう、誰と此志を語らう、誰が僕の志を憐れんで慰めて呉れる、誰れが僕を勵まして呉れる、然し今更これを言ふのは愚痴だ、僕は僕に志を立てさして呉れた君の恩を忘れない、そして此志は必ず貫いて見せる。君も亦た何時までも僕を忘れて呉れるな」といふだけであるが、僕はこれを讀んで一人泣いたのである。

翌日は朝早く父と共に宅を立つた。母や、弟や、學友や、親戚の者は峠の中の茶屋まで見送つて呉れた。僕の故郷から其頃港まで出るには五里の道を入車まで走らなければならぬ。父は港まで僕を送るべくやはり車に乗つて峠を越されたのである。僕は立つ前に國之助に會ひたく思つたけれど、多分見送つて呉れるだらうと思つた彼の姿が、中の茶屋でも見なかつたので、頗る失望したのである。不思議に感じつゝ、峠の絶頂の茶屋まで來ると、馬に乗つて坂を見下して居る一人の少年が彼であつた。彼は莞爾笑つて馬を近づけ、

「早かつたねえ」とたゞ一言。

入車の進むにつれて馬も進む、彼は馬を入車に並べて走らす。馬上の人、車上の人、語ら

んとして語る事が出来ない。

「最早可いから歸つて呉れたまへ。」

「何に、もすこし」と彼は低く答へて靜に驅ける。坂を下つて更に半里、馬と車は相並んで走つた。

「眞實に最早可いよ。」

「もすこし。」

「如何かして君も上京するやうにしたまへ。」

「さうなると僕も嬉しいけれど……」

そのまゝ二人は無言。野は菜種の花が咲き亂れて居る。大空は霞み、雲雀は高く啼いて居る。何處を眺めても往い景色である。

小川に渡した石橋まで來ると、彼は突然馬をとどめて、「左様なら！ 此處で別れる！」と言ひ放つた其限元には涙が一ぱい含まれて居た。

車が二三丁行き過ぎた時、僕は後を振り向いて見ると、我少年は馬を石橋に立て、此方を見送つて居た。僕は車の上で熱涙を呑んだ。

東京に着くや僕は、直ぐ手紙を出し、彼からも書狀が來たが、それも一度ぎり、其後は僕から三四度音信したけれど遂に彼の返事はなかつたので、僕も何時かそのまゝ捨置くことゝなつた。

僕は十七歳まで東京に居て、それから江田

島（海軍兵學校）に入り、江田島を出るや軍艦に乗り込み其まゝ終に一度も故郷に歸らなかつたから、糸井國之助の其後の様子に全く今日が日まで知らなかつたのである。僕の父母は僕の江田島に居る時分既に東京に住居を移して居たのだ。

ところが、彼も亦た僕の江田島に居る時分、故郷を飛び出して長崎に出たとの事である。

長崎に出た後如何して船員となり、事務長にまでなつたのか、彼は十分話さないから解らないが、何しろ彼の事だから非常に勉強したに違ひはない、如何だ！ 珍談だらう！ 今日僕が十年ぶりに此少年と備後丸で、大連灣で、再び出會はし、そして二人の馬乗が、二人とも船乗になつて居たといふことは！

我が海軍士官の物は、こゝで終つた、自分は何心なく、「何故、糸井は君の手紙に返事を出さなくなつたのだらう。」あゝ、僕も其事を聞いた。すると彼は平氣で郵便錢すら其頃はなかつたと答へた。

自分は士官と共に杯をあげて糸井國之助の健康を祝した。

（明治三十六年五月）

悪

魔

(一)

「如何な奴？」

「まア、奴なんて、口が悪いのねえ。」

「そんなら如何な先生？」

「私、知らないワ、如何ななんて。」

「だつて見たのだらう。」

「先刻御挨拶をしたの。」

「だから如何な人だか訊くのサ。」

「對手の君子は急に眞面目な顔をして自分を凝視め、微に吐息をして、『大變學者だつてねえ。』

「誰がさう言つた、自分で言つたのだらう。『御

自分が何でそんなこと被仰るもんですか。定

の母上がさう言つてゝよ。』』どうせ斯んな山の中

に住みたいといふんだから變物の青瓢箪だ

らう。」

「武様變物ぢやないワねえ」と君子は言ひ捨て

て駈け出したが、五六歩で立どまり、莞爾笑つ

て、『日が暮れたら遊びにお出でなツ。必然！』

「知らないツ！」と自分は其まゝ裏山に登つて

小松原を歩いて居たが、何となく胸がむしやくしやす。君子は十八、自分は二十、従兄妹同士で仲善で、自分は誰よりも君子が好き、君子も自分が好であつたらしいのが、今度、浅海の家突然、君子の宅の母家を借りて住むこととなり、其總領息子の謙輔、東京に久しく留學して居た青年が歸つて来るといふので、一週間も前から叔母を初め君子姉妹までが噂をして待つて居て、それで今日の朝、愈々謙輔が着いたとのこと、君子に遇つて見ると嬉しうに、それはくして居る、瘡に觸らざるを得ない。元來山内家と自分の布浦家とは古くからの親戚で、某町からは十二三町もある此山の中に小さな丘一ツ隔て代々住んで居るので、君子の母は自分の叔母に當り、叔母は五年前に其良人を失ひ、今では君子と豊子と繁といふ末の男兒と四人暮し、母屋は廣過るとて閉めて了ひ、門の傍なる離室三間を常の住居となし、又自分も早く父を失ひ母と二人淋しく暮し、下男下女の外は、先づ自分を男の中の大将として兩

家極めて親密なる交際をして来て居たのである。一月程前に町から人が来て、今度出來た登記所の所長として來られた浅海氏の爲に山内の母屋を借りたいと思ふが、相談して見て呉れまいかとのこと、この中間に立つた人は年來の交際ゆる、自分の母も早速承知して山内の叔母に此意を傳へて尙ほ色々相談した結果が、登記所の所長様と言へば田舎では一個の立派な紳士、それが借りたいとあれば無下に否むも可笑しなもの、又此淋しい山の中に一家でも殖えれば、女ばかりの世界が大に心強くなるといふ利益もあり、兎も角も貸した方が可からうといふことに定つて、其旨を先方に答へたのである。浅海氏は喜んで町の假住居から移轉つて來たが、家族は三人である。主人の所長殿は年齢頃五十二、三、背の高い色の淺黒い、頭髪半ば白き立派な人物、妻は四十六七で叔母よりか少しの年長者、姉ともに見たとこゝろ氣だての優しい、快活な、交際に慣れた人々らしく、十二歳の女の子を一人連れたので我々の一族は又もや二人の女子を得て、何處までも女人國の體を失はないけれど、猶且つ五十以上の堂々た

る一男子を得たことは叔母達の大に意を強うしたところであつた。

寂寞たる山林の生活が此後から少なからず賑うて来て、見聞の狭い叔母達から見ると、役人生活に慣れて所々を渡り歩いて来た浅海一家の人の物品や生活法は少なからず興味を惹き、好奇心を満足せしめ、又た尊重の念をさへ起さしめたのである。

そして二週間も経つと、婦人連に取りては更に一の興味ある問題が出来たといふのは、謙輔が遠からず歸宅するとの事實が知れたのである。

謙輔年齢は二十三、其註文には一二年田舎に居て靜に讀書したい、就いて住宅は町を避け出来るだけ閑靜な所にして貰ひたいとのこと、浅海氏が登記所に通ふ路の遠く且つ難儀なるをも辭せないで、山内の母屋を喜んだのは此理由であつたのである。

謙輔が着く三日前の晩、自分が叔母の宅へ遊びにゆくと、叔母は自分と君子に向ひ、『浅海の奥様が今日謙輔様の寫眞を見せたが威のある立派な方だよ。它でも君が男であつて呉れると私も大變力になるけれど、繁ぢやアまだ〜先が長うて、あんな立派な息子になる

のはちよつくりのことぢやない。私は今日寫眞を見て眞實に羨ましかつた。

「さう、そんな立派な方」と君子は頭をかしげて、裁縫の手を止めて問うた、

「アア」と軽く應じて叔母は、「お前もこれからすこし氣をつけなさいと可けないよ。田舎娘で行儀も作法も知らないと思はれないやうにしなければ。」

「さうですねえ」と君子は至極感心したらしい。

「だつて田舎娘が急に東京者になれもすまいぢやアないか」と自分がつい口を入れると、叔母は、「けれども田舎娘には田舎娘で相當の教育をして來たのだから、笑はれるやうなことを爲ては、君ばかりぢやアない、私まで卑下れるからねえ。」

「眞實にさうだわ」と君子は頗る眞面目である。

「何に關はん僕は暴れて見せてやるのだ。」「眞實に武様は變物だよ」と君子は今更らしく眼を見張つた。

「さうよ、變物のところを見せてやるのだ。」「馬鹿をいふもんぢやアないよ、お前なども謙輔様が來られたら色々教へて貰ふ方が可い」と

叔母は大眞面目。

何を〜何かにつけてサ。代は釣釣と狸狩を教へてやらア。」

叔母も君子も磯嫌か可くないので自分は直ぐ外に飛び出したが、此時から既に自分は浅海謙輔が我等の仲間に加ふることを何となく歡迎しては居なかつたのである。

それで今、君子に別れて小松原を歩いて居ても、何時ものやうに面白くないばかりか、口惜しいやうな、情ないやうな氣がして堪らなかつた。

(二)

成程自分は變物に違ひない。自分は子供の時から他の腕白仲間と一緒に遊ぶことは餘り好なかつた。なるべく單獨で惡戯が爲たかつた。

たゞ其中に君子にだけは心置きなく遊ぶことが出来、君子は自分の従妹であるばかりか、時には姉のやうな心持もして、長ずるに従ひ、益々君子と親み、其姿を二三日見ないと、如何も物足らず感じて淋しさを覺えたものである。

それで君子は自分のことを變物だと常も種つて居たが、自分は君子にさう言はれることは別

に不快な感も起らなかつたのである。

ところが、淺海謙輔のことで、今度、君子から變物と言はれたことだけは、今更のやうに聞えて、自分は少からず不快の念を醸したのである。

「變物なら如何したい！」自分は反抗して見たくなつた。

「どうせ僕は變物だよ。猶ほ變物になつて見せるぞ」と一念の發作を禁じ得なかつた。

既に斯ういふ風だから自分は、淺海謙輔に近づき氣は毛頭もないばかりか、なるべく其機會を避けるやうにして居たのである。

であるから君子が遊びに來いと云つたけれど、必定謙輔も同席だらうと、行かないで其夕は宅にしッ込んで居たが、我儂者の癖にして、斯うなると益々氣色が悪くなるばかり、遂には何故君子が呼びに寄さないだらう、とまで思ひ、獨りで焦れて居た。

夜の九時頃まで讀みもせぬ本を机の上に、洋燈の心を出して見たり引込めて見たりして居たが、ふと頭を上げて見ると、窓の障子に月影が射して居るので、其まゝ外に飛び出した。夏の末、秋の初の夜の涼え渡り、半圓の月清く澄みて下界はしつとりと露けく靜かに、山も

林も黒い影に淡靄の白き光を浴びて浮んで居る。

丘の背を辿つて山内の裏山まで來て、子供の時から君子等と筈を有いて遊んだ平地へ出ると此處からは北向の村を見渡すことが出来る。村は何處、林は何處、たゞ見る、月の光は、あらゆる直線を和げ、あるゆる色彩を融き、我世をさながら夢の世に變へて居るのである。自分は岩陰に佇立んで居た。

暫くすると何者か自分と同じく上つて來た人の氣勢、靜に控へ、呼吸を凝らして居ると、其者は自分の傍らの岩に腰をかけた。隔つたと十歩、されど岩陰は自分を隠して居る。

彼も動かず、我も動かず、斯くて幾分を過ぎた。此時、寂として音なく、たゞ何處にか蟲の音の微かに、遠く聞えるばかり。

忽ち物言ふ聲！ 自分は悚然として閉息した。言葉は嚴かに、音は澄みて、天に在ます神、慈愛の神様：：萬有を統べ給ふ神よ、塵深き都を去つて此靜なる山の上に立ち、心置きなく祈禱を捧げ得ることを感謝します。信仰薄く、常に地の煩悶に苦しむ我を憐れみ給へ。この清き村、この靜なる山、此美はしき自然の懷に導き給ひしを感謝します。：：』

聲は慄へ、嗚咽泣く音を交へて、『されど神様、されど、されど、斯く祈りつゝ我心は何故に眞實に覺醒する能はざる乎、神様、此天地を統べ給ふ神様、限りなき時と限りなき空間、思へば不思議にして驚く可き此の世界に斯の生を寄せながらも、我心は何故に常に平然として月に泣き花に笑ふの情と、親を慕ひ戀を樂しむの心とのみ其安和を得て満足するか。神よ、神よ、不思議と知りつゝも不思議を感じる能はざる人の心は初めより神の定め給ひし約束なるか。：： 然らば何故に神は、我心に此遂げ難き希望を置き給ひしか。：： 何故に我心を更に暗く且つ鈍く作り給はざりしか。：： 獸にも等しく生存を希ふ慾望を興へながら、而も且つ天を仰いで其限りなきを見、此の生命の泡沫の如きを思ひ得るの心を、人には授け給ひしぞ。：： 嗚呼神よ、我苦悶の聲を憐れみ給へ。：： 』

聲は止み、泣く音のみ微かに聞えて、やゝ少時。少時は泣く音も絶えて幾分かを過ぎたが、やがて彼は其處を去つて元と來し途へ引返へし、其足音も聞えなくなつた。

何者ぞ、言ふまでもなく淺海謙輔、自分は直ぐ山を下りて叔母の離室を訪うた。君子は「何故早く來ないの？」とたゞ來なかつたのサ」

と言へど自分は山に得し不安、不審の胸翁を
まらず、今山の上へて月を見て来た。さうと
先刻まで誰か来て居て東京の話をして聞
したので、如何に花生だ、

「何しさらな人よ」と君は母を顧みて「ねえ
母さん、何となく、そして何處か人づれの傍な
い、内裏は時あつて、私に私は氣に入つち
やつた、」と叔母。

「明日武蔵ところへも来務に行くと被仰つて、
よ」と君は「そして武蔵の事を話した、」何
と言つて、

「年齢は十九だが、親自者だから何分願ひまゝと
私が頼んで、」と叔母。

「そして變物だつて私が言つてやつた」と君は
は笑つて自分の顔を覗込んだ。

けれども自分は山に得た不審の心安からず、
君子に反れの氣も兼ねて可笑しきものない、腹
も立たぬ、黙言つて居ると、君は「は言、わしく、

「これでも私武蔵を留めて置いてよ、」何と言
つて、「變物だけれど感心に書物が好きで、英
語が上手だつて、可いでさう其なら、」馬鹿言
つて「ア」と自分は苦笑したばかり。

「何、」英語を習つたのだつて訊いてよ、十歳
といふ人に教はつたのだと言つたら、十賢と

いふ人は何だと聞かから耶蘇だつて言つたの、
「そして何と言つて、」今本人は何處に居る
かと聞かから、何となく、何となく、何となく、
でした、今は何さへか信任してやしませんと言
つた、そして、今は何となく、何となく、何となく、
よ、」信者だつて言つた、

「何となく、何となく、何となく、何となく、
した、」何と言つて、

「それ、」私に耶蘇の説教を聞いたことがあるかと訊
かから、武蔵が鼻口山で木霊達の聲色たつて説
教の眞似事をしたのを聞きました、

「それ、」笑つて居らしてよ、」餘計なことを言
つて「ア」と自分に言つて歸ら、とすると叔母
は早口に、

「それ、」早くも知れない、自分には起つた、君も起つ
て、耶蘇だつて可い、

「それ、」それは以前のことだ、

(三)

實に自分は木霊先生に英語を學び、又た耶蘇
の説教をも聞かされた、けれども自分は英語だ
け學んで宗旨の方は何し、

英語のバイブルは讀み習うたが、バイブルの
つたのである。

教は自分は如何しても受取れなかつたのであ
る、又自分は其教を求める氣も今無かつた
から、木霊先生は自分を愛して居る、

「それ、」久し、何となく、何となく、
を以てわざり、招き寄せて、自分をたゞ一人會堂
の裏に集らして、

「それ、」熱心に祈られた其時、自分は
眞面目に先生の親切を感じたばかりで、

「それ、」けれども計らず淺海謙輔の新説を驚かした
時は言ふべからざる、

「それ、」する反復の念を、

「それ、」翌日の朝、謙輔は自分の宅を訪て来た、

「それ、」自分も出て挨拶した、見ると背のすらりとし
た色の白い、

「それ、」分達に物言ふ聲音には一種の愛嬌ありて敬をも
馴げさうな力あり、

「それ、」其の胸ふに任して相伴うて野に出た、露は
旭にさめき、

は幽籠より立上るのである。

「貴様は朝晩散歩を爲さいますか」と彼は自分を顧みて問うた。

「散歩と言つて規則立つたことは爲ませんが、野山を駆け廻ることは何より好きですから始終行つて居ます。」とお一人で、「さうです、僕には友達に別々にありませんから。」これから僕と一緒に歩ませう。」

「何卒願ひます。此邊には佳い風景の所々山に有るでせう。」別に佳いといふ所も有りません、大概こんなものです、海濱に出れば幾分か變つて居ますが。」

それより二人は丘に上り村を過りなどして、一時間ばかりも歩いた、其間、自分には見慣れて珍らしいとも思はぬ村落樹林の景も、謙輔には餘程氣に上つたらしかつた。

「貴様には面白くもないでせう、こんな景色は」と問うたから自分は右體に「何れでもありません。」さうでせう、珍らしいから美しいと思ふのは景色ばかりでなく、何事もさうでせう。私も其中には貴様のやうに此景色が何んでもないやうになる時が必然來るのです」と彼は理由ありげに言ふので、自分は「當然のこと

で別に不思議はないでせう。」さうです。當

然のことです、けれども私は其當然が甚だ氣に喰はないのです。「何故です。當然のことは當然のことです。」さうです。人の心が左様作られて居るといへばそれまでです。併し……」

謙輔は黙つて了つた。自分はそつと彼の顔を覗くと、彼の眼は凄く光り、彼の唇は堅く閉ぢて居る、端なく自分は彼の前夜の祈禱の言葉

を想へ起した。
「貴様は耶蘇教をお聴きになつたことが有るさうですね」と突然問はれて、「有ります。けれども今は……」今はお止になりましたか。「初めから信者ではありません、たゞ聴いたばかりです。」では貴様は神様は無いものと思ふのですか。「あるか無いか、そんなことは思つたことも無いのです。有るものでせうか。」自分の語

氣にはやゝ冷嘲を帯びて居た。
謙輔は靜に、「有るかも知れませんが、無いかも知れませんが、」だつて貴様は神に祈つたではないか」と言ひたかつた。けれど流石に口には出し得ず、彼の顔を打まもつた。

「牧師は何と貴様に教へました」と問ひかけたので「有ると教へました。」と聞ひかけたので「有ると教へて其理由を色々話して聴

きました。けれども私は……」言ひかけると彼は直ちに、

「其理由が解らないといふのでせう。」さうです。私には理由が解らないのです。けれども研究も爲ませんでした。「研究、研究！私研究は大嫌ひです。神の有無を研究するのは幽霊の有無を研究するのも同じことです。」と言つて謙輔は冷かに笑つた。

「幽霊も神様も同じやうなものです。兄弟分です。あゝ佳い風景だ。」と彼は突然足を止めたので氣がつくと、近郊山村を見渡し得る丘の背に我々は立つて居たのである。

「それ、彼所に見えるのが此所の教會堂です」と自分は町端に立つて居るペンキ塗の家を指さした。謙輔はたゞ首肯したばかり。村の少女が二人、松葉笈の籠を背負つて傍の徑を過ぎゆく、其一人が自分に會話したのを自分は呼び止めて、「オイお嬢、お嬢！先生に今出かける

と言つて呉れ。」先生とは誰です」と謙輔は訊いた。自分は笑つて「お嬢の兄です。叔母の家の小作を爲て居ますか、淨瑠璃の名人で、面白い男です。變物根性に村の者は爲て居ますが、

私は好だから時々遊びに行つてやるのです。」貴様も淨瑠璃を行るのでですか。「彼奴が勝手

に先生になつて無理に私を弟子に爲して居ますから少しづつ、行つて居ます。讚美歌よりか淨瑠璃の方が面白いやうですなア。」

謙輔は思はず聲を放つて笑ひ、「さうかも知れません、先生も耶穌教の先生よりか可いかも知れない！」然し木實先生は全く好い人でした、この前の會堂の先生は、「好人物必ずしも眞實の傳道者ではないやうです。」

二人は暫時く黙したまふで立つて居ると、松原の彼方で先の小女の唄ふ聲が聞える。謙輔は一度私も淨瑠璃の先生の所へ連れて行きませんか。「何時でも御一緒に参りませう。」以上の如くして自分は淺海謙輔と相知つたのである。

(四)

謙輔の言葉の節々、自分は頗る不審に思つたのである。彼は果して耶穌教信者であらうか、自分に取つては彼が耶穌であらうと無からうと、何んであらうと別に關係もないことと、氣に留めるほどのことで無い筈が、實際はさうでなく、今までは、教會に入してすら何にも感じなかつた自分が、不思議にも痛く彼の舉動に動かされたのである。

淺海謙輔は果して耶穌教徒であらうか。神に祈りたる、其熱心な言葉を思ふと正しく信者らしく、而も彼は、神は有るかも知れず、無いかも知れないなどいふ曖昧なことを言つて居る。のみならず、讚美歌より淨瑠璃の方が面白いと自分の言つた言葉は奇怪とは思はず、却つて大笑したではないか。彼も亦た一個の變物であるまいか。自分には謙輔の人物が不審であつたのである。

(五)

謙輔に初めて會つた日から二日目、郷里から二十里隔たつて居る某町に住んで居る叔父の宅から自分を招く手紙が來た。本年は珍しい大競馬があるから是非に來いと祭の案内狀。自分は餘り進まなかつたが、母が強ひるので終に出立した。

三四日滯留の積が一週間になり十日になり、更に叔父一家の者と讃岐琴平詣を爲なければならぬこととなり、忽ち一月足らず過ぎて漸く宅に歸ることが出來た。母と差向宅に着いたのは夜の七時頃である。母と差向ひ夕飯を濟すや土産物を持つて叔母の家を訪ふ

べく外に出ると、夕月の影射えて、恰度、淺海謙輔が歸つて此處へ来た頃、夜は深々と同じである。月は一月進み、秋は半となり、露重く蟲の音繁く、引く呼吸のヤム冷たきを覺ゆるまでになつただけである。

叔母と外の子供達は居たが、君子の姿が見えない。「お君さんは」と問うた自分の語氣には我知らざる不安と不足の音を帯びて居たのである。「謙謙の宅よ、姉さんは」と豊子が何氣なく答へた。

「呼んでおいでよ」と叔母が言ふかと思つたら黙つて居る。自分に旅行中の事どもを話して居たが、何となく心が落着かない。それとも叔母は氣の着く道理もなし、色々といひ居たが自分の答辯に氣の乗らないのを見て、疲れて居るだらうから早く歸つてお寝み、謙様もお前の歸りを行つて居なかつたから明日は朝から遊びに來るが可い」と言つたが、君子のことは何とも言はない。

外に出たが直ぐ宅に歸る氣にならず、仰いで大空を望めば星の一個、今更の如く眼に映る。自分は今更といふ、何故なれば、これまで幾百千度、空を仰いで星影を見たが、此時ほど我心

に其清くして澄みたる、意味ありげなる趣を
印したことはないからである。今までに感じた
ことのない、うら悲しい懐がして、涙さへ誘ふ
ばかりになつた。

今から思ふと、自分は其頃、君子を戀して居
たことが解るのである。何故自分は謙輔を叔母
や君子等の如くに歡迎することが出来なかつ
たか、何故自分は、君子が謙輔に近づいたこと
を知ると共に、我知らず深い哀みを感じたか。

此悲哀は戀の果敢さの悲哀ではないか。
けれども自分は當時、明かに自分の戀を認め
ては居なかつたのである。たゞ夫れ、物足らぬ
思ひ、言ひ知らぬ哀を催したばかりに過ぎな
い。

家には歸らないで自分の足は知らず、裏山
の松原に向いた。徑は幾重にも迂回して緩
かに、樹間より洩る月影を踏んで、頂に到り、先
の夜、謙輔が神に熱禱した岩陰まで出て、暫く
佇立んで居ると、人の話聲が近づいて来る。

自分の今來た路を登つて来る人は山内の者か
自分の宅の人ならでは無し、何者かと氣をつけ
て待つて居ると、一人は謙輔の聲、一人は君子
の聲！

自分は直ぐ身を木蔭に隠して了つた。彼等の

様子を覗ふこと、其物語を竊聽きすること、
これ善きこと悪しきことなど思ひきはむるの心
さへ起らず。

暗き影の中より二人の黒き姿が現れた。

透し見る、二人は肩の磨れ合ふまでに身を寄り
添へて歩く、一步は一步より遅く、忽ち二個の
姿一個に合ひし如くに自分には見えたが、又た
二個に分れて頂きの平地に竝んで立つに及び、
二人は月に向ひ暫く無言の體。

『だつて田舎よりか如何しても東京の方が可
いでせう』といふ君子の聲。

『さうです、都會に住む人は悪魔になり、田舎
の者は悉く善人だといふ譯は決してないけれ
ど、私のやうな人間には如何しても田舎の方が
可いやうです。近いところが都會に居てはこ
んな山もなければ、こんな見晴らしもありませ
ん。全くないではないが、田舎に住んで心閑
かに眺めると、都會に居て名利競争の暇に賞
美するのとは全然精神が違ふやうです。』さう
ですかねえ。』然し理窟を言へば何でも議論は
出来ませんが、私は理窟は如何でも可いので、た
だ田舎が好き、それで文句はないのです。たゞ
思ひます、田舎の好きな人は都會の好きな人よ
りか幸福だと、さう思ひます。どうせ人は皆

な死んで了ふのですからねえ。』でも尾間さ
んは先の世が在ると仰しやいましたよ。』尾間
君などに何が解るものですか。』『マアあんなこ
とを！』眞實ですよ、彼の人なんか、神様が如
何だとか、かうだとか、木で作つて衣兜の中に納
つてあるやうに手軽く神様々々といひますが、
あれは皆な偽の皮ですよ。』『チャア偽言者でせ
うか。』『マア偽言者でせうなア。』『チャア未
來は無いものでせうか。』『あるかも知れませんが、
無いかも知れません。』『でも有るつて尾間さん
は言ひましたよ。』『尾間君などは善人です。』だ
つて貴様、今偽言者だつて仰しやつたチャアあ
りませんか。』『偽言者の善人は澤山ありますよ、
傳道師などは大概さうのやうです。』『貴様の仰
しやることは私なぞに寸毫も解りません。』
然り、竊聽する自分にも解らない。謙輔は曾
て自分にも同じやうなことを言ひ、亦た今、君
子に向つて語る。其一語、其一句、好んで斯く
もひねくるのか、さうでもないらしい。怪しい
かな彼！

尾間君などは解るやうに言ひますが、あれで
自分では何も解つて居ないのですよ。』
人變悪く仰しやいますねえ。』『悪く言ふ譯ぢ
やない、私は全くさう信ずるのです。若し彼

が解つて居るのなら、私は狂氣でず」と言ひ放つた謙輔の聲は甚く激して居た。

「そんなことは有りませぬワ。」いゝえ、狂氣です。けれども私は尾間君の善人よりか自分の狂氣の方を選びます。

君子は黙つて了つた。頭を垂れて立つ少女、傍に立つ一人は昂然として大空を見渡して居る。

「歸りませう！」

謙輔は靜かに前に立つた。君子は其後に。先には並び歩いた二人が、今は前後して相隣つる二歩三歩、林に入り言葉もなく山を下りて了つた。

尾間とは新任の傳道師、彼如何にして二人の題目となつたか。自分の居ない間に、わが靜なる山家は、更に一人の友を加へたのか。

自分は家に入り歸床に就いたが、暫時は眠むる能はず、君子とたゞ二人、長閑かに往來して暮らした彼の日、彼の時、色々と思ひ浮べて居ると、丘の麓を聲朗かに唄ひゆく、聲は正しくお鶴の兄、我が淨瑠璃の先生！

(六)

次の朝君子に逢つた。君子は奥の三疊でたゞ

一人裁縫を爲して居た。自分を見て、「お歸り、大變遅かつたのねえ。待つて居てよ。」と一言言つてから、待つても居ない癖に「自分は其傍に坐つた。見しと見慣れた男の衣服を縫つて居る。

「誰の？」それは「これ？」謙輔の、好い顔でせう。さういふ言ひ遅れました、お土産有らう、私大變あの給が気に入つたのよ。」随分長逗留だつたらう。「眞實に長かつたワねえ、私待ち疲れて了つてよ」と言ひつゝ針を運して居る。其顔を見ると、血の氣は失せて、何處となく憔悴れて見えるので、「如何かしたの？ 顔色が悪いよ。」さういふ如何も爲ませんよ、昨夜何だか能く眠られなかつたからでせう」と顔を上げ

頬に垂れた髪を掻きあげて又た下を向いた。「如何して？ 何處か悪いのぢやアないの。」「武藏」と君子は顔を上げ、笑味に恥を帯びて、「私、昨夜妙な夢を見てよ。」

「謙輔先生のお嫁になつた夢でも見たの？」と自分はツイ口を濡らした。君子はサツと顔を赤らめ、知らないワ！ そんな夢ぢやアないワ！」「どんな夢？ それぢやア。」

「死んだ夢なの、死んで地獄に落ちた夢。何だか可畏つて可畏つて、赤鬼だの青鬼がぞろ／＼居て、火の池に私を突き落して私が這ひ上ら

うとすれば又た焚きすのよ」と熱心に語る。其の中へ光り、睫毛は潤んで居る。……急に聲を止め、その胸を見る。謙輔は居るが、謙輔様が大きな聲で「君さん／＼早く逃げて、早く逃げろ」と言ひながら、火の中へ這ひ入る。君子は頭を掉つて氣息をして、「……夢でせう。」

「僕が居たら直す君さんを助けてやる人だけれど、謙輔さんか何處だから駄目だ。」地獄なんて、眞實に有るものでせうか」と君は何處までも眞面目である。

有るか、知れないよ、耶蘇でも佛教でもさう言ふから。武藏眞實に如何思つて……」「どつちでも可いと思ふ。そんなことは如何ても可いぢやアないか。君さんと一著になら僕は地獄にでも行かア。」私、否。「極樂なら」といふ自分の間に君子は答へず、急に起上つて次の間に出たと思ふと、武藏、謙輔が入ツしやツてよ……武藏も來て居ますから此處へお入りなさいナ。」

(七)

暫くすると尾間利雄も來た、自分が尾間に

會ふは初めて。君子は馴れ／＼しく言葉を変へて居る。叔母の發案で、今日は小春の上日和、山遊に大勢で押出せといふに皆々賛成し、尾間に謙輔、自分に君子、謙輔の妹の春子、それに豊子と繁と同勢七人、叔母は下女下男と共に後から辨當を運ぶといふ手配まで決り、河に沿うた山、俗に赤山と呼ぶ低い平い、見晴の佳い丘へと繰り出した。

「御酒は先へ持つて行つたら？」と出立際に叔母の注意。「酒は持たない方が可いでせう」と尾間の牧師。「イヤ持つて行かう、少しでも持つて往かないと、山遊の氣が代ないから」と、淺海謙輔の言葉に附いて、「賛成、賛成！」と自分も早くも叔母の手から例の一應を受取り擔いで了つた。尾間は見て苦笑した。

「讚美歌を持つて行きませうか」と言つたのは君子、大賛成を表したのは尾間、自分も謙輔も黙つて居た。

繁を先登に、これに續く春子、豊子、男三人と君子とは後になり先になる。最後の下男の一人が藁筵と毛絨とを擔いで續く、

背の一番高いのが淺海謙輔、次が自分で、尾間は君子よりやや高い。尾間は二十六の由なれど小柄ゆる淺海の方が却つて老けて見える。顔

の一番白いのが君子で次ぎが尾間、自分の顔は分らないが、淺海と同じ黒さであらう。尾間は洋服を着て杖を持つて居る、衣囊を膨らして居るのは聖書か、それとも謙輔の所謂木で作つた手輕な神様か。

淺海は飛白の羽織に米利堅帽、これは彼の常の衣装らしい。君子は束髪にリボン、其色が桃色、薔薇の花髪挿は見慣れぬ一物、多分淺海か尾間が贈つた品らしい。

「繁さん、左様走つては危ないよ」と後を追うて駆け出した豊子に從いて、春子の姿も小數の曲角に隠れて了つた。

角まで来ると「ワツ」と三人。喫驚した顔で飛び上つた尾間の様子が剽悍だと君子は相好を崩して笑ふ、自分も笑ふ、謙輔も笑ふ、笑ふや一、心持は異つて居たかも知れない。

「尾間様、杖を拜借な」と君子は振り向く。「何に爲さる」と「何でも可いから貸して頂戴な」と言はれて尾間は大事さうに持つて居た杖を渡す。自分達は如何するかと見て居ると、君子はたゞそれを携へて行くのである。

麓を廻つて一丁ばかり、一軒の農家がある、小犬が吠えて飛び出した。ワツと三人の子供は後へ逃げ廻る、君子は杖を振り廻した。犬は

益々吠える。君子は遂に杖を犬に掛けつけると、犬は一躍、平氣な顔でそれをくはへ後の山へ上つて了つた。喫驚したのは尾間の牧師である。手早く上着を脱いで草の上に投げ出したトタンに衣兜から飛び出したのが聖書、アハヤ田溝に轉げ落ちさうにして僅に草の根に止つたのを見向きもせず、一日散に犬の後を追駈けた。

淺海は腹を抱へて笑ふ、其際に自分は聖書を拾つて我が懐の奥に隠した。見たものは誰もない。

尾間が杖を取り返すに十分もかゝつたらうか、上着を肩にかけたままズボンから眞白な手巾を出して汗を拭きながら歩む、聖書のことば氣が着かぬらしい。

此一幕が終むと間もなく赤山の麓なる河岸に出た。川幅三四間、岸には川楊繁る。水は澄み底は小石の數も讀まるべく、小舟一艘繋いであるのを見て、我年若き傳道師は逸早く飛び乗つた。其勢の餘り烈しかったので、軽く驚

ぎし綱抜けて舟はする／＼と一間ばかり沖へ。波紋ゆら／＼と起つて岸を打つ時、舟は止つて流緩るければ流れもせず、後へも先へも其儘尾間は流罪の體となつて了つた。

子供は手を拍つて山へと登りはじめ、淺海

もこれに續ぎ、君子と自分は後に残つたが、二人の間は四五間隔たつて居たのである。

小舟には、棹なし、尾間は驚いたが如何することも出来ない、下男は爲に近所の家へ竹棹を借りに来る。自分は岸に立つて、懐から先の聖書を取り出し、故意と素知らぬ顔で繙いて讀む眞似をすると、尾間は見て、「オヤ驚いた、それは僕のヂャアないですか」と急いで衣兜を捜したが、「不可せん」とそれを見ちやア不可せん布浦様、武雄さん、眞實です、それを見ちやア不可せん」と躍起になつて叫んだ。

「可いぢやア有りませんか、祕密の本ヂャア無いでせう、先刻貴様が落ちて御存知ないのを拾つて置いたので」と自分はたゞ抑捺ふ積りで益々聖書をひねくる。

「どうも難有う、然し……、ア、困つたなア」と其當惑さ加減は尋常でない。淺海も不審に思つて足を止めて見て居る。

皮表紙四六版の聖書、それも手磨のした、流石に其職の人が持つて居さうな古ぼけた書別に不思議はないのである。君子が五歩六歩、自分の傍に近づいた時、表紙の裏に附てある紙拵の間から少し現はれて居る紙片に眼が着いた、其文字に。鉛筆で「愛する山の女神、君子の君

に榮あれ!!!」

自分はハタと書を閉ぢた時、君子は傍に来て、「何ぞ書いて有るの、お見せなさいな。」尾間様、「自分は呼びかけて返しますよ、それ」と投げた。書は無事に彼の手へ、自分は走つて淺海の後を追うた。七人、山に揃つた時、自分の素知らぬ風を見て、君子は勿論、淺海も、又た尾間すら文字を見た自分を怪しまなかつた。けれども一種、言ひがたき不快の念、それは前夜、君子の姿の見えなかつた時に感じたそれとは異つた、苦々しい、重苦しい思ひが自分の胸を壓へて、山遊も一向に面白くない。けれども顔には少しも出さなかつた。

一番面白さうなのが子供の次ぎには尾間牧師、次には君子、淺海も面白さうであるが、尾間ほどハシヤいではない。君子はやゝ浮れ氣味で、地獄の夢など消えて跡なき夢物語。天國は近にありさうな様子。

辨當が來た、酒を出す、尾間は見向きも爲ない、淺海は二三杯、自分は五六杯、後は下男が飲んで了つた。

松の木蔭に立てば冷しき風吹き、見渡せば野は半ば刈り取られ、廣びると佳き眺めを面白いとも楽しいともたゞ嬉しかつたのは以前の山

遊、今は甚だ下さらない。君子と尾間は聲を合はして讚美歌を歌つて居る。淺海は黙つて聽いて居る、自分は黙つて見て居る。子供等は叔母や下男と戯れて居る。尾間のホワイトシャツは反射し、君子のリボンも續へる。

此日、尾間と初めて相見て、此日より自分は尾間が嫌ひになつた。そして淺海謙輔を何となく慕はしく思ひはじめたのは實に此日からである。

(八)

山遊の日から五個月経つた。此短かい月日の間に如何なことが有つたか、自分の口から言ふよりか淺海謙輔の筆の方が適切で而も意味が深いだらう。

春三月、謙輔は飄然として家を出て再び都に去つて了つたのである。自分すら其前夜まで知らなかつた。朝になつて見ると、謙輔が居ない、淺海の父母は、たゞ昨夜急に思ひ立つて旅行の途に上つたとのみ、我々に告げた。實は父母すらそれが永久の門出たることを知らなかつたのである。

けれども謙輔は途中から自分に一冊の隨筆を送り來した。自分は何度繰返へして讀んだら

う。

要するに彼は眞實の傳道者であつたと、自分は此處に斷言するのである。自分は彼に由つて實に新しき生命を得た。と言ふよりか寧ろ、彼に依つて自分は眞實の生命に入る門を開かれたと自分は斷言する。

要するに彼は煩悶の兒である。自分も亦た彼に依つて深い煩悶の淵に沈むことゝなつた。けれども自分はこれを少しも悔いないのである。

彼の名は今以て世間に聞えない。恐らく永久に聞えないだらう。けれども初より社會生存を無視したる彼には當然の事で、彼は勿論、自分とても敢へて苦にもしないのである。

一惡魔一は我山林生活に於ける彼の隨筆。かれ自ら題して「惡魔」と書し、自分に送つたのである。

其序文に曰く——武雄君足下、此一冊を君が机下に呈す。これ余が隨筆なり、月日なき日記

なり、小説なり、演説なり、祈禱なり、呪詛なり、而して實に懺悔なり、過ぎし半年の永かりしことよ！此間、余が君の親切に負ふ所如何に多かりしやを思ふ時、この冊子を示して可なる人、君に非ずして遂に誰ぞ。

今日まで、君は忍んで余が苦悶の聲を聞き給

ひぬ、願はくは今一度我ために忍んで此冊子を一讀せよ。讀み了つて火中に投ずるも余に於て憾なし、藏して永く不幸なる青年が記念とも見給はゞ、これ又可なり。或は又これを君子に示し給ふとも、其は君が處置に任す。

惡魔よ！ 惡魔よ！ 生命の祕義に觸る可く、僅に一幕を隔つるのみにして而も遂に爾の掄じたる黑影を拂ふ能はざるは永久の恨なるかな。

斯の如くして余も亦た遂に獸の如く死する也。斯の如くして余も亦た遂に泥土に歸する也。

自分はこれより左に「惡魔」の數節を抜く。

(一)

君子と知るを得たり。君子は十八と言へど都會の娘に比れば十六位にしか見えぬ。其眼は人を魔するの力あり、睫毛長く垂れて常に物を思ふが如きまなざし。

舉止活潑なれども温雅の風姿を亂るに至らず、言語明晰にして語音に妙なる響あり、髪は長く黒く房々と耳を覆ふ。教育あるが如し。

君子は我妹の友なるべし、君子は如何、余が友たるを得るや否や。余は其友たるを望む。

我が山林の生活を彩るに斯る少女あるべし

とは思はざりしに。我も少女も共に幸多からんことを祈る。

(二)

月明を踏んで山に登る。月光流水の如く、山も林も野も村も、寂として夢の如し、岩に伏して祈る。

祈る時、我が胸は掻き亂れぬ。この靜なる山林の生活を得て、而も我遂に安んずる能はざるか。神を祈れども神を知らざる者は我なるかな。

されど、我は「不安」を否まざるなり、我が「不安」はわが靈の生命なり、生命の根なり源なり、我は安くして犬の如く死なんより悶きて天界を失落せる惡魔の子の如く生くべし。

空しき言葉なるかな。斯く書しつゝ、我心の焦だちを覺ゆるなり。嗚呼これ何の故ぞや。

(三)

幻影あり。我を導く一個の星あり、我が眼前に淡青色の光を放つて進む。我其後を尾して行く。

既にして我が住む地球は星の如く小さくなれり。空冥存に他の群星と共に輝くを見る。而

して我眼を續へして上下左右前後八方を見
波すに、一道の光輝紫色を帯びて天の一方に
横ふを見る、思ふにこれ太陽の光、暗黒裡に
入りて其光を失ひしならん。矢の如く走りゆ
く光あり。頭上に五個の大圓球あり。皆な血
の色を帯びて浮ぶが如く懸れり。
幻影か、幻影か、余は斯る幻影を追ふことを
好む。

(四)

布浦武雄は才あり氣力ある好青年なるが如
し。木實某が彼を化して「信者」となさんと試
みし勞力の無益に歸したるは笑ふべきかな。
化して石となし驢馬となす、余はこれをアラビ
ヤンナイトに於て見る、化して「信者」となさん
と勞苦する魔術者を基督の弟子に見るは傷し
いかな。されど怪しむ勿れ、彼等弟子と稱する
輩も亦た化成の「信者」にてあるなり。
神を求めよ、されど如何して？ 神とは此世
の神か、果して然らば貨幣も何の選ぶ處ぞ。
嗚呼吾等が住む此小さき星も亡ぶる時あら
ん、秋の梢より木の葉の落つるが如くして。こ
れ比喻に非ずして推測せる自然法なり、事實な
り。此事實を感じて其心を動かすこと、戀を感じ
て其情も動すが如くんば、神を求む、然らずん

ば死を求む
我黙して山上に立つ時、忽然として我生存の
不思議なるを感ず、此時に於て「歴史」なく「時
來」なし、たゞ見る、我が生命其者の此不思議
なる宇宙に現存することを。あゝこれ天地生存
の感にあらざるや。かゝる時口言ふ能はず、たゞ
奇異にして恐しき感、わが震を震動せしむ。
思ふ基督が四十日間、荒野に於て嘗め盡したる
ものは此痛感にあらざるか。

(五)

山を下れば社會あり。食物あり、衣服あり、
住宅あり、父母あり、隣人あり、こゝに交際あり、
名譽あり、恥辱あり、而して哀しき人情あり。
過去に歴史あり、幻の如く我等を追ひ、將來
に希望あり、蜃氣樓の如く前程に浮ぶ。
こゝに文學あり、美術あり、政治あり、而し
て此處に宗教ありて神を説く。或は無常を
説く。要するに紛々として我等を繞る者、我等
が肉となり情となり、生命となり、而して首尾
よく社會生存の實を擧ぐ。
社會生存とは何ぞや、余の術語なり。億萬
の人、其生存を自覺せりと云ふ、そは社會に於
ける生存のみ。
山を下れば社會あり。天地生存を自覺せる

余も、社會に入ることも分曉、忽然として社會
の一員となり了しぬ。而も遂に大震を震動した
る痛烈なる感想を忘る、能はざるが故に苦惱す
る余は悲惨なるかな。
〔六〕
君子と共に野を散步す。岡に上り、林に入り
て坐す。鮮なる秋の日影、樹間より洩れて君
子が肩に點々たり。二人は語りて時を移るを知
らざりき、妙なる香氣ありて君子が身を包むが
如く覺えぬ。この少時、われは世を忘れ、天地
を忘れ、我をすら忘れたる、これ何故ぞ。
斯くて又た少時、われ卒然眼を轉じて四邊を
視たり、あゝ何の力ぞ、我は此刹那に於て君子
を忘れ、一切を沒了して、たゞ夫れ天地悠悠、我
が生、此無窮なる空間に驚がれるを感じ、堪へ
難き哀愁泉の如く湧きぬ。

(七)

町なる教會に行く。小きき建物なれども尙
ほ百人を容るには餘りあるべし。信者の集會三
十名ばかり。都會の教會とは異なり、年若き
男女は數名に過ぎず、多くは中年以上の人々に
て、小兒も加れり。
傳道師なる尾間利雄と語る。快活多辯、愉
快なる人物なり。彼は我家をも訪ふべく約し

ぬ。

神よ、願くは我をも謙遜なる信者の中に加へ給へ。我が苦惱を柔げ給へ。あゝ在さざるところなき神よ、無窮を統べ給ふ神よ、常に此生の泡沫の如きを感じて、容易く永久の生命を信ずる能はざる我をも憐れみ給へ。人類ありて以來、幾千億萬の我々が祖先今何處にありや、あゝ神よ、時の不思議なる謎を示し給へ。

丘の麓に民家ありて其屋根よりは青烟の立ち昇るを見る、其裏には父あり母あり妻子あり、彼等は朝な朝な起き出て野に耕し夕は團圓して談笑す。屋後に墓地ありて月明の底に眠れり。あゝ神よ、これ我には大なる謎なるかな、哀しき謎なるかな。あゝ神よ、我も亦た彼等と共に人情哀樂の泉を汲んで此生を安んず可きか。

〔八〕

早間利雄来る、談論す。君子傍らに在りて聴く。尾間曰く、君は愛を疑はざる可し。既に愛を疑はずんば神の愛、基督の愛を信するに於て異存のあるべき筈なしと論鋒頗る鋭利なり。我々うなづきぬ。尾間は轉じて君子に向ひ、詩々として天に在ます父の愛を説き、永生を説き、人の罪を説きたり。更に天國を説き地獄

を説きぬ。爾して曰く永遠の亡、これ地獄なりと。君子の心動きたりと覺し。われは明言す、斯る傳道は「虚偽」なりと。あゝ天とは何ぞや、命とは何ぞや、亡とは何ぞや。

形容詞を止めよ、説教を止めよ、自己を宇宙の外に置き、神と人と其處に並べて鑛物の見本を説明するが如くに宗教を説く勿れ。理學士も熱心に語るなり。爾の熱心を語る勿れ。眞面目を誇る勿れ。眞面目といふ心持は大して價値あるものに非らざるなり。心的現象の一に過ぎず、人は木片をも大眞面目に信ずるもの也。神の有無を言ふ勿れ。一人なる言葉を止めよ、爾先づ生物の一個として面と面直ちに此無窮なる宇宙に對し、爾の生命其者の存在を直感せよ。

〔九〕

されど之れも亦た余が説教にあらざるか。人は世間から生れ出て世間の中に葬られて了ふのではない、天地から生れて天地に葬られるのである。世間とは人々相集合して成立つ形のない者、人とは物質、此物質は此大なる自然の一部である。これほど簡單な事實はないので、小學校の生徒も知つて居ること

ある。然るに不思議にも人は此事實を忘れてしまひ、成長するに従ひ、たゞ世間ばかり對手に生きて居る、世間を對手に或は泣き或は笑ひ、そして一生涯を送つてしまふ。そしてヒョックリ死んで了ひ、彼が全く忘却して對手にも爲なかつた自然の中に消滅して了ふ。

凡て人間界の不思議中、これほどの不思議はないのである。さういふ私もやはり其お仲間なので、四六時中、夢にも現にも私の心を動かして居るもの、九分九厘は世間である。

ところが昨夜のことであつた。私はフト眞夜中に眼が覺めた。夢も見ない熟睡の中から覺めた。一室は仄暗く、あたりは森として居る。此時、私の心に電のやうに閃いて來た一〇思想があつた。思想といはうか、感情といはうか、將た現象と言はうか、心理學者の分類するところの知情意の何れに屬すべきものたるを私は知らない。

ア、不思議！ 此處は何處だ、宇宙だ、自分は此大宇宙の一部だ、生命よ、生命よ、此生命は此宇宙の呼吸である。』
たゞ斯う言へば言葉の連続に過ぎないが然し、私の感じたことは到底如何なる言葉を以てしても現はすことが出來ない。此畏しき心の現

象が閃いた時、其時實に私自身の存在を感じたのである。世間に置ける自己ではない、利害得失、是非善悪の爲めに心を懷す自己ではない、文學とか宗教とか政治とか、はた倫理とかいふ題目に思を焦す自己ではない。又た親子の愛、男女の戀に熱き涙を流す自己でもない。ただ夫れ一個の生物たる我の存在、此宇宙に於ける存在を感じたのである。

然し忽ちにして此心の現象は消えて了つた、恰度闇に閃く電光が忽然として又た闇に消えて了ふやうに、私は再びこれと呼び返さうと力めて見たがだめであつた。

しかしながら此時私は沁々と感じた、『さてさて人間とは不思議なものである。生命とは不思議なものである。』と。

以上の如く君子に語りたれども、たゞ首肯けるのみ、さして異なりたる感を起したる様も見えざりき。

神を説くは易し、神を求めずんば止む能はざるの境に人心を導くことは難し、尾間の言は解し易く、我が語るところの經驗は、經驗ありし其人にあらずんば遂に解す可からざる乎。

〔十〕

鬼あり、黒き翼を振つて我室に現はれぬ。聲

荒かに口ふ、來れ！爾に見すべきものあり。彼に尼して飛びゆくに其道程を知らず、鬼曰く、『見よ、爾彼等を知るか』と。黒闇々の輝、色彩鮮明に現はるゝ二個の人物あり。一は尾間利雄、一は君子。

「爾、彼等を知るか。鬼は冷かに問ひぬ。知れり。一は傳道師尾間利雄、一は少女君子。」

「見よ、彼等さも陸じき様ならずや。」「然り、互に寄り添うて歩むなり」と我が聲は深ひぬ。

「見よ、彼等相抱きぬ」と鬼は私語り。我は顔を背けて見ざらんと欲して能はず。鬼は啞ひて、

「何ぞ正視せざる？ 彼等は樂しげなり。」「然り樂しげなり、されど我は多く見ること好まざるなり。」「何故ぞや。花の咲ける、鳥の囀づる、男女の相親しむ、みな自然の女神の織りなす綾のみ。怪しむに足らざるなり。」「然り、然り、爾の言ふところの如し。」「然も爾の顔に苦痛の色あるは何ぞや」と鬼は苦笑して問ひぬ。

「女の愚なるを憐れむなり」と我が聲は激し

「欺く勿れ、自ら欺く勿れ。愚なる女を爾は何が故に戀ひたる。」「あゝ我戀ひせしか、戀とは何ぞや。」「戀とは爾が今、彼の少女の上に注ぐ心の如きの如きを言ふなり。戀とは唯だかくの如きのみ。」「我は彼女を惡む。」「則ち戀のみ。戀は惡み、恨み、憤ることを教ふ。爾も亦た其奴のみ。見よ、見よ、彼等も戀の奴なり、されど彼等は樂しげなり、幸福なり、爾これを祝せざるか。」「余は口言ふ能はず、たゞ眼を張つて闇黒裡に旋轉する二個の幻影を見るのみ。彼等は聲高らかに得意の讚美歌を歌ひつゝ、互に手を執つて胡蝶の如く舞ひ、落花の如く離へり、翩々として上天杳に上りゆくなり。」「鬼は喜ばしげに叫んで曰く、『あゝ爾等永久に幸福なれ。神の御前に爾等の戀を遂げよ！』」「惡魔！ 惡魔！』と我が血は沸き、我が眼皆は裂け、我が聲は嘎れつ、直に無限の闇の底深く身を躍らせば、飄々湯々として窮まるところを知らず、火光矢の如く身邊を掠めて飛ぶこと無數、泣く聲、叫ぶ聲、遠くして哀笛の如きもの身

を繞りて聞ゆ。夢にあらず、現にあらず。

(十一)

布浦武雄と相親しむこと益々深し。君子は町なる教會に通ふこと度重なり。尾間利雄は余が許に來る毎に必ず君子を訪ひ、時として君子をのみ訪ふことあり。武雄は尾間をよるこぼざるが如し。

武雄と尾間が問答こそ面白けれ。武雄曰く、「君は女の信者を作ること、男の信者を作ること、何れを難しとし給ふや。」

尾間は眞面目になりて、「そは同じことなり。等しく人なる以上は神のこれを召し給ふに何の差別あらん。」

「神の召し給ふには差別なかるべし。されど等しく人形を作るにも男形と女形とは努力に於いて甚だしく差ありと聞く、信者を作る亦た此類ならずや。」

尾間は益々眞面目になりて、「我等を人形造に喩へ給ふこと苦しからず、基督は自身を牧者に喩へ給ひしことすらあり。故に君が問に答へん。女は男に比ぶれば心直にして教を納れ道に順ひ易し、男はこれに反す、されば女の信者を作るは甚だ易きことなり。」

と問はれて尾間は大聲に笑ひ、「左なり、左なり、大に樂しきものなり」と言ひ放ちて意に介せざる様なりし。

(十二)

惡魔あり、私語いて曰く、「何故に爾は自殺する能はざるか。自殺の罪惡説は爾の冷笑する處ならずや。爾は罪惡説の故を以て自殺せざるには非ず、自覺せよ。」

爾に希望ある乎。曰く無し。爾に平和あるか。曰く無し。爾の有するところは唯だ苦惱のみ。千萬人の中の一人も經驗することなき苦惱のみ。爾は詛はれつゝあるなり。爾は宗教を以て満足せず、爾は花の美、月の光を以て満足せず、爾は實に人の力を以てしては遂げ難きものを追はんと悶くなり。

今や爾は何事を以てするも興味を感じざる也。然らば何故に自殺せざるか。死は萬事休する最後の平和に非ずや。平和、然らずんば空。此處に一個銳利なる小刀あり、爾の爲めに特に用意し置きたるなり。以て胸を刺すに足る。イザ、擧手のこと！ 十分に或は五分間にして足る。僅かに五分間の苦痛！

爾が父母、兄弟、朋友、總て爾の一度見し處の人、見ざる億萬人、すべて後より爾を追

ひゆくべし、彼等も終には爾と等しかるべし。數年若くは數十年の運速のみ。

イザ小刀こゝにあり、何故に躊躇ふか。一擧手の事、五分間にして足る、五分間、三分間！

見よ、爾の崇拜する古英雄、古聖人、爾の親しかりし朋友某等、皆な死の國の民ならずや。死の國には友多し、友多し、彼もあり、彼もあり。

一擧手のこと！ 何故にためらふか。嗚呼、爾はたゞ空しくためらふのみ、其理由を解せざるなり。若し理由ありとすれば一個、僅に爾を憤激せしむるものあり、曰く自殺は薄弱の行爲なり、平和を得ずんば得るまで戦へ、信仰なくんば信仰を得るまで苦戦せよ。自殺は薄弱の行爲なりと。

されど爾は已に此憤激を用ふることに餘りに數々、最早爾を立たしむるの弾力なきまでに使ひたり。

欺く勿れ、爾は未だ眞面目ならぬなり。自殺をも爲し得ず、希望もな、平和もなし。爾は憐れの男なり、あゝ爾は世にも憐れなる一人なり。死か生か、其一を正しく選ぶ能はず、獸の如く生くることすら能はず、たゞ苦惱のみ、名け難き苦惱の兒のみ。たゞ肉體を古びたる衣

の如く纏ひつゝ、懺悔す、吐血す。

われ靜に答へて曰く——「日復して終に如何。

生し死し何の相違、宇宙はあらゆる法則な

り、死するも生くるも我等この法則の外に脱が

るゝ能はず。死し吾等を置いて宇宙の外に持去

るか、思想を懐くことは、自殺者及び死を輕視

する者の總ての誤謬ならずや。

われ此處に嚴存す。宇宙は全體なり、あゝ我

れ此存在を如何すべき。死するも生くるも遂に

此存在の事實は人の力もて打消し能ふべきに

非ず。在るものは如何してもあるなり。あゝ我、

不思議なるかな。」

惡魔笑つて曰く——「いみじくも言へるもの

哉。爾は終に苦惱の見なり。死の存在を得るに

若かず、死の法則に順ふに若かず。」

一十三

戀よ、戀よ、われ戀を欲す。少女の香に打た

るゝ時、己が惱める。魂は安を得るなり。君子

と偕に在るときは、限り知らぬ樂しさを覺ゆ。

されど君子は余を憎からず思ふのみ、寧ろ彼

の尾間利雄を戀ひつゝあり。

十四

武雄と語る。余曰く——「若し冷やかなる言

葉を以てすれば我等が選ぶべきは二者の一の

み。曰く天地に大道存し、大道は神より出で、人

は之を信じて、愛と美とを永久の眞と信ずるこ

と、曰く天地はたゞ盲動の暗黒のみ、人は愚と

惡この肉塊のみ、美とは空名のみ、愛とは動物の

條件のみ、空より生じて空に消ゆべきのみ。

此二者のみ、光若くは暗。されど奇怪なる

は我等が心の立場なり、二者の一をも信ずる

能はず。確信する能はず。確信の實を擧ぐる能

はず。

道路二岐に分る、我等が足其分點に立つ。右

すべき乎。左すべき乎。右すべくんば右し、左

すべくんば左す、決する能はずんば躊躇す。凡

て此等の行爲は極めて明白なり。

然るに天地人生の意義を思ふ時に於て、人の

心も奇怪なるかな、光明か暗黒か、其一を選

ぶべくして選ばず、躊躇し苦悶すべくして然

らず、平然として談笑論議す。

懸崖の上を歩む時、深淵眼下に蒼たり、路帯

よりも細し、心期せずして戰く、足自ら慄

ふ。光と暗とを界する危道に立ちて我等が心

の平然たるは何故ぞ。

要するに吾等の心は光明と暗黒とを選ぶべき必然の地位に立たざるなり。習慣と傳説の底に住みて日よりも動物的生命を驅りつゝ

あるのみ。斯くて尚ほ善といひ惡といひ神とい

ふも終に空しき言説ごんのみ。

所謂る宗教を説き信仰し叫ぶ者此類ならぬ

は然らざるなり。我等が十字架の苦を説く前に、

曠野の苦悶を解せざる可からず。基督は十字架

に依つて辱しされど曠野の苦悶ありて基督ありしなり。

吾等は先づ正直に我等が心の今の立場を

明めざる可からず。一求めよ、然らば與へられ

ん。」果して然らば先づ求めよ、されど求むるに

先立つて求むるの心を求めざる可からず。」

十五

武雄と共に淨瑠璃の先生を訪ふ。先生の名

は虎三。三十に近き壯夫なり。赤顔の背高き

男。

丘を越えて行けば藪の小蔭に茅屋あり、冬の

夜の闇を破りて障子に映る火影のゆらぐを見

る。裡に入れば土間に築きし障の下熾に燃え

て、其傍に蹲居りたるは虎三なり。我等の入

來るを見て起たんとせせず、手を火にかざした

るまゝ顔を向け、「此寒いのによくこそ。」

余は武雄が就いて學ぶところを聴き、更に虎

三のみが語る一段を聴きぬ。彼の肉聲の一高一低、嗚咽ぶが如きとき、忽ちさらりと音して

屋外に訪ふものあり。暫くして止みぬ。一室の中たゞ朗々の聲、痛哀の調を聞くのみ。

辭して戸外に出づれば、飛ぶが如き雲間より月現はれ、過ぎゆきし霞の跡白く狭き山路を隈れり。武雄は今夜學びしところを歌ひつゝゆく。

岡の頂に達す。見渡せば近郊の田園樹林、寒き月影に沈み、天外の清光霜を帯ぶ。二人は暫く立つて居たりしが、此時、言ひ難き哀感と共に我知らず落涙す。

『何が故に落涙したまふ』と武雄問ひぬ。

『この如き時、涙を禁じ能はざるもの余のみに非ず。たゞ夫れ月明の清きを哀むといはんか、あらず、君の歌ふを聞き、其聲の冴えて川彦に響くを聞き、山を見、林を見、仰いで千古の月明に對し、窮りなき大空を望むとき、人情と自然との幽なれど絶えざる約束を感じざるを得ず、これを以て泣くなり。』

君は曾て、旅して遠く笛の音を聞きしことありと言ひたまひぬ。余も亦たこれを聞きぬ、而して今夜に等しき哀感に打たれぬ。この如きは其他に數々余の経験せしところ。あゝ余が存在の不思議にまどひつゝも猶ほ僅に堪へ忍び得るは全く此哀感の故のみなり。時の狂風耳邊

を掠めて飛び、此生の泡沫の如く、人類の運命の途に果敢きを感じて銷魂する時も、僅に此哀感の力にて我が心は幽かながらも永遠の命の傍に觸れ得るなり。』

(九)

淺海謙輔の悪魔は、大概以上の如きものであつた。自分はこれを君子に示さうかとも思つたが、要するに無益のことと思ひ止つたのである。

君子は初め自分を愛して居たが、然しそれは所謂の従兄妹の戀で言ふに足りない。謙輔が來てから、君子の心は大に傾き、自分は確に二人の戀の成立べきを思つた。けれども謙輔は君子に取つて係り大きな謎語であつた。謙輔の言葉は決して甘つたるくなかつた。

其處へ現はれたのが尾間利雄である。利雄は熱心に君子を説き、神の愛を囁んで合せて聽した。得意の讚美歌を以て君子の心を動かした。そして二人は殆んど戀の底に沈まうと爲たのである。

淺海が去るや、自分は叔母を説いて君子を自分の友なる隣村の青年に嫁がしめた。君子は愛の自由を説いて、此結婚に反對した時、叔母

の驚愕は尋常でなかつたのである。何町の間に君子が斯る主張を公言するやうになつたのか、殆んど寢耳に水の感があつたらしい。けれども兎も角も君子は遂に自分の友の許に嫁いで了つた。そして間もなく尾間は轉任して我郷里を離れた。

君子には今、一人の兒が出來て、頗る平和に暮して居る。神の愛は忘れて了つたらしい。耶蘇教の耶の字も今はなくなつた。自分がをりをり淺海謙輔のことを話すと、彼の頃は面白かつたとのみ。

言ふことを忘れて居たが、謙輔の父母は謙輔が去つて後、半年日々に他に轉任したのである。それで謙輔は其後遂に一度も我山林に來ないのである。恐らく永遠に來ないだらう。尾間は相變らず神の愛を説いて居ることだらう。謙輔は今も「悪魔」を筆にしつゝあるや如何に。

(明治三十六年五月)

畫の悲み

畫を好かぬ子供は先づ少ないとして其中にも自分は子供の時、何よりも畫が好きであつた。(岡本某が語り出した。)

好きこそ物の上手とやらで、自分も他の學課の中畫では同級生の中自分に及ぶものがない。畫と數學となら、憚りながら誰でも來いなんて、自分も大に得意がつて居たのである。しかし得意といふことは多少競争を意味する。自分の畫の好きなことは全く天性といつても可からう、自分を獨で置けば畫ばかり書いて居たものだ。

獨で畫を書いて居るといへば至極温順しく聞えるが、其癖自分ほど腕白者は同級生の中にないばかりか、校長が持て餘して數々退校を以て嚇したのである。全校第一といふことが分る。

全校第一腕白でも數學でも。しかるに天性好きな畫では全校第一の名譽を志村といふ少年に奪はれて居た。この少年は數學は勿論、其他の學力も全校生徒中、第二流以下であるが、畫の天才に至つては全く並ぶものがないので、僅

に鼻を摩さうかとも言はれる者は自分一人、其他は悉く志村の天才を崇め奉つて居るばかりであつた。所が自分は志村を崇拜しない、今に見るといふ意氣込で頻りと勵んで居た。

元來志村は自分よりか歳も兄、級も一年上であつたが、自分は學力優等といふので自分の居る級と志村の居る級とを同時にやるべく校長から特別の處置をせられたので、自然志村は自分の競争者となつて居た。

然るに全校の人氣、校長教員を始め何百の生徒の人氣は、温順しい志村に傾いて居る。志村は色の白い柔和な女にして見たいやうな少年、自分は美少年ではあつたが、亂暴で傲慢、喧嘩好きの少年、おまけに何時も級の一番を占めて居て、試験の時は必らず最優等の成績を得る處から、教員は自分の高慢が癢に觸り、生徒も自分の壓制が癢に觸り、自分にはどうしても人氣が薄い。そこで衆人の心持は、せめて畫でなりと志村を第一として、岡本の鼻柱を挫いてやれといふ積であつた。自分はよく此消息を

解して居た。そして心中ひそかに不平でならぬのは、志村の畫心すしも能く出来て居ない時でも校長をはじめ衆人がこれを讚賞し、自分の畫は確かに上出来であつても、さまで賞めて呉れ手のないことである。少年ながらも自分は人氣といふものを悪んで居た。

或日學校で生徒の製作物、展覽會が開かれた。其出品は主に習字、圖書、女子は仕立物等で、生徒の父兄姉妹は朝からぞろ／＼と押かける。取りどりの評判、製作物を出した生徒は氣が氣でない、皆なそは／＼して展覽室を出たり入つたりして居る。自分も此展覽會に出品する積りで畫紙一枚に大きく馬の頭を書いた。馬の顔を斜に見た處で、無論少年の手に餘る畫題であるのを、自分は此一擧に出つて是非志村に打克たらといふ意氣込だから一生懸命、學校から宅に歸ると一室に籠つて畫く、手本を本にして生意氣にも實物の寫生を試み、幸ひ自分の宅から一丁ばかり離れた桑園の中に借馬屋があるので、幾度となく其處の厩に通つた。輪郭といひ、陰影と云ひ、運筆といひ、自分は確にこれまで自分の畫いたものは勿論、志村が畫いたものゝ中でこれに比ぶべき出来はないと自信して、これならば必ず志村に勝つ、い

かに不公平な教員や生徒でも、今更こそは自分の實力に壓倒される、だらうと、大勝利を豫期して出品した。

出品の製作は皆んな自宅で畫くのだが、何人も誰が何を畫くのか知らない、又互に秘密にして居た。殊に志村と自分は互の畫題を最も秘密にして知らさないやうにして居た。であるから自分は馬を書きながらも、志村は何を畫いて居るかといふ問を常に懐いて居たのである。

さて展覽會の當日、恐らく全校數百の生徒中尤も胸を轟かして、展覽室に入つた者は自分であらう。圖畫室は既に生徒及び父兄姉妹で充滿になつて居る。そして二枚の大畫(今日の所謂大作)が並べて掲げてある前は最も見物人が集つて居る。二枚の大畫は言はずとも志村の作と自分の作。

一見自分は先づ荒齡を抜かれてしまつた。志村の畫題はコロンブスの肖像ならんとは！ 兩もチヨークで畫いてある。元來學校では鉛筆畫ばかりで、チヨーク畫は教へない。自分もチヨークで畫くなど思ひもつかんことであるから畫の善悪は兎も角、先づ此一事で自分は驚いてしまつた。その上ならん馬の頭と鬃髯面を襍ふ堂々たるコロンブスの肖像とは、一見まるで

比べ者にならんのである。且つ鉛筆の色はどんなに巧みに畫いても到底チヨークの色には及ばない。畫題といひ色彩といひ、自分のは要するに少年が畫いた畫、志村のは本物である。技倆の巧拙は問ふ處でない、掲げて以て衆人の展覽に供すべき製作としては、いかに我慢強い自分も自分の方が佳いとは言へなかつた。さなきだに志村崇拜の連中は、これを見て歡呼して居る。「馬も佳いがコロンブスは如何だ!」などいふ聲が彼處でも此處でもする。

自分は學校の門を走り出た。そして家には歸らず、直ぐ田圃へ出た。止めようと思つても涙が止まらない。口惜しいやう情ないやう、前後夢中で川の岸まで走つて、川原の草の中に打倒れてしまつた。

足をばた／＼やつて大聲を上げて泣いて、それで飽き足らず起上つて其處の石を拾ひ、四方八方に投げ附けて居た。

かう暴れて居るうちにも自分は、彼奴何時の間にかチヨーク畫を習つたらう、何人が彼奴に教へたらうと其ればかり思ひ續けた。

泣いたのと暴れたので幾十か調がすくと共に次第に萎れて来たので、いつか其處に臥してまひ、自分は堂々たる大空を見上げて居ると、川

瀬の音が涼々として聞える。若草を踏んで来る風が、得ならぬ春の香を運んで面を擦める。佳い心持になつて、自分は暫時ちつとして居たが、突然、さうだ、自分もチヨークで畫いて見よう。さうだといふ一念に打たれたので、其儘飛び起き急いで宅に歸り、父の首を得て、直ぐチヨークを買ひ整へ、畫板を掲げて直ぐ又外に飛び出した。

この時まで自分はチヨークを持つたことが無い。どういふ風に畫くものやら全然不案内であつたがチヨークで畫いた畫を見たことは度々あり、たゞこれまで自分で畫かないのは到底未だ自分でもの力に及ばぬものとあきらめて居たからなので、志村があつた位お畫けるなら、自分も幾分か出来るだらうと思つたのである。

再び先の川邊へ出た。そして先づ自分の思ひついた畫題は水車、この水車は其以前鉛筆で畫いたことがあるので、チヨークの手始めに今一度これを寫生してやらうと、堤を這つて上流の方へと、足を向けた。

水車は川向にあつて其背めかしい處、木立の繁みに半ば被はれて居る。萬萬が這ひ纏うて居る土合、少年心にも面白い畫題と心得て居たのである。これを對岸から寫すので、自分

は堤を下りて川原の草原に出ると、今まで川楊の蔭で見えなかつたが、一人の少年が草の中に坐つて頻りに水車を寫生して居るのを見つけた。自分と少年とは四五十間隔たつて居たが、自分は一見して志村であることを知つた。彼は一心になつて居るので、自分の近づいたのに氣もつかぬらしかつた。

「おや、彼奴が来て居る、どうして彼奴は自分の先へ」と廻はるだらう、忌々しい奴だと、大に癢に觸つたが、さりとて引返すのは猶ほ嫌だし、如何して呉れようと、其儘突立つて、志村の方を見て居た。

彼は熱心に書いて居る、草の上に腰から上が出て、其立てた膝に畫板が寄掛つてある。そして川楊の影が後から彼の全身を被ひ、たゞ其白い顔の邊から肩先へかけて楊を洩れた薄い光が穩かに落ちて居る。これは面白い、彼奴を寫してやらうと、自分は其儘其處に腰を下して、志村其人の寫生に取りかゝつた。それでも感心なことには、畫板に向ふと最早志村もいまくしい奴など思ふ心は消えて畫く方に全く心を奪られてしまつた。

彼は頭を上げては水車を見、又畫板に向ふ、そして折り／＼左も愉快らしい微笑を頬に浮

べて居た。彼が微笑する毎に、自分も我知らず微笑せざるを得なかつた。

さうする中に、志村は突然立ち上つて、其拍子に自分の方を向いた。そして何とも言ひ難き柔和な顔をして、につこりと笑つた。自分も思はず笑つた。

「君は何を畫いて居るのだ」と聞くから、

「君を寫生して居るのだ。」

「僕は最早水車を畫いてしまつたよ。」

「さうか、僕は未だ出来ないのだ。」

「さうか」と言つて志村は其儘再び腰を下し、もとの姿勢になつて、

「畫き給へ、僕は其間にこれを直すから。」

自分は畫き初めたが、畫いて居るうち、彼を忌々しいと思つた心は全く消えてしまひ、却つて彼が可愛くなつて來た。其うちに畫き終つたので、

「出來た、出來た！」と叫ぶと、志村は自分の傍に來り、

「おや、君はチョークで畫いたね。」

「初めてだから全然畫にならん、君はチョーク畫を誰に習つた。」

「そら先達東京から歸つて來た奥野さんに習つた、然し未だ習ひたてだから何にも畫けな

い。」

「コロンブスは佳く出來て居たね、僕は驚いちゃつた。」

それから二人は連立つて學校へ行つた。此以後自分と志村は全く仲が善くなり、自分は心から志村の天才に服し、志村もまた元來が温順しい少年であるから、自分も又無き朋友として親しんで呉れた。二人で畫板を携へ野山を寫生して歩いたことも幾度か知れない。

間もなく自分も志村も中學校に入ることとなり、故郷の村落を離れて、縣の中央なる某町に寄留することとなつた。中學校に入つても二人は畫を描くことを何よりの楽しみにして、以前と同じく相作うて寫生に出掛けて居た。

此某町から我村落まで七里、若し車道をゆけば十三里の大迂迴になるので我々は中學校の寄宿舎から村落に歸る時、決して車に乗らず、夏と冬と定期休業毎に必ず、此七里の途を草鞋がけで歩いたものである。

七里の途はたゞ山ばかり、坂あり、谷あり、溪流あり、淵あり、溝あり、村落あり、兒童あり、林あり、森あり、寄宿舎の門を朝早く出て日の暮に家に着くまでの間、自分は此等の形、色、光、趣きを如何いふ風に畫いたら、自分の

心を夢のやうに鎖して居る謎を解くことが出来るかと、それのみに心を奪られて歩いた。志村も同じ心、後になり先になり、二人で歩いて居ると、時々は路傍に腰を下して鉛筆の寫生を試み、彼が起たずば我も起たず、我筆をやめずんば彼も止めないと云ふ風で、思はず時が経ち、驚いて、二人とも、次の一里を駢足で飛んだこともあつた。

爾來數年、志村は故ありて中學校を退いて村落に歸り、自分は國を去つて東京に遊學することとなり、いつしか二人の間には音信もなくなつて、忽ち又四五年経つてしまつた。東京に出でから、自分は畫を思ひつゝも畫を自ら畫かなくなり、たゞ都會の大家の佳作を見て、僅に自分の畫心を満足さして居たのである。

處が自分の二十の時であつた、久しぶりで故郷の村落に歸つた。宅の物置に曾て自分が持ちあつた畫板が有つたのを見つけ、同時に志村のことを思ひだしたので、早速人に聞いて見ると、驚くまいことか彼は十七の歳病死したとのことである。

自分は久しぶりで畫板と鉛筆とを提げて家を出た。故郷の風景は舊の通りである、然し自分は最早以前の少年ではない、自分はたゞ幾歳か

の年を昏したばかりでなく、驚か不悟か、人生の問題になやまされ生死の問題に深入りし、等しく自然に對しても以前の心とは全く趣を變へて居たのである。言ひ漸き暗愁は暫時も自分を安めない。

時は夏の最中、自分はたゞ畫板を提けたといふばかり、何を畫いて見る氣にもならん、獨りばら／＼と野末に出た。曾て志村と共に能く寫生に出た野末に。

閑にも歡びあり、光にも慰みあり、麥藁帽の帽を傾けて、彼方の丘、此方の村を望めば、まじ／＼と照る日に輝いて眩きばかりの景色、自分は思はず泣いた。

(明治三十五年八月)

空知川の岸邊

(一)

余が札幌に滞在したのは五日間である、僅に五日間ではあるが、余は此間に北海道を愛するの情を幾倍したのである。

我國本土の中でも中國の如き、人口稠密の地に成長して山をも野をも人間の力で平げ盡したる光景を見慣れたる余にありては、東北の原野すら既に我自然に歸依したるの情を動かしたるに、北海道を見るに及びて、如何で心躍らざらん、札幌は北海道の東京でありながら、満目の光景は殆んど余を驚し去つたのである。

札幌を出發して單身空知川の沿岸に向つたのは、九月二十五日の朝で、東京ならば猶ほ残暑の候でありながら、余が此時の服装は冬着の洋服なりしを思はゞ、此地の秋既に老いて木枯の冬の間に近づて居ることが知れるであらう。

目的は空知川の沿岸を調査しつゝある道廳の官吏に會つて土地の選定を相談することである。

つゝ、然るに余は全く地理に暗いのである。且つ道廳の官吏は果して沿岸何れの邊に屯して居るか、札幌の知人何人も知らないのである、心細くも余は空知太を指して汽車に搭じた。

石狩の野は雲低く迷ひて車窓より眺むれば野にも山にも恐ろしき自然の力あふれ、此處に愛なく情なく、見るとして荒涼、寂寞、冷厳にして且つ壯大なる光景は、恰も人間の無力と儂さを冷笑ふが如くに見えた。

蒼白なる顔を外套の襟に埋めて車窓の一隅に黙然と坐して居る一青年を同室の人々は何と見たらう。人々の話柄は作物である、山林である、土地である、此無限の富源より如何にして黄金を掘み出すべきかである。彼等の或者は鐵話の酒を傾けて高誦し、或者は煙草をくゆらして談笑して居る。そして彼等の多くは車中で初めて遇つたのである。そして一青年は彼等の仲間に加はずたゞ一人其孤獨を守つて、獨り其空想に沈んで居るのである。彼は如何にして社會に住むべきかといふことは全然其思考の間

題をしたことがない、彼はたゞ何時も何時も如何にして此天地間に此生を託すべきかといふことをのみ思ひ悩んで居た。であるから彼には同車の人々を見ること殆んど他界の者を見るが如く、彼と人々との間には越中可からざる深谷の横はることを感ぜざるを得なかつたので、今しも汽車が同じ列車に人々及び被を乗せて石狩の野を突過してゆくことは、恰度彼の一生のそれと同じやうに思はれたのである。あゝ孤獨よ！彼は自ら求めて社會の外を歩みながら、衷心實に孤獨の感に堪へなかつた。

若し夫れ天高く澄みて秋晴拭ふが如き日であつたならば、余が鬱屈も大にくつろぎを得たらうけれど、雲は益々低く重れ林は霧に包まれ、何處を見ても光一閃だもないので、余は殆ど堪ふべからざる憂愁に沈んだのである。

汽車の歌志内の炭山に分るゝ、某停車場に着くや、車中の大半は其處で乗換へたので、残るは余の外に二人あるのみ。原始時代そのまゝで幾千年人の足跡をとどめざる大森林を穿つて列車は一直線に走るのである。灰色の霧の一團又一團、忽ち現はれ忽ち消え、或は命あるものゝ如く黙々として浮動して居る。

何處までお出でですかと突然一人の男が余

に聲をかけた。年輩四十幾干、骨格の逞しい、頭髪の長生た、四角な顔、鋭い眼、大なる鼻、一見一癖あるべき人物で、其風俗は官吏に非ず、職人にあらず、百姓にあらず、商人にあらず、實に北海道にして始めて見るべき種類の者らしい、則ち何れの未開地にも必ず先づ最も跋扈する山師らしい。

「空知太まで行く積りでです。」

「道廳の御用で？」彼は余を北海道廳の小役人と見たのである。

「イヤ僕は土地を選定に出掛けるのです。」

「ハハア。空知太は何處等を御選定か知らんが、最早目星のところは無いやうですよ。」

「如何でせう、空知太から空知川の沿岸に出られるでせうか。」

「それは出られませうとも、然し空知川の沿岸の何處等ですか、其が判然しないといふ……」

「和歌山縣の移民團體が居る處で、道廳の官吏が二人出張して居る、其處へ行くのですがね、兎も角も空知太まで行つて聞いて見る積りで居るのです。」

「さうですか、それでは空知太にお出になつたら三浦屋といふ旅人宿へ上つて御覽なさい、其處の主人がさういふことに明らう御座いますか

ら聞いて御覽なつたら可うがす、どうも未だ道路が開けないので、一寸其處までの處でも大變大廻りを爲なければならんやうなことが有つて慣れないものには困ることが多うがすテ、それより彼は、開墾の困難なことや、土地に由つて困難の非常に相違することや、交通不便の爲めに折角の收穫も容易に市場に持出すことが出来ぬことや、小作人を使ふ方法などに就いて色々と言ひ出した。其等の事は余も札幌の諸友から聞いては居たが、彼の語るがまゝに受けて唯だ其好意を謝するのみであつた。間もなく汽車は蕭條たる一驛に着いて運搬を止めたので余も下りると、此列車より出た客は總體で二十人位に過ぎざるを見た、汽車は此處より引返すのである。

たゞ見る此一小驛は森林に圍まれて居る一の孤島である。停車場に屬する處の二三の家屋の外人間に縁ある者は何も無い。長く響いた汽笛が森林に反響して賑々として遠く消え去せた時、寂然として言ふ可からざる静けさに此孤島は還つた。

三輛の乗合馬車が待つて居る。人々は黙々としてこれに乗り移つた。余も先の同車の男と共に其一に乗つた。

北海道馬の驟馬に等しきが二頭、逞しき若者が一人、六人の客を乗せて何處へともなく走り初めた。余は何處へともなくといふの心持が爲たのである。實に我が行先は何處ぞ、自ら問うて自ら答へることが出来なかつたのである。

三輛の馬車は相附する一町ばかり、余の馬車は殿に居たので、前に進む馬車の一高一低、四角多き道を走つて行く様子が能く見える。霧は林を掠めて飛び、道を横つて又た林に入り、眞紅に染つた木の葉は枝を離れて二片三片馬車を追うて舞ふ。御者は一鞭強く加へて、

「最早降るぞ！」と叫んだ。

「三浦屋の前で止めてお呉れ」と先の男は叫んで余を顧みた。余は日禮して其好意を謝した。車中何人も一語を發しないで、皆な黙然顔をして物思に沈んで居る。御者は今一度強く鞭を加へて喇叭を吹き立てたので、軀は小なれども強力なる北海の健兒は大駈に駆けだした。

林がやゝ開けて殖民の小屋が一軒二軒と現れて来たかと思ふと、突然平野に出た。幅廣き道路の兩側に商家らしきが飛びくんに並んで居る様は、新開地の市街たるを欺かない。馬車は喇叭の音勇ましく此間を駆け抜けた。

三浦屋に着くや早速主人を呼んで、空知川の沿岸にゆくべき方法を問ひ、詳しく目的を話して見た。處が主人は寧ろ引返して歌志内に廻はり、歌志内より山越えした方が便利だらうといふ。

「次の汽車なら日の暮までには歌志内に着きますから今夜は歌志内で一泊なされて、明日能くお聞合せになつて其上でお出かけになつたが可うがす。歌志内なら此處とは違つて道廳の方も居ますから、其井田さんとかいふ方の今居る處も多分解るでせう。」

斯ういはれて見ると成程さうである。されども余は空知川の岸に沿うて進まば、余が會はんとする道廳の官吏井田某の居所を知るに最も便ならんと信じて、空知川まで来たのである。然るに空知太より空知川の岸をつたふことは案内者なくては出来ぬとのこと、而も其道らしき道の開け居るには在らずとの事を、三浦屋の主人より初めて聞いたのである。其處で余は主人の注意に従ひ、歌志内に廻はることに定めて、次の汽車まで二時以上を、三浦屋の二階で獨りポツ然と待つことゝなつた。

見渡せば前は平野である。伐り残された大木が彼處此處に衡立つて居る。風當りの強きゆゑか、何れも丸裸體になつて、黄色に染つた葉の僅少ばかりが枝にしがみ着いて居るばかり、それすら見て居る内にバラ／＼と散つて居る。風の加はると共に雨が降つて来た。遠方は雨雲に閉ざされて能くも見え分かず、最近に立つて居る栢の高さ三丈ばかりなるが、其太い葉を雨に打たれ風に捲かれて、けうとき音を立てゝ居る。道を通る者は一人もない。

かゝる時、かゝる場所に、一人の知人なく、一人の話對手なく、旅人宿の窓に倚つて降りしきる秋の雨を眺めることは決して楽しいものではない。余は端なく東京の父母や弟や親しき友を想ひ起して、今更の如く、今日まで我を圍みし人情の如何に温かであつたかを感じたのである。

男子志を立て理想を追うて、今や森林の中に自由の天地を求めんと願ふ時、決して女々しくしてはならぬと我とわが心を引立てるやうにしたが、要するに理想は冷かにして人情は温かく、自然は冷厳にして親しみ難く、人寰は懐しくして巢を作るに適して居る。余は悶々として二時間を過した。其中に雨は

小止になつたと思ふと、喇叭の音が遠くに響く。首を出して見ると斜に絲の如く降る雨を衝いて一輛の馬車が馳せて来る。余は此馬車に乗込んで再び先の停車場へと、三浦屋を立つた。

汽車の乗客は數ふるばかり。余の入つた室は余一人であつた。人獨り居るは好まじきことに非ず、余は他の室に乗換へんかとも思つたが、思ひ止まつて雨と霧との爲めに薄暗くなつて居る室の片隅に身を寄せて、暮近くなつた空の雲の去來や輪をなして回轉する林の立木を茫然と眺めて居た。斯る時、人は往々無念無想の裡に入るものである。利害の念もなければ、方行末の想もなく、恩愛の情もなく憎惡の惱もなく、失望もなく希望もなく、たゞ空然として眼を開き耳を聞いて居る。旅をして心身共に疲れ果て、猶ほ其身は車上に捲られ、縁もゆかりもない地方を行く時は、往々にして此の如き心境に陥るものである。かゝる時、はからず目に入つた光景は深く腦底に彫り込まれて多年之を忘れないものである。余が今しも車窓より眺むる處の雲の去來や、櫛の林や恰度それであつた。

汽車の歌志内の溪谷に着いた時は、雨全く止

みて日は將に暮れんとする時で、余は宿るべき家のあてもなく停車場を出ると、流行に幾千の鐵夫を養ひ、幾百の人家の狭き溪に簇集して居る場所だけありて、宿引なるものが二三人待ち受けて居た。其一人に導かれ、燈多く燈暗き町を歩みて二階建の旅人宿に入り、妻女の田舎なまりを其儘、愛嬌も心かららしく迎へられた時は、余も思はず微笑したのである。

夜食を濟すと、呼ばずして主人は余の室に来てくれたので、直に目的を語り彼より出來るだけの方便を求めた。主人は余の語る處をにこついて聞いて居たが、

「一寸お待ち下さい、少し心當りがありますから」と言ひ捨て、室を去つた。暫時して立還り、

「だから縁といふは奇態なものです。貴所最早御安心なさい、すつかり分りました」と我身のことの如く喜んで座に着いた。

「わかりましたか。」

「わかりましたとも、大わかり。四日前から私の家にお泊りのお客様があります。この方は御料地の係の方で先達から山林を見分してお廻りになつたのですが、ソラ野宿の方が多からせう、だから到頭身體を傷して今手前共で保養

して居らつしやるのです。篠原さんといふ方ですがね。何でも宅へ見える前の日は空知川の方に居らつしやつたといふことを聞きましたから、若しやと思つて唯今何つて見ました處が、解りました。ウン道廳の出張員なら山を越すと直ぐ下の小屋に居たと仰しやるのです。御安心なさい、此處から一里位なもので譯は有りません、朝行けばお書前には歸つて來られますサ。」

「どうも色々難有う、それで安心しました。然し今も其小屋に居て呉れ、ば可いが。始終居所が變るので其れで道廳でも知れなかつたのだから。」

「大丈、夫居ますよ、若し變つて居たら先に居た小屋の者に聞けば可うがす、遠くに移るわけは有りません。」

「兎も角も明朝早く出掛けますから案内を一人頼んで呉れませんか。」

「さうですな、山道で岐路が多いから欠張り案内が入るでせう、宅の俵を連れて行らつしやい。十四の小僧ですが、空知太までなら存じて居ます。案内位出來ませうよ。」

と飽く迄親切に言つて呉れるので、余は實に謝する處を知らなかつた。成程縁は奇態なものである、余にして若し他の宿屋に泊つたなら決してこれ程の便宜と親切とは得ることが出來なかつたらう。

「主人は何處までも快活な男で、放膽で、兩も眼中人なきの様子がある。彼の親切、見ず識らずの余にまで惜氣もなく投げ出す親切は、彼の人物の自然であるらしい。世界を家となし到處に其故郷を見出す程の人は、到る處の山川、接する處の人が則ち朋友である。であるから人の困厄を見れば、其人が何人であらうと、憎悪するの因縁さへ無くば、即ち同情を表する、十年の交友と一般なのである。余は主人の口より其略傳を聞くに及んで彼の人物の余の推測に近きを知つた。

彼は其生れ故郷に於て相當の財産を持つて居た處が、彼の弟二人は彼の相続したる財産を羨むこと甚だしく、遂には骨肉の争まで起る程に及んだ。然るに彼の父なる七十の老翁も亦た少弟二人を愛して、やゝもすれば兄に追つて其財産を分配せしめようとする。若しこれを三等分すれば、三人とも一家を立つることが出來ないのである。

「だから私は移へたのです、これつばかしの物を兄弟して争ふなんて餘り量見が小さい。

宜しいお前達に與つて了はう。唯五分のただけ呉れる、乃公は之を以て北海道に飛ぶからつて。其處で小僧が九の時でした、親子三人でポイと此方へやつて來たのです。イヤ人間といふものは何處にでも住まば住まれるものですよ。ハツハツハツと笑つて、

『處が妙でさう、弟の奴等、今では私が分配てやつた物を大概無くしてしまつて、それで居て矢張り小ぼけな村を此上もない土地のやうに思つて、私が何處も北海道へ來て見ると手紙ですゝめても出て來得ないんでサ。』

余は此男の爲す處を見、其語る處を聞いて、大に得る處があつたのである。よしや此一小旅店の主人は、余が思ふ所の人物と同一でないにせよ、よしや余が思ふ所の人物は、此主人より進して更に余自身の空想を加へて以て化成したる者にせよ、彼はよく自由に、よく獨立に、社會に住んで社會に壓せられず、無窮の天地に介立して安んずる處あり、海をも山をも原野をも將た市街をも、我物顔に横行闊歩して少しも屈託せず、天涯地角到る處に花の香しきを嗅ぎ人情の温かきに住む、げに男はすべからず此の如くして男といふべきではあるまいか。

斯く感ずると共に余の胸は大に開けて、札幌を出で、より歌志内に着くまで、雲と共に結ばれ、雨と共にしをれて居た、心は端なくも天の一方深碧にして窮りなきを望んだやうな氣がして來た。

夜の十時頃散歩に出て見ると、雲の流急にして絶間々々には星が見える。暗い町を過つて人家を離れると、溪を隔て、屏風の如く黒く前面に横はる栂山の上に月現はれ、山を掠めて飛ぶ浮雲は折り／＼其前面を拭うて居る。空氣は重く濕めり、空には風あれども地は肅然として聲なく、たゞ溪流の音のかすかに聞ゆるばかり。

余は一方は山、一方は岸の爪先上りの道を進みて小高き廣場に出たかと思ふと、突然耳に入つたものは絃歌の騒ぎである。
見れば山に沿うて長屋建の一棟あり、これに對して又一棟あり。絃歌は此長屋より起るのであつた。一棟は幾戸かに分れ、戸々皆な障子をとぎし、其障子には火影華やかに映り、三絃の亂れて狂ふ調子、放歌の激して叫ぶ聲、笑ふ聲は雜然として起つて居るのである。牛蒡屋に等しき此長屋は何ぞ知らん鑛夫どもが深山幽谷の一隅に求め得し歡樂境ならんとは。
流れて遊女となり、流れて鑛夫となり、買ふ

ものも賣るものも、我世夢ぞと狂歌亂舞するのである。余は進んで此長屋小路に入つた。
雨上の路はぬかるみ、水溜には火影うつる。家は瀧れて見しよりも更に衰れな建てさまにて、新聞地だけにたゞ軒先障子などの白木の夜目にも生々しく見ゆるばかり、床低く扉根低く、立てし障子は地より直に軒に至るかと思はれ、既に至みて隙間よりは釣ランプの燈など見ゆ。

肌腕の荒くれ男の影鬼の如く映れるあり、亂髮の酌婦の頭の夜叉の如く映るかと思へば、床も落つると思はるゝ音が爲て、ドツとばかり笑聲の起る家もあり。『飲めよ』『歌へよ』『殺すぞ』『撲るぞ』『吠笑、激語、惡罵、歡呼、叱咤、鬨ある小節の歌の文句の腸を斷つばかりなる、三絃の調子の嗚咽が如き、忽ちにして暴風、忽ちにして春雨、見來れば歡樂の中に殺氣をこめ、殺氣の中に血涙をふくむ。泣くは笑ふのか、笑ふのは泣くのか。怒は歌か歌は怒か、嗚呼儂き人生の流よ！ 數年前までは熊眠り狼住みし此溪間に流れ落ちて、こゝに瀧み、こゝに激し、こゝに沈み、月影冷やかにこれを照して居る。

余は通り過ぎて振り廻り、暫し佇立んで居ると、突然間近なる一軒の障子が開いて一人の

男がつと現はれた。

『や、月が出た!』と振上げた顔を見れば年頃二十六七、背高く肩廣く屈強の若者である。きよろ／＼四邊を見廻して居たが吻と酒氣を吐き、舌打して再び内によろめき込んだ。

(三)

宿の子のまめくしきが先に立ち、明くれば九月二十日朝の九時、愈々空知川の岸へと出發した。

陰晴定まなき天氣、薄き日影洩るゝかと思へば忽ち峰より林より霧起りて峰をも林をも路をも包んでしまふ。山路は思ひしより樂にて、余は宿の子と様々の物語しつゝ身も心も軽く歩んだ。

林は全く黄葉み、萬紅葉は眞社に染り、霧起る時は霞を隔て、花を見るが如く、日光直射する時は露を帯びたる葉毎に幾千萬の眞珠が玉を連ねて全山燃ゆるかと思はれた。宿の子

は空知川沿岸に於ける熊の話を爲し、續いて彼が子供心に聞き集めたる熊物語の幾種かを熱心に語った。坂を下りて熊笹の繁れる所に来ると彼は一寸立ちどまり、「聞えるだらう、川の音が」と耳を傾けた。「ソラ……聞えるだらう、

あれが空知川、もう直ぐ其處だ。」「見えさうなものだな。」「如何して見えるものか、森の中に流れて居るのだ。」

二人は、頭を没する熊笹の間を僅に通ふ帯ほどの徑を暫く行くと、一人の老人の百姓らしきに出遇つたので、余は道廳の出張員が居る小屋を訊ねた。

『此徑を三丁ばかり行くと幅の廣い新開の道路に出る、其右側の最初の小屋に居なさるだ』と言ひ捨て、老人は去つて了つた。歌志内を出發つてから此處までの間に人に

出遇つたのは此老人ばかりで、途中又小屋らしき物を見なかつたのである。余は此老人を見て空知川の沿岸の既に多少かの開墾者の入込んで居ることを事實の上知つた。

熊笹の徑を通りぬけると、果して思ひがけない大道が深林を穿つて一直線に作られてある。其幅は五間以上もあらうか。然も兩側に密茂して居る林は二丈を越え三丈に達する大木が多いのだ。此幅廣き大道も、堀割を通ずる鐵道線路のやうであつた。然し余は此道路を見て拓殖に熱心なる道廳の經營の、如何に困難多きかを知つたのである。

みれば此道路の最初の右側に、内地では見ることの出来ない異様な獨立小屋がある。小屋の左右及び背後は林を倒して、二三段歩の平地が開かれて居る。余は首尾よく此小屋で道廳の屬官、井田某及び他の一人に會ふことが出来た。

道廳課長の丁寧なる紹介は、彼等をして十分に親切に余が相談對手とならしめたのである。更に驚くべきは、彼等が余の名を聞いて、早く既に余を知つて居たことで、余の蕪雜なる文章も、何時しか北海道の思ひもかけぬ地に其讀者を得て居たことであつた。

二人は余の目的を聞き終りて後、空知川沿岸の地圖を披き其經驗多き鑑識を以て、彼處此地と、移民者の爲めに區劃せる一區一萬五千坪の地の中から六ヶ所ほど選定して呉れた。

事務は終り雜談に移つた。

小屋は三間に四間を出でず、屋根も周囲の壁も大木の皮を幅廣く剥ぎて組合したもので、板を用ひしは床のみ、床には筵を敷き、出入の口はこれ又樹皮を組み立てた一枚の板が一枚一枚の板を組んで戸となしたるが一枚板は一枚の板で、これ開墾者の集なり、家なり、いな城郭なり。一間に長方形の大きな爐が切つて、これを火鉢に籠に、烟草盆に、冬なら

ば煖爐に使用するのである。

「冬になつたら堪らんでせうね、こんな小屋に居ては。」

「だつて開墾者は皆なこんな小屋に住んで居るのですよ。どうです、棒が出来ますか」と井田は笑ひながら言つた。

「啓悟は爲て居ますが、イザとなつたら随分困るでせう。」

然し思つた程でもないものです。若し冬になつて如何しても幸棒が出来さうもなかつたら、貴所方のことだから札幌へ逃げて来れば可いです。どうせ冬籠は何處でも同じことだから。」

「ハツハツハツ、其なら初めから小作人任にして御自分は札幌に居る方が可からう。」

と他の屬官が言つた。

「さうですとも、さうですとも、冬になつて札幌に逃げて行くほどなら、當そ初めから東京に居て開墾した方が可いんです。何に僕は幸棒しますよ」と余は覺悟を見せた。井田は、「さうですな、先づ雪でも降つて来たら、此爐にドン／＼焚火をするんですな。薪木なら手ものだから、それで貴所方だからウンと書簡を仕込で置いて勉強なさるんですな。」

「雪が解ける時分には大學者になつて現はれるといふ趣向ですか」と余は思はず笑つた。

談して居ると、突然バラ／＼と音がして来たので余は外に出て見ると、日は薄く光り、雲は所に流れ、寂たる深林を越えて時雨が過ぎゆくのであつた。

余は宿の子を残して、一人此邊を散歩すべく小屋を出た。

げに怪しき道路よ。これ千年の深林を滅し、人力を以て自然に打克んが爲めに、殊更に無人の境を選んで作られたのである。見渡すかぎり、兩側の森林これを覆ふのみにて、一個の人影すらなく、一縷の輕煙すら起らず、一人の語すら聞えず、寂々寥々として横つて居る。

余は時雨の音の淋しさを知つて居る、然し未だ曾て、原始の大深林を忍びやかに過ぎゆく時雨ほど淋しさを感じたことはない。これ實に自然の幽寂なる私語である。深林の底に居て、此音を聞く者、何人か生物を冷笑する自然の無限の威力を感ぜざらん。怒濤、暴風、疾雷、閃電は自然の虚响である。彼の威力の最も人に迫るのは彼の最も静かなる時である。高遠なる芥子の、何の聲もなく唯だ黙して下界を瞰トす時、曾て人跡を語さざりし深林の奥深き處、一

片の木の葉の朽ちて風なきに落つる時、自然は欠伸して曰く、あゝ我、日も暮れんとす」と。而して人間の一千年は此刹那に飛びゆくのである。

余は雨後の林を見つゝ行くと、左側で林のやゝ薄くなつて居る處を見出した。下草を分けて進み、ふと顧みると、此處は何時しか深林の底に居たのである。とある大木の朽ちて倒れたるに腰をかけた。

林が暗くなつたかと思ふと、高い枝の上を時雨がサラ／＼と降つて来た。来たかと思ふと間もなく歇んで森として林は静まりかへつた。

余は暫くデツとして林の奥の暗くなつて居る處を見て居た。

社會が何處にある、人間の誇り顔に傳唱する「歴史」が何處にある、此場斯に於て、人はただ「生存」其者の自然の一呼吸の中に託されて居ることを感ずるばかりである。露國の詩人は曾て深林の中に坐して、死の影の我に迫まるを覺えたと言つたが、實にさうである。又た曰く、人類の最後の一人が北地球上より消滅する時、木の葉の一片も其爲にそよがざるなり」と。死の如く静なる、冷かなる、暗き、深き森林の中に坐して、此の如きの威迫を受けな

のは誰も無からう。余我を忘れて恐しき空想に沈んで居ると、

「旦那！旦那！」と呼ぶ聲が森の外でした。急いで出て見ると宿の子が立つて居る。

「最早御用が済んだら歸りませう。」

其處で二人は一先づ小屋に歸ると井田は、

「どうです、今夜は試験のために一晩此處に泊つて御覽になつては。」

* * *

余は遂に再び北海道の地を踏まないで今日に到つた。たとひ一家の事情は余の開墾の目的を中止せしめたにせよ、余は今も尙ほ空知川の沿岸を思ふと、あの冷厳なる自然が、余を牽きつけるやうに感ずるのである。

何故だらう？

非凡なる凡人

(上)

五六人の年若い者が集つて、互に友の上を噂し合つたことが有る。其時、一人が――

僕の子供の時から友に桂正作といふ男がある、今年二十四で今は横濱の或會社に技手として雇はれ専ら電気事業に従事して居るが、先づ此男ほど類の異つた人物はあるまいかと思はれる。

非凡人ではない。けれども凡人でもない、さりとて偏物でもなく、奇人でもない。非凡なる凡人といふが最も適評かと僕は思つて居る。

僕は知れば知るほど此男に感心せざるを得ないのである。感心すると言つた處で、秀吉とか、ナポレオンとか其他の天才に感心するのは異ふので、此種の人物は千百歳に一人も出で出ないかであるが、桂正作の如きは平凡なる社會が常に産出し得る人物である。又た平凡なる社會が常に要求する人物である。であるから桂のやうな人物が一人殖えればそれだ

け社會が幸福なのである。僕の桂に感心するのは此意味に於てである。又僕が桂をば非凡なる凡人と評するのも此故である。

僕等が未だ小學校に通つて居る時分であつた。或日、其日は日曜で僕は四五人の學校仲間と小松山へ出かけ、戦争の眞似を爲て、我こそ秀吉だとか義経だとか、十三四にもなりながら馬鹿げた腕白を働らいて大あばれに暴れ、遂に喉が渴いて來たので、山の直ぐ麓にある桂正作の家へ、裏山からドヤ／＼と駈下りて、案内も乞はず、いきなり井戸邊に集まつて我勝にと水を汲んで呑んだ。

すると二階の窓から正作が顔を出して此方を見て居る。僕はこれを見るや、「來ないか」と呼んだ。けれども平常にない眞面目くさつた顔つきをして頭を横に掉つた。腕白の方でも人並のことを爲てのける桂正作、不思議と出て來ないので、僕等も強ひては誘はず、其儘又た山に駈登つて了つた。騒ぎ疲れて衆人散々に我家へと歸り去り、僕

は一人柱のどに立寄つた。黙つて二階へ上つて見ると、正作は「テーブル」に向つて椅子に腰をかけて一心になつて、何か讀んで居る。

僕は先づ此「テーブル」と椅子のことから發明しようと思ふ。「テーブル」といふは如末な日本製の家具の下に積を置いただけのこと。けれども正作は眞面目で此工夫をしたので、學校の先生が日本流の机は衛生に悪いと言つた言葉を成程と感心して、直ぐこれだけのことを實行したのである。そして其後常に此椅子「テーブル」で彼は勉強して居たのである。其「テーブル」の上には教科書、他の書籍を丁寧に重ね、筆墨の類まで決して亂雑に置いてはない。で彼は日曜の好い天氣なるにも關はず、何の本か昨日もふらないで讀んで居るので、僕は其傍に行つて、「何を讀んで居るのだ」と言ひながら見ると洋綴の厚い本である。

「西國立志編だ」と答へて顔を上げ、僕を見た其の眼ざしは未だ夢の醒めない人のやうで、心は猶ほ書籍の中にあるらしい。

「面白いかね？」

「ウン、面白い。」

「日本外史と何方が面白い」と僕が問ふや、桂

は微笑を合んで、漸く我に復り、例もの元氣の可い聲で、

『それやア此の方が面白いよ。日本外史とは物が異ふ。昨夜僕は海田先生の處から借りて来てから讀みはじめたけれど面白うて止められない。僕は如何しても一冊買ふのだ』と言つて嬉しくつて堪らない風であつた。

其後桂は遂に西國立志編を一冊買ひ求めたが、其本といふは粗末至極な洋綴で、一度讀み了らない中に既にバラ／＼になりさうな代物ゆゑ、彼はこれを丈夫な麻糸で綴直した。

此時が僕も桂も數へ年の十四歳、桂は一度西國立志編の美味を知つて以後は、何度此書を讀んだか知れない、殆んど誦誦するほど熱讀したらしい、そして今日と雖も常にこれを座右に置いて居る。

げに桂正作は活きた西國立志編と言つてよからう、桂自身でもさう言つて居る。

『若し僕が西國立志編を讀まなかつたら如何であつたらう。僕の今日あるのは全く此書のお蔭だ』と。

けれども西國立志編(スマイルスの自助論)を讀んだものは、洋の東西を問はず幾百萬人あるか知れないが、桂正作のやうに、『余を作りし

者は此書なり』と明言し得る者は果して幾人あるだらう。

天が與へた才能からいふと桂は中位の人たるに過ぎない。學校に於ける成績も中等で、同級生の中、彼よりも優れた少年は幾千も居た。又た彼は可なりの腕白者で、僕等と一緒に随分荒れたものである。それで學校に於ても郷黨に在つても、特に人から注目せられる少年ではなかつた。

けれども天の與へた性質から言ふと、彼は率直で、單純で、そして何處かに壓ゆべからざる勇猛心を持つて居た。勇猛心といふよりか、敢の氣象と言つた方が可からう。則ち一轉すれば冒險心となり、再轉すれば山氣となるのである。現に彼の父は山氣のために失敗し、彼の兄は冒險の爲に死んだ。けれども正作は西國立志編のお蔭で、此氣象に訓練を加へ、堅實なる有爲の精神としたのである。

兎も角彼の父は尋常の人ではなかつた。やはり昔の武士で、維新の戦争にも一かどの功も立てたのである。體格は骨太な頑丈な作、其顔は眼ジリ長く切れ、鼻高く一見して堂々たる容貌、氣象も武人氣質で、容易に物に屈しない。であるから若し武人のまゝで押通したなら

ば、少なくとも藩閥の力で今日も人にも知られた將軍になつて居たかも知れない。が、彼は維新の戦争から歸ると直ぐ豊の一字に隠れて了つた。隠れたといふよりか出直したのである。そして一殖産といふ流行語にかぶれて遂に破産してしまつた。

桂家の屋敷は元來、町に在つたのを、家運の傾くと共に之を小松山の下に運んで建て直したので、其時も僕の父などは斯う言つて居た、あれほどの立派な屋敷を打壊さないで其まゝ人に譲り、其金で別に建てたら可からうと。けれども、桂正作の父の氣象は此一事でも解つて居る。小松山の麓に移つてこの方は、純粹の百姓になつて正作の父は働いて居るのを僕は屢々見た。

であるから正作が西國立志編を讀み初めた頃は、其家政は餘程困難であつたに違ない。けれども其の家庭には何時も多少の山氣が浮動して居たといふ證據には、正作が或日僕に向つて、它には田中鶴吉の手紙があると得意らしく語つたことがある。其理由は、桂の父が、當時世間の大評判であつた田中鶴吉の小笠原殖産事業にひどく感服して、わざ／＼書面を送つて田中に敬意を表した處、田中が又た直ぐ禮狀

を出して其が桂の父に届いたといふ一件。又或日正作は僕に向ひ、今から何ヶ月とかすると蛤を澤山御馳走するといふから、何故だと聞くと、父が蛤の繁殖事業を初め、種を取寄せ、濱に下したから遠からず、此間近は蛤が非常に採れるやうになると答へた。先づ此等の事で家庭の様子も想像することが出来るのである。

父の山氣を露骨に受けついで、正作の兄は十六の歳に家を飛び出し音信不通、行方知れずになつて了つた。布吐に行つたとも言ひ、南米に行つたとも噂させられたが、實際のことは誰も知らなかつた。

小學校を卒業するや、僕は縣下の中學校に入つて了ひ、暫時故郷を離れたが、正作は家政の都合で、さういふわけにゆかず、周旋する人があつて、某銀行に出ることになり、給料四圓か五圓かで、某町まで二里の道程を朝夕往復することになつた。

間もなく冬期休暇になり、僕は歸省の途に就いて故郷近く車で來ると、小さな坂がある、其麓で車を下り手荷物を車夫に託し、自分はステキ一本で坂を登りかけると、僕の五六間さきを行く少年がある。身に古ぼけたトンビを着

て、手に古ぼけた手提カバンを持つて、膝に坂を登りつゝある。其姿が如何も桂正作に似て居るので、

「桂君ぢやアないか」と聲を掛けた。後を振り向いて破顔一笑したのはまさしく正作。立ち止つて僕をまち、

「冬期休暇になつたのか。」

「どうだ君は未だ銀行に通つてるか。」

「ウン、通つてるけれども少しも面白くない。」

「どうしてや？」と僕は驚いて聞いた。

「どうしてと言ふ譯もないが、君なら三日と辛棒が出来ないだらうと思ふ。第一僕は銀行業からして僕の目的ぢやないのだから。」

二人は話しながら歩いた、車夫のみ先へやり。

「何が君の目的だ。」

「工業で身を立つる決心だ」と言つて正作は微笑し、僕は毎日此道を行つながら色々考へたが、發明に越す大事業はないと思ふ。」

ワットやステブソンやエヂソンは彼が理想の英雄である。そして西國立志編は彼の聖書である。

僕の黙言つて頷くのを見て、正作は更に言葉をつぎ、

「だから僕は春に東京へ出ようかと思つて居る。」

「東京へ？」と驚いて問ひ返した。

「さうさ東京へ。旅費は最早出来たが、彼鬼へ行つて三月ばかりを食へるだけの金を持つて居なければ困るだらうと思ふ。だから僕は父に頼んで來年の三月まで、給料は全部僕が貰ふことにした。だから四月早々は出立るだらうと思ふ。」

桂正作の計畫は總て此法である。彼は随分少年に有勝な空想を描くけれども、計畫を立て、これを実行する上に就いては少年の時から今日に至るまで、少しも怠らず、一定の順序を立て、一歩々々と着々實行して遂に目的通りに成就するのである。無論これは西國立志編の感化でも有らう、けれども一つには彼の性情が祖父に似て居るからだと思はれる。彼の祖父の非凡な人であつたことを今こゝで詳しく話すことは出来ないが、其を言へば眞書太閤記三百巻を訂すに十年計畫を立て、遂に見事寫し終つたことがある。僕も桂の家でこれを實見したが、今でも其氣根の大いなるに驚いて居る。正作は確に此祖父の血を受けたに違ひない。若くは此祖父の感化を受けただらうと思

ふ。
途上種々の話で吾々二人は夕暮に歸宅し、其後僕は毎日のやうに桂に遇つて互に將來の大望を語り合つた。冬期休暇が終り愈々僕は中學校の寄宿舎に歸るべく故郷を出立する前の晩、正作が訪ねて来た。そして言ふには今度會ふのは東京だらう。三、四年は歸郷しない積りだからと、僕も其積りで正作に離別を告げた。

明治二十七年の春、桂は計畫通りに上京し、東京から二度手紙を寄したけれど、何時も無事を知らずばかりで別に着京後の様子を告げない。又た故郷の者も誰も如何して正作が暮して居るか知らない、父母すら知らない、唯だ何人も疑はないことが一つあつた、曰く桂正作は何等かの計畫を立て、其目的に向つて着着歩を進めて居るだらうといふ事實である。

僕は三十年の冬上京した。そして宿所が定まるや、早速築地何明何番地、何の某方といふ桂の住所を訪ねた。此時二人は既に十九歳。

(下)

午後三時頃であつた。僕は築地何町を隅から隅まで探して、漸くのこと桂の住家を探し當てた。容易に分らぬも道理、某方といふ其

某は車屋の主人ならんとは。兎ある横町の貧しげな家ばかり並んで居る中に挾つて九尺間口の二階屋、其二階が、「活ける西國立志編」君の巢である。

「桂君といふ人が貴様の處に居ますか。」
「へい居らつしやいます。あの書生さんでせう」との山の神の挨拶。聲を聞きつけてミシミシと二階を下りて来て「ヤア」と現はれたのが、一別以來三年會はなんだ桂正作である。

足も立てられないやうな汚ない疊を二三枚歩いて、狭い急な階子段を登り、通された座敷は六畳敷、煤けた天井低く頭を屈し、疊も黒く壁も黒い。

けれども黒くないものがある。それは書籍。桂ほど書籍を大切にすることは少ない。彼は如何なる書物でも決して机の上や、座敷の真中に放擲するやうなことなどは爲ない。斯う言ふと桂は書籍ばかりを大切にしているやうなれど必ずしもさうでない。彼は身の周圍のもの總てを大事にする。

見ると机も可なり立派。書籍箱も左まで黒くない。彼はその必需品を粗略にするほど、東洋豪傑風の美點も悪癖も受けて居ない。今の流行語で言ふと、彼は西國立志編の感化を受けた

だけに頗るハイカラ的である。今にして思ふ、僕はハイカラの精神の我が桂正作を支配したことを皇天に感謝する。

机の上を見ると、教科書用の書籍その他が、例の如く整然として重ねてある。其他周圍の物總てが皆な其處を得て、キチンとして居る。室の下部にして黒く暗澹たるを愛ふる勿れ、桂正作は其主義と、其性情に依つて、總て此等の黒くして暗澹たるものをば化して純潔にして高貴、感嘆すべく畏敬すべきものと爲して居るのである。

彼は例の如く最も快活に胸臆を開いて語つた。僕の問がまに「上京後の彼の生活をば、恥ぢもせず、誇りもせず、平易に、率直に、詳しく話して聞かした。

彼ほど虚榮心の少ない男は珍らしい。其の境遇に處し、其の信ずる處を行つて、それで満足し安心しそして軌勵して居る。彼は決して自分と他人とを比較しない。自分は自分だけのことを爲して、運命に安んじて、そして運命を開拓しつゝ進んで行く。

一別以來、正作の爲したことを聞くと實に此通りである。僕は聞いて居る中にも益々彼を尊敬する念を禁じ得なかつた。

（下）

彼は計畫通り三ヶ月の糧を蓄へて上京したけれども、坐してこれを食ふ男ではなかつた。

何が面白い職を得たいものと、先づ東京中を足に任して遍巡り歩いた。そして思ひついたのは新聞賣と砂書き。九段の公園で砂書きの爺を見て、彼は直ちにこれと物語り、事情を明して弟子人を頼み、それより二三日の間稽古をして、間もなく大道の傍に坐り、一錢、五厘、時には二錢を投げて貰つて出鱈目を書き、幾錢かづゝの収入を得た。

或日、彼は客のなき儘に、自分で勝手なことを書いては消し、ワット、ステアンソン、などいふ名を書いて居ると、八歳ばかりの男兒を連れて衣装の善い婦人が前に立つた。「ワット」と子供が讀んで、「母上、ワットとは何のこと」と聞いた。桂は顔を上げて子供に解り易いやうに此大發明家のことを話して聞かし、「坊様も大きくなつたら斯んな家いひとおなりなさいよ」と言つた。さうすると婦人が失禮ですけれど」と言ひつゝ、貳拾錢銀貨を手渡し、立ち去つた。

「僕は其銀貨を費はないで未だ持つて居る」と正作は言つて罪のない微笑をもらした。

彼は斯く労働して居る間、其宿所は木賃宿、は神田の夜學校に行つて、専ら數學を學んで居たのである。

日清の間が切迫して來るや、彼は直ぐと新聞賣になり、號外で意外の金を儲けた。斯くて其歳も暮れ、二十八年の春になつて、彼は首尾よく工手學校の夜學部に入學し得たのである。

且つ間ひ日つ聞いて居る中に夕暮近くなつた。

「飯を食ひに行かう！」と桂は突然言つて、机の抽斗から手早く蓋口を取出して懐へ入れた。

「何處へ」と僕は驚いて訊ねた。

「飯屋へサ」と言つて正作は立かけたので、

「イヤ飯なら僕は宿屋へ歸つて食ふから心配しないはらが可いよ。」

「まあそんなことを言はないで一緒に食ひ給へな。そして今夜は此處へ泊り給へ。未だ話が澤山残つて居る。」

僕も其意に従ひ、二人して車屋を出た。道の二三丁も歩いたが、桂は其間も愉快に話しながら、國元のことなどを聞き、今年の中に一度故郷に歸りたいなど言つて居た、けれども僕

は桂の生活の模様から察して、三百里外の故郷へ往復することの到底、言ふべくして行ふべからざるを思ひ、別に氣にも留めず、歸れたら一度歸つて父母を見舞ひ給へ位の軽い挨拶を爲て置いた。

「此處だ！」と言つて桂は先に立つて、煙吸筆を潜つた。僕は唖驚して、暫時ためらつて居ると中から、

「オイ君！」と呼んだ。爲かたが無いから入ると、桂は程よき場處に陣取つて笑味を含んで此方を見て居る。見廻はすと、桂の外に四五名の労働者らしい男が居て、長い食卓に着いて、飯を食ふ者、酒を呑むもの、殊の外靜肅である。

二人差向ひで卓に倚るや、

「僕は三度々此處で飯を食ふのだ」と桂は平氣で言つて、「君は何を食ふか。何でも出来るよ。」

「何でも可い、僕は。」

「さうか、それでは」と桂は女中に向つて二三品命じたが、其名は符牒のやうで、僕には解らなかつた。暫時すると、刺身、煮肴、煮メ、汁などが出て飯を盛つた茶碗に香の物。

桂は美味さうに食ひ初めたが、僕は何となく汚ならしい氣がして食ふ氣にならなかつたのを

無理に食ひ初めて居ると、思はず涙が逆上げて来た。桂正作は武士の子、今や彼が一家は悲運の底にあれど、要するに、彼は紳士の子、それが下等社會と一緒に一膳めしに舌打ち鳴らすか、と思つて涙含んだのではない。決してさうではない。いや、乍ら箸を取つて二三口口食ふや、卒然、僕は思つた、あゝ此飯は此有爲なる、勤勉なる、獨立自活して自ら教育しつゝある少年が、勞働して儲け得た金で、心ばかりの馳走をして呉れる好意だ、それを何ぞや不味さうに食ふとは！ 桂は此處で三度の食事をするではないか、これを嫌々ながら食ふ自分は彼の竹馬の友と言はれうかと、さう思ふと僕は思はず涙を呑んだのである。そして僕は急に胸がすが／＼して、桂と共に美味く食事をして、緋暖簾を出た。

其夜二人で薄い布団に一緒に寝て、夜の更けるのも知らず、小さな豆ランプの覺束ない光の下で、故郷のことや他の友の上のことや、將來の望を語り合つたことは僕今でも思ひ起す

と、楽しい懐しい其夜の様が眼の先に浮んで来る。
其後、僕と桂は互に往來して居たが早くも其年の夏期休暇が来た。すると一日、桂が僕の

宿屋へ来て、

「僕は故郷へ歸つて来ようかと思ふ、實は最早決定して居るのだ」といふ意外な言葉。

「それは可いけれども君……」と僕は直ぐ旅費等のことを心配して口を開くと、

「實は金も出来て居るのだ。参拾圓ばかり貯蓄して居るから、往復の旅費と土産物とで貳拾圓有つたら可からうと思ふ。参拾圓悉皆費つてしまふと後で困るからね」といふのを聞いて僕は今更ながら彼の用意のほどに感じ入つた。彼の話に依ると二年前から既に歸省の計畫を立てて其積り貯蓄したとのこと。

どうだ諸君！ 斯ういふことは出来易い様で、なか／＼出来ないことだよ。桂は凡人だらう。けれども其爲すことは非凡ではないか。

其處で僕も大に歡んで彼の歸國を送つた。彼は二年間の貯蓄の三分の二を平氣で擲つて、錦繪を買ひ、反物を買ひ、母や弟や、親戚の女子供を喜ばすべく、欣々然として新橋を出立つた。

翌年三十一年に目出度學校を卒業し、電気部の技手として横濱の會社に給料拾貳圓で雇はれた。

其後今日まで五年になる。其間彼は何を

たか。たゞ其職分を忠實に勤めただけか。さうでない！

彼は大なる事を爲して居る。彼の弟が二人あつて、二人とも彼の兄、逃亡した兄に似て手に合はない突飛物、一人を五郎と云ひ、一人を荒雄といふ、五郎は正作が横濱の會社に出たと聞かや、國元を飛び出して、東京に來た。正作は五郎の爲めに、所々奔走して或は商店に入れ、或は學僕としたけれど、五郎は到る處で失敗し、到る處を逃出してしまふ。

然れども正作は根氣よく世話をして居たが、遂に五郎を自分の傍に置き、種々に訓戒を加へ、西國立志編を繰返して讀まし、そして工手學校に入れて了つた。僅の給料で自から食ひ、弟を養ひ、三年の間、辛苦に辛苦を重ねた結果は三十四年に至つて現はれ、五郎は技手となつて、今は東京芝區の某會社に雇はれ、眞面目に勤務して居るのである。

荒雄も亦た國を飛び出した。今は正作と五郎と二人で此の弟の處置に苦心して居る。

今年の春であつた。夕暮に僕は横濱野毛町に桂を訪ねると、宿の者が「桂さんは未だ會社です」と言ふから、會社の様子も見たく、其足で會社を訪らた。

桂の仕事を爲て居る場處に行つて見ると、僕は電氣の事を詳しく知らないから十分の説明は出来ないが一本の太い鐵柱を擁して數人の人が立つて居て、正作は一人其鐵柱の周圍を幾度となく廻つて熱心に何事か爲て居る。最早電燈が點いて白晝の如く此一群の人を照して居る。人々は黙して正作の爲る處を見て居る。器械に狂の生じたのを正作が檢分し、修繕して居るのらしい。

桂の顔、様子！ 彼は無人の地に居て、我を忘れ世界を忘れ、身も魂も、今其の爲しつゝある仕事に打込んで居る。僕は桂の容貌の斯くまでに眞面目なるを見たことがない。見て居る中に、僕は一種の莊嚴に打たれた。

諸君！ 何卒僕の友のために、杯をあげて呉れ給へ、彼の將來を祝福して！

二 少 女

(上)

夏の初、月色街に満つる夜の十時ごろ、カラコロと鼻緒のゆるさうな吾下駄の音高く、芝罘平社の後のお濠ばたを十八ばかりの少女、赤坂の方から物案じさうに首をうなだれて来る。

薄闇い狭いぬけるぢの車止の横木を俛つて、彼方へ出ると、琴平社の中門の通りである。道幅二間ばかりの寂しい町で、(産婆)と書いた軒燈が二階造の家の前に點てゐる計りで、暗夜なら眞闇黒な筋である。それも月の十日と二十日は琴平の縁日で、中門を出入する人の多少は通るが、實、平常、此町に用事ある者でなければ餘り人の往來しない所である。

少女はぬけるちを出るや、そつと左右を見た。月は中天に懸てゐて、南から北へと通つた此町を隈なく照らして、森としてゐる。人の住むで居ない町かと思はれる程で、少女が産婆の軒燈の前まで來た時、其二階で赤兒の泣聲が微

かにした。少女は頭を上げてちよつと見上げたが、其儘すぐ一軒置た隣家の二階に目を注いだ。

隣家の二階といふのは、見た處、極く軒の低い家で、下の屋根と上の屋根との間に、一間の中窓が窮屈さうに挟まつてゐる、其窓先に軒がさも鬱陶しく垂れて、陰氣な影を窓の障子に映じてゐる。

少女は此二階家の前に來ると暫時く佇止つて居たが、窓を見上げて「江藤さん」と小聲で呼んだ、窓は少し開てゐて、薄赤い光が煤に黄んだ障子に映じてゐる。

「江藤さん」と返事が無いから、少女は今一度、やはり小聲で呼んだ。

障子がすつと開いたかと思ふと、年若い女の姿が腰から上を現はして、

「誰た？」

「私。」

「オヤ、田川さん。」

「少し用事が有て來たのよ、最早お寢？」

「オヤさう、お上がんなさいよ、でも未だ十時が打たないでせう。」

「一晩來てお氣毒様ねエ」と少女は少しもぢもぢして居る。

二階の女の姿が消えると間もなく、下の雨戸を開ける音がゴト／＼して、建付の曲んだ戸が漸と開いた。

「オヤ好い月だ事ね、田川さんお上がんなさいよ」といふ女は今年十九、歳には少し老けて見ゆる方なるがすらりとした姿の、氣高い顔つき、髪は束髪に結んで身には洗曝の浴衣を着けて居る。

「ちよつと平岡さんに頼まれて來た用があるのよ、此處でも話せますよ、もう遅いもの、上ると長座なるから……」と今來た少女は言つて、笑を入りてゐる。それで相手の顔は見ないで、月を仰た日元は其丸顔に適好しく、品の好い愛嬌のある小軀の女である。

「用といふのは大概解つて居ますが、色々話もあるから一寸お上んなさいよ。」

「さう、あの局の歸りに來ると宜んだけれど、家に急ぐ用が有つたもんだから……」

い階段が付てゐて、仕事場と奥とは障子で仕切である。其障子が一枚開かつてゐたが薄闇くつて能く内が見えない。

「遅く来つて御氣毒様」と来た少女は軽く言つた、奥に向つて。

「どう致しまして」と奥で暖た聲がして、續て咳嗽がして、火鉢の縁をたたく煙管の音が重く響いた。

「この亂暴さを御覽なさい、坐わる所もないのよ」と主人の少女はみし／＼と音のする、急な階段を先に立て降つて、

「何卒此處へでも御坐わんなさいな。」と其處らの物を片付けにかゝる。

「すこし頼まれた仕事を急いでゐますからね、源ちゃん、お床を少し寄せますよ。」

「いゝのよ、其様してお置きなさいよ、源ちゃん最早お寝み」と客の少女は床なる九歳ばかりの少年を見て坐わり乍ら言つて、其のにこやかな顔に笑味を湛へた。

「姉さん、米！」と少年は顔を少し擧げて泣聲で言つた。

「お前、さう米を食べて好いかね。二三日前から熱が出て困つて居るんですよ。源ちゃんそら水。」

主人の少女は小さな箱から水の片を二ツ三ツ、皿に乗せて出して、少年の枕頭に置いて、「もう此限ですよ、また明日買つてあげましょねエ。」

「風邪でもおひきなさつたの？」と客なる少女は心配さうに言つた。

「もう快々ですよ。熱いこと、少し開けましょねエ」と主人の少女は窓の障子を一枚開け放した。今まで蒸熱かつた此一室へ冷たい夜風が、音もなく吹き込むと「夜風に當ると悪いでせうよ、私は宜いからお閉めなさいよ」と客なる少女、少年の病を氣にする。

「ソ、夫れて實は私も迷つてゐるのよ」と主人の少女は嘆息をついた。

「何に、少しは風を通さないと善くないのよ。御用といふのは缺勤届のこととせう」と主人の少女は額から頬へ垂れかゝる髪をうるさうに撫であげながら少し體軀を前に屈めて小聲で言つた。

「客の少女は密と室内を見廻した。そして何か思ひ當ることでも有るらしく今までの少し心配さうな顔が急に爽々して満面の笑味を隠し得なかつたが、ちよつとあらたまつて、

「ハア、あの五週間の缺勤届の期限が最早きれたから何とか爲さらないと善くないツて、平岡さんが、是非今日私に貴姉のことを聞て来て呉れるツて……明朝は私が午前出だもんだから……」

「實は少々貴姉に聞て見ることがあるのよ。」と一段小聲で言つた。

「或程さうですなエ、眞實に私は困まツちまツたねエ、五週間……もう其様になつたらうか」と主人の少女は嘆息をして、「それで平岡さんが何

「何に？」と主人の少女も笑ひながら小聲で言つた。これも何か思ひ當る處あるらしく、客なる少女の顔をぢつと見て、又た密と傍の寢床を見るとき、少年は兩腕を捲り出したまゝ能く眠つてゐる、其手を靜に臥被の内にに入れてやつた。

「怒ちや善けないことよ」と客の少女はきままり悪るさうに笑つて言出し兼ねてゐる。

「凡そ知ツてゐるのよ、言て御覽なさい、怒りも何もしいから。可笑しな位よ」と言ふ主人の少女の顔は羞恥さうな笑のうちに何とな

く不穩のところが見透かされた。

「私の口から言ひ悪くいけれど……貴姉大概解

かつておませう……』
『私が妾になるとか成つたとかいふ事なんでせう。』
と言つた主人の少女の聲は震へて居た。

（下）

此二人の少女は共に東京電話交換局の交換手であつて、主人の少女を江藤お秀といふ、客の少女は田川お富といひ、交換手としては兩人とも老練の方であるがお秀は局を勤めるやうになつた以來、未だ二年計りであるから給料は漸と十五錢であつた。

お秀の父は東京府に勤めて三十五圓ばかり取つて居て夫婦の間にお秀を長女としてお梅源三郎の三人の兒を持って、左まで不自由なく暮らしてゐた。夫れでお秀も高等小學を卒へるころが出来、其後は宅に居て針仕事の稽古のみに力を盡す傍、讀書をも勉めてゐたが恰度三年前、母が病ついで三月目に亡くなつて、夫れを嘆く間もなく又た父が病床に就くやうに成り、これも二月ばかりで母の後を逐ひ、三人の兒は半歳のうちに両親を失つて忽ち孤兒となつた。さうして殆ど丸裸體の様で此世に残された。

そこで一人の祖母は懇意な家で引うけることになり、お秀は幸ひ交換局で交換手を募て居たから直ぐ局に勉めるやうになつて、妹と弟は兎も角お秀と一所に暮してゐた。それも多少は祖母を引うけた家から扶助でもらつて僅かに糊口を立てゝゐたので、お秀の給料と針仕事とは三人の口はとても過活されなかつた。しかしお秀の労働は決して世の常の少女の出る業ではなかつた。あちら此方と安値さうな間を借りては其處から局に通つて、午前出の時は午後を針仕事に、午後出の時は午前を針仕事に、少しも安息む暇がないうちにも弟を小學校に出し妹に自分で裁縫の稽古をしてやり、夜は弟の復習も験てやらねばならず、炊事から洗濯から皆な自分一人の手でやつてゐた。

其うち物價は次第高くなり、お秀三人の暮は益々困難に成つて來た。如何するだらうと内々局の朋輩も噂してゐた程であつたが、お秀は顔にも出さず、何時も身の周圍小清潔として左まで見悪い衣裝もせず、平氣で局に通つてゐたから、奇怪なことのやうに朋輩は思つて中には今の世間に能くある例を引て善くない噂を立てる連中もあつた。
すると一月半ばかり前からお秀は全然局に

出なくなつた。初は一週間の病氣届、これは正規で別に診断書が要ない、其次は診断書が付て五週間の缺勤届、其内五週間は経た、お秀は出て來ないのみならず、缺勤届すら出さない。いよいよ江藤さんは妾になつたといふ噂が誰の口からもなく起つて、朋輩の者皆んな喧嘩く騒ぎ立てた、遂に係の技手の耳に入つた、そこで技手の平岡は田川お富に頼むで、お秀の現状を見届けた上、局を退くとも退かぬとも何とか決めて呉れると傳言したのである。お富は朋輩の中でもお秀とは能く氣の合つて親密い方であるからで。

しかしお富が局を缺勤でから後も二三度會つて多少事情を知つて居る故、かの怪しい噂は信じなかつたが、此頃になつて、或といふ疑が起らなくもなかつた。といふのもお秀の祖母といふ人が餘り心得の善い人でないことを兼ねて知つてゐるからで。
お富はお秀の様子を一目見て、もう殆んど怪しい疑惑は晴れたが、更らに其室のうちの有様を見てすつかり解かつた。
お秀の如何に困つて居るかは室のうちの様子で能く解る。兼ねて此部屋には戸棚といふものが無いからお秀は其衣類を柳行李二個に納め

て室の片隅に置いてゐたのが今是一個も見えない、そして身には浴衣の洗曝を着たまゝで、別に着更へもない様な様である。六疊の座敷の一疊は階子段に取られて居るから實は五疊敷の一室に、戸棚がない位だから、床もなければ小さな棚一つない。

天井は低く聲は黒く、窓は西に一間の中窓がある計り東のは眞實の呼吸ぬかしといふ丈けで、室のうち何處となく陰鬱で不潔で、とても人の住むべき處でない。

筆記函と書た長方形の箱が鼠入らずの代をしてゐる、其上に二合入の醬油徳利と石油の罐とが置いてあつて、箱の前には小さな漆膳があつて其上に茶碗小皿などが二ツ四ツ伏せて有る、其横に眞黒に煤ぼつた涼爐が有て凸凹した薬罐がかけてある、涼爐と膳との蔭に土鍋が置いて有て其に飯七が添へて有るのを見れば其處らに飯桶の見えぬも道理である。

又た室の片隅に風呂敷包が有て其傍に源三郎の學校道具が置いてある。お秀の室の道具はこれ限である。これだけがお秀の財産である。其外源三郎の臥て居る布團といふは見て居るのも氣の毒なほどの物で、これに姉と弟とが寝るのである。この有様でもお秀は妾になつたのだ

らうか、女の節操を賣てまで金銭が欲しい者が如何して如此な貧乏い有様だらうか。

「江藤さん、私は決して其様なことは眞實にしないのよ。しかし皆なが色々なこと言つてゐますから或と思つたの。怒つちや宜ないことよ」とお富の聲も震へて左も氣の毒さうに言つた。

「否エ、怒るところか、貴姉宜く來て下すつて眞實に嬉しう御座います、局の人が色々なことを言つてゐるのは薄々知つてゐましたが、私は無理はないと思ひますわ……と、さも悲しげにお秀は言つて、ほつと嘆息を吐いた。

「何故。私は口惜いことよ、よく解りもしないことを左も見て來たやうに言ひふらしてさ。」
「私だつて口惜いと思はないことはないけれど、あんな人達が彼是れ言ふのも尤ですよ、貴姉……祖母さんね……」とお秀は口籠つた、そしておツとお富の顔を見た目は濡むてゐた。

「祖母さんが何とか言つたのでせう……眞實に貴姉はお可哀さうだよ……」とお富の眼も涙合むた。

「祖母さんのことだから他の人には言へないけれど……それ先達貴姉の來てゐらしつた時、祖母さんがあんな妙なことを言つたでせう。處

が今日はかり前に小行川から來て……」と女になれと言はないばかりなのよ、あのお前の思案一つでお梅や源ちゃんにも衣服が着せてやられて、甘味ものが食べさゝれるツて……」

「それで妾になれつて……お富は眼瞼を袖で摩つて丸い眼を大きくして言つた。

「否エ妾になつて明白とは言はないけれど、妾々つて世間で大變悪く言ふが藝者なんかと比較すると幾何いゝか知れない、一人の男を旦那にするのだからつて……まあ何といふ言葉でせう……私は口惜くつて堪りませんでしたの。

矢張身を賣るのは同じことだと言ひますとね、祖母さんや同胞のために身を賣るのが何が悪いツて……」
「まあ其様なことを！」
「實、私も困り切てゐるに違ひないけれど、いくら零落ても妾になぞ成る氣はありませんよ、私にはそんな淺ましいことが何で出來ませうか。祖母さんに、どんな事が有つても其様な眞實は私はしない、私のやれるだけやつて妹と弟の行末を見届けるから心配して下さるなと言つて其時あんまり口惜かつたから泣きましたのよ。それからね寧のこと針仕事の方が宜いかと思つて暫時局を缺勤むでやつて見たのです

よ。しかし此頃(こころ)に成つて見ると矢張(やばり)仕事(しごと)ばかり
ぢやア、有る時(とき)や無い時(とき)が有つて結構(けいこう)が左程(さほど)の
事(こと)もないやうだし、それに家(いへ)にばかりゐるとツ
イ妹(いもうと)や弟(あに)の世話(せわ)が餘計(よけい)焼(や)きたくなつて思(おも)はず
其方(それ)に時間(じかん)を取(と)られるし、ですから矢張(やばり)半日(はんじつ)
づゝ、局(きよく)に出(で)ることに仕(し)ようかとも思(おも)つて居(ゐ)た
ところなんですよ。』

『そしてお梅(お梅)さんはどうなすつて?』とお富(とみ)は
不審(ふしん)さうに尋(たず)ねた。

『ですから今(いま)の處(ところ)、とても私(わたし)一人(ひとり)の腕(うで)で三人
はやりきれない! 小石川(こいしかわ)の方(ほう)へも左迄(さまで)は請(たの)ま
れないもんですから、お梅(お梅)だけは奉公(ほうこう)に出(だ)すこ
とにして、丁度(ちやうど)一昨(いつさか)々(々)日(日)か先方(あき)へ行(い)きました
の。』

『まあ何處(どこ)へなの?』

『ぢき其處(そこ)なの、日蔭(ひかげ)町の古着屋(ふるぎや)なの。』

『おさんどんですか。』

『ハア。』

『まあ可哀(かは)さうに、やつと十五(じゅうご)でせう?』

『私も可哀(かは)さうでならなかつたけエ、つまり
私(わたし)の傍(そば)に居(ゐ)た處(ところ)が苦(くる)しいばかりだし、又(また)結核(けつかく)
あの人(ひと)も暫時(しばらく)は辛(辛い)目に遇(あつ)つて生(な)つたのですから
今時分(いまじぶん)から他人(たにん)の間(ま)に出(で)るのも宜(よ)からうと思(おも)
つて、心(こころ)を鬼(おに)にして出(だ)してやりました、辛抱(ざんぱう)が

出来(でき)ればいゝがと思(おも)つて、それ源(げん)ちゃん(は)斯(ごと)く
様(さま)だし、今(いま)も彼の裁縫(ざいほう)しながら色々(いろく)なことを思(おも)
ふと悲(かな)しくなつて泣(な)きたく成(な)つて來(き)たから、口(くち)
うちで唱歌(うたが)を歌(うた)つてまぎらしたところなの。』
『そして貴姉(あなた)も、矢張(やばり)局(きよく)に出(い)でなさいな。その
方(ほう)が宜(よ)いでせうよ。それに局(きよく)に出(で)て多忙(たひやう)の間(ま)
だけでも苦勞(くろう)を忘(わす)れますよ。とお富(とみ)は眞面目(まじめ)に
すゝめた。お秀(ひで)は嘆息(ため息)をついて、そして淋(しみ)びし
さうな笑(わら)を顔(かほ)に浮(う)かべ、

『ほんに左様(さやう)ですよ、人様(ひとさま)のお話(はなし)の取次(とりぎ)をして
何番(なんばん)々(々)と言(い)つて居(ゐ)るうちに日(ひ)が立(た)ちますから
ねエ』と言(い)つて『おほゝゝゝ』と輕(かろ)く笑(わら)ふ。『女(おんな)の
仕事(しごと)はどうせ其様(そのよう)なものですわ』とお富(とみ)も『お
ほゝゝゝ』と笑(わら)つた。そしてお秀(ひで)は何(なん)とも云(い)ひ
難(たが)い、嬉(うれ)しいやうな、哀(あは)れなやうな、頼(たの)もしい
やうな心持(こころもち)がした。

『兎(う)も角(かど)も明後日(あした)からお秀(ひで)は局(きよく)に出(で)ることに
話(はなし)を極(きま)めてお富(とみ)に約束(やくそく)したものの、忽(たち)ち衣類(いり)の
事(こと)に思(おも)ひ當(あた)つて當惑(たうわく)した。若い女(おんな)ばかり集(あ)まる
處(ところ)だからお秀(ひで)の眞實(まこと)でもまさか寝衣(ねい)同様(どうよう)の
衣服(いふく)は着(き)てゆかれず、二三枚(まい)の單物(ひとあ)物は皆(みな)な質物(しつぶつ)
と成(な)つてゐるし、これには殆(ほとん)ど當惑(たうわく)した。お
富(とみ)は流石(さすが)女(おんな)同志(どうし)だけ初め(はじ)めから氣(き)が付(つ)いてゐた。
お秀(ひで)の當惑(たうわく)の色(いろ)を見て、

『氣(き)に障(さ)へちやいけないことよ、あの...』
『何(なん)に、どうにか致(いた)しますよ』とお富(とみ)は少(すこ)し顔(かほ)
を赤(あか)らめて『おほゝゝゝ』と笑(わら)つた。

『だつてお困(こま)りでせう? 明日(あした)私(わたし)局(きよく)から歸(かへ)
つたら母上(おつか)さんと相談(さうだん)して、四時(よじ)頃(ころ)又(また)來(き)ませ
うよ。』

『あんまりお氣(き)づつたまで...』
お秀(ひで)は眼(め)に涙(なみだ)一杯(いっぱい)含(こ)ませて首(くび)を垂(た)れた。お富(とみ)
は何(なん)とも言(い)ひ難(たが)い、悲(かな)しいやうな、懐(なつか)しいやう
な心持(こころもち)がした。

夜(よ)が大分(だいぶ)更(ふ)けたやうだからお富(とみ)は暇(ひま)を告(つ)げ
て立(た)ちかけた時(とき)、鈴蟲(すずむし)の鳴(な)く音が突(とつ)然(ぜん)室(むろ)のう
ちでした。

『オヤ鈴蟲(すずむし)が』とお富(とみ)は言(い)つて見廻(みまわ)はした。

『窓(まど)のところにお梅(お梅)さんが先達(さきだち)で坂(さか)平(ひら)で買(か)つ
て來(き)たのよ、奉公(ほうこう)に出(で)る時(とき)持(も)つてゆきたいつて
...』

『まだ子供(こども)ですもの、ねえ』とお富(とみ)は立(た)ち上(あ)り
は暗(くら)い階段(かたいだん)を危(あや)なさうに下(くだ)り、お秀(ひで)も一所(いよ)に戸(と)
外(と)へ出(で)た。月(つき)は硝(び)や西(にし)に傾(かた)いた。夜(よ)は森(もり)と更(ふ)
けて居(ゐ)る。

『そこまで送(おく)りませう。』
『宜(よ)いのよ、其處(そこ)へ出(で)ると未(ま)だ人(ひと)通(とほ)りが澤山(たくさん)あ
るから』とお富(とみ)は笑(わら)つて、

「左様なら、源ちゃん御大事に」と去きかける。
「御塚の處まで送りませうよ」とお秀は關はず同伴に来る、二人の少女の影は、薄暗いぬける影の中に消えた。

ぬける影の中程が恰度、麵包屋の裏になつてゐて、今二人が通りかけると、戸が少し開て居て、内で麵包を製造つてゐる處が能く見える。其焼たての香しい香が戸外までぶん／＼する。其焼く手際が見てゐて面白ろいほどの上手である。二人は一寸と立て見てゐた。

「お美味さうねエ」とお富は笑つて言つた。
「明朝のを今製造へるのでせうねエ」とお秀も笑うて行うとする。

「ちよつと御待なさいよ」とお富は止めて、戸外から、

「その麵包を少し下さいな。」

三十計の男と十五位な娘とが頻に焼てゐたが、驚て戸外の方を向いた。

「お幾價？」

娘は不精無精に立つた。

「お氣の毒さま、これ丈け下さいな」とお富は白銅一個を娘に渡すと、娘は麵包を古新聞に包んで戸の間から出した。

「源ちゃんにあげて下さいな、今夜焼きたてが

食べさせたいことねエ、それ熱いやうですよ」とお秀に渡す。

「まあお氣の毒さまねエ、明朝のお目叠にやりませう。」

二人はお塚邊の廣い通りに出た。夜が更けてもまだ十二時前であるから彼方此方、人のゆきさがある。月はさやかに照て、お塚の水の上は霞むでゐる。

「左様なら、又た明日。お寝みなさい、源ちゃん御大事に。」お富はしとやかに辭儀して去かうとした。

「どうも色々難有う御座いました。お母上にも宜しく、それでは明日。」

二人は分れんとして暫時、立止つた。

「ああ、明日お出になる時、お花を少し持て来て下さいませんか、何んでも宜いの。佛様にあげたいから。」

とお秀、云ひ悪くさうに言つた。

「此頃は江戸菊が大變よく咲てゐるのよ、江戸菊を持て來ませうねエ」とお富は首をちよつと傾けてニコリ笑つて。

「貴姉の處に鈴蟲が居て？」

「否エ、どうして？」

「梅ちゃんの鈴蟲が此頃大變鳴かないやうにな

つて、何だか死にさうですから、どうしたら宜いかと思つて。」

「さう、胡瓜をやつて？」

「ハア、それで死にさうなのよ。」

と言つてゐる處へ、巡查が通り掛つて二人の様子を怪しさうに見て去つた。二人は驚いて、

「左様なら……」

「左様なら……急いでお歸んなさいよ……。」

お富はカラコロ／＼と赤坂の方へ歸てゆく、

お秀はちつと其後影を見送て立て居た。

帽子

春の日の午後四時頃、乗合馬車が一つの驛に止まつた。山岸に沿うて流るゝ溪流が此處で一迂轉する其岸に二三十軒の田舎町が出来て居る。

乗合の客五人ばかりは弾機も有るか無きかの御暴な馬車で田舎道をがたく行られた疲勞を暫時でも休めんと、降りた、自分もその一人。

見ると十二三の童が一人、小さな蓆を敷て其の上で獅子舞を行つて居る、其週回に町の子供や童者、兒守娘など十四五人取りかこんで見物して居た。乗合の者二三人もこれに加はつた、自分も其一人。

童は其小さな身體をくるくゝ獨樂の様に廻轉て見せる、或は兩手を足にして倒に立つ。見物は譽めたり、笑たり、冷かしたり、そして銅貨一つ與る者もない。其中馬の仕度が出来て御者は早く乗れと怒鳴り初めた。

自分は銅貨一つ出して、そつと童の傍に投げた、すると自分の傍に立つて居た客の一人が銅貨一つ出すよと見るや、直に手荒く之を童

の頭に投つけた。額に中つて鮮血サツと流れ出る、人々は驚いたが投げた當人はにやりと冷笑つて馬車の方へそく行つて了つた。

童はと見ると、血まみれになつた手で投げられたものを拾ひ取り羞恥しさうな笑を含み、見物を見廻したばかり。

馬車に歸ると自分は今の男と差向ひに座を取らされて、さなきだに此男の言葉から態度が二時間前より自分を苦しめて居るのに、これからさき又二時間ばかり膝を突き合はし居なければならぬかと、不快に堪へなかつた。

此男が某町の商人であることは先程からの彼の問はず語で自分には解つて居た。年は四十二三でもあらうか、骨格逞しく、木綿の筒袖を着て前垂に中折帽子、其帽子は新調の品で乗合の一人が眞面目か愛嬌か一寸賞めたら、これは先日大阪に上つた時何とかいふ大阪第一の店で買ったのだとか、羅紗が何だとか色々自慢話ありし木、しかし此様ものはと、鼻にぬけた聲で話頭を止められた品である。

車中は女が一人、此男が一人、自分の外二人、其二人は多少此男の身の上を知て居るらしく毎時彼の言ふことに逆らはず合槌を打つて見て、自分は此男が町で中以上の富と勢力とを持て居るものと推測した。

彼の眼は異様に光つて居る。そして土色を帯びた黒い顔は逞しい鼻と厚い唇とで滋味を加へ、聲は高くないが人を厭しのけるやうで、折り／＼手荒く自分の袖を摩る癖がある。自分は厭惡な男だと思ふ中にも如何しても彼の神經に多少の異常があるものと思はざるを得なかつた、さうだと言つて彼を厭ふ心は少しも薄らがない、何故ならば、人の性格の相違は神經作用の相違とも言へるから純然たる狂人でない限り彼は厭惡な性格の男と言ふことも出来る。自分も斷定したのである。其外彼の顔を見ては種々な感想に耽つて、自分は全く沈黙し、彼等の談話に加はらなかつた。

其處で物語は前に返り、馬の更りため馬車は以前よりも景氣可く走り御者は亦た空模様を氣にしながら、無暗と鞭を加へる、どんより曇りし春の空は夕暮近くなるに連れ益々怪しくなり、山の頂、野の末は既に雨を帯びて来た。

自分は成るべく眼を閉ちて前の男を見ないやうにと力め、談話も耳に入らないやうにと空想を喚び起して其中に身を隠して居た。其中夢心地になつて半ば居睡をして居たが、ふと眼を開けて外を見ると、何時しか雨となつて、春雨しとくと野も山も霞み、その静けき、穏かな景色の中を馬車は飛やうに走つて居た。雨に濡れて緑深き林を過たと思ふと直ぐ一簇の家村に出で馬車は止まり、一人の客が乗た。

『ヤア先生、何處へ旅行になりました』と自分を見て挨拶をする、これは 某町に於ける自分の生徒の一人であつたので、二十七八歳の晩學を止め、今では家業に従事して居るのである。彼は自分に言葉をかけて傍に腰を下し、そして自分の前の男に一寸と目禮した。先方は例の帽子に指先をかけたが、互に別に言葉を交さず。

馬車は直ぐ走り出した。自分は談話の對手が出来たので、不快から救はれ、今度の自分の遠足の事など語り、をり／＼外を眺めて居たが、夕暮近く、遠近の茅屋から上る炊烟は絲の如き雨に和して重く軽く樹林を包んで居る景色、田舎慣し自分にも悪くはなかつた。前の厭な男は相變らず他の者と喋舌つて居たが、町へは最

早や十町とない所まで来た頃、彼は何と思つたか帽子窓を開けて身體を横に於て外に頭を出した。其途端側の帽子が飛んだ、彼の對手はあつと驚き、彼も驚き、人々は御者に馬車を止めろと叫んだが、御者臺の若者には此事が知れない、馬車はどし／＼走る、此時彼は、

『何、あんな帽子、構ひませんわ!』と低い重い聲で言つて、冷やかに笑みだした。

『だつて、論るといふ事はありませんわ』と相手の一人が息愈んで言ふ。

『フ、ン!』と言つて、彼は手荒く額を摩つた。其中馬車が靜かに止つたのが、如何した事かと自分も醉興に窓を開けて、來し方を見ると一人の農夫が、『オイ／＼』と呼びながら帽子を持って懸命に追駈けて來るのであつた。

間もなく農夫は馬車の傍まで來て、其泥だらけの手にて帽子を捧げながら、麥に手入をして居た自分の傍に落ちたから拾つて來て進ぜたとの意を、呼吸づかひ苦しげに、とぎれ／＼に言つた。すると帽子の主は、

『そんな帽子お前に呉れてやる、欲けりや持てゆけ不飲んなら捨てる!』と言ひ放つた。これを聞いて、さなきだに飛ぶが如き馬車を追駈けた爲め、蒼ざめて凄味を帯びて居た農夫の顔

色は上の如く、唇は青ざり、眼光鋭く怒しげに、どつと前の男の顔を見つめて其處に直立つた。餘りの事に何人も一語も發し得ない。

『未か!』と御者臺の男は叫んだ。

『早く出さんか!』と前の男は怒鳴り返した。鞭音高く馬背に響くや、馬車は遠慮なく駈だした。

前の男は外に帽子なき頭を出して後を見

て、

『未だ此方を見て立つて居やがる。フン!』舌打ちして荒く窓を閉めた。

『折角だから取つてやれば可う御座んすに。』と相手の一人は僅かに口を開いた。

『何に彼な帽子、拾うたから與れば可え。』

『けれど、彼の漢が可憐さうな。』

『貰つて緋句、喜しからう。』

對手は黙つて了まつた。最早餘り口をきく者が無い。其中間もなく馬車は町に着いて停つた。夕闇薄暗らく、家々は既に燈を點けて居た。

合乗の者はそれ／＼挨拶をして車を出た。彼の男も外に下りて、駒下駄を爪立て、二足三足歩いたと見るや、アツと叫んで、尻餅をついた。誰も驚ろいて何事かと近き、彼の知る人は、

『如何したの、如何なされた』と扱け起しにか

かつた。動かない、彼は殆ど氣絶の體である。其處で人々は愈々驚き側の店先に擔ぎこんで水を吞すなど種々、介抱すると、漸く正氣づきし如く立上つて四邊をきよろ／＼見廻して居たが、嘆れた聲で、

「皆様今こゝで先刻の漢を見やしませんかノ。」

「先刻の漢というて何人？」と一人が聞く。

「そら先刻の農夫、あれが今、自分が馬車から出たと思ふと、眼の前にひよつくり出て来て彼の時と同じ顔をして帽子を突き出しましたと思ひなされ……」

人々は殆んど戰慄をした、恐らく何人も其刹那に彼の農夫の顔が何人の眼先にも顯はれただらうと思ふ。

兎も角、彼の男を慰めて一同は散じた。

* * * * *

それから三四日經つと、馬車に乗合はした彼の知人がやつて来て、

「先生、彼の男を如何思ひなします」と聞く、それは氣絶の一件である。

「實に妙な事もあるものだね。」

「實際農夫が現はれる筈はありませんが、先づ罰で御座いませうノ。」

「さうかも知れんサ、けれど我々にも彼時の農夫の顔は目にあり／＼と残つて居るから、彼奴にだつて左様だらう、それが出たのサ。」

と自分は答へたが然し自分は此事を然く淡泊に考へては居なかつたので、實に言ひ難き或問題に觸れた氣がして、此二三日は少なからず之に惱まされて居たのである、人の心に潜む残忍、冷刻、又は他が之に觸れて傷いた心、そんな事ばかりでない、尙ほ或物。

これらを對手の知人に話しても解らず、寧ろ彼から聞いた方が可いので、彼の男の身の上を彼是と尋ねた。

彼男は明で評判は餘り可くないが、口き、で勢力は可なり有る上に、商法にかけて抜目なく彼一代で今の一萬ばかりの身代を作つたといふこと。彼は變物で、折り／＼氣が癪になる事があるといふ事。夫婦の間に子なく、其爲め姪を貰つて育て、居るが、不思議とそれを非常に可愛がるといふ事。以上よりも重大の事は、彼の今の妻は後妻で、先妻は彼が商用で旅行して居る留守に、不義をして情夫と逃亡したといふ事。けれど氣の變になつたのではなく初めより彼は荒々しき氣性を有しやゝともすると、妻を亂打して非常に虐待し、妻の不義をした

のも一つは其爲彼を厭うたといふこと。そして彼の唯一の嗜好は釣魚であるといふ事などを聞き得た。

其後夏の初めである。自分は郊外に出て河岸をたどりに散歩して居ると彼の釣を垂れて居るのを見た、自分は思ふところがあるので、傍に寄り、

「釣れますか」と軽く言葉をかけた、彼は振りかへつて自分を見たが、直ぐ又た水面を熟視して居る。

「釣れますか」と自分は今一度言つて、更に傍に近づいた。すると振向いて例の凄顔で自分を見て、傍に在りし魚籠を取つて、自分からは見えぬ側に置き、そして何の返事もせず直ぐと眼を水面に轉じた。

結局、自分までがやられて了まつた。自分は物思に沈みながら暫らく散歩して居たが名残りなく晴れた美しい蒼空も、聲清く啼く雲雀も面白くなくなつて、間もなく歸路に就いた。

死

(一)

自分は今も數學と語學との教授を以て身を立
て、居る者であるが、今より數年前のことであ
つた。西京に新たに出來た某私立學校の教師
になるやうな相談が自分と其係の者との間に
有つて、自分も略々先方からの條件などにも同
意し、遠からず西京に向て出發することに決
定て、其由を諸方の友人へも通知した。

西京の地は其時自分には初めて、學校の方
は兎に角、京都と云ふ名は自分をして多少の
好奇心を惹かしめてゐた。そこで彼是、西京の
様子も聞いて置きたいと思つて富岡竹次郎とい
ふ友を訪ねた。

富岡は西京の人で自分の親友の一人である。
渠の父は渠五歳の時東京で亡くなり、其後渠
は兄孝太郎及び母と西京に歸つて住んでゐたが
渠青年となるや東京に留學して遂に獨立し、某
省に職を奉じて茲に足かけ三年、乃ち今は二
十七歳であつた。

自分と富岡との交際は左まで舊るくはなかつ
たが、互の交情は随分深かつた。渠の人物に
就ては今以て自分の疑問であるが、先づ一口に
評すると、内部火のやうに燃えてゐる流動體を
外皮鐵の如き冷やかな固形體で包むでるやう
なと形容することが出来る。そこで外皮が固形
體だけに内部の火の性質が自分には能く了解な
かつた。たゞ其火の力が外皮を衝き破るほど
に強かつたといふことだけは渠自身で證據を
示したから能く知れてゐる。

従つて富岡の交友は多くなく、其多くない
朋友すらも渠を「氣の置けない變人」と言つてゐ
た。自分もさう思つてゐた。

(二)

頃は春五月初、自分が富岡を渠が麹町
三番町の宅を訪はむとて自宅を出たのは金曜
日の夕暮であつた。自分は終日の讀書で少し
頭を悪くしてゐたから、戸外に出ると風が冷
や冷やと襟頸のあたりを吹きつけて何ともいへ

ず好い心持で、緩々と歩いて日も殆んど暮れ
た頃、富岡の宅に着いた。富岡は一人の忠實な
老婆を雇ひ其人に家事一切を託して其外には家
内同居のものなく、たゞ一人寂しく父た氣樂に
生活してゐた。

門を入ると書齋の横を通つて玄關にゆくの
である。然るに書齋の中窓が障子になつてゐ
て外からのぞくと腰から上を室内に傾けるこ
とが出来ぬ位な高さであつた。自分は富岡が、
其敷居に腰をかけて柱にもたれたまゝ、黙然と
空を眺めてゐるのを見たことも何度であるか知
れない。

そこで自分は門を入て書齋の横まで来ると、
室内には未だ燈火が點てゐないで、内が靜か
であつた。「不在かな」と自分は思つた。

「富岡君！」と自分は軽く呼びみた。

返事がない。其時障子の少し開てゐること
に氣がついた。自分はつか／＼と窓の下までゆ

くと、靴が脱ぎ捨て、あつて、障子が恰度人の
身體の入るだけ開いてゐた。此窓から室に這込
むのは随分富岡のやり兼ねない藝であるから、
自分は安心して室のぞき込むで今一度、

「富岡君！」と呼んだ。

返事がない。室内は暗くつて、僅かに隅の机

と椅子とが朧ろに見えるばかりである。自分は愈々不在ときめて、兎も角老婆に聞かんものと、其處を立去らうとしたが其時、ふと眼にいたのは室の片隅に黒いものが横たはつてゐるので、様子が人の臥てゐるらしかつた。篤と氣を付けて見ると全く人の形である。

『先生うたゝ寝をしてゐるな』と自分は點頭いで、

『富岡君！』と少し大きな聲で呼んだ。起きさうにも爲ない。

『オイ富岡君、オイ！』
彼は身動きも爲なかつた。自分は少し焦慮つて、

『オイ！ 富岡君、餘り早や過ぎるぢやあないか、富岡君！ 又た能く寢入つたものだ、富岡君』と續けさまに大聲で呼んだ。

彼は依然として起きない。自分は其靜かなる鼻息すら聞かなかつた。此時一間を隔てた勝手の方から足音がして次ぎの間の襖を明けた。自分は直ぐそれを老婆と知つた。間もなく老婆は書齋の襖をあけて一寸と内をのぞいて見たが、

『オヤ今なんだかお聲がしたやうだと思つたが』と呟いて其まゝ立去らうとした。
『老婆さん旦那を起してお呉れ、旦那を、今時

分から寝るものがあるものか』と突然自分が窓の外から聲をかけたので老婆は吃驚した。

『オヤ貴君ですか、イーエ旦那はお不在ですよ、今日はお役所が平常よりも少し早く退けたさうで、さあつきお歸りになつて又た一寸と出てくるつてお出かけになりましたよ、マアお氣毒様ですわねえ』といつて『ホ、』と笑つた。

『何んだ其處に寢てゐるなア富岡君らしいが、其處を見なさい、そこ』と自分は壁の下の黒いものを指した。

『オヤ〜 何時お歸り遊ばしたらう。』
老婆は富岡の傍に寄つて、

『モシ〜 旦那々々』と其肩に手を掛けたやうであつた。富岡はどうしたものか起きさうにも見えない。

『よく又た寢こんだものねえ』と自分の言葉のまだ終らぬうち、お政(老婆の名)は『オヤツ！』と叫んだ。

『何んだ。』
『旦那様々々々！ オヤツ 大變！』

『オヤツ 短刀が！』
老婆は後に二三歩飛び退いた。自分は室に飛び込む。

(三)

富岡は自殺してゐた。
自分は泣くにも泣かぬにもたゞ餘りの事に愕然たるばかりで涙も出なかつた。

悲しいとも痛ましいとも未だ其のやうな明白な感情の起る餘地が無い、弾力ある粘りある一種の力が感情の泉を塞いでゐるやうでそれが胸に悶へて重く呼吸苦しく身體の血

悉く頭腦に集つたやうで両も怪しい震慄が爪先から頭髮までゆきわたつた。

たゞ身體がふわついてそれで落着ともなき一種の落着き拂らつたやうな心地がした。

『早く燈火を！』
自分は漸くのことに叫びむだ、私語くやうに叫びむだ、老婆はまご〜と書卓の上を探したが燐枝の見つからないので勝手の方へ駆けてゆく後を自分は追つて、

『燈火は私が點ける、早く近處の醫者を招待んでおいで、直ぐ来るやうに。』
燐枝を老婆から受け取つて自分は書齋に返る、お政は裏口から駆けて出た。

書卓の上の洋燈に火を點けると今まで暗かつた室が俄かに明るくなり机の脚もとまで流

てゐる鮮血が一時に物すごく光つた。

不幸にも渠の顔は此方に向いてゐる、其兩眼は半ば開き紅の血顔の半面にまみれ齒を喰ひしぼり拳を固く握り其拳も亦た血にまみれてゐた、渠は役所から歸宅つて其儘衣服も着代へないと見えて洋服を着てゐた、顔の半面に染まらぬ處は洋燈の光を受けて兼ねて蒼白な顔が愈々蒼白に見えた、此慘澹たる光景に自分は思はず顔を背けんとする時ピカリと眼を射たものは傍に投げてある短刀であつた。

近いて身體に觸つて見たが最早少しの體温もなかつた、自分は「とても駄目だ」と思つた。無論駄目である、さまで時は經つてゐないやうだが全く絶斷れてゐた。

親友の自殺それを目前に見る其鮮血淋漓たる亡骸が眼前に横はつてゐる、是れ何の事ぞ、自分は椅子に身體を投げてヂツと富岡の死體を睨視てゐた、此時やゝ感情がはつきりして來たやうであつた、そして始めて夢のやうに感じて眞實夢ではないかと思つた。

しかし夢ではない事實である、富岡は現に死んだのであると思ひ直した、然るにたゞ大れ思ひ直したといふ計りで、夢なる歟と思つたのと別に何の異なる感も起らない、たゞ富岡に現

に死んだのであると確めたばかりであつた、恰も石を指して石なりと確めたやうに。

然り！ 夢と現と此時の自分に何の違ひがあらう、夢を見て夢のうちにこれ事實なりと確めることがある、自分が今現に居て眼前の死の事實を是れ事實なりと確めるのはこれよりも更らに意味も感情もないものであつた。

死の影は此慘澹たる一室を覆うてゐる、しかし自分と富岡の死との間には天地の隔離があつて却て自分の脚底時黒の裡には生きてゐる富岡が分明に微笑してゐる、渠の平常の行爲容貌性癖一口にいへば生命ある活動する平常の渠が極めて分明である、眼を開けると富岡の血にまみれた死體が横はつてゐる、眼を閉じると富岡は生きて現はれて來る、乃ち此時は自分の目前に在る「死」の事實よりも自分の脚底に深く刻まれてゐる「死體」の幻影の方が自分の感情に取つては更らに力ある事實であつた。

此時一陣の風が庭樹にざわついたと思ふと颯と室に吹込んで洋燈の火がフツと消えた、室は暗々黒々。

此暗黒のうち自分の眼底には鮮血に染んだ富岡の死體が分明に現はれた、「死體」の幻影が此刹那に自分の脚底深く刻み込まれた。

自分が再び洋燈を點けた時醫師の後藤といふ三十五六の男がぞろりとした衣装で然然とやつて來た、老婆は呼吸せき乍ら、「先生！ サアどうも大變な事に……」後藤は先づ鼻に自分に挨拶して一寸と死體を見てそして言つた、

「とんだ事で……」「とても駄目らしい御座いますが一應どうか」と自分は亡骸の傍に坐つた、後藤は彼是れと傷などを檢して見たが、

「つまり動脈を切つたので出血のために……」「先生どうか爲すつて……」老婆はおろ／＼聲で言つた。

「イヤ此では別に手術の施しやうもありません。」

醫師は頗る平氣なもので、「動脈を切つては醫師が現場にゐたところが餘程早く手術を加へないと難かしい位ですから」と例の冷然たる風で言つて「どうか水を」と老婆をうながした。

(四)

變死であるから其夜直ぐ警察の方からも出張があつて彼是れの手續も總て式の如くに運

こんだ、自分は先づ番町附近にゐる友人二名に急報して直ぐ来てもらひ此等の人々と共に色々立働らいた、其間は富岡の死んだゝめに奔走し乍ら富岡の死のことは何時しか忘れて了つた如くであつた、たゞ生きてゐる富岡のために何事かを盡してやる心持と左まで相違はなかつた。

富岡の交友は甚だ少なかつたが皆な親密の仲であつたから此等の人々には直ちに電報で知らしてやると五六名の朋友は皆んな馳せつけて来た、誰も彼も愕然たる計りでたゞ何故自殺したのだらうといふ問を發する外別に誰れも言ひやうを知らなかつた、黙然と坐つたまゝ首を垂れてゐる者もある、黙然として涙を呑むものもある、しかし要するに『何故だらう』と互に問ひ合つた。

『大野君、君心當りがあるか』と自分の向に坐つてゐた男が自分の顔を見て問うた、これは自分が諸友のうちでも別して富岡とは懇意であつたからで。

『イヤ僕も頻りと原因を考へて見たが、別にこれといふ程のことがないので不審に堪へないがね、婆さん今日役所から歸つた時の様子はどんなだつた。』

『別にお變りもないやうでしたが、あのそれに平時餘り戲言なんかおツ仰らないものですから少しお顔の色が悪るいやうでしたが、たゞ一寸と出てくるとおツ仰て直ぐ又たお出かけになつていつマア窓からおはひりになつたか私は少しも存じませんでしたよ。』

老婆は涙ぐむだ、ひたすら自身の氣の付かなかつたのを辯解するやうに言つた。
書置らしいものは無論無かつた、日記を見る最後の一句は『空しく今日一日も過ぎぬ』の語であつた、これは別に意味のある言葉ではなく富岡は非常な勉強家であつたから月日の空しく過ぎゆくのを歎息するのは渠の癖の一つで怪しむに足らないといふことは皆んなも同意であつた。

厭世より起つた自殺だらうか、自分も諸友も富岡の人物の裡に何處か厭世の風があることは臆ろに感じてゐたがそれも明らかに意識してゐたのではない、自分とても渠の口から厭世思想を聞いたことはない、さりとして樂天主義をも聞かない、渠はたゞ鷹揚な風でゐて沈鬱な性で非常な讀書家で重に科學に關する英獨の書を讀むでゐた、自分とは重に數學に關する談話を好むだ爲で自分が出す難問をよろこんで研究

した。

さらば氣が狂つたのか、それにしても前兆が少し見えなかつた、それとも突然發狂したのか、自分も人々もたゞ自殺の原因が解らない丈に何故自殺したかといふことのみ不思議で何んだか恐ろしい謎語を掛けられて解き得ないやうな心地がして頗る屈託した、斯くて富岡の自殺したのために互に集まつて来て其原因を推測する中何時しか誰れも富岡の死を忘れてしまつたやうになつた。

『まさか失戀ではあるまいね。』

『まさか。』

『富岡だつて男だもの、それでないとも限らないサ。』

『富岡が失戀のために死ぬるやうな男だらうか、そんな事はなからう。』

『さうも言へないよ。』

『何か心當りでもあるの？』

『イヤそんなことはないがね。』

『富岡のやうな男は却て知れないものだよ、世間によく例がある。』

自分は人々の此等の問答には口を入れなかつた、しかし生きてゐる富岡が臆底に現はれて來て渠の平常の行爲や性癖の實例が彼れより是れ

と連續して思ひ出された、そして自分は其中より失戀の要素を集めんと企てた、無論そんな要素は少しもなかつた、人々も多分心の中で富岡を描て其平常を聯想してゐるだらう、富岡の死體は隣室に臥かしてある、其次ぎの間で吾等は渠の噂をしてゐる、諸友皆な富岡の自殺を痛ましく感じた、それ故に知らず／＼其原因を知りたく思つた、原因を推測してゐる中に何時しか渠の噂をはじめた。

突然の發狂といふ外に誰れも終に原因を見出し得なかつた。

「發狂するものは富岡のやうな人物に多いやうだ。」

「さうとも限らないが富岡のやうな生活をしてゐると誰れでも發狂するだらう。」

「發狂といふと何んだか可笑しな様だがつまり富岡は自分の心の壓力に堪へなかつたのだから。」

「遺傳性ぢやアあるまいか。」

「富岡が或時お父さんも自分で早死をしたとか言つたことがある！」

「自殺かも知れないねエ。」

「さうすると矢張原因は遺傳にあるのかも知れない。」

「さうだらう」と自分も言つた。

人々は漸く満足したやうであつた、それと共に急に富岡の死が痛ましくなつて來た、誰も富岡の友情に厚いことを感じてゐるので、其人が今突然斯る無殘な最後を遂げたかと思ふと悲哀を感じるのは當然である。

「しかしお母さんが來たらどんなに泣くだらう、とても見てゐられないねエ。」

「サア私も其れを思ふと胸がさけるやうで：

：さぞお泣になることだらうと思ふと……それに私が丸で氣の付かないやうで申譯の仕やうが御座いませぬ……」

老婆は涙を止め得なかつた、此時西京から返電が來た、

「ハ、スグタツ」

「マアお母さんが！」と老婆は泣き伏した、自分等は暫らく顔を見合はした。

(五)

自分等は相談の上で西京には先づ急病の由を知らして置た、そして朝になつて死亡の電報を打つことに定め、變死のことは西京の人が着京した上で知らす方がいゝだらうといふこととで其運びにしてゐた、しかし成る可く母が來

ないやうと願がツた甲斐もなくかゝる返電であるから皆んな當惑した。

富岡の母といふは一日見て誰れが目にも神態で感情の強い人だと了解る、果して富岡の亡骸を見ると聲を上げて泣き倒れた、老婆をはじめ自分も其他の友も黙然めやうがない、たゞ自分は悲哀が胸を衝て來て殆ど座にゐたゝまられなかつた。

あはれた母は頻りと老婆に生前の様子を聞いては泣き老婆は富岡の平常の生活の様を小さな事まで語つては泣いた、母は眼を泣き腫らして了つた、自分達に富岡生前の交誼を謝して又た今度の世話の禮を述べ、

「いくら泣たところは何とも爲やうがない、もう止めませう」と言つて涙をはら／＼こぼした、翌日亡骸を落合村の火葬場に送り富岡竹次郎は一片の煙、一握の灰、一盞の白骨となつた。

自分は彼空に突立つ煙突の吐く煙は見ない、それは棺を甕に入れるのは晝間であるが、これを焼くのは夜中だから吾々には見ることが出来ないのである。

自分はお母と共に骨を拾つた、衣服と肉とは灰となつたまゝ軽く骨を包むでゐた。其翌夜の九時五十五分の瀟車で富岡の母は西

京に歸つた、自分は老妻及び四五名の友人とこれを新橋停車場に送つた。

自分が母親の切符を買ひ手荷物の世話などをしてゐる間、母親と老婆とはをり／＼何か話してゐたが二人とも涙ぐむでゐたやうであつた、諸友は少しく二人より離れて立てゐたがこれも亦た只だ茫然と四圍の人々の立ち騒ぐのを眺めてゐた、をり／＼母親が携へてゐる風呂敷包に眼を注ぐものもあつた、これは骨壺を箱に入れてそれを風呂敷で包むたのである。

衆人雑沓のなかで吾等一組は殆んど人の不審を惹く程に沈黙で陰鬱で、たまさか互に物言ふにも私語くやうであつた、鈴のなるや自分は一種の不穩を感じた、老婆は人目も憚からで掌を合して壺を拜むだ、念佛を唱へた。

吾等は列車の動くまで其前に立てゐた、パイプが鳴つて車が前進をはじめると、『左様なら富岡様、左様ならおツ母さま、左様なら！』

と老婆はおろ／＼聲で言つて口の中で念佛を繰返した、自分は一種の離愁を感じた、それは母親に對してではない、實に既に幽明境を分つて居る富岡竹次郎が今更ら西京に歸るのを送ると多少の相違あるだけであつた。人々も

皆な惘然として滾車を見送つた。

(六)

富岡竹次郎なる一個の小官吏が自殺を遂げた其原因は發狂である、諸友が其死後の世話をした、母親が國元から來て其白骨の壺を持ち歸つた、諸友はこれを新橋停車場に見送りした、斯く言へば自分の物語は極めて單純である、又た殆ど何の意味もないものである、然るに自分は最初富岡の書齋で渠の死骸を見てよりこのかた母親と富岡の骨とを停車場に送るまでの間の自分の心理的傾向を反省し併せて諸人の舉動を観察して知らず／＼一瞬の意味深き事實に衝突つた。

其後ち自分は暫時らく此事に思ひ悩やむで今益々自分を苦めてゐる。

意味深き事實とは人は容易に一死一其者を直視することが出来ない、従つて其測り知られざる大不思議に汀たれることが出来ないといふことである。

自分は親友富岡の死を哭した、母親は眼を泣き腫らした、然し其れが何んであるか、これは唯だ生命を希ふ生物的本能が恩愛の情と化合して發する對死者にする同情たるに過ぎない、

そして大概は我と彼との離別を悲しむのである、されば人は多く死者が未來に永劫の生命を有つといふ信仰と彼我決して無窮の離別ではないといふ信仰とに由て其悲哀を慰めることが出来る、さなくば大概は人力及び難きことと、綱念めるのである、未だ死を哭するといふことを以て一死其者の秘義に汀られたとはいへない。

自分は富岡と交際して其生命ある一個の男を腦底深く印象してゐる、渠の鮮血淋漓たる亡骸を視て又たこれを頭腦に刻み込むだ、其灰と白骨とを見て又たこれが印象を頭に打ち込むだ。自分は更らに煙場の煙突から立ちのぼる煙を想像した、深夜の辰星光を加ふる時一道の青煙が煙突の口から吐き出されて暫時く大空を漂ひ次第に其形を失つて空中に融け去るのを想像した、そして其想像が又た自分の頭に實見したものの如く印象された、自分が富岡の死を思ふ時は此等の形體的變化が環のやうに再現して來るに過ぎない。

自分はたゞ斯く腦の幻影を追うてゐて遂に一死其者を見ることが出来ないのである。微笑する富岡の幻影は確かに富岡其人の幻影である、鮮血に染むて室内に横はる幻影は半ば

富岡其人の幻影で半ば普通人間の死體其者の幻影である、灰に包まれた白骨に至つては已に殆んど灰と白骨其者の幻影であつて富岡には何の關係もない、されば富岡の死を思ふ時此等の幻影を追うてゐながら遂に自分の腦底には富岡が微笑してゐる、されば地上何れの處にか果は生存してゐると思ふのと大差がない。

つまり生命ある富岡の幻影の方が「死」其者より自分に取つては力があつたのである、自分はこれに由つて推測した、普通人が親や子や朋友の死んだ富座は大變これに動かされるが時が立つと次第に薄らいで来るのは、つまり死者生前の幻影のみが長く腦底に残つてゐて其人を思ひ出す毎に微笑して現はれて来るからだらうと。醫師後藤が富岡の死體に向て何等の感動をも起さずたゞ動脈を切つたから死んだのだといつて平然たるのと諸友が自殺の原因を推測して遂に發狂と定めて満足したのと何の相違があるか。醫師は極めて「死」に對して冷淡である、しかし諸友とても五十歩百歩の相違に過ぎない、吾等は生から死に移る物質的手續を知ればもう「死」の不思議はないのである、自殺の原因が知れた時はもう其れ丈で何の不思議もないのである。

自分は以上の如く考へて來たら丸で自分が一種の膜の中に閉ぢ込められてゐるやうに感じて來た、天地凡てのものに對する自分の感覺が何んだか一皮隔てゝゐるやうに思はれて來てたまらなくなつた。

そして今も悶いてゐる自分は固く信ずる、面ツラエス、直ちに事實と萬有とに對する能はずんば「神」も「美」も「眞」も遂に幻影を追ふ一種の遊戯たるに過ぎないと、しかしてたゞ斯く信ずる計りである。

(明治三十一年六月)

波
の
音

二

自分は同じ一郡でも海岸から三四里も奥の山の手の方ばかり勤めて居たのが、今度は始めて海濱に轉任を命ぜられて、尋常の生徒七八十人をあづかる事となつた。

自分には家がないから學校に寢泊りすることにした。そして助手は村の者ゆゑ、外から通ふ。すべて此學校の校長となつたものは此例に洩ないさうである。

尤も自炊ではない。清兵衛といふ老爺が給仕で小使で、煮焼其他の女のする役ともいふべきを一手に引受けてやつて呉れる。この老爺は學校の前の縣道を越えた田圃に在る小さな茅屋に住んで居る。これは百姓の住古した家に多少の修繕を加へたるに過ない、校舎が狭いから小使の住む處がないからである。何事も御檢約の世の中、殊に教育費だけは差當つて品物にならないと云ふ所から切つめるだけ切つめる世の中のことしあれば、是等は寧ろ當然で

あると何人も怪しまない、自分も怪しまない。たゞ如何にも淋しい。此校舎に一人で寢て居ると思ふと淋しくて堪らない。遠い生徒は一里半、近いと云ふも五六丁を通ふ生徒を有つ此の孤屋の住居は、自分ばかりでなく、誰でも淋しさを感ずるだらうと思ふ。

山の手に居た自分は當直以外、大概は大農家の一室など借りて居たから頗る安氣であつたのが、今度は流罪の状態である。

流罪には恰度ふさはしき波の音だ、來た晩から耳についてならない。學校の前を西から東へ通ずる縣道が一丁ばかり先で急に右折する、其の曲り角から下ると濱で北の海を受て居る。

自分の來たのは冬の眞中であるから別して波の音が物すごく聞える。第一夜の晩は其中にも激しかつたので自分は眠ることが出来ない。洋燈を消して、眞暗な中で、夜具から頭を出して聴耳を立て、居ると、大地に響き、虚空に反響する重々しい音の中に、物の軋るやうな音、叫ぶやうな聲、千萬の人が古いく、昔の世に居て何

等かの哀歌を合唱するやうな聲、——それから、それへと空想を馳せて聞くと果がない。

嘗て或學校に居た時、何人が貼着けたのか當直部屋の壁に一枚の繪がある。西洋雜誌の切抜らしい。荒涼たる海濱の眞夜中とも覺しく、

海から老若男女の裸體の亡者が數限りなく躍り出て舞踏して居る様を畫いたもので、名畫か何か少も解ないけれど、一見人をして物すごく思はしたのである。其畫が生憎と眼の先にちらつく。學校から波打際までは三四丁しか無い。

浪の有様が恰度亡者の畫と同じやうに眼の先に現れて来る。そして叫ぶやうな聲は亡者共の舞踏の歌とも聞える。

午前二時の柱時計が打つても寢られないので、かゝる場合に何人も能く起す一種の反撥心、別して神經質の人には有りがちな反撥心を奮ひ起した。

濱へ出て見ると決心した。脱ぎ捨てた綿衣を寢衣の上に引かけ、更にどてらを着て、太いステツキを携へて外へ出た。冬の夜は能く晴れて星の光は冴きつて居る。星光で左迄暗くない縣道の曲り角を左、其處から砂山の長堤が東へ連り、校舎の在る丘の斷崖が右手に聳つ、此間に急な下道がある。それを駈け下りると濱へ

出る。

自分は空想の濱から現實の濱に出た。朦朧たる怪異の幻影は消え去せて、森嚴なる、壯大なる、そして眞に物すごき海濱が自らの眼前に廣つて居る。北風はピュ／＼吹きすすんで、波濤は轟々と鳴り響く。星光低く垂るゝ水天の界は初め遠く／＼して自分を引きこむやうに思はれたのが、ちつと見つめて居ると次第と近き來つて果は眼前に迫り自分を壓倒するかと思はれた。間近に直立した白濤が一端から崩れて灰色の雲を巻きつゝ、矢の如く渚を走る。

倒れては流れ、流れては起ち、相せめぎ、重り、亂れ狂ふ現象が若し少しの音も立てずば更に物すごかるべしなど思ひながら、ちつと眺めて居ると、其刹那に自分は校舎で聞いたあらゆる音を忘れて了つた。そして間近の渚から次第に遠く眼を移つして、四五丁の處までゆくと、今まで全然眼に入らなかつた異形のものを見出した。同時に全身、冷水をあびた心地がした。すかし見ると猿ほどの大きさと思はるゝが、波を追ひ、波に追れ、そして折り／＼躍り上がる、自分は大意で學校に歸り夜具を被つて縮み上つて居ると、疲れたので何時の間にか眠つて了つた。

(二)

晝の中は生徒を相手の忙しい身であるから何事も打忘れて居るが、夜になると角波の音が耳についてならない。そして例の如く種々の空想に耽る、必ず彼の異形の者を思ひ出す。不快で堪らないけれど、まさか異形の者を見た人に言つて問ふ譯にもゆかない、自分の妄想の作用かも知れないと、尙ほ人に聞くわけにゆかない。

その内一月も経ちて頃は二月の末であつた。夜の十二時過ぎ、戸を激しく叩いて「先生様、先生様！」と呼ぶ者がある。がばと跳起きて、「誰だ？」と怒鳴つた。

「清兵衛で御座ります。」

「何だ、今時分」と言ひながら寢衣の上にとどてらを引かけて戸を開けると、小使の清兵衛爺さんが其處に直立つて居る。

「何だ？」

「遅く起してお氣の毒ぢやが、今、磯村善助様の子息と若い者が来て、先生様に直ぐ来て呉れといふのぢやが、行つてやりますか」と問はれて自分は何の事とも解らず、但し磯村善助といふは此近郷で第二流位の大農家なること

は既に承知して居たのである。且つ彼の娘の十一になるお繁が尋常四年の生徒である事も知て居た。

「お繁といふ娘をお知りで御座りますか。」

「うん知つて居る、私の可愛がつて居る子だ。」

「それが今、死にかけて居るので御座います。」

「それは氣の毒だ、一週間ばかり學校を休んで居たが、さうか？」

「それで、先生様、先生様と囁語に申して居るので、親共が歎きまして、せめて死際に先生様に一日遇はしてやりたいと、それで今お迎ひに來たので御座ります。可憐さうだ！ 行つておやりなされませ。」

風邪で休んで居る位に思つて居たのが、死にかけて居るとは自分も驚いた、色白の、丸顔の、眼のパチリとした可愛い娘。

「それは氣の毒だ、直ぐ行かう。」

「先生様は必定行くから、私が連れて行くから」と言うて使者を遣しました。それではこれから直ぐ參じませう。」

そこで二人は出かけた。外は寒いこと／＼。

濱に下る所から直線に砂山の土堤の内側を通ずる小徑を辿つて十町以上も行くと、右に折れて間もなく磯村の家へ着いた。

初て来て見ると成程、可なりな構造である。馬鹿丁寧に迎へられ、直ぐに一室に通されると、其處にお繁が寝て居る。八字髭を生した若い醫師、お繁の父母、其他に十七八とも覺しき娘、十四五の男兒、二十一の此家の長男らしい青年など心配顔に居並んで居る。小僧の清兵衛も席木に列した。

「お繁や！ 先生様が來ましたよ。サア先生様が來ましたよう」とおろ／＼聲で呼んだ。

少女は眼を開けて、自分を見て、ニツこり笑つて、起き上らうとする。若いドクトルは急に、起してはいけませんと止める。

自分は思った、これが死ぬ程の病人だらうかと。けれども専門のドクトルが左様診断なされたのを疑がふわけにもいかない。

磯村さんと言ひかけて、これは學校の呼名であるから、直ぐ改ためて、

「お繁さん、病氣は直ぐ癒るよ。安心してお薬を飲むのだ。私が癒ると言うたら必定と癒る、先生が癒ると言うたら必定と癒る、平癒たら學校へ出るのだ。卒業前だから、しつかり仕るのだ！」

思ひ切つて斯う言つて置いて、清兵衛と共に歸路に就いた。

「オイ老爺さん、彼の醫師は何と言ふのだ。」
「諸岡さんと申します。」
「確實かの。」
「さて？」

「私はお繁は死ななと思ふ。」
「老爺も左様思ひます。」

「イヤな醫師だ」と獨言のやうに言ふと、清兵衛は、

「ウ、フン」と妙な聲を出したざり、無言で歩む。二人ともすたこら／＼大急ぎで歩む。寒い。

海は荒れて居る。波は怒號して居る。而も風なく、空は薄曇。道程の程まで來ると突然清兵衛が足を止めて、

「先生様、あれを御覽うじろ。早く隠くれませう。」

自分は前途をすかし見て、何とはなしに驚いて老爺のするがまゝに、砂山の藪の中に、もぐり込んだ。

「何だい彼者は？」と自分は老爺の耳に口をつけて聞いた。

「狂人！」
「男か女か？」

「女！ 少し黙言つて居て御座りませ。」
二人はしゃがんで小さくなつて居ると、何事

か喚きながら此方へ駈けて來て、自分達の居る所で、バタリ足をとめ、暫時考がへて居たが、自分達の直ぐ傍を掻き分けて、猿の如く敏捷に砂山の頂上につつた。お互の距離は五六間、過ないので、狂女の姿こそ能く見えないうが、其言ふことは、
「オーイ／＼」と沖を見て呼んで居たが、間もなく海濱の方へ駈け下りた。

其内に二人は大急で歸へる。其途中で、此狂女は夫が漁に出て溺死したのが原因で狂氣になり、今では親家に歸つて居るといふ話を清兵衛が仕て聞かした。

但し、此狂氣は折り／＼思ひ出したやうに起るので、毎日毎夜の事ではないとのことである。自分が最初、此學校に來た晩、濱で見た、異形の物は此狂女であつたと思ひあつた。

(三)

縣道まで歸ると、清兵衛は自分に向ひ、
「今夜は淋しくつて寝る事も出来ませぬ。私處へ來て爐にあたりながら話すこと、致しませう。最早夜の明けるの間が御座りませぬ。」
自分は直ぐ同意して清兵衛の家に伴はれた。小さな農家の一間に爐が切つてある。一

間と辨明る程の事のない、一間しかないのである。清兵衛はドブロクを提出して自分には何の頓着もなく飲みながら、

『先生様、磯村の娘を見ましたか。』

『姉様の事か。』

『さうとも。今夜母親の傍に居た娘。』

『可愛い娘だの。』

『それなら此ドブロク一杯飲むのぢや』と清兵衛や酔つたらしく、一合もはひりさうな湯呑を自分に突つける。自分は受けてなみく〜とついで貫つて飲み干して返へした。まさかドブロクの一杯や二杯にはめげない積りと思ひの外、平常、酒に慣れて居ないので直ぐ酔つて了つた。

『先先！ あの子を嫁にしる！』

『嫁にする前に嫁に呉ると言ふ不都合なかけやひがある。清兵衛さん、それをやつてくれるか。』

『やるとも。あの娘は必定先生様にほれて居ると私は今夜、ちやんと見て取つた。』

『ほれて貰へば尙ほ有難い、それぢや清兵衛様に萬事頼んだ。』

と自分は面白半分にあへて、清兵衛を見ると彼れは既に居眠を初めて居た。

自分も爐の暖かさに眠くなつて来て可い心

持になつて身も溶さうである。波の音が遠く聞えて、何時の物すごさを感じない。

『喃、先生様！』と老爺は突然頭を擧げて、『あんな娘は佳えぢやらう。』

『佳ささうだ。』

『佳えとも、是非貰て上ますぞ』といふ中まただんく老爺の頭が下つて来る。…自分もとりとしたと思ふや戸の透き間から天明の薄光が射して居た。

(明治四十年一月)

號

外

襦袢洋服を着た男爵加藤が、今夜もホールに現はれて居る。彼は多少キじるしだとの評がホールの仲間にあるけれども、恐らくホールの御連中にキ的傾向を持って居ない方はあるまいと思はれる。かく言ふ自分も左様、同類と信じて居るのである。

此處に言ふホールとは、銀座何丁目の狭い、窮屈な路地に在る正宗ホールの事である。

精一本の酒を飲むことの自由自在、孫悟空が雲に乗り霧を起すが如き、通力を持って居玉ふ「富豪」「成功の人」「カーネギー」「何とかフェラー」「實業雑誌の食物」の諸君に在りては何でも無いでせう、が、我等如きに在りては、でない、左様でない。正宗ホールでなければ飲めません。

感心に美味い酒を飲ませます。混成酒ばかり飲まず、此不愉快な東京に居なければならぬ不幸な運命のおたがひに取てはホールほどうれしい所はないのである。

男爵加藤が、何時も怒鳴る、何と言うて怒鳴

る、「モーター一本」というて怒鳴る。

彫刻家の中倉の翁が何というて、其太い指を出す、「一本。」

悉く飲み仲間だ。悉く結構!

今夜も「加と男」がノツソリ御出張になりました。「加と男」とは「加藤男爵」の略稱、御出張とは、特に男爵閣下に我れく「平民乃至、平ザムラヒ共が申上げ奉る、言葉である。けれども差向へば、些の尊敬をするわけでもない、自他平等、海藻の佃煮の品評に餘念もありません。

「戦争が無いと生きて居る張合がない、あゝツマラ無い、困つた事だ、何とか戦争を始める工夫はない者か知ら。」

加藤君が例の如くはじめました。「男」はこれが近頃の癖なのである。近頃とは、ポーツマウスの平和以後の冬の初の頃を指す。

中倉先生は大の反對論者で、斯ういふ奇抜な事を言つた事がある。

「モシ出来る事なら大理石の塊のまん中に半

人半獸の二人が噛合つて居る處を刻つて見た、塊の外面に其のからみ合つた手を現はして。といふ次第は彼等争鬪を續けて居る限りは其自由を得る時がない。則ち幽閉である。封じ且つ縛せられて居るのである。人類相争ふ限り彼等は未だ、其眞の自由を得て居ないといふ意味を示して見たいものである。」

「お示しなさいな。御勝手に。」「男」は冷やかに答へた事がある。

其處で「加と男」の癖が今夜もはじまつたけれど、中倉翁、最早や強て對手になりたくもない風であつた。

「大理石の塊で刻て貰ひたいものがある、何だと思はれます、我黨の老美術家。」加藤は先づ當りました。

「大砲だらう」と中倉先生も仲々これで負けないのである。

「大差ひです。」

「それなら何だ、解つた〜。」

「何だ」と今度は「男」が問うて居る。

二人の問答を聞いて居るのも面白いが、見て居るのも妙だ、一人は三十前後の瘦がたの背の高い、汚ならしい男、けれども何處かに野人ならざる風貌を備へて居る、しかし何と言ふ亂

暴な衣裳だらう、古ぼけた洋服、鼠色のカラ
ー、靴を入れない亂髪！一人は四十幾歳、頂
邊が禿て居る。比ぶれば幾干か服装は優つて居
るが、似たり寄たり、故二人とも洋服を着て
居るか、寧ろ安物でも可いから小ザツぱりした
和服の方が可さうに思はれるけれども生憎二
人とも一度は洋行なるものをして、二人とも横
文字が讀めて、一方はポルテイヤとか、ルーソー
とか、一方はラファエルとか何とか、若し新聞記
者ならマコーレーをお題目としたことのある連
中であるから、無理もない。斯く申す自分がカ
ーライル！隅の方にやり／＼笑ひながら、
グビついて居るゾラも在り。

綿貫博士が傍で皮肉を言はない丈けが未し
も、先生が居ると問答が殊更に込み入る。
「解つたとも大解りだ」と楠公の祠に建られ
て、ポーツマウス一件の爲めに神戸市中を曳ず
られたといふ何侯爵の銅像を作つた名譽の彫
刻家が小兒のやうにわめいた。
「イヤとても解るものか、私が言ひませうか」
と加と男。

「言うて見なさい」と今度は又彫刻家の方から
聞く。
「僕が言うて見せる」と遂に自分が口を入れて

お仲間に入つた。
「何です。」男が意味のない得意の聲を出し
た。
「戦争の神を彫て呉ると言ふのでせう。」
「大ちがひ！」
「則ち男爵閣下の御肖像を彫て呉るといふの
でせう。」

「ヒヤ／＼、それだ／＼大に僕の意を得たり
だ、中倉さん全く僕の像を彫て貰ひたいので
す、斯く申す「加と男」其人の像を。思ふにこれ
は決して困難なる業でない。この如く殆ど毎晩
お目にかゝつて居るのだから、中倉君の眼底に
は歴然と映刻せられて居るだらうと思ふ。」
「そして題して戦争論者とするが可からう」と
自分がいふ。

「敗け戦の神といふ方が適當だらう」と中倉先
生は亦た、自分が言はんと欲して言ふ能はざる
事をいふ。
「題は僕自身がつける、敢て諸君の討論を煩
はさんやだ、僕には僕の題がある。何しろ御承
諾を願ひたいものだ。」
「行りませうとも。王侯貴人の像をイヂくるよ
りか、それは我黨の「加と男」の爲めに、ぢやアな
い、爲にぢやアない、「加と男」をだ、...をだ

をだ、...。だから承知しましたよ。承知の
出だ。加と公の半身像なんぞ、眼をつぶつても出
来る。これは面白い。是非やつて見ませう、だ
が、先生、此時、チョイと、眼を凝じてメイト
ルグラスの番人を見た、これはおかはりの合圖。

「だが、...コーツト、老人は老人らしい、接續
詞を用かふ。」題は何と致しませう、男的閣下。
題は、題は、」

「だから言ふぢやアないか、題は乃公が、乃公
が考案があるから可と言ふに。」
「エーと仰せられましたも、エーで御座せんだ。
...：面倒臭え、モーやめた。やめた、...加と
男の肖像をつくること、やめた！ねえ、さう
ぢやアないか満谷の大将」と中倉先生の氣短少
しくあがる。自分が満谷である。
「今晚は」と柄にない聲を出して、同じく洋服
の先生が入つて来て、も一ツの卓に着席で、我
等に黙禮した。これは、すぐ近所の新聞社の二
の面の(三)の面の人は概して、飲みさうで飲まな
い豪傑兼愛嬌者である。けれども連中、何人も
黙禮すら返さない、これが定例である。
「さうですとも、考案があるなら言つたが可い
ぢやアないか、加藤さん早く言ひ玉へ、中倉先
生の御意に逆らうては萬事休すだ」と満谷なる

自分がオダテた。ケンかけた。
 「號外といふ題だ。號外、號外！ 號外に
 限る、僕の生命は號外に在る。僕自身が號外
 である。然り而して僕の生命が號外である。
 號外が出なくなつて、僕死せりだ。僕は、これ
 から何をするんだ。」男の顔には例の慘痛の色
 が現はれた。

げに然り、我が加藤男爵は何を今後に爲す
 べきや。彼は兎も角も衣食に於て窮する所な
 し、彼には男爵中の最も貧しき財産ながらも、
 猶且つ財は是れ在り、狂的男爵の露命をつな
 ぐ上に於て、何のコマルところは無いのである
 が、彼は何事も爲て居ない。

一露西亞征伐に於て初て彼は生活の意味を得
 た。と言はんよりも寧ろ、國家の大難に當りて
 これを舉國一致で喜憂する事に於て其生活の
 題目を得た。ポーツマウス以後、それが無くな
 った。

彼れ男爵、たゞ酒を飲み、白眼にして世上
 を見てばかり居た加藤の御前は、がっかりして
 了つた。世上の人は悉く、彼等自身の問題に
 走り、それが爲めに喜憂すること、戦争以前のそれ
 の如くに立ち返つた。けれども、男は喜憂の日
 的物を失なつた。即ち生活の對手、もしくは

まゝ、或は生活の煽動者を失なつた。
 が、がっかりしたのも無理はない。彼の戦争論者
 たるも無理はない。

「號外、成程加藤男の彫像に題するには何よ
 りの題目だらう、……男爵は例の如く其のポ
 ケットから幾多の新聞の號外を取り出して、

「號外と僕に題するに於て何かあらんだ。ね
 え、中倉君、是非、その題で僕を、一ツ作つて貰
 ひたい。……こんな風に讀んで居る處なら猶更
 にうれしい」と朗讀をはじめた。

第三報、四月二十八日午後三時五分發、同月
 同日午後九時二十五分着。敵は豐河右岸に沿
 ひ九連城以北に工事を繼續しつゝあり廿八日も
 時々砲撃しつゝあり廿六日九里島對岸に於て斃
 れたる敵の馬匹九十五頭外に生馬六頭を得たり

「どうです鴨綠江大捷の前觸だ、うれしかつ
 たねえ、彼の時分は、胸がどきどきしたものだ」
 と更に他の號外に移る。

——戦死者中福井丸の廣瀬中佐及び杉野兵曹
 長の最後は頗る壯烈にして同船の投鐘せんと
 するや杉野兵曹長は爆發藥を點火する爲め船
 艙に下りし時敵の魚形水雷命中したるを以て遂
 に戦死せるものゝ如く廣瀬中佐は乗員を端艇に

乗移らしめ杉野兵曹長の見當らざる爲め自か
 ら三たび船内を搜索したるも船體漸次に沈没海
 水甲板に達せるを以て止むを得ず端艇に下り本
 船を離れ敵彈の下を退却せる際一巨彈中佐の
 頭部を撃ち中佐の體は一片の肉塊を艇内に殘し
 て海中に墜落したるものなり——

「どうです、聽いて居ますか」と加藤男爵は問
 へど、常時のことゆゑ、聽いて居る者もあり、
 相手にせぬ者もある。けれども御當人は例に依
 りて夢中である。

「どうです、一片の肉塊を艇内に殘して海中に
 墜落したるものなり——何といふ悲壯な最後だ
 だらう、僕は何處讀んでも涙がこぼれる。」
 醉が廻つて來たのか、それとも感慨に堪へぬ
 のか、眼を閉ぢてうつら／＼として體を動搖つ
 て居る。恐く此時が彼の最も樂い時で、又た
 生きて居る氣持のする時であらう。しかし間も
 なく眼を開けて、

「けれども、だめだ、最早だめだ、最早戦争は
 止んぢやつた、古い號外を讀むと、何だか急に
 歳をとつて了つて、生涯がお終結になつたやう
 な氣がする、……」

「妙、妙、其處を彫るのだ、其處だ、成程號外
 の題は面白い、成程加藤君は號外だ、人間の號

外だ、號外を読む人間の號外だ」と中倉翁は感心した聲を出す。

「其處といふのは。」加藤男が聞く。

「其處とは君が號外を前へ置いて甚くがっかりして居る處だ。」

「それは不可ない、そんな氣のきかない處は御免を被むる、——」と彼の語記し居る公報の一つ、常に朗讀といふより朗吟する一つを初めた、

「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直に出動之を撃滅せんとす本日天候晴朗なれども波高し——此處を願ひます、僕は此號外を読むと堪らなく喜しくなるのだから——是非此處を行つて下さいな。」

中倉先生微笑を含んで暫時黙つて居たが、

「それぢやア、貴君に限つた事はない。誰でも今の公報を読めば愉快だ、それを讀んで愉快な氣持になつて居る所なら平凡な事で、別に此大先生を煩はすに及ぶまいハ、ハ、ハ、」

「何故だ、これは可笑い、何故です」と加藤號外君、せきこんで詰問に及んだ。

「號外から縁がなくなつて君ががっかりして居る處が君の君たる處ぢやアないか。」

「大に然りだ」と自分は賛成する。

「それぢやア諸君は少しも落膽しないのか」と

加藤君大に不平なり。

「どうだらう？ 満谷君と中倉先生も少し此間には困つたらしい。自分も即答は爲難たが加藤男爵の事に就て策て多少か考へて見た事のあるので、

「さうですわねえ、全然落膽しないでもないだらうと思ふ、といふ理由は戦争最中はお互に何人でも國家の大事だから、朝夕これを念頭に置いて喜愛したのが、それがお止になつたのだから、氣拔の體に一才何人もなつたに相違ない、それを落膽と言へば落膽でせう。」

「そら見玉へ、僕ばかりぢやアない、決してない、だから、喜んで居る所を影のが平凡ならばだ、落膽して居る處だつて平凡だらう、どうですわね、中倉の大先生」と加と男や、得意なり。

「だつて君のやうなもの無い、君は號外が出ないと生きて居る張合が無いといふ次第ぢやアないか」と中倉翁の答頗る可し。

「ぢやア僕ががっかりの總代といふのか」と加藤男亦た奇抜なことをいふ。

「だから君は我々の號外だ」と中倉翁の言更に妙。加藤君此時、椅子から飛上つて、

「流石、中倉大先生様だ、大に可からう、落膽

した處、人に可からう、是非願ひます、題して號外、妙、妙」と大満足なり。

それから一時間ばかり更に談じ且つ飲み、中倉翁は一足お先に、一加と男、閣下はグウグウ卓にもたれて眠て了つたので、自分はホールを出た。

銀座は銀座に違ひないが、成程我が「號外」君も無理はない、市街まで落膽して居るやうにも見える。三十七年から八年の中頃までは、通りがりの赤の他人にさへ言葉をかけて見たいやうであつたのが、今では亦た以前の赤の他人同志の往來になつて了つた。

其處で自分は戦争でなく、外に何か、戦争の時のやうな心持に萬人がなつて暮す方法は無いものか知らんと考へた。考へながら歩るいた。

(明治三十八年九月)

戀を戀する人

(一)

秋の初はじめの空そらは一片ぺんの雲くももなく晴はれて、佳いい景色けしきである、青年せいねん二人ふたりは日光にっこうの直射ちせつを松まつの大木おおいの蔭かげによけて、山芝やましばの上に寝轉ねころんで、一人ひとりは遠とほく相模灘さまみを眺め、一人ひとりは讀書どくしょして居ゐる。場所ばしょは伊豆いずと相模さまみの國境こくがいにある、某たがひ温泉おんせんである。

溪流たがひの音おとが遠とほく聞きゆるけれど、二人ふたりの耳みみには入はらない、甲かの心こころは書中しよちゆうに奪うばはれ、乙おつは何事なにごとか深く思考おぼひに沈しづんで居ゐる。

暫時しばらくすると、甲かは書籍しよせきを草くさの上に投なげ出だして、伸のびをして、大欠おほくちがをして、

『最早もうちう宿しゆくへ歸かへらうか。』

『うん』と應たへたざり、乙おつは見向みむきもしない。すると甲かは巻煙草まきえんそうを出だして、

『オイ君きみ、隣寸なみすんを借かせ。』

『うん』と出だしてやる、そして自分じぶんも煙草えんそうを出だして、甲か乙おつ共ども、のどかに喫煙きつえんひだした。

『君きみは如何いか思おもふ、縁えんとは何なにぞやと言いはれたら？』
と思考おぼひに沈しづんで居ゐた乙おつが静しずかに問とうた。

『左様さやうサね、僕ぼくは忘わすれて了しまつた。…何なにとか言いつたツけ』と甲かは書籍しよせきを拾ひろひ上あげて、何なに氣きなく答こたへる。乙おつは其そのを横よこ目で見みて、

『まさか「水力電氣論」の中には説明せつめいしてあるまいよ。』

『無いとも限かぎらん。』

『あるなら、其内そのうち搜さがして置おいて呉くれれ給たまへ。』

『よろしい。』

甲か乙おつは無言むごんで煙草えんそうを喫すつて居ゐる。甲かは書籍しよせきを拮操ひやくそうつて故意こぎと何なにか搜さがして居ゐる風ふうに見みせて居ゐたが、

『有あつたよ。』

『ふん。』

『眞實まじつに有あつたよ。』

『教おしへて呉くれれ給たまへ。』

『實じつはヤツと思おもひ出だしたのだ。圓えんとは…何なにだツたけナ…圓えんとは無限むげんに多おほ数かずなる正多角形せいたかくけいとか何なにとか言いつたツけ』と、眞面まじめ目めである。

『馬鹿ばか！』

『何なにんで？』

『大馬鹿おほばか？』

『君きみよりは少すくばかり多おほ智ちな積つみで居ゐたが。』

『僕ぼくの聞きいたのは其圓そのえんぢやアないんだ。縁えんだ。』

『だから圓えんだらう。』

『イヤこれは僕ぼくが悪わるかつた、君きみに向むかつて發はすべ

き問とではなかつたかも知しれない。まア静しずかに聞きき

給たまへ、僕ぼくの問とうたのは…』

『最も活動かつどうする自然力しぜんりきを支配しはいする人間にんげんは最もつと

も冷靜れいせいだから安心あんしんし給たまへ。』

『豪ごういよ。』

『勿論もちろん！ そこで君きみの謂いふ所ところのエンとは？』

『歸かへらうぢやアないか。歸宿かへしゆくつて夕飯ゆふめしの時とき、ゆ

るく論ろんずる事ことにしよう。』

『サア歸かへらう！』と甲かは「水力電氣論」を懐中かちゆう

押おしこんだ。

かくて仲善なかつたき甲乙かおつの青年せいねんは、名なばかり公園こうえんの

丘かみを下くだりて温泉宿おんせんしゆくに歸かへる。日ひは西にしに傾かたむいて

溪たにの東ひがしの山々やまは日映ひばゆきばかり輝きらやいて居ゐる。

まだ炎熱えんねついので甲乙かおつは閉口へいこうしながら溪流たにに沿たづ

た道みちを上流じやうりゆうの方ほうへのぼると、右側みぎがはの向根細工むかひねこを

賣うる店先みせさきに一人ひとりの男おとこが往來わうらいを背せにして腰こしをか

け、品物しんぶつを手てにして店みせの女主人おんなしゆじんと談話だんわして居ゐる

のを見みた。見て行いき過すぎると、甲かが、

『今いまあの店みせに居ゐたのは大女君おほおんなぢやアなかつた

「か？」

「僕も、そんな気がした。」

「後姿が背で居た、確に大友だ。」

「大友なら宿は大東館だ。」

「何故？」

「僕が大東館を撰らんだのは大友君かうはなしを聞いたのだから。」

「それは面白い。」

「きつと面白い。」

と話しながら石の門を入ると、庭樹の間から見える縁先に十四五の少女が立つて居て、甲乙の姿を見るや、

「神崎様！ 朝田様！ 一寸来て御覽なさい。」

「面白い物がありますから。早く来て御覽なさいよ！」と呼ぶ。

「又た蛇が蛙を呑むのぢやアありませんか？」

と「水力電氣論」を懐にして神崎乙彦が笑ひながら庭樹を右に左に避けて縁先の方へ廻る。

少女の室の隣室が二人の室なのである。朝田は玄關口へ廻る。

「ほら妙なものでせう」と少女の指さす方を見ても別に何も見當らない。神崎はきよろしくしながら、

「春子さん、何物も無いぢやアありませんか。」

「ほら其處に妙な物が。……貴様お眼が悪いのねエ。」

「何物です。」

「百日紅の根に丸い石があるでせう。」

「彼れが如何したのです。」

「妙でせう。」

「何故でせう」といひながら新工學士神崎は石を拾つて不思議さうに眺める。朝田は此時既に座敷から廻つて縁先に來た。

「オイ朝田、春子さんが此石を妙だらうと言ふが君は何と思ふ。」

「頗る妙と思ふねエ。」

「ね朝田様、妙でせう」と少女はにこく。

「さうですとも、大に妙です。神崎工學士、君は昨夕酔拂らつて春子様をつかまへてお得意の講義をして居たが忘れたか。」

「ね朝田様！ その時、神崎様が巻煙草の灰を掌にのせて、此灰が貴女には妙と見ませんかと聞かから、私は何でもないといふと、だから貴女は駄目だ、凡そ宇宙の物、左羅兩象、妙ならざるはなく、石も木も此灰とても面白からざるはなし、それを左様思はないのは科學の神に歸依しないのだからだ、とか何とか、難事しい事をべら／＼何時までも言ふんですもの。私、

眠くなつて了つたわ、だからアーメンと言つたら、貴下怒つちやつたぢやアありませんか。ねエ朝田様。」

「さうですとも、だから其石は頗る妙、大に面白しと言ふんですねエ。」

「神崎様、昨夕の敵打ちよ！」

「たしかに打れました。けれど春子様、朝田は何時も靜謐で酒も何にも呑まないで、少しも理窟を申しませんからお互に幸福ですよ。」

「否、お二人とも随分理窟ばかり言ふわ。毎晩毎晩、酔ては討論會を初めますわ！」

甲乙は噴飯して、申し合したやうに浴衣に着かへて浴湯に逃げだして了つた。

少女は神崎の拾た石を拾つて、百日紅の樹に倚りかゝつて、西の山の端に沈む夕日を眺めながら小聲で唱歌をうたつて居る。

又た少女の室では父と思しき品格よき四十二三の紳士が、此宿の若主人を相手に圍碁に夢中で、石事件の騒などは一切知らないでバチ／＼やつて御座る。そして神崎、朝田の二人が浴室へ行くと間もなく十八九の愛嬌のある浪が圍碁の室に來て、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

「家兄さん、小田原の姉嬢が參りました」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げて、

やゝ不安の色で、

『よろしい、今ゆく。』

『急用なら中止しませう』と紳士は一寸手を休める。

『何に關ひません、急用といふ程の事ぢやないんです』と若主人は直ぐ盤を見つめて、石を下しつゝ、『今の妹の姉にお正と、ふのが居たのを御存じでせう。』

『さうでした、覚えて居ます。可愛らしい住い娘さんでした』と紳士も打ちながら答へる。

『そのお正が此春國府津へ嫁いだのです。』

『それはお日出度い。』

『ところが餘りお日出度くないんでしてな。』

『それは又？』

『どういふものか折合が善くありませんで。』

『それは善くない。』

『それで今日来たのも、又何か持上つたのでせう。』

『それでは早く行く方が可い。』

『なに、どうせ二晩三晩は宿泊のですから急がないでも可いのです』と平氣で盤に向つて居るので、紳士も其氣になり何時かお正の問題は忘れて了つて居る。

浴室では神崎、朝田の二人が、今夜の討論會

は大友が加はるので一倍、春子さんを驚かすだらうと語り合つて楽しんで居た。

(一)

箱根神工の店では大友が種々の話の末、漸とお正の事に及んで、

『それぢやア此二月に嫁入したのだね、随分遅い方だね。』

『まア遅いはうでせうね。貴下は何時ごろお正さんを御存知で御座います？』

『左様サ、お正さんが二十位の時だらう、四年前の事だ。だからお正さんは二十四の春嫁いたといふものだ。』

『全く左様で御座います』と女主人は言つて、急に聲をひそめて、『處が可憐さうに餘り面白

ろく行かないとか大ぶん紛糾があるやうで御座います。お正さんは二十四でも未だ若い盛で御座いますが、旦那は五十幾歳とかで、二度目ださうで御座いますから無理も御座いませんよ。』

大友は心に頗る驚いたが別に顔色も變ず、『それは氣の毒だ』と言ひさま直ぐ起ち上つて、『大きにお邪魔をした』とばかり、店を出た。

大友の心には此二三年前來、何卒此世に於て

今一度、お正さんに會ひたいものだといふ一念が蠕つて居たのである、此女のことを思ふと、悲しい、懐しい情感に堪へ得ないことがある。そして此情感に耽る時は人間の淺聞しサから我知らず脱れ出づるやうな心持になる。あたかも野邊にさすらひて秋の月のさやかに照るをしてみんと眺め入る心持と或は似通へるか。さりとして矢も盾もたまらずお正の許に飛で行くやうな激越の情は起らないのであつた。

たゞ會ひたい。此世で今一度會ひたい。縁あらば、せめて一度此世で會ひたい。とのみ大友は思ひつゞけて居た。何ぞ其心根の哀しきや。會ひ度くば幾度にも逢る。又た逢へる筈の情縁あらば如斯な哀しい心根は起らぬものである。別れたる、離れたる親子、兄弟、夫婦、朋友、戀人の仲間の、逢たき情とは全然で異つて居る、縁あらば此世で今一度會ひたいとの願の深い哀は常に大友の心に潜んで居たのである。

或夜大友は二三の友と會食して酒のやゝ廻つた時、斯ういふ事を言つたことがある、一僕を知つて居る女でお正さんといふのがあるが、容貌は十人並で、たゞ愛嬌のある女といふに過ぎないけれど、如何にも柔和な、どちらかと言へ

は今少はハキ／＼してもと思はるゝ程の性分
で、何處までも正直な、同情の深さうな奴で
ある。肉づきまでがふつくりして、温かさうに
思はれたが、若し、僕に女房を世話して呉れる
者があるなら彼津のが欲しいものだ。』

それならば大友はお正さんに戀ひ焦がれて
居たかといふと、全然、左様でない。たゞ大友
が其時、一寸と左様思つた丈けである。

四年前、やはり秋の初であつた、大友が此温
泉場に来て大東館に宿つたのは。

避暑の客が大方歸つたので居残の者は我儘
方題、女中の手もすいたので或夕、大友は宿の
娘のお正を占領して飲んで居たが、初は時談
のほれたはれた問題が、次第に本物になつて、大
友は遂に其時から三年前の失戀談をはじめた。
女中なら「御馳走様」位でお止になるところが、
お正は本氣で聞いて居る、大友は無論眞剣に話
して居る。

『それほどまでに二人が艱難辛苦してヤツと結
婚して、一緒になつたかと思ふと間もなく、ボカ
ンと僕を捨て、逃げ出して了つたのです。』

『まあ痛いこと！ それで貴下は如何なさいま
した』とお正の眼は最早潤んで居る。

『女に捨てられる男は意久地なしだとの、今で

は、人の噂も理會りますが、其時の僕は左まで
世にすれて居なかつたのです。たゞ夢中です、
身も世もあらぬ悲嘆を堪へ忍びながら如何
にもして前の通りに爲たいと、恥も外聞もかま
はず、出来るだけのことをしたものです。』

『それで駄目なんですか。』
『無論です。』

『まあ』とお正は眼に涙を一ばい含ませて居
る。

『僕が夢中になる丈け、先方は益々冷えて了
ふ。終ひには僕を見るもイヤだといふ風になつ
たのです。』そして大友は種々と詳細い談話を
して、自分が如何ほど其女から侮辱せられたか
を語つた。そして彼自身も今更想ひ起して感憤
に堪へぬ様であつた。

『さぞ憎らしかつたでせうねエ。』
『否、憎らしいと其時思ふことが出来るなら左
まで苦しくは無いのです。たゞ悲嘆かつたので
す。』

お正の兩頬には何時しか涙が靜かに流れ
て居る。

今は如何なに思つてお居でです』とお正は聲
をふるはして聞いた。

『今ですか、今でも憎いとは思つて居ません。

けれどね、お正さん僕が若し彼様な不運に
會なかつたら、今の僕では無かつたらうと思ふ
と、残念で堪らないのです。今日が日までに三年ば
かりの大事の月日が、殆ど煙のやうに過つて了
ひました。僕の心は壞れて了つたのですから
ねエ』と大友は眼を瞬たいた。お正ははんけち
を眼にあて、頭を垂れて了つた。

『まあ可いサ、酒でも飲みませう』と大友は酌
を促がして、黙つて飲で居ると、隣室に居る川
村といふ富豪の子息が、酔た勢で、散歩に出
かけようと誘ふので、大友はお正を連れ、川村
は女中三人ばかりを引率して宿を出た。川村の
組は勝手にふざけ散らして先へ行く、大友とお
正は相並で靜かに歩む、夜は冷々として既に膚
寒く覺ゆる程の季節ゆゑ、溪流に沿ふ町はひつ
そりとして客らしき者の影さへ見えず、月は牙
えに冴えて岩は激する流は雪のやうである。

大友とお正は何時か寄添うて歩みながらも
言葉一ツ交さないで居たが、川村の連中が遠く
離れて森の彼方で聲がする頃になると、

『眞實に貴下はお可哀さうですねエ』と、突然お
正は頭を垂れたまゝ言つた。

『お正さん、お正さん』

『ハイ』とお正は顔を上げた。双眼涙を含め

る若ざめた顔は月はまともに照らす。

「僕はね、もし彼女がお正さんのやうな柔和い人であつたら、こんな不幸な男にはならなかつたと思ひます。」

「そんな事は」とお正はうつむいた、そして二人は人家から離れた、礫の多い凸凹道を、靜かに歩んで居る。

「香、僕は眞實に左様思ひます、何故彼女がお正さんと同じ人で無かつたかと思ひます。」

お正は、そつと大友の顔を見上げた。大友は月影に霞む流の末を見つめて居た。

それから二人は暫時く無言で歩いて居ると先へ行つた川村の連中が、がやくと騒わぎながら歸つて來たので、一緒に連れ立つて宿に歸つた。

其後三四日大友は滯留して居たけれど、お正には最早、彼の事に就ては一言も言はず、お給任ごとに楽しく四方山の話を爲て、大友は歸京したのである。

爾來、四年、大友の戀の傷は癒え、戀人の姿は心から消え去せて了つたけれども、お正には如何かして今一度、縁あらば會ひたいものだと願つて居たのである。

そして來て見ると、兼て期したる事とは言へ、さてお正は既に居ないので、大に失望した

上に、お正の身の上の不幸を箱根細工の店で聞かされたので、不快に堪へず、流を派つて溪の奥まで一人で散歩して見たが少しも面白くない、氣は塞ぐ一方であるから、宿に歸つて、少し夕飯には時刻が早い、酒を命じた。

(三)

大友は、「用があるなら呼ぶから」と女中をしりぞけて獨酌で種々の事を考へながら淋びしく飲んで居ると宿の娘が「これをお客様が」と差出したのは封紙のない手紙である、大友は不審に思ひ、開き見ると、

前略我等 兩人當所に於て君を待つこと久しとは申兼候へ共、本日御投宿と聞いて愉快に堪へず、女中に命じて膳部を弊室に御運搬の上、大に語り度く願候

大友様
神崎朝田

とあるので、驚いた。何時ごろから來て居るのだと聞くと、娘は一週間ばかり前からと云ふ。直ぐ次の返事を書いて持たしてやつた。

お手紙を見て驚喜仕候、兩君の室は隣室の容を驚す恐あり、小生の室は御覽

の如く獨立の離島に飯間、徹行快談するもさまたげず、是非此方へ御出向下され度待上候

すると二人が、やつて來た。「君は何處を遍歴つて此處へ來た？」と朝田が座に着くや着かぬに聞く。

「イヤ、何處も遍歴らない、東京から直きに來た。」

「そこで此夏は？」

「東京に居た。」

「何をして？」

「遊んで。」

「そいつは下さらなかつたな。」

「全くサ、そして君等は如何だ。」

「伊豆の温泉めぐりを爲した。」

「面白い事が有つたか。」

「随分有つた。然し同伴者が同伴者だからね」と神崎の方を向く。神崎はたゞ「フ、ン」と笑つたばかり、盃をあげて、ちよつと中の模様を見て、ぐびり飲んだ。朝田もお構なく、

「現に今日も、斯うだ、僕が縁とは何ぞやとの問に何と答へたものだらうと聞くと、先生、この圓と心得て」と盃の上に指先で○を書き、

「圓の定義を平氣で諳誦したものだ、君、斯

ういふ先生と約一ヶ月半も僕は膳を並て酒を呑だのだから堪ない。」

「それはお五サ」と神崎少しも驚かない。

「然し相かはらず議論は激しかつたらう」と大友はにこ／＼して問うた。

「やつたとも」と朝田。

「朝田の愚論は僕も少々聞き飽きた」と神崎の一言に朝田は「フ、ン」と笑つたばかり。これだから二人が喧嘩を爲さないで一ヶ月以上も旅行が出来たのだと大友は思つた。

三人とも愉快に談じ酒も相當に利いて十一時に及ぶと、朝田、神崎は自室に引上げた、大友は頭を冷す積で外に出た。月は中天に昇つて居る。恰度前年お正と共に散歩した晩と同じである。然し前年の場所へ行くは却つて思出の種と避けて溪の上へのぼりながら、途々、「縁」に就て朝田が説いた處を考へた、「縁」は實に「哀」であると沁み／＼感じた。

そして構造の大きな農家らしき家の前に來ると、庭先で「左様なら」と挨拶して此方へ來る女がある、其聲が如何にもお正に似て居るやうに思はれ、つい立どまつて居ると、往來へ出て月の光を正面に向けた顔は確かにお正である。

「お正さん」と大友は思はず呼んだ。

「大友さんでせう」と意外にもお正は平氣で傍へ來たので、

「貴女は僕が來て居るのを知つて居たのですか」と驚いて問うた。

「も少し上の方へのぼりながらお話しませうか」とお正は小聲にて言ふ。

「貴女さへかまはなければ。」

「私はちつとも、かまひませんの。」

それではと前年の如く寄添うて、溪をのぼる。眞實に妙な御縁なのです、私は今日、身の上に就て兄に相談があるので、突然に参りますと、妹が小聲で大友さんが來宿するといふのでせう、……」

「それぢやア貴女は僕より一汽車後で來たのだ。」

「さうなの。それで今夜はごた／＼して居るから明日お日にかゝる積で居ましたの。」

さて大友はお正に會つたけれど、そして忘れ得ぬ前年の夜と全然く同じな景色に包まれて同じやうに寄添うて歩るきながらも、別に言ふべき事がない。却てお正は種々の事を話しかける。

「貴下いつかの晩も此様でしたねえ。」

「貴下彼晩のことを憶えて居らつして？」

「憶えて居ますとも。」

私はね、何にもかも全然憶えて居て、貴下の被仰つた事も皆な憶えて居ますの。」

僕もさうです。そして今一度貴女に會ひたいとばかり思つて居ました。今度も實は其積で來たのです。無論何家へ嫁いて居て會へる筈は無らうとは思ひましたが、それでも若しかと思ひましてね……」

「私も今一度で可いからは是非お日にかゝりたいと思ひつゞけては、彼晩の事を思ひ出して何度泣いたか知れませんが、……ほんとにお嫁になど行かないで兄さんや姉さんを手傳つた方が如何なにか可かつたか今では眞實に後悔して居ますのよ。」

大友は初めてお正が自分を戀ひして居たのを知つた、そして自分がお正に會ひたいと思ふのと、お正が自分に會ひたいと思ふのとは意味が違ふと感じた。自分はお正の戀人であるが、お正は自分の戀人でない、たゞ自分の戀に深い同情を寄せて泣いて哭れた柔しさを戀ひしたのだ。そして自分は戀を戀する人に過ぎないと思つた。實に大友はお正の戀を知ると同時に、自分のお正に對する情の意味を初めて自覺したのである。

暫時無言で二人は歩いて居たが、大友は斯く感じると、言ひ難き哀情が胸を衝いて来る。

「然しね、お正さん、貴女も一旦嫁いだからには惑はないで一生を送つた方が可しいと僕は思ひます。凡て女の惑からいろんな混雜や悲嘆が出て来るものです。現に僕の事でも彼女が惑うたからでせう……」

お正はうつ向いたまふ無言。

「それで今夜は迎よくお互に會ふことが出来ましたが、最早二度とは會へませんから言ひます、貴女も身體を大切に幾久さしく無事でお暮になるやうに……」

お正は袖を眼に當て、

「何故會へないのでせうか。」

「會へないものと思つた方が可いだらうと思ひます。」

「それでは貴下は最早會ひたいとは思つては下さらないのですか。」

「決して其様ことはありません。僕はこれまで彼女に會ひたいなど夢にも思はなくなりましたが、貴女には會ひたいと思つて居ましたから……」

「それではお目にかゝる事が出来る縁を待ちませうね。」

「ほんとは、さうです。貴女も今言つたやうにくよくよ爲ないで、身體を大切にお暮しなさい。」

「難有う御座います。」

夜の更くるを恐れて二人は後へ返し、溪流に渡せる小橋の袂まで歸つて来ると、橋の向から男女の連が来る。そして橋の途中ですれちがつた。男は三十五六の若紳士、女は底髪の二十二三としか見えざる若づくり、大友は一目見て非常に驚いた。

是早に橋を渡つて、

「お正さん、彼れです。彼の女です！」

「まア、彼の人ですか！」とお正も吃驚して見送る。

「如何して又、こんな處で會つたらう。彼女も必定僕と氣が着いたに違ひない。お正さん僕は明日朝出發ますよ。」

「まア、如何して？」

「若し彼女が大東館にでも宿泊つて居たら、僕と白書出會はずかも知れない。僕は見るのも嫌です。往來で會ふかも知れませんが、如斯な狭い所ですから。」

「會つても知ん顔して居れば可いぢやア御座いませんか。」

「不快です。殊に今度貴女に會つた場合猶ほ不快です。」

翌朝早く大友は大東館を立つた。大友ばかりでなく神崎も朝田も一緒である。見送り人の中にはお正も春子さんも居た。

(明治四十年一月)

竹の木戸

(上)

大真藏といふ會社員は東京郊外に住んで京橋邊の事務所に通つて居たが、電車の停留所まで半里以上もあるのを、毎朝試みかざすてク、歩いて通勤には恰度可いと言つて居た。温厚しい性質だから會社でも受が可かつた。

家敷は六十七八になる極く丈夫な老母、二十九になる源君、源君の妹のお清、七歳になる娘の禮ちゃん、これに五六年前から居るお徳といふ女中、以上五人に主人の眞藏を加へて都合六人であつた。

源君は病身であるから餘り家事に關係しない。臺所元の事は重にお清とお徳が行つて居て、それを小まめな老母が手傳つて居たのである。別けても女中のお徳は年こそ未だ二十三であるが私はお宅に一生奉公をしますといふ意氣込で権力が仲々強い、老母すら時々此女中の言ふことを聞かなければならぬ事もあつた。我儘通るとお清から苦情が出る場合もあつたが、何し

ろお徳はお家大事と一生懸命なことから、結構はお徳の福利に歸するのであつた。

生垣一つ隔て、物置同然の小屋があつた。それに植木屋夫婦が暮して居る。亭主が二十七八で、女房はお徳と同年輩位、そして此隣交際の女性二人は互に負けず劣らず喋舌り合つて居た。

初め植木屋夫婦が引越して来た時、井戸がないので何卒か水を汲まして呉れと大庭家に依頼みに来た。大庭の家では其は道理なことだと承諾してやつた。それから彼は二月ばかり經つと、今度は生垣を三尺ばかり開放さして呉れる、さうすれば一々御門へ近廻らんでも済むからと帳みに来た。これには大庭家でも大分苦情があつた、殊にお徳は盜棒の入口を造へるやうなものだと主張した。が、しかし主人眞藏の平常の優しい心から遂に之を許すことになつた。其方ぞ木戸を丈夫に造り、開閉を嚴重にするといふ條件であつたが、植木屋は其處らの藪から青竹を切つて来て、これに杉の葉など交ぜ加へ

て無細工の木戸を造りつて了つた。出来上つたのを見てお徳は、

「これが大戸だらうか、掛金は何處に在るの。こんな木戸なんか有るも無いと同じことだ」と

大庭で言つた。植木屋の女房のお源は、これを聞きつて、

「それで深山だ、どうせ私共の力で大工さんの作るやうな立派な木戸が来るものか。」

と井戸邊で釜の底を洗ひながら言つた。

「それぢやア大工さんを頼めば可い」とお徳はお源の言葉が癪に觸り、植木屋の貧乏なことを知りながら言つた。

「頼まれる位なら頼むな」とお源は軽く言つた。

「頼むと来ると」とお徳は猶一つ皮肉を言つた。

お源は負けぬ氣性だから、これにはむつとしたが、大庭家に於けるお徳の勢力を知つて居るから、逆らつては損と蟲を壓へて、

「まあそれで勘弁してお呉れよ。出入りするものは重に私ばかりだから私さへ開閉に氣を附けりやア大丈夫だよ。どうせ本式の盜棒なら垣根だつて御門だつて越すから木戸なんか何にもなりやア仕ないからね」と半分折れて出たので

お徳、

『さう言へばさうさ。だからお前さんさへ開閉を嚴重に仕てお呉れなら先ア安心だが、お前さんも知つてるだらう此里はコソ／＼泥棒や屑屋の悪い奴が横行するから油断も間隙もなりや仕ない。そら近頃出来たパン屋の隣に河井様て軍人さんがあるだらう。彼家ぢやア二三日前に買立の銅の大きな金盥をちよろりと盗られたさうだからねえ。』

『まア如何して』とお源は水を汲む手を一寸と休めて振り向いた。

『井戸邊に出て居たのを、女中が屋後に干物に往つたばつちりの間に盗られたのだとサ。矢張木戸が少しばかり開いて居たのだとサ。』

『まア、眞實に油断がならないね、大丈夫私は氣を附けるが、お徳さんも盗られさうなもの少時でも戸外に放棄つて置かんやうになさいよ。』

『私はまア其様ことは仕ない積りだが、それでも、ツイ忘れることが有るからね、お前さんも屑屋なんか氣を附けてお呉れよ。木戸から入るにや是非お前さん宅の前を通るのだからね。』
『え、氣を附けるともね。盗られる日にや薪一本だつて炭一片だつて馬鹿々々しいからね。』

『さうだとも。炭一片とお言ひだけれど、どうだらう此頃の炭の高價いことは。一俵八十五錢の佐倉が彼だよ』とお徳は井戸から臺所口へ續く軒下に並べてある炭俵の一を指して『幾千入てるものかね。ほんとに一片何錢に當くだらう。まるでお錢を涼爐で燃して居るやうなものサ。土竈だつて堅炭だつて悉な去年の倍と言つても可い位だからね』とお徳は嘆息まじりに『眞實にやりきれや仕ない。』

『それに御宅は御人数も多いんだから入用ことも入用サね。私のとこなんか二人限だから幾干も入用ア仕ない。それでも三錢五錢と計量炭を毎日のやうに買ふんだからね、全くやりきれや仕ない。』

『全く骨だね』とお徳は優しく言つた。
以上炭の噂まで来ると二人は最初の木戸の事は最早口に出さないで何時しか元のお徳お源に立寄りべちやくちやと仲善く喋舌り合つて居たところは皆も無い。

十一月の末だから日は短い盛で、主人眞藏が會社から歸つたのは最早暮れがかりであつた。木戸が出来たと聞いて洋服のまゝ下駄を突掛けた手元の庭へ廻り、暫時は木戸を見てただ微笑して居たが、お徳が傍から、

『旦那様大變な木戸で、御座いませう』と言つたので、

『これは植木屋さんが作らへたのか。』

『さうで御座います。』

『随分妙な木戸だが、併し植木屋さんにしちやア能く出来てる』と手を掛けて揺振つて見て、

『案外丈夫さうだ。まアこれでも可い、無いよりか増だらう。其内大工を頼んで本當に作らすことに仕よう』と言つて『竹で作へても木戸は木戸だ、ハ、ハ、ハ、』と笑ひながら屋内へ入つた。

お源はこれを自分の宅で聞いて居て、くすくすと獨り笑ひながら、眞實に能く物の解る旦那だよ。第一彼様心持の優しい人つたらめつたに有りや仕ない。彼家ぢや奥様も好い方だし御隠居様も小まめにちよこまかなさるが人柄は極く好い方だし、お清葉は出戻りだけに何處か執拗れるが、然し氣質は優しい方だし』と思ひつゞけて来てハタとお徳の今日晝出の皮肉を回想して『水の世話にさへならなきや如彼奴に口なんか利かしや仕ないんだけど、房州の田舎者奴が、可愛がつて頭だきや可い氣になりやアがつて如何だらう彼の鬨々しい胸梅は』とお徳の先刻の言葉を思ひ出し、大變な木戸でせうだつ

て、あれで難癖を附ける積りが合情と旦那がお取上に相成らんから可い氣味だ。愚態ア見やアがれだ」と又つと氣を變へて「ただけど感心と言へば感心だよ。容色も悪くはなし年だつて私と同じなら未だいくらだつて嫁にいかれるのに、彼様やつて一生懸命に奉公してゐるんだからね。今、普通の女にや眞似が出来なよ。それに恐しい正直者だから大庭様でも彼女に任かして置きや間違はないサ……」

こんな事を思ひながらお源は洋燈を點火で、火鉢に炭を注がうとして炭が一片もないのに氣が着き、舌鼓をして占ほけた薬籠に手を觸つて見たが湯は冷めて居ないので安心して「お湯の熱い中に早く歸つて来れば可い。然し今日若か前借して来て呉れないと今夜も明日も火なしだ。火ぐらゐ木葉を拾つて来ても間に合ふが、明日食ふ米が有りや仕ない」と今度は舌鼓の代に力のない嘆息を洩した。頭髮を亂して、血の色のない顔をして、薄暗い洋燈の陰にしよんぼり坐つて居る此時のお源の姿は随分憐な様であつた。

井處へのつそり歸つて来たのが亭主の磯吉である。お源は單前借の金のことを訊いた。磯吉は黙つて腹掛から財布を出してお源に渡した。

お源は中を盗めて、
「たつた二圓。」

「あゝ。」

「二圓ばかりしつが無いぢやアないか。どうせ前借するんだもの五圓も借りて来れば可いのに。」

「だつて貧さなきや仕方がない。」

「それや左様だけど能く頼めば親方だつて五圓位貸して呉れさうなものだ。これを御覽」とお源は空虚の炭籠を見せて「炭だつてこれだらう。今夜お米を買つたら幾干も残りや仕ない。」

磯は黙つて煙草をふかして居たが、煙管をポーンと強く打いて、膳を引寄せ手盛で飯を食ひ初めた。たゞ白湯を打かけてザク／＼流し込むのだが、それが如何にも美味さうであつた。

お源は亭主の此所爲に氣を吞れて黙つて見て居たが山盛五六杯食つて、未だ止めさうもないので呆れもし、可笑くもなり、

「お前さん其様にお腹が空いたの。」

磯は更に一椀盛けながら「俺は今日半食を食はないのだ。」

「如何して。」

「今日彼時から往つたら親方が厭な顔をして此

多忙しい中を何で遅く来ると小言を言つたから、實はこれ／＼だつて木戸の一件を言つと、そんな事は手前の勝手だつて言やアがる、業思々敷いから其からグン／＼仕事に張つて二時過ぎになるとお茶飯が出たが、俺は見高も仕ないんだ。お女中が来て今日はお美味い海苔巻だから早や、来て食べると言つたが到言俺は作かないで仕事を仕掛けてやつたのだ。そんなこんなで前借のこと親方に言ひ出すのは全く厭だつたけど、言はないぢや居られんから歸りがけに五圓貸して呉れると言ふと、へん仕事は怠けて前借か、俺も手前の圖々しいには敵はんよ。それは是て可からうつて二圓出して與こしたのだ。仕方が無いぢやアないか」と磯は腹の空いた譯と二圓外前借が出来なかつた理由を一遍に話して了つた。そして話了つたころ漸と箸を置いた。

全體磯吉は無口な男で又た口の利きやうも下手だが如何かすると談火交りて今のやうに威勢の可い物の言ひ振をすることもある、お源にはこれが頗る嬉しかつたのである。然しお源には連添てから足掛三年にもなるが未だ磯吉は怠惰者だか働人だか判断が着かんである。東京女の氣まぐれ者には其で濟でゆくので、

三日も四日も仕事を休む、どうかすると十日も休む、けれどサアとなれば人三倍も働くのが宅の磯様だと心得て居る、だからサアとなれば困りや仕ないと信じて居る。然し何處まで行つたら其「サア」だか其様ことはお源も考へたこととはない。又たお源は磯さんはイザとなれば随分人の出来な思切た大膽なことをする男だと頼母がつて居る。けれど左様ばかり思へんこともある。其實案外意久地のない男かしらと思ふ場合もあるが、それは一女なしになつて困り扱った時などで、さう思ふと情なくなるから成るべく其は自分で打消して居たのである。

實際磯吉は所謂「解らん男」で、大庭の女連は何となく薄気味悪く思つて居た。だからお徳までが磯には憚る風がある。これがお源には言ふに言はれない得意なので、お徳が此風を見せた時、お清が磯に丁寧な言葉を使つた時など嬉さが込上げて来るのであつた。

それで結構のべつ貧乏の仕飽をして、働き盛りでありながら世帯らしい世帯も持たず、何時も物置か古倉の隅のやうな所ばかりに住んで居る、従つてお源も何時しか植木屋の女房連から解らん女だ、つまり馬鹿だとせられて居たのだ。

磯吉の食事が濟むとお源は箆を持って駈出して出たが、やがて量炭を買つて来て、火を起しながら今日お徳と木戸のことで言ひあつたこと、且那が木戸を見て言つた言葉などべらべら喋舌て聞かしたのが、磯は「さうか」とも言はなかつた。

其うち磯が眠さうに大欠伸をしたので、お源は垢染た煎餅布團を一枚敷いて一枚被けて二人一緒に一個身體のやうになつて首を縮めて寝て了つた。壁の隙間や床下から寒い夜風が吹きこむので二人は手足を縮められるだけ縮めて居るが、それでも磯の背部は半分外に露出て居た。

(中)

十二月に入ると急に寒気が増して霜柱は立つ、氷は張る、東京の郊外は突然に冬の特色を發揮して、流行の郊外生活にかぶれて初て郊外に住んだ連中を喫驚させた。然し大庭眞藏は慣れたもので、長靴を穿いて厚い外套を着て平氣で通勤して居たが、最初の日曜日には空青々と晴れ、日が煌々と輝やいて、そよ吹く風もなく、小春日和が又立戻つたやうなので、眞藏とお清は留守居番、老母と細君は禮ちやんとお徳を連れて下町に買物に出掛けた。

郊外から下町へ出るのは東京へ行くと稱して出慣れぬ女連は外出の支度に一騒するのである。それで老母を初め細君娘、お徳までの着變やら何かに一しきり騒しかつたのが、出て去つた後は一時に森となつて家内は人氣が絶たやうになつた。

眞藏は銘仙の襦袍の上へ兵古帯を巻きつけたまゝ、日射の可い自分の書齋に寝轉んで新聞を讀んで居たがお午時前になると退屈になり、書齋を出て縁邊をぶらぶら歩いて居ると、

「兄様」と障子越しにお清が聲をかけた。

「何です。」

「おホ、何です」だつて。お午食は何にも有りませんよ。」

「かしこ参りました。」

「おホ、かしこ参りました」だつて眞實に何にもないんですよ。」

其處で眞藏はお清の居る部屋の障子を開けると、内ではお清がせつせと針仕事をして居る。

『大變勉強だね。』

『禮ちやんの被布ですよ、良い柄でせう。』

眞藏はそれには應へず、其處邊を見廻はして居たが、

『最少し日射の好い部屋で縫つたら可ささうなものだな。そして火鉢もないぢやないか。』

『未だ手が凍結るほどでもありませんよ。それに此節は御節約といふことに決定したのですから。』

『何の御節約だらう。』

『炭です。』

『炭は成程高價なつたに違ないが它で急に其を節約するほどのことはなからう。』

眞藏は衣食臺所元のことなど一切關係しないから何も知らないのである。

『如何して兄様、十一月でさへ一月の炭の代がお米の代よりか餘程上なんですもの。これから十二、一、二と先づ三月が炭の要る盛ですから節約出来るだけ仕ないと大變ですよ。お徳が朝から晩まで炭が要る炭が高價いて泣言ばかり言ふのも無理はありませんわ。』

『だつて炭を節約して風邪でも引ちや何もなりや仕ない。』

『まさか其様ことは有りませんわ。』

『しかし今日は好い挨拶に暖かいね。母上でも今日は大丈夫だらう』と兩手を伸して大欠

伸をして、

『何時か知らん』

『最早直ぐ十二時でせうよ。お午食にしまへうか。』

『イヤ未だ腹が一向空かん。會社だと午食の辨當が待遠いやうだけどなア』と言ひながら其處を出て勝手座敷から女中部屋まで覗きこんだ。女中部屋など從來入つたことも無かつたのであるが、見ると高窓が二尺ばかり開け放しになつてるので、何心なく其處から首をひよいと出すと、直ぐ眼下に隣のお源が居て、お源が我

知らず見上た顔とびたり出會つた。お源はサと顔を眞亦にして狼狽切つた聲を漸と出して、

『お宅では斯いふ上等の炭をお使ひなさるんですもの、堪りませんわね』と佐倉の切炭を手に持て居たが、それを手玉に取りだした。窓の下は炭俵が口を開けたまゝ並べてある場處で、お源が木戸から井戸邊にゆくには是非この傍を通るのである。

眞藏も一寸狼狽いて答に窮したが、

『炭のことは私共に解らんで……』と莞爾微笑て其まゝ首を引込めて了つた。

眞藏は直ぐ書齋に返つてお源の行爲に就て考

がへたが判断が容易に着ない。お源は炭を盗んで居る所であつたとは先づ最初に來る判断だけれど、眞藏は其を其儘確信することが出来な

いのである。實に其を見て居たのかも知れない、通りがムリだからツイ手に取つて見て居る所を不意に他人から取下されて理由もなく罰を亦らめたのかも知れない。まして自分が見たのだから狼狽へたのかも知れない。と考へれば考へられんこともないのである。眞藏は成るべく後の方に判断したいので、遂にさう心で決定て兎も角何人にも此事は言はんことにした。

しかし萬一若し盗んで居たとすると放下つて置いては後が悪からうとも思つたが、一度見られたら、とても悪事を續行することは得爲まいと考へたから尙ほ更ら此事は口外しない方が本當だと信じた。

どちらにしてもお徳が言つた通り、彼處へ竹の木戸を植木屋に作らしたのは策の得たるものでなかつたと思つた。

午後三時過ぎて下町行の一行はぞろぞろ歸宅つて來た。一向が茶の間に集まつてがやくと今日の見聞を今一度繰返して話合ふのであつた。お清は勿論、眞藏も引出されて相繼を打つて聞かなければならない。禮ちゃんが新橋の勸工場で大きな人形を強請つて困らしたの、電車の中に泥酔者が居て衆人を苦しめたの、眞

藏に向て細君が、所天は寒むがり坊だから大徳で上等飛切の舶来のシャツを買つて来たの、下町へ出ると如何しても思つたよりか餘計にお金を使ふだの、それからそれと留度がない、そして聞く者よりか喋舌て居る連中の方が餘程面白さうであつた。

先づ此がやゝが頻止むとお徳は急に何か思ひ出したやうに起て勝手口を出たが暫時して返つて来て、妙に眞面目な顔をして眼を圓くして、

『まア驚いた！』と低い聲で言つて、人々の顔をきよろく見廻はした。人々も何事が起つたかとお徳の顔を見る。

『まア驚いた！』と今一度言つて、『お清様は今日屋外の炭をお出しになりやしませんね？』と訊いた。

『否、私は炭籠の炭ほか使はないよ。』

『そうら解つた、私は去日から如何も炭の無くなりかたが變だ、如何炭屋が巧計をして底ばかり厚くするからつて斯うも急に無くなる筈がないと思つて居たので御座いますよ。それで

私は想當つて居る事があるから昨日お源さんの留守に障子の破目から内をちよいと覗いて見たので御座いますよ。さうすると如何でせ

う』と、一段聲を低めて『彼の破火鉢に佐倉が二片ちやんと埋つて灰が被けて有るぢやア御座いませんか。それを見て私は最早必定さうだと決定て御隠居様に先づ申上げて見ようかと思ひましたが、一つ係蹄をかけて此方で驗めした上と考がへましたから今日行つて試したので御座いますよ』とお徳はにやり笑つた。

『どんな係蹄をかけたの？』とお清は心配さうに訊いた。

『今日出る前に上に並んだ炭に一々符號を附けて置いたので御座います。それが如何でせう、今見ると符號を附けた佐倉が四個そつくり無くなつて居るので御座います。そして土遣は大きなのを二個上に出して符號を附けて置いたら其も無いのです。』

『まア如何したと云ふのだらう』とお清は呆れて了つた。老母と細君は顔見合して黙つて居る。眞藏は倍は愈々と思つたが今日見た事を打明けるだけは矢張見合はした。つまり眞藏には

左様までするに忍びなかつたのである。

『で御座いますから炭泥棒は何人だか最早解つてます。如何致しませう』とお徳は人々が此大事件を喫驚して、ぐわうぐわうと論評を初めて呉れるだらうと豫期してゐたのが、お清が聲を出

して呉れた外、旦那を初め後の人は黙つて居るので少し張合が抜けた調子で斯う問うた。暫時く誰も黙つて居たが、

『如何するツて、如何するの？』とお清が問ひ返した、お徳は少々焦燥たくなり、

『炭をですよ。炭を彼のまゝにして置けばこれから幾十でも取られます。』

『臺所の縁の下は如何だ』と眞藏は放擲つて置いてもお源が今後容易に盗み得ぬことを知つて居るけれど、其理由を打明けまいと決心てるから、仕様事なしに斯う言つた。

『充滿で御座います』とお徳は一言で拒絶した。

『さうか』と眞藏は黙つて了ふ。

『それぢや斯うしたら如何だらう。お徳の部屋の戸棚の下を明けて當分兎も角彼處へ炭を入れることにしたら。そしてお徳の所有品は中の部屋の戸棚を整理して入れたら』と細君が一案を出した。

『それぢやア左様致しませう』とお徳は直ぐ賛成した。
『お徳には少し氣の毒だけれど』と細君は附加した。
『否、私は、中の部屋のお戸棚へ衣類を入れ

さして頂ければ尙ほ結構で御座います。」

「それぢや先左様決定として、全體物置を早く作れといふのに眞藏がぐづぐづして居るから斯ういふことになるのです。物置さへあれば何のこともないのに」と老母が漸と口を利たと思つたら物置の愚痴。眞藏は頭を掻いて笑つた。

「否、斯ういふことになつたのも、竹の木戸のお蔭で御座いますよ、ですから私は彼處を開けさすのは泥棒の入口を作へるやうなものだと申したので御座います。今となれや泥棒が泥棒の出入口を作へたやうなものだ」とお徳が思はず地聲の高い調子で言つたので老母は急に、「靜に、靜に、そんな大きな聲をして聴いたら如何します。私も彼處を開けさすのは厭ぢやツたが開けて了つた今急に如何もならん。今急に彼處を塞げば角が立て面白くない。植木屋さんも何時まで彼様物置小屋見たやうな所にも居られんで移轉なり如何なりするだらう。そしてら彼所を塞ぐことにして今は唯だ何にも言はんで知らん顔をして、お徳も決してお源さんに炭の話など仕ぢやありませんぞ。現に盗んだ所を見たのではなし、又高が少しばかりの炭を盗られたからつて其を荒立て、彼人者だちに怨

恨れたら猶ほ損になりますぞ。眞實に」と老母は老母だけの心配を諍々と説た。

「眞實に左様よ。お徳は如何かすると譏諷を言ひ兼ねないがお源さんに其様ことでもすると大變よ、反對に物言を附けられて如何な目に遇ふかも知れんよ、私は彼の亭主の磯が氣味が悪くつて成らんよ。變妙來な男ねえ。彼様奴に限つて向う不見に人に喰つてかゝるよ」とお清も老母と同じ心配。老母も磯吉のことは口には出さなかつたが心には無論それが有たのである。

「何に彼男だつて唯の男サ」と眞藏は立上がりながら「然ども先ア關係はんが可い。」

眞藏は自分の書齋に引込み、炭問題も一段落着いたので、お徳とお清は大急で夕御飯の仕度に取り掛つた。

お徳はお源が如何な顔をして現はれるかと内々待て居たが、平常も夕方には必然水を汲みに來るのが姿を見せないいで不思議に思つて居た。

日が暮て一時間も經てから磯吉が水を汲みに來た。

お源は眞藏に見られても巧く誤魔化し得たと

（下）

思つた。恰度眞藏が窓から見下した時は土蔵炭を掛に入れ佐倉炭を前掛に包んで左の手で壓へ、更に一個取らうとする處であつたが、元來質の良い邪推などの無い旦那だから多分氣が附かなかつたらうと信じた。けれど夕方になつて如何しても水を汲みにゆく氣になれない。

そこで磯吉が仕事から歸る前に布圍を被つて寝て了つた。寝たつて眠むられは仕ない。垢染た蓆餅布圍でも夜は磯吉と二人で寝るから互の體温で寒氣も凌げるが一人では板のやりにしやちこ張つて身に着かないで起きて居るよりも一倍寒く感ずる。ぶる／＼深へさうになるので手足を縮められるだけ縮めて丸くなつた處を見ると人が寝てるとは承知ん位だ。

色々考へると厭惡な心地がして來た。貧乏には慣れてるがお源も未だ泥棒には慣れない。先日からちやく／＼盗んだ炭の高こそ多くないが確的に人目を忍んで他の物を取つたのは今度が最初であるから一念其處へゆく今までにない不安を覺えて來る。此不安の内には恐怖も羞恥も籠つて居た。

眼前にまぎ／＼と今日の事が浮んで來る、見下した旦那の顔が判然出て來る、そしてテレ隠

しに炭を手玉に取つた時のことを思ふと顔から火が出るやうに感じた。

『眞實に如何したんだらう』とお源は思はず叫んだ。そして徐々逆上氣味になつて來た。『若しか知れたら如何する。』

『知れるものか彼旦那は性質が良いもの。』性質の良いは當にならぬ。『性質の善良のは魯鈍だ』と促急込んで獨問答をして居たが、

『魯鈍だ、魯鈍だ、大魯鈍だ』と思はず又叫んで『フン何が知れるものか』と添足した。そして布團から首を出して見ると日が暮れて入口の障子戸に月が射して居る。けれども起きて洋燈を点けようとも仕ないで、直ぐ首を引込て又丸くなつて了つた。そこへ磯吉が歸つて來た。

頭が割れるやうに痛むので寝たのだと聞いて磯は別に怒りもせず驚きもせず自分で燈を点け、薬罐が微温湯だから火鉢に炭を足し、水も汲みに行つた。湯の沸騰るを待つ間は煙草をバク／＼吹してゐたが、

『如何痛むんだ。』

返事がないので、磯は丸く凸起つた布團を少し時／＼と視て居たが、

『オイ如何痛むんだイ。』

相變らず返事がないので磯は黙つて了つた。

其中湯が沸騰て來たから例の通り氷のやうに冷た飯へ白湯を注げて澤庵をバリ／＼、待ち兼ねた風に食ひ初めた。

布團の中でお源が啜泣する聲が聞えたが磯には香物を囁む音と飯を流し込む音と、美味いので夢中になつて居るのとで聞えなかつた、そして飯を食ひ終つたところには啜泣の聲も止んだのである。

磯が火鉢の縁を忽々叩き初めるや布團がむくむく動いて居たが、やがてお源が半分布團に巻纏つて其處へ坐つた。前が開て膝頭が少し出て居ても合さうとも仕ない、見ると逆上して顔を赤くして眼は涙に潤み、頻りに啜泣を爲して居る。

『如何したと云ふのだ、え?』と磯は問うたが、此男の持前として驚いて狼狽へた様子は少しも見えない。

『磯さん私は最早つく／＼厭になつた』と言ひ出してお源は涙聲になり、

『お前さんと同棲になつてから三年になるが、其間眞實に食ふや食はずで今日とは思つた日は一日だつて有りやしないよ。私だつて何も樂を仕様とは思はんけれど、これぢや餘りだと思ふわ。お前さんこれぢや食も同然ぢや無い

か。お前さん左様は思はないの?』
磯は黙つて居る。

『これぢや唯だ食つて生きてるだけぢやないか、餓死する者は世間に滅多にありや仕ないから、食つて生きてるだけなら誰だつてするよ。それぢや餘り情ないよ私は思ふわ。涙を袖で拭いてお前さんだつて立派な職人ぢやないか、それに唯だ二人限の生活だよ。それが如何だらう、のべつ貧乏の仕通して其貧乏も唯の貧乏ぢや無いよ。満足な家には一度だつて住まないで何時でも斯様物置か』

『何を何時までべら／＼喋舌てるんだい』と磯は矢張お源の方は向ないで、手荒く煙管を撃いて言つた。

『お前さん怒るなら何程でもお怒り。今夜といふ今夜は私は如何あつても言ふだけ言ふよ』とお源は急促込んで言つた。

『貧乏が好きなら者は無いよ。』
『そんなら何故お前さん月の中旬日は必然休むの? お前さんはお酒は呑ないし外に消樂はなし満足に仕事に出てさへお呉なら如斯貧乏は仕ないんだよ。』

磯は火鉢の灰を見つめて黙つて居る。

『だからお前さんが最少し漏出してお呉れなら

此節のやうに計量炭もろくに買ないやうな情ない……」

お源は布團へ打伏して泣きだした。磯吉はふいと起つて土間に下りて麻裏を突掛けるや戸外へ飛び出した。戸外は月冴えて風はないが、骨身に徹へる寒さに磯は大急ぎで新開の通へ出て、七八丁もゆくと金次といふ仲間が居る、其家を訪ねて、十時過まで金次と將棊を指して遊んだが歸掛に一寸一圓貸せと頼んだ。明日なら出来るが今夜は一文もないと謝絶られた。

歸路に炭屋がある。此店は酒も薪も量炭も賣り、大庭も此店から炭薪を取り、お源も此店へ炭を買ひに来るのである。新開地は店を早く終ふので此店も最早閉つて居た。磯は少時此店の前を迂路々々して居たが急に店の軒下に積である炭俵の一個をひよいと肩に乗て直ぐ横の田圃道に外て了つた。

大急で歸宅つて十間にどしりと俵を下した音に、泣き寝入りに寝入つて居たお源は眼を覺したが聲を出さなかつた。そして今のは何の響とも氣に留めなかつた。磯も其儘お源の後から布團の中に潜り込んだ。

翌朝になつてお源は炭俵に氣が着き、吃驚して、

「磯さん此は如何したの、此炭俵は？」

「買つて来たのサ」と磯は布團を被つてるまゝ答へた。朝飯が出来るまでは磯は床を出ないのである。

「何店で買つたの？」

「何處だつて可いぢやないか。」

「聞いたつて可いぢやないか。」

「初公の近所の店だよ。」

「まア如何して其様遠くで買つたの。：：オヤお前さん今日お米を買ふお錢を糺つて了やアしまいね。」

磯は起上つて「お前がやれ量炭も買へんだのツて八かましく言ふから昨夜金公の家へ往つて借りようとして無つてやがる。其れから直ぐ初公の家へ往つたのだ。炭を買ふから少許貸せといつたら一俵位なら俺家の酒屋で取つて往けと大なこと言ふから直ぐ其家で初公の名前で持て来たのだ。それだけあれば四五日は保るだらう。」

「まア左様」と言つてお源はよろこんだ。直ぐ口を明けて見たかつたけれど、先ア後の事とせつせと朝飯の仕度をしながら「え、四五日どころか自宅なら十日もあるよ。」昨夜磯吉が飛出した後でお源は色々に思ひ難

んだ末が、亭主に精出せと勸める以上、自分も氣を腐らして寝て居るや何もならない、又たお隣へも顔を出さんと却て疑がはれると斯う考へたのである。

其處で平常の通り辨當持たせて磯吉を出してやり、自分も飯を食べて一通片附たところでバケツを持つて木戸を開けた。

お清とお徳が外に出て居た。お清はお源を見て、

「お源さん大變顔色が悪いね、如何か仕たの。」

「昨日から少し風邪を引たもんですから……。」

「用心なさいよ、それは不可い。」

お徳は「お早う」と口早に挨拶した限り何も言はない、そしてお源が炭俵の並べてないのに氣が着き顔色を變へて眼をぎよろ／＼として居るのを見て、にやり笑つた。お源は又た早くも之を看取りお徳の顔を睨みつけた。お徳は斯う睨みつけられたとなると最早喧嘩だ、何か甚い皮肉を言ひたいがお清が傍に居るので辛棒して居ると十八九になる増屋の御用聞が木戸の方から入て来た。増屋とは昨夜磯吉が炭を盗んだ店である。

「皆様お早う御座います」と挨拶するや、昨日まで戸外に並べてあつた炭俵が一個も見えない

ので『オヤ炭は何處へ片附けたのですか。』

お徳は待つてたといふ調子で、

『アア悉皆内へ入りやつたよ。外へ置くと如何も物騒だからね。今の高價い炭を一片だつて盗られちや馬鹿々々しいやね』とお源を見る、お清はお徳を睨む、お源は水を汲んで二歩三歩歩るき出したところであつた。

『全く物騒ですよ、私の店では昨夜到當一依盗すまれました。』

『如何して』とお清が問うた。

『戸外に積んだまゝ、平時放下つて置くからです。』

『何炭を盗られたの』とお徳は執着くお源を見ながら聞いた。

『上等の佐倉炭です。』

お源は此等の問答を聞きながら、齒を喰ひしばつて、踉蹌めいて木戸の外に出た。

土間に入るやバケツを投るやうに置いて大急ぎで炭俵の口を開けて見た。

『まア佐倉炭だよ！』と思はず叫んだ。

* * * * *

お徳は老母からも細君からも、みつしり叱られた。お清は日の暮になつてもお源の姿が見えないので心配して御氣嫌取りと風邪見舞とを

兼ねてお源を訪ねた。内が餘り寂然して居るので『お源さん、お源さん』と呼んで見た。返事がないので可恐々々ながら障子戸を開けるとお源は俵を脚織にしたらしく土間の真中の梁へ細帯をかけて死で居た。

二日経つて竹の木戸が破壊された。そして生垣が以前の様に復歸つた。

それから二月経過と磯吉はお源と同年輩の女を女房に持つて、溝谷村に住んで居たが、又張豚小屋同然の住宅であつた。

(明治四十一年一月)

窮

死

九段坂の最寄にけちなめし屋がある。春の末の夕暮に一人の男が大儀さうに敷居をまたげた。既に三人の客がある。まだ洋燈を點けないので薄暗い土間に居並ぶ人影も臆である。

先客の三人も今来た一人も皆な土方か立んばう位の極く下等な労働者である。餘程都合の可い日でないといふ馬も碌々は飲めない仲間らしい。けれども先の三人は、多少か好結果かつたと見えて思ひひくひんに飲つて居た。

「文公、さうだ君の名は文さんとか言つたね。身體は如何だね」と角張つた顔の性質の良さうな四十を越した男が隅から聲をかけた。

「難有う、どうせ長くはあるまい」と今来た男は捨てばちと言つて、投げるやうに腰掛に身を下して、兩手で額を押へ、苦しい咳息をした。年頃は三十前後である。

「さう氣を落すものぢやアない、しつかりなさい」と此店の亭主が言つた。それぎり誰も何とも言はない。心のうちでは「長くあるまい」と言ふのに同意をして居るのである。

「六錢しか無い、これで何でも可いから……」と言ひさして、咳息で食はして貰ひたいといふ言葉が出ない。文公は頭の髪を兩手で握かんで悶いて居る。

「めそく泣いてゐる赤兒を背負つたおかみさんは洋燈を點けながら、

「苦しうさうだ、水をあげようか」と振り向いた。文公は頭を横に振つた。

「水よりか此方が可い、これなら元氣がつく」と三人の一人の大男が言つた。此男は此店には馴染でないといふ先刻から口をきかなかつたのである。突きたしたのが白馬の杯。文公は又も頭を横にふつた。

「一本つけよう。矢張これでないといふ元氣がつかない。何れは何時でも可いから飲つた方が可からう」と亭主は文公が何とも返事せぬ中に白馬を一本つけた。すると角ばつた顔の男が、

「何に文公が拂へない時は自分が如何にでもする、えッ、文公、だから一ツ飲つて見な。」それでも文公は頭を押へたまゝ、黙つて居る

と、間もなく白馬一本と野菜の煮物をばり載せた小皿一つが文公の前に置かれた。此時やつと頭を上げて、

「親方どうも濟まない」と弱い聲で言つて又も咳息をしてホツと溜息を吐いた。長顔の瘦こけた顔で、頭は五分刈がそのまま伸る丈のびても、いくちやになつて小の光澤もなく、灰色がつて居る。

文公のお腹で陰氣男になるのも仕方がない、

しかし誰もそれを不平に思ふ者はないらしい。文公は續げざまに三四杯ひつかけて又たも頭を押へたが、人々の親切を思はぬでもなく、又た

深く思ふでもない。まるで別の世界から言葉をかけられたやうな氣持もするし、うれしいけれど、それがそれまでの事である事を知つて居る

から「どうせ長くはない」との感を暫時の間でも可いから忘れたくても忘れる事が出来ないものである。

身體にも心にも呆然としたやうな絶望的無

我が霧のやうに重く、あらゆる光を遮つて立ちこめて居る。

空腹に飲んだので、間もなく酔がまはり稍や

元氣づいて來た。額をあげて我知らずにやりと

笑つた時は四角の顔が直ぐ、

『さら見ろ、氣持が直つたらう。飲れ飲れ、一本で足りなきやアもう一本飲れ、私が引受るから何でも元氣をふるにやアこれに限ッて事よ！』と御自身の方が大元氣になつて來たのである。

此時、外から二人の男が駆け込んで來た。何れも土方風の者である。

『とうとう降て來アがつた』と叫んで思ひ思ひに席を取た。文公の來る前から西の空が眞黒に曇り、遠雷さへ轟きて只ならぬ氣勢であつたのである。

『何に、直ぐ晴ります。だけど今時分の驟雨なんて餘程氣まぐれだ』と亭主が言つた。

二人が飛込んでから急に賑うて來て、何時しか文公に氣をつける者も無くなつた。外はどしどし降りである。二個の洋燈の光線は赤く微に、陰影は闇く過く此煤けた土間を籠めて、荒くれ男の赭顔だけが右に左に動いて居る。

文公は恵れた白馬一本をちびく飲み了ると飯を初た、これも亦兒を背負た女主人の親切で鱈腹喰つた。そして出掛ると急に亭主が此方を向いて、

『未だ降つてるだらう、止でから行きな。』

『たいしたことは有るまい。皆様どうも難有

ら』と穴だらけの外套を頭から被つて外へ出た。最早晴り際の小降である。兎も角も路地を辿つて通街へ出た。亭主は雨が止んでから行きなと言つたが、何處へ行く？ 文公は路地口の軒下に身を寄せて往來の上下を見た。幌人車が威勢よく駆て居る。店々の灯火が道路に映つて居る。一二丁先の大通を電車が通る。さて文公は何處へ行く？

めし屋の連中も文公が何處へ行くか勿論知らないが併し何處へ行かうと、それは問題でない。何故なれば居残つて居る者の中でも、今夜は何處へ宿るかを決定して居ないものがある。この人は大概所謂居所不明、若は不定な連中であるから文公の今夜の行先など氣にしないのも無理はない。然し彼の容態では遠らざるつて了ふだらうとは文公の去つた後での噂であつた。

『可哀さうに。養育院へでも入れれば可い』と亭主が言つた。

『所が其養育院とかいふ奴は面倒臭くつてなか／＼入られないといふ事だぜ』と客の土方の一人がいふ。

『それぢやア行倒だ！』と一人がいふ。

『誰か引取人が無いものか。全體野郎は何國の者だ』と一人がいふ。

『自分でも知るまい。』

實際文公は自分が何處で生れたのか全く知らない、両親も兄弟も有るのか無いのかすら知らない、文公といふ稱呼も誰いふとなく自然に出來たのである、十二歳頃の時、浮浪少年とのかどで、暫時監獄に飼れて居たが、色々の身の爲になるお話を聞かれた後、門から追ひ出された。

それから三十幾歳になるまで種々な勞働に身を任して、やはり以前の浮浪生活を續けて來たのである。此冬に肺を患てから薬一滴飲むことすら出來ず、土方にせよ、立坊にせよ、それを休めば直ぐ食ふことが出來ないのであつた。

『最早だめだ』と十日位前から文公は思つてゐた。それでも稼げるだけは稼がなければならぬ。それで今日も朝五錢、午後六錢だけ漸く稼いで、其六錢を今めし屋で費つて了つた。五錢は晝めしに成て居るから一文も残らない。さて文公は何處へ行く？ 茫然軒下に立て眼

前の此世の様を熟と見て居る中に、

『ア、嗚呼死で了ひたいア』と思つた。此時、惡寒が全身に行きわたつて、ぶる／＼と慄へた。そして續けざまに苦しい嘆息をして咽入つた。

ふと思ひ付いたのは今から二月前に日本橋の

或所で上方をした時知り台になつた辨公といふ若者が此近處に住て居ることであつた。道悪むじ八丁飯田町の河岸の方へ歩いて闊い狭い路地を入ると突當に鐵葉草の棟の低い家がある。最早兩戸が引よせてある。

辿り着いて、それでも思ひ切つて、

「辨公、家か。」

「誰だい」と内から直ぐ返事がした。

「文公だ。」

戸が開て「何の用だ。」

「一晩泊めて呉れ」と言はれて辨公直ぐ身を横に避けて、

「まアこれを見て呉れ何處へ寝られる？」

見れば成程三疊敷の一室は名ばかりの板間と、上口に漸く下駄を脱ぐだけの土間とがあるばかり、其三疊敷に寢床が二つ敷であつて、豆洋燈が板間の箱の上に乗てある。其薄い光でひとつの寢床に寢て居る辨公の親父の頭が臙に見える。

文公の黙つて居るのを見て、

「常例の婆々の宿へ何故で行かねえ？」

「文なした。」

「三晩や四晩借りたつて何だ。」

「ウンと借が出来て最早行ねえんだ」と言ひ

様、咳息をして苦しい息を内に引くや思はずと披れ果た暁息を洩らした。

「身替も良く無いやうだナ」と辨公初て氣がつく。

「すつかり駄目になつちやつた。」

「そいつは氣の毒だなア」と内と外とで暫時無言で衝立て居る。すると未だ寢着れないで居た親父が頭を擽げて、

「辨公、泊めて遣れ、二人寝るのも三人寝るのも同じことだ。」

「同じことは一こつた。それぢやア足を洗ふんだ、この磨減下駄を持って其處の水道で洗つて來な」と辨公景氣よく言つて、土間を探り、下駄を拾つて渡した。

其處で文公は漸と宿を得て、二人の足の裾に丸くなつた。親父も辨公も晝間の激しい労働で熟睡したが文公は熱と咳息とで終夜苦しめられ曉天近くなつて漸と寢入つた。

短夜の明け易く四時半には辨公引窓を明けて飯を焚きはじめた。親父も間もなく起きて身支度をする。

飯米が出来るや先づ辨公は其日の辨當、親父と自分との一度分を作へる。終つて二人は朝飯を食ひながら親父は低い聲で、

「此若者は餘程身體を痛め居るやうだ。今日是一日そつとして置いて仕度、休ませ方が可からう。」

辨公は頓張て首を縦に二三度振る。

「そして出がけに、飯、煮いてあるから勝手に食べて一日休めと言へ。」

辨公はうなづいた、親父は一段階を落めて、

「他人事と思ふな、乃公なんぞ最早死なうと思つた時、仲間者に助けられたなア一度や二度ぢやアない。助けて呉れるのは何時も仲間中だ、汝も此若者は仲間だ助けて置け。」

辨公は口をもごくしながら親父の耳に口を寄せて、

「でも文公は永くないよ。」

親父は急に箸を立て、睨みつけて、

「だから猶ほ助けるのだ。」

辨公は又も從順にうなづいた。出がけに文公を揺り起して、

「オイ一寸と起ねえ、これから我等は仕事に出るが、兄公は一日休むが可い。飯も炊てあるからナア、イ、カ留守を頼んだよ。」

文公は不意に起されたので、驚いておきトがりかけたのを辨公が止めたので、又た寢て、その言ふことを聞いて唯だうなづいた。

餘り當にならない留守番だから雨戸を引よせ
て親子は出て行つた。文公は留守居と言はれた
ので直ぐ起きて居たいと思つたが轉つて居るの
が結構樂なので十時頃まで眼だけ覺めて起き上
らうとも爲なかつたが、腹が空つたので苦しい
ながら起き直つて、飯を食つて又たごろりとし
て夢現、で正午近くなると又た腹が空る。そ
れで又た食つてごろついた。

辨公親子は或親分に屬して市の埋立工事の土方
を稼いで居たのである。辨公は堀を埋る組、親
父は下水用の土管を埋る爲めの深い溝を掘る
組。それで此日は親父は溝を掘て居ると午後三
時頃、親父の跳上げた土が折しも通りかゝつた
車夫の脚にぶつかつた。此車夫は車も衣裝も
立派で乗せて居た客も紳士であつたが、突如人
車を止めて、何をしやアがるんだと言ひさま
溝の中の親父に十の塊を投つけた。

「氣をつける、間拔め」といふのが捨臺詞で其
儘行かうとすると、親父は承知しない。
『此野郎!』といひさま道路に這ひ上つて、今し
も梶杵を上げかけて居る車夫に土を投つけた。
そして、
『土方だつて人間だぞ、馬鹿にしやアがんな』と
叫んだ。

車夫は取返返し、二人は摺合を初めたが、一
方は血氣の若者ゆゑ、苦もなく親父を溝に突き
落した。落ちかけた時調子の取りやうが悪かつ
たので棒が倒れるやうに深い溝に轉げ込んだ。
その爲め後腦を甚く撃ち肋骨を折つて親父は悶
絶した。

見る間に附近に散在して居た土方が集まつて
來て、車夫は毆打られるだけ毆打られ其上交番
に引ずつて行かれた。

蟲の呼吸の親父は戸板に乗せられて親方と仲
間の土方二人と、氣拔のしたやうな辨公とに送
られて家に歸つた。それが五時五分である。文
公は此騒に喫驚して隅の方へ小さくなつて了つ
た。間もなく近所の醫師が來る事は來た。診察
の型だけして『最早脈がない』と言つたきり、そ
こへ去つて了つた。

『辨公毅然した、俺が必然仇を取つてやるか
ら』と親方は言ひながら財布から五十錢銀貨を
三四枚取り出して『これで今夜は酒でも飲で通
夜をするのだ、明日は早くから俺も來て始末を
してやる。』

親方の去つた後で今まで外に立て居た仲間の
二人は兎も角内へ入つた。けれども坐る處が
ない。此時辨公は突然文公に、

『親父は車夫の野郎と喧嘩をして殺されたの
だ。これを與るから木賃へ泊つて呉れ。今夜は
仲間と通夜をするのだから』と貰つた銀貨一枚
を出した。文公はそれを受取つて、

『それぢやア親父さんの顔を一度見せて呉れ。』
『見ろ』と言つて辨公は被せてあつたものを除
たが、此時は最早薄闇いので、明白しない。そ
れでも文公は熟と見た。

* * * * *

飯田町の狭い路地から貧しい葬儀が出た日の
翌日の朝である。新宿赤羽間の鐵道線路
に一人の轉死者が發見つた

轉死者は線路の傍に置かれたまゝ、薦が被けて
有るが頭の一部と足の先だけは出て居た。手
一本ないやうである。頭は血にまみれて居た。

六人の人がこの周圍をウロウロして居る。高い
堤の上に兎守の小娘、二人と職人體の男が
一人、無言で見物して居るばかり。四邊には人
影がない。前夜の雨がカラリと舞つて若草若葉
の野は光り輝いて居る。

六人の一人は巡查、一人は醫團、三人は人夫、
そして中折帽を冠つて二丁の羽織を着た男は
村役場の者らしく線路に沿つて二三間の所を

往つ戻りつして居る。始終談笑して居るのが
巡査と人夫で、前者はこめかみの邊を兩手で
押へて蹲居んで居る。蓋し棺桶の來るのを皆
が待つて居るのである。

『二時の貨物車で撥かれたのでせう』と人夫の
一人が言つた。

『その時は未だ降つて居たかね？』と巡査が
煙草に火を點けながら問うた。

降つて居ましたとも。雨の上つたのは三時過
ぎでした。』

『どうも病人らしい。ねえ大島様』と巡査は
醫師の方を向いた。大島醫師は巡査が煙草を吸
つて居るのを見て、自身も煙草を出して巡査か
ら火を借りながら、

無論病人です』と言つて斃死者の方を一寸と
見た。すると人夫が、

『昨日其處の原を徘徊して居たのが此野郎に違
ひありません。たしかに此の外套を着た野郎
です、ひよろ／＼歩いては木の蔭に休んで居ま
した。』

『さうすると何だナ、矢張死ぬ氣で來たことは
來たが晝間は死ねないで夜行つたのだナ』と巡
査は言ひながら疲勞れて上り下り兩線路の間
に蹲んだ。

『奴さん彼の雨にどし／＼降られたので如何
にもかうにも忍耐きれなくなつて其處の堤から
轉り落ちて線路の上へ打倒れたのでせう』と人
夫は見たやうに話す。

『何しろ憐れむ可き奴サ』と巡査が言つて何
心なく堤を見ると見物人が増えて學生らしいの
も交つて居た。

此時赤羽行の汽車が朝暈を眞にもに車窓に受
けて威勢よく駛つて來た。そして火夫も運轉手
も乗客も皆な身を乗出して薦の被けてある一
物を見た。

此一物は姓名も原籍も不明といふので例の通
り假埋葬の處置を受けた。これが文公の最後で
あつた。

實に人夫が言つた通り文公は如何にも斯うに
もやりきれなくつて倒れたのである。

(明治四十年七月)

疲 勞

京橋區三十間堀に大來館といふ旅館がある、先づ上等の部類で客は皆な紳士紳商、電話は客用と店用と二種かけて居る位で、年中十二三人から三十人までの客が有るとの事。

或年の五月なかばごろである、帳場に坐つて居る番頭の一人が通りがりの女中を呼んで、

「お清さん、これを大森様の所へ持つていつて、此方が先程來ましたがお不在だと言つて斷わりましたつて……」

と一枚の小形の名刺を渡した。お清はそれを受とつて梯子段を上つた。

午後二時頃で大森の客は實際不在であるから家内しんとして極めて静かである。中庭の青桐の若葉の影が拭きぬいた廊下に映つてびかびか光つて居る。

北の八番の唐紙をすつと開けると内に二人。一人は主人の大森進之助。一人は正午前から來て居る客である。大森は机に向つて電報用紙に萬年筆で電文を認めて居るところ、客は上衣

を脱いで胴衣一つになり頻りに書類を調べて居るところ、煙草盆には埃及煙草の吸ひ殻がくしや／＼に突込んである。

大森は名刺を受とつてお清の口上を終局まで聴かず、

「オイ君、中西が來た！」

「そして如何した？」

「いま君が聴いた通りサ、不在だと言つて歸へしたのだ。」

「そいつは弱つた。」

「彼奴一週間後でなければ上京されないと言つて來たから、帳場に彼奴のことを言つて置かなかつたのだ。まア可いサ、上京で來て呉れたに越したことはない。これから二人で出かけよう。」

頭髪の少し禿げた、でつぷり肥つた客は「ウン」と言つたざり黄金縁眼鏡の中で細い眼をばちつかして、鼻下の眞黒な髭を右手でひねくり

午考がへて居る。それを見て大森は煙草を取つて煙草盆をつゝきながら靜かに、

「それとも呼ばうか？」

「まア其方が可いな。此方が彼奴ばかりに依頼して居るやうに思はれるのは馬鹿げて居るからな。」

大森は「ちよつと」と言つて一口吸つた煙草を灰に突込み机に向つて急速いで電文を書き了り、今までぼんやり控へて居たお清にそれを渡して、

「直ぐ出さしてお呉れ。」

お清は座敷を出た。大森は又た煙草を取つて、

「それも左様だ、彼の先生伶俐で居て馬鹿だから餘り此方で騒ぐと直ぐ高く止つて卒直に承知することも故意とぐづりたがるからね。」

「それで居て此方で少し大きく出ると又直ぐ怒るのだ。始末にいけない」と客は言つて大欠伸を

一ツして「兎に角呼ぶとしようぢやアないか。」

「何時呼ばう？」と言つてこれも貰ひ欠伸をした。

「今夜は如何だ。今呼んだつて彼奴旅宿に居やアしない。」

大森は机の上の黄金時計をのぞいて、

「二時四十分か。今はとても居ない。しかし」と又た時計をのぞいて、少し考へて「明日の朝早くしようぢやアないか。中西が來たとなれば僕はこれから駿河臺の大將に會つて置くはう

が可いと思ふ。

「成程それには可い。」

「それから今夜は澤田を呼んで見本の説明の順序を能く作つて置いて貰ふことにする。」

成程、それは猶ほ大切だ。我々たつて中西の針手なら結構説明位は出来るが、それは澤田に越した事はない。それぢやア左様決めた。これから手紙を押しやつて、電話ぢやア駄目だよ、そして明朝午前八時までには御來車を仰ぐとでもして置く。」

「よし手紙を直ぐ持たしてやらう」と大森は巻紙を巻いてすらすらと書き出した。其間に客は取散してあつた書類を丁寧に取りそろへて大きな手革包に納めた。

「中西の旅館は随分しみつたれて居るが、彼奴よく辛抱して取換へないね」と大森は封筒へ宛名を書きながら言つた。

「常旅客となると矢張り居心地が可いからサ」と客は答へて上衣を引寄せ、片手を通しながら「君大將に會つたら例の一件を何とか決定で貰はないと僕が非常に困ると言つて呉れ給へ。大將は如何かして物にしてやらうと言ふので手間取つて居るだらうがそれぢやア實際君の知つて居る通り僕がやりきれない、故郷の奴等人に事

を頼む時はわい／＼言つて頼む癖に、その事が甘くゆくと見向もしないんだ。人を馬鹿にしてやアがる。だから大將にどちらでも可いから駄目だとか出来るとか、明白に早く決定を與へて貰ひたいと言つて呉れ給へ、大將あれて馬鹿に人が善いから頼むと何でもかんでも左様してやらなければならんと心得てるから逆り切れない、仲に立てる者は難有迷惑だ」と言つて

の中にも上衣を着て了ふ、何時大森がベルを押しただか、女中が入つて来た。

「これは奇妙不思議だ、中西へ手紙をやらうとすると、お嬢さんがやつて来る、争へんものだ」と大森が十七八の少女に手紙を渡す。

「アラ又あんな事をおツしやる、中西さんなんか何でもないワ、眞實に私くやしいわ、皆なしで御揃ふんだもの」と手紙を奪取るやうに取つて「可いわ、そんな事をおツしやるなら此のお手紙を何處へ打捨つてしまふから。」

「イヤ謝罪つた、それは大切の手紙だ、打捨られてたままるものか、直ぐ源公に持してやつてお呉れ。お嬢さんは善い子だ。」

「蝶ちゃんは善い子だ、序でに人車を」と客が居住を直して合槌を打つた。

「田浦様、禿が自慢にやなりませんよ」と言ひ

捨て、出て去つた。

「もう一車に来て田浦は去り、續いて大森も美麗な宿車で成程よく出て去つた。

午後四時半頃になつて大森は外から歸つて来たが室に入るや、其五尺六寸といふ長身を壁敷の真中にござり／＼倒れて、大の字になつて暫く天井を見つめて居た。四角な引しまつた襪には指へ難い疲労の色が見える。洋服を脱ぐのも面倒臭いらしい。

間もなくお清が入つて来て「江上様から電話で御座います。」

大森は跳ね起きた。ふら／＼と眼がくらみさうにしたのを、ウンと頭張つて突立つた時、彼の顔の色は土色をして居た。

けれども電話口では威勢の可い聲で談話をし「それでは直ぐ来て下さい」と答へた。

室にかへると又もござりと横になつて眼を閉ぢて居たが、ふと右の手を擧げて指で眼を揉んで何か考へて居るやうであつた。やがて其手がぱたり壁に落ちたと思ふと大森をかいいて其顔はさながら死人のやうであつた。

(明治四十年六月)

二 一 老 人

(上)

秋は小春の頃、石井といふ老人が日比谷公園のベンチに腰を下して休息で居る。老人とは言ふものゝ漸と六十歳で、足腰も達者、至て壯健の方である。

日はやゝ西に傾いて赤蜻蛉の翼がきら／＼と光り、風無きに風あるが如く浮々と飛んで居る、老人は眼を瞬たいて其を眺めて居る、看るともなしに看て居る。空々寂々心中何等の思ふことも無い體。

老人の前を幾組かの人が通つた。老へるも若きも、病るも健かなるも。されど誰あつて此老人を氣に留める者も無く、老人も亦た人が通らうと大が過ぎ行かうと一切お關ひなし、悠々行路の人、縁なくれば眼前千里、たい靜かな穩かな蒼天が何時も何時も平等に覆うて居るばかりである。

右の手を左の袂に入れてゴソ／＼やつて居たが、やがて「朝日」を一本取出して口に啣へた。

今度はマツチを出したが箱が半分壞れて中身は僅に五六本しか無い。生憎に二本摺り損なつて三本目で漸と火が點いた。

スパリ／＼と如何にも旨さうである。青い煙、白い煙の先に透明に光つて、渦を卷て消ゆく。

「オヤ、彼れは徳ぢやないか。」

と石井は消えゆく煙の末に浮び出た洋服姿の年若い紳士を見て思つた。芝生を隔て、二十間ばかり先だから判然しない。判然しないが似て居る。背恰好から歩き風まで、確に武だと思つたが、彼は足早に過ぎ去つて木蔭に隠れて了つた。

此姿のおかげで老人は空々寂々の境に何時までも居る譯にゆかなくなつた。

朝の山上武は二三日前、石井翁を訪うて、口を極めて其無爲主義を攻撃したのである。武を石井老人は何時も徳と呼ぶ、其は武の幼名を徳助と稱てから、十二三の頃徳の親父が當世流に武と改名されたのだ。

徳の姿を見ると二三日前の徳の言葉を老人

は思ひ出した。

徳の説く所も萬更無理では無い。道理はあるが、彼の徳の言草が本氣でない。眞實彼奴は左様信じて言ふ譯ぢやない。あれは當世流の理窟で、何人も言うたと、言はゞ口前だ。徳の本心は矢張私を引張出て五圓でも十圓でも稼がさうとするのだ、其證據には先達頃までは遊んで暮すのは無駄だ、足腰の達者な中は取れる金

なら取るやうにするが得だ、叔父が出る氣さへあれば必然周旋する、如何せ隠居仕事の積だから十圓だつて決して恥るに足らんと言つた辭に今度は如何だ。人間一生、いやしくも命のある間は遊んで暮らす法はない、病氣でない限り死ぬるまで仕事をするのが人間の義務だと言ふ。全然理窟の根本が違つて來たぢやないか、

矢張私を稼がす積りサ……とまで考へて來た時、老人は恰度一本の煙草を喫ひ切つた。石井翁は一年前に或官職を停めて恩給三百圓を貰ふ身分になつた。月に割つて二拾五圓、一家は妻に二十になるお菊と十八になるお新の二人娘で都合四人生活、銀行に預けた貯金とて

も高が知れてるから先づ食つて行けないといふのが世間並である。けれども石井翁は少も苦にしない。

例を車夫や職工に取つて、食つて行けないはずは無いと主張するのである。無論食ふに食はれない理窟はない、家賃、米代以下お新の學校費まで計算して成程二十五圓で間に合さうと思へば間に合ふのである。

それで石井翁の主張は、間に合ひさへすれば、それで行つてゆく。今更私が隠居仕事で候のと言つて腰辨當で會社にせよ役所にせよ病院の會計にせよ、五圓十圓と稼いで見て如何する、私は永年のお務を終て、やれ／＼御苦勞であつたと恩給を頂く身分になつたのだ。治まる聖代の難有さにこれぞといふ失策もせず、長病氣にも罹らず長官にも下僚にも憎まれも嫌がられもせず務め上げて来たのだ。最早斯うなれば私などに所謂の聖代の逸民だ。恩給だけで兎も角も暮せるなら、それを難有く頂戴して、すつかり窓から離れて其日々々々を一家陸じく樂く暮すのが當然だ。よしんば二十五圓に十圓殖なら幾千の贅澤が出来る。——悉皆窓で窓には限がない。——役目となれば五圓が十圓でも、雨の日雪の日にも休む譯には往かない、矢張腰辨當で鼻水を垂らして若い者の中に交つてよぼ／＼と通はなければならぬ。オ、嫌厭な事だ！

といふのである。だから役を退いた時、知人やら知族の者が、隠居仕事を勧め、中には先方に略交渉をつけて物にして来てまで勧めたが、悉く以上の理由で拒絶して了つたのである。細君は氣輕な人物で何事も斷念の可い性だから文句はない。愚痴一つ言はない。お菊お新の二人も母を助けて飯米も炊けば八百屋へ使者にも行く。斯くてこそ石井翁の無爲主義も實行されて居るのである。

處が武の母は石井翁の細君の妹だけに、此無爲主義を危み、妹は盲從してこそ居れ、女は矢張り女、石井様の隠居仕事で二十五圓の上へ十圓殖するなら如何位樂と思ふか知れないと、武をして石井翁を説き落さす積で居るのである。

彼は變物だと最初世話を仕かけた者が手を退いた時分、或日曜日の午後二時頃、武は様子を見る可く赤坂區南町の石井を訪ねた。仲の入りぬ路地の内で、三軒長屋の最端が其である。中古の建物だから、それほど見苦くは無い。上口の四疊半が玄關なり茶の間なり、長火鉢これに作なふ一式が列べてある。隣室が八疊、これが座敷、この以外には臺所の傍に薄暗い三疊があるばかり。南向の縁先一間半ばかりの細長い庭には柵を造り翁の娛樂の鉢物が列てあ

る。手帳であるが今體か體か然らぬで氣難な應に毛ほどもなく敷居も柱も縁も能く拭きこまれて、光つて居る。

「御免なさい」と武は上口の障子を開けたが茶の間に誰も居ない。

「式です」と添加へた。すると座敷で、
「徳さんかえ、サアお上り」と言つたのが叔母である。

武は上つて襖を開けると座敷の眞中で叔父叔母差向ひの圍碁最中！叔父は一寸武を見て、微笑つて眼で挨拶したばかり。叔母は、
「徳さん少し待つてお呉れ。直き勝負が着くから」と一心不亂の體である。

「何卒か御ゆつくり」と徳さんの武も此外挨拶の仕様が無い。たゞ呆れ返つて、爲様なしに盤面をみて居た。

「徳さんは碁が打てたかね」と叔父は打ちながら問うた。
「全然で駄目です。」
「でも四目殺ぐらゐは出来るだらう。」
「五日並なら出来ます。」
「ハハ、ハハ、五日並ぢや仕方が無い。」
「叔母さんが碁をお打になることは僅些少も知りませんでした。」

「私ですか、私はこれで随分古いのですよ」と叔母は言つたが振向きもしない。

「常住打つて居らつしやつたのですか。」

「否、やたらに打だしたのは此家へ引退んでからですよ。——鳥渡これ待つて頂戴。」

「成りません」と石井翁、一ぶく點けてスバリスバリと悠然たるものである。

「だつて此切斷は全く私の見落ですもの。」

「だから先刻から私は「待ませんよ」「待ませんよ」と二三度も警告を發して置いたぢやないか。」

「待ません、貴方の口癖ですよ。」

「誰がそんな癖を付けました、私に。」

「武は思はずクスリと笑つた。」

「それぢや如何あつても待つて下さらんの。」

「ママ待ますまい、癖に成るから。」

と言はれて叔母は盤面を見渡して暫く考へて居たが、

「それぢや投ませう。其處が切斷ては碁に成ませんもの。」

「先づさう言つた様な形だね。」

其處で叔母は投出した。此れから改めて挨拶が濟むと、聲談に移り武は叔父叔母差向で、大概毎日碁を打つ事、娘兩人は今日上野公園

に散歩に出掛た事など聞かされた。

右の次第で徳さんの武も終に手を退いて半歳餘も經つと母親、矢張氣になると見えて如何にかして石井様を説き落して呉れろと頼む。其處で武も隠居仕事の五回十回説では到底夫婦差向

ひの碁打を説落すことは出来ないと考へ、今度は遊食罪惡説を提出して滔々と巻席立てゝ見た。

石井翁は散々徳さんの武に言はして置いた揚句、

「それぢや山に隠れて木の實を食ひ露を飲んで居る人は如何する。」

「あれは仙人です。」

「仙人だつて人だ。」

「それぢや叔父さんは仙人ですか。」

「市に隠れた仙人の積で居るのだ。」

これで武は又も撃退されて了つたのである。

（下）

さて石井翁は煙草一本喫了つた處でベンチを起うとしたが徳の遊食罪惡説が鳥渡氣に掛りだしたので又一本取り出して喫ひ初めた。徳の本心を看破て居る。そして仙人説で撃退は仕したものゝ、成程、未だびんしゃんして居るのに

唯だ遊んで食うて居るといふのは我々にとっては無いやうに思はれる。それなら何をする。腰辨は眞平だ。田舎に往つて百姓でもするか。こいつは可いかも知れんが差當つて田地がない。翁は行塞つて了つたので、仙人主義を辯護する理窟に立返つて頻と考へ込んで居ると、どしりとばかり同じベンチに身を投げるやうに腰を下した者がある。振向て見るや、

「オヤ河田さんぢや無いか。」

先方は全く石井翁に氣が附かなかつたものと見えて、翁に聲を掛けらるゝと卒然飛起つて脛を脱り、

「コレは、石井様ですか、貴方とは全然氣が附かんで失禮しました」とべこ／＼お禮儀をする。そして頭を少し紅らめた様子は餘程狼狽したらしい、矢張六十餘の老人である。

「まあお掛なさい。そして其後は如何しました。」

「イヤもうお話にも何もありません」と腰を下しながら、

「相變らずで面目次第も無い譯です」と胡麻白の亂髪に骨太の指を熊手形に差込んで手荒く搔いた。

石井翁は縮服ながら小ザツパリした衣裝に引

更て此老人河田翁は柳原仕込の荒いスコッチの古洋服を着て、バクバク靴を穿いて居る。

「でも何か仕て居られるだらう」と石井翁はじろく、河田翁の様子を見ながら聞いた。そして腹の中で、「成程相變らずだな」と思つた。

「イヤ兎もお話にも何も……」と矢張頭を搔て居たがポケットから鹿皮の眞黒になつた煙草人と扁曲た鈍豆煙管とを取出した。ところが生憎と煙草は塵埃混合の粉末ばかり、其儘又たポケットに舞込んだのを見て石井翁は「朝日」を袋共出して、

「サアお喫ひなさい。」

「イヤこれは如何も」と河田翁は遠慮なく一本抽取つて、石井翁から火を借りた。

此二老人は三十歳前後の頃、或役所で一年餘同僚であつたばかりで無、石井の親類が河田の親類とかで、石井一家では河田翁の噂は時折出て「今何を仕て居るだらう」「眞實に彼な氣の毒な人はない」など言はれて居たのである。

「然し遊んでも居なさらんだらうが」と石井翁は何處までも心配さうに聞く。

「イヤ兎もお話にも何も……」

これが河田翁持前の一つで、人に對すると言ひ度いことも言へなくなり、つまらん所に自

分を卑下して仕まふのである。

「貴方が私の家へ来てから最早五年になるなア」と石井翁は以前の事を思ひ出した。

「さうなりますかね、早いものだ……」

「彼の時、貴方が一杯機嫌で「雨の夜に日本近くねぼけて流れこむ」を唄つて踊つた時は百白かつたがね、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。」

「ハ、ハ」と一緒に笑つたぎり河田翁は何も言はない。そして何となくそは、くして居る。

三十の年に恩人の無理強ひに屈して、養子に行き、養子先の娘の半狂氣に辛抱しきれず、遂に敬太郎といふ男の兒を連れて飛びだして、了ひ、其兒は姉に預けて育て、貴ふ、其以後は決して妻帯せず、純然たる獨身者で到頭六十餘歳まで通して來たのが河田翁の一生である。

此獨身者が翁の不遇の原因をなしたのか、不遇が獨身者の原因であつたのか、これを判つことは出来ない。

善人で、酒も強ては飲まず、これといふ道樂もなく、出入交際の人々には義理を堅くして居て、そして遂に不遇で何時もまご／＼して安定の所を得ず今日が日に及んだ翁の運命は不思議な事としか思へない。其處で石井の人々初め翁を知て居る者は皆な

「氣の毒な人だ」と言ひ又た不思議なことだと評して居る。しかし皆々言ひ合はしたやうに一致して居る「理由」が無いでもない、第一、石井様は意久地が無い。其證據には養子に行く前に深く言ひ交した女があつた、愈々養子に行くとき定るや五圓で帯の片側を買つて、それを手切同様に泣く／＼別れた。第二に案内片意地で高慢な所があつて此細な事に腹を立て直ぐ衝突して職業から離れて了ふ。第三に妙に遠慮深い處があること。

成程さう聞かされると翁の知人其の所謂「理由」は多少の「理由」を成して居る。

けれど大なる理由が未だ無ければならぬ。人が若し廿年の時から老人の時まで、純然たる獨身生活即ち親子兄弟の關係からも離れて只だ一人、今の社會に住むなら並大抵の人は河田翁と同様の運命に陥りはせまいか、老いて益々富み且つ榮えるものだらうか。

翁の兒敬太郎は翁と全然無關係で育ち且つ世に立た。そして二十五六の頃、八百屋を初めたが、間もなく止して、賣卜者になつた。且つ今は行方も知れない。そして見ると河田翁其人の脈絡には「放浪」の血が流れて居るのではないか。それが敬太郎へも流込んだのではないか。

石井翁は無論斯ういふことを考へて研究もせず、たゞ氣の毒がる仲間の一人ゆゑ、何にかして今の境遇も聽いて見たいと思ひ、古い事まで話題にして見たが、河田翁は少しも引立たない。たゞそはくして居る。

「何時でせうか」と河田翁は卒然聞いた。石井翁は帯の間から銀時計の大きいのを出して見て、

「三時半です。」

「イヤそれぢや最早行かなきゃならん」と河田翁は口早に言つて、急に聲を潜め 四邊をきよろ／＼見廻しながら、

「實は私此頃或婦人會の集金掛を爲して居るのですから、毎日々々東京中を遍回らされるので此歳では兎てもやり切れなくなりました、そこで最少し樂な仕事をと頼で歩きましたら、やつと旨い口が發見つたんです。それは食料持一切先方持で月給が七圓だといふのです。それで身體を動かすことは餘り無いといふんですから早速それに決めたのです。ところが」と四邊を見廻はした上に更に延上がつて近所を見廻したが、二段階を潜めて「私は大變なことを仕て居るんだ、兎角足らん／＼で一圓二圓と費ひ込み釣頭十五圓ほど會の集金を費ひ込で了つた

のです。サアそれもチャンと返して帳簿を整理して置かんと今の旨い口に行く事が出来な。そこで此四五日其十五圓の調達に随分駆廻りましたよ。やつと三十間堀の野口といふ舊友の俸が返済の途さへ立てば貸してやらうといふ事になり、今日四時から五時までの間に先方會ふことになつて居るのです。まアザツと斯んな苦しい譯で：：けれど費込の一件は極く内密にお願いします」と言つて起上り、石井翁が何も言ひ得ぬ中に河田翁は辭儀をペコ／＼して去つて了つた。

石井翁は取殘されて茫然と河田翁の後姿を見送つて居た。

河田翁が延び上がつて遠くまで見廻したのは巡查が可恐かつたのだ。そこで翁と巡查と摺違つた時に河田翁は急に帽子に手をかけて禮をした。石井翁は見て居て其意味が解らなかつた。

(明治四十一年一月)

泣き笑ひ

時之助の母親は女中お光の歸るのを一刻千秋の思ひで待つ居る。

「又た彼の魯鈍のことだから、のろくさくして居るのだらう、眞實に仕様がないねえ」と大焦燥に焦燥して居る。

するとお光は果して頗る暢氣に、鼻歌でも唄はんばかりの様子で歸つて來た、と母親には見受られたのである。いきなり、

「お光！ お光！ お前何をぐづくして居るのだねえ、眞實に！」

「へえ」と年は十七ばかりの、孤兒なるが故に可哀さうだと、東京から連れ歸つた女中が、眼をパチクリ／＼、奥様の顔を眺めて居る。

「へえ」もないもんだ、それで片山の武さんは歸宅つて居ましたか。」

「へえ、片山の坊様は歸宅つて居ました。」

「そんなら大村の坊様は？」

「歸宅つて居ました。」

母親は急込んで、

か。」

「へえ。」

「へえちやアありません、眞實にお前のやうな大馬鹿がありますか、我家の坊様の事を聞かないくらゐならお使に行つて何の役にたちます。」

「でも奥様が只だ片山の坊様と大村の坊様が歸宅つたか聞て來いとお仰いましたから、それで……。」

「さう言ひましたとも、けれど何故我家の坊様はと一言訊くことが出來ません」と白眼つけて、直ぐ奥に向つて、

「眞實に貴方心配ですから、御自分で一寸と聞いて來て下さいませんか。」

夕闇薄暗き縁側に涼んで居た休職判事の父親は又た悠然たるものである、團扇をバタリバタリ、

「まあお前のやうにツイ／＼騒いだつて仕様がないう。必定寄道でもしたのだから、今に歸宅つて來るよ。」

「貴方もそんな暢氣な事ばかりおつしやつて萬

一の事があつたら如何なさいます。」

「萬一の事とはどんな事だ。」

「萬一のことゝは萬一の事です。」

「我家の時が水へでも溺つたと云ふのだらう。」

「さうですとも。そんな事が無とも限りません。連伴が少年のことですから驚いて逃げて來て知らん顔をして居るなんて、よく東京でもあるぢやアありませんか。」

「そんな馬鹿々々しいことがあつて居るものかね。第一お前は時等が釣魚に行く場處の模様を知らないから、さういふこと言ふのだ、今日、時が釣に往つた處は平地で池の堤といふものが

ない、だから落ちやうがない。よしんば落ちたにしても足をのめりこまず位のもので決して生命に被害ある筈がないのだ。必定、寄道を爲

て居るのだよ」といはれて乙なことおつしやる

と言ひたさうな身構をして東京の奥様、

堤があるか無いか、昨年來たばかりの私に

はお國の事は存じませんが、もしか貴方が、斷

て寄道を爲たのだとおぼしめすなら一寸と聞いて來て頂くわけに參りませんか知ら。片山の坊

様でも我家の時が寄道を爲たのか池に陥つたのか位は知居なさる筈ですから」と東京式の

せきこんだ調子で迫る。一方は平氣なもの、

『お前が心配するのだからお前が聞にゆけば可
ぢやアないか。』

『行きますとも、そんなら私が行きます。』

『アレ奥様、私が行きます。』

『いゝえ、私が行きます。お前などに頼むと安
心が出来ません。』

『いゝえ、私が参ります。』

『うるさいね。兩人で行つたら可いだらう』と
父の一聲。

母親とお光は申しあはしたやうに沈黙つて了
つた。そして、こそく兩人は外方に掛けた。

『お光や。お前は片山へ行つて聞いておいで。

私は此處で待つて居るから。時は平時この道か
ら歸るから。』

と言はれて家から四丁ばかりの淋しい辻に
奥様を残してお光は再び片山の家へと急いだ。

夕月煙靄をこめて蓮池の香り高き處に母親
は月に向つて立つて居た。暫時するとお光が

歸つて来て、

『奥様欠張坊ちゃん居残りなんださうです。』

『一人でかえ。』

『へえ。』

『まア何といふ兒だらう、田舎道の一里上もあ
る所へ遊びにゆきながら、日が暮れても歸つて

来ないなんて……』

『今にお歸りになりますよ』とお光は奥様の泣
き出しさうな聲を聞いて慰める。奥様は無言で

蓮池と屋敷との間を通ふ眞直な道を眺めて居
たが、

『お前先生へお歸り。そして風呂の下を見てお置
き。私は少し此處で待つて見るから。』

『畏まりました』とお光の去つた後で、母親は
『若しか』といふ場合を色々想像して、胸の痛

くなる程心配して待つて居ると、間もなく蓮池の
邊に小さな影が見えだした。だん／＼近いて來

るのを見ると、時之助らしい。けれども若しか
又た他家の兒かも知ぬと心も空に見つめて居

ると、釣竿を肩にして左手に魚籠を提げ、小聲
で唱歌を歌ひながら來るのは正しく時之助で

ある。
『時ぢやアありませんか』といふ一刹那、悲み
變じて喜びとなる。

『ヤア、母様其處で何を爲て居るのです。』

『まア此兒は。何を爲て居る所ぢやありません
ん。お前こそ斯んなに遅くまで何をし居たの

です』といふ時、喜び變じて怒となる。

『釣つて居ました。今日は澤山釣れましたよ。』
『最早これから沈して釣魚にはやりません。』

『何故』

『何故もないもんです。さつさと、お歸りなさ
い。』

と母親は安心して先へ立ち歩めば時之助は平
氣なもの、口笛を吹きながら續く。

流石に何程か心配になつてゐたと見えて父親
は玄關先に立つて居たが二人の姿の門内に

現るゝや、
『歸つた、歸つた!』と、にこ／＼する。

『まア貴方如何でせう。居残つて釣つて居たの
ですとサ、呆れた兒ぢやアありませんか。』

『時、お前が餘り遅いので母様大變心配しま
したぞ』と父親から言はれても、それには答へ

ず、
『今日は澤山釣れましたよ、今見せます』と言

ひ捨て、裏へ廻はり、井戸邊で足を洗つて、魚
籠を提げたまゝ座敷へ入り、洋燈の下で魚籠

の蓋を取り、
『そら、こんなに釣れました。』

『どれ／＼』と父親は視込むで、
『成程これはお前にしては大漁だ』と感心する。

『随分大きな居ますよ。見せませう』と臺所
へ飛んで行き、

『光、摺針をお呉れ。』

お光は摺鉢を渡しながら、

「大變迎うございましたことねえ。」

「黙れ！」と摺鉢を奪取り、座敷に飛で舞つて、魚籠をあけると、大小四五十尾の鮒が銀光を放つて、ぞろ／＼と出て来る。

「ねえ、父上此魚なぞ随分大きいでせう。」

「なる程これは太い。」

「何になります。そんなものを十尾や五尾釣つて来て。眞實に人に心配ばかりかけて！」

と先程から父親が優しく言ふ程、劫腹がつて居た母親は我鳴りつける。

「ほウだ」と時之助は喜しさうに鮒を眺めながらいふ。

「何が「ほウ」です」と母親は睨みつける。

「だつて母上の國ぢやアこれが五尾か十尾でも、日本帝國は四十九尾ですからね。」

「百尾でも五尾でも其様ものは同じことです、生意氣を言ふ。」

「でも此奴のやうな大きい鮒は母上見たことが無いでせう」と鮒の尾を掴んでぶらさげて見せる。

「何が大きいものか。鼻へ捻り込めさうなものが何になります。」

「ほウだ。」

「何が「ほウ」です。」

「ほウだ。」

「何が「ほウ」です。」

「だつて母上の鼻の穴は随分大きい穴ですなえ。」

「何故です。」

「だつて此鮒が鼻へ捻り込めるのですもの。」

と平氣でいふのを見て父親は思はず／＼と笑つた。

「まア此兒は、此兒は」と母親は口惜いので泣くのか、可笑いので笑ふのか、眼には涙、口元は笑味、呆れ返つて後の言葉が出ない。

(明治四十年三月)

都の友へ、B生より

(前略)

久しぶりで孤獨の生活を行つて居る、これも病氣のお蔭かも知れない。色々なことを考へて久しぶりで自己の存在を自覺したやうな気がする、これは全く孤獨のお蔭だらうと思ふ。此温泉が果して物質的に僕の健康に效能があるか無いか、そんな事は解らないが何しろ温泉は悪くない。少くとも此處の、此家の温泉は悪くない。

森閑とした浴室、長方形の浴槽、透明つて玉のやうな温泉、これを午後二時頃獨占して居ると、くだらない實感からも、夢のやうな妄想からも脱却して了ふ。浴槽の一端へ後腦を乗せて一端へ爪先を掛けて、ふはりとし身を浮べて眼を閉る。時に薄目を開て天井の光線窓を見る。碧に煌めく桐の葉の半分と、蒼々無際限の天空が見える。老人なら南無阿彌佛、と口の中で唱へる所だ。老人でなくとも此心持は同じである。

居室に歸つて見ると、ちゃんと整頓して居る。

出る時は書物やら反古やら亂雑極まつて居たのが、物各々所を得て靜かに僕を待つて居る。ごろりと轉げて大の字なり、座布団を引寄せて二つに折て枕にして又も手當次第の書を読み初める。陶淵明の所謂「不レ求三甚解」位は未だ可いが時に一ページ讀むに一時間もかゝる事がある。何故なら全然で他の事を考へて居るからである。昨日も君の送つて呉れたチェホフの短篇集を讀んで居ると、ツイ何時の間にか「ボズ」さんの事を考へ出した。

ボズさんの本名は權十とか五郎兵衛とかいふのだらうけれど、此土地の者は唯だボズさんと呼び、本人も平氣で返事をして居た。

此以前僕が此處へ来た時の事である、或日の午、僕は涇流の下流で香魚釣を行つて居たと思ひ玉へ。其場所が全く僕の氣に入つたのである、後背の涯からは雑木が枝を重ねて被ひかかり、前は可なり廣い澗が靜に澗を卷て流れて居る。見場はわざ／＼作つた様に思はれる程、具合が可い。此處を發見た時、僕は思つた、此處

で釣るなら釣れないでも半日位は幸棒が出来ると思つた。處が僕が釣初めると間もなく後背から「釣れますか」と唐突に聲を掛けた者があつた。

振り向くと、それがボズさんと後に知つた老爺であつた。七十近い、背は低いが骨太の老人で矢張り釣竿を持って居る。

「今初めた計りです」と言ふ中、浮木がガイと沈んだから合すと、餌釣としては、中々大いのが上つた。

「此處は可なり釣れます」と老爺は僕の直ぐ傍に腰を下して煙草を喫ひだした。けれど一人が竿を出し得る丈の場處だからボズさんは唯見物をして居た。

間もなく又一尾上げるとボズさん、

「旦那はお上手だ。」

「だめだよ。」

「イヤさうでない。」

「これでも上手の中かね。」

「此温泉に来るお客さんの中ぢやア旦那が一等だ」と大げさに讚めそやす。

「何しろ道具が可い」と言はれたので僕は思はず噴飯だし、

「それぢやア道具が釣るのだ、ハ、ハ、ハ、……」

ボズさん少しく狼狽して、
「イヤ其は誰だつて道具に由ります。如何ら上手でも道具が悪いと十尾釣れるところは五尾も釣れません。」

それから二人種々の話をして居る中に懇意になり、ボズさんが迷感なく言ふ處によると僕の發見した場所はボズさんのあじろの一で、足場はボズさんが作つた事、東京の客が連れて行けといふから一緒に出ると下手の癖に釣れないと言つて怒つて直ぐ止す事、釣れないと言つて怒る奴が一番馬鹿だといふ事、温泉に来る東京の客には斯ういふ馬鹿が多い事、魚でも生命は惜しいといふ事等であつた。

其日はそれで別れ、其後は互に誘ひ合つて釣に出掛て居たが、ボズさんの家は一空しかない古い茅屋で其處へ獨りで住んで居たのである。何でも無遠慮に話す老人、が身の上の事は成る可く避けて言はないやうにして居た。けれど遠まはしに聞き出した處によると、田之浦の者で、作夫婦は百姓をして可なりの生活をして居るが、其夫婦のしうちが氣に喰ふと言つて十何年も前から一人で此處に住んで居るらしい、そして悴から食ふだけの仕送りを爲して貰つて居る様子である。成程さう言へば何處か固拗な

ところもあるが、僕の思ふには最初は頑固で行つたのながら後には知つて孤獨のわび住ひが氣になつて来たものではあるまいか。世を遁がれた人の趣があるのは其理由であらう。

其處で僕は昨日チエホフのブラックモンクを讀まして思はずボズさんの事を考へ出し、其以前二人が溪流の奥深く、汗つて「やまめを釣つた事など、それからそれへと考へると堪らなくなつて来た。實は今度来て見ると、ボズさんが居ない。昨年田之浦の名家へ歸つて亡なつたとの事である。

事實、此世に亡い人かも知れないが、僕の眼にはあり、と見える、菅笠を冠つた老爺のボズさんが細雨の中に立て居る。

「病氣に良くない、雨が降りさうですから」など筋の者がとめるのも聞かず、僕は筆を持って出掛けた。人家を離れて四五丁も、浜ると既に路もなければ畑もない。たゞ左右の藪と其間を迂回し流るゝ、渾水ばかりである。潮を辿つて奥へ奥へと浜るに連れて、此處彼處、舊遊の濃の小陰にはボズさんの菅笠が見えるやうである。嘗てボズさんと辨當を食べた事のある、平い岩まで来ると、流石に僕も疲れて了つた。元より釣る氣は少しもない。岩の上へ立てチツとして

居ると寂しいこと、静かなこと、深谷の氣が、に迫つて来る。

暫時くすると藪根へ感ず峻峻から雨を吹き下して来た、露のやうな雨が斜に僕を絞めて、直ぐ頭の上の草山を灰色の雲が切れんになつて飄る。

「ボズさん！と僕は思はず涙聲で呼んだ、君、狂氣の眞似をすると言ひ玉ふか、僕は實に滿眼の涙を落つるに任かした。

(明治四十年七月)

湯ケ原ゆき

（一）

定めし今時は閑散だらうと、其閑散を狙つて来て見ると案内さうでもなかつた。殊に自分の投宿した中西屋といふのは部屋敷も三十近くあつて湯ケ原温泉では第一といはれて居ながら何も空室はイクラもない程の繁盛であつた。少し當は違つたが先づ、繁盛に越した事なしと斷念めて自分は豫想外の室に入つた。

元來自分は人の無性者にて思立た旅行もなか、實行しないのが今度といふ今度は友人や家族の切なる勧告でヤツと出掛けることになつたのである。「其處に骨の人行く」といふ文句それ自身がふらふらと新宿の停車場に着いたのは六月二十日の午前何時であつたか忘れた。兎も角、一汽車乗り遅れたのである。

同伴者は親類の伯母であつた。此人は途中萬事自分の世話を焼いて、病人なる自分を湯ケ原まで送り届ける役を持つて居たのである。「どうせ待つなら品川で待ちませうか、同じ

ことでも前程へ行つて居る方が氣持が可いから。」

と自分がいふと、
「ハア、如何でも。」

其處で國府津までの切符を買ひ、品川まで行き、其プラットホームで一時間以上も待つこととなつた。十一時頃から熱が出て来たので自分はプラットホームの真中に設けある四方附子張の待合室に入つて小さくなつて居ると呑氣なる伯母はそんな事とは少しも御存知なく待合室を出て見たり入つて見たり、煙草を喫て見たり、自分が折り折り話しかけても只だ「ハア、さう」と答へらるゝだけで、沈々黙々、空々漠々、三日でも斯うして待ちますよといはぬ計り悠然、泰然、茫然、杳然たるものであつた。其中漸く神戸行が新橋から来た。特に國府津止の箱が三四輛連結してあるので紅帽の注意を幸にそれに乗り込むと果して同乗者は老人夫婦きりで頗る空て居た、待ち疲れたのと、熱の出たのとで少なからず弱て居る身體をド、かと投

げ下すと眼がグラついて思はずのめりさうにした。

前夜の雨が晴て空は薄雲の隙間から日影が洩ては居るものゝ梅雨季は争はず、天際は重い雨雲が被ひ重なつて居た。汽車は御丁寧各驛を拾つてゆく。

「伯母此處は梅で名高い蒲田ですね。」

「さう？」

「伯母田植が盛んですね。」

「さうね。」

御覽なさい、眞紅な帯を結めて居る娘も居ますよ。」

「さうね。」

「伯母川崎へ着きました。」

「さうね。」

「伯母お大師様、何度お参りになりました。」

「何度ですか。」

これでは何方が病人か分なくなつた。自分も斷念めて眼をふさいだ。

（二）

トロリとした間に鶴見も神奈川も過ぎて平沼で眼が覺めた。僅かの假寐ではあるが、それでも氣分がサツパリして多少か元氣が附いたので

懲ずまに伯母に、

『横濱に寄らないだけ未だ可う御座いますね。』

『ハア。』

是非もないこと、自分も固念めて嘆息表には大衆と知りながら煙草を喫ひ初めた。老人夫婦は頻りと話して居る。而もこれは婦の方から種の問題を出して居るやうだ、そして多少か煩いといふ意味で男はそれに説明を興へて居たが随分丁寧な者で決して、

『ハア。さう』の比ではない。

若し或人が伯母の背後から其背中をトンと叩いて「伯母」と叫んだら「オ、」と驚いて四邊をきよそ／＼見廻して初めて自分が汽車の中に在ること、旅行しつゝあることに気が附くだらう。全體旅をしながら何物も見ず、見ても何等の感興も起さず、起しても其を折角の同伴者と語り合て更に興を増すこともしないなら、初めから其人は旅の面白みを知らないのだ、など自分は獨り腹の中で愚痴つて居ると、

『あれは何でせう、そら彼の山の頂邊の三角の家をやうなもの。』

『どれだ。』

『そら彼の山の頂邊の、そら……』

『そら彼の山ですよ。』

『どれだよ。』

『まア貴下あれが見えないの。ア、最早見えなくなつた。』

と老婦人は残念さうに舌打をした。伯母は一寸と其方を見たばかり、此時自分は思った、伯母よりか老婦人の方が老福だ。

そこで自分は「對話」といふことに就て考へ初めた、大袈裟に言へば「對話哲學」又たの名を

「お喋舌哲學」に就て。

自分は先づ劈頭第一に「喋舌る事の出来ない者は大馬鹿である。』

(三)

『喋舌ることの出来ないのを稱して大馬鹿だといふは餘り残酷いかも知れないが、少くとも喋舌らないことを以て甚く自分で豪らがる者は馬鹿者の骨頂と言つて可ろしい、而して此種の馬鹿者を今の世にチヨイ／＼見受けるには情ない次第である。』

『旅は道連、世は情といふが、世は情であらうと無からうと別問題として旅の道連は難有たい、マサカ獨りでは喋舌れないが二人なら對手が泥棒であつても喋舌りながら歩くことが出来る』

など、それからそれと考へて居るうち又眠くなつて来た。

睡眠は安息だ。自分は眠ることが何より好きである。けれど爲うことなしに眠るのはあたらしく、一生の一部分をたゞで失くすやうな気がして居る不愉快に感ずる、處が今の場合、如何とし爲がたい、眼の閉るに任かして置いた。幾分位試つたか知らぬが夢現の中に次のやうな談話が溢れ／＼に耳に入る。

『貴方お腹が空きましたか。』

『甚く空いた。』

『私も大變空きました。大船でお辨を買ひませう。』

成程こんな談を聞いて見ると腹が空いたやうである。まして沈黙家の特長として伯母も必定さうだらうと、

『伯母お腹が空きましたらう。』

『イ、エ、さうでも有りませんよ。』

『大船へ着いたら何か食べませう。』

『今度が大船ですか。』

『私は眠て居たから能く分りませんが』と言ひながら外景を見ると「山樹林の容様が正にそれなので、

『エ、最良直ぐ大船です。』

『大變早いこと!』

(四)

大船に着くや老夫婦が逸早く押ずしと辨當を
買ひこんだのを見て自分も其眞似をして同じ物
を求めた。頸筋は豚に似て聲までが其らしい老
人は辨當をむしやつき、少し上方辯を混ぜた五
十幾歳位の老婦人はすしを頬張りはじめた。
自分は先づ押ずしなるものを一つ摘んで見た
が酔が利き過ぎてとても喰へぬのでお止めにし
て更に辨當の一隅に箸を着けて見たがボロ／＼
飯で病人に大毒と悟り、これも御免を被り、
元來小食の自分、別に苦にもならず總てを伯
母にお任して茶ばかり飲んで内心一の悔を懷き
ながら老人夫婦をそれとなく觀察して居た。
『何故「ビールに正宗」の其何れかを買ひ入
れなかつたらう』といふが一の悔である。大船を
發して下へば最早國府津へ着くの待つ外、途
中何も得る事は出来なと思ふと、淺間しい事
には猶ほ残念で堪らない。
『酒を買へば可かつた。惜しいことを爲た。』
『ほんとに、さうでしたねえ』と誰か合槌を打
て呉れた、と思ふと大連の眞中。伯母は今しも
下を向て蒲鉾を食ひ缺いて居らるゝ所であつ

た。

大磯近くなつて漸と諸君の晝飯が了り、自分
は二個の空箱の一には笹葉が残り一には煮肴の
汁の痕だけが残つて居る奴をかたづけ腰掛の
下に押込み、老婦人は三個の空箱を丁寧に重ね
て、傍の風呂敷包を引寄せ其に包んで了つ
た。最も左様する前に老人と小聲で一寸と相
談があつたらしく、金貸らしい老人は『勿論の
こと』と言ひたげな様子を首の振り方で見せた
のであつた。

此二の悲劇が終つて彼是する中、大磯へ着く
と女中が三人ばかり老人夫婦を出迎に出て居
て、其一人が窓から渡した包を大事さうに受
取つた。其中には空虚の折箱も三ツ入つて居る
のである。

汽車が大磯を出ると直ぐ(吾等二人ぎりにな
つたので)、

『伯母今の連中は何者でせう。』

『今のツて何に?』

『今大磯へ下りた二人です。』

『さうねえ。』

『必定金貸か何かですよ。』

『さうですかね。』

『でなくても左様見えますね。』

『婆様は上方者ですよ、ツルリンとした顔め何
處に二間抜の狡猫』とでも言つたやうな所があ
つて、ベヤチクリ／＼老爺の機嫌を取て居まし
たね。』

『さうでしたか』

『妾の古手かも知れない。』

『貴君も随分口が悪いね』とか何とか伯母が言
つて呉れると、益々悪口雜言の眞價を發揮する
のだけれども、自分のは合憎く甘い言をトン
トン拍子で言ひ合ふやうな對手でないから、間
の抜けるのも是非がない。

(五)

箱根、伊豆の方面へ旅行する者は國府津まで
來ると最早目的地の傍まで着いた氣がして心
も勇むのが常であるが、自分等二人は全然そん
な様子もなかつた。不好きな處へいや／＼なが
ら出かけて行くのかと怪まるゝばかり不承無
承にフラットホームを出て、紅帽に案内されて
兎も角も茶屋に入つた。

伯母は兎につまゝられたやうな顔つきをし
て、自分は狼につまゝられたやうな顔をして
(多分他から見ると其様顔であつたらうと思ふ)
『やれ／＼』とも先づ／＼とも何とも言はず女

中のすゝめる椅子に腰を下した。

自分は伯母に「これから何處へ行くのです」と問ひたい位であつた。最早我慢が仕きれなくなつたので、伯母が一寸と立て用たしに行つた間に正宗を命じて、コップであふつた。伯母の來た時は最早コップも空罌も無い。

思ひきや此藝當を見ながら、

「ヤア、これは珍しい處で」と景氣よく聲をかけて入つて來た者がある。

可哀さうに景氣のよい聲、肺臓から出る聲を聞いたのは十年ぶりのやうな氣がして、自分は思はず立上つた。見れば友人M君である。

「何處へ」と彼は問うた。

「湯ヶ原へ行く積りで出て來たのだ。」

「湯ヶ原か。湯ヶ原も可いが、此頃の天氣ぢやアうんざりするナア。」

「君は如何したのだ。」

「僕は四五日前から小田原の友人の宅へ遊びに行つて居たのだが、雨ばかりで閉口したから、これから歸京らうと思ふんだ。」

「湯ヶ原へ行き玉へ。」

「御免、御免、最早飽きくした。」

平凡な會話ぢやアないか。平常なら當然の挨拶だ。併し自分は友と別れて電車に乗つた後

でも氣持がすが／＼して清涼劑を飲んだやうな氣がした。おまけに先刻の手早き藝當が其効果を現はして來たので、自分は自分と腹が定まり車窓から雲霧に埋れた山々を眺め、

「走れ走れ電車。」

圓太郎馬車のやうに喇叭を吹いて呉れると更に妙だと思つた。

（六）

小田原は街まで長い其入口まで來ると細雨が降りだしたが、それも降りみ降らずみたいした事もなく人車鐵道の發車點へ着いたのが午後の何時。半時間以上待たねば人車が出ないと聞いて茶屋へ上り今度は大びらで一本命じて空腹へ刺身を少ばかり入れて見たが、惡酒なるが故のみならず元來八度以上の熱ある病人、甘味からう筈がない。悉くやめてごろり轉がるとがつかりして身體が解けるやうな氣がした。旅行して旅宿に着いて此がつかりする味は又特別なもので、疲勞の美味とでも言はうか、然し自分の場合はそんなところではなく病が手傳つて居るのだから鼻から出る息の熱を今更の如く感じ、最早や身動きするのもしやになつた。しかし時間が來れば動かぬわけにいかない、

只だ人車鐵道へ終れば最良着いたも同様、其を力に船に入ると中等は我等二人ぎり、廣いのは難有いが二時間半を無言の行は恐れ入ると思つて居ると、巡查が二人入つて來た。

一人は張飛の瘦て弱くなつたやうな中老の人物。一人は關羽が鬚髯を剃り落して退隱したやうな中老以上の人物。

瘦せた張飛は眞鶴駐在所に勤務すること既に七八年、齋藤巡查と稱し、退隱の關羽は鈴木巡查といつて湯ヶ原に勤務すること實に九年以上であるといふことは、後で解つたのである。

自分の註文通り、喇叭の聲で人車は小田原を出發た。

（七）

自分は如何いふものかガタ馬車の喇叭が好きだ。回想も聯想も皆な面白い。春の野路をガタ馬車が走る、野は菜の花が咲き亂れて居る、フワリ／＼と生温い風が吹いて花の香が狭い窓から人の面を掠める、此時御者が陽氣な調子で喇叭を吹きたてる。如何やら嫁いびりの胡麻白婆さんでも此時だけはのんびりして幾干か善心に立ちかへるだらうと思はれる。夏も可し、清明

の季節に高地の田道を走る時など更に可し。ところが小田原から熱海までの人車鐵道に此喇叭がある。不愉快千萬な此交通機關に此喇叭が附いてる丈で如何か興を助けて居るとは兼て自分の思つて居たところである。

先づ二臺の三等車、次に二等車が一臺、此三臺が一列になつてゴロ／＼と停車場を出て、暫時は小田原の場末の家並の間に上には人が押し下には車が走り、走る時は喇叭を吹いて進んだ。

愈々平地を離れて山路にかゝると、これからが初まりと言つた調子で張飛巡查は何處からか煙管と煙草入を出したがマッチがない。關羽も持て居ない。これを見た伯母は徐に袖から取出して、

『どうかお使ひ下さいまし。』
と丁寧に言つた。

『これは／＼。如何もマッチを忘れたといふやつは始末にいかんもので。』

と巡査は一ふく點火でマッチを伯母に返すと伯母は生眞面目な顔をして、其を受取つて自身も煙草を喫ひはじめた。別に海洋の絶景を眺めようともせられない。

どんより曇つて折り／＼小雨さへ降る天氣で

はあるが、風が全く無いので、相模灣の波靜に太平洋の煙波夢のやうである。噴煙こそ見えな

いが大島の影も朦朧と浮かんで居る。
『伯母どうです、佳い景色ですね。』
『さうねえ。』
『向うに微に見えるのが大島ですよ。』
『さう？』

此時二人の巡查は新聞を讀んで居た。關羽巡查は眼鏡をかけて。人車は上だからゴロゴロと徐行して居た。

（八）

景色は大い變化に乏しいから初めての人のら兎も角、自分は既に幾度か此海と此棧道に慣れて居るから強て眺めたくもない。伯母が定めし珍しがるだらうと思つて居たのが、例の如く簡單な御挨拶だけだから張合が抜けて了つた。新聞は今朝出る前に讀み盡して了つたし、本を讀む元氣もなし、眠くもなし、喋舌る對手もなし、あくびも出ないし、さて斯うなると空々然、淡々然、何時か伯母の氣が自分に乗り移つて血の流動が次第々々にのろくなつて行くやうな氣

がした。
江の浦へ一時半の間は上であるが多少の高

低はある。下りもある。喇叭も吹く、斯くて棧道にかゝつてから第一の停留所に着いた、所の名は忘れたが此處で熱海から来る人車と入りちがへるのである。

巡查は此處で初て新聞を手離した。自分はホツと呼吸をして我に返つた。伯母はウンともスンとも言はれない。別に我に返る必要もなく又た返るべき我も持て居られない。

『此處で又暫時く待たされるのか。』
と眞鶴の巡查、則ち張飛巡查が言つたので、

『いつも此處で待たされるのですか。』
と自分は思はず問うた。

『さうとも限りませんが熱海が遅くなると五分や十分此處で待たされるのです。』

壯丁は車を離れて水を呑むもあり、皆掛茶屋の縁に集つて一休んで居た。此處は谷間に據る一小村で急斜面に茅屋が段々作つて覆つて居るらしい、車を出て見ないから能くは解らないが漁村の小なる者、蜜柑が山の産物らしい。人車の軌道は村の上端を横つて居る。

雨がボツ／＼降つて居る。自分は山の手の方を見つて居た。初めは何心なく見るともなしに見て居る内に、次第に今見て居る前面の光

景は一幅の借書となつて現はれて来た。

(九)

軌道と直角に細長い茅葺の農家が一軒ある、其の裏は直ぐ山の畑に續いて居るらしい。家の前は廣庭で麥などを乾す所だらう、廣庭の突きあたりには物置らしい屋根の低い茅屋がある。母家の入口はレールに近い方にあつて人車から見ると土圍が半分ほどはすかひに見える。

入口の外に軒下に楕圓形の掘風呂があつて十二三の少年が入居るのが最初自分の注意を惹いた。此少年は其の日に焼けた背中ばかり此方に向けて居て決して人車の方を見ない。立つたり、しゃがんだりして居るばかりで、手拭も持て居ないらし、又た何時出る風も見えず、三時間でも五時間でも一日でも、あアやつて居るのだらうと自分には思はれた。廣庭に向た釜の口から青い煙が細々と立騰つて軒先を掠め、ポツポツ雨が其中を透して落ちて居る。半分見える土間では二十四五の女が手拭を姉様かぶりにして上りがまちに大盥程の桶を控へ何物かを飾にかけて専念一意の體、其桶の前に七ツ八ツの少女が坐りこんで見物して居るが、これは人形のやうに動かない、風呂の中の少年も同じ

くこれを見物して居るのだといふことが自分によつと解つた。

入口の彼方は長い溝側で三人の少女が坐つて居て、其一人は此方を向き今しも十七八の姉様に髪を結つて貰ふ最中、前髪を切り下て可愛く之も人形のやうに順しくして居る、廣庭では六十以上の而も何れも達者らしい婆さんが三人立て居て其一人の赤兒を背負て腰を曲げ居るのが何事か婆さん膝を張上げて喋舌つて居ると、他の二人の婆様は合槌を打つて居る。けれども三人とも手も足も動かさなない。そして五六人の同じ年頃の子供がやはり身動きもしないで婆さん達の周圍を取り巻いて居るのである。

眞黒な艶の佳い洋犬が一匹、臆を地に着けて臥べつて、耳を垂れたまゝ、是れ亦尾をすら動かさず、廣庭の仲間に加はつて居た。そして母屋の入口の軒蔭から燕が出たり入つたりして居る。

初めは借書のやうだと思つて見て居たが、これ實に畫でも何でもない。細雨に暮れなんとする山間村落の生活の最も靜かなる部分である。谷の奥には墓場もあるだらう、人生悠久の流が此處でも泡立ぬまでの渦を巻いて居るのである。

(十)

随分長く待たされたと思つたが實際は十分ぐらゐで終海からの人車が威勢能く喇叭を吹きたて、下つて来たので直ぐ入れちがつて我々は出立した。

雨が次第に強くなつたので外面の模様は法螺になるばかり、車内は退屈を増すばかり、眞體の巡査がとうとう、

「何處へ行しやいます」と口を切た。

「湯ヶ原へ行ふと思つて居ます」と自分がこれに應じた。思つて居るところか、今現に行きつゝあるのだ。けれど斯う言ふのが温泉場へ行くと、海水浴場へ行くと人乃至名所見物にでも出掛ける人の洒落た口調である、キザな言葉たるを失はない。

「湯ヶ原は可い所です、初めてですか。」

「一二度行つた事があります。」

「宿は何方です。」

「中西屋です。」

「中西屋は結構です、近來益々可いやうです。」

さうだね君。」

と兎角言葉の少ない鈴木巡査に賛成を求めた。

『さうです。實際彼の家が今一番繁盛するでせう』と關羽の鈴木巡査が答へた。

先づこんな有りふれた問答から、だんく談話の花がさいて東京博覽會の噂、眞鶴近海の魚漁談等で退屈を免れ、やつと江の浦に達した。

『サアこれから下りだ』と齊藤巡査が威勢をつけた。

『伯母これから下りですよ。』

『さう。』

『随分亂暴だから用心せんと頭を打觸ますよ。』

『さうですか。』

* * * * *

齊藤巡査が眞鶴で下車したので自分は談敵を失つたけれど、湯ヶ原の入口なる門川までは、退屈する程の隔離でもないので困らなかつた。

日は暮れかゝつて雨は益々強くなつた。山々は悉く雲に埋れて僅かに其麓を現すばかり。我々が門川で下りて、更に人力車に乗りかへ、湯ヶ原の溪谷に向つた時は、さながら雲深く分け入る思ひがあつた。

渚

玉生が轉地先から親女のT君へ送つた手紙を集めて「渚」と題したのである。一渚には種種のもの漂着するが、どうせろくな物は無い。加之に悉く断片で満足な代物は一個もないといふ意味である。轉地先が海岸だからでもある。

玉生の病氣は呼吸器病だ。然の有る時と無い時とある。手紙は無い時書くが熱が出て来ると中止して其まゝ封じて了ふ。だから愈々要領を得て居ない場合がある。

(一) 里芋

今日太陽が落ちかゝつてから散歩に出た。斷崖の上の孤屋を出ると野は淋しい。家の前の村道は一人通らない。畑は此頃刈り盡されて眼界が俄に廣くなつた氣がする。廣い野原が秋の末寂寥しく天外の連山に接して居る。

生きるか死ぬるか解らない病人が一人ぶらぶらと此野末を歩いて居る。それが僕だ。可哀さうに蒼白い顔して深い嘆息すらも得爲ない

で、取留もない事を思ひながら歩いて居る。それが僕だ。

電信柱の矢頭しか見えなかつた縣道を忙急しさうに往來する人や車が小さく黒く見えるやうになつた。日暮だから其もちらりほらりだ。

三坪ばかりの里芋畑が路傍にあつた。周囲の陸稻や粟が刈り取られて、こればかりが黒い土から畑らしく残つて居る。そよ吹く風もなく方幾里の野は森として居る中に、此畑の里芋の葉は、ふらふらと動いて居る、心臟形を引延したやうな廣い葉が相並んで左右に頭を振て居る様は器械仕掛のやうだ。思ふに吹かじと見ゆる秋風は低く地に潜んで流れて居るのであらう。僕はちよつと佇立まつて之を見て居たが、

いやだ〜と畑の里芋は

かぶり振り〜子が出来る

といふ里歌を思ひ出した。何故そんないやな里歌を思ひ出したかと責めたつて仕方がない。其處に「畑の里芋」が歩いて来る。

十八九の娘が何か口の中で僕に挨拶して行

き過ぎた。其能を背負つて古手杖をこつて蹠足である。文で愛嬌はあるが並の田舎娘だ。此「里芋」の身の上を僕の聞いて居るだけ話すと極めて節事である。今年の春、此里から五六里離れた某村から二人の娘と、一人の若者が此里へ流れこんだ。

「何故又た其駈落ち者と一同になつて飛び出したのだらうか」

「何故ですか」と家の藪は氣のない返事をする。

「二人で一人の男に惚て居たのぢやないか。」

「さうかも知れません。」

「それなら彼奴は捨てられたのだ。可哀さうに。」

「なアに平氣な者です。」

「まさか平氣でもあるまい。可哀さうに」と、

僕は頻りと可哀さうがつても婆やさんは澄したもので、

「だつて最早腹が膨れて來たちやアありませんか」と言つた。

僕は此時初めて此娘が妊娠して居ることを知

たのだ、その後氣をつけて見ると腹が膨れて

居るやうに見えるが、未だ眼に餘る程ではない。

要するに三人で駈落して、間もなく此娘だけ

此里に取残され、今更我が村にも歸り悪いといふので僕が今住んで居る別荘の世話をして居る何屋に頼み雇人同様に使はれて居るのである。そして何時の間にか妬んだ。そして其親芋は誰であるか僕は知らなかつた。

僕は散歩から歸つて婆やさんに、「お婆やさん、そら何屋のこれサ」と腹の膨れ居る手眞似をして「あれは何と言つたけね、名は。」

「お菊やんですか、それが如何かしましたか」と笑ひながら尻上りの言葉で聞いた。

「今其處で逢つたが仲々愛嬌のある眼元をして居るね。」

「今夜お入浴を貰ひに來ましたら旦那様がさう云つたと喜ばして遣りませう。」

それから僕は夕飯を食ひながらお菊の相手は如何な男だと聞くと婆やさんは初の中は笑つて言はなかつたが僕が「それぢやア僕が言つて見せようか、何屋のこれだらう」と親指を出したので喫驚して其を打消し、とう／＼白狀して了つた。

無論判然したことは言へないがお菊やんの相手は二人あるらしい。其一人は漁船の若者で一人は或百姓の隠居だといふことである。

行末は如何なるだらう。斯ういふ女は其場に臨んで行塞ると思ひ切つたことをするものである。若し二人の男に捨てられたら防波堤の鼻から飛び込み兼ねない、可哀さうに斯ういふ女は自殺の術を知つて居る獣だ。それも優しい小羊だから猶ほみじめだ。——と僕は感ぜざるを得ない。

疲勞たから最早筆を擱めるが、今僕が書いてる中に、そら、湯殿でお菊の聲が聞こえる。囀の婆やさんと何事か面白るさうに土地訛で話して居る……。

(二) 單調

君の手紙を見ると色々な事が言ひたくなる。然し口から耳へでないから悟しく感ずるばかりだ。

此三四日晴天続きで病人には幸福である。

日出るより日入るまで縁を廻つて日光が射込むから随分温暖である。温暖は僕に取つて何よりの藥餌だ。但し東風が太平洋から頻りなしに吹きつけるから壯健者は兎も角僕は外出が困難である。海濱に居て風のない日を求めるのは求める方が無理かも知れない。霧は絶無だ、空氣は澄みきつて居る。近郊に

は林を見受ない、たゞ見渡す限り平板な畑が際限なく連なつて居るばかり。斯くて海も單調、陸も單調、これが此地の特色とでも言はうか。とても南方の國の海岸のやうに參らない、伊豆半島の如く高嶺の半腹を無心の雲が悠々浮動するなど思ひも及ばぬことだ。さればとて又武藏野郊外の雜木林の風趣など藥に爲たくも無い。

單調又た單調！ 森漫たる太平洋を眺め入れば實に單調其物である。其廣大なるだけ其れだけ單調の感が深い。そして更に單調なる大空が無際限の色を其上に垂て、水と空と相呼應して居るのを眺めては、遂には宇宙其物の單調を思はざるを得ない。

單調は「氷結せる永遠の聲だ。單調は死滅だ。實に人をして消滅に堪へざらしむる。神秘！ 神秘！ 此に於て人が神秘に唯一の迷路を求めるのは是非もない事だと僕は思ふ。

(三) 田舎町

僕の家は黒塗の深い寫眞箱がある。多分君も見たことがある筈だ。種々の寫眞が混雑に入っている。其中に田舎町らしい所を縦に撮つた寫眞がある。何時ごろから此寫眞が僕の——といふよりか家の寫眞箱に入つて居るのか知らない

が、僕が寫眞箱を引掻き廻す毎にちよいくと澤山の寫眞の中から現はれて僕の眼に觸れる、僕は氣にも止めず、しみん／＼手に取つて見たこともなかつた。

所が此處に轉地する前の晩、寫眞箱を持ち出して從來に遊んだことのある名所や温泉や海岸などの寫眞を撰り出して見て居ると例の田舎町の寫眞が出て來た。

古いので多少か變色して居るが然し明亮して居る。初めて手に取つて能く見た。何處だか全然解らない。何しろ僕の知らない場所だ。家並は揃つて居ないが其でも町の姿は出來て居る。

この寫眞こそ今度僕が初めて來た此地の町であつたといふ譯ではない。さうではない。此寫眞を見た時の心持と昨日の夕暮に初めて此處の町を散歩した時の心持と同じであつたといふのである。

僕は寫眞を見て色々の感想に耽つた。間近の家の軒下に一人の男が立て居る。往來はさびれて人ツ子一人通つて居ない。既に寫眞である以上、天涯海角何處かに此町が現存して居るに相違ない。併し僕とは何の縁もない。縁がないだけ、つく／＼と眺め入れれば入るほど言ひ知れぬ懐かしい心持が加はつて來る。寫眞を横

にしても縦にしても、隠れた家の見える筈はないが而も僕は如何かして軒先しか見えない家を能く見た心地がした。冬ならば雪も降らう、雨の日は尙ほ淋びしからう、夜は軒先に燈火もちらつくだらう、彼の男は今も生きて居るだらうか、など思ひつゞけた。

然るに僕が此地に來て一月以上にもなるが、昨日の夕暮、所謂のかはたれ時に初めて町を散歩して見た。襦袢の上に襟をしめたまゝで、別荘を出て暫時夕闇に立つて居たが、ふと坂を下る氣になつて今までは庭先から眼の下にのみ見て居た此處の町端れに出た。町とは名のみ凸凹した礫原道を抜んで家が並んで居るばかりである。道の兩側に小溝があつて家の前に人が通るだけの板が渡してある。僕は何思ふとなく此町の入口に立て居た。此時僕の心にしんみりと潜やかに流れこんだ心持は則ち彼の寫眞を見た時の心持と同じであつた。彼は寫眞、これは實物、而も僕が全然、この一團の人叢に縁もゆかりもないことは同じである。これが過去千年の昔であらうと、將た渦巻き盤なる夏雲の谷間に眠る町であらうと同じである。時も場所も無關係である。たゞ此處に血あり肉あり、生あり死あり、戀あり恨あり嘆あり喜ある人の

世が僕の前に横はつて居るのである。擧げて永劫の海に落ちゆく世々代々の人生の流の一支流が僕の前に横はつて居るのである。

僕はい、い、と歩いた。寫眞でないから何の家でも見られる。軒先に立つて暮れゆく空を茫然と眺めて居、男も居た。

小さな石橋を渡ると右へ入る狭い横道がある。突然女の叫ぶ聲が其間から聞えた。聲を限りに罵り叫喚いて居るらしい。僕は思はず其横道に入つた。

此處まで書いて來たが、最早疲れ果てたから簡単にする。

年頃五十計の狂婦がたゞ一人叫ぶのであつた。

一畜生！ 恩知らず、惡黨、馬鹿親爺！」これだけの事を繰返しく怒鳴つて居たのである。

そして僕が別荘に歸つて見ると一人の老人が訪ねて來て居た。此老人が狂女の所謂惡黨の恩知らずであつた。

詳しいことは次便に申上げる。風が出て海が鳴つて居る——。

(明治四十年十二月)

岡本の手帳

左は「牛肉と馬鈴薯」の主人公、岡本誠夫の手帳より抜き書きせしものなり、此主人公に同情ある人には多少の興味あるべし

わが願は世のつねの願にあらず。この願の叶ふ時はいつなるべきか、わが命の此世にある間、叶ふまじとも覺ゆる。もし然る時はわれ五十、七十、百歳の壽を保ち得んも、そは空しき夢の命のみ、われは此世の人の命をば夢の如きものと観ずることなきにもあらねど、人生は眞面目なるものなりといふがわれの信念ぞかし、然るにもし此願叶はずして在らば、わが命はまことに夢よりも空しきものならん。一生を夢と送る、これにも増して衰れのことやあるべき。この願とは何ぞや。げに世の常の願にはあらず。かゝる願を懐くもの今の世に多くありとしも覺えず、われはこれを悲むものなり、世の人は夢の如くに一生を送るなり、われはこれをあはれむ。この願いだかぬ人は影の如き人ぞか

し。これ誇りたる言葉にあらず、われはかく信じて疑はざるなり。

わがこの願の叶ふと叶はざるとは偏に神のみ心にあることなれど、わがこの願を懐くことはまことに神のめぐみなり、われはかく信じて疑はず、わが幸をよるこぶものなり。この願を懐くわれをわれみづから幸なりと信ずるものなり。この願もしも叶はゞ神のみめぐみ幾千萬人のものにも増して此あはれなるわが上に厚きなり。幾千億の人々は此願を懐くことだにせずして其命を了りたり。

全世界の人、悉くこの願を懐く能はずとも、われは此願を追ふべし。わが斯く言ふはずに此願の幾分をとげ得たればならんと思はる。少も見ることもなくば、見んことを願はざる人も或る奇しき物の端をだに垣間見んか、かれの願ひはさらに能く見んことなるべし。このゆゑにわがこの願の叶はんことを切に願ふは、この願の少く叶ひ居ればなり。げに然り。げに然り。この願とは何ぞや。如何なる願ぞや。

わが戀は遂げ得て又破れたり。わが妻、これを捨てゝ走りぬ。このゆゑにわが肉と心とのなやみしこと幾何ぞや。今も今とてわが心はこの傷に苦みつゝあり、今もなほをりく神に祈ることは彼人の心に眞の情の泉ふたゝび漏れて流れ、わがこの傷を清め醫さんことなり。されどこれわが切なる「この願」に非ず。詩人たらんことには、あらず、剛強正大の政府を建立して今の吾國を救はんことには、あらず、基督を吾國民唯一の宗教となさんことには、あらず、これらはわが空想のみ、夢想のみ、「この願」には非ず。愛と信と義とを完うせんことには、あらず、君子たらんこと、聖人たらんこと、偉丈夫たらんこと、これ皆「この願」にはあらざるなり。

山林の自由の生涯にや、嗚呼われは實に山林の自由を希ふものなり、わが血はこのために躍るぞかし。山林に自由存す、われ此句を吟ずる時、わが筋肉の波立つを覺ゆ、言ふ可からざる誇り、まなじりの光となる。されど、これ亦、わが切なる「この願」にはあらず。嗚呼然らば、この願とは何ぞ。父母いたく老い給へり、此世に在す命も長かるべしとも覺えず、一日も永く壯健に在さんこ

とはわが願にぞある。されどこれとてもわが切なる「この願」にはあらず。

宇宙は不思議なり、人生は不思議なりと人も言ひ、われも言ふ。科学と哲學と宗教とは此不思議を滅さんと力む。わが願も亦、科學者として、哲學者として、宗教家として此不思議を闡明せんことにや。あらず、あらず、これわが「この願」にはあらざるなり。

然らば何ぞや、わがこの願とは。美と眞と善と、わが願はこれを求めんことに非ず。若しわが「この願」叶はずんば、美も善も眞も、空のみ、影のみ、まぼろしのみ、題目のみ、稱呼のみ。

カアライル曰く、
Awake, poor troubled sleeper:
Shake off thy torpid nightmare-dream.

わが切なるこの願とは。眠より醒めんことなり、夢を振ひおとさんことなり。

この不思議なる、美妙なる、無窮無邊なる宇宙と、此宇宙に於ける此人生とを直視せんことなり。われを此不思議なる宇宙の中に裸體のまま見出さんことなり。

不思議を知らんことに非ず、不思議を痛感せんことなり。死の祕密を悟らんことに非ず、死

の事實を驚異せんことなり。信仰を得んことに非ず、信仰なくんば片時たりとも安んずる能はざる程に此宇宙人生の有るまゝの恐ろしき事實を痛感せんことなり。

われはわが心の眼に厚き膜の覆ひ居ることを感じつゝあり。われは夢魔の支配のもとにあることを感じつゝあり。これを感じ得たるはまことに神のめぐみなり。今はこの膜の破れんこと、夢魔を追ひ拂はんこと、を切に願ふにいたりぬ。

この宇宙ほど不思議なるはあらず、はてしなきの時間と、はてしなきの空間、凡百の運動、凡百の法則、生死、而して小さき星の一なる此地球に於ける人類、其歴史、げに此われの生命ほど不思議なるはなかるべし。これ誰も知る處なり、而て千百億人中、殆んど一人たりとも此不思議を痛感する能はざるなり。友人の死したる時など、獨り蒼天の星を仰ぎたる時など、時には驚異の念に打たるゝ事あるは人々の経験する處なり。されどこはしばしの感情にして永續せず。わが願は絶えず此強き深き感情のうちにあらんことなり。

何故にわれは斯くも切にこの願を懐きつゝ、

爾も容易に此願を達する能はざるか、夢中こゝりと知りつゝ、何故に夢よりさむる能はざるか。

英語に Worldly てふ語あり、譯して世間的とでもいふ可きか。人の一生は殆んど全く世間的なり。世間とは一人稱なる吾、二人稱なる爾、三人稱なる彼、此三者を以て成立せる場所をいふ。人、生れて此場所に生育し、其感情全く此場所の支配を受くるに至る。何時しか爾なく彼なきの此天地に獨り吾てふもの、俯仰して立ちつゝあることを感ずる能はざるに至るなり。

蒼天も星宿も、太陽も、山河も悉く此世間を飾る裝飾品とのみ感ぜらるゝに至るなり。それ世間ありて天地あるに非ず、天地ありて世間あるなり。此吾は先づ天地の兒ならざる可からず。世間に立つの前、先づ天地に立たざるべからず。

何故にわれは斯くも切に「この願」を懐きつゝ、なほ容易に達する能はざるか、曰く、吾は世間の兒なれば也。吾が感情は凡て世間的なればなり。

心は熱くこの願を懐くと雖も、感情は絶え間なく世間的に動き、世間的願望を追求し、「この願」を冷遇すればなり。

怪しきまでに人は此天地の不思議に慣れて無
感覺に安じ居るなり。墳墓の累々たるを見て平
然たるなり。限りなき蒼穹を仰ぎ見て平然たる
なり。

信仰と言ひ、悟道といひ、安心と云ふ。されど
要するに心理的遊戯ならざるは稀なり。何とな
れば彼等は驚異の感に打たれて天地の間に俯
仰介立し、求めざるを得ずして神と道と安心と
を求めたるに非ざればなり。われは已に此心理
的遊戯に倦みたり。

余のこの願若し叶ふことなく、諸君も亦、か
かる願だに有たずとせば、吾等の宗教は遊戯の
み。吾等はたゞ自個の尤もらしき感情を弄す
るに過ぎざる可し。吾等の所謂信仰なるものは
前提をあまりたる結論よりもはかなきものな
るべし。
政治や美文と並稱せらるゝ限りは宗教も遂
に睡眠中のぜいたくなり。

「神を信するもの、彼等は自から斯く稱し居
れり。然ば何故に彼等は世間的の煩に苦むこ
と多きや。何を着んと思ひわづらふ勿れと主は
教へ玉へども彼等は是等を思煩ふのみに非ず

如何に人に思はれん、如何に世の認めるならん
なども思ひなやみ居るなり。是れ何故ぞや。
彼等の神は天地の造りぬしならずして、世のも
のなればなり。彼等は神を稱して天地の造り
主と讃ゆ。されど彼等は、此天地には極めて冷
淡なり。余は今、彼等と言へり、されど彼等
の内には勿論余も加はり居るなり。

人々各追求願望するところあり、善を求め愛
を求め義を求め、これ等を稱して理想を仰ぐと
稱す。其れより下ては功名富貴、様々なり。
此等の願望のために人々焦心苦慮す。されど
わがこの願よりすれば悉く末葉なり。幻影
を追へるなり、夢を追へるなり。

幻影よ、幻影よ。
人は悉く最大なる事實を見る能はずして幻
影のみを見るなり。幻影を見るが故に事實を見
る能はざるなり。幻影よ幻影よ消え失せよ。
吾等は最早太陽を見ざるなり、たゞ太陽の
幻を見るのみ、月を見ることなし。眼底の幻
影を見るのみ。

吾等は最早天地を見ることなし。心底の印
象物を見るのみなり。

吾等は遂に事實を全く離れて、たゞ幻影のみ
を見るなり。吾等は死を見る能はず、たゞ死體
を見るのみ。生を見ることなし、たゞ生體を見
るのみ。故に生死の不思議に打たれずして生
體の死體となりしを見るのみ。否、生體を見而
して死體を見るのみ。

凡て人が事實を見ずして幻影を見るの尤も
甚だしき例は死の場合なり。ルーテルは曾て
其友人アレキスの電死を傍に見て、死の事實
を見得たり。普通はたゞ幻を見るのみ。吾等
の目さめし時と雖も、夢のうち在る時と五十
歩百歩の相違のみ。

明日も來るべく、今日は過ぎなんとし、昨日
は逝きたり、日々同じ夢のみ繰り返へしつゝ過
ぎゆく。實に憐れなるは、この天地を夢にてつ
つむことなり。

如何にすれば此の夢さむべきぞ、此方法もが
な。利刃を以て肉皮をそぎ取るが如くに痛快
に此心眼の被覆を去りたし。其方法もがな。
深夜、月に對して瞑想したり。薄暮、若王寺
の丘上に立ちて大觀したり。されど僅かに
心のをのゝきしを感じしに過ぎず。忽然とし
てさめざる也。

われ何處より來り、何處にゆく。死せし彼は何處にゆきし。此等の問を此宇宙に向て心から發し得んことは難い哉。されど此問を發せんことを吾が願なり。

われは此類の叶ふまでは如何なる手段をも取ることを辭せざらんと欲す。

上加の丘に登り、松によがりて四方を見渡しぬ。されどわが見たる處は遂に幻影の外に出づる能はざりき。美はしき野邊の夕日影、大空をたゞよふ雲のむれ、はてしなき蒼穹、何れか「美」ならざらん。されどわれ遂に幻を見たるのみ。われの夢は少しもさめざる也。

たゞ世の卑しき空想のみに苦められき。星みつ空、是れ又、幻影としてのみ見らる。われは遂に幻影の外に出づる能はざる乎。

此世の名利の念に苦む。肉の事をのみ思ひわづらふ。これ何故ぞや。神を知らざればなり。吾世に住みてのみ居て、天地に住まざればなり。夢にのみ、き幻のみ拙きて、此恐ろしき不思議なる宇宙に此身を見出すこと能はざればなり。

嗚呼吾は患難めるものなる哉。朝な夕な、夕な朝な、たゞく世の事をのみ思ひわづらふ。

徒らにもがき、苦しみ、あせり、いらだつたり。思へ、思へ。件武平何處にある、青川駒何處にある、山口行一何處にある、有光甲子何處にある、藤何處にある。願くは吾心さめよ、嗚呼希くば吾心めさめよ。

爾の今すむ處何處ぞや。これ舊き都に非ざるか。こゝには千年の歴史あり。されど平清盛何處にある。平敦盛何處にある。花の如き平家の公達今何處にある。

陰謀、企圖、坂亂の跡こゝにあり、其人等何處にかゆきし。足利義政何處にある、其餘關寺は、十錢の見物料を徴して空しく明治の代の見世物となりぬ。豊臣秀吉何處にかある。維新の諸豪傑何處にある。

あゝわれこゝに在り。われ茲に立つ。有りしものなし。今あるものも又た無からん。吾何處より來り、吾遂に何處にかゆく。願くは吾心さめよ。希くは吾がにぶれたる此心めさめよ。

此世の夢よ、さめよ。わが願は宇宙の不思議を明にせんことに非ず、人生の秘密を明白に解剖せんことに非ず。

たゞめざめんことなり。「秘密」に戰慄せんことなり、「不思議」に驚魂悸魄せんことなり。知れざるものは如何にしても知れずと。こゝ

に於て賢明なる人々は人生問題や宇宙問題に從事することを以て閑人の閑事と見做し給へり。

然り、然り、知れざるものは如何にしても知れざる也。これを知らんことをつとむるは實に閑人の事なるべし。されどこれを以て宗教の人を嘲るに足らざる也。宗教とは宇宙人生の不思議を解釋せんがために起りしにはあらず。不思議を不思議と補綴して後起る處の信仰に由つて成るものなり。

有神無神の争論に先だち人は先づめさめざる可からず。爾の宗教的信仰なきは、爾の心の麻痺を證明するなり。

神の人は言ふも畏し、ポロヤルテルや、皆な「不思議」にめさめて此幽遠宏大なる宇宙に於ける人の命運につき心をのゝき感あふれしなり。其火の如き信仰は止むことを得ずして起りし結果なり。

多くの科學者は不思議を感じずして「不思議」に弄ばるゝ愚者なり。多くの哲學者は不思議を感じずして「不思議」を退治せんと欲する夢想家のみ。

(明治三十九年六月)

詩

篇

告天子

身をば心に任せつゝ
心を天にまかせつゝ
花野のかげの朧をば
あけの眞珠の星に立つ。

大連灣

茫茫夢の如し憶ふ彼日
悠悠日月轉ず憶ふ彼夜
大連灣今如何
旅順口頭猛鷲旗樹つ。

艦隊一條長く
指すや大連灣
秋光波に溶け
高し黄海の天。

陸兵背を衝く日

戦艦前を扼するの約
海陸の計空しく
敵に勇卒無し。

見よや和尙島
翩翻たり日章旗
笑声起る、敵を笑ふなり
歡聲涌く、我を祝ふなり。

茫茫夢の如し、憶ふ彼日
悠悠日月轉ず、憶ふ彼夜
大連灣今如何
和尙山頭猛鷲旗樹つ。

大同の江の夕まぐれ
花園口のあけの星
夕は燈火を滅し
曉に敵地を窺ふ。

咄嗟上陸す三萬の軍

劍光日に映ず遼東の野
風無し、波無し、敵影無し。

清國英をあつむ旅順口
想ふ黄海の殘艦潜むる
黄金山白煙咄としこ起る

艦側白浪聳つ
空に劈くの霹靂
艦上快哉を叫ぶ。

艦を旋らす大連灣
報あり、旅順落つと。

涙川

小川谷川末終に
大海原に注げども
人の情の涙川
湛へて汲まむ時ぞなき。

冬の山家

眞柴焚く山家の民

幸ふかす夕の閑居
今宵またかの唄聞かん
いかなれば彼人遅き
待つ乙女待たるゝ人は
水清き村の若者。

「君と別れて松原ゆけば
松の露やら涙や」と
「咲いた櫻になぜ胸繋ぐ
駒がいさめば花が散る」
ありふれし唄のかずく
盡きぬ間に夜は更けにけり。

月出でぬ東の小窓
松風を影にうつして
「歸りなん今夜は宿に」
「明日の夜も来りて唄へ」
家の者床に入りしも
少女のみ眠りがてにす。

山路ゆき月に浮かれて
若者の歌ふ聲沙ゆ。
かつかつに遠ざかりゆく
彼人の聲絶えづくに。

ほゝゑみて少女眠りぬ
まどかなり今夜の夢も。

堇

春の霞に誘はれて
おぼつかなくも咲きいでし
葎の花よ心あらば
たゞよそながら告げよかし
汝れがやさしき色めで
摘みてかざして歸りにし
少女や今日も来りなば
一君をば戀ふる人あり」と。

高峰の雲よ

高峰の雲よ心あらば
乗せてもてゆき此我れを
大海原のたゞ中の
人無き島に送れかし
斯くて此身は浮世より
消え失すとも此われは
天地ひろき間にて

人とし生きむ。しばしたに。

限なき空

限りなき空あふぎつゝ
とこしへの望かたらひし
君がまなざし忘れねば
物の思に堪へかねて
獨りながむる久方の
天のはるく戀しけれ
間近に君はいませども。

驚異

ゆめと見るくはかなくも
なほ驚かぬ此ころ
吹けや北風此ゆめを
うてやいかづち此ころ
をのゝき立ちてあめつちの
くすしき様をそのまゝに
驚きさめて見ん時よ
其時あれともがくなり。

夏の夜

夏の夜はれて星みつ空
 さびしき野邊をひとりたどる
 仰げば高しいよゝ高し
 嗚呼わが心天をゆびざす。

春來り冬ゆく

のぼる朝日を迎へては
 春よ春よと叫ぶをば
 梢の鳥も同じこゝろに聞とりて
 ねをふりたてゝ囀りぬ
 囀る聲をきゝてはわれも
 春よ春よとまたよびぬ。

沈む夕日を見送りて

冬よ冬よと叫ぶ時

遠寺の鐘のおとも哀れに鳴りひびき

冬の心を弔ひぬ

きえゆく鐘をきゝてはわれも

冬よ冬よとまたよびぬ。

戀のきはみ

戀しき君よみそなはせ
 若むす古き此墓を
 われらが若き戀の身も
 樂しき今の此戀も
 はかなく消ゆる其時の
 時の羽風ぞ身にはしむ
 あはれ戀しき此こゝろ
 戀のきはみの涙かな。

戀しき君よ此涙

星にもにたる君が目に

露より清く浮ぶ時

限りなき空仰きつゝ

われは見るとことには

君ともろとも住む國を

あはれうれしき此こゝろ

戀のきはみの望なれ。

森に入る

遠山雪をわれのぞみ

若き血しほぞわきにける
 自由にながれわれはしも
 深き森にぞ入りにける。

あはれ乙女のコまねきて
 戀しき君よと呼びければ
 わかき心のうきたちて
 何時しか森をわれ出でぬ。

森をば慕ふわれなれば
 都のちまたに生ひたちし
 乙女のコゝろあきたらで
 戀を黄金に見かへしぬ。

あはれはかなきわが戀よ
 若きこゝろもくだかれて
 わかき血しほも氷りはて
 をぐらき森にわけ入りぬ。

山林に自由存す

山林に自由存す
 われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ
 嗚呼山林に自由存す

いかなればわれ山林を見すてし。

あくがれて虚榮の途にのぼりしより
十年の月日塵のうちに過ぎぬ
ふりさけ見れば自由の里は
すでに雲山千里の外にある心地す。

皆を決して天外をのぞめば
をちかたの高峰の雪の朝日影
嗚呼山林に自由存す
われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ。

なつかしきわが故郷は何處ぞや
彼處にわれは山林の兒なりき
顧みれば千里江山
自由の郷は雲底に没せんとす。

沖の小島

沖の小島に雲雀があがる
雲雀すむなら畑がある
畑があるなら人がすむ
人がすむなら戀がある。

故郷の翁に與ふ

翁よ今もすこやかに
丘の麓にくらすらん
丘の小松の夕日影
今も昔のまゝにして
戀しき翁今もなほ
松葉かきつゝうたふらん
うたふ其聲今もなほ
さびしき谷にひびきつゝ
谷の小川の水せきて
夏の日ながく暮せしも
今は昔となりけり
われは昔のわれならで。

あはれ翁よ此われを
今も昔のわらべぞと
昔のまゝにおぼすらん
翁は昔のまゝにして。

風の音

ふと小夜更けてめさむれば

のきばをさわぐ風のおと
春や來りし冬ゆきし。

枯野の小屋の夢あはく
遠ざかりゆく風のおと
冬やのがれし春やきし。

山の聲

峰より峰に風わたり

遠ざかり行く其聲を

聞きすます間に水のおと

溪より溪にひびくなり

風聲遠く水近し。

水のおとにもあらぬ聲

風の聲にもあらざるは

月にうかれて山がつの

妹がりゆきつ歸るさの

山路こえつゝうたふなり。

あはれ其聲たえくくに

風にまじりつ水おとに

絶えつきこえつ遠ざかり

末は嵐となりにけり
風聲遠く月さむし。

わがこゝろ

風をあらみ
浮世の波にさそはれて
うは濁りせるわがこゝろ
暫時は月よ居ずまひて
清きすがたを宿せかし。

水際のすみれ

曉やみの霧はれて
谷の清水の底清し
水際にさけるつぼすみれ
影をさやかにうつしけり
しばし汲む手もたゆたひつ
ゑみし少女や人なりし。

夏來りぬ

丘の白露ふみわけて
のぼる朝日をむかへなん

青葉かざして日の光
めくらむまでに仰ぎなん。

あだなる夢はさめはてぬ
わかき心は躍るなり
のぞみは高し天津空
思はひくしあゝわが神。

そのうた

夕ぐれ時をかなしとて
泣きつるわれをわきもこが
泣きて歌ひて慰めし
歌のかずく忘れねば
一人うたひて一人ゆく
其歌かなしいかにせん

雲 影

さぐなみ立たぬ湖は
雲の影こそ映るなれ
ものを思はぬわが心
天津御空ぞ映るなる

たき火

一
逗子の砂山草かれて
夕日さびしく残るなり
沖の片帆の影ながく
小坪の浦はほどちかし。

箱根足柄、雪はれて
こがねの雲をいたゞきぬ
ゆふばえ映る汐ひがた
飛びかふ千鳥こゑさむし。

落葉たゞよふさとがはの
葦間にのこるうすこほり
ふみて碎きて飛び立ちぬ
羽音したかし、しぎ一羽。

小船こぐ手もたゆみたり
富士の高嶺を見かへりて
今日も暮れぬとふな人の
歌はきくべしたび人も。

二

濱べにつどふわらべあり
みるま忽ちおのがじよ
水際あさりてゆきせり
拾ひし木々を積みあげぬ。

潮風さむし身に染めば
わらべは小枝をりそへて
たき火いそぎぬあやにくに
ひろひし木々はうるほへり。

かたみに吹けど煙たち
たばしる涙ふきあへず
かたみに笑ふ隙くれて
かはたれ時となりにけり。

ゆふぞら晴れて星一つ
影をさやかに映すなり
干潟の千鳥みえわかず
相模の灘は暮れにけり。

三

節あり、あはれ歌のごと

童は水際に立ちならび
「伊豆の山人ふきおくれ
野火をいざなふ風あらば。」

鬼火か、あらず、いさり火か
伊豆の山こそやけそめぬ
冬のため人ゆきくれて
のぞみて泣くはこの火なり。

わらべは指してうれしげに
もろ聲あはせうたひけり
「伊豆のやま吹きおくれ
野火をいざなふ風あらば。」

かはたれ時の濱遠く
罪なき聲はたゞよひぬ
濱の女神はこたへせり
みちくる汐はさゝやぎて。

四

童のかへり遅しとて
母なる一人よび立てぬ
「夕暮さむしいつまでか
淋しき濱にあそぶぞ一と。」

稚き童げにもとて

砂山さしてかけゆきぬ
ついで友どちそのまゝに
たき火を捨てはしりたり。

かしらの童ふりかへり
濱のこなたを見おろしぬ
風は炎をいざなひて
今しも荒く燃えたちぬ。

うれしとのみは思へども
童はそこに居ならびて
わが火もえぬと叫びつゝ
家路をさして馳せさりぬ。

五

海暮れ野くれ山くれて
冬のさびしき夜となりぬ
逗子の濱べは人げなく
あるじなき火の影あかし。

と見る、人あり近寄りぬ
足おと重したび人の

たき火慕ふは袖ひぢて
かわかす間もなかりしか。

火影にうつる顔くろく
額にきざむ皺ふかく

六十路にあまる髭枯れて
衣のすそはやぶれたり。

ふるさと遠くたびねして

ゆくへも知らずさすらふか

ゆめは枯野にさめやすく
草をまくらの老いの身か。

六

あはれ此火よたがわざぞ

かたじけなしとかざす手は

炎まぢかくふるひたり

まなざしにぶく見まはしぬ。

身うちの水とけそめて

心ゆたかになりけり

燃ゆる炎のかなたには

昔のわが身うかびたり。

渚ゆたかに満ち來なる

汐はまさごとしたしみて

さゝやく音はおのづから

おきながなみだ誘ひけり。

仰ぐ大ぞら星さえて

霜をつゝめる天の河

伊豆の卯をゆびさしぬ

天のはるしく人こひし。

七

ひぢし衣もかわきたり

残りすくなに燃えつきぬ

たき火の炎かすかなり

おきな今はと、杖とりぬ。

小坪のかたは道くらし

ゆき去りかねしたび人は

あとふりかへりたゝずみつ

たき火のぬしをことぶきぬ。

有明ちかく月さえて

逗子のうらら夢ふかし

伊豆の孫山火は消えて

いさり火のみぞのこるなる。

のわらべがたきし火は

さすらふ人の足跡は

とこしへの波おともなく

夜半のみちしほかき消しぬ。

鎌倉妙本寺懷古

夕日いざよふ妙本寺

法威のあとを弔へば

芙蓉の花の影さびて

我世の末をなげくかな。

法よおきてよ人の子よ

時の力をいかにせん

永劫の神またゝきて

金宇玉殿いたづらに

懷古の客を誘ふかな。

梢の鳩のうたふらく

ありし昔も今も尙ほ

夕日いざよふ妙本寺

芙蓉の花は美なるかな。

小品、隨筆篇

無窮

御手紙面白く拜讀せり、例に由りて鹿角菜の行列を見るにつけ、依然たる君が頑迷不靈のほど想ひやられて情なく候。先日拙書中にて神の存在を説明する爲めテニソンの一節を引用したるに、其手紙をわざと松村へ持ち運び、宇宙現實の問題を論ずるに一詩人の空想を基礎とする大膽に感服せりと大口開いて笑ひ玉ひし由、君の書中には此事隠しあれど既に松村よりの報告書到来し、始終の様子現はれたる以上は、ダム／＼の一粒を覺悟し玉へ、十九世紀の科學といふ奴を盾にする野蠻人にも矢張ダム／＼が相當と思はる。

日々氣象臺にて風伯雨師の行方のみ氣にし玉ふこと御役目とは申す條、近頃御苦勞の儀に御座候。然るに先日來いたづらなる鳥あり、君が雨量を測り玉ふ水盤にて恣に行水をつかひ其事すでに數度に及びしとか、其都度君は

「又た行水されちやつたア」と鳥が飛び行く吹上御苑の杜を望んで口惜しさうに叫び玉ひしといふ、此事も君の手紙には隠蔽しあれど同く松村の報告にて承知せり、鳥の飛び去り際、心地よげに翼を振ひて何と鳴きしやら其處までは判然せず。

我家の小作に宇之助といふ髯面の男あり、乍失禮どことなく君に似たるやう思はるれど、但し宇之助の祖父は權兵衛と申せしや否やは余未だ確むる能はず。

「此 Idea は數の infinity といふことより來るものである、故に無窮無限といふことを説明するには勢數の連續を説くを要す、君等如き數理の思想なきものはとても駄目だ、併し試みに次の式を見玉へ、解るまい。」

確に解りません、最早議論も斯うなつてはおしまひに候。實に何事も算數に限る！ 余も歸京の節は遠州灘邊にて舷に腰かけ、數で△△式に出來上り居る大空の星を數へ、眞仰様に波の上に落ち「又た落つちやつたあ」とでも叫ば

む哉。

さて中央氣象臺に於ける君が近頃の目課、詳しく承るを得たれば、余の昨今の目課をも申上げん、第一、晝寝、たゞ夫れ晝寝のみ、毎日ごろ／＼して居るだらうとの御推察は當れり。由りて余は晝寝のことを御知らせするが最も妙なりと信ず。

余もまさか朝からは寝ねず。左なきだに靜かなる山家晝飯を了ればこそりともせず、余は風通しよき奥の六疊を占領し、枕もとに紀行、航海、探檢類の雜書を積みて手當り次第に讀む、寧ろ眺める、心頭には一の煩慮なく心外には些の喧擾なし、たゞ直ぐ頭の上なる松林をわたる風の音の幽遠なる恰も絶海孤島の汀に轉がる浪の音を聞くが如きのみ。何時しか飄々たる我魂も亦た微茫煙浪の裡に消え行く。或時は一頭の駱駝に乗じて極目際なき曠原を横ざり、無窮の路を辿りて古き昔の眼りの國に運び去らる。然るに昨日は讀みし書籍に空想を煽られ過ぎて眼さへ遂に寝はぐれしかば獨り庭に下りて葡萄棚の下なる庭石に腰うちかけ、青葉の光を仰いで茫然たる折しも、決して晝寝せし事なき弟の文二、眞直なる櫻の杖と小刀とを手にして裏門より入り來り「兄さん之れがステッキに

なりませうか。』成るとも。』余の葡萄棚を仰げるを見て、『葡萄なら隣屋敷のが能く熟して居ます、摘みに行きませうか。』『行かう。』

裏門を出て笹敷の間を通ずる小路を行けば間もなく隣家敷なり。茲は三方丘に圍まれし小き谷にて以前は井上といふ一家代々の住所なりしを十餘年前此一家こぞりて北海道に移住せしため、遂に我々の有となりつ、今はたゞ家敷跡のみ残り。曾て瓜や茄子の花咲きし此の小きき谷も、我家の人手足らぬまゝ打捨てれば、何時しか野原同様となりはて、夏草生ひ茂り、小松すら之れに雜はりてなかく風に風情あり。流石に葡萄の古木はもとの儘に井戸の傍りのこり、半ば地に委し半ば其の蔓を昔なじみの老梅に託して紫の房ふさふさとして垂れたり。二人は互に二房三房能熟したるを摘み、弟は程よき小蔭に陣取り葡萄を喰ひつゝステッキの細工を始めしが、狗頭を刻るとて器用に小刀を使ひ頻りに苦心する様、よき書題なり。余は弟より二十歩許りを離れ、雑木の蔭涼しき草の上り身を横へて、甘き葡萄を口にしつゝ静かに四邊を眺め、折り／＼弟の方を見やり、又遠く天外を望みて崩んとする雲の峰を見入れたり。白雲一片悠々として漂ふ時、薄き影は森を越

え丘を越えて來り、我小き谷も暫くは光を失ひしが、雲の融け去ると共に影も亦た消えうせつ、人を酔はしむるやうなる夏草の香は鼻を打てり。草や木や花や葉や野や丘や凡て盛夏日中の光に酔ひ、眠り、融け、而して満足せり。天の灑氣は地に下り地の精氣は天を衝けり。恍惚として之に對する余も亦た溶けんとす。嗚呼此時！昨日なく今日なく又た明日なし、只だ此時則ち無窮なるを感じぬ。更に小蟬の吟聲の絶ゆるが如く絶えざるが如くして單調なるを聞けば、人をして目没を想像せしむる能はず。長き長き此夏の日の此儘にてをやみなく續くかと覺えし。

ふと弟の方を見れば、彼は綠蔭の涼しき影を全身にあびて、肩のあたりは青葉をもれし日影の斑點動搖せり。彼は一心を込めてステッキの細工をなしつゝ一向に他を顧みざるなり。十二歳の少年！一日なほ五年十年の永きを覺ゆるは當に此時なるべし。かゝる時谷の西を圍める丘の小路を『童もいつかは翁なり』と節面白く歌ひつゝ、姫小松の間を行く少年あり。弟は此の聲を聞くと等しくきつと彼方を見やり、『翁も昔は童なり』と高らかに歌ひし様は、我此處にありとの相圖かと思はる。『太田。』弟は

叫びて彼の少年を招きぬ。少年は頭をふりて弟を招き、太きステッキを差し上げたり。彼等少年の仲間にステッキの流行ありと見ゆ。弟は余に頓着なく丘の方へと走り行きけり。見よ、彼等は暫く互のステッキを誇示する様なりしが、忽ち相並んで身に不相應なる棒を打ち振りつゝ先の歌を聲合せてうたひ、小松の間を彼方へと行くなり。彼等は小学校長が彼等のために作りしといふ勸學の歌なりとか。弟の之れを歌ひつゝ有ゆる惡戯に目を暮す余は見たり。童が翁になる、之れ彼には全く無意味なり、否な全く無感覺なり、見よ彼等はたゞ之れを面白く歌ひ其のリズムに自己の樂しき魂を浮べて終日野山を駆け回るなり。余は彼等の姿を目送して『無窮の生命』其の物を見るが如くに感じぬ。

これはしたり、折角の書寢の報告が又もや無窮の題目となり了りぬ。しかし君御互は實際の處、最早御しまひに候。たとひ君は數の連續と△△式にて宇宙の廣さと生命とを測量するとも、余は詩の想にて力むとも、互に無窮々々とやかましく唱ふるに至りては最早有窮の窮、窮の又窮たるに過ぎざるなり。

(明治四十一年八月)

彼

一

二人は相ならびて歩みぬ。しばらくは言葉なかりき。彼は心に激するところありけん肩に荷ひし杖をはづして強く地をうちたり。しかも打ちし彼はこれを知らざりき。傍に歩みし男は杖の音をきゝて街にうなづきぬ。心に思ひ當る節やありし。

二

口にくはへし葉巻を右の手にうつして、何ごころなく窓より頭さしだしぬ。月雲間より出で、大空瑠璃の如くに晴れて、澄みわたる光清く、其尊さに、彼は煙ふかして眺むることの漬すわざなるが如くに感じ、直に煙草を窓よりなげすてたり。

三

人生、到る處青山ありとは、彼が心に限りなきの自由と同情とを感ぜしむる詩想なりき。かれはこれを空想たるにとゞめずして、實行の上に示しぬ。彼が生涯は漂泊的のものなりし。

日本國上、南は九州より、北は北海道に至るまで、到る處に彼の足跡あり。

四

精神的の情死を遂げたる男とは實に彼の事なり。彼が學校に在るや、能く論斷し、能く斷行し、甚だ敢爲の若者なりき。されど彼女と婚するや、其夢想は實際となり、其理想は死亡したり。彼の一生は妻と共に笑ひ、泣き、語り、食ふことにて了りぬ。友の一人は曰く、彼は幸福のものなりと。然り、彼は幸福ものゝみ。

五

田園の中央に一茅屋あり。防風林其地をかこみ、一流の清き小川の藪の右よりうねり出で、家の前を過ぎ、これに三枚の厚き板より成る橋をかけたたり。冬は雪この家を閉し窓よりは燈の光もる。夏は牧牛十數頭、此家の近傍に徘徊す。これ彼が夢想の中の樂園にぞある。此夢想を趁うて彼は北に走りぬ。

六

左より光かすかなる燈、彼を照らし、右より清光流水の如き月、彼を照らしぬ。彼の眼は書

の上であり、其半面はヤ、紅く、其半面は蒼白なり。傍より此様を見る時は、書工は尊き美術品を得たりと言はん。されど彼が心には今しも恐ろしき職ありて、彼の唇のかすかに動きつゝあるを誰か知り得ん。彼は人なり、美術品に非ず。夜の更けゆくまゝに月は西に傾きて森のあなたにかくれ、蒼白く見えし彼の半面は暗くなれり。燈の油も盡きなんとす。彼は影の如く坐せり。されど一枚より一枚と、其書は讀まれ讀まれて次第にのこり少になりぬ。彼の眼の光はいよゝ鋭し。其心には戰絶えざる也。

七

此村は一日にて其貧しさと寂さとを誰も知り得ん。僅かに十六七戸に足り足らぬ家數を一村に組み、人口九十と言へど老少三分の一を占め、のこりの數の半は婦人なり。家々の立つ處は山のかげならずは川岸なり。川には水少なく石多し。山は瘦せたり。然るに此村にも一軒の校舎あり。朝な夕なに集る小兒の數は十六名なり。

八

彼には人の生涯と云ものゝ、いよゝ不思議

にのみなりまさり行きぬ。おのが身の過ぎこし方を思ひ、この天地の間に於ける命運の怪しき力を感ずること、今年の夏の夕暮は去年の冬の夜半にもましたり。見る人、聞く人の上、怪しからぬはなし。友は逝きぬ、月はめぐりぬ、今日も昨日も時をやりなく翔るなり。其羽音の耳邊を掠めゆく様ものすごさよ。あゝ人の一生、これ何者ぞや。朝な夕な起きいで暮しつ。夜な夕な夢に入りてまどろむ。彼もしかり。われも然り。あゝ人の生涯てふものほど不思議なるはあらず。おそろしき事實なるかな。

九

此處にて彼女等と別れつ。

「戀愛の夢を後にのこし、「自由」の夢を前に描きつゝ、悲哀と希望との感に充されて行くわが彼時の心をつつまでか忘れんや。とある岸の上に乗とまりし時、眼下に開けしは縹渺たる那須野ヶ原なり。雲霧くらく垂れて其天際を閉しぬ。まなじりを上げてこれを見わたせし時のわが心をいつまでか忘れんや。

戀しき少女を後にのこし、自由の地を前に夢みつゝ、われは悲み、誇り、眼を見張りて大空を見たり。蒸すが如き雲の間よりも、秋の

初めの澄みに澄みし蒼天の尊さよ。あゝ彼處に自由の少女われを招くと詩めきたる句を小聲に獨語せし時、一滴の涙落ちたり。これ少壯の者ならでは知らざる涙なり。

十

『われは奈良へ行くべきか、湖水をめぐるべきか、北の方、山深くわけ入るべきか。また南に下りて須磨明石、水鳥などをえらばんか。皆わがこゝろのまゝなり。いづれかわれを抱く自由の母の懷ならざるべき。』かく語りてかれが心に若き人の血をどりぬ。

十一

彼がこゝろには過ぎし日の彼處、此處、睹るが如くに浮びいでぬ。
歌志内、空知太、其治岸、札幌、鹽原、柳井、麻郷、佐伯、船木、岩國、逗子、萩。
数千枚を盡しても書きつくし難きほどの詩料これらのうちにみちあふれ居るなり。

十二

かまどくよりたちのぼる煙は何れも此美しき秋の大空に消えてあとなしといへど石狩の

野に住む人の品ほど變れるは稀なり。自由を夢みて手づから鋤とる事をいなまぬ若き人はでなる都の交際に加はり兼ねて世をこゝにのがれし衰れの族、狭き本道にすら身をたて兼ね、黄金の山を夢みて走込みしならずもの。

十三

わが家の後の丘に一本の松あり。枯野のなかに淋しく立ちて其影長く夕日に倒れしを見る時、わが心ひとしほの哀を覺ゆる。

わが友としては此松のみと歌ひし事もありき。風の音、梢に、遠き國の笛吹くをきゝては、其根に坐して物思ふわが眼、何時しか天外の雲に及ぶ。雲の彼方には少女住めり。

此少女より來りし玉章を讀むにふさはしきは此松の傍のみ。讀み了りて泣くも笑ふも此松のみぞ知る。われ屢々思ひき。今より幾年の後、此松の根に小き墓一つ立ち、其石に白き苔つきて半は土に埋れんとするを。百年の後、年若き詩人見當りて、松に向ひ、此墓に眠れるは如何なる人なりしぞと問はゞ、松如何に答へて語るべきぞと。心ある松は言ふならぬ、御身の如き年わかき詩人にておはしき、三十に足らで死し、讀みし歌の數々、紙に誌されしを悉く

くわが根にて焼き、其灰は木枯に吹かれて散々を詩人見やりて「永久の悲」て歌聲高く歌ひしが、二日計りにて身まかり、かしづきの翁其かばねをわが根に埋めて去りぬと。嗚呼わが空想のあやしきよ。

吾が土曜日の夜

—廿七年四月十六日夜十時—

(上)

土曜日の夕暮は来りぬ。連日蕭々と降續ける春雨、此日猶舞れやらす、山々に漲る水蒸氣の彼方より、濕めやかに黄昏来りぬ。

小説、うきよの波」を読み了りて、暫時頭をかへ、眼を閉ぢて哀想に耽り居たる余は、室内の暗くなりしにも氣付かざりしが、弟なる人入り来りて燈つけて参らせむと言へりしに驚き、振り返り見れば、幽暗寂寥の氣何時の間にか吾が書齋に充ち居たりけり。

『さて今日も亦暮れしよ、吾、自ら點けむ。』
『左様！』と答へて弟は直に出で行きぬ。

されど余は猶燈點けむとせせず、硝子越に外面の暮れ行く空に眼を放ちぬ。外面は流石に猶いと明るかりき。

『あゝ今日も暮れぬるか。』余は再び呟きぬ。斯くて「うきよの波」中の一句を何心無く口のうちに繰返したる時、吾が心悲しき思に充たされぬ。見るや彼方の峯の上を、濃き雲の一團闇と雨とを包みて飄々と掠め行く様物凄し。又淋しくも哀れにも見ゆ。

『いかなれば此句は吾に斯く迄の哀を催す事ぞ、——おん僧、酒は年経たる匈牙利酒なり、嗚呼唯此句——さても氣の毒なるはエ、リヒなる哉、恐しきは、うきよの波、にぞある。』

立つて障子を開き、欄干に凭りて一向に暮れ行く寂しき風物に眺め入りぬ。戸數四五百に足り足らぬ小市街を見下して、遙か太平洋に續く日向灘を背負ひて聳ゆる元越山に向ひたるは吾が書齋なり。

絲の如く降りそぐ雨に、薄青き煙を罩めて、重く市街の上を掩ふものは何ぞ。

『夕暮の影か、寂寞そのものか、哀思そのものか、そも亦平和と安眠と情話と戀歌とを和ぐる春の雨の魂か』など思ひ續く。

『サテも浮世の波の恐ろしきよ。』余が思は再びエ、リヒの身の上の如何にも哀れる物語のうちに入りぬ。筋太き手を折々獵刀の櫛に掛くる癖ある三十三歳の若者、朝餘り早く出さぬ

やうに悴ふる妻迎へむとはせずや」とセバスト和尙に言はれて顔赤めたる彼、其黒き瞳の稲妻のやうなる光、若しくは屋根の上を度る淋しき風の音を聞きながら、離れたる浮世の夢の幻を描きつゝある彼、宛ら生けるが如く吾が俤に立ちけり。

(中)

『さて哀れのものよ。』余は呟きぬ、一滴の涙を呑みぬ。

時に「清正公様」の信徒たちが打つ太鼓の音、雨に濕りて重く響き来り、名を知らぬ小禽門前の柳の絶頂に止りて、雨と夕とを嬉しげに聲を立て、囀り、二羽の、之も我が知らぬ鳥、緋るゝ様に並び、上に下に飛びて山の蔭に隠れ去り、暫時して柳なる鳥も何れにか去り、太鼓の音のみぞ愈よ重げに響きける。市街寂として人無きが如し。水田に鳴く蛙遺く又近し。

忽ち憶ひ起せるは舊き友の身の、なり。忽ち憶ひ起せるは阿蘇山の美しき煙なり。忽ち憶ひ起せるは小兒の時の嬉しかりし事悲しかりし事なり。或は果てしなき時代の末々、或は限り知れたる吾身、命の行末。彼れより此れ、此れより彼れ、吾が思ひは靜に、而かも後先な

き環の如く廻り／＼て、夕暮の寂しき中に又言はれぬ樂しき心地を織り出し初めぬ。

計らず或る旅館の一室に出遇ひ、不思議にも十年心交の間の如く語り合ひたる人の、一夜を限りに西と東とに別れてその儘、互に音沙汰無くなりし事など憶ひ起したる時は、一向ら人間の逢別遇離の怪しき縁と、儚なき運命など思ひ續けぬ。

「大野太一、大野太一、嗚呼此人今如何になりしか、此人今何處にあるか。」

十一年の昔に別れて、其後は絶えて一度び相逢はざる、十三歳の時の同齡同窓の友の事、突然吾が哀想の環の一端に現はれ來りぬ。

「彼れ將た浮世の波に洗はれしか。」

「大島は彼の故郷なり、此島は布岬出稼の盛なる土地なるを思へば、若しや彼れ群島の一はしに他の同胞と間坐して故郷戀しき歌唱ひ居らずとも言ひ難し。」

「左る事もあらざるべし。」

「然らば愈うき世の波に浮沈して、今はいと淺猿しき有様に藻掻きつゝあるか。」

「何ぞ知らん、嘗て彼の優かりし紅の頬は、今は日に焼けて薄黒く染まり、彼の丸く太りて柔かなりし手は、骨太き逞しき腕と變り、家に

は二十に足らぬ若き妻に夕餉の烟を藁屋の頂より吐かせて、それを谷の底より眺めつゝ、新月の光踏みて歸り來る若き農夫と生ひ立ちしやも。」

(下)

「嗚呼大野太一！」余は突然靜に呼びけり。更に思ひ續けぬ。

「何故吾は彼の時、返書の端書なりとも書せざりしか——何故又此友のみ、多くの小兒時代の舊友の中にも特別に思ひ出す事の屢次なるか。思ひ起す毎に愛慕の情と懷舊の情とに充たさるゝか。」

「それは彼の品性の美しかりしが故とぞ知らる。」

斯くて吾が儼の中に一個の愛らしき少年立ちぬ。顔に溢るゝ無邪氣なる微笑の中には、誠に優しき友愛の情を表すこと、昔ながらの彼の誠の儼なり。さて愈よ明かに此儼を描かむと試みれば、十一年の記憶は既に臙ろに霞みて更に確かなる畫線を與へず。徒に描かむと勉めて益々臙ろの中に消え行くのみなりき。却て吾が想像しける彼は二十三四の屈強の若者と現はれ、新月の光の下に鋏を擔ひて立ちけ

り。されど不思議にも彼の顔には無限の悲を包み居たりき。而して何となくエ、リヒと相似たるやうに思はれたり。

「左なり、左なり、エ、リヒの幼時は太一の如くなりしならむ、太一の如く美しく優しく親切に又賢く。」

「然らば大野太一の今の命運は又エ、リヒの如くなるかも。あゝ浮世の波に洗はれしか。」

此時余は一首の古歌を思ひ出だし、低き聲にて緩やかに口占みぬ。

「せきとむる 柵もなき 涙川

二度三度此歌を繰返して吟じぬ。己の聲の調子の悠々哀々の波に乗せられて、吾心も更に悲しくなりぬ。此時又エ、リヒを思ひ、而して大野太一を懷ひ、而して又此歌を吟じけり。

頭を擧ぐれば、夜陰に全く市街、山野、田園を包みて、雨のみぞ愈降り注ぎ、水田の薄く光り、暗黒の中に又寺院の後ろの白燈籠ろに透かされ、耳を聳て、聽けば、雨の音に交りて老松の並木の馬場の方より遺瀨の如き響幽かに聞え、更に耳を澄ませば、何處よりか小兒の泣く聲聞えつ絶えつす。提灯一つ小路を横切りて忽ち闇の中に隠れぬ。

『嗚呼今日も愈暮れたるか。』

余は内に入り燈を點け、机に向ひて靜に紙を展べ、京なる友に書狀認めたり、更に父母の許に一通認め、又近來打絶え音づれなき友にも一通を書き、和歌など書き添へぬ。

斯くて夜の十時を過ぐる半ば、斯くして吾が土曜日は過ぎぬ。

沙漠の雨

駱駝あり。東の國より歸り來りぬ。沙漠に住める駱駝之れを迎へて、其群團に入れ、東方の奇事を問ふ。歸り來し駱駝答へて曰く、
『東の國は草木繁り、人多く住み、此地の如く淋しからず、且つ不思議なるは雨といふものあり。』

『雨とは如何なるものぞ。』

『雨とは天より落つる水なり。此水の落つるに先つて雲といふもの現はる。』

『雲とは如何なるものぞ。』

『あゝ雲か、雲か、口にて言ひ表はし難きものを雲といふ。』

群團の駱駝、起つあり、伏るあり、一齊に曰ふ。是非其雲なる者、雨なる者を見し、之を

我等の神に祈らんと。

茲に於て彼等は月の出づるを待ちぬ、月は彼等の神として崇め拜するものなり。東の空より月出でぬ。皎々として白沙萬里、さながら光の海に似たり。老いたる駱駝祈りて曰く、
『我等が尊み奉る美しき神よ。願くば雲なるもの、雨なるものを示し玉へ。』

雲悠々と湧き出でぬ、雨蕭々と降り出でぬ。千里萬里、際限なき沙漠に、風なくして蕭々と降りしきる雨の光景の如何に寂寞たるよ。嗚呼如何に淋しくも亦た悲しげなる光景よ。

雨は三晝三夜、降りつゞけぬ。長天濛々、日の光を見ず、月の光を見ず。初めがほどは駱駝の群團も物珍しく眺め居りしが、遂に畏れ惑ひ、聲を擧げて呼び出でぬ。

『神よ、光の神よ、雨なるもの雲なる者を收め玉へ、我等をして永久に光の國に住ましめ玉へ！』(我が文詩の一篇)

落日に對す

二十三日及び今日、日没前に室を出で海濱にいたりて逍遙しけり。日將に箱根の山脈を越えて彼方に入らんとするを見、枯草の上に横臥

してこれを目送せり。

余が願は天地の不用議を痛感せんこと也。故に余は其心を以て此落日に對しぬ。相模灣をへだて、伊豆の連峰、箱根諸山、富士山に至るまで悉く眼前に横はる。

黄金色の雲、此等の山頂にかゝる。水光天色相映ず。眞紅の光線紫嵐を縫ふ。日近かに白浪白砂にころがる。仰げば底深き藍色の大空に淡然として月夢の如し。日は次第に山に

くれ初めぬ。眼を定め靜視する時、日動く如くして動かさず、地動かさる如くして動き、山を載せ海を載せて轉ずるを感ず。吾れ天地の色を見たり。又其の運動を見たり。自然の美と力と

をかすかに感じ得たり。されど吾れ依然として煩惱と幻影との裡にあり。吾れを吐吞する天地不思議の中に在らず。

生とは何ぞ。死とは何ぞ。自然とは何ぞ。吾れとは何ぞ。人生の意義如何。との大疑問は依然として吾が感情の上に何の力もなし。されど自然已に吾れに近し。

鎌倉の裏山

田山花袋君の來遊に先だつて、或日余は原田

東風君と散歩に出で、近郊をめぐつて面白い所を發見し、是非花袋君を此處にとまなひたいなど語り合つたことがあつた。其面白くもいふは、大佛の左から藤澤道を行くこと七八町、又左へ折れる田圃路の田溝にかけし丸木橋を渡りなどして丘へと登り、其丘の頂まで耕されし畑の間を噂つたひして極楽寺の谷に下る此間約一里ばかりの散歩地であるが、ツマラぬ所と言へばそれまで、我等如き田舎に生れて田舎に育ち、今は都會に住まねばならぬ身には却つて斯ういふ所が嬉しいので、里は近いし、煙は立つし、麥畑の盡くる所は林、林の間から海が見える。海には帆かけ船、磯うつ浪の白い線が遙かに光つて居る。どうしても子供の時、縦びを切らして駆け廻つた所と變らない。おまけに三國一の富士は浮び、相模の大山は霞み、伊豆の天城は煙ぶつて居るといふ多少名所が、つた圖もあるのである。

其處で手紙の序に此事を書いてやり、來遊を促すと旅行すきの花袋君早速やつて來たのは土曜日の午後、其日は朝から雨の頼もしからぬ天気であつたのが、お晝時分から晴れそめて花袋君の着いた頃は淡々しい雨雲がふわ〜と沖なる空を漂ひ、夏の初めの穩かな月影や、西に

傾いて鎌倉山の新緑を鮮かに照して居たのは我等に取りて何よりの喜びであつた。

さて翌日になると快晴、所謂あつらへむきの天気、日曜日のことゆゑ、一日の閑遊と出かけた都會の紳士も少なからぬ様子であつた。起きると先づ大佛の邊まで散歩を試み、十一時ごろ、三人連れ立つて例の散歩地へと出向うた。

大佛の門前より大佛坂の切通までは爪先上りの道、道幅二間位荷車の轍の痕深く土を掘りたる左右には柚山の聳えたる、其麓には所謂猫の額ほどの畑の段をなして作られたる、『旅をするに能くこんな道に出遇ふものだ、向の山を一つ廻ると宿に出られるなど考へながら重い足を曳きつて日の暮れ方に歩いたものだ』と言つた東風君の言葉は此道の眞相を穿つて居る。大佛坂の切通しは鎌倉の地質にして初めて作り得るといふべきしろもの、左右の絶壁數十間、其頂から差出た若葉の色の鮮明なる、狭く長く限られた大空の、いや高く仰がれて、其色の初身に似合しからず深碧なる、みな佳し。切通を出ると下り坂、春ならば鶯がほがらかに鳴いて居さうな谷間に出了が、鶯は啼かず、蟬の聲ひときは騒がしく、頬白が遠くで囀つて

居た、此道をだんく下つて往くと瓦を焼いて居る家がある、この家を最初に、引續いてバラバラと田舎家の一村にかゝる、其中程に例の章魚をつるし、精進あげを並べ、こまかぶりが三樽ばかりの居酒屋、兼、村の若衆の合議場がある。

此茶店の前を過ぎて、程もなく左へ折れて田圃路に入り、田の畦のやうな道をゆくこと一二丁ばかりで丘の麓に達した。さて此處で一言せざるを得ないことは、鎌倉のものは野蒜を食はないから野蒜は唯の雜草のやうに田圃に生えて居ることである、兼ねてこれを酒の肴に食ふ筈で味噌まで用意して來たので、田圃路にかゝるや吾々三人で探つた野蒜は都の酒客に見せた程であつた、探つた野蒜を洗ふ一段になつて、更らに一言せざるを得ないことが出来る、鎌倉近在では娘が花嫁になると、盛装して角隠をして親類縁者さては兼て嫁入り先きの家が往來して居る家に參上挨拶に及ばなければならぬ風俗、所が野蒜を洗ふべく百姓家の井戸を借りることに三人の相談が決定つた其時此花嫁が丘の麓を、一人の老婦一人の小娘に伴はれて、三人とも日傘を傾けてしなくと歩いて來た様子はまるで畫のやう、吾々は一興を催して見て

居ると花嫁は野蒜を洗はして貰ふ筈の百姓家に入つて了つた。あたりに家はなし、花嫁の居る時井戸を借して下さいと押入るわけにもゆかず、頗る當惑したが、東風君遂に野性を發揮して先導を爲し、三人づう／＼と押入り兎も角もして野蒜を洗ひ得たが、花嫁は障子の蔭に坐つて居たので見えなかつた。

野蒜は採つたし花嫁は見たし、景氣よく我々は丘をのぼつた、初夏とは云ひながら、面上から直射する日光はぢり／＼と背をやき、汗はだく／＼流れる、若葉の林の蔭に腰を下ろし、懐を開いて風を入れた時の心地。あゝ愈々夏が来た、楽しい夏が来た、思はず叫ばざるを得なかつた。

程なく頂に達する、山の低い割合に眺望が廣闊なので、田山君を驚かした。北の地平線は武蔵野、極日さへぎるものがない、また大山よりかけて武蔵の國境をめぐる連山！箱根足柄の諸山よりかけ伊豆の岬角に連なる山脈！此等の諸山を壓して立つ富士！大磯小磯の濱つゞき、峰づたひに眺めつゞ、路、林に入れば憩ひ、林を出れば大洋！水平線は思ひがけない所に高く一線を劃して居る、小坪葉山の磯は指點すべ、三浦の岬は遠く水平線に没し

て居る。

刈草を背負つた村娘にも出遇つた、夏ならば瓜や茄子の花盛りと唄はれさうな畑で一人の男が土を掘つて居る、鎌倉の歴史は古いが自然は常に新しい、我々は鎌倉のカの字も想ひ出さなかつた。

程よき松林を見立て、鼎坐し、包を開くと中から現はれたものが麵麩にバタ、鎌倉ハム、夏蜜柑、冷酒が一罎、いかに酒を飲まぬ人でも、今吾々が林の奥からそよ／＼と吹く風に吹かれ、草木の高き香にうたれ、富士山と太平洋の水とを我物顔にして飲んだ一杯の冷酒の味を知らしたら堪るまい、野蒜はうまかつた、自然はヨーブソース一巻を懐にした謹嚴な人ばかりに親切ではないらしい。感謝す、野よ山よ人空よ大海よ、どうか我々は林の中にあぐらをかいて、冷酒三杯に舌鼓を打つて、自然の賜を感謝する程の野性を何時までも失ひたくないものだ。

食つてしまへば用はない、歸らうといふのが我々の流儀で頗る殺風景であるが實際だから仕方がない、ほろ酔ひの心地たのしく又降つたひ、眺望絶佳の處へ来て、此處でやれば可かつたと叫んでも手に残るものは風呂敷ばかり。

大くたぶれに疲勞れて家に歸れば、二時、風呂が沸いて居た。

畫

畫を見るに其法ありや、若しあらば予實にこれを知らず、されど予敢て自ら言ふ、畫は予が命なりと。命とは靈を此宇宙に繋ぐ金線を云ふなり。

小兒の好むものは繪なり、予が小兒の時亦然り、殊に然り、何を與へらるゝよりも、繪一枚は予が尤も満足する處なりき。神社に参詣して眞先に予が眼を惹けるは繪馬なりき、馬は殊に予これを好みたり。

予は唯觀ることを好むのみに止まらず、自ら畫かざれば満足せざりき。長じて小學より、中學に進むも、所謂畫學なるものは數學とベースボールと與に予が最好の課目なりき。其うち畫學に至りては、殊に甚しきものありたり。

曾て未だ小學校にあるや、予が友にて予より一級高き村田と呼べる少年、コロンパスを寫したる事あり。非常の上出来にて全校大評判となりぬ。校長はわざ／＼額縁を造らせて、コロンパスは教員室の一隅、大時計と並べて高く

掲げられたり。

毎日其前に人山築かれぬ。予も亦村田に其大名譽を祝したり、村田の眉の動き方、異様なりき。唇固く閉ぢ、一種の顫ひは、口の周圍より頬の肉に波動せり。予は彼の競争者也。而して彼の coronps は全く彼の勝利となりぬ。

coronps は鼻の下に髭あり、頤も頬も鬚髯を以て覆はる、満面毛の中に埋もるに似たり。故に之を畫く、其難きは實にひげなり。而して彼村田の技倆はひげに著はれぬ。校長が激賞して措かざるもひげなり。村田自身が得意も亦ひげにあり。予はたゞ如何にして村田が斯くまでに巧妙にひげを畫がき得しかを怪みて措かざりき。

その頃東京歸りの青年あり、大學豫備門にありしも故ありて歸國し、小學校の近傍に住めり、教員諸氏と來往し、村田も何時か彼と親みぬ。村田が coronps のひげは全く此豫備門先生より傳授したるなり。予は村田に就きて予にも亦、其秘法を傳へんことを求めたるなり。幾度か懇懇に懇望せしも、彼は只だ微笑するのみ、決して予に教へざりき。予は残念の事に思ひ、獨工夫を凝して、書きては破り、書きては裂き、ひげの練習に全力を注ぎしも、終に村田

の coronps 程に至る能はざりき。其後間もなく予は中學に入りぬ。

予が寄宿せる中學は父母の家を隔つる八里餘の都會にあり、夏期休暇に歸省し、冬期休暇に歸省す。八里の道程たゞ山のみ、急坂斜に山腹を辿ることあり、深谷を下瞰して泡立つ溪流、湛へし淵、絲の如く懸る瀑を看て行くことあり、參差たる灌木の林に包まれて路傍に立つ茅屋を顧ることあり、鈴の音を山彦に響かせて煙草スパク、放歌朗々、向の山かげを來る駄賃馬子に出遇ふことあり。颯々たる山谷の風を長へに吸て、百年の龍影を岩石の上に投ぐる老松の下に二三の小兒が嬉戯するを見ることあり。山廓けて平野茫茫たる處、夏日まきに天に

沖して微風そよがず、蒸し暑き草の氣に打たれ喘ぎくつて歩む樵夫を見ることあり。歩むに連れて、山野溪流次第に其趣きを變ずるを眺めて進むことあり。一種のチャームは恒に予を動かし、形、色、光、影は、意味深き謎語の如く予の眼に映じ、予は一心唯だ如何に畫かば此謎語を解き得るかと思ひ、其れのみに思ひ苦しめ、苦みながらも、夢みる如き愉快に耽りて、八里の難路も長きを覺えざりき。嗚呼當年のこと煙の如く消えぬ、瞑目して眼底に描き得る者

は、風呂敷包を負ひ、白のメリヤス股引を着け、草鞋覺束なく踏みたる少年が、みぞれ蕭々と降る寂寞の境を、茫然四顧して辿り行く光景なり。予は此想像畫に對する毎に怪しき暗愁の雲に幽かに泣く。

一昨年春より、昨年春にかけて、予は郷里にあり、珍らしくも一秋を田舎に暮しぬ、予が樂は同じく畫なりき。

予に弟あり、畫に熱中すること、或は予に愈る、予の東都に留るや、彼に畫帖を贈りしことあり。昨年予は彼と廣島市に旅行したり、二人の間に、最多く購はれしものは畫なりき、二人は土産にまで畫を用ぬ。

予は彼と談じて各一枚の畫板を造り、二人遠行して山野を跋涉し、或は近郊を漫歩する毎に必ず之を携へ、感に觸るゝもの、直ちに鉛筆に上しぬ。田舎の秋は最も畫に適す、一日、待ち受けし日曜日には到りぬ。予等兄弟、畫板を負うて家を飛び出で、箕山と呼ぶ近郷第一の高山を攀づ、森、藪、藁屋、耕人、柿、楓、案山子幾枚の下畫、行く／＼筆に上りぬ。

諸山を眉の如く引く。白帆、漁舟、長汀、曲浦、鳥嶼、岩礁、悉く畫ならざるはなきも、予等兄弟只だ斯る標渺、空濶、雄大なる天然の前には、恍として自失するのみ。此日子は馬島、牛島、祝島を畫き、弟は佐伯島長島を畫き、予又上ノ關、室津間の海峽を畫きたり。畫き得たるもの固より見るに堪へず、兄弟相顧み互に嘲り笑ふと雖も、猶ほ筆を投ずる能はざる所以は何ぞや。筆とるものは拙き筆なれども、筆とらしむる者は自然なればなり。否、自然を慙ふる人間の震なればなり。予自身其故を知らずと雖も、小兒の時、少年の時、馬の圖に對する毎に或る魔力に打たる。悲馬風に嘶く圖、長鬣を北風に波打たせて昂然として巖上に立つ馬をみる時は、わが心誇りて躍りぬ。花落ちて江堤、草煙の如き處、三歳の神駿蹄を揚げて去るを見る時は吾が血湧きぬ。曾て父大阪に上り、土産として一本の扇子たまはる、開き見れば野馬數十を畫きあり、或者は馳せ、或は嘶き、或は二足立に跳る、予は小躍りして喜ぶしことありき。

融けて金を流すが如く、大船鏑を投じて寂として灣頭にかゝる、水天相接する處歸帆遅し、かかる圖に向ふ毎に腕白なる予れ、心も空となりぬ。されど今や予が畫に對する感想の、大に變化したるを覺ゆ。哀しき變化は年月と共に來りぬ、紅顏の頬の肉の落つると共に、動もすれば冷かなる涙の、蒼頰をつたふと共に哀しき變化は寒霧の如く、畫に對する感想の上に掩ひ始めぬ。曩には予畫を好みたり。されどそれは自然なりき。馬の圖、人物畫、山水畫、船舶の畫、茅屋の畫、破宮跡の畫、薔薇花の畫、夕影の畫、水車の畫、之に對する予は自然なりき。形、色、光、影の巧みなる配合の前にはわが無邪氣なる心無邪氣に躍りしのみ、予はたゞ花に眠る胡蝶の如く、或る自然の馨ばしき香にうたれて酔て自ら知らず、夢みて自ら知らざりき。されど嗟可憐なる少壯の者よ！予敢て自ら可憐と呼ぶ、渠生れて地に墜つ、年を閱する二十一年、樂き自然の夢全く破れぬ。畫に向つて輝きし渠の眼、今は畫を觀て暗涙を湛ふるに至れり。畫に對して叫びし渠、今は黙して沈思するに至れり、畫を觀て樂しむは一なり、今も畫は渠の生命なり。唯曩には食物の如く然り、

今は病者に於ける靈藥の如くなりぬ、此世界の重苦しき、薄暗き、殘忍極まる、鮮血漂ふ、迷路繁き人生の旅は漸く渠の前に現はれ來り、滿眼の陶の光景事々物々悉く新らしき説明を渠に求め始めぬ、畫も亦新らしき異色を渠の前に呈し、深くして悲しき意味を渠に私語くに至れり、渠の震は傷き渴きぬ、渠此私語を聞く時は、一掬の活泉を得たるが如し。馬の圖、船舶の畫は、只だ夫れ馬の畫、船舶の圖にして止らず、茅屋、耕人、古跡、森林、小兒、長汀曲浦鳥嶼の畫、只だ夫れ茅屋、耕人、古跡、森林、小兒、長汀曲浦鳥嶼の畫にして止らず、孤兒が亡き親の畫像に對する如く、其うちに回顧、記念、想像、默示の深き悲き遠き幽なる音を聞くに至りぬ。予此頃小川町の某畫舖に一枚の畫を見出しぬ。それは椅子の上に二人の小兒、一個は四歲許りの女兒、一個は二歲許りの綠兒、相並んで眠り、母とも覺しき一婦人、椅子の陰に立ちて此なたを正視せる様を畫けるなり。すや／＼と眠る小兒、結ぶ何の夢ぞ。眠りの神、彼等の爲に誰ふ何の催眠歌ぞ。小兒、無心、眠、夢、知らず何の詩ぞ、然れども予は此畫に不満あり、それは小兒の母小兒をみずして吾等を眺むることな

り。予は此母が眠れる小兒を熱視して、其優しき眼の裡には處女も男子も決して想像し能はざる無限の哀思を包まんことを望む者なり。

ミカエルはウオーズウオールの傑作なり、予若し能ふ可くんば自ら之を書かん事を思ひ立ちぬ。彼ミカエル、如何に畫かば、詩中のミカエルと等しく現はるべき。ミカエルの兒、群羊、牧草、溪流、連山重疊蒼穹一點の蒼、如何に點出せば、予にヒュミニターの幽音悲調を傳ふ可き、嗚呼予が手畫筆を捨て、已に幾年、肉硬くして再び畫くに由なけん。已んぬる哉、いさゝか筆を鉛筆に更へて幽懷をやる。

驟雨

一

本所からまだ汽車の出ぬ頃、自分は千葉で一泊し次の日は東金、健脚の人なら半日の行程を午後二時までかゝつて漸くに辿りつき、夏の日盛ではあり草鞋噴の痛み堪へ難く、何も急ぐ旅ではなし泊れと、町端れの旅人宿の砂埃で眞白な上櫃へ腰を下した。

足を洗つて二階へ通されて見ると、昨日からの疲勞が一時に出て、何時眠入つたとも知らぬ

間にがたつく障子の響、眠い眼を微に開けて四邊を見廻はす時しも、店の時計が緩に五時を打つた。それにしても薄暗い、まだ太陽のある筈だがと起上つて欄干に溶けさうな身體を投げかけ外面を覗けば、空は一面の黒雲墨の如く、吹く風の的なく迷うて軒先の柳怪しく鳴り、驟雨襲ふべき光景である。

宿驛は田舎の都、東金も一筋町の中程迄來れば、可成綺麗な商店軒を並べて家並も揃うて居れど、打見たる此場末は苔白き瓦屋茅屋の高低定まらず、間口廣く老舗とも見ゆるが住む人はと問へば、六十の婆と孫の二人きりと云ふかも知れない。水を撒かぬ往來を夏の日の一目駄馬の蹄で蹴立てられては廂から店先き、物として灰を浴びざるはなく、眞向うは菓子屋、東京パンと障子の薄墨からして情なく、左が鍛冶屋右が紙屋で前に草鞋がぶら下げてある。瘦い狗一疋走りゆく後から汚物に群がる蠅が急に飛んで逐駈けゆく。以上見てこれぞと面白いもの、楽しいもの、晴々するもの唯一つでもあるか、驟雨、驟雨、この不快を一度に洗ひ流すものは！

下界を穿つする空氣重く陰にこもつて打つ鳴神の攻太鼓轟きそむれば、先鋒の風伯は往來に散

亂する藥切、紙屑の類を一つに纏めて虚空に捲上げ、忽ちフイと撒き散らしゆく。一粒二粒落ちて來た。暫は向ひの家並さへ見兼ねる程の激しい雨、斜に白く黒く縞を立て、降る勢すごく、煽られて舞込む雨霧冷やかにわが面を掠める心地よき！ それも亦直ぐ止む驟雨と思へばこそ。

旅人に取りては晴れゆく雨の名残を見送るほど胸のすくものはなく、それも亦この小氣味よい驟雨なればこそである。

西に天際から雲切れがすると瞬く間に大空拭ふが如く晴れわたり、傾く日の光の一際鮮やかなるに映じて萬生々として來る。子供は歡呼する。背戸の雞は羽搏をして時をつくる。鈴賣の笛は高く響く。向の鍛冶屋の鐵砧勇ましく火花を散らす。羽蟻までが薬屋の前で輪を作つて舞ふ。

新調の番傘を日傘に、半ば身を隠して顔はよく見えぬ村男の我宿の前に立停つて主人と二語三語大聲に「結構な驟雨」を繰返す、其後からしよんぼりと店先に入つて來た一人の旅客、自分は其様子を見て直ぐ我仲間と覺つた。

果して『お合宿を願ひます』と下婢の挨拶の終らぬうち其處に現れたは渠「書生さん同士お合宿

は却つてお賑かで」と手前勝手な捨臺辭を受けて「何卒よろしく」と氣の毒さうな、どこか世慣れぬこなし。肉瘦せ骨高く年齢は二十四か五か、荷物は風呂敷包一つ、別に肩から古靴をさげて耳には鉛筆を挟さんで居る。

二

其夜は湿かに語つて一時のうつを自分は聞いてたが、其後は知らず、五時ごろ自分は目覺めて頭を上げて見ると渠は夢尙ほ深く、さなきだに色艶悪しき顔の死人かと思はるゝまで着白きをつくづくと見入りて、今更彼が昨夜の告白を思ひ出し、冷かなる涙の我頬を傳ふを禁じ得なかつた。

東金から八日市場まで馬車、それから先は徒歩で二人は馬子とも話し道草も取つて面白く銚子まで歩み、「未だ日は高いが折角だから君も銚子で今夜は泊れ」と自分の勧めるのを彼は打消し、「イヤお別れとしよう、昨日の驟雨といひ、昨夜から今日へかけて偶然にも君に斯様に親しく相知つた事といひ、僕は近年にない愉快であつた。又何時逢ふ事やら最早二度と逢はぬ事やら分らないが悲しと思へば悲しいやうなもの、僕は時間の長短が人の交に關係すると

は信じない」と云ひさして暫時頭を傾しげ物思ふ體であつたが、淋しい笑を眼元に浮べ、「記念と云つては烏滸がましいけれど、此際別に思ひつきもないから、之を君にお渡しする、後で御覽ください、元來他人に見せる筈のものでないが、君にだけは何となく見て貰ひたい心持がするから」と一冊の手帳をわが前に出した。自分は強て止めるのも無益なりと思つて遂に手をつ分つ事として渠は直に常陸に渡り、自分は銚子に返り其の夜かの手帳をくはしく見ると、其折の隨筆で、要之渠が自叙傳には相違なきも一人稱を用ひないで、總て「渠」の三人稱を以て書き、我と我身を批評し賞讃し罵詈し冷笑し説明したものである。只一節一節少しも連續してゐないから何の事やら了解らないこともある。今其解り易いものを一二録すれば、

左より燈光渠を照し右よりは清光流水の如き月渠を照らす、渠の眼は書上に注がる。半面はや、紅く半面は蒼白なり、傍にありて見る時は尊き美術品を畫工は得たりとせん。されど彼は人なり美術品にあらざ、見よ、其唇は戦きつゝあり、夜の更けゆくまゝに月は西に傾きて森のかなたに隠れ蒼白なる渠の半面は暗くなれ

り、燈の油また盡さんとす、渠は影の如く坐せり。その書は一枚より一枚と讀まれ讀まれて残り少なうなりぬ。渠の眼の光はいよく鋭し。其心には戰絶えざるなり。

又た、

渠の行末を思へば心痛の至りに堪へず、渠の特質は渠自身を呪ふが如く見ゆ。渠には野心あり、天才あり、されど足なきの野心翼なきの天才なり、進む能はず飛ぶ能はざるなり。常に其心を嘆ひつゝ、備に其心の生命を繋ぎ居れり。我儘にして高慢なり、而して螻の慢性病に罹り居れり、其生涯は目的なきの生涯なり、目的あるが如くにして實は一種の幻影を逐ふの生涯なり。何事かをなさんと欲しつゝも遂に成就する能はざるの生涯なり。

今も昔のまゝなる渠は其後七年ぶり什麼して自分の住所を知つたか、突然書狀の文字すら彼手帳のまゝに、次の一節を手帳の末に書き添へ呉れよと申越した。

渠は空知川の淨に立てり、冬枯の寂寞たる森林渠を圍み、悠々たる蒼天渠を覆ふ、今や死は渠に取つての驟雨なり、渠は皺腹れ

し聲を振擡つて叫びぬ、驟雨！ 驟雨！
想ふに渠は其反響の曳々として空林遠く消えゆくを耳聳て、聞いたであらう。

死

此世を去りて冥界に下りし人の、「あゝ我曾て今日の死あるを思はざりき」と叫ばむか。其聲のいかばかり悲かるべき。渠は生て屢々死のことを耳にし、死の事を見、これを語りて或は泣き或は笑ひたり。されど未だ曾ておのれ白から眞に死すべきを眞に感ずることなかりき。

戀の日記

一

彼の前には書が開かれてある。併し少しも書物は見てゐない。恐らく彼は自分が机の前に坐して居ることも忘れて居るであらう。顔は言ふに言はれぬ喜びを湛へて、身を壁に寄せかけて何とも言へぬ心持のよきさうな笑を口元と口の邊に浮べて、のどかに、ゆるやかに巻煙草をくゆらして居る。

秋の日脚が西に傾いて窓から夕日がさし込

んで居る。なまぬるい夕日が。外面は折々車の音が高く響く、子供の笑聲が行きすぎる。風はそよとも吹かぬ、夕日を眞ともに受けた庭木の絶頂の小枝が時々頷いて居るばかり。

「あゝうれしかつた、何處らまで歸つたらう。」
彼は思ひつゞけた。

世には戀に悩んで苦しむものもある、死ぬる程の悲しい思をするものもある。そんな悲しい心で見ると、静かな秋の夕陽ほど心細い者はない、遠い、昔の世の儂を面のあたり見る様な心持がするものである。

彼も昨日はさうであつた。庭木の影がだんだん長くなつて石段を一つと登つて来るのを見ては夢心地になつて、身も魂も消え入る様に思つた。

すると、今日は待ち焦れてゐた少女が来て、何を話すともなく二時許を瞬間にうれしさに過して、之からは度々遇ふ事が出来る事に約束して、彼女はいそぐと歸つて行つた。

二人の戀の底は涙である、しかし今はそれを彼も彼女も忘れて了つたのである。

夕日が次第に疊の上をはつて、投げ出した足から胸までを静かに濡めた時、彼は身動きもし無いで身の溶けるのを待て居るらしい。

二

「熱沙漠々のサハラを旅する人も折々は甘き泉涌く涼しき大陰青きオーシスに出遇ひて死ぬばかりなる疲を休むる由あれど人生れ落ちて死の墓に至るまでの旅路には唯一度戀てふ眞清水を掴み得て暫時は永久の天を夢むと雖も、忽ち醒めて又其淋しき行程にいらざるを得ず、斯くて暮の暗き内に達するまで第二のオーシスに出遇ふことなく、たゞ空しく地平線下に沈みうせぬる彼の眞清水を懐ふのみ、果敢なきものならずや。」

斯て渠は深き嘆息をつきぬ。

「戀の眞清水はいつも／＼涌きて流れ岐れし人を俵でども、たゞこれを番する少女のみぞ幾度か／＼變りゆく。少女も一度は年若き旅人を伴ひて此泉に掬めど、いつしか其の手を泉にさし入れてこれを濁し、若者をこゝより追ひやりて、おのれも亦たあへき／＼其跡を逐ひ、苦しき淋しき旅路にのぼる。」

この時渠は遠方の空を眺め入りつ。

「われ曾て沙漠の悲劇と題する畫を見たりしが、一疋の猛き獅子と畏ろしげなる長蛇と、茫茫限りなき沙漠の眞中にて苦闘する様を描ける

ものなり。これぞ此世の悲劇なるかも。
渠は戀を思ひ人の世を思ひ、少女を思ひ、沙漠を想ひ、オーシスを想ひ、想を馳ね來りて深き悲へと沈み入りぬ。

三

「世の中がこんなにも美しいものとは思はなかつた」と近眼鏡の上に更に他の近眼鏡を掛けて渠は嬉れしげに叫んだ。

四

「スモークの一冊が机の上に置いてある。
今月今夜は十一月十一日の夜である。自分と彼女とが二年前の今月今夜は結婚した日である。

一昨夜は今井君と共に赤坂の或る料理屋で快く飲んで楽しく語つた、其夜今井君と別れて後、直に治子の家を訪うた。此日自分は治子の許へ「心の緒琴二冊を送つた處、直ぐ送り返して來た、祖母の名を以て、自分はどんなに苦しく、腹だしく悲しく思つたらう、醉にまかして不平をもらした。治子は泣いた。

昨夜治子から手紙が來た。あゝ憐れの少女よ、彼女はわが小説を讀んで其身を千葉富子に

ひきくらべた。悲しい哀れな美しい手紙であつた。

自分は昨夜夜更けて、一昨夜治子の宅より歸つて後、午前二時半ごろまで起きて居て作つた新體詩を書きあらためて、手紙を書き添へて、其れを今日午後一時頃治子の宅へ持て行つて水沫集の中にに入れて密かに渡した。

治子は自分を見て絶えず涙ぐんで居た。

これが一昨日來の事柄のあらましである。若し詳しく書いたらなかく一章ではすむまい。實に色々の事が雜つて居る。

今井君が自分のために「スモーク」の第八章を語てイリナがリトイノフに送つた書狀を讀んだ時自分は涙が込みあげてきた。其の夜の酒がどんなに此の悲しい心に沁んだらう。其の夜の明月がどんなに此の悲しい心に映つたらう。

何事も神の御心にまかし奉る。自分は男らしく歩みたい。あゝ實に男らしく。

自分の前途は未だ甚だ望が多い。文學者としても政治家としても自分は未だ實に此腕を十分にためした事がないのである。

日本の今日の詩界も政治界も少壯有爲の人物をまちにまつて居る。自分は此の生涯を仇に

過ごしてはならない。

戀は實に悲しい。然し悲んで壞りたくない。此悲に堪へてこそ此の情は益々高く高く清くなる。

今日の曇天が、どんなに自分には悲しかったらう。

自分はどうしても日曜は教會に行かなければ此命がもてない。自分は神なくては生き難い事をつくつく感ずる。

戀の悲が破れたる時に友愛の光がどんなに強い力を以て、自分の胸に沁んだらう。信子の時も實にさうであつた。

あゝ戀よ。何時までも自分を苦しめ弄するぞ。

自分の作つた「おとづれ」が國民の友に出た。

これが第二の小説である。世間は冷やかに迎ても宜しい。治子は書き送つた「此の「おとづれ」を讀み玉ひし人多き中に初めの一字より終りの一字まで「涙と共にくり返し」讀みたるは私一人ならん」と。自分は満足である。悲しい満足を感じずる。實は北海道の少女にも讀ました。

たとひ治子が自分を此後、永久に忘れてしまつても、彼女はとて一度深く刻まれた深い戀

の悲みの中にひそむ樂を忘れるわけにはゆかぬ。よろしい。利害得失のために、動き易いのは女の性である。傍人が勝手に製造し想像する利害論は勝を占めてもかまはない、人情は最後の勝利者である。

遠からず治子から何か手紙をよこすであらう。若しよこさなかつたら、それはイリナの手紙と同じ心であるに極つたのだ。自分はリトイノフ程には泣くまい、靜かに天の命を受ける許りである。却つて治子の心は絶え間なき苦惱に破れるであらう。

自分は今、「スモーク」の八章及び九章を讀み了つた。八章に於てリトイノフはイリナと別れ深き絶望に陥り、幾年の日月を経て九章に於て再會した。

自分の前に小さな十字架が置いてある、紫水晶で作つて有つて金具は金らしい。これは昨日治子が送つてくれたのである。治子の手紙にこれを私の心と思つてくれろと書いてある。

治子は今日、自分の去つた後、祖母と共に叔父の處へ行つたとの事、今井氏が路であつたさうだ。自分は言ふに言はれぬ不安を感じて居る。丁度、イリナが舞踏會に望んだ後のリトイノフと同様な感がする。自分はしかし、リト

イノフのタテイアナを持つて居ない。自分を愛した、少女は二人まで其の愛を破つてしまつた。治子は再び自分の愛に身を投じてきたが、何となく不安に思つて居る。

自分には殆んど今、光を見ない花の様な極めて淋しい感がする、自分は決して幸福者ではない。

自分と治子との關係は如何したらよからう。決して戀の祕密は永く保たれるものではない。打ち明けて凡てを命に決し様か。あくまで祕密にして命のくるを待たうか。如何なる命がきても之を甘受し様か。自分には決し兼ねる。

夜は大分更けた。汽笛の響が遠くで聞える。彼は(こゝには彼と書く)今更の様に都會の生活に氣付いた。實に妙な所だ。何のために自分は此處に生活するのであらう。何のためにこゝで今の様な生活をするのだらう。東京がなぜ自分にはいゝのだらうと渠は思ひつゞけた。

彼は叫んだ、「戀よ戀よ！ 戀ほど時間を浪費するものあらんや。戀の最中に居ては何事をなすにもものぐさく、心は何時までもろみ、戀の破れし後は何事をなさんとの氣力すら碎けて

心は痛み苦む。戀よ戀よ。願くは少女を選択して其の光をそゝげと。

五

「戀とは何ぞや。」かゝる問を自から發し、戀といふ事實に深き思を凝らしつゝ、戀するものあり。渠の如きはその一人なり。

六

「戀の邪魔をせらるゝほど苦しい者はない、それも判然と異存でも言はれてゆく末の夢を破壊されるのなら、手術が亂暴なだけに或は痛苦が一時である。亦たその異議に向つて十二分の抵抗力も奮ひ起されて、此方の意地も我儘も元氣を出す、従つて張合があつて面白い事もあるが、それと違つて何とはなしに二人の中をせかれたり、それとなく惱まざるゝのは、二人に取つて之れほど苦しいものはない。いつも此の惨酷な仕うちを女の母がつとめるものである。戀はいつも母親が破るにきまつて居て、いつも又、その仕うちが女丈けに蛇の生殺と同じことである。自分の身の上からまづ一例を引いて見ようか」と或る四十男が圓居の若い者を相手に話した。

若い者には何よりの御座る。皆んな此の哲學者の戀の身の上ばなしを珍らしさうに聞き込んだ。哲學者先生は頗るまじめに語り出した。

「そこで又、不思議な事は二人の仲だちをするものは何時でも大抵は母親にきまつて居るのさ。母が種を蒔て、芽をふかせて、それでやつと氣がつく、氣が付く事が則ち戀のためには殆ど日光のやうなものである。二人は次第に氣をもみだす、それだけ情が深くなる、泣く、行末をはかなむ、それだけ戀しさが増す。戀の日は秘密の暗のうちでこゝそいよ／＼温かに照るものである。母親は此の様に氣が付いて愈々眞綿を二人の首にまきつける。二人は苦しさに益々だきしめる。母親が無理に離した時は、生木を割くといふ比喩が最もよく穿つて居て、双方が枯れてしまふか、さなくば片輪者になつてしまふ。さうなると父親は流石に男だけとて離れ難いものと見て取つたらふいと氣をかへて二人の望みにまかせてしまつて、寧ろ二人が一ツになつた行末をかれこれと氣をつけて無事の發達と立派な實の成る日待つことにする。母ばかりの娘と戀仲になつた若いものほど氣の毒なものはない。君だちも之れは氣を付け玉

へ。僕の例もそれさ。」

と哲學者先生は言ひかけて一寸眼をそらして天井の隅を見た、昔の事を思ひだして其冷い血の何處にかまだぬくもりが残つて居るらしく、暫く無言であつた。

「と言つた所が、僕のは實はそれほどの事でもないのさ。娘と言ふはその時二十三であつた。僕は二十八であつた。娘も僕も決して初戀ではないので。僕は一度死ぬほどの目にあつた後の事であるから、もうさまでは熱しなかつた。しかしその娘が自分のみに焦がれる様のいかにも烈しいので遂には僕も心を動かしてしまつたのみならず、或晩、娘が身の上の恥を白狀して泣いてからは急に慄れになつて、自分の俠氣がむら／＼と起きてきて、此娘の行末をおれの愛で守つてやらうと言ふ氣になつた。さうすると自分も可愛さといぢらしさとが増してきて、自分の以前の戀とは少し心持の違ふ一種の愛着の念が自分の沈んだ血をかき亂して來た。『そこで母親は二人をどうしただらう。變に邪魔をした。自分は愛にといふ外に今でも母の仕打を形容する事が出来ない。』
『自分は母親の邪魔を何と感じただらう。そこで少し僕は僕のこの頃の人物を説明する必要が

ある。

「自分は自分で其頃常時思つて居た、到底自分の如き人物は普通の母親に知れる筈はないと。なぜならば自分は丸で、普通の……其趣きを異にして居るからで。つまり……哲學家宗教の領地に籍を置いて居て、人生の事を問題にして居た、たゞそれを學問の机上に乗せて置くの……は、僕の感情といふものが丸で躍つて熱して或は狂つて此問題に存存するから、一立身とか「出世」とかいふ標語は餘り自分の耳には勇ましく聞えなかつた。普通の母親が、どうしてそんな若い男を好まうぞ。氏無うして玉の輿に乗るといふが母親の娘に對する夢想である。「玉の輿」自分のやうな人間は冷笑したくなる。卑しみたくなる。その様子が自分の舉動に出る、母親は益々自分をいやがる。
『自分は初戀の時も此流で母親の反對をうけたが其時は、自分も丸で戀の狂人であつたから、猛然として母親と戦つた。そして勝つた。そして遂にまけた。
『さて此度は最早やかゝる熱は起らない。自分ほどこまでも冷笑したくなつた。母親がいやなら、おれも此戀はごめんだ、氣の毒ながらお前

に娘は捨て、やる。そのかはり、娘の心がそのために死んでしまつても知らないぞ。と言ふ氣になつて来た。

『しかし娘はどこまでも自分にこがれ、自分を信じ、自分を命ともして居た。それは實をいふと娘は以前身に有るとは云ふものゝ戀といふ戀は自分に向つて初めて起つたので、二十三にもなつてからの初戀であるから、丸で夢中なのである。又た二十三とはいふものゝ末子であるから心持が何處かに幼ない所がある丈けいちらしい程、自分にこがれてしまつた。どうして自分に此娘が捨てられよう。そこで自分は初戀の時、狂氣のさまで母親と戦つた心持とは一種違つた反抗の念を起した。』

わが過去

彼は夜更けて獨り燈火に對し、默想すること多時。

彼が心は靜かなる事、山間一碧の湖の如し。彼は思へらく、『わが過去は熱情と理想と私慾との、單なりき。われは多く思ひ、多く感じたり。されど多くの勤勞を執らざりき。わが過去をわが經驗としてのみ視れば、實に價ある經驗と言はざる可からず、されど若し理性の示す所に照さんか、怠慢放逸の生活と言はざる可からず』と。

若し人を二種に分てば、其手近にあることを爲して着々其歩を進め行、人と、常に鼻頭を去る幾尺の空間に或者を描きいだし、之れに被ら

しむるに黄金色の光澤を以てしてこれを望見て拱手自ら樂しむ人との二種なりとす。渠の如きは其の何れに屬すべき人乎。

趣味について

人の妻たり母たりたる人の責任の重なる者は家庭内の趣味として高潔温雅利中ならしむるにあり。

人として趣味なきはなし、たゞ惡趣味たると好趣味たるとの差あるのみ。

「嗜好」と「趣味」とは混合すべからず。嗜好とは其人の樂みなり、趣味とは其人の道義的慾望なり。

例せば勞作の如き、これを苦痛と思ふ者には苦痛なるに相違なし。若し人ありて、此苦痛を忍んで勞作に従事するとせよ、忍耐の徳は彼れにあり、されど以て彼れが感ずる苦痛の分量を減じたるには非ざる也。又た人あり、其勞作して成就する所の作物に對し深き興を覺えて、其勞作の苦を忘れりとす。斯る興味は彼の求めに應じて如何なる場合にも彼を充奮さすべく生ずべきか、斯る興味は彼の欲するまゝに永續すべきか。今日までの美術家は皆なこれ

を否定せり、果して然らんには、興味は勞作の苦痛を或時の間忘却せしむるの力はあれど、其人の勞作其物に對する苦痛は消し得ざるなり。此時に當り彼の農夫等が習慣の力を藉りて勞作の苦痛を感ぜざるが如き、前の二者に比すれば其幸の大なる決して同日の談に非ざる也。されど若し茲に此等三者が勞作其者に就て深き趣味を感得せりと假定せば如何。勞作の苦をする實に消極的なりし者が却つて勞作の樂を覺ゆる當に積極的となるべき也。

趣味の教育の人生に如何ばかり大切なるかはこゝの事なり。若し教師ありて其子弟に教ふるに勞作の報酬の如何に大なるを以てせば如何、これ結果の大なるを示して勞作の苦を忍ぶ事の甚だ小なるを教ふるなり、これ亦可なり、されど更に進んで勞作其者の如何に尊きなるかを教へ、これに對する趣味を鼓吹すると孰れぞ。

しからは如何にして勞作の趣味を子弟に吹込むべきか、此問題を提起して遍ねく想起するは佛の巨匠ミレーが暮鐘の畫なり。夕暮の雲の色金の巴なる、アベマリヤの鐘の音の響きそめたるかと思はるゝ寺院の高塔の遠林を出でたる、兩個の農夫彼等は夫妻なり。今しも一日の勞作を了りて、さて漸々歸路に就かんとする時

靜かに野づらを渡りて響くはマリヤの鐘の音なり。二人はこれを聞いて相對して首を低れ、慈愛の天火に向つて祈念をさゝげつゝあり。これ實に大なる意味を含める名畫に非ざるや。教師若し此圖をかゝげて子弟に對して告ぐるに勞作の事を以てせば如何。

青桐

予が窓外に一本の青桐あり、春の終りより、夏の終りに至る間の予の無二の愛女なり。朝光始めて明かなる時夕陽最後の光を投ぐる時、細雨蕭々の時、炎天風なき時、其色、其光、其音、實に予が無二の愛女なりき。さるるを秋風至りて予の身に様々の心配を送ると共に此愛女の身の上は尤も悲哀の有様に立至りぬ。嗚呼熱愛に堪へたる夏の日は去りて搖落の時節は徐々に襲ひ來る。悲哉。

隣れなる兒

一昨日は日曜日なりき。其夜吾二階を下りて坂本老人と物語りす。座に嬢と收二とあり、互に四方山の噂に笑聲相續ぐ。最も樂しき晩

なりしなり。

佐伯の町に一個の小乞食あり。此乞食の身上も亦た話の種となる。其不潔なること語られ、而して又其愚鈍なる事語られ互に笑れりぬ。暫時にして主人の翁吾に向つて言はるゝ様、さて先生吾家にも亦た一個の愚者あり、已に御存じの如し。其愚かなる事嘗へがたなき程なり。如何にすれば宜しきか、殆んど當惑致し居る也。先生別に御工夫もなきものに候やと。

吾此語を聞き、直ちに翁の心を知り、半ば頷ぎ半ば笑うて、實は甚だ挨拶に困りぬ。然り御宅には馬鹿者ひとり御座りますとも言ひ難ければなり。

馬鹿者とは誰ぞ、愚者とは誰の事ぞ。可憐兒なり。

吾等兄弟はじめて此家に移るや、直ちに一個の小兒を見たり。年の頃十か十一なる可し。

これ坂本氏の子に非ず。坂本老人に妹あり、嫁して他に出づ。此子は則ち其孤兒の一人なり。母と一人の姉と共に、今は坂本氏に寄食し、衰れなる身の上となりし也。

寡婦は已に五十の坂も越えたらん如く老ゆ。一見して其愚直なる、甚だ氣の毒なる人物なることを知るべし。坂本家が如何に寡婦に取

りて貧家なりといへ、兄の主人に對し、殊に意
地悪からざるに非ざる家婦に對して、常に甚だ
氣兼して住める様子は、新參の吾等が眼にも、
容易に看取せられたり。寡婦のみにあらず、此
苦しき忍耐は其娘も亦分前せり。十八九の少
女の優しき心情も此浮世の悲しき運命の爲に
や、何となく已に畏縮けて見えたり。

聞け。綿繰の音の聞ゆなり。此れ彼の猶ほ
稚き孤兒が、強ひられて採る夜なべの仕事する
也。不思議なるは此小兒が學校にも通はざる事
なり。吾等兄弟始めより是れを疑ひぬ。

孤兒、學校に通はず、朝起くる毎に命ぜられ
て爲す事は、家の周囲の掃除なり。朝な夕な小
さき箒もて庭先をチユ〜と掃く様如何にも
哀れに見ゆ。晝間は何事をなして目を送るか、
吾未だよく知らずと雖も、僅に見たる所によ
れば、只ろろ〜と庭の内、家の内などろろつ
き居るものゝ如し。時々家婦などより仕事命ぜ
られて爲す、其度毎に常に叱咤せらるゝ聲屢々
吾等が耳に入りぬ。夜は多く綿繰を務め、十時
を定めの時となし、鐘鳴るや、人に喜びて、
夜具に駆け込むが如し。吾等暫時にして此小兒
の決して世の常の者ならぬを知りたり。此舉
動、其言語、凡て逆鈍にして少しも少年の快氣

なし。笑へども未だ近隣を驚かす如くに轉けて
笑はざるなり。泣く時は僅かに悲鳴するのみ。
吾が井戸先きに顔洗ふ毎に他より注意を受け
て頭を垂れ一禮すれども、注意を受けぬ時は
決して禮を爲さず。吾が顔を打ち守りて眼をし
ばた〜くのみ。微笑もせず、恥かしがりもせず。
吾已に尋常ならぬを知りたりしなり。

哀れむ可し、此孤兒實に愚かなる子ならんと
は。寡婦が心中果して如何ぞ、眞に哀れなる親
子にてあるなり。
坂本の老人、語を續け吾に語るに次の事を以
てす。

此可憐兒の上に兄あり、これ又愚にして殆ん
ど處置に窮す。終に或る寺院に送る、寺院其教
へ難きを申し暫時にして送り還しぬ。然るに今
は養艱寺に在りて小僧となり、已に經文數卷
習ひ得てやゝ元に勝るに至りたり。其上に猶ほ
一兄ありき。此人は普通の兒なりき、されど不
幸短命、今は在らず。
可憐兒さきに通學せしなり。されど他の小兒
と共に學ぶ能はず、愚かにして何事も學ぶ能は
ず、終に止めぬ。爾來家にあり、何を教ふるも
少しも學ぶ事出來ず。強ひて學ばしむれば泣き
出すのみ。若し他の小兒より打たるゝ時は平然

として受け、忍び難きに至れば自ら又自分の
頭を打ちて泣くに至る、若し叱責せられ甚だ
しきに及べば、已れ自ら己の手の甲を噛んで悲
鳴す。實に憐れむべき生れつきなり、或は言
ふ、猶ほ甚だ稚けなき時高所より人知れず墜落
して氣を失ひたるに非ざる乎と。老人眞面目
に此、或は言ふを語れども、吾は之を信ぜず。
原因は他にあるべしと思ひたり。

此事情を語り終りて老人又あらためて言ひ
ぬ。今や殆んど處置の法を知らず、恐る、此
兒終に普通の成長を送る能はず、終生獨立
の生活を保つ能はず、愚に育ち愚に終る可き
かを恐る。先生別に御工夫もなきものに候や
と。

吾老人の心を察して甚だ氣の毒に思へども、
實は甚だ答へに困りぬ。然れども亦自ら思ひ
ぬ。此兒、愚は勿論相違なきも、自から見たる
處、老人より聞ききたる處、處々の點より之を
伺ふに、何となく全くの愚者にもあらぬ様に思
はれ、一種の原因あるありて心性發達を厭せら
るゝにあらざるか、若し能く之を導き心性本來
の微なる處より藥を投ずるならば、或は意外
の變化起らざるべきか。吾かく思ひ、遂に試み
に自分指導の任に當りて見んことを謀しぬ。

二十六日の夜は則ち日曜日の夜、吾可憐兒の教育を承諾したる夜なり。而して今は二十九日なり、二十七日、二十八、及び今日と此三日の可憐兒に於ける觀察を略記すべし。

二十七日、寡婦なる可憐兒の母、事ありて二階に上りたる時、兒の教育を半ば恥ぢ半ば喜びて頼みぬ。吾只何事をも言はず、宜しう御座いますとのみ答へ置きたり。

此朝吾顔洗つて歸る時、可憐兒已に庭先に例の如く箒と塵箕とを携へて立ちぬ。吾を見て例の如く默然として只だ瞬きせり。其時何事か問答したれども忘れたり。手に携ふる所の齒磨粉のぶりきくわんを示して其開閉の法を問ふ、しきりに眺め、手に取りてつまぐり居たれども終に開く能はず、吾之を教へぬ。兒見て笑へり。朝まだき散歩せんとて二階を下れば、兒猶ほ庭先において箒を弄び居たり。強ひて伴ひ行かんとすれども叱らるゝと稱して來らず。掃かぬ時は叱らると稱し、吾等が捕へたる手を振りきつて歸らんとす。收二内に入り許可を得て來るを見て、始めて安んじて吾等と共に歩む。

此朝大に霜ふり田園眞白なり。吾指して問ふ、彼の白き者何ぞや。雪なりと答ふ、吾霜なりと教ふれども雪なりと稱して承知せず。高等小學校の門前に伴ひ其石階を踏み登りて階数を答へしむ。一ツ、二ツ、三ツ、四ツ、五ツ、六ツ、七ツ、八ツと數へて登りぬ。吾問うて曰く幾段なりしや。十二なりと答へて平然たり。吾ハツにあらずや。自らハツと數へ乍ら十二と言ふは可笑しいへども、彼少しも通ぜず。教へて曰く、高等小學校の石階はハツなり、記憶せよ。と彼しばらくはハツと答へて記憶したる如くなりしも、幾何もあらず問へば已に忘れりぬ。

此日午後と記憶す。二階に登り來る。余が前に坐し、默然として小さき手を疊につけ、茶色の頭髮をや、長く生したる頭をいと恭しく手の甲の上に置きぬ。而して平然として坐し默然と吾を眺め、口と眼とを妙に動かす。

以上の記は已に二十日前に記したる者に屬す。以來吾筆を投じて復書かざりしと雖も可憐兒は依然として可憐兒なり、然り彼は其不運なる天稟と其不幸なる境遇との爲に益々可憐の者となりつゝあるなり。彼が悲鳴する聲、今二階の下に聞かる。嗚呼彼は何事を泣くぞ。

信仰

信ずる事、信ぜざる事てふ區別よりも人間は大なり。されど不思議にも大なる人間概念を堅き信仰を存す。

書籍の知識より冷かに組み立つる信仰は要するにやむを得ざる信仰なり。信仰の光、心に燃ゆる、すべからず、春雨の濕くる如く已に自ら知らず、欺いて自ら知らず、故に我々一日も安んぜざるなり。力めて眞境に到らんとす、此の熱心は必ず酬いらるゝなり。故に眞人能く神祕縹渺の自然の境に到着してあらゆるミステリーを抱懐して、惑はず。ゲーテが所信 Mysterius all, yet all is good の大信田之れなり。余自らかくは推論直覺し能ふと雖も、ただ之れ思想に過ぎざるのみ。心耳を傾けて雄大高壯の天籟を聴く、未だまことに此境に到る能はざるを恥づ。

「獨歩吟」序

余も亦歐詩を羨みし者の一人なり。明治の世

に人となり、例へばバイロンを読み、テニソンを読み、シルレルを讀める者にして、其情想、衷に激すれども、これを詠出するに自在の詩體吾國に無きを憾むる者世間必ず其人多かるべしと信ず、余も亦た其一人なりき。

新日本の建立するに當りて、全く缺乏せる者は詩歌なりとす。開國以來海外の新思想は潮の如く侵入し來り、我國文明の性質著しく變化を被りしと雖も、遂に一詩歌現はれて此際情想を詠じて、吾人の記憶に存せしめたる者なし。自由の議起り、憲法制定となり、議會開設となり、其間志士苦難の狀況は却て詩歌其者の如くなりしと雖も、而も一篇の詩現はれて當時火の如かりし自由の理想を詠出し、永く民心の琴線に觸れしめたる者あらず。「自由は歐洲に在りて詩人の熱血なりき。日本に移植されては唯だ劇場に於ける壯士演説となり得しのみ。斯くて自由黨は其血を枯らし、其心を失ひ、今や議會に在りてすら清歌高明なる自由の理想は見る能はざるなり。

陥り、世を擧げて唯物主義の淺薄固陋に走り、宗教は卑下せられ、徒に電燈のみ輝きて國民靈性の神殿は暗夜の如し。日本に詩歌の發達せる形式なかりしは、新日本の文明を跛足ならしめし大原因の一なりと余は信ず。

斯る時、井上外山兩博士等の主唱編輯にかかると、新體詩抄一冊出づ。嘲笑は四方より起りき。而も此覺束なき小冊子は草間をくぐりて流るゝ水の如く、何時の間にか山村の校舎にまで普及しわれは官軍わが敵はてふ没趣味の軍歌すら到る處の小學校生徒をして足並み揃へて高唱せしめき。又は其のグレーの「チャーチャー」の翻譯の如きは日本に珍らしき清爽高潔なる情想を以てして幾多の少年に吹き込みたり。斯くて文界の長老等が思ひもかけぬ感化を此小冊子が全國の少年に及ぼしたる事は、當事一少年なりし余の如き者ならでは知り難き現象なりとす。夫れ斯の如くなりしと雖も爾來文學界は新體詩なる者を決して歡迎せざりき。こは皆な世人の知る處。文界今尙ほ新體詩を眼中に入れざる輩少からざるを以て知るべし。されど時は來れり。西南の亂を寢物語に聞きし小兒も今は堂々たる丈夫となり、其衣兜の右にミルトンあり、左に杜甫あり、懷に西行

を入れて、秋高き日、父が上下着て登城したる其建の城、今は葛蔓繁れる廢墟の間を徘徊する又た珍しからぬ事となりぬ。而して冷評されつゝも今日まで雜誌類に現はれし新體詩は、何時しか世人の眼に慣れて其詩形も最早奇異ならぬ者となりぬ。

斯くて時は來れり。新體詩は兎にも角にも新日本の青年輩が甘燃ゆる如き情想を洩らすに唯一の詩體として用ゐらる可き時は徐ろに熟したり。乃ち「青年文」てふ雜誌に新體詩の特色に盛んなるは敢て不思議の事にもあらず。是に於てか余は新體詩が今後我國の文學に及ぼす結果の豫想外に絶大なるべきを信ず。日本の精神的文明の上に著しき影響を與ふるものは今後必ず新體詩なるべきを信ず。此詩體未だ甚だ幼稚なりと雖も新日本はこれに由りて始めて其詩歌を得べくなりぬ。其結果は如何。遺傳に於て吾等は天保老人の血を體中に流し、東洋的情想を胸底に燃やす。學文に於て吾等は歐洲の洗禮を受けたり。吾等が小さき胸には東西の情想、遺傳と教育とに由りて濃く戦ひつゝあり。朝虹を望んではソーズソースを高吟すれども、暮鐘を聞きては西行を哀唱す。神を仰ぎて幽愁に沈む。今吾等は新體詩

を得ていさゝか此鬱懷をのぶるに足りつゝあり。吾等をして縦横に歌はしめよ。斯くて其結果は如何。

あはれ此混沌たる時代と、此煩悶せる青年輩と、此新生の詩體とは相關係して何等の果をも結ばずして止むべきか。

されど此等、凡て年若き者の果敢なき夢想なりとせんか、或は然らん。而も余の如きもの、胸には此新體詩の上にかゝる夢想を描き又た描きつゝある事實を如何せん。誰れか此夢想の他日、日本の文明史上に大なる現實となる可きを否定し得るものぞ。

顧て余は新體詩の主唱者及び今日まで冷評されつゝも堪へ忍びて此詩體を愛育したる諸君に向つて感謝の意を表する者なり。

余は作詩の上に於て極めて後進なるが故に今日まで成就したる作とても甚だ少く、甚だ少なき中より撰びて茲に掲げ得しは僅に二十篇餘に過ぎざるを遺憾とす。しかも唱するに足るものなきを愧づ、たゞこれを以て新體詩そのものを罪するなくんば幸なり。

詩體につきては余は甚だ自由なる説を有す。七五、五七の調を可、漢詩直譯體も可、俗歌體も可、漢語を用ゆるの範圍は廣きを主張す。

批詞を用ゆる、場合に由りて大に可、たゞ人をして歌はざるを得ざる情熱に驅られて歌はしめよ。此の如くなれば、其外は散文らしく見ゆるも、仄々の中必ず節あり、調あり、詠嘆ありて自から詩的發言を成し、而も七五の平板調の及び難き進歩を得。余は此確信によりて「山林に自由存す」を歌ひぬ。

吾國には漢詩を直譯的に朗吟する習慣あり。七五、五七の流麗なる調の外、自ら吾人の口頭に一種の調を成し居れり。余は此習慣を新體詩の上に利用し發達せしめんことを希望するもの也。此意を以て余は「獨坐」を作りぬ。

新體詩を以て敘事詩を作ることとは必ず失敗すべきを信ず。此説に付きては坪内君に言へり。故に初より覺悟して抒情詩の上にのみ十分の發達を遂げしむるに若かずと信ず。されど彼の敘事的抒情詩の如きは尤も新體詩に適するもの、如し。湖處子君の「雲雀」は人をして嘆息せしめ、太田君の「一字」は泫然として泣かしむ。たゞ余は七五調のみを以て此等の長篇を行ふ事の或は平板に流れ易きを恐る。此故に井上博士の「比沼山」を成功覺來なきものと余は思ふ。

戀するものをして自由に歌はしめよ。歌うて

初めて爾の戀は高品のものたらん。其戀の土よ。歌へよ。爾の歌こそ尤も悲しむべし。神を仰ぐものよ。歌へよ。爾の信佛火の如くんば、何ぞ、黙して坐し、坐して散文をならぶることを得ん。疑ふものよ。爾の懷疑の煩悶を歌へよ。冷やかに眠る勿れ。貧者よ、爾の詩を以て爾の不平をもらせ。自由に焦るゝ者よ、高引證を統計年鑑より採る事をのみ苦心するなく、時には詩歌を用ひて爾の語らんとする眞理を備れ。

嗚呼詩歌なき國民は必ず墜落す。其血は腐り其涙は濁らん。歌へよ、吾國民、新體詩は爾のものとなれり。今や余は必ずしも歐詩を羨まず。

明治三十年二月 著者

予の作物と人氣

——「西歩集」の序——

予と雖も予の作物が今の讀書界に於て人氣の多からんことを願ふものなり。人氣役者となりて不愉快を感じる者あるな

し、若しありとすれば、それはヒネクレ者ならざるべからず。予は幸にして未だ斯る不具者たらず。

而も不幸なる哉、予の作物は今日までの経過に依れば、人氣なる者なし。今の人氣作者に比ぶれば、只だ僅に文壇の片隅に籍を加へ居るが如き觀あり、これ甚だ面白からぬ事と謂ふべし。

斯くて思へらく、予の作悪しきかと、有體に言へば、予は否と答へんと欲す。當然の事なるべし、誰しも自ら悪ししと思ふ作を世に出す筈なければなり、若しありとすれば、文學者として大なる無責任者ならざるべからず、予は斯る文壇の不徳兒たるを願はず。

既に自ら悪からずと信ずる作物が、尙且つ今の人氣に投ぜずとすれば、是予に取りての大打撃なり、大痛棒なり、大閉口なり。

何とか一思案なかるべからず、されど名案の有るべき筈なし。要するに人氣を迎へて作る者は人氣を得、人氣に頓着なくして作る者は時として、人氣を得ることもあり、得ざる事もあり、逆うて作る者は遂に得ることなし、予は其第二に屬する者にして、得ざる事もある部類なるが如し。

先づ之にてや、安心なり。矢張り今日までの流儀にて根氣よく作る中には、人氣を得ることもあるべく、滿都の人氣を一身にあつめ得る時もあるべし、たゞ詩人の本分としては人氣に頓着する能はず、此の小冊を世に出すも我本分を盡さんと欲するのみなり。

明治三十八年七月十二日朝
近事書報社編輯局にて認む

獨歩生

「欺かざる記」の緒言

イパミノンダス、ペロピダス、メルロー、リウクトラ、シープス、アデン、スパルタの名をして一時わが讀書社會に喧傳せしめたる小説の著者を、其赤坂なる邸宅に訪ひし一人の青年あり。明治——年九月二十日の夜の事なりき。

此名高き小説の著者其人の事はいまさら茲に説くの要なし、青年の名を佐藤武二といふ。

著者は此時すでに四十餘歳、長者の風を以て青年に對し、青年は未だ二十を幾何も越えず、後進の禮を持してこれに應へぬ。此夜雨しめやかに降り屋外寂寥、談話は此長者が郷里豊後

の佐伯の事に初まり、文學に及び政治に及び、長者が多事なりし過去の經歷など細かに語り、教育の事地方少年の氣風の事など、彼れより之れとはしてしなかりき。青年の情は火の如くに燃え、長者の心は家外の雨の如くに静かに、遂に夜の十時に及びて青年は辭して歸りぬ。

其の翌日午後九時五十分新橋發の夜汽車に乗りて佐藤武二は東京を去り、東海道を半ば夢のうちに過ぎ、彦根に下りて其友を尋ね、彦根城に登りて雲霧夕陽に燃ゆる琵琶湖を見下ろし、其夜は友と燈下に行末を語り、厚會を東京に約して別れ、大阪より汽船に乗り換へ、道々數日を費して佐伯に着したるは、三十日の正午なりき。此等の事は凡て其日記に詳はしく誌されてあり。

佐藤武二は佐伯少年の教育を託されしなり。

もと都會の人に非ず、海濱に生れて山林に生ひ立ち、十七歳にして東京に留學せり。チエルシ一の豫言者は彼れの思想を根柢より顛へして彼れに天火の洗禮を施し、ライダル山の詩人は其情を温ためて靜かに彼を自然の懷に導きぬ。十字架は寧ろ高く雲間に仰ぐ彼れの理想なりし、而も彼れ未だ容易に其野性を捨つる能はず、日夜の苦悶は僅かにもれて其の奔逸なる筆端に

溢れぬ。「欺かざる記」は則ちこれなり。

されど此小冊子に收むる處は唯彼れが佐伯に於ける一年間の其に過ぎず、而も他人が讀んで趣味あるを覺ゆるは恐らく亦これに過ぎざるなり。其故は、今彼れが前後數年の間に述したる「欺かざる記」を通讀するに、佐伯に於ける一年間のものは他と大に趣を異にするが如し。思ふに彼れは始めより特に覺悟する處ありて佐伯に入り、特に意を用ひて其の日記を勉めしならん。彼れが赤坂の長者を訪ひし夜、歸宅の後認めたる「欺かざる記」中に左の言あり。

これ余が生涯の一轉歩に非ざるか、言ひ換ゆれば余は更に新生涯の一歩を始めつゝあるに非ざるか。然らば其覺悟なかる可からず。來る可き百般の事數倍の精勵を以て詳記す可し、唯一の樂樂は是れなり。

と、故に讀者は一部の小説として讀み得るなり。趣味あるは蓋しこれのみ。

惜しむ可きは小説的一貫なき事なり、傳奇的事實なき事なり。されど不思議にも聯絡はあり、昭應はあり、支離滅裂に似て實は然らず、佐藤武二は到底佐藤武二たらざるを得ず、佐伯の山も河も海も瀧も谷も街も、城山の上跡も、村落の砲煙も、農夫の生活も山間の悲歌も野花

も明月も、凡て彼れの燃ゆる如き胸中の燃焼に投げ込まれて、相變化せられたるの靈あり。彼れも世に示すの意なくして記したるなれば、其の長所は眞切なるにあれど、其の短所は餘りに露骨なるにあり。余は彼れの爲めに所々註解を加へ以て讀者の便を計りぬ。又た捨つ可きは、遠慮なく切り捨てたり。

已に彼れ自ら題して「欺かざる記」といふ。禁罵あり、冷笑あり、同情の涙あり、事實あり、空想あり、誇りあり、恥辱あり、憤懣の血深あり。而して註し來れば彼れは遂に世の常の青年に非ず、明治以前に此類の青年、日本に出でし事なし、これ確かに日本歴史の一頁を占む可き事實なり。

秋の入口

—— 一 巻 終 一 の 序 ——

要するに悉、逐げるなり！
在らず、彼等は在らず。

秋の入口あか／＼と田圃にのこり
野分はげしく畑々と稻を掃か
うらがなし、あゝうらがなし。

水とてむ火をかきりなく
夢のごと淡き山々遠く
かくて日は、あゝ、漸く二つ日は
古も暮れゆきしか、今も又！
哀し、哀し、我こゝろ哀し。

以て白字となす

獨歩吟客

海軍從軍記

年少士官

世にも哀れなるは年少士官の戦死及び負傷にぞある。彼等多年の苦學を以て、漸く世に如き希望を以て、其の胸中可からざる血氣を以て或は必願の老父母を以て、或は新婚の夢猶ほ温かなる少妻を後に遺して、或は戦死し或は大傷す。彼等もとより覺悟の筋とは云ひ難し、覺悟の前なるが故に更に、同情の涙なからんと欲するも得ず。

人は思ふ、少將大佐の命こそ惜けれ、少尉中尉の戦死は左程にもあらずと。再び在りては然らず、或だ然らず。同じく捨つる命！ されど彼等年少士官は同時に前途の希望を捨つるな

り、未來の夢を殺す也。天縱の約束を抛つなり。嗚呼皇天！吾等國民をして願くば彼等の熱血を重ぜしめよ。吾が政治家をして願くば彼等の心血を記憶せしめよ。若し夫れ不景氣の空嘆に驚かされて吾が義戦の大猛氣を消磨するが如き或は仲裁の姑息説に迷うて、大河の決するを塞がんとするが如きあらば是れ彼等年少士官の鮮血を刺して、空しく異境の土神の渦に供したるもの也。

今朝起き國民新聞を見れば、將校自傷者の姓名を列記す、其の最後に掲げて曰く國弘榮一と、これ吾が少年の友に非ずや。嘗て同じく中學校の校舎に寢食を共にし、或は冬の休、夏の休に、七里の山路を相携へて往復したることあり。宿舍十傑の投票のうち、奇才子の撰を得たるは君なりき。士官學校より抜擢せられ陸軍大學に入りたりと聞きしに今や平壤の大戦に奮闘突撃して終に負傷のうちに加はらんとは。されど吾、遙かに彼に向つて叫ぶ、萬歳！君は義務のために戦ひ、義務のために傷さぬ。吾れ今筆を執て天下に立ちつゝ、街かに勇士戰場に赴くの覺悟を期す、君が一滴の血、必ず値ひあらしむべし。言論若し力あらば、嗚呼言論若し世を動かすを得ば。

艦上の勤工場

(西京丸にて)

▽何等の奇異なる光景ぞ。

士官吾を顧みて曰く「見られよ勸工場を。」砲座の下、マストの傍、陳列の品は何々。

十五歳許の少年の前に列べたるは、状態袋、楊枝、手帳、ボタン、鉛筆、書翰紙、其傍に柿の一籠。

少年の横に五十歳許りの男、シャツ、ズボン下などひさぐ。彼れに對し三十歳許の景氣

よき男亦少年と同じ様なる品を賣る。四十歳許の婦人あり、柿と栗とを列べたり。

花主のお客様は誰れぞ。白ろき衣鼠色と化けたるは水夫。砲座に立ちたるは某々の陸軍將校。立つものあり、腰かくるものあり、他の肩

にもたるものあり、笑ふもの、どなるもの、ひやかすもの、錢を懐中より取出すもの、品物をひねくるもの、頗ぶるまぢくなり。

「これはいくら。」「百枚が二十五錢。」「ブルくくく。」「馬鹿を言ふな。」「オイ、まける。貴様達も大に盡すべきは今ぞ。」「四十錢と。」「イヤ七十錢で御座ります。」「何だ七十錢？ホー歸れく！」「これはいく

らだ、十錢！八錢にせえ！八錢に！ならんとふん！ヨシ、十錢さばる、そのかはり此の手紙をポストに。」

波濤

余に一個の弟あり。今ま亦た國民新聞社に勤む。去んぬる十三日、相携へて京橋なる新聞社に出勤せり。弟余を顧みて曰く、秀吉の時代、義經の時、或は亦た明治の初年に逢遇せざりしを恨みしは一、二年前の事なりしも今にしては實に當代現今に生れたりしを喜ぶ、後世の少年吾等を羨むこと幾許ぞと。余、甚だ然りと答へ、ともに奮勵して大に爲すあらんことを誓ひき。其日電報廣島より來り、其夜急に東京を發し、弟と新橋停車場に別れたり。爾來日をふる七日。夜更けて玄海の月に對するの時、或は朝まだき、西に〇州を煙波のうちに望みて心を躍らすの時、或は〇〇〇〇沖を經過して、曩の假根據地の風景の奇異なるに驚き、鉛筆を擗て實寫を試み、終に能はずして止むの際、懐中は唯だ吾が一弟なりき。山を賞し、海を語り、軍艦の帆を羨み、月の夜に、星の夜に、詩情に、慷慨に、談論に、懷舊感に、將來談に、笑に、田舎の山路に、都會の客舎に、凡

て共にしたるは實に吾が一弟にして、彼れの趣味は吾が趣味、吾が聞かんことを欲し見んことを願ふ事は彼に於て亦實に然りし也。

○〇日、○丸の喫煙室に某少佐と語り、東方の形勢を論ずる際、吾が眼端なく窓外千里の波濤に轉じて、水天一髪の光に注ぎたる刹那、こみあけ来るは慷慨の涙と、吾が同胞四千萬よと叫ぶ、天外遊士の懷郷の涙なりき。○〇日の夜、や、更けて獨り甲板の上に登りぬ、○〇江口の空晴れて満天の星彩きらめき渡り、○〇の大艦大船悉く燈光を滅して、寂として令、嚴に、北風右舷の方より吹き來りて堅氷の時節愈々近づきぬるを覺え、俯仰感懷に堪へざりし時、本艦の水夫も亦た登り來りぬ。共に左舷の鐵欄に倚りて語る。旅順口占領の期も遠きに非るべきを談じ、談じては黙し、黙しては談じ、吾が感情次第に昂揚して、偏へに吾が國民を思ふの念に堪へずなりぬ。

見るに付け聞くにつけても一弟を思ふ吾は、聞くにつけ見るにつけても亦實に諸君を思ふの吾に外ならず。

通信とは何ぞ。しかつめらしく取調委員が報告するかの如く、通信すべきか。

通信する對手は誰ぞ。吾れ何の心を以て、誰

れに語るべき。長官にか、所謂「讀者」なるものにか。

凡て此の如きは、余の斷して能せざる處、又た堪ゆる能はざる所。余は自由に語らんことを欲す。愉快に談せんことを欲す。自由に談じ、愉快に語りてこそ、始めて余が意に適するの通信をなし得ることを信ず。

余に冷靜なる觀察者を以て望むなく、余をして報告者として筆を執らしむるなく、余をして全く自由に、愉快に友愛の自然の情を以て語らしめよ。

余は之れを欲す。諸君も亦之れを許すに於ては余已に「如何に通信すべき」の自問に就て、自答を得たり。今後余の通信は凡て、「余が一弟に與ふるの書狀」なるべし。

諸君も亦諸君の弟若くは兄よりの書狀を讀むの心を以て讀まれんことを希ふ。文に拙なるも、一家内の者に示すに何かあらん。これ余が憐むべき勇氣なり。

明治二十七年〇月

〇〇日 日曜日午後三時

於千代田艦

國木田哲夫

主張、感想篇

ワーズワースの自然主義と余

余の如き實に言ふに足らず、余の如きが自然主義者であらうが、あるまいが、問題にもならないことでそれを自から彼是れと言ひ出すのは烏澁がましき至りなるが、本誌(?)の新年號に於て鳥村抱月氏の一文藝上の自然主義てふ有益なる論文中、主義と名のつかぬ自然主義は早くイギリスのワーズワースに端を發し」とありて、余をしてさてはと思はしむる所あり、從て本誌上に於て二言三言述べて見たくなつた次第である。一つには亦、昨年の秋「日本新聞紙」上に於て余と自然主義に關して多少自から説く所があつた其行が、りからでもある。

「日本新聞紙」上に於ての余の所説を一括して言へば、「余は評壇から自然主義者なりと目せられて居るけれど、余自身從來の作物は、自然主義なる者の如何も知らずして只だ余の見る

所、信ずる所に依りて製作せる者である」との意に過ぎない。

余は同紙上に於て、これより以上の事は何も言はなかつた。則ち「余の見る所、信ずる所」の其本源に就ては何も言はなかつた。

しかし徳川文學の感化も受けず、紅露二氏の影響も受けず、從來の我文壇とは殆ど全く没關係の着想、取扱、作風を以て余が製作を初めた事に就ては必ず其本源がなくてはならぬ。其本源は何であるかと自問して、余はワーズワースに想到したのである。然も尙ほ余はワーズワースが果して文學史上、自然主義と何程の關係を有し居るかなどの考究はしなかつた所が、本紙上に於て計らずも鳥村氏の、先に引いた言説を見て、さては余も遂にライダルの谷間から流れ出た自然主義の流を掬んだのかとうなづいた次第である。

余が初て短篇小説を書いたのは今より十年前である。それより更に五六年前余は覺來なき英語教師として豊後國佐伯町に一年間滞在して

居たが當時余は最も熱心なるワーズワース信者で、而してワーズワース信者に取りては佐伯町は實に満目、悉くワーズワースの詩篇其物の感があつたのである。山に富み溪流に富み、溪谷の奥に小村落あり、村落老て物語多く、實にワーズワース信者をして「マイケル」の二三は此處役處に轉がつて居さうに思はしめた位である。斯る場所に在て日夕ワーズワースの詩篇に夢中になつて居た余が如何程までワーズワースの感化を受けたかは當時の余の「日記」が説明して居る。今其の二三條を引く。

人若し我に向て汝が文學者詩人としての目的は何ぞやと問はゞ我れ答ふるに窮せざる也。

曰く此獨立の靈が知り能ふ丈、觀得る丈に、感じ得る丈けをありのまゝに筆にのほすにあるのみ。

然り余は獨立にして自由なる一個の靈なり常に自由に觀、自由に感じ、自由に現すべし。

事實ありて意味あり、空想は意味に非ず、人生の意味は人生の事實の語る所なり、事實によりて意味を直覺する是れ靈妙なる

人間の靈の妙機に非ずや、詩人是也。

多く見たり、多く聞きたり、思へば此等の事實悉く深き意味ある。

東氏の雇人爲(人名)の兄なる歳は盗みて獄に入りぬ。石氏にごろつき居たる徳は盗みて獄に入りぬ。

〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇、(悉く人名なれど生存者なる故に秘す)其人物其經過、其經歷。

一個人を深く能く観ることは、あらゆる歴史を見る事也、あらゆる宗教を見る事也、あらゆる詩歌を見る事也。

以上は明治二十六年十一月二十日より末日までの日記中より抜いた者であるが其後一年餘り過ぎて余は、自から何を書かんと試に題材を撰み記したる者を見ると

○芳島と女島との間の渡守り。

○女島にて見たる水門を下せし若者。

○船頭町より木立村の間を渡す舟子。

○十二段(山名)の山腹にて逢ひし老樵夫。

○こじき紀州(人名)

而て二日記の一節に曰く「余は此の一個の人

間を思ふ時は同情に惹へぬなり」と。以て如何に深く余がライダルの詩人に動かされて居たかが知るだらうと思ふ。

既にワッツワース信者である限り、余は自然を離れてたゞ世間の人間を思ふことは出来なかつた。人間と相呼應する此靈感にして奇妙なる自然界に於ける人間なればこそ、平凡境に於ける平凡人の一生は極めて大なる事實として余に現はれたのである。

其處で豊後に滞在後五六年の筈余は初めて源叔父なる小説を作り其主人公の一人は乞食兒紀州であつたのである。

無論余は後年ツルゲネーフも読み、トルストイも読みモーハツサンも嘔りて其感化を受けたには相違ないが、以上の所説に依りて余は遂にワッツワースの流を拘んで、それを信じて、それに依て立つた一人なることを證明して餘あると思ふ。

然し今日我文壇に於て説かれて居る自然主義及び所謂の自然派の作家が其作物に依りて示しつゝある自然主義と、ワッツワースの自然主義とは餘程相違があるやうである。少くともワッツワースは人と自然とを離して見ることは出来なかつた。此不可思議なる大自然と人生とを

別々にしては考へなかつた。然し今の我國の自然主義者には人あり人生あり、これ迄世間觀も社會の裡に觀ることはしても、人間に就いては最も大なる事實なる自然の懐に觀ることは爲ないやうである。

余は此處に於て今昔の如く、而して今後益益ワッツワースの一句

On man, on nature, and on human life
Musing in solitude,——

から離れたくないと願ふ。

悠久にして不可思議なる、生死を吐看する、此大宇宙、爾が如何にもがきて飛び出さんとするも能はざる此大自然、事實中の大事實當面の眞現象に就ては何等の感想をも懐かない文人が如何に巧に人間の事實を直寫したからとてそれは一藝當たるに過ぎない。斯くて文藝何の値ぞ、所謂の自然主義何の値ぞ。

奈何にして小説家と なりし乎

自分が小説家であるか、無いかが先づ第一の問題です。世間が自分を小説家であると、決めて居るなら其も致し方がありません、喧嘩にも

成りません。元來自分は小説を書いて其で一身を立てようなどは、少年の時も青年の時も夢にも思つたことが無いので、其で小説家として世間がみとめて居るなら、其は自分が取るにもたらぬ、三つ四つの短い物語りを書いた結果でありませう。其れならば自分に對する問題の適切なる意義は「我は如何にして二三の小説を書きしか」と、言ふ事に成るだらうと思ひます。さうです、一家であるか「家」で無いかは問題の外と致しまして、兎も角も如何にして二三の物語りを書きしか、而して、世間から小説家であるのとみとめらるゝ男と成りしか」といふ問で答へる事に致しませう。

全體自分は、功名心が猛烈な少年で在りまして、少年の時は賢相名將とも成り、名を千歳に残すといふのが一心で、ナポレオン、豊太公の如き大人物が自分より以前の世にあつて、後世を顛倒し我々を眼下に見て居るのが、残念でたまらないので半夜密かに、如何にして我れは世界第一の大人と成るべきやと言ふ問題に觸着つてぼろ／＼涙をこぼした事さへ有るのであります。けれども今から思ふと世間の少年は十の八九、皆かくの如き取り止のない、馬鹿々々しい、比較根性から出た妄想で、つまりは、坊の蜜柑の方

が小さいとか、大きいとか言つて泣いたり、わめいたりする動物體の發作に、過ぎぬのでありませうが、何でも彼でも兎も角も、其の發作で心を動かして居たのですから、物語を作つて一生を送るなど言ふ事は夢にも思はず、思はなればかりではなく寧ろ男子の恥辱と致思つただらうと思ひます。(實際、其處まで思つたか思はないかすら、記憶に無いのです。) つまり文章家、小説家など言ふものは、絶対に眼中に無かつたのです。處が、自分の精神上に一大革命が起りました。即ち、人生の問題に觸着たので有ります。謂ゆる「我は何處より來りし」「我は何處に行く」「我とは何んぞや」(What am I)との問題に觸れたので有ります、其で如何にしてかゝる問題に觸れたかと言ふ事は、此處で申上る場合では有りませんから止しますが、何しる結果は即ち精神上の大革命でありまして、今迄の大業が、がらり破れて仕舞つたのです。ナポレオンも秀吉もいつから豪く無くなつて了つたので有ります。若し豪いならば其豪いと言ふ意義がまるで違つて來て比較根性から出た意義、功名、利達の意義に成つて仕舞つたので有ります。

當然自分の對手が以前と全で異つて來まし

た。以前は自分と世間とが常に相對して居たのが、今度は自分と此人生、自分と此自然とが相對して來て、自分の心は全く其方に取られて了りました。そこで讀む書が以前とは異つて來る、以前は憲法論を讀み經濟書を讀み、グラツドストンの演説集を讀み、パレーの英國史を讀んだ自分は、知らず知らず此等を捨て、カーライルのサルト・レザルタスを讀み、ゾーズライスの詩集にあこがれ、ゲテを覗き見するといふ始末に立到りました。斯うなると、自分は哲學と宗教との縁を斷るゝ事が出来なくなり、基督教にて示された宇宙觀、人生觀などが寢ても覺めても自分を或は惱まし或は慰め、それに心を奪はれて實際の事は殆ど手にもつかぬ場合もありましたし、自然、自分は宗教家にならうかと思つた事もありました。

斯ういふ境遇に陥つた青年は當時、自分ばかりでなく、外に幾人もあります。自分の友達の中にもあります。そして終極皆な如何なつたかと申しますと、遂に宗教家になつたものもあり、語學か倫理の教師になつたものもあり、そして文章を書くのが本職になつたものもあり、先づ此の三類の二に大抵は落着て了つたのです。或は未だ何れにも落着かないものもあ

ります。そして自分は文章に縁多き方に來て了つたのです。又教師を爲した事もあります。要之、煩悶ばかりして居る時に行かなくなり、パンを口に入れる道を急ぐ場合となれば、先づ其時分の自分の如き種類の青年は、教師にでもなるか、宗教家を本職とする外には使ひ道がないのであります。

所が哲學とか宗教とかを、ひねくつて居ると、自然文藝に縁が付いて來るもので、カールイルの如きも同じ道行で終に文學者になつて了りましたから、自分も我知らず何時の間にか、書いて見るやうになつて、従つてそれが、身を助ける藝となり、パンを得る唯一の手段となつて了つたのです。

親父の脛を噛りながら二十一、二歳まで東京で煩悶を行つて居ましたが、それも出来なくなりました。遂に矢野龍溪先生の推薦で先生の郷里、豊後の佐伯で英語の教師をやつて一年計り居ました。此静閑なる一年間に自分は全く自然の愛好者となり、崇拜者となり、スポーツリスト信者となり、明けても暮れても溪流、山岳、村落、漁村を廻り歩き、溪を横ぎる雲に想を馳せ、森に響く小鳥の聲に心を奪はれ、そして同時に、「牛肉と馬鈴薯」(自分の書いた小説)の主

人公、岡本誠夫の煩悶と同じ煩悶を續けて居ましたので。其當時です、徳富蘇峰先生に書状を出して自分は最早、政治には少しも趣味を有たなくなつたと言ひ送りましたら、先生から教訓の意味の返事が來た事がありました。實際、それほどまでに自分の心が現代の問題から離れて了つたのです。そこで一年ばかり教師を爲して居る中に、生れついた鬱勃の念が抑へきれず、遂に又た東京に飛出て來て、入社したのでもなく、只だ蘇峰先生の愛顧に附込んで民友社にもぐり込みました(もぐり込むと言へば變ですが、當時の民友社の同人は大概もぐり込んだので、今日唯今より入社、月給は幾十などいふ手續きは無いやうでした)。民友社といへば、當時文藝の本場で、「國民之友」は文壇の最高位を占めて居たといつても宜しい位、その社へ自分が入つたのが即ち自分と文藝との縁を確實に結びつけた原因であります。

その後の自分の經歷に随分波瀾がありました。が、つまり「國民之友」といふ當時文壇第一の雑誌に隨意に書けるといふ特別の事情で、自然筆も達者になり、即ち藝が上達する、従つて面白味も出て來る、遂には此藝の外、何一ツ飯を

喰ふ藝がなくなつて、従つて喰へなくなると直ぐ此藝を出して來ました。

誤解されては困ります。自分は今日まで衣食を得る方法として文章を書いたといふだけの事で、即ち自分の實際を申上げたので、衣食は衣食を得る藝當に過ぎず、などは心に思ひません。文藝それ自身の目的の高尙なる事は承知して居ます。又た自分の作物は自分が心眞に感得し得たるを正直に書いたもので、それが文藝の光輝を幾分か發揮し得て居るといふ自信及び満足も持つて居ます。

どうか自分も今後益々奮つて我が製作を世に出さうと思つて居ります。若し自分が小説家ならば、今後益々小説家の本分を盡さうと思つて居ます。

たゞ自分は、人生問題に煩悶した當時の我がから全く離れて、たゞ文藝の爲めに文藝に埋れ度くありません。「人生」研究の結果の報告といふ覺悟は何處までも持つて居たいのです。

予が作品と事實

余が今日まで書いた小説は最近の數篇を除け

ば「武藏野」獨歩集「運命」濤聲の四冊に網羅してある。これを分類すると、第一、全く空想から人物も事件も出来上れる者。第二、實際の人物若しくは事件にヒントを得た者。第三、事實の人物と事件が其小説の主要部を成せる者。第四、實際の人物及び事件を其儘描寫した者。先づ此四種の外に出でない。若し人物と事件を別々にして分類すれば更に細に類別し得られるが、煩はしいから大體右の四種にして置く。併し此四種は豈たゞ余のみならず、大概の作者は皆同様であらうと思ふ。

二

余は今日まで所謂短篇小説ばかり書いて来たが、短篇の中にも長短あり、其長短數十篇の中にも第一に屬する者は極めて僅である。第二第三が最も多數。第四も亦甚だ少ない。其處で今思ひついた作物に就て簡単に説明すると、處女作の「源をぢ」(武藏野)は源叔父其人も「紀州」と稱する乞食の少年も實在の人物で、余が豊後の佐伯町に居た時分、常に接近したばかりでなく、其の身の上について深く同情を寄せたことのある人物である。而して此一篇中に記述した此兩人それらの身の上の事も事實

である。けれども此兩人を結びつけたのは余の想で、これを結びつけて初めて此一篇が作品となつたのだ。

「運命」中の「酒中日記」はチョツとしたヒントが基となつた作物で、此一篇に記述した事は、悉く余の拵へた事である。主人公の小學校々々長に似た實在人物及び小學校新築といふ事實に觸れてそれが基となり、余の想が出来たので、實際の小學校々々長は今も健在である、校舍は早く落成して今は多數の兒童を收容して居る。

一富岡先生(獨歩集)は、長州で有名な富永有隣翁である。翁は最早死んだ。余が周防熊毛郡に居る時分、此翁は田圃の中の一軒屋に孤獨の生活を送つて三四の少年に漢學を授けて居つた。余の描いた富岡先生の性格は此有隣翁をモデルにしたので、郷里出身の榮達者に對しての態度などは有隣翁の逸話を基にしたのである。けれども、梅子と云ふ娘は實際有つたのではなく、従つて一篇に記述した事件のある筈はない。

「春の鳥」(獨歩集)の主人公、白痴の少年は余が豊後佐伯町に居つた時親しく接近した實在人物で、其身の上話は皆事實である。只城山で悲惨な最後を遂げたと云ふ事だけは余の想である。余は此少年を非常に氣の毒に思ひ、自から進ん

で其教育に從事して見た事もある。數の觀念が全く缺けて居るので、如何にもして此缺陷の幾分なりとも補ひくれようとする種々の手段を採つた事もあるが、恐く徒勞に歸した。そこで余は當時白痴者に就いて深い同情と興味とを待つて、人間と鳥獸の差別、生物と宇宙の關係など、随分城山の上で空想に耽つたものだ。そして此一篇は七八年の後に出来たのである。

「巡查(運命)」は全くの寫生である。本名は高野氏。余が西園寺侯の家に寄食してゐた時、侯は總理大臣代理であつて三四人の護衛巡查が居た。其一人が高野氏で、何時しか余と別悉になり余は氏の經歷及び人物を知るに従ひ頗る興味を持つて来た。そこで氏が頻りに勧めるので、或日氏の寓居を訪うた。余は初めから寫生して見る積りで訪問したのだから、寓居模様、居室の體裁は勿論、氏の一舉一動を十分注意して觀た。そして氏が机の抽出から自作の「警察論」の一篇を出しかけて引込め、見せたくもあり見せたくもなき様子を余は看取して氏をそゝのかしてやらうといふ一心からこれを朗吟させた。そして一寸とそれを拜借と軽く所望して、此等の原稿を持ち歸り、以て此一篇を書いたのである。若し此等の原稿を材料としたい

で此一篇を書いたら骨抜き同様であらう。

寫生文なんて、くだらないものだ。どうかすると新聞屋の探訪だ。けれども余の此一篇が氣に入つたと云ふ知名の作家もあるやうに聞いたが、世は様々だ。七八年の後、初めて作品になる者もある。手帳さへあれば直ぐにでも出来る作品もある。余が此一篇も直ぐ書いて大阪の或雑誌に載せ、それを高野氏に見せたら「とうとう種にしましたな」と笑つてゐた。

此巡查如きが若しお望みなら手帳を與へよ。きよろしくせしめよ。記憶に止め難き故事來歴、手紙の文句などは非必要ならば、一寸拜借とでも言ふべし。本願寺の瓦の大サが解らざれば梯子をかけて上るべし。實にくだらないことだ。

寫生文など言はずに、手帳文と言つた方が直截のやうな氣がする。

「第三者（獨歩集）は似寄りの事實があつて余は第三者の心配をさせられた。けれども此篇に表はれた男女兩主人公の性格と實際の人物とは決して同じでない。たゞ幾分か似通うて居るといふに過ぎない。殊に男主人公の云爲の中には余自身の閱歷すら雜つて居る。

そして此一篇は二個の主人公があるやうに見

えるが、女主人公の方が重なので、男の許から逃げ出した當世娘を書くことに力めたのである。されば男主人公よりも、より多く女主人公は實在人物に近いのである。余は此篇で逃げた人を書いた。此次には逃げられた人を書いて見たいと思つて居る。女に逃げられた男、弟子に逃げられた先生、いろ／＼意味の深い事實がある。

「空知川の岸邊（運命）」は小説とは言ひ難いかも知れぬが、さりとして紀行文の積りで書いたものではない。けれどもトルストイ翁のコーカサスの囚人を説教と言ひ得るなら、これも小説と云つてよいだらう。

此篇の主人公は余自身で其事件は皆事實である。主人公の感想は余の感想であることは云ふまでもない。

「あの時分（濤聲）」は、全く余が早稲田に在つた頃を思ひ出し、なつかしさに堪へないで書いたもので、事實が八分ならざれば多少の附加が二分。しかし心持は少しも變へてない。

「私」は則ち余自身。同じく「濤聲」中の「帽子」は夢を書いたのである。帽子の主人公は一夜余の夢を襲ひ、夢さめて後、余をして戰慄せしめた人物で其夢中の事

實は心理狀態として余に多大の興味を持たしめたのである。余は夢を見て直ぐ其夢を寫しとして書いたのではない、余は數日間の間、此夢を忘るゝ事が出来ず考へ考へた果てが遂に此一篇に成つたのだ。

この篇は第一第二第三第四の何れに入れて可なるやを知らず。

「獨歩集」中の「牛肉と馬鈴薯」の主人公岡本誠夫の性格は余が好むまゝに描いたものだが、彼の演説は余の演説である。而して北海流熱は余自身の實際で「空知川の岸邊」は此實際の實際である。又此篇に現はれた四五の紳士は皆な實在の人物を借り來つて多少とも其像を寫したのである。則ち「竹内」は竹越三又君、「野貫」は渡邊勘十郎君、「井出」は井上敬二郎君、「松木」は松本君平君。而して此等の諸氏は實際櫻田本郷町の河岸にあつた俱樂部で常に氣焔を吐いて居たものだ。

三

要するに余の經驗に依ると、實在の人物、實際の事件は如何に面白く思はれても、之れを直

ちに筆に上すは眞の詩を得る道ではない。必ずこれを心算最も深き處に藏して其醜態を得たなければならぬ、然からざれば、其詳細の事實は忘却し易いから寫生文とは縁が益々遠くなるかも知れぬが、人生の眞に觸れた詩を得ることに於て途は此外にあるまいと思ふ。

然らば余の長短數十篇は悉く然るかといふに決してさうでない。大多數は事情に迫られ、時を限られ、不満で書き上げて、先づ／＼此場合、此支けの辛苦ならば、此位の作が相當であらうと自ら理窟をつけた者ばかりと云つてよい位なのだ。

机は部屋の置物

◎私は机に向ふことがメツタにない、机は只私の部屋の置物たるに過ぎぬ。

◎そんなら小説などを書く時は如何するかとの疑問も起るだらうが、私は今日までそんなに澤山小説も其他の文章も書いては居らぬ、私がかこれまで書いた物の分量を十年の歳月に割り

當てゝ見ると實に僅少な者で恐らく一日三行にも當るまいと思ふ。

◎そんなら讀書は如何するかとの疑問が次に起るだらう。所が讀書と來ては尙更ら机と縁が薄い。元來私は讀書なる者をしてしない方で、田山花袋君の百分の一も本は読んで居らぬ。其他の友人と比較しても其十分の一、五十分の一も六つかしからう。たまに讀むことがあると、多くは柱に寄りかゝつて讀むか、床の中で讀むか、寢そべつて讀むか兎に角極めて不規則で、正坐机に對して讀書するなど云ふことは、昔バイブルを毎朝讀んだ時の外にはない。

◎であるから「机に向ふ時の心持」といふやうな經驗が極めて少ない。其机に向ふ時は必ずのツびきならぬ場合に限るから、愉快も不愉快もない。そして書いて居る中にイヤになつたら直ぐ止して了つて座敷の内をごろ／＼して居るか、庭をうろ／＼して居るかだ。其中又興が來ると直ぐ書きつゞけるので、其間自分の書いて居るものの事ばかり考へて居るから「机に向ふ」といふ種類の感じの起らう筈がない。尤も日課のやうにして書き續けて居る人なら、毎日、サアこれから書くのだと机に向ふから、其日毎に感じも違ふだらう。私にはそれがな

い。

◎私も明心淨机といふやうな趣味を實現し得るなら結構であるが、習慣と生來のだらしないさで、左様いふお人柄の好いことの出来ぬのは眞實、幸福とは申されない。

◎が之は「机に向ふ時の感」であつて「机に向つて居る時の感」ではない。私とても机に向つて居る時の心持の實驗談なら、多少か持て居る、何故なら机に向ふ時の感は刹那の感であるが、對つて居る時の感は時間が長いからだ。

雑談

一體僕は人の無性者で、平生から讀書なんか餘りしない方だが、先づ僕の好きな作家を云へば「ツルゲーネフ」だらう。さう、「ツルゲーネフ」の如何云ふ處が好きだと云つて迎ても言葉ぢや云ひ難はせん。愁つか如何のかうのと言葉に云ひ難すと一種の型に入つたものになつて、眞に僕の感じてる其のまゝのもので無くなつて仕舞ふ。まあ好きだから好きと云ふ譯なんだ。「ツルゲーネフ」の何の作が好きだと云つて別に取り出でて其と云ふ譯に往かん。どの作にも、其れ相應の面白味がある。手取早く云つて見れ

「ツルゲーネフ」の作はどれもこれも好きと云ふ譯なんだ。

先刻好きだから好きと云つたが、強ひて云へばツルゲーネフのやうな自然人生の觀方、描寫の方法が氣に入つてゐるんだ。それに「ツルゲーネフ」の作にはバックに深い悲哀が横はつてゐるやうに思はれる。——これは僕一人に然う感じられるのかも知れんが——此の點が誰よりも「ツルゲーネフ」の好きな所以だ。と云つて那樣に澤山讀んで居ないが、兎に角非讀書子なる僕の好きな作家を挙げれば「ツルゲーネフ」以外には無いのだ。

それはさうと茲に一つ近來の珍談がある。いつか「日本」へ「湯ヶ原ゆき」を載せたとき、あのうち義母のことを「悠然茫然泰然然」と書いたが、まさか分る氣遣ひもあるまいと、知らん顔で済してると、悪事千里、何時の間にか、義母の親戚や知人の間に知れて「悠然茫然泰然然」然」が、義母の通り名になつて了つた。するといつの間にか義母の耳へ入つたとも知らず、此の間妻を里へやると、散々の御不興で、顔を見ると突然こづき廻さん計りの見暮に、何も惡氣があつてやつた譯では無いから、後で良人をお詫びによこしますと云ふと、妾の前へでも來よ

うしなら、横腹を刺り殺してやるからと、大に鼻息が荒かつたさうだ。今ではもう何でも無くなつたけれども、斯う云ふ話しをまた小説にでも作つて妙に見せたら、何と云ふだらう。一寸面白いだらうと思ふ。

何日か「早稲田」に書いた「生より」あれは那樣短かいもので世間の受けも毀譽相半ばする云ふ有様だつたが、あれで非常に骨折つたものなんだ。何しろ身體が悪くて、長いものを書く精力は、到底無い。其に原稿の締切期日は疾に過ぎてると云ふ次第で、優に百頁以上もある非常に長い豊富な材料を僅か四頁足らずのうち纏めたのだ。主人公のおやぢの會話や、魚釣場の光景など、筆を執ると歴々として眼前に浮んで來る。あれを書き終つたときは實際二百頁位のものを書き上げた位の氣持がした。さう、正味あれの爲めに費した時間は二日だが他の人ならあの位の長さのものなら、二時間あれば出來るだらうと思ふ。

何も自慢するぢやないが、兎に角あれ丈のこととを、あれ丈けのうちに書き顯はすには随分苦心したものだ。

其につけて思ひ出すのは、今の若手作家の傾向だ。何と云ふだらうの無い書き方だらう。思

にもつかんことを、だら／＼と續り書き進めし書きのばす。一體如何云ふ積りだらう。之では世間のものが當てられるのも無理は無い。も少しと簡潔な引き緊まつた書方が出來るものだらうか。

驚異

火の熱きものなることを知ると其の熱きことを感ずるとは同じからず。

宇宙、人生の問題に幾干かの興味を有し、これを研究し、これを知得することは、宇宙に於ける此生の現象に驚異すると同じからず。

學術と社會と、此二者は個性の發生する前に、この地上に在りて待ち居たり。

人の感情は慣るゝ可く造られたり。

眞の宗教は驚異より發せり。

驚異は宗教となり詩となりぬ。總ての詩は驚異の結果に非ず。

驚異の結果に非ず。

驚異の結果必ずしも巧妙なる詩に非ず、又深遠なる學文に非ず。

驚異に始まらざる研究は空なり。

人の他動物に比して異なる點は習慣を披脱し裸々然天地に對することを得る一事なり。

科學は決して驚異を滅せず。

人生何をか求むる

空想を追求する心は終に疲勞す、これ自個の影を逐ふに等しきなり。何時しか張りつめし氣もゆるみ、はては此生のあぢきなさを哀感するに至らざれば止まざるなり。廿前後より三十前後までの壯年が、しばし半夜燈前一室のうち、或は薄暮散步の途上、忽然として襲はるゝ陰愁の魔はげにこれに非ざるなきか。此時彼は少年の時の如何に自由にして自然なりしかを回想し來るなり。現在わが追ふ夢の如何にはかなきかを感じずるなり。此世てふ者の如何にも單調なるを感じずるなり。わが生のゆくゝ老滅しつゝあるを感じずるなり、人生畢竟何をか求むるてふ浩嘆、やゝもすれば一滴の冷やかなる涙と共にこみ上げ來らんとす。かゝる時、彼若し善性美質の人ならんには、本然の人情油然として胸底深き處より涌きいで、獨語せしめて曰く、噫人生終に何をか求むる、止めよ止めよ、凡てこれ空なり、われ已に欺かるゝこと久し、爾空想の鬼を去れ、將來てふ魔を去れ、吾をして今、今、親子相愛せしめよ、兄弟相愛せしめよ、

夫婦相和樂せしめよ、朋友相親愛せしめよ。凡て子として斯の時ほど親のなつかしきを感じずる時はあらざる可く、親として此時ほど愛兒の可愛ゆき時はなかる可く、兄は弟を親み、弟も父は兄を慕ふ、此時にまさるはなく、夫婦互に相倚り、妻は身を夫の懷に投じ、夫はしみくと妻を戀しく思ふ事、げに此時ほど深きはあるまじ。遠にある友をなつかしく思ふも實に此時に非ざるか。彼は獨語を續けて言ふなるべし。「吾をしてたゞ人情の道をあゆましめよ、心ばかりの眞心を親子夫婦兄弟朋友の間につくしめよ、たゞ一步、吾が足を此處に堅く立て、又自己の影を將來に追はしむる勿れ」と。一室の中ならんには此時彼は遠き友に向て書狀を認むるなるべし。此書狀には例の大言壯語なき替りに、慇懃に其安否を問ふなるべく、わが日常の無事を報じ、或は何時又相遇ふ事の出來るやなどの文字に眞心あらはるべし。認めたりて後、何時になき平和と自由とを感じ、其夜の夢は春の海の如くにもならんか。然るに若し、彼にして或は、親子夫婦兄弟朋友の間、深き懼ろしき波瀾ありて存し、いたく彼の心を傷け居らんには、世に彼ほど不幸なるものなからん。彼獨語して曰はん、「噫、人

生遂に何をか求むる、たゞ吾をして人情の途を歩ましめよ、されど、されど……」然り、されど彼は人情の世界にすら不具者なることを反省し來る時、如何に胸も張りさくばかりに感ずるぞ。

凡人の傳

余は思へり。吾等の趣味を惹くもの、嘗に當に英雄、仁人、君子、烈女、節婦の傳記のみならんや。ニュートンの生時、功業、逸話のみならんや。ルーテルは如何なる生活をとりし、如何なる經驗を経たる、而して如何にして其大業を建てたる。此等の問のみが此等の趣味を惹くのみならん。此等の列傳はたゞブルタークの列傳のみならんや。

此川岸に立つ茅屋の一家族の歴史は如何。其老夫が傳記は如何。彼一個の石、これ人情の記念にあらざるか、これ都會に立つ大記念碑よりも意味深きものならざるか。少くとも多くの涙を含むものならざるか。彼の一村落は夕陽に眠れり。永久の平和！これには日本外史あらざる也。されどこゝには自然と人情と神の書かれたる記録存す。こゝには無数の人男女、

心靈の生滅ありし。こゝには紙鳶空に舞ひぬ、こゝには祭禮の旗朝風にひるがへりぬ、こゝには月親しく照り、見るともなしに見られ、こゝには朝な夕な日おだやかに昇りたり。嗚呼これ詩人の空想か。否、事實なり。

シーザルの傳を知ることとは、外部より其人物を観察するのみに非ず、吾等亦シーザル其人の内に入りて此世界をシーザル的に見ることにたり。然らば一農夫の彼を知ること亦た然らずや。吾等は智識の子なり。此農夫は山林原野の兒なり。此農夫には過去の歴史もあるなく、功名の舞臺もあるなし。吾々市民農夫の内に入りて此世界を見んことを願ふ。此農夫其者とならんことにはあらず。吾等は此農夫に温かなる同情を寄する時に、少くとも吾等が心胸に天空しく地濶き自由の感を呼び來たすぞ不思議なる。

空想

『空想を撒て絶望を刈る』とはゲーテの語なりと覺ゆ。げにも然り、人はみな、夢の如き將來を描きつゝ、今日を送るものなり。其夢は醒むる時なし、夢みくゝて一生を送るなり。夢ひと

たび醒めし時は絶望の時なり。足のもとに忽然と大穴現はれ、彼は聞きつゝこの中に墜るぞ憐れなる。これ其最後なり。かくて彼は一生を暗き陰に漂ふが如くして過ぎゆく。これはむかしより數しれぬ男女がくり返し々たる哀れの歴史なり。人の墓は、悉くこれ空想の墓にあらずや。

人は多く己れの立てしもくろみに頷くものなり。計念は多く空想なり。空想は時間が人を欺く方法なり。時間、人を欺くに非ず。神の御手にあるべき時間を、吾もの顔に横領せんとて、おのが影を逐ふ者こそ人なれ。時間は人を欺くにあらず。數千年の昔ダビデ呼びて曰はく、『吾時はすべてなんぢのみにて在り』と。かく曰ひ得るものはげに千百年に一人あるのみ。

蝶

花に狂ふ蝶の羽風のたよりに

君がこつて聞く由ぞなき

秋風戀

朝な夕な身にしみまさる秋風の

悲しき戀を今ぞ音に泣く

かりがね

鳴きつれてゆくかりがねの行方さへ

知らではかなき戀に朽ちぬる

夢

こしかたの夢に焦るゝ現世の

戀てふものは夢にぞありける

逸文篇

頭巾二つ

吾が艦隊、黄海の最北にかゝりて、第二軍の上陸を護衛しつゝある時、たまく千代田艦長内田正敏君の夫人より一個の荷物、良人のもとに到着したり。青木と稱する艦長ボーイ、艦長室にて艦長の目前に此の荷物をとさぬ。吾傍に在りて之を見たり。防寒用の頭巾一個荷物のうちより出でぬ。已にして又た一個出でぬ。一個は夫人特に艦長ボーイに贈られたる也。艦長ボーイ年の頃は十五六、常にまめ敷艦長に仕ふ。吾れひそかに夫人の優しき心をくみて此の歌を作る。

吾が夫は
遠き波路を、
勇者どもと、
勇者どもの、
御國のためと、
ゆきゝして、
もろともに、
かしらして、
はげみます、

懐ふや遠き、

夫の身の上。

北の海

潮風を、

吹きすさぶなる、
如何にわが夫、

しのぎ給ふらむ
すきまもる

思へばいと、
都の風も

身にぞしむ。

いくさ人とは、

言ひながら、

さぞや不自由に、

いますらん。

遠きうみ山、

へだつれば、

朝な夕な

かしづきも

思ふにまかせぬ、

女子の身、

たのむは夫の

傍らに

はべると聞きし

童のみ

生くるも夫と

もろともに、

死するも同じ、

波のそこ、

哀れの童、

なつかしや。

夫思ふ

吾れさへあるに、

童が母の、

ともに女子の、

思ふこゝろの

妻の心の、

母の心ぞ

いかならむ、

心根は、

身にしあれば、

變らめや。

深ければ

いや深き。

此の頭巾、

夫に送らん

童のためと、

同じ包みに、

其のつてに、

今一つ、

封じたり。

たまを霞の、

霞をたまの、

氷るしづきの、

夫も童も

たい安かれと

艦のうへ。

北のうみ。

そのなかに、

もろともに、

祈るなり。

(於千代田艦)

友愛

其の思なるを嫌ひて他人之に近かざるが故に
思かなる人は、決して友を得ざるなり。蓋し

非ずして、其の人自から友なるものゝ何たるを
會せざればなり。

自然は之れを愛する者に負かず。人情とても
然り。人情とは人のうちにある情なれども、
人自から之れを解することをつとむる時は、無
窮に達する神の聖なる力となりて、彼れを祝
福する者なり。人は常に肅みて吾が胸に響く
人情の幽音に耳を傾くることをつとめざる可
からざる也。

然るに友情の如きは人情の尤も高尚なる
ものゝ一なり。たゞ之れを「交際」てふ冷やかな
る文字のまゝに解しおくと、之れを深く自から
省みて其の眞消息に達せんことをつとむると
は、其の差違にたゞに愚者と賢者との區別のみ
ならんや。

一人あり、若し友愛の情を終生解し得ずし
て了はらんか、其の人は不幸此の上もなき者の
一人なり。

何故に不幸なるか。余は願ふ、人の親たるも
此の如き疑問を其の愛する子女に向て試み
んことを願ふ。若し敏捷なる子女にして「友達
なき時は淋しくして遊ぶ能はざるが故なり」と
答へんか。之れ眞理なり。これ已に人情自然
の答にぞある。之れ小兒にして始めて答へ得る

意味深き答にてある也。

友なき時に於て實際吾等は淋しきなり。小兒
の時のみ然るに非ず、一生の間友なくんば一
生の間淋びしきなり。ペーコンといへる學者
の名言に曰く、眞の友なきこそ眞の寂寞なれ、
これなくば此世は荒野に過ぎずと。

一生の間、荒野をたどる如くにして此世を
暮らす者を吾等は幸福なりと云ふ可きか。

小兒の答へは眞なり。孤獨は不幸なり、され
ど小兒の答ふる能はざる不幸あり。此時父母は
子女に向て教へざる可からず、「友情を解し得
ずして一生を了はる者、必ず其の品性に缺所
ある事を證するなり」と。之れ更に不幸の事
に非ずや。

友愛を感じずして一生を送る程の人は、己れ
自から寂寞を感じる者に非ず。若し果して寂寞
を感じんか、必ず友を求めて友ある可きなり。
已に寂寞を感じず、之れ則ち其の心痲痺を
なり、いかでか人情の深き響を聞くことを得
ん。

憐れむ可きは此の種の人なり。人の性を殺
して、獸の性を養ふたるものなり。
故に吾等は友義の重んず可きを知り、友愛の
情を感じることを務めざる可からず。以て眞

の友を得ざる可からず、以て人情を完くせざ
る可からず。

つとむるといふこと之れ主眼なり。
「一見舊知の如し」とは必ず友情發露の第一
義にあらず。此のうちには非常なる高尚の人性
を示せども、其の裏面は不健全なり、曰く可愛
さ餘りて憎き百倍」と。凡て是れ一時の情に
驅られたるに過ぎず。人情は深し、一時の感
情は其底見ゆる也。

吾等はつとめて友愛の情を耕さざる可から
ず、培はざる可からず。故に忍びもせざる可か
らず。其のうち已に友愛あるなり、人情ある
也。

愚かなる者は友を得ず、友情を耕やすことを
知らざればなり。我儘なる者は友を得ず、友情
を培ふことをつとめざればなり
知らしめよ、つとめしめよ。余が子女を有す
る世の親たるものに向て、注意を促がすことは
是なり。

吾が海軍水兵の歌

左に掲ぐるは、吾が國海軍の水兵等が好んで
歌ふ離別の悲歌なり。

今度此のたび
遠くへだて、

國のために
西にゆく

國の爲なら
主としばらく

是非もない
袖わかかつ

主も其身を
又たの逢瀬を

大切に
待つ計り

黒き煙を
波をけたて、

あとにして
出てゆく

空にそびゆる
消えてあとなき

富士の山も
千里海

四面の眺めも
羅針盤一つを

絶えはて、
たよりゆく

此の歌をたゞ此のまゝに素讀せんか、何の面白なきに似たれども、これをかのロンゲサインの調に高唱し來る時は、壯士腸を斷つと思をなす。

ロンゲサインとは英國水兵が古來より愛唱する離れの歌なり。其の調實に悲壯を極む。吾國海軍の樂隊も亦た此の調を用ひて離別の際之れを奏す。則ち右の歌は此の調に合はして作りたるものなり。

去年七月の下旬、我國の艦隊愈々勢揃ひして黃海向て乗出すの際、佐世保軍港に響き渡りたる樂は、進軍の調及び、此のロンゲサインな

りしなり。

大山第二軍々司令が威海衛攻撃の大任を帯びて廣島を出立したる時、宇品港に響き渡りたるは又た此のロンゲサインなりき。

多年の苦學こゝに日出度く終はり、愈々江田島を出で、待ちに待ちたる遠洋航海の途に上ぼらんとする彼の年少有爲の上官候補生が、今更ら大洋を望んで斷腸の思をなすもの、又た此のロンゲサインなり。止まる益荒男、行く武夫、共に手をもて相抱きて叫ぶも亦た此のロンゲサインなり。

而して之れ各國の海軍々人皆な然るなり。彼の歌の文句少しく野卑なるが如く思はるれども、若し此の調を以て歌ふ時は、海上生活の兩面を詠じ得て悲壯此の上もなし。「悲壯一則ち海上生活の眞面目なり。一方懷郷の哀情悲しく、一方萬里の波濤を開拓するの壯心動く。若し夫れ、

空にそびゆる 富士の山も
消えてあとなき 千里海
と歌ふ時は、水天甲板に立ちて、嗚呼終に富岳見えずなりぬ。懐かしき富岳いざ去らば」と叫ぶの時なり。
更らに進んで

四面の眺めも たえはて、
羅針盤一つを たよりゆく

と歌ふに至りては、悲壯の極、調子沈みに又た上り哀情激して希望生ず、漫々たる大海に眼にさへざるもろなし、いざ然ば羅針盤一つをたよりとして千里萬里波の隈ざりに走らんかなど海人得意の絶頂。

此の頃小學校生徒が歌ふ唱歌のうちに
富士のすそ野に 降る雪は
孝子ふたりの 袖ぬらす
、、、

といふがあり。ロンゲサインの調は此の歌の調と同じ譜なるが如し。

想出るまゝ

五個月の間、艦隊に従軍中、見聞の事まことに多き其の中に、必ずしも新聞紙に報道する程の日ざましき事のみならずして、つまらなき事の中、却て面白味ある話も多かり。いま想ひ出すまゝに其一二を書き並べ見んと欲す。

(一) 誕生日

今日は某少尉の誕生日なれば來れとのボーイ

の傳言ありければ、何事のあるやと士官次室に至り見るに、時は十時に近かければ、已に午食に間もあらず、卓子の上には様々の馳走山をなし、ほや／＼と煙たつは長崎より新に雇ひたるコック御自慢の菓子なり。其菓子の名は知らねども、煙たつ有様、卵色の材料に濃き牛乳のどろ／＼したるを流しかけたる、一日に喉の鳴る心地す。其の外の馳走は一々あげがたし、蜜柑もあり、パインアップルの確詰もあり。

さて座定まるや、先づ食卓長の士官起立して杯を擧ぐ、之れにならひて他の人々皆な杯を擧ぐ、食卓長をのみを含みて、

「今日は某士官の誕生日で御座ります、由て聊か祝意を表するため此宴を開きました。御見かけの通り何の御馳走も有ませんが(ノ／＼)、御遠慮なく十分平らげて戴きたう御座います。」

と更らに一段聲をあげ杯を高くさゝげ、

「某少尉の武運長久を祈る！」

一同之れに和して聲高く、

「某少尉萬歳！」

其のあとは所謂御遠慮なく平らぐる一段にて別に珍らしき事なけれど、鮪の刺身の木片の如く氷りたる、大根おろしの水分の雪となりて口に入るればさく／＼する、皆をか。大鯛の

丸煮は食卓長萬歳と叫ばしめたり。煙たつ菓子も忽ち盡くれば、あとは雑談半日、艦内磨日なし。

(二) 死の蔭

或夜ことの外さむく、風さへ起りて何となく物淋びしければ士官室の諸士みな早やく私室に退き、常には似ず其夜は、十時ごろ已に人氣なく、余ひとり椅子に身を投げて、暖爐の前に茫然と坐し、色々のこと思ひ續けて夜のさらに更くるをも知らず。

ふと心づき衣兜より一通の書狀とり出して、讀みて次の如に至る。

僕に斯病に罹り斯境に處る醜狀以て思ふも何の益かあらん紛々たる世事僕に於て固より顧みざる處今や生死遂に撰ぶなきを悟りぬ此故に僕皮下注射の療治ありながら之を施すの資なき悲運を悲しまず同窓の諸子連りに

氣微を吐くをも羨まず静かに心を行雲流水に任して農翁翁童を友とし悠に病軀を養はんとす一朝假令死の命に接するも何をか憾みん。」

これ余が友、伴武雄の書狀なり。氏は余よりも一年若く、前途望み多き青年なりしが、東部留學中肺を病みて故郷に歸り、一人の母の膝下

に保養する身となりつ。余はその遂に助かるまじきを豫期し、軍艦よりも屢々書を送りて言葉の及ぶ丈け慰めたり。氏も亦た病をつとめて其病狀を報じ且つ余が遠征を問ひぬ。此句は其一つの中に在り。

讀みて此句に至りし時、余が兩の頬に冷やかなる涙のつたふるを禁ず能はざりき。火消えなんとす。室内の空氣次第に冷ゆくを覺えぬ。あゝ余も年若し、前途の夢を歌ふ仲間なり。前途、前途！之れを遂ふことの慕なしとは知りつ、年少氣銳のわれ等が夢は竟に此外に出でず。されど哀れの青年！彼れは心ならずも此句を吐くに至りぬ。これ彼れが病のため肉より吐く血に比して更らに無慘なる、心より吐く失望の鮮血に非ずや。

火は愈々消えんとす、寒氣益々加はるを覺えぬ。則ち石炭のかたまり五六個取りくべつ、火の燃え上るを待ちて背を火に向け、椅子に馬乗ります。思は何時しか郷里の空に飛び、友の蒼ざめたる顔、それよりも更らに蒼き母の顔、目前に浮び来る。八個の蠟燈、今は僅かに其三個を餘すのみ、それすら光薄く、室の隅々暗くなりゆき、ペンキ塗りの板に赤き炎の影うつり、卓子の足、椅子の足などにもうつりて物すごし。

煖爐のうちより甲板をわたる風の音きこゆ。

余は武雄君を見舞はんとて其它を訪ひし去年

の夏のことを想ひ起しぬ。母は余が來訪を喜

び、秋の餅の馳走すべしとて、臺所の方に忙

しき時、余と武雄君とは、客間の縁先に坐して

田舎生活のことなど語る。庭に柿の大木あり、

葉いやが上に茂りて、庭一面に黒き影涼しく、

葉のすきまより日光もれて黄金の如くに散り、

垣根に葉鶏頭の眞紅に染りたるが風にゆらぐも

あり、余が眼底には此等のもの鮮やかに描かれ

つ。何心なく武雄君の顔を見れば、其の蒼きこ

と已に此世の人に非ず、あゝ今此の如く余と相

對して語る此の人、實に此の人、血あり肉あり、

情あり涙あり、物いふ此の人、遠からずして一

片の土と化することよと思ひし一刹那の寒心、

再び今の事の如く想ひ起しつ。更らに其母の、

絶望のうち僅かに親の愛に希望を夢むる其の愛

苦の顔、ありくと瞑想のうちに浮びつ。余は

ケビン番兵が突然扉をひらき、内をのぞきし物

音に驚くまではわが身軍艦に乗りこみ遠く大

連灣に在ることを忘れ居たり。

くべし石炭も燃え盡きぬ。蠟燈はたゞ一個を

餘すのみ。飲まんに湯なく、語るに人なく、眠

らんと思へど心たゞ冴えゆくのみ。室を出で

て甲板に登りぬ。

余は今まで煖爐の前に在りたれば外套を着

ず、忽ち外氣にふれたれば全身一時に氷るか

と覺えたり。兩腕に力を入れて振ること數十

度、強て首をあげ、濶歩して階を登り、一段高

きプープデキの上に出でぬ。後部旋回砲の

傍に立つ黒き影は哨兵にぞある。

仰げば冬の夜の星みつ空深く澄み、北に滿洲

の大荒に垂れ、東に郷國の天に接す。風やゝ

落ちたれど猶ほ橋、端艇、煙筒、綱などを打

つ音ものすごく、警戒嚴に、燈火一點もれず、數

十の巨艦何處にある。間近きもの兩三艘星光

にすかして朦ろに見ゆれど、たゞ見る、眠るが

如く、待つ處あるが如く、息を凝すが如く、又

た永久に休むが如し。

氷りしデッキの上を強く踏む靴の音、コツコ

ツと聞ゆ、これ哨兵歩を移すなり。艦橋の方に

當り此音規則正しくきこゆ。これ當直士官が

寒を凌ぐ唯一の手段とて、艦橋の上を右舷より

左舷に、左舷より右舷に、四五間計りの處を、

數百度となく、往復する、靴の音なり。

余艦橋の下に至りし時、上より誰れぞやと問

ひぬ。余なりと答へて、階子を足早やに登りぬ。

君なるか、まだ眠らずして何をかなすといふは

余が最も親しく語らふ某少尉の聲なり。

余「今夜の寒き事よ。」

少尉「非常に寒し。氷點以下十度なり。」

余は少尉と並びて歩をそろへ、例の往復を始

めたり。

少尉「君の相變らず夜ふかしすることよ。」

余「妄想は持前なり。朝寝は特權なり。」

少尉「その特權こそ羨ましかれ。」

余「妄想も亦御互若きものの特權に非ずや。

當直して獨り此の如く、夜更けて二時間も四時

間も同じ處を動物園の虎の如くに歩まば、君と

ても妄想に耽ることならん。」

少尉「其の妄想の御陰にて氷點以下の寒氣

も多少忘れらるゝを想へば成程これは、御互の

特權なり。」

余「君の妄想は何事ぞや。若き軍人の夢こそ

聞きたけれ。」

少尉答へず。余は其の肩に手をかけて、

余「美しき妻にや。」

少尉「否、否、海軍の軍人には妻ほど無用のも

のはあらず。今日は東、明日は西、命を波の上

に託するものに妻ありて何かせん。妻は陸に、

夫は海に、數年の間相會する僅かに遇を以て

數ふるのみ。實に馬鹿たるものなり。」

余 立派に言ふもの哉、實際を見よ。士官室に來る書狀は何處よりするが尤も多きぞ。先夜の細君寫眞、進會は何事ぞ。』

少尉 『それは亦た何事ぞや。』

余 先夜の事なりき、某大尉が細君の寫眞をその私室より持ち來るや、彼方よりも此方よりも續々細君の寫眞現はれ、忽ち一種の面白き光景を呈しぬ。君とても大尉の夢に伴ふもの、美しき妻に非ずして何ぞ。』

少尉は笑ひつゝ、

少尉 『彼等は老人なり、余は少年なり。たれか老人のまねをする者ぞ。他の人は知らず、余には其妄想なし。』

余 『嘗て書生の時、江田島は君の夢なりき、已に江田島に入るや、遠洋航海、シドニー、布哇は幾度か君の夢に入りしぞ。已にこれも過ぎぬ。然らば海軍少尉の今の夢は如何。釣床に問ふべきか。』

少尉 『夜更けて獨茲に立てば、拳を握りつむることも少なからず。されど其は君の推測にまかす。』

かくて吾等は黙したるまゝ、歩をそへて往復すること二三度、余が思は忽ち又た伴武雄氏の上にかへりぬ。

余 余が友の一人に、肺病を得て死に近きつあるもつ有り。余は今まで士官室にて其人の上を思ひ居たり。』

少尉 『それは氣の毒なり、されど吾等とても死には縁の遠き方に非ず、敵若し警覺たに在らば、水雷艇十、西口角を掠めて侵入し來り、不意に吾れを襲はば、味方の運命如何がある可き魚形水雷一個、飛び來りて此千代田の中央に中りたりとせよ、死は吾等に縁遠きとも言ひ難し。』

と笑ひぬ。余は足を止め、

余 『よし、然らば其の見張を君に御頼み申す、成るべくは縁遠き方に頼み度し。さらば！ 余は之れより眠らん。』

と言ひ捨て、いそがしく階を下り、更らに一階を下りて上甲板に至り、余が寢室に歸れば室内幽闇死の蔭の如し。

武雄君は今年六月二十三日午前三時に永眠せり。彼の書狀を認めて以來四年にして遂に逝きぬ。

(三) なままり

わが海軍にては、艦内の物名を英語にて呼ぶこと自から慣習となり來りて、今日にても、多

くは洋名を呼び日本語に改めず、其のため成分拖履すべきことあり。卓子(テーブル)を英語にてカバ(cover)といふ、此の(アール)を響かして士官は適當カバールといふ。然るに水兵之れを聞き誤りてカバラといひ、掃帚の時などボーイ長が他の水兵に向て、『オイ、カバラを持って來い、早くカバラを』など怒鳴るを傍に聞く士官は又た之れに聞きなれて別に正さんとせす。

ミルク(milk)牛乳を聞き誤りてミルクと呼

び、更らに甚だしきは、某少尉の實話に、或水兵に向てギューニュー(牛乳)を持ち來れと命ぜしに、其水兵通ぜざる風なれば『早くミルクを持ち來れといひあらためしに、水兵はじめて氣の付し如く、ミルクの事に候や、ギューニュー

など云ふ英語はドーも今まで聞かざりし様なりしがサテはミルクに候か』と走り行きたりとぞ。

又た、或水兵見物人を案内し乍ら、プロテクチーブデッキ(protoective deck 防禦甲板)の處に至り、いとも鹿爪らしく、『これこそはプロテクチクデッキと申すものなり』と口早やにごまかしたりとなん。

余が士官室に在りて士官諸氏と雑談して在

りし時、兵曹の一人、入り来りて副長に向ひ
恭しく、言ふを聞けば、「只今メートルに御願
申せし處」云々。甲板士官の事を英語にて
メートル(Meter)と稱す。之れを聞き誤りて米突
と同音に用ひしこと、兵曹が去り後、士官諸
氏の笑となり、メートルと信じて平然たる處
愛らしと評し合ひぬ。
其他これに類したるなまり一々數へ難しと
ぞ。

(四) 頓首三度

大連灣に碇泊中、或日所用ありて艦長室に入
りけるに、此れは又た何事ぞ、二人の支那人、
敷物の上にあぐらをかき、前に小札を置いて其
上には食用ビスケット及び白砂糖置かれたり。
余が入り来るを見て、之れへよがしにビスケッ
トの上に砂糖を載せ満面如何にも喜れし氣なる
様子たて、ぱり／＼とかじる有様、余はたゞ呆
るゝのみ。艦長は傍の椅子に腰打かけて
二人が馬の如く食ふ様を、笑ひつゝ眺め居たり。
一人の支那人は四十前後と思はれ、他の一人は
少しく若かきが如く、兩人共體骨突出して
體格偉大、粗末なる縮入れ着たるを見れば大連
灣沿岸の農夫なるべしとは一見して見分け易か

り余艦長に問うて曰く、彼等は何者にやと、
艦長答へて言けるには、昨日日本艦のゼハヤ(小
蒸溜の一種)にて鴨打ちに出かけし處、水兵の
不注意より、とある淺瀬に乗せ上げ、其のうち
に潮退き愈々困難を極め、余は遂に上陸して
支那人を探しジャンクにて本艦まで送らしめん
と決心し、漸くの事の上陸はしたれど日已に暮
れて時もや、立ち、四圍暗黒にして不知案内の
地殆んど窮し、僅かに一軒の家を見出しければ
手眞似にて意を通じたるに其家の翁、快く承
諾して直ちに此二人を周旋せり。此二人はジャ
ンクを用意し、二哩計りの海上を此寒氣に何
の苦もなく送り呉れたるなり。今其の好意に酬
いんため、聊かビスケットの御馳走を致す處な
りと。

支那人は艦長が以上の事實を余に語る様を
傍より猜して自分等が譽められ居ることを早
やくも見て取り、ウン／＼と余の顔を見て言ふ
其の意味は、實に然り／＼と自慢するものゝ如
し。

吾等が僅かに一個を食ひ得る程のビスケッ
ト、二人は各三個計り忽ちに食し了はりて
平然と立ち去りぬ。
其後數日艦長は鴨打ちかた／＼先日の支那

人に禮のため出かけんと思ふが同道せずやとの
事に、余は上陸ならば何時にても好むところ。
小蒸溜にて諸共に曩に艦長がゼハヤを乗せ上
げたる沿岸の方を指して出發したり。行く先
きは黃山砲臺の西一哩計りの淋びしき村落な
りける。

遠淺にして小蒸溜さへ着け難きを、岸邊に
蟻漁り居たる支那人の小舟を呼び寄せて之れに
乗移り、漸くにして磯岩に靴を着るを得たり。
艦長いふ、先達は暗夜茲に上陸したるなり、其
困難を推察せよと。

潮引き去りたるあとの、泥砂藻草の上を靴
爪立て、歩み、兎も角もして村の端に達しぬ。
さて如何に探せども、先夜艦長が入りたる家ら
しきもの見當らず。これなるべしと其門の形に
て推測し、艦長はじめ、其他同伴の面々、水兵
に至るまで七八人、どや／＼と入り込みぬ。家
のものは食事の最中なりしと見え、室の中央に
飯櫃の蓋ありて其上に茶碗を載せ、茶碗の中に
は粟と玉蜀黍と混ぜたる如き飯あり。傍の皿
には大連灣の名物、大口魚の煮たるが盛られた
り。家の者等は俄かに多人、押しかけたため
非常に驚き、悉く外に逃げ出たり。主人
の翁を見て艦長はこれなり、此人なりと叫び

ぬ。余いふ、否、此老人は先日軍艦に來りたるものと異なる。艦長の曰く、否、否、此翁が先達の兩人を世話し呉れたるなり。余は此翁に禮せんとて來りたるなりと、余は始めて其事情を知るを得たり。

されど翁は艦長を見知らず、艦長が與へんとて差出すビスケット及び砂糖の罐を押し返して何事か頻りに喋き、頓首して詫入ものゝ如し。吾等見て請遜辭退するものとなし、顔をしらげ、日本語にて遠慮には及ばぬ、これは先夜の御禮だから取て置けと言へど、勿論日本語の通すべき様なく、彼は益々頓首して大閉口の體なり。余いふ、思ふに此翁早やくも艦長を忘れ、吾等を以て、微發に來りしものと認め、此品の如きものを與へよと命ずるなりと誤解したるに非ざる乎。艦長或は然らんと此度は更らに語を和らげ、いや、これは御前にやるのだよ、といへど通ぜず、通ぜずとは知りつゝも此の如き場合には屢々日本語を用ひたり。これ餘りのもどかしさに自然と發するなり。

困じ果てし時一人の若者の字を解するものを連れ來り、漢字にて、來意を書ししたるに、若者は直ちに其旨を翁に告げぬ。翁の此時の驚き如何。艦長の顔は今更らの如くに眺め、奇聲

を發して叫び、歡喜の色を満面に表し、艦長の差出す罐を受取りて披露き、大地にひれ伏して頓首すること先きの頓首に倍す。

吾等去らんとする時翁をはじめ一家の者悉く門に送りぬ。門を出づる時、艦長ポケットより蜜柑一個取り出して、翁の傍に立つ十歳計りの愛らしき小兒に與へしを、小兒は恥かし氣に受取り、家のものは一同聲をあげて謝し、翁の手小兒の頭上に置かれしと思ふや、小兒は大地に坐し、頭を土につけ、頓首すること三度、これ支那人の家庭教育なり。

(五) 二月七日の朝

夜は明けんとす！ 戦は始まらんとす！と扉敲きて起こさるゝに岸破とはね起き、手早やく衣着更る時の心地！ 何時までか忘らる可き。甲板に躍り出づれば、夜は明けんとす！ 成程夜は明けんとす！ 東の空を見よ。彼のしのゝめを見よ。曉星を見よ。嗚呼麗はしき曉天！

曉霧に眠る劉公島！ 朦朧として水平線上に浮ぶ劉公島！ そよ／＼と吹き送る朝風！ 肉も骨も緊る。眞先きに進む、旗艦 松島は朝の衣を着、殿艦「浪速」は未だ夜の幕のうちに

在り。見よ！ 戦艦、艦長の橋上にてありぬ！

過文同篇のうち、「頭つ二」は「家庭雑誌」第四十二號に、「大愛」は同誌第五十四號に、「吾が大兵の歌」は同誌第五十五號に、「理想するまゝ」は同誌第六十號附録に掲載されたものである。

日記、書翰篇

日記

明治廿四年二月

沈黙一 剛毅二 勤勉三 力行四 活智五 電眼六

明治二十四年一月一日、午前外出せず。

午後國元及び諸友より送り越したる舊書を驗し之れを分類す。夜、佐藤毅氏を訪ふ、快談數時、夜深して風生ぜしを以て氏の宅に一宿。天氣快晴なりし。

金三日 午前佐藤氏の宅より氏を伴うて歸宅す。午後三上に行く。夜引頭氏(百太)と共に寄席(岩園亭)に至る。快晴。

土曜三日 午前水谷眞熊君と共に川上信元氏を本郷に訪ふ。氏の宅にて高飯を馳走になり、三人共に上野可然氏の病狀をたづぬ。歸路水谷氏と別れ麴町の田村氏を訪ふ、不在、直に大久保氏を訪ふ、不在。今井氏に到る、談話數時、共に九段靖國社内道を散歩す。午後五時頃歸宅す。富田氏をれるあり。

日曜四日 午前教會に行く、愛洗す。歸りがけ大久保氏に至る。午後五時頃歸宅す。三上信之氏あり。夜川上氏長谷部繁三郎氏水谷氏と談話を聞く、川上氏とまる。

月曜五日 午前川上氏水谷氏と共に川上氏に到る。會する者七名、かるたを遊ぶ。午後五時過ぎ歸宅す。夜菊地虎太郎氏來り、かるたを遊び源氏あはせを弄す。

火六日 午前在宅、國民之友新年附録等を読みて半日を暮す。午後福田英語學校内にて開きたる文壇社講話會に出席す。井上通泰氏の講話あり、本邦和歌之 development に付て長々とやられたり。夜は談話を以て終りたり。晴。

水七日 午前在宅、午後同じ。作文す(二十三夜)。夜祈禱會に出席す。歸りがけ大久保余所五郎氏を訪ふ。晴。

木八日 午前午後夜悉在宅。作文す。夜は圖書文稿を繕く。

金九日 午前圖書文稿を読む。午後太田雪松君

水谷君と共に引頭氏に至り留守なりしかば共に太田氏に至る。夜圖書文稿及好色五人女を読む。早く床に就く。

土曜十日 午前大久保余所五郎小野厚太郎氏來る。午後津田徳富君藤田雨氏又來る。種々の遊戯を以て日を暮す。夜早臥す。

日曜十一日 午前教會に至る。午後文壇社之集會に出席す。夜矢來町教會に聖教學校青年會祈禱會を開く。歸りがけ梶原保人氏に至り、歌がるたを爲す。

明治廿四年二月

水十一日 紀元節 天氣清朗、又二十二年の憲法發布日の如くならず。午前、永野氏一寸來る。作文を試みる、成らず。午後、横田氏來る。談話數時、梶原保人氏來會、余は獨り小野房六氏に至る。水口氏あり、大久保氏已に

あらず。永野氏來る。蓋し永野氏は青年會大演說會の辯士金森押川の雨氏を訪ひ、之れを乞ひしも雨氏不在。夕方頃、横田氏又來る。蓋し徳富氏に至らんが爲なり。水谷氏と共に出づ。余は今夜別に急急の事務ありしを以て行かず。夜、早利田評論論説を書く。成る。經濟原稿を読む。安田横田氏は元と同志

社の人なり、此の目より同心社一事を聞く。

木十二日 午前、課業はありたれども、年會大... 此の目より同心社一事を聞く。

金十三日 午前、登校、改革案に付き邦政三年生... 委員は横田大久保小野三名選挙せらる。

土十四日 午前、演原論を讀む。登校す。午後... 源氏の講阿落合先生來らず。

第一教場に、政治政治會を開きしを以て出

應せるなり。未會者少きを以て二三人の演... 三年、演説會に當るの事とな

日十五日 樋口左文氏來る可しと待つ。新聞... 誌を讀む。終に來らず。

月十六日 午前、昨日芳賀守之助君より借り來... 演説あり。金森氏の演題は「質か質か」。

火十七日 風邪、おそく起く。午前、小説を讀... 午後、登校す。夜スケッチブック及びマ

クベスを讀む。應じて會に就く。
水十八日 午前、登校、十日より大久保氏と共に... 學校より直に小野氏と會は、其の會にて

木十九日 午前、登校、午後、演原論を讀む。小... 野房氏、野村大氏來る。水谷君、今宵より

金二十日 午前、登校、演原論を讀む。午後、... 行に一決す。午後、吉田文吉氏と共に家永、師

氏に會りたれども、留守なりしを以て、作らて... 氏に會りたれども、留守なりしを以て、作らて

内を散がして、直ちに伴うて神田邊をぶらつく。來る二十二日午前より井伊直弼の墓及び吉田松陰の墓を訪ふに決す。蓋し好時期に乗じて遊遊を試みんと決するなり。月を踏んで歸宅す。

土曜二十一日 午前吉田友吉氏と共に坪内雄藏君を訪ひ、ストライキを執行せし由を告げて歸る。歸りがけ氏と共に郊外を散歩す。此の日天氣晴朗、途に寄宿舎に立寄り、横田氏に明日遊歩を試みん事を約し、佐藤毅氏を訪ひ歸宅す。夜番町教會に青年會の演説會を開きしに望む。家永豊吉君のチュルゴと題する演説あり。演説風は規則的器械にして一口以て評すれば演説で御座ると云ひたくなりさうなり。次に徳猪一郎君の演説あり。歴史上の評論なり。氏は一種まはらぬ様な辯で、而も巧に談ず(演説すとは云ひ難し)、滑稽三分議論四分事實三分位の取合せ、先づ、無難の演説ならん。聞く者の多くは拍手し喜笑すれども、凡て此れ凡骨輩のみ。直に氏が議論を味ひ得しものは中二三と放言して可なり。教會中澤水木君に遇ふ。演説終りし後中桐太一郎君と共に大久保氏を訪ひ、夜十一時前歸宅。

日曜二十二日 午前、此日天氣晴朗氣候春暖風無く起らず、前日來約束し置きたる遊遊には實に好期日なりし。此の日の同行者は凡て八人、大久保氏中桐氏相原氏吉田氏横田氏津田氏飯橋氏と余。家徳守なる遠城謙道僧を訪ひ、松陰神社にまうづ。歸りがけ井伊家の別荘に立寄り園中を見る。銀世界十二社等に立寄る。日暮る、月雲間に在り(午後は少曇る)。歸宅し見れば深水未氏あり、余を待つ。此の日の紀行は別に認む。

月曜二十三日 午前在宅、午後引頸氏を訪ひ、齋宮に立寄る。夜、徳猪一郎君を訪ふ。同行者は水谷津田の兩氏なり。歸途、余と水谷は津田氏と別れ、田より深水未氏に到る。氏が宅に一宿す。

火二十四日 午前深水氏の宅に在り。午後、歸路につく。東京府勸行場を一覽す。夜未兼八百吉氏を訪ふ。

水二十五日 午前遠行之紀行文を作る。午後、遊ぶ。小野房太君を訪ふ。夜作文す。

木二十六日 午後齋室文稿三卷讀み終る。午後大久保氏來る。共に小野氏に至る。三時去て大久保氏と共に我が宅に至る。身上の事に付て色々談ずる所あり。大久保氏より僕に

對して大に忠告する所ありたり。松平慶永氏の編造せられし遊事史補を借用し歸る。夜、此の書半讀む。

金二十七日 午前遊事史補讀み終る。午後紀行文を校正改訂す。爲替來りしを以て受取りに行き、夕、國民の友舊號を高讀す。夜、一口劍を作り、書す。

土二十八日 午前午後春記を清書す。夕方寄宿舎に至り横田氏より新高書一の寫眞を送らる。

明治廿四年六月

大曜二十五日 午前近代史を讀む。午後新聞を讀む。經濟雜誌を屋後の松林に携へ行き、緑蔭の下之を讀む。夜、香川、朝枝、大島の三氏に與ふ可き書狀を認む。此日朝早く高叫山に登る、雲霞漠々、滿野茫茫、山岳皆浮島の如し、仰げば天日赫々、光景極めて雄奇。

土曜二十七日 美日、午前近代史を讀む。午後、國民之友第百二十二號、史海第二卷、國民新聞來り、之れを讀む。富崎普一氏より立寄る可き行を申し來らる。

日曜二十八日 五日、午前屋後の松丘に登り、讚美歌を唱へ、彈を採したれども兒童ら

ず。蓋し近時往々吾前に出没すればなり。終日外出せず。何となれば爾其に用事あり切井津に行き留守番をしたればなり。

月曜二十九日 午前平屋村に出で水ノ氏に還金す。蓋し宮崎晋一氏省歸之節立寄らるゝ川なれば其の便にマコーレー英國史等を持って歸てもらひ度く、其の買求めの儀を水ノ氏に託したるを以てなり。午 爾來る、寂寞たる書窓の下、パイロンを編きマンフレッドを唱す。

此日晝食の後、細雨油の如き中を突て小丘に登り、四方寂然たる中に立ち涙天父を祈る。蓋し近時信何非常に冷やかになり、全心殆んど汚れ腐れたる折柄、一事あり、鬱然として大悟せしめられたればなり。夜は弟收治に鬼界島でふ詩を讀み聞かす。

火曜三十日 午前より降雨澆々。此日收治試験後の休日なるを以て校に登らず。爲めに吾亦遊戯談話のみ。爲す事なくして空費す。

明治廿六年二月

△明治二十六年の一月も飛ぶが如くに去れり。回顧して思ふに、果して悲しむ可き乎。吾の決して喜ぶ能はざるは明らか也。然れども果して悲しむ可き乎。吾れは悲しみたり、

何となれば事多くは心と毒がたれば也。然れども亦此の一ヶ月の吾に教ふる所決して少なからざりしを思へば、慰むる所なきにしもあらず。

△二月三日は吾に取りて極めて大なる誌話なりしを記し置かん。早朝吾は宿を立ち出でたり。其は轉宿の意切なりしかば、麴町區に其の嗜好の宿所を捜せん爲めなり。吾は成る可く下等の宿所を欲したり。何となれば切りに自ら思へらく、故郷の父母吾の爲めに其の酒を節し、其の費を縮めて吾に送るに當り、吾其の旅宿を撰んで卑汚賤食に甘する能はざるは、心術の卑汚薄弱なるを感じたる其の一なり。又た自ら思ふ、吾は終に世に好遇せらるゝの人に非ず、而も奮て理想の事業に當らんと欲せば貧賤に安じ水火を避けざるの決心なかる可からざるを信じ、之れが決心を固うするには平生の用意修養の大切なるを知りたればなり、之れ其の二。又た自から計るに、少しにても儉約を積んで多少の餘裕を造り教會に對する義務を全らし、必要の書籍を購讀せんと欲したればなり、之れ其の三。求めて其の家を得ざりき。而て吾は意を離れて離居の期を延すに決心したり。其は

一は自由社入社一代の成否定まりて成にする方の利を思ふ、一は青年文學二十五年の編輯を繼りて後にすべきは、青年文學に對する事務上の義務なりと信じたればなり。遂に之を以て今井兄を訪ひ、數分の談話を試みたり。丁吉治氏の宅に立ち寄る。誌話は來なり。丁氏吾に自由社長金森倫倫氏の意を述す。金森の意は其の黨の爲めに盡すよりすれば應に然る可き思付きなりしなり。

曰く自由黨に新聞事業の發達し居らぬは極めて不用意千萬なるをもて、行く／＼は大に之れが擴張に盡さんと欲す。曰く、かるが故に新に入社せんと欲する者は、決して一時のやりくりたるを許さず、已に入社したる以上は此末全く身を新聞事業に投じ、又た自由黨の爲めに盡すの覚悟なかる可からず。故に丁氏は吾に問ふに、果して此條件を以てするも入社を望む乎。と、斷乎たる決心を促ながしぬ。

社を望む乎。と、斷乎たる決心を促ながしぬ。兎も角も決心せり。「以て入社す可し」と、何に故に。

吾は吾に問ふ。第一、爾は職業を新聞事業と定むるの決心ある乎。と、吾は色々に苦心せり、様々に考へたり。「職業」「職業」此の文字は今更らる如く其

の解釋を吾に求めたり。然れども終に吾が最初の信仰(最初の信仰とは平生の信仰の意なり)は最後の答なりき。人間は職業の如何に由て其の眞價値を定むる者に非ず、北海の漁夫を見ずや、山間の樵夫を見ずや、神の眼は平等至公なり」と、之れ第一思想なり。而して、吾が教育、吾が境遇、吾が技倆、吾が志望(の幾分)は吾が新聞事業を否とするの理由を與へざりし也。吾は今更らる如く、決心せり。「吾は新聞記者の職につくを適當なりと信ず」と。

吾は已に此の否を得たり、他は元より易々たりし也。自由黨の爲めに盡す決心ある乎てふ第一の問は鐵斧の青竹を破るが如くに痛切に明確に、即座に決答せられぬ。曰く「自由黨が其の天職を忘れざる以上は、自由黨が其の精神を殺らざる以上は、吾は元より心血を盡し、熱涙を傾けて其の隆盛の爲めに盡す處ある可し」と。人間感情の變轉も不思議なる者なる哉。かく決心し、かく確信し來るや、吾の思想は急激揚して百尺竿頭更一に一步を進むるの看ありき。自ら思へり、眉を揚げ、膽を張て思へり、自由黨の天職は吾が國政の大革新に在り、自由黨の精神

は自由平等に在り。已に然り、之れ自由黨なり。若し或は自由黨にして此の天職を怠り、此の精神を失はん乎、之れ黨員の腐敗のみ、黨員の墮落のみ、吾は寧ろ其黨員を改む可し。其の黨員を責む可し。之れ自由黨の精神を活かして其の肉を破くなり。又た、丈夫腕を振ふに足るの事業にあらずとせんやと、ア、急々化々、想像は想像を迫ひ、空想は空想を生めり。心靈聲あり、停止せよと。暗愁は襲來せり、妄想は破れぬ。勇ましき決心は何時の間にや、重荷の如く吾が心靈を壓せり。厭せられ乍らも又た其の決心を齧る能はず。只だ前愁は慘澹の色を帯びて吾を朦朧たる不安の室に導きぬ。此夜深矣、將に、三時に垂んたる時、孤燈の下に紙をのべて書て曰く、

「幽に悲みて、強く樂しみ、固く行ひ、休まず勉め、徐かに急ぎ以て天命を終らんか。靈の人なり、義の人なり、而して成効の人なり、明日を計る可からず。吾は生く可き乎、須からく永久に生く可し。」

明朝は早々、丁吉治氏を訪ふ可し、決心を語る可しとて、鶏鳴の曉近きを候する時、孤枕を抱て寒夢に入りぬ。ア、謎語果して解

かれたる乎、吾之れを知らず、乞ふ一年の後を見よ、十年の後を見よ、百年の後を見よ。ア、後悔を以て解かる可き乎、血涙を以て解かるべきか、安心を以て解かるべき乎、神は知るも吾は知ること能はず、然れども吾は信ず、神は自から解く者の爲めに解き、自ら助くる者の爲めに助くるを。

四日、土曜日

夜祈禱會に出席す。此の夜は

吾も祈禱する所あらんとて出席したり。植村正久氏の感話あり、重に共勵會の事なり。此頃教會奮興の氣運少しく起り、殊に植村氏は大に熱する所あるが如し。吾も亦私かに教會に盡すあらんと決心して一月三十日の夜は植村、多田素の兩氏を訪ひ、色々と感ずる所を陳述し、意見のある所を尋ねたり。吾が教會に對する唯一の希望は乃ち教會員の懇情を盛にするに在り。吾は眞爲めに教會の分治法を編出し植村、多田兩氏にもたゞしたり、兩氏とも賛成なり、只だ其の實行の如何を危ぶめり。さて植村氏の感話は終り、多田氏は續て云ふ、諸君將に教會奮興の事に付て、感ずる所あらば今夜の如き、懇談すべきの好期ゆゑ、敢て隔てなく語り出されよ、と。二三の人々は語り、或人は前

り、而して吾は一語を漏す能はず、一句を祈る能はずして了はれり。吾は大に反省する所ありたり。吾の性情特異を更むるなくんば、吾は遂に自ら企てたる事の實行者たる能はざることを深く感したり。吾は今日より此の點に付ては大に修練磨する所なる可からずと信じぬ。

吾は將に自ら計畫企圖する以上は、之れを實行するに十分の勇氣と自信と用意と、誠意と熱心の缺く可からざるを知りたり。

若し然かする能はずんば吾は終に自ら熱するも人を温むる能はず、自ら企て、自ら實行する能はざる不成功無責任の人として終る可きを懼れたり。

五日、日曜日 午後、委員會に傍聴す。委員會に向て言はんと欲する事を考へ行き乍ら、機を得る能はずして言はず止みぬ。機を得ざるに非ず。自ら直截ならず、勇氣に乏く、機を捉ふる能ざりしなり。

▽教會の運動は歩武を離かにし、漸を以てすべしと決心せり。之れ精密なる用意と、抜くべからざる自信とを得ん爲めなり。果して能く成功するや否や、記して後日を期せん。

六日、七日、八日、九日 四個の二十四時間は

経過せり。吾に重要な時日にてありし乎、吾之れを知らず、後日を以て悔す所の外なればなり。然りと雖も吾は一時間たりとも重要ならぬ時間を此の短命の中にも有する能はざるなり、吾は五十年に足るか足らぬ乎の月日を此の茫たる宇宙、此の濶たる社會に宿す、其の理想に由て事を成さんと欲す、決して一時たりとも無意味に費す能はざる筈也。思ふに此の四日間、吾には必ずや意味なかる可からず。

國木田哲夫と稱する一個の青年は、日本國と稱する國に、天の下に地の上に、明治二十六年二月六日、七日、八日、九日を如何に費せしか。渠の生命は夢なりしか、四日間の生命は何を意味するか、渠は如何に宇宙に繋がりしか、如何に社會に繋がりし乎、如何に歴史に繋がりし乎。

▽六日の朝、渠は金森道倫氏を訪へり。自由社に入社するに就て、金森に直接の要判を試みんと欲せし也。金森は不在なりし、金森は外泊したる也、渠を知らざりし也。

▽六日、七日、八日、九日の四日間の事を記さんとて筆執りしも前章を以て止め、九日の夜は眠に入れり、今は十日の半夜なり。

▽事實の詳細なる點は必ずしも記憶せず、只だ筆にまかせて、此の一個の青年が過ぐる五日間に於ける事實の大體、思想の概略、感情の變、いさゝか左に出し置かぬ。

明日を以て愈々轉居するに決心せり、青年文學大がたつき、自由社入社も今の分にては何れの事か知れざればなり。然らば何故に急ぐか、固く思想黙の場を得んが爲めなり。

▽七日は午前外出、金森氏を訪はんとて路に丁吉氏に立寄る、丁の云ふ、已に還し、今より行くも金森氏は外出後ならん、吾由て止む。

▽八日の午後今井氏と上野公園を散策し大に談論す、自叙となり、獎勵となり、機物となる。

▽九日、早朝金森氏を麻布の宅に訪ふ、家に病人ありて取り込み中ゆゑ面會する能はずしと謝す。

▽同日、午後早々京橋印刷會社に行く、青年文學の印刷を依頼せんが爲めなり。約成りて歸る。歸宅後直ちに多田素氏を訪ふ、不在。夜、京橋印刷會社林某來り談判破れ、直ちに水谷氏と神田の東京印刷

所とか稱する印刷屋に行いて依頼す。辭絶せらる。熊田活版所に至り約成る。

△十日、午前熊田活版所來り約成る、午後京橋自由新聞社に行く、丁吉治氏及金森通倫氏に遇はんとてなり、詔勅下り新聞屋多忙、丁不在、止むを得ず帰宅す。

午後、西村もと氏に依頼して質屋に衣類を典し五圓を得、之れ明日の轉居に充る爲めなり。

△然れども之れ只だ表面に浮べる、極めて粗雑なる事實のみ。

此の五日間に一個の青年は如何なる周囲と、如何なる思想感情に取りまかれしか。

△七日は則ち議會と内閣が大衝突の結果なる十五日の休會終へて再び開會し、彈劾の上奏案を通過し、自ら休會したるの日なり。

△十日(則ち今日)は、天皇より内閣大臣及び帝國議員に詔勅の下りし日也。

政界の雲行夫れ此の如く急なり、而して吾は一本の指すら此の大歴史の上に染むる能はず、吾吾自ら歴史外に立てる心地せられたり、時は此等の大事實を只だ吾が眼前をかすめて過去に送りやりぬ、吾は黙々としてそを

見送るのみ。

△社會生活の門は吾が爲めに開くが如くしに開かず、吾を非難の戯に供せんとす。吾には理想と希望の火焔々として燃ゆる也、而も社會生活の門番は吾を弁す。吾は思へらく、吾に今少し自省の修養なき時は吾は、天を恨みざるも、人を恨めざるも、必ず社會を

憤恨せしなるべしと、何となれば渠は社會の極めて不公平、亂雜、腐敗、偽善なるを知ればなり。

△吾が上におごそかなる天の淵、深く且つ遠し。吾の過去には吾の過去住ひ、吾の未來には吾の希望住む。吾が父性は其の天地間の餘命を吾が行末の爲めに困苦す。吾の信仰理想は吾を結びて宇宙の大精神に繋ぎ、吾の生活の必要は吾の前に社會の不調、亂雜の幕を掲ぐ。我が政事上の大變亂は新聞の號外となりて、吾が机上に飛び來る。吾が書架にはニ

メルソン、カーライル、ニーゴ、書、ウオーヅウオルス、バトンス、ゲーテ、露語、王陽明、莊子、英國史、列を連れて吾を激下す。

△睡眠、筆を投じて止まん……

十一日 吾は刻町にて番町十八番地亞コト方

に轉居せり、月日は八圓五十錢、渠は六圓八十錢なり。渠は九段を何車の後に隨いて上れり。

此の夜は異常たる夜なりき、天雲濤々、風蕭々、寒氣の蔭だしき事此頃にもめづらしかりき。

十二日 不幸なる渠！渠は天地何となく震突たるを感じり、渠は如何に驚がり居るか自ら知る能はず。渠は自ら哀れむ可き青年を小説中に見出す如く、已れを此の天地の間に、此の社會の隅に見出すなり、渠は其の不快なる念を去る能はず。

然れども見よ、渠は必ず奮然たる可し、渠は神を愛す、今の人氣は渠を毒殺するに似たり。

渠は悲しき書狀を父母に送り、社會生活の荒らき風浪は、渠をして此の悲しき書狀を書かしたたり。

△渠は父に書きて……もの哀びし……吾心……ひて……し……る時、丁吉治氏來る。快談の移る……心……一掃し盡せり。

十三日 早朝金……倫氏を訪ふ、在り、入社的事

を經過し去りぬ。

* * *

今は十六日午後二時となりぬ。上野圖書館より歸り來りて今机に向つて靜かに筆を下すなり。過ぐる二日は吾に取りては重要な時間と言はざる可からず、吾が此の天地の間に來りたる誕生日と共に記憶し置くべきの日なりとす。十四日を以て吾愈々自由社に入る事に決しぬ。十六日始めて自由社に出づ。社會生活の業務、始めて吾が前に置かれたり。多くの心配は襲來せり、諸の悶着は掩來せり、雑多の事實は經驗されたり。

十四日午前早々家を出で金森通倫氏を訪ふ、不在。書生云ふ、近所に行きしなれば直ちに歸宅せんと。吾はムツとせり、又た不在か。吾は直ちに、歸宅せんとせり、然れども、一考したり、爰ぞ「社會」爰ぞ「實際」と直ちに路を轉じて徳富猪一郎氏の病を見舞ふ。

再び金森氏を訪ふ、在宅!
(吾は認め、笑ふ可し。笑ふ可し、十四日以下之れ十三日の事實なり。吾は已に忘却したるなり、十三日の記にはかゝる事を省略し居るなり。殊殺せざるべし。)

△十四日又金森氏を訪ふ、前日歸宅に際し約し置きたればなり、在宅。書生は吾を客室に導きぬ、室に入る。金は机にかゝり新聞を讀み居たり、吾をして對坐せしむ、吾も亦た机に向て坐す。黙々たり、輕くあいさつを終つて後は、互に一語を吐かず、渠は新聞を讀み續く、吾も新聞を取りて讀む。黙々たり。不快! 不快と名づく可き一種の惡感情は吾を打てり。

金森、自由新聞を吾に渡して云ふ、此の論說文を讀んで、斧正を試みよ、と。吾は「妙に感じたり、さり乍ら新聞を受取りたり。讀み下したり。二三字を加へ、二三行を抹殺せり。突如として中心、さゝやいて云ふ、吾は「文章家」に非ずと、中止せり。金森に返して曰ふ、元より斧正の限りに非ず、と。金森は吾が試みたる二三の斧正を見たり、吾は金森の決して文章を作る人に非らざるを前以て聞き居たるなり。吾は心中不可言の感ありき。兩々相對して黙して語らず、金森云ふ、新聞を見られよ、吾は儀式的に三四の新聞をひるがへしたり。投げやりたり。突如として曰く、他の新聞を見て材料を取るが如きは他の新聞に劣る所以也と、金森は應へ云ふ。元よりた

り、然れどもかゝる事はなさず、只だ能く他の新聞を見ざる時は、他の説及び世の形勢を知り難しと、吾は心中に笑をもちせり。ア、此の人亦た、共に爲すに足らざる乎、去らん去らん。吾は心中、金森に向て云ふ。君、君の助手を得んと思はゞ他に求めよ、文章の器械を得んと思はゞ吾には少しく出來かぬるなりと、吾は云ひ放たんとせり。金森は立ちて隣室に出たり、吾は決心する所ありたり。金森かへり來るや吾は直ちに渠に向て嚴然と問へり。君、「吾を用ゆる手」と渠の顔色は極めて酸味なりき。而も彼の言は云ふ、君にして入社せんとらば、以上の條件を以てせられよ、余は不同意なりと、即ち吾をして文章家たらしむるなり。談話は始まりぬ、一步より一步、感情は解かれたり、吾は新聞に對し吾が思ふ所をありのまゝに語り出でぬ。吾の文章家以外の精神、思想は渠少しく了解したりしが如し。大に打ちとけて語り始めぬ。愈々入社に決したり。共に大に「自由新聞」を新聞として發達せしめ、成長せしめんことを約しぬ。談一轉して渠の宗教談となりたり、之れ吾が何故に君は宗教界を去りて政治界に入りし

かの門を以てなまりぬ。

渠は全然、政治家風となりぬ、渠は政治的
口調を以て宗教を説き、渠は俄りに宗教
を特別視せざるなり。

基督教も佛敎も神道も、一箇同等なりと言へ
り。

自らの天職は政治界に在りと信ずと言へ
り。

政治界には單騎獨行の器悟なかる可からずと
言へり、此の時渠は意氣昂然として語りぬ。

大言に似たれども、己れ單騎獨行なる以上
は、進んでは己れ獨り天下の大政を握る位

の器悟なかる可からずと言へり。渠は野心充
満す、渠の眼中今や恐らくは星亨なく、板垣

伯なく、河野なかる可し、吾は渠の意氣を愛
すると共に、政地界未だ容易に新高先生の求

め難きを嘆じたり。

吾今にして思ふ、渠は徳の人に非ず、さり
て智の人にも非ず、渠は意氣の人なり、渠は

卒直なり、渠は自由黨的也、自由黨は人を
得たり、而して遂に人を得ず。

茶葉出でぬ。談愈面白くなれり、然かれど
も吾卒然己に返る、獨語中心、曰く「寄生
蟲！」寄生蟲たる勿れ！

凡て青年に關らず、社會生活のたゞ中
に立つ者、苟んぞ寄生蟲ならぬはなし、社
會は特在るべきを思ふ、之を食ひ去る、之
に處てこそ何時の間にか寄生蟲となり了は
る。

凡そ寄生蟲となると、全く社會と對峙し
て對する、其の間には極めて大なる天地
のあれども、世界酒々の人、十に八九は寄
生蟲となり、まれには社會を補償して反
て己を焦く者あり。

大悟徹悟、能くかの天地に逍遙する者に至
りては少なし、ア、吾果して彼の天地に逍
遙し得べき乎、未だ容易に能はざるなり、
而も猛省自諷、務め勉めて止まずんば豈に
天眞と理想とを殺し、希冀と平和とを失は
んや、天眞、理想、希冀、平和、吾れ之れ

に由つて生き、吾れ之に由つて樂しむ。

海外月報の事を語り出づ、渠大に賛成し、
色々考案を回ぐらす、兎も角も近日丁氏等と
相集りて相談するに決す。明日より出社
する事に決め歸宅したり。今井氏在り。

夜丁氏来る、「自由」の發行停止を報ず！ 何
等の不運！

十五日 朝、丁氏より来る、曰く金森より今
日自由社に出張ありたき旨告じ來りたり、十
時頃より歸宅す可しと。

十五日 午後、
歸て吾れ自由社に出張す、元より停止中故
社員の來り留る可きはなし。

今日は新聞に事實を記載せざる可し、只だ愈々
海外評論を出す事に決す、其の爲め金森は
吾に明日上野新聞社に行く可きを託す。

十六日 今朝今井氏来る、上に上野に行く。

▽社會は對峙を要す。
▽社會は己に善を拂にしたる心算す。

▽吾は昨日の仕事を勉む可し、社會事務
と雖も決して遊戯に非ず、社會の善を、
も「時間」を費すなり。

▽吾は昨日吾を嘲笑せり、然かれども嘲笑
は健全の徳に非ず、略く希冀に立つ人の爲
さざる所なるを知りたり。

▽「時」に生命なりとの感情は吾より消え
去りたり。一時は最早者に取って智慧の支
障に屬しぬ、天來のインスピレーションた
りし時に消滅し去りぬ、之を思ふ時に心算

の寒きを感じ、社會の魔力の戰慄すべき
を知り、讀書の一時も廢す可からざるを悟
るなり。

▽人生、宇宙、人類、働、義務、存亡、
自然、美、永遠の生命、是等は凡て吾が感
情より消え去りて、新聞、雜誌、應接、金
錢、...此等の者は稍々口頭の上り、多く
智慧と感情を支配する様になりぬ。

▽社會の魔力若し吾を擒にし了はるを
悟らば斷然、一卷を懐ろにして、七週日の
旅行に上る可しと考へぬ。

然かれども擒へられたる者は悟る事なし、
ア、悲しい哉。

* * *

▽吾の行爲、思想、感情は注意して研究
せざる可からず、之れ一個のツールが其の
特別なる傳記を作りつゝある者なればな
り、汝は詩人のドラマを讀むか、小説を讀
むか、傳記を讀むか、汝は汝のドラマ、
汝自身の傳記を讀まざる乎。

汝若し心を平にし、情を高くし、眼
を明らかにし、以て汝の日々の變化を研
究せば、汝は大なる讀書を爲したる也。
エマソン曰く、渠は渠れ自らの思想には、

不注意無聊着なり、何となれば渠れの思
想なればなりと。
吾は人間なり。

此の人間が過去には、過去の教育、情實、
境遇、經驗を有し、未來には未來の希望、
境遇、情實、教育を有し、一轉、一化、
一張一弛、一退一進、忽ちにして聖者と
なり、忽ちにして俗骨となる、其外部の
事實、内部の事實、如何に大なる詩ぞ！

已に吾れ自由社に入る以上は、政黨員と知ら
ざる可からず、紛々の輩と伴はざる可から
ず、吾れ人を化するか、人吾を化するか、人
は人、吾は吾乎。

三者必ず其の一たる可し、吾半ば人を化し、
人半ば吾を化す、吾死したるなり。吾の人に
全く同化せらるゝに至りては、之れ眞理の大
罪人なり、之れ理想の大罪人なり。

吾、人を化する乎、神の助けを求め、自信に由
り、エマソン、カライル、ゲーテ、ウオ
ールズウ、ルース、孔、王等の諸賢の助けに由
り、斷乎、昂乎、堂々焉、正々焉、以て彼等
を征服し盡す可きなり、討死す可きなり。
せめては、吾、吾の生命あらしめよ。

* * *
吾、事務、事業、政策の爲めに、策を立つる
應に堂々、正々たる可し。

十七日 靜に机に對して書を繕かんとす。不思
議なる哉、一種の魔力は何處よりか、侵し來
りて吾を屈するが如し。吾が心落付く能は
ず、吾が情は激昂なる能はず、曾て食を忘
れて愛讀し、涙を吞んで愛讀したる聖書も、
只だ吾が眼前に其の文字を羅列するに止ま
り、冷やかなる意義は只だ吾が心の表面をか
すりて空々の中に消去るなり。ア、之れ何故
ぞや、吾を屈する力ありとせば何者ぞや、吾
は靜に考究せり。

蓋し吾が爲す可しとして約束を重ねたる社會の
事務、吾が心に企て置ける計畫、一度び打た
れたる社會生活の魔力。

此等の者は吾が精神の上に懸りて容易に之れ
を掃ふ能はず、忘れしが如く、忘る能はざる
が如く、掃ひしが如く、掃ふ能はざるが如
く、吾を不安、不軌の境に陥れ、興奮るし
き牢獄の中に在るの思あらしむるに至る。
王陽明、詩あり、久澄三泥途、蕙世情、紫片丹
寮是平生、と。ア、社會々々、一に吾をし

て縹渺雲烟の中に迷はしむる哉。

十八日 筆頭第一に自誠す。

吾に自信あらば、吾に寛容の徳、克己の堅志、冷静なる意志、邁往勵行の氣なかる可からず。

此等の者なくして自信ありとなすは自ら欺く者也。自ら知らざる者也。吾は自然の兒なり。

吾に理想信仰あり。

吾に事業あり。

吾は一個、人間なり。

エメルソン其自信論の初めに一詩を引く、左の如し。

Man is his own star; and the soul that can

Render an honest and a perfect man

Commands all light all influence, all

fate;

Nothing to him falls early or too

late.

吾の自信は將に此の如くならず、故に若し、向後吾に克己の行あり、吾に寛容の徳之しく、吾に克己の念薄く、吾に冷靜の意志なく、事業に當り、目的に當り、事務に當りて、勵行

往つて漢氣を缺かば、之れ吾自ら吾の理想、信仰をなみしたるなり、吾は社會の依兒となりたるなり、人間の靈を殺したる也、一言以て言へば自殺したるなり。

* * *

電報來る。

自由社より、曰、「カイトイスダグコイ」(解俸直ぐ來い)

十九日 十七、十八忽ちに經過し、十九日も今は早や十時の深夜なり。いでや此三日間に於ける吾が生命の傳記を研究詳記し置かん。

十七日午前讀書す。久しぶりにて讀書す、悲しい哉書は我れに解せられず、時間のみ經過して何事も得る能はざりしことこそ残念なれ。

エマーソンの「自信論」を少しく讀む。益する所ありたり。午後小雨來る、雨を突て神田なる引頭百太氏を訪ふ、薄暮水谷氏來る、伴うて無名亭と稱する寄席に至り、女義太夫を聴く。雨甚しきを以て引頭氏に宿す、引頭氏と痛談して夜の更くるを忘る。

十八日尙り頭氏に在り、水谷氏來る。今井氏、收二と共に來り快談す、正午今井氏、收二、三人伴うて歸宅す。

書飯を了へ將に再び神田に行く、水谷、引頭

雨氏等助けて、青年文學十六號校正を讀みんとし、出でんとするに際して自由社金森氏より電信來り、自由傳報に付て至急出版社を促す、直ちに出版社、社員諸氏に紹介せらる。文章一篇を作り、別に丁氏を助く。夜歸路に就く、露に塚岡芳太郎氏を訪ひ、快談數時にして歸る、歸れば將に十一時を過ぐ。

今朝今井氏來る、散歩す、午後新聞を讀む。

記し來りて自ら其の表面的馬鹿けたる事實に驚く、ア、吾は實に明細に内なる吾の生命を記する能はざる也。

ア、可憐の壯漢何ぞ徒らに憂ひまどひて躊躇するぞ、何ぞ直截に爾の筆を振はざる。吾が衷心一つの極めて悲壯なる聲あり。曰く、爾は政治的になり了りし乎、と。

ア、吾誠に此の問を解する能はざる也、しかも何所よりか此の問は吾が心を打ち來るなり、政治的、政治的、此れ何の意ぞ、吾は明らかに政界に向て其の事業の生命を供へんとするの決心ならずや、果して然る乎、果して然る乎、然り然り元より然りと吾は斷言す可し、(ア、果して然る乎)然らば政治的となる

元より可ならずや。斷じて然らず。吾は宇宙的なり、吾は理想的なり、吾は宇宙的理想的

に由て政界に立たんと欲す、吾の事業は革新に在るなり、我國政をして自由なる政治たらしめ我國民をして眞理理想に由て立つの國民たらしめ、我國運をして世界人類進歩の魁たらしめんとするに在り、吾が政治界に立つ之れに由るなり、決して政治的、即ち野心的、名利的、肉慾的ならざる也。

然れど吾の猶ほ且つ安ずる能はざるを感ずるは、吾の遂に豫言者たらんとするの希望と衝突せんことなり。

吾は斷じて豫言者たる文章の士、大革命、大實行者たる政治家たるの希望を以て進む可きなり。ア、吾、之れ非望なるか、而かも之れ希望すと自信せざるを得ざる所以の者、一には宇宙、眞理、美妙、人生、生命、存在等に就て吾が思想の繋がらんことを希ひ、一には實行者として此生命の進歩に益あらんことを希へばなり。

引頭は憐れむ可き男なり、吾渠を思ふ毎に同情の念禁ずる能はず、渠に父母なし、渠にたのもしき親類あらず、渠は社會と一致し能はざる感情を有す、渠は社會を恨みんとす、己れの命運の非なるを恨まんとす、渠は而も

極めて正直なり、吾は渠を憐み、之をたすげざる可からず。

金森はオヅ、然と吾を自由社員に紹介せり。吾は直ちに看破せり。渠は自由社に就いて全權を有すと稱すと雖も、一個の吾を入るゝにかく迄でに考慮するを見れば、吾は自由黨の如何に情實多きかを知るなり、吾は到底自由黨なる者の、年少有爲の政治家を出す能はざるを知るなり。

吾は急進黨、理想的革新黨の起らざる以上は、現今の政黨も此のまゝにては遂に吾が敵たるを知りたり、彼等政黨員の間には我日本國民が有せねばならぬ道德、即ち自信、儉約、勞働、眞面目等の道德を信ぜざるなり、渠等が跋扈する間は我國民の命運は決して一新面目を開く能はざるなり。

自由新聞が極めて乾燥なる如く、自由黨なる者も乾燥極まる政黨たるを知るなり。渠等政黨員等はクロンウエルを知らず、ミルトンを知らずして自由を談じ、ユーゴーを讀まずして社會問題を解かんとするの輩なり、故に

渠等の愛國は愛國を愛國するなり、渠等は國民を只だ法律憲法に由て取り扱ふの他を知らざるなり。渠等はそれにてよし、然れども日本國民は今、高尙偉大の政治家を望まざる可からず。

木葉黨員等とは成る可く交際を避け、單刀直入首領先生を突く可し。今より數ヶ月は極めて忍耐を主とし、冷感なる試みを試みるの外他事なかる可し、決して薄情以て諷る勿れ。

重なる人物相互の關係は如何。
政府方の眞相は如何。
政黨員等の眞價値、眞感情、眞面目は如何。
現今政海の眞相は遂に如何。

其れが如何にあるとも吾の堂々正々の進軍に何の事あらんや、吾は斷乎吾が理想に由て行くのみ。爾、理想を命とす、靡に一世を推倒するの氣概を以て勇往邁進す可きなり。

吾今にして始めて蘇峰兄が少數者の責任中に革新家の資格の一として一顧を加へたるをさとれり。蘇峰は理想の人なり、而も實際

の人なり、吾も理想の人なり、而して初めて實踐に入り少し實踐を知りたり、茲に於て始めて實踐の必要なるを知り、革命の事業は時を以て收復すべきを知りたり、決して怠む可からず、決して疲るべからず、決して失望すべからず、斃れて後ち止むの覺悟あらば可なり。

昨夜、終日の奔走に疲れ、自由社より歸り、半夜枕に倚て思想を思す。

四隣寂々、夜將に汗々、忽ち清香の鼻を打つあり、頭を擧ぐれば水入れに挿むに松枝の一小枝を以てす、一輪の花あり、之れ乃ち今朝今井氏が持参しくれたるなり、清香綉帶、吾心恍惚、俗情の一時に洗滌せられて直ちに自然、幽靜の境に到るの思ありたり、吾今迄で清香を嗅ぐ元より數ふるに違あらず、然れども未だ嘗てかく迄に微妙なる清香を知らざりし也。ア、多謝す、吾翁は死せず一片の梅輪、一抹の清香、人間の逍遙す可き大地を拘蔵するを覺ゆ。

二十日は過ぎぬ。今や二十一日午前一時前なり、吾今日、一日の事を回顧研究す可し。朝起き出で、金谷、倫を曠野に訪ふ。渠と懇談

するは先度で以て三回とす。

何々の議論は試みられたり。自由社の性質論となれり。吾は其の實質の多きを説き、今のまゝにて推し進まば自由社の前途す可からざるを説けり。渠は賛成せり。然れども吾も、自由社固より革命情實ありと認め、他の黨派より言ふ時は寧ろ少なしと。其より人物論となれり、星亨を以て渠は有望の政治家と言へり。

色々議論は上下されぬ。歸宅して晝飯を了へ、直ちに自由社に出社す。只だ二三の文章を作りしのみ。碌々すなく午日を経過しぬ。日暮れて歸路に就く。

阿部充家氏を訪ふ、不在。神田にめぐり、引頭氏を訪ふ。蓋し「青年文學」第十六號の本日發兌せられたるを以て、一見の情切なりしを以てなり。已に横澤源三郎其他一名客あり。不知の客と吾との間に、一場の議論は起れり。これ「亞細亞」と「國民之友」とのよし悪し、すき、きらひの論なりし也。引頭は之れを止めたり。乃ち又た吾と引頭との間に爭論始まりたり。十二時過ぎ歸宅して、以上直ちに事實を並ぶ。

一語を論ずるに則ちよし、争ひ、争氣ある可からず。既に言ふ可しと信じて居る時は寧ろ言ふ可し。然し成る可く駄す可し。談す可し、争議す可からず。

談す、用て未知の社會先達を訪うて談話す。吾れ其の利益を思はざりしに非ず。此の頃始めて殊に其の利益の非常なるを悟りたり。社會則ち、エマーソンが所謂ゆる青年の目前には、話の如く見え、岩石の如く見ゆる社會運の、暗運黙移する處を知るを得るなり。何となれば、彼等は社會運の中心なればなり。

吾、何となく悲痛の感あり。讀書の時間なればなり、以て高想幽情の日に消滅するが如きを覺ゆればなり。然るに是か非か、此の悲痛を苦もなく打消して、意志の剛烈たるに至りしを覺ゆるなり。

ア、此の青年の命運。日月は用捨なく最後に伴ひ行く此の青年。渠の命運は遂に如何。

ア、吾今にして大人の安心の容易に窺ひ

難きを知りたり。吾等も嘗ては青年なりし也。大望燃ゆるが如かりし也。而も後遂に只だ天職に殉じて満足するの消息を知り得たり。

漫りに悲むは止めよ。斷々乎たるべし。斃れて後止む可き也。革新的大精神、理想信仰を失うて尙生んことを望むの吾に非ざる也。

眠らねばならぬ乎。眠むるは暫時死するなり。死し々々吾一時も休息を欲せずと雖も、遂に幾時かの眼を取らねばならぬ乎。疲たり、疲たり。

▽猶々も記し置かん。經驗は之を明證す。讀書を廢す之れ自殺する也。

二十一日 午前八時に目醒む。今井氏來る。理髮す。半日は忽として過ぐ。時間は空過せり。然れども吾思ふ、人間が生活する時間に二様あり。則ち外面の時間及び内部の時間なり。若し夫れ徒らに道を行く、馬鹿氣たる如きも、之れ外面なり。其の思想若し有益有用に働かば、其の時間は必ずしも空過にあらず。ゆゑに時間を惜しむと云ふ事は、馬鹿げた事を思はざることゝ知るべし。

吾は人間修養の極めて難きを知りたり。何となれば、今日かくせざる可からざるを考へし事と、昨日かくなす可しと思ひし事と、容易に調和する能はず。所謂大人學者英傑なる者は、此の調和の困難なるを謂には非ざらんや。一世を推倒すべしなる可からずと信ずるの傍は、輕忽争氣なる可からずと言はざる可からず。徒らに幽愁に陥る勿れと自誡するの傍、決して俗化する勿れと誡めざる可からず。修養も亦た難い哉。

午從半日を新聞社の樓上に經過す。一文を草せずして歸宅。然らば何を爾はなしたる乎。まさか無益に費さざりしなる可し。

「知る」知ると云ふ事は尤も注意深くして機敏なる人にあらざんば能はず、「知る」人は卓絶の人なり。思想の人には不用なる如きも然らず。圓滿なる思想家は、其の頭腦に尤も多くの事實を蓄ふ。渠は只だ能く之を消化し了るのみ、格に新聞記者を職とする人には「知る」「正確に知る」「明了に知る」「詳細に知る」等の資格は、最大の資格なる事明也。「知る」何んでもなきが如きも、なか／＼知る

る人は少なし。

新聞記者を職とする人、此等の文字が何の苦痛もなく、吾が政治上に記せらるる人に在りては、吾が内情の變化を見るに足るなり。

渠は「職業」を以て事を思ふて自由に入り、事を決心せりと二月五日の記には、すれども、渠は「非社会的な生活」の情に充たされし也。

不思議なる哉。渠が二十日に足らぬ、「實際」は何時之間にやら感情までも「新聞記者たる職業」を是認するに至りぬ。是れ渠の進歩か、墮落か。進歩と云ふ勿れ。墮落とも云ふ勿れ。渠は決して「絶対の自由」を有せざるなり。渠が四五ヶ月以前に、一度び熱病せる大インスピレーションは、固より非常なる結果を渠の精神生命の上に及ぼしぬ。乍去、ア、今日は渠の胸裡に當時の「火」が燃えし。只だ大火に由て根本の汚物をやき捨てられたる渠の融良敢爲の精神をあますのみ。然れども見よ、渠若し讀書沈思を廢して、多時を此の紛々の社會に染まりなば、渠は忽然「尤も前」の渠よりも「明記」し、明記し、明記し、吾明記し置かん。渠が此の記を讀んで冷

笑する時は、腐敗の極自ら悟らざる程に至りし也。

絶對の自由を有せず。社會及び境遇は棄て記者とならしめぬ。

「行」吾は色々の事を企圖し、思ひ付くと雖も實行せざる也。實行しもせぬに、自ら安じ居るに似たり。實行せざる思付きは空想と稱し、又た妄想と稱す。若し空想・妄想の中に生活して自ら知らずんば、意外の失望・苦痛を來たさん。故に能く「實行」と「思付」との境界を立て置き、時々點檢す可し。思付くのみにて實行なくんば、思付かぬ方却て健全なり。其は失望の苦痛なければなり。右の故を以て吾は「思付き、及び企圖して、其の結を作り置き、書き止め置きて、着々其實行をば一より二と期成し進むことゝなしたり。之れ亦た、思付き、必ず實行せよ。實行し能はずんば、已に何事も實行は出來ぬ者と斷定して可なり。

一には天下の形勢を知る爲め、二には新聞記者として必要な資格を作らん爲め「世事記」

を作る、則ち出版社中、時間のひまを以て新聞を讀了し、重なる記事を「記憶消化」せしむる爲め、批評・評論するなり。今日より實行す。

「買求志」買求志とは、自ら買求せんと欲する物多くあれども、金錢の不自由なる爲め、其の思付きたる節直ちに買求する能はざるが故に一の帳簿を作り置き、此の物は是を買たしと思ひたる時は、其の名と代價とを書き付け置き、金錢の融通の付きたる節漸次に其の最急なる者より求むるなり。一には遺忘せざる爲めに、二には貯蓄心の起る爲め。吾、しばしば苦みたる末、終にこれを思ひ付く。想ふに、金錢を節用し、經濟の事に注意を増さしめ、品物享有の幸福を完うする等には必ず效ある可し。人々に勧むる考なり。

吾の企圖計企少なきに非らざるも、實行の完全なる者は未だ容易に見ざるなり。吾のみならず、世の人々多くは然らん。依つて吾れ企圖書中より、先づ最急の者二三を定め、實行と成功を期し、満足を見たる上にて他に進む可し。

二十二日。

悲哉。吾と理想との距離は絶えず。吾の理想々と呼ぶ間に、理想は何處にか消え去れり。

嗚呼是れ何等の言ぞ。嗚々！ 嗚々！ 爾自ら俗情を動かし、俗念に耽り乍ら、甚かに似む處あるは何等の俗物！ ア、爾は俗物なるぞ。俗物！ 俗物！ 夷の意志なき也。爾には己れなきなり。爾には信傳なきなり。爾には理想なきなり。爾には斷じて自信なきなり。若し果して自信あり堅固なる理想ありとせば、何んぞ意志の力の弱きぞ。

ア、應に斷々乎たる可し。女々しかる勿れ。讀む可しと爲せし時は、一心不亂に讀む可し。爲す可しと爲す時は、正々堂々に爲す可し。意志々々々々、爾には堅猛の意志なし。故に動もすれば、自ら悲み自ら悶がく。爾は自ら言はずや、爾かに悲み、強く樂しみ、悶く行ひ、休まず節め節かに急ぎ、以て天命を信ず」と。ア、忘たるか、忘たるか。(二十三日午前)

二十三日。

吾の外部的傳記には、異なる事少しもなし。午後自由社に出席して、各新聞を精讀し

能はず、分に應じて、縁に隨ひ、物として適意なりざるはなし。云々。曰く、

心、主動的となれば、物に於て役せらるゝ所なし、富貴壽夭我に於て何かあらん、云々。

故に君子は己を修むるに孜孜なり。

吾未だ能く右の如くなる能はずと雖も、近日の苦心は全く此の修養を遂げん爲めに外ならず、故に今此等の語を讀んで一しほの眞味を覺ゆ、ア、蘇峰氏は吾師友なる哉。

社會事務を盡すに當りて、亂雜、不規則、怠惰、臆病なる可からず、若し然らば汝の理想も何の用あらんや。

社會事務一は自信を以て爲さる可き者なり、勞作を以て爲さる可き者也。

吾は先づ一個の人間たる可きなり、常に人間たる可し。

吾の心裡に一の聲あり曰く、汝の修養はよし、意志を固くし、悲悶を拂ひ、悠々乎優々乎、理想の上に立たんと欲するはよし、然かれども其の悲哀を拂はんと欲するの極、涙

なく情なく只だ社會的意志のみつ人と化し了するの懼なき乎と。——答て曰はん、然らず然らず、決して懼る勿れ、夫れ悲哀に二ツあり、一は二夜より出て一は神より來る、一我より出づる者之れ毒泉なり、飲む者は悶死し、神より來る者にウオルズウオルスの所謂ゆる *Will, that must of heaven* 三三にして其の旨や、清く、高く、遠く、幽静なり、心の清き者に非ざれば聞く能はず、能く之れを聞く者は理想の人たり——則ち愛と誠と勞作の人たり、己に然り豈に煩悶あらんや、天命を信じて事業に驚る。クリストの如き之れなり、ウオルズウオルスの如き、昔然り、固より涙あり、情あるなり、同胞人間の爲めに、神の爲めに心の最底より涌き來るなり、一我より出づる悲悶は神の罰也。

二十四日。

凡そ事漫然、漠然たる可からず、必ず明晰なる智識を組織し置きて、其の範圍分量を剗然せしめざる可からず、然らざる時は不意の失敗をとる事あるべし、何となれば、己れ自ら眞實に己を知らざるの誤あればなり。

二十五日 筆を執る、時將に午前十一時半、二十四日の事實を記さん、午後新聞社に出席

す、社用を帯びて車に乗りこせしめてある健脚猪一頭見せしめて、山田武市氏死去に就て、其の略記を自由紙上に載せんとて、民衆歌の恩賜氏のもとに集り同心を成り、其之れを寫し取らんとてなり。もとより猪一氏の側床に在るを知るがゆゑに氏に直會するの意はなかりし也、然かれども計らず其の病床に近くを得て親しく談するを得たる喜に取りて如何にりかうれしかりしぞ、深夜は氏の「快樂」を讀み、大に感得する處ありたる事なれば、喜に取りて氏に「おたなつかしかりし也、左の四首を寫し取りて歸社す。

人力車

乗る人ひと一人なりうき世をばぐる車にうへしたはなし

庭櫻 玉は、き手にもつからにいかせむ庭の櫻のちりはじめては

題なし こゝろのみいそぎけるかな花見んと乗りし車は行としもなし

徳富君の東京に居をうつさるゝとて簾の内てふ梅の鉢植を送られたれば

あらはれぬふかきこゝろぞしられたるみすのなかなる梅のほかに衰弱せる徳富君が其の細きノノ聲を以て山

田舎の事を語り聞かず、吾に取りて如何に悲
哀の感深かりしぞ。

此の夜左の文を綴り以て自誠となす。題して
自動的、受動的と云ふ。自動的なるは受動的
なるとは極めて微妙なる心理作用に由りて分
かるゝと雖も、已に分かるゝ以上は其の差
は又た非常なり、蘇峰云ふ、心、自動的と
なるときは物に没せらるゝ事なしと。

然かれども自動的なる決して容易の事に非
ず、意志、堅猛ならずんば心必ず受動的に
働く、心一度び受動的に働くと、則ち齟齬、
促々、苒々、徒らに自ら苦しんで而も道に
於て得る所なく、其の事を爲すは砂上に家
を建つるが如し。

其の激ぶや急激なる如く、其の走るや當る可
からざる如くなるも、疲る、倒る、否な時と
しては以前よりも幾倍の勢を以て彈ね反
る。

自信ある者は決して受動的ならず、信仰ある
者は決して受動的ならず、天職を知り人命を
知る者は決して受動的ならず、自動的の人は
餘裕あり、寛容あり、親しむ可く、敬す可く、
信す可く、任す可き男子なり。自動的の人は

積極的に事を務め、受動的の人は消極的に
事に當る。

徳を建て、事を成す者、必ず自動的なり。
自動的の人は天に對し責任を信ず、其信する
や必ず強く且つ固し。自動的の人は其事業
職分の前には水火を懼れざる也、白刃を踏む
も忌避する所なし、斃れて後ちむは實に自
動的の人にして始めて之を見る。一言以て之
を盡せば自動的の人は、自ら務め自ら進んで
天來のインスピレーションを感得するの人な
り、一度び感得して失はざるの人也。

二十六日 日曜日。

自ら信じて乍らも、自ら信じて乍らも、猶ほ堅
く意志の力に據る能はず、強く理想の上に立
つ能はざるを見る時は、人間の實に弱き者な
ることを知り聖賢の決して及び易からず、徳
の容易に建て難く事業の轉がるしく成り難
きを感じずんばあらず、吾思うに茲に至る無限
の憤涙に堪へぬなり、ア、吾遂に完全圓滿な
る人間となり能はざるか、思ふに決して然ら
ず、汝々として己を修め、盡さざる熱心を以
て精神を鍛練して一日片時も或はおこたる
なくんば、曷半遂に富士山頂に達するの目な

しとせんや、否、其の目必ずしも前程に
求む可けんや、只だ吾の一日を能く堅志硬行
に費すを得て、仰て天に忤ぢず、俯して地に
愧ぢず、一顧て神明に對し、分に應ずるの嘉
賞を感得し得れば即ち足れり。

ア、妄想に走る勿れ、空望に焦がるゝ勿れ、
只だ只だ、愛の人たり、誠の人たり、勞作の
人たり、以て其の職分を盡すを思へ、吾の盡
めて熄なきを求むる只だ堅志硬行のみ、ア、
堅志硬行のみ。

昨日如何に苦かりしぞ、之れ只だ薄志弱行
の報酬のみ、爾、薄志弱行を感ずる時は決
して自ら自暴自棄の悲傷に陥る勿れ、之れ
則ち薄志弱行の最なる者たるぞ、かゝる時
は意志の力も強し、空想を去り、空望を去
り、儼然天眞にかへり、深く自ら悔ゆべし。
空想、空望、虚望、虚想、試む可し、試む可
い。

ア、一個、なすなきの青年、其の十年の後は
如何、二十年の後は如何、百年の後は如何、
人間の意味遂に此の青年には解すべからざる

か、否！ 否！ 否！ 十年の後を見よ、百年の後を見よ、千年の後を見よ。

今朝聖書を讀む。句あり、

なんぢ我より學びしところ聞きしところ見し所を皆おこなへ然らば平安の神爾曹と借ならん。(腓立比第四、章九)

われ貧賤に居るの道を知りまた富厚に居るの道をしり、飽ことも飢うることも黠ことも讎

ことも諸の一事に於て我之を熟練せり。我は我に力と與ふるキリストに因て諸の事を爲し得るなり。同十二、十三)

マおこなへば則ち平安の神われと共にあり、心境、心術、心氣、皆な熟練を以てなし得べく、事を爲すの力をキリストより受くるの信仰あり、ポローのポローなる處、ポローの教、ポローの精神、大に學ぶ可く大に味ふ可し。

殊に熟練の文字大に味あり、固疾の膏盲に入るや容易に抜く可からず、容易に抜く可からずと雖も聖志硬行、強めて熄むな

くんば自然に道に合ふの時なからんや、熟練の文字大に味あり、聖志硬行人にして始めて其が眞味を知るを得んか。

始めて其が眞味を知るを得んか。

昨朝今井兄より晚餐の案内狀來る、蓋し、今井兄この度び日出度く代言人試験に及第して愈々代言人となるを祝さるゝなり、兄の師なる井上正一博士主人となりて祝宴を聞かるるなり。

今年後六時頃より井上博士今井兄を主人として客は吾、水谷兄松崎兄其他二名都合七名、西洋料理に至る。

松崎氏は舊山口中學校以來の朋友なり、昨年帝國大學に來る、今夜始めて再會せし也。

△天は勉強する人には、勉強せざる人の到底想像だにもなし能はざる利益と、快樂と嘉賞を與ふ。

△人は境遇と交友とに由りて、知らずともよき事まで知り、感得す可からざる事までも感得す、大に慎む所なかる可からず。

二十七日。

時々刻々、何を思ひ、何を考ふるか、内なる我、眞實の吾は之れに由て判するを得べし、公平に反省し來れ果して内なる爾、眞實の爾は爾の理想に適ふや否や、——ア、思うて茲に至る大人聖者の益々企て難きを知るなり。

茲に至る大人聖者の益々企て難きを知るなり。

明治廿六年三月

△今は三月一日の朝也、昨日來の吾は如何なりしぞ、思うて茲に至る憤涙に堪へず、ア、殆んど吾が心細の形容に苦むなり。

忽にして不平、忽にして慚愧、忽にして怨恨、忽にして痛嘆——ア、社會は吾を毒殺せり、一に何ぞ吾の裏ふる斯く進んで甚だしきぞ。社會は人間を化して我とならしむるなり、天來の青年を捕へて氣衰へ神饑え、靈の生命死して、肉情俗念の中に投ずる也。

ア、然かれども然れども靜に顧みて、偏に吾が刻苦勵精の乏しきを悟る。

堅く理想に立つの意志眞とに薄弱なるを知り、實に古の聖賢に對し、自然の宇宙に對し眞理に對し上帝に對し、慚愧赤面に堪へざる也。

今夜自由社より直ちに我が祈禱會に出席し、祈りて曰く、社會生活の魔力より救ひ給へ、根本に歸りて念々神を忘れざる様守ら

給へ、根本に歸りて念々神を忘れざる様守ら

せ給へ、兄弟姉妹たしかあらせ給へ、天に
なる御心を地にならしむる事に侍て、少しに
ても力を盡す事を得さしめ給へ、アーメン。

社會生活の處方に打たれ榮辱得喪の餌食
となりたらんか、已に雲の眼閉ぢたる也。事
物に接して皮相の外、見る能はず、自然に對
して最早や其の深底の美も、眞も看する能
はざるに至る、悲まざる可けんや。人が最
も誤まるものは、「社會生活」に對し知ら
ず知らず墮落し行く也。終に一生を擧げて
榮辱得喪の餌食となり了るにあり。得意の
前には腐敗し、不如意の前に世を恨み人を怨
らむ、殊に青年の誠む可き事なり。

「佛國革命史」を七十五錢に、一高杉東行詩文
集」を十六錢に購求す。

吾は深く自らの空々無々なりしを悟る。豫
言する、何を激言する。働く、何を働く。
造爲する、何を造爲する。——爾に告ぐ、先
づ自ら造れ、建てんと欲せば、先づ自らを建
てよ。

二日 夜。深奥謹で左の記を作る。

吾れ希くば、誠を再びせざらんことを、吾れ
誤てり。吾は女々敷も哀み泣けり。得喪の
餌となりたり。數日前家大人より來たりし書
狀の中に言へり。母は此度び吾の自由社に
入りし事に付て非常に喜び、神佛におみき
を上ぐるやら赤飯を炊くやら以て吾を祝し
吾を祝れりと。此の事の如何に予を傷ましめ
たるぞ、余森氏は吾に極めて冷淡なり、渠は
吾をして何の務にも就かしめず、給料も與へ
ず、何事も語らず、吾は終に渠と共に爲す能
はざるやを危ぶむに至れり。

然るに反みて吾に何等の資格あり。社生活
の道を得て父母を安んずるを得たるかと考
ふるに、理想あれども理想には社會パンを興
へず、少しは思想もあれど尤より粗雑の者た
るに過ぎず、文章あれども只だ用を辨ずるに
足るのみ、華文として買はるゝ品にあらず、
吾は目下の處決して社會生活の十分なる
資本を有せず。

此如事條は糾うて吾を苦しめ、吾を泣かし
めたり。
然かれども女々しきかな。書くも愧かしき至
りなり。

五日 三日、四日は經過し五日も今は薄暮もの

寂しき時とはなりぬ。

三日の朝より五日の今にいたる迄で、時間は
萬人に等しく經過しぬ、世界はそれだけ老い
ぬ、人間の歴史はそれだけ書かれたり、而て
吾は何事かを爲せる、何事かを成したる、何
事かを學べる。大人英雄、遠く望めば偉大な
る如くなれども、其の偉大なる所以を細かに
察する時は、一日の爲せし所、一日中に思ひ
せし思想、集まりて一年の事業となり、十年
の事業となり、一生の事業となるのみ。故に
一日の經過は決して輕視す可からず、思ふに
一日の經過を能く考究熟察する者は必ず大
人英雄なるべし、何となれば彼は多くを知れ
ばなり。

二日の夜、ふしどに入る前に、明日は何を爲
す可きかを定めたり。明日は朝起き出で、聖
經を讀む可し、次に徳富氏に與ふ可き書狀を
認むべしと定め、次に終日カライル「英雄
論」を讀んで、將に讀み終る可しと定めた
り。而して三日は來れり、三日は如何に經過
されしか。聖經は讀まれざりき新聞紙は讀ま
れたり。徳富氏に與ふ可き書は其の草稿を
認められたり。其事了ふるや赤飯となりぬ。

食後東は外出したり。筆を求めんとて、外に出し、之恐らくは口實ならん。口實ならざるも餘り必要なる外出にはあらざりしならん。渠は實、思慮散漫し、感情靜穩ならざりし也。——渠は前日に定めたり、本日は自由社に出勤せざる可しと。此の事實は渠の感情の靜穩なる所以を示す者也。渠はわざ／＼神田迄で出掛けて筆を求めたり。

此の日は天氣極めて晴朗にして近來にまれなる日和なりき。渠は筆を求めて直に歸宅せざりし、渠は引頭氏を訪へり、引頭氏不在。渠は水谷氏を訪へり、不在。渠は遂に牛込へとめぐれり、中桐氏を訪ふ、不在、三上を訪ひ、伴氏を訪ひ、吉田友吉、桐原の兩氏を訪ひ、終に、半日を過しぬ。尤もより久しく無着せる友人を訪ひし也。然かれども半ば偶然に。

夜、吉田氏を伴うて出で、誘うて寓居に歸る。途に津田鍛雄氏に遇ひ彼をも誘ひ來れり、十時頃彼等去る。徳富氏に與ふる可き書狀を清書し了はり、「國民の友」を讀む。リンコンの逸事は如何にかれを動かし、櫻痴居士の「懷往事談」は何を教へたる。

「懷往事談」中に左の一節。

「當時余は譯官の末班に在りて、横濱に祇役したるを以て親しく其衝に當りたるにも非ずと云はゞ關係尤も薄き方なり、加ふるに書生より役人になりたる途にて、内治外交大小の政務には一言たりとも喙を入れ得べきに非ず、又その實五里霧中に在る少年なりければ何處を風が吹廻はずかと云ふ風にて勤向後生大事と勉強したる分の事なりき。」

一個人と社會事務の關係、社會事務と年少後進者との關係を知る可き一事實ならずとせんや。

「高杉東行詩文集」を讀む、維新革命の精神を知らんとて。

高杉晋作、彼何人ぞ。只だ彼、然れども其の詩文よりして彼が社會事務に繋がる眞相眞狀を看察し能はずとせんや。

夜は更けたり、二時を聞き三時も近けり。つかれはてふしどに入りぬ。

四日は極て事繁き日なりし。朝食後直ちに丁吉治氏を訪ふ。近來自由社に對する不平をもらす、金森氏の精神の批評となる、曰く渠或は吾等を愚にも秘書官的に用ひんとす

考へたらん、兎も何も今更りに看察す可しと云ふ事となる。丁氏を去りて引頭氏に對り、「東萊博義」を借る。直に出社す、雨降る。歸路今井忠治氏を鈴屋町小林方に訪ふ、一泊す。

五日は日曜日、好天氣。今井氏と外出、赤坂前歸す、午後四時三治、伴武雄の兩氏來る、委員會に出席す。

六日、午前金森通倫氏を訪ふ二言三言、彼の意の在る所を探ぐる、彼は目下の事ごまかし居るなり。午後出席す、歸路塚邊孝太郎を訪ふ、夜、一家庭雜誌一の寄稿文を作る、七日夜、詳細に記し置かんと思ふ間に、今は七日の夜となりぬ。

昨日大久保氏より書來る、嘗て吾、職を求めんとて奔走する由を申遣りたるに答へて、成る可くならば未だ世間に出づるは早きゆゑに、潛養を望むと。潛養なるは、潛養なるは、吾近來岌々乎世に突出せんず熱心燃ゆるが如し、然かれども顧みて汝の實力を思へ、理想は則ち之れあり、大根本の主義精神は思ひ之れあり、然れども果して之を傳道し、之を宣言し、之れを實行する程實力あるか危

かな危かな。血氣に奔る勿れ、すべからく極力以て修養蓄積す可し。

吾には萬物悉く新奇に視ゆ。社會に對し、國家に對し、人類に對し、宗教に對し、政治家に對し、文學者に對し、悉く新奇の感念のわき出づるなり。吾が眼には悉く新奇に映ず、然り吾は自然の兒ならざる可からず、理想の兒ならざる可からず。

一言一句、一舉一動、悉く傳道的なる可し、傳道的とは外飾的の謂ならず、偽善的の謂に非ず、自動的なり、理想的なり、眞面目なり。彼の忽ち理想の爲に泣き、而て忽ち放肆自暴するが如きは軟骨、薄志、俗腸、弱行、實に言ふに忍びざる醜體なる事を記憶せよ。

人と語る、其人の全體と其人の社會地位とを思ひ忘る可からず、然らざれば意外の過失あらん。

社會の眞相に通じて而して社會弊害の上に於て、理想の足場に立つ可し、然らば社會の

眞相は如何。吾近來少しく看破したる處を記し置かん。エメルソン曰く、社會は少壯者の眼前には迷語なり、彼の前に社會は嚴然固定確立せるが如く觀ゆ、或る名所、或る人々、或る制度に由りて、中心に深く櫛の櫛の如く根を有し、其の中心を回りにて各凡ての者其處を得てある如く視ゆ。然れども老政治家は社會の環流性なるを知る、其處には根なく中心なし、如何なる者と雖も俄然運轉の中心となり、全組織をして其を回るべく強行す、健猛の意志の人、則ち或時に向て、ブルストラタスの如き、クロムウエルの如き眞理の人、則ち永久に向て、プラトリーの如きボールの如き之れなり、云々。吾此の言を疑はず。吾は吾が看る所を言はん。

社會は大環流の中に幾多の小環流を有す、小環流は互に相關すと雖も亦た、個々獨立の形勢を有す。人は多くは小環流の中に生死す。大環流の變化は時間の多を要す、小環流に至りては變化消滅心すしも長時間を要せど。

人多くは黙々冥々の裡に轉々推移す。政界は小環流なり、商界は小環流なり。

己れを圍む所の社會の眞相に通ずる時は推して以て全世界人事の變轉消長の消息に通ず可く、未來人事の眞豫言を爲すに難からず。社會の眞相、人事の眞機、冥幽、暗邃、容易に知るべけんや、榮辱得喪の爲めに靈の眼をくらまさざれば可なり。

八日。寢に就かんとする前に此の記を作る。午前バイブルを読み、一東萊博義を読む。午後丁氏來り自由社出席を誘ふ、俱に連れ立ちて出勤す。吾は何事もなまず、三時半歸路に就く、「東萊博義」を読み、新舊會に出席す、歸てカーニールを出す、出すのみ讀まず、改進黨及自由黨を思ひ立ち沈思又た冥想。

吾切に感じ釋然心怡したり。吾實に功名に急なりし也。功名、今更ら不思議に感す、固より吾は理想に立つの外意に又た功名を望まんや、而も岌々、迫々、慚に安んずる能はざるが如きは何ぞ、ア、吾れ之を得たり、吾は己れの方を知りたりき、しかも事業運動に急なりき。ア、吾之を得たり。反省。反省せよ。眞眞に理想の上に立ち、理想的事業を爲さんと欲せばすべからく一生を期す可

し、力を従ふべし、資格を作る可し、靜に
潜養せよ、決していらだつ勿れ、冷厳、幽刻、
理想に立て、備の讀書と備の看察とを忘る勿
れ、決して早まる勿れ、必ず悔あらん、必
ず悔あらん。

自ら宇宙神明に對し、直ちに理想に繋がる
自稱する者、何故にわれの思想感情を明言
明記し能はざるぞ、社會を恐るゝか、人面を
恐るゝか。

十日。昨日午後水谷眞熊氏を神田駿河臺の寓所
に訪ふ、近來多くは出遇はず、快談時の移る
を知らず、夜伴うて小川町なる川竹亭と稱す
る寄席に義太夫綾之助を聞く。

本日午前ハイブルを讀む、讀むも只だ讀みし
のみ、其の證據には現に今は何を讀みしか何
事も記憶し居らぬなり、是れ何等の兆ぞや、
何等の結果ぞや。一第二の「維新」を讀まず、塚
越氏より一家庭小話一の續稿投寄を催促し來

る、直ちに筆を把て一文を草しり、自由社
に出席す、途に塚越氏を訪ひ草稿を與へて出
づ、自由社に在りては雜報一個を草せしのみ、
別に是と云ふ程の事も爲さず、歸路に今井忠
治氏を鎗屋町の小林方に訪ふ、同宿の阿部

充家氏を二階に訪ひ談話。寄席、義太夫、大
隅太夫に誘はれ、栗原、山川其他熊本人にし
て吾未だ知らざる青年及び今井氏と都合六人
出掛けし所少しく前に出火ありし爲め寄席
は休みなりしを以て、再び小林方に歸り雜
談數時、終に晴黒と疾風と砂煙とを突て歸
す。ア、紛々、紛々、反省回顧せよ、生命を
値ひせしかを。

昨夜寄席を出で水谷氏と別れ、歸宅後机に向
ひ、さて何にか書を讀まんと欲すれども心緒
亂れて思想書に向はず、紛々情緒、殆んど收
む可からず。ア、切に意志の弱きを感じ、堅
志硬行の容易ならざるを知る也。ア、吾力
足らざるか、吾が希望は畢竟空想に過ぎざる
か、吾れ之を信する能はず、何となれば、吾
は吾の力の足らざると言はんよりも吾の時
間を利用して刻苦勵精する事の寧ろ足らざる
を覺ゆればなり。己に然らば吾が希望は決し
て空想に止まらざるを知るなり、要は只だ念
念刻々、理想と希望と大責任とを忘ることな
く、紛々たる社會俗人に接して何時の間に、
粗糲、放肆怠慢に陥らざるに在り。

吾れ一昨夜來自由書及び改進黨てふ一著
述を思ひ立ちたり、直ちに着手せんと欲す
るなり、一には吾の能力を試験し、二には、
徒らに遠大のみ夢想せんよりも先づ此邊よ
り事業に着手して、次第に高きに進むの正當
なる順次なるべきを考へたれば也。之れに
由て吾が思想感情の上に、如何なる影響の來
る可き乎は、乞ふ兩三月後を待て、回顧せし
めよ。

此頃少壯てふ事に付て多少の思想を得た
り、大に考究を積んで見んと欲する也。一少
壯々々、思想に於て、感情に於て人間一代
の傳記生命の絶頂なり。希望あり、回顧あり、
煩悶あり、夢想あり、喜悅あり、悲感あり、
忽ち歌ひ、忽ち泣き、或る者は終に自殺を
企て、或る者は遂に墮落の谷底に陥る、大
人、哲人、聖賢、英雄等の少壯時代を見よ、カ
ーライルは如何、ルーテルは如何、而して爾
自ら如何、社會、宇宙、人間、生命、死、
花、月、星、雨、悉く其の新面目を來たし、
新解釋を求め來る、少壯時代は混沌時代也、
光明と暗黒の戦ひ也、溶解時代也、大人も
聖賢も、大宗教も大哲學も、大詩も大事業も、

悉く此時代に定まる、此時代は溶解された。金屬の如し、如何様にも鍛はれ如何様にも鑄らるゝ也。一時一分寸も大切なる時間にして、時を經過し時を誤らば折角熱騰せる金鐵も遂に冷却して、又如何ともし難きに歸す

少壯時代とは十八九歳より廿四五歳迄を吾は指す也、人間必ずしも此時代に完備成熟せんや、只だ大前までは此時代に定まる、

十八九歳頃までは大概の人、只だ少年小兒時代の先入思想となりて其のまゝ、茲に到る、されど茲に到れば社會生活の門は前程數歩の中にあり、人世人情の神秘漸くに解せられ感情の焔は其の極度に達し、想像の力は其の縱横の境に達し、先入の信仰は破れて、良心の自信仰は容易に來らず、所謂心緒の亂れて絲の如くなり勝の時代なり。

此の少壯の時代に十分の鍛練なくんば、何時の間にか宇宙人間としてよりも、社會的人間として變化發育して進む可し。

十二日。午後二時半左の記を書す。

昨十一日吾何事を爲せしか能く記憶せず、又た思ひ出し難し、以て近來思想精神の如何に紊亂せるかを知るに足るなり。昨朝バイブルを讀みしか之を知らず、今朝之を讀みしか否

な、如何に靈の生命の衰へて、社會的俗情の盛なるかを知るに足る也。昨日午後、少しく買物の用事を兼ねて上野の圖書館に行かんとて外出す。

こゝ迄で書し來れば豫ねて來訪の約束ありし中桐確太郎來たる、由て筆を擱く。午後十一時過ぎ左の記を書き續く。

買ひ物を了へて直ちに上野に行かず、水谷氏を訪ふ。談話少時、伴うて散歩に出づ、歸て牛肉を買ひ、且つ喰ひ且つ談ず、日暮る、談止まず、遂に水谷氏を辭去せしは夜の十一時過ぎなりしなり。本日午後教會堂に出席す、フルベツキ氏の説教あり、演題は提摩太後書第三章第七節、常に學べども眞理を識に至ること能はず之れなり。聖晩餐式ありたり。歸宅後間も無く中桐確太郎氏來訪す、快談高談論々に及ぶ、共に出て吾は神田に至り、東明館てふ勸工場にて國元用の書翰紙(新意匠也)を購求す、教會の長老執事委員の集會に出席す、多田君去りし後教會に牧師を聘する事に付て、植村正久氏を依頼する事となり、其れ等の相談也。諸兄互に任務を譲るの風盛んにして、吾大に快からず。憤然歸宅す。憤然は蓋し後悔の事ども也。途

に丁吉治氏を訪ひ談話。歸宅後國元に書を發す。以上固より表面の事實、只だ後日の參考に並べしのみ。水谷氏とは何を語談せしか、如何なる事の話柄に上ぼりしぞ。フルベツキ氏は何を教へしか、吾何を習ひしか。中桐氏との談話は何事なりし乎。吉治氏との談話は何なりしか。内なる吾は凡て此等の問ひにすら看出し得ん。――睡魔襲來、頭腦過熱、以下は明十三日に譲らん。

十三日 回顧反省す。

果して直截なりし乎。果して主動的なりし乎。

昨夜、教會の集會に於ける吾が行爲は如何。

果して忍耐なりし乎、果して勞働的なりし乎、果して自信強かりしか、果して時間果れ生命の實踐ありし乎。

果して和平温厚なりし乎。果して理想の信仰確固眞實なりし乎。

クリスト曰く、神を信ぜよ、誠に我なんぢ

らに告ん、誰にても其心に疑ふ事なく、其のいふ所の言は必ず成るべしと信じ、此山に移て海に人といはゞ、其の言の如く成べし。

果して如斯く信仰ある乎。

ア、爾、事の成り難きを悲み恨むこと勿れ、堅く信仰あれ、信仰は神の靈なり。

反省點檢し來て首肯し能ふ者殆んどあるなし。

嗚呼堅志硬行の實、何處にかある。薄志弱行は衆人の痼疾なり、ア、吾も亦た然るか、アア只だ。

數々反省するよりも、直ちに靈の生命を思へ、吾は此の生命を何故に値するか、の信仰あれ。

十五日。昨夜歌一首を得。曰く、

初春の花見る毎に父母の、

傾く年を獨り寝に泣く。

ア、天地悠々、歲月は逝いて止まず。明年は如何、明々年は如何、十年の後は如何、將た百年の後は如何、百年回顧すれば一夢の如く、千年回顧すれば一瞬のみ。人間の恩愛は萬古の情。

一日の事を點檢し來れば多くは之れ空の空、事は志と差ひ、志は俗情のために汚がれ、日々之れ送る虚想の夢。

吾、十二日の夜より、日々夜々ひまを以て家書を作り、積んで十餘枚に達すれば之れを父母に送り、吾が思想感情、其他、日常の小事、東京の景況など書きつゞり、以てせめては父母をなぐさむるを得んと企を立て、實行を始めたなり、初めの一首は家書に認めし者なり、ア、之れ吾の事業の一なり、恩愛の至情は人間の眞事、人生の意味、愛情至情を除いて何かある。天地悠々、寂寞の色人間生を此の瞬間に寄す、期する所は至愛のみ。

吾に此時、彼時の時なく。吾に此時の吾、彼時の吾なく、吾に此の場合の吾、彼の場合の吾なきを期す、只だ理想の愛、誠、勞の理想のみ。さり乍ら爾、人と語る時は如何、會に列なし時は如何、書を読む時は如何、友を訪ねし時は如何、空談する時は如何。

昨日自由山社に出席す。論文一ツ雜報四ツを書き、歸路阿部氏に立寄り、歸る途中阿部氏來る、夜遅けて家書及び古見氏への書狀を認む、此日罪と悔を悟る。

同書に一同時に靈電を送る者は一電をも賤ずして歸る一てふ魯西亞の傳を讀む、之れ二電を追ふ者一電を獲ずの誠と同意なれども吾之を讀み、切に身にあたるを覺えしは何をや、吾が多情多感な悟れば也、吾固より勞作せざる可からず、只だ分と境遇に應じて一より二に進む可し、一事に全力をこむ可し、收二胃病保養のため昨日上方に轉居す、此より吾一室一人、談ず可き友もなき境遇となる、其の結果は如何。

十六日。昨日午前東萊博義を讀む、頗重く氣鬱し、天又た曇りて不快の念に堪へず、自由社には出席せまじと考へ、晝食後罪と罰に讀む、窓外滴聲静なり、春雨蕭々、則ち愈々出席せざるに決し、罪と罰を讀み續け、四時頃讀み了はる、社會と犯罪てふ事に付き得る所少なからず、薄暮散步。七時教會祈禱會に列す。植村正久氏の舊約

聖書に就ての談話あり、舊約書の事は初めて聞きたるを以て大に益したり、又た研究の念起る、歸て讀書を試みしと雖も頭重うして堪へず、眼に就く。本日午前、只今無限の幽秋襲來し、情緒亂れて收む可からず、靜かにわれ生の意味を考ふ。政界の奔走は吾の好む所に非ず、人生の説明、人間の評語、宇宙の考察は吾望む可きなり、然れども吾れ之に適するや否や。

▽自由黨と改進黨の批評は如何、よしたか止めたる乎。

▽「人生を批評」する眼と筆法を以て政界現象は評す可からざる乎。

▽ア、吾に虚榮、虚名の念、内に燃ゆ、何んぞ靈の眼を有つを得んや。

▽ア、吾に養ふ可きの父母あり。ア、吾に境遇あり。

▽父母、故郷に吾の立身出世、乃ち社會的富貴光榮を祈りて待つ。之れ「吾」なる傳記

に取りて如何に大なる事實ぞ。

此の事實は吾に如何なる煩悶苦痛を與ふるぞ、然れど吾學び得たり、父母を安んずるには至情至愛あり。

吾は餓るも何ぞ懼れん、父母は餓るしむ可か

らず、吾は憂鬱幽思に沈むに何ぞ厭はん。父母をして泣かしむ可からず。

人は己れの欲する所、尤も適する所に適く能はず。

十七日。今朝丁吉治氏を氏の寓所に訪ひ、金森氏の吾に對する意嚮を尋問したるに、彼は明白ならず、彼は吾を試験中の事とか。本日は出社することに決す、以後毎日日出社致す可しと決心す。此の決心や極めて悲しき決心なり、吾は社會的地位を得ざる可からず、社會的地位は漸を以てせざるを得ず、然り吾は社會的に立つ足場は漸を期して築く可し。然らば内部の理想と衝突して煩悶を受くる少なかる可し。

昨日午後食後上野公園圖書館に行く、自由黨及改進黨の材料を得んが爲めなり。材料となりさうな書籍を寫して歸る。歸路水谷氏を訪ひ、同道して歸宅、牛肉を煮て共に食す。日暮れて共に外出す、吾は牛込に行く積りなりし也、遂に水谷氏より九段寄席に誘はれ、遂に義太夫を聴く。

▽歸路幽鬱幽思、煩悶悲哀措く能はず、天を仰いで呖嘆止む能はず、吾の力足らず、

吾の天才の吾が希望にそぐはざるを學べ、吾の極めて脆弱にして爲すに足らざるを慨嘆して嗚咽す。ア、堅志硬行は徒然のみ。歸宅後ワルツウオウオスを讀み慷慨措く能はず、分を惜み秒を吞む、感情は消え理想は立つ、浩然の靈氣は餒ゆ、ア、如何にせば可ならんか、一爾に教ふ。

▽爾は修養默學の時なり、外出する勿れ、談話する勿れ、多岐なる勿れ、筆居讀書せよ、然り注思幽想、讀書筆硯の時を多くせよ。

今朝今井忠治氏の書狀來る、少壯者と社會生活の「材料」たる可し、彼れ曰く僕は漸く煩悶の氣に動かさる、是に於て僕は感奮、幸にも此煩悶出來りたることを云々、少壯、理想——社會——煩悶——ア、其の後

は如何、二年の後は如何、十年の後は如何、二十年の後は如何、抑も吾自らは如何。吾答書す、中に曰く、煩悶は心靈の鼓動也、良心の刺戟也、人間秘密の音樂也、人若し之を御すに健猛なる意志の力を以てし、精勵苦闘せば精神上一段の進歩を見ん云々。

周囲を見回せば、思想感情の四邊上下を見回せば。

十八日。吾は昨夜今朝までに掛けて吾を攪らし、吾を失望せしめ、吾をして自暴自棄の念に到らしめ、吾をして叫びつ泣きつせしめた原因を詳細に研究し置かざる可からず、以て二度と再びかゝる境に墮落せざる様後を諒めざる可からず、然り始めて精密に昨今の吾を解剖し來れ。

昨夜自由社より歸りして食をすまし家書を認め、讀書に取り掛りたり。吾は充分讀書する意氣込を以て取掛りたり、吾は近來讀書の念勃々禁ず可からず、昨日の記を見よ、爾は修養學の時なり云々と書しあり、然れども此の讀書の念や果して如何なる性質を有する者なる乎、先づ此の邊より探明し來らざる可からず。

一言以て云へば功名心の變形のみ、功名に急なる情の變形のみ。

吾は切に時間を惜むべきを感じ、人生の勞働なるを信ずるが故に、讀書の念もこれより出でし者なりと黙認したりし也。然れども詳かに分析し來れば其の然らざるを見る也。吾は衷心實に功名に急なる也。吾は八日の記に

堅く功名に急なるを諒め置けり。然れども吾は其の時何故に吾は功名に急なるに至りし乎、自ら理想に立つの外人生の空なるを信じ乍ら、然り一愛と信と勞作の外に人生の意味なく、功名の畢竟空の空なるを自ら發明し心悟自得し乍ら、猶ほ且つ岌々追々安する能はずして功名に急なるは何故なるかの理を極めざりし也、乃ち吾は猶ほ偉大の信徒なりし也。境遇の奴隸なりし也、境遇は吾れをして「偉大」ならざれば満足なる能はざらしめ、「偉大」を心酔するの念は「愛と信と勞作」の眞意を忘れしめたり。「愛と信と勞作」は夫れ只だ生命なり、其の外に偉大なく平凡なし、天稟自ら定まれるジニヤスあり、天命自ら命じたる命運あり、人は只だ分に應じて「愛と信と勞作」の生命を信じ、之れが實踐を務むるのみ、以て其の肉の瞬間の生命を了へて靈の永久の生命に入るのみ。嘗て吾の信仰は此の如くなりし、然れども昨今は不知不知の間

に偉大の信者とはなりけり、之れ全く社會生活の大魔力の致す所なり。

「偉大」の信者、言ひ換ふれば功名宗の信徒。かく吾は功名信者となり、理想々々と叫ぶ間に、功名之れ急なる卑む可き大とは化し居

たる也、然れども吾れをして自ら責るに激なるなく、公平に考へしめよ、然り猶ほ何處にか理想の神は全く吾を見捨てざる所もありし也。

かゝる吾の讀書の念や知る可きのみ、されど兎も角も昨夜はやつきとなりて書に對したり、唯ち佛國革命史（をライエ氏の）を讀み始めたり、かゝる處に今井忠治氏は來れり、談話せり。其の談話の中には吾は一ツの述懐を吐けり。曰く、今朝君に與へたる書狀にある如く余は余のジニヤスを疑ふなり、余は到底何等の事もなし能はざる可しと。や、暫くして余又た曰く、余は眞に余のエンナージーの乏しきを知るなり。余は自ら一種の悲哀の情を以て此の語をもらせり。

今井氏は去れり、吾は再び「革命史」の讀書に取りかゝれり、叱咤自らの情氣を鞭つて取りかゝれり、然れども「革命史」は余には餘りに難書也、余は英雄論を解せし如き易きを以て解する能はざりし也、解する能はず而も眠の神はしきりに襲來せり。余は肉體の疲勞せるを知らざるにあらざりしも是に於てか大に吾の志氣猛氣の衰へしを哀み、吾にエナージーの足らざるを痛恨せり。最初讀書の

（314）

念はかくの如く、而して其の讀書の結果や此の如し。余の心は失望と不平と怨恨とを以て満たされたなり、余は自暴自棄したり。暫らく眠るべしとて眠に就けり。起き上がれり。夜は已に深く四顧寂々たり。讀書を始めたり。頭腦は朦々昏々理解力を全く消滅し去れるに似たり。余は悲叫せり。瞑想に沈みたり、失望と共に眠に陥れり。今朝目醒し時は九時なりき。種々雑多の夢に襲はれて起き上りたり、頭は重くして病人の如く然り、然り吾は病人なり。

書に對したり、然れども心緒は亂れて書に意味なし。憤然立ち上れり。斷然外出して心持を改む可しと衣服を着換へたり。再び悲叫して卒倒し聲を放て上帝を呼びたり、ア上帝の救を喚びたり。心機一轉、吾は忽然として偉大信者の夢を破り、安心立命、嘗て築きなせる安心立命の光に觸れたり。吾の病は本復せり。机に對つて靜に瞑想せり。悟り得たり吾は偉大の信者、功名宗の信徒たりし也、私の煩悶は全く其の源茲に發したるを見出だせり。愛と信と勞作、余は此の理想に還れり。吾な還らざる可からず、然らずんば吾は狂死すべし。自誠の語を白紙に

大書して楣端に掲げて曰く、「天命を信ぜよ、自らの力を知れ、能ふだけを爲せ、命に安ぜよ。」

吾、之を得たり、則ち吾が昨今の讀書の念は一讀書せざる可からずしてふ意志の命令に外ならざりき、然れど意志の命令は外形にのみ服従せらるゝと雖も、容易に感情までも支配する能はず、如かず讀書を樂まんには。然れども讀書を樂むてふ幸福は眞理善美の眞實忠誠なる探求者にあらざる以上は享くるを得ざる寶なり。昨年、吾れ此の寶を得たり、由りて以てカライルの「英雄論」を讀むことを得、王陽明の詩を讀むを得、新約聖書を讀むを得、ウオルズウオルスを讀むを得たり、昨今は此の寶を失ひたり、社會生活の大魔力は此の寶を奪ひ去れり、吾は必ず之れを恢復せざる可からず。

十九日 昨日午後エマソン「代表人論」を讀み始め大に面白味を覺えたり。薄暮引頭氏を訪ふ、水谷氏來り、今井忠治氏亦た來る、十時頃歸宅す。エマソンを讀み續く。床中に在りてハムレットを讀む。萬感動もすれば胸を痺して來り、暗涙に堪へ

ざるしばしなり。吾斷然文筆の人たる可きや、政治の人たる可きやの疑問は吾を五里霧中に迷はしむ。其何れに決するかは今にして斷ず可からずと雖も、何れに決するにせよ十分なる理由なかる可からず。十分研究解剖する所あらざる可からず。

二十日 午後、薄暮青年文學社より歸り來りて此の記を書す。吾は教師を希望す。吾は出來る丈の教師たる可し、人生の批評は吾が事業たる可し。

ア、吾は人情の爲めに此の生命を投ぜん、見よ土を掘て一生を終る者あり、絶海の孤島に一生を終る者あり。神よ助け給へ。

ア、爾の周邊を見よ、如何に悲しき世界よ！爾の友等を見よ、如何に悲しき人間の運命。二十一日。自狀す、自白す、虚榮の妄想、僥倖の浮念は少壯者の常なる如く、吾にも亦た往時如し。此、之れ、悉く社會生活の魔力なり、吾が思想は社會生活の爲めに動き、吾

感情は社會生活の爲めに清く、之れを以て虚榮僥倖の妄想浮念より脱する能はず、衰

社會生活の爲めに心醉せんよりは、彼の浮世の夢をかこちて理世を捨てたる内行たる方、如何に高尚なる可き、如何に理想なる可き、此の社會に居て吾の勞働せんと欲するは、社會生活の上に光榮富裕をつかみ取らんとに非らず、實に吾が理想の存在を信ぜればなり。

人間心靈の叫聲を聽きて世を教へんと希望する者は、爾自ら先づ靈の命を得べし。

昨夜は吾に取りて、極めて主要の夜なりけり。昨夜吾は斷然文學を以て世に立たんことを決心せり。則ち人間の教師一として吾が力に能ふだけを務めて此の世を終ることは最も吾が命運に適し、吾が生を値するを信じたり、吾政界を思むに非ざるも、吾は政界に立つ以上はやゝもすれば權勢を愛し、虚榮を願ふ爲めに狂奔するを免ぬかれずと信ずればなり。

吾は自ら大なる名譽高き文學者を希望するに非ず、文筆を以て小學校教師たるを得ば

計ずべし、只だヒュマニテイの自然の聲を聞き、愛と誠と謙遜の眞理を吾が能くするだけ世に教ふるを得ば吾が望み足れり。

あゝシニクスピアリ、ゲエテ、ユーゴー、新聞記者、大臣高官、グラツドストン、ピット、ナポレオン、クロムウエル、文學者、かゝる題目に由て築かれたる虚榮城中を脱して、かの三家村里、若しくは佐賀村岩城山下の同胞人類の生命命運を想へ、人生果して何の意ぞ。

多くの歴史は虚榮の歴史なり。パニテイの記録なり。人類眞の歴史は山嶽海濱の小民に問へ、哲學史と文學史と政權史と文明史の外に小民史を加へよ、人類の歴史始めて全からん。

多くの歴史は歴史家の歴史なり。人間心靈、ヒュマニテイの眞理を記録せよ。學者の歴史なり、政治家の歴史なり、彼等頭禪の樓閣のみ。傳記は斷じて歴史より貴し。

昨夜吾は左の章句を幾枚か紙に大書して吾の楣端、右壁にはり下げ以て思想感情の光

となしたり。

其一に曰く、汝自身の思ふを信ずる、汝の内心に於て、之れ吾に眞理なりと思ふ者は、凡て人にも眞理なりと信ずる事。是れぞジニオス也。ニメルソン自信論より其一に曰く、熱心は生命なり。シムレル
I be me a sincere man; an original-
man, Son of Nature, original-man.

カーライル

其一に曰く、I wish to be considered as a teacher as a child. ウォルズウォルズ

其一に曰く、之れ二月十八日の自誠中に掲げたる、エメルソン 自信論の綱首に出でたる詩なり。

其一に曰く、The still, sad music of humanity. ウォルズウォルズ

其一に曰く、吾はシエクスピリアに非ず、吾はゲーテに非ず、吾はユーゴーに非ず、吾はカーライルに非ず、吾はウォールズ

オースに非ず、孔子に非ず、佛に非ず、吾は吾也、吾を生む者は神、吾を育つる者は宇宙、吾を養ふ者は人情。

以上此の如し。吾は之れに由て吾自らの思

想感情の傳記を知る也。

只だ吾自ら吾に望む、願くは堅き信仰あらしめよ、倦まざる勞働あらしめよ、健猛なる意志の力あらしめよ、爾の行爲先づ理想に適はしめよ、然る後教ふるの教師たれ。

書て曰く、生死に對するヒュマニティーの聲、人生に對するヒュマニティーの聲、人性に對し、人世に對するヒュマニティーの叫聲、榮枯盛衰に對するヒュマニティーの聲、過去に對するヒュマニティーの聲、社會困厄の悲運に對する聲、戀愛に對する聲、山川花月等天然に對する人情の聲、故郷に對する聲、父母兄弟朋友に對する聲、妻子に對する聲、天地悠悠々宇宙茫茫々に對する聲、自國に對する聲、人類進歩の大氣運に打たれて發する鬱勃痛烈なるヒュマニティーの壯調、理想に向て叫ばれたる悲壯慷慨なるヒュマニティーの聲、吾人は之を聴て之を教へん事を希望す。諸の哲人詩人より之れを聞く可し、現實の目撃より之れを聞く可し、聞て而して之れを世に教ふ、之れ吾の希望なり。

未だ何等痛激なる社會生活の困厄の來たら

ぬ先に其の來る可きを懼れて、吾が心中動もすれば朋友に依頼せんと欲する根性あり、吾がジョンソンの學ぶ能はざる乎。

主動的な能はず、故に此の卑屈心あり、堅く信仰に立たば笑て生をあらゆる困厄の中に送るを得ん、困厄は覺悟の前ならざる可からず。

徳富健次郎君著平民叢書の一、「十九世紀の大勢」を讀む。

二十三日、午前。一昨夜來昨日にかけての事實を記載して、次に思想史を以てす可し。

一昨夜丁吉治氏來訪せらる、丁の曰く君は寧ろ文學者たれと、何を以てかく言ひしか、吾の言語や動もすれば胸中の決心を漏せばなる可し。丁吉治氏來るや「十九世紀の大勢」を讀み了り、廿一日の記、後半を書す。

廿二日午前收二來る、晝飯を共にして歸宅す、中桐氏に一書を裁して之れを收二に託し半圓借用を依頼す、午後自由社に出席す。

一室に閉ぢこもりて沈思冥想して大に得る所ありたり、歸路今井忠治氏を訪ふ、氏今夜吾が宅に來るべしと約束せしかば直ちに歸宅す、書すきは灰色の天氣、今は薄暮と黒雲と

共に鼠色の天氣に凝じ物寂し、夢の如き思想にふけりて歸る。歸りて一番町教會祈禱會に出席し、植村正久氏の「路得記」を聴き、吾祈禱す。吾が國民の家庭の幸福平和と愛、神の光に由て作られんことを祈る、路得記に感じ轉じて吾國民の家庭を懐ひ、深く感動する所ありたればなり。歸宅すれば已に今井忠治氏あり、快談して九時半頃歸らる、テイン文學史「カーライルの篇」を讀み始む。床に在りて近松門左の戯曲を讀む、十一時過ぎ眠る。

丁氏來るや、しきりに吾が昨夜はり置きし自誠の警句を見る、昨朝吾悉くはぎとりて捨つ、自ら薄志を恥づれども亦た、大におもはゆき限りなればなり、吾が心に銘し肝にはりつけ置くのゆかしきに如かず。

昨日自由社の一室に在り、冷靜なる理性に由りて一昨夜來昨朝迄の吾を研究して、大に吾の誤れるを發明したり、左に。吾若し激昂憤懣、悲叫せる節は吾の思想感情極めて高尚勇快なれども、一度び平靜に復する時は忽ち肉情の志想に墜つ、由て吾の

決心の極めて健全ならざるを發見したり。

されば讀書の念も人情を聴き、眞理を探ぐる

を第一の樂とするに非らずして、何にか早

く一著述でもして見たきが先きだつを發見し

たり、之れ何等の不健全なる者ぞや。蓋し

吾の著述々々の欲情かく急なるも亦た故な

きにあらず、生活の困厄後にせまればなり、

されど吾大にあやまれり、生活の困厄來た

らば來る可し、寧ろヒュ머니イの秘密を

吾が心より聞くを得て却て妙ならん、吾が

理想の信仰を試験するを得て却て妙ならん、

吾は只讀書するにも一心不亂、ヒュウマニテ

ーと眞理とを求むれば足る天若し吾に力を

添へ賜はゞ期せずして著述も出來ん。

ア、一に吾が日常の思想感情、妄想の薄弱

にして不健全なるを嘆ず。

▽冷靜なる意志の力を健猛にして悠然とし

て社會生活の困厄に當り、熱情以て讀書に

従事せん、神は必ず助け給はん。

人情、眞理、探求的大精神に充たされん。

高きも其の實蹟に却て其人の能ふ丈けより

も低く少なし。

能ふ丈とは能ふ丈けなり、固より其度は知れ

難し、只だ之れ妄想となりて健全に一步一歩

の勞働的道念を指す者也。

人はクリストたる可く、又た孔孟たる可く、

エマルソンたる可し、彼れ人間なればなり、

然れどもクリスト、佛の類たるを得ずと

雖も毫も恥づる所なし、其人にして全心全

力を注ぎて一生事業に當りしならば。何と

ならば渠は能ふ丈けをなしたればなり。

▽人間は内より成長して外に發達し、松は

松丈け樟は樟丈け、杉は杉丈の大に成長す。

妄想虚想は梅にして松の大を望むなり。其

の着眼は外にあり、かゝる人は己を外よ

りぬり固めて大ならしめんと欲する也、己

の本質は却て枯れ死して形體も亦た決して

て成長せざるなり。内より成長せしめよ、

爾の培養を根より、葉より、天より、地よ

り、黙々の中に健全なる發育を遂げよ。神は梅にも松にも、否な草にも菌にも平等に見賜ふ、只だ成長も能ふ丈け成長せよ。

懐ふの情に堪へず、默然涙を、む。ア、悲

痛深絶の人情の聲は雷の父母の中に聽かれ

ん、道は近きに在り、人情は近きに在り、眞

理は近きに在り。理想は近きに在り。吾が母

の故郷、吾の生地、鏡子に旅行の念動く、悲し

き深き人情の叫びを聴かんが爲めなり。

昨日自由社より歸るや、書を裁して國元を送

る、牧二寄宿舎入舎の相談也。其他色々。

中に一首、

今更らに此世の風の身に沁みて、

いと悲しき父母のひざ。

あゝ五年は經過せり、十年は經過せり、二

十年餘は經過せり、父老い母老い吾も亦た壯

年に達して、尙ほ且つ父母を安ずる能はず、

理想の責任徒らに重く、燈下の悲慨空しく深

し、切に回顧して父母の膝下を懐ふ。

二十四日。此の記を書するに先きだちて左に

一首、

弱ければ弱きに付けて猶ほ弱く、

ア、昨朝は意志の冷靜健猛たらんことを自

若し斯の如くして日一日を送らば、狂死に
あらずんば墮落なり。

狂死か墮落か、狂死猶ほ可、墮落して生を
放棄に偷むに至ては、神明の罰終に如何。

思ふに精神靈性の弱きはたま／＼以て身體
の衰弱を招き、狂死に非ず、墮落に非ず、

元より享業成功に非ず、何事も成し能はず、
以て命を殞さんとする如きに了らんも計る
可からず。

二十六日、夜。

二十四日、二十五日は経過し二十六日も経過
せんとす、文學者、教師たる希望を立て、よ
り以來已に殆んど一週間は経過せんとして讀
書も沈思も幾何も致さず、吾に進歩の見る可
きなし。

吾今は情激し居らぬなり。
昨日も今日も平々の中に経過せり、別に思想
史に筆す可きなし。

否！ 筆す可きなきは則ち筆すべきある所以
に非ずや、何となれば平々に経過されて思想
史に特筆す可き者なきは、其の事實なるに於
て變らざればなり。

昨日午前田口卯吉氏を訪へり、歸路舊友松崎

壽三氏を訪ひ、午後、田口氏との問答を筆記
して自由社に出席し、歸路今井忠治氏を訪
ひ、一泊して今朝歸宅し、教會に出席して
午後田村氏來り、今井氏來り、收二來り、四
人同伴上野公園に散歩す。今井と共に歸路水
谷氏を訪ひ午後七時歸宅、長文の家書を書き
了りて、二十六日の記を筆し始めた。以上

の事實、不可思議！ 茫々空々として経過し
ぬ、固より吾學び得たる事少なきに非ず、去
り乍ら吾は實際の吾が思想に適せざるを發見
したり、吾には沈思と讀書と最も適す。

事務的にはあらず、讀書的にもあらず、吾此
頃の生命の時間程酸味なる者はなし。或は
其の一をとらざる可からず。

吾は讀書的を取る可し。「讀書論」を得たり。
左に、

(然れども疲れはて、睡魔の襲來甚だし、
眠る可し)

二十七日。臥床に入る前に此記を書す。
昨夜の記の最後に「讀書論」を左に記さんとあ
りたれども別に書かざる可し。然れども、能
く考ふれば是れも思想史の材料たる可けれ
ば其大要を書す可し。曰く、

人は此の天地、此の社會、其の境遇の裡に在

る以上は何にか讀みつゝあるなり、何にか解
釋しつゝあるなり、何にか習ひつゝあるなり、
固より無意にして然る者多し。片時たりとも
(睡眠時間を除き)讀まずしては居らぬなり、
或人は盜賊となり、或人は乞食となり、或は
敗徳の人となり、或は虚榮の人となり、或
は偽善の人となる、皆讀みし結果なり。

昔の人の中に高尚深大の思想感情を書と
め置きたる者あり、吾若し書を讀まば高尚
深大の思想と感情を得ん。

萬物皆な吾に備はる、讀書する時は此等の者
其の固有の發育をとぐ。

春風滋雨は草木を生育せしむる如く、高尚
深大の思想書は我が靈を成長せしむ。

本日午前「バイブル」を讀み、「平家物語」を
讀む。午後自由社に出席す。路、民友社に至
り徳富猪一郎に會ふ、夜、家庭雜誌に寄送す
可き「養子論」を作る、エマルソンの「大人論」
を讀む。

述懐を書するの念切々たり、必ず書く可
し。

家庭雜誌社より原稿料として金壹圓を送りたりとのしらせ來たりしも現金は來らず。

文章は修練せざる可からず、之れ吾が目的の一なり。何となれば吾若し吾が教に人民の耳を傾けしめんと欲せば、必ず絶妙の文章を以てせざる可からざれば也。

二十八日。夜は雨けぬ。四面寂として音なし、窓の外ソボくと雨降り始めたり。ウオルズウオルスの詩「インデペンデンス」を讀了り、將に臥床に入らんとす。收二眠りて傍にあり、吾心閑悠として又た炭火の悲煩なし。ア、ウオルズウオルスは吾が心を歌ひたり。吾が心は強し、然り吾が努力勉勵して天職を盡すが故に強し。吾何を爲す可き、然り吾は教ふ可きなり。

父より書狀來る、中に曰く、自分共は慾は聊も無之、朝夕兩人の成長を樂しむが上戸に酒下戸に牡丹餅の如し、御推察あれ」と。吾れ之を讀んで泣く、ア、父、親、子、何の意味ぞ、何の情ぞ、閑なる哉人生の愛、之を懷はば泣かさざらんと欲するも得ず。

父母、收二の病を憂ひて措かず、一先歸村をすむ、收二歸村する事に決す。明朝伴うて徳富猪一郎氏を訪ふ可しとて一宿す。

家庭雜誌投稿の爲め、「家庭小話」を書す。吉見をば様より書狀來る。

本日三上方を訪ふ、齋宮萬之助の死亡を聞き、彼れ憐れの少年は終に死せり。ア、死乎死乎、彼は後に不幸の母を殘して死せり。

回顧して、吾嘗て彼の家に下宿せし當年の事を思へば、茫として夢に似たり。而して彼の家は夢の裡に零落より零落に陥り行くなり。

ウオルズウオルスの詩想と、吾が時々胸を衝きし感情と全く同一の形を有する者あり、さり乍ら其の性質に於ては多少異なるを見る、其の差異は如何。

三十日。

昨日より今日迄の二日の吾の生命を批評研究し置かざる可からず、以て反省の資と爲さざる可からず。

昨日午前雨を衝て收二と共に徳富猪一郎氏を氷川の宅に訪ふ、今日に至る迄で猶ほ氏を忘

る能はず、氏は實に吾の偶像の如し、吾自らも實は怪しき程なり、今少しく氏と吾を思想感情との關係に就て考察する所あらんと欲す、何となれば之れまた吾が思想心靈の歴史に至大の關係あるを以てなり。其の讀む書籍、其の處する境遇が思想感情に至大の關係ありとすれば、其の長者として交はる朋友は又た極めて其の關係する所大ならざる可からず。

書て見たれど極めて淺薄にして見るに足らず、又た大にシンセリテイを缺くを以て他日大に公平無私に論究す可し、極めて面白き問題なり。(約束)

三十一日、朝、周囲の境遇と吾との關係亂れて、吾自ら反省するに苦しむ。周囲は吾を役したるに非ざる乎、反省せよ意氣の本月の初め頃に比して大に衰へたるを見ずや。和平靜念は即ち之れ有り、然れども熱心の度に於て如何假令ば一擧一動理想の上に働くてふ意氣の如きは、近日起らざる也。

一昨日徳富氏より「ルーソー(モルレー氏著)傳」を借りて歸る、已に緒言を數回讀了して

大に得る所ありたり。左の句の如きは殊に吾を動かしたり。曰、

Faith in a divine power, devout obedience to its supposed will, hope of eschatology, seekable reward, there were the springs of the old movement. Undivided love of our fellows, steadfast faith in human nature, steadfast search after justice, firm aspiration towards improvement, and generous contentment in the hope that others may reap whatever reward may be, there are the springs of the new.

中殊に、人性に對する信仰にて、吾が近日の感情を道破して一種の光を得たる心地す。

吾れ詩人の本分を考ふるに、此の人間の人性が人間胸臆の深底に於て發する幽音悲調を聞いて之れを説明し、之れを教ふるに在り、則ち此の幽音悲調はクリストよりも、孔子よりも、ウオルフ・ウオルスよりも、又たシエクスピア、王陽明等よりも聞くを得べし、又た自らの靈よりも聞くを得べし、聞て而して之れを發揮する所以は則ち以て人間を教ふる所

以也。

「家庭小話」一を食を起稿中也。之れ又た吾が文章の習練なるが故に、大に力を用ひて作るを要すと決心せり。

一昨夜今井忠治氏來る、大にウオルズウオルスを談ず。

此頃「インデペンデンス」を熟讀して得る所ありたり。

昨日自由社に到りて又たウオルズウオルス中

の Influence of natural objects を讀み始め purifying の字に就て大に得る所あり。社會生活の渦中にストラッグルする人間の感情、思想より人性自然の幽音悲調を聞かざる可からず。

吾自由社に出席して一室に衆と雜居す、衆喧笑し、執務し、紛雜にして混濁たり、吾傍より此の中の詩歌的眞理を見出し、人生人性の智識を得んことを努めんと欲する也。

社會、人生、人性の意味の發見し難きを嘆ずる勿れ、表面の紛雜に欺かるゝ勿れ、社會、

人生の濱に立ちて茫として自失する勿れ、一個人の傳記を研究せよ、其の思想感情の變化轉移を研究せよ、然らば自ら光明と幽音悲調とを得む。

吾は如何にもして吾が耳、吾が心を以て人生、人性、自然、天地の新たなる、音楽に接せんことを希ふ、ウオルズウオルスよりも、ゲーテよりも、ミルトンよりも、王陽明よりも、ユーゴーよりも、カライルよりも、別に進歩せる説明を得ざる可からず、一層深遠高遠なる、ポエチカルリスに悟へ感得せんことを希ふ、何となれば、吾は之れ等の詩人哲人の説明解釋音調に接すると雖も、何となく物足らぬ心地して、人生、人情の意味の猶ほ一層深きを感じればなり。

默せよ聽け、人情の音を。

人間とは自分の如き者なり、餘りに其の前に茫然たる勿れ、社會とは人間の集合せる所なり。

幽音悲調は聴く許りにては教訓たるを得ざる可し、宜しく説明法を修練考究す可し、ジョンソンが所謂ゆるゝ其の文致として眞の思想

に相違せしめんが爲めに、不測の修練によりて詞のありとある 妙と、風調のありとある 精進とに熟せざる可からず」との謂ひ之れなり、觀察は人事と自然とを問はず尤も精密ならざる可からず、則ち人事の内に自然の中に人情は偶出すれば也。故に人情を教へんと欲する必ず人事と自然との精妙なる描寫を要す、之れを描寫せんと欲する則ち觀察を要す。

吾今年こそ十分春を觀察し、春を學ぶ可し。

先に向く、人間とは自分の如き者なり、餘りに其の前に茫然たる勿れと言ひしと雖も、自分の前にすら實に茫然として「吾とは何ぞ」と問ふことの屢なるを思へば、人間、人生、人性、人情、豈に知り易からんや。

本日午後自由社に出席したれども何事も爲さず、只だ出でしのみ、家信を認む、電話器の事など書す。

丁氏來りて自由社より吾に三圓を給料として送る、願て微笑一番措く能はず、嘗て四圓五十錢の小學教員を嗤ひ、八圓五十錢の新聞記者を嘲りし者、今此の如し。三圓の新聞記

者は寧ろ難れむ可きかな、然れども亦と思へば吾の給料として他より金を受けしは實に此の三圓が嚆矢なる事を記憶し置く可し。

三圓にては實に下宿料も拂ふ能はざる也、さり年し實を言へば吾は金を得る爲めに全力を注がざりし也、金を得る爲めに全力を注がざると雖も、生を償ひする丈の義務を此の世に盡し、子孫に盡し、人間に盡し、神に盡すが爲めには實に全力を注いで努め居るなり。然かれども社會はかゝる全力には、金錢を拂はざる也。

然れども金錢は全く不道理には循環せざるなり。社會は寧ろ不平子が想像するよりも公平に其の富を分配する也。然れども吾は、肉體のみの人を憐まざるを得ず。然るに人間悉く肉體を離る能はず、即ちユーゴの所謂ゆる、

Man has a body which is at once his burden and his temptation, he frings it along and yields to it.

名言なり。吾も亦た遂に肉體を有する也。否な吾より以外の肉體の負擔をも有する也。肉體にも全然從ふ能はず、さりとして精神にも

全然從ふ能はず、吾は不測の人となり、或る人なりとす。吾は勿論肉體を捨てざる可からず、吾肉を捨てず何と以て世人を救ふるを得ん。然れども人は肉體を有す、肉體を有する人の上に同情を以て見ざる可からず、人情とは、肉體と精神との持主なる幽音悲調なることを知らざるべからず。

三月も亦た過ぎぬ。梅は散り初め櫻將に綻びんとす、日月逝て止まず三年の後如何、五年の後如何、十年の後如何、廿年の後如何、將た百年の後如何。吾此の世に在らず、否た！吾と同時代の人凡て此の世に在らず、ア、蜉蝣の如く生きて蜉蝣の如く消え逝く、人間の存在！此の存在を償ひする者實に只だ只だ愛のみ。

左の一首を以て三月を送る。

望もわちもせんすべもなし。

* * * * *

書翰

中桐確太郎氏に

與へしもの(其一)

中桐君足下親愛愛慕極りなき友なる中桐君足下

自由の兒は半ば束縛の絆にかゝりぬ。希望の兒は半ば失望の鬼に捕はれぬ。平和の兒は半ば煩悶の蛇に吞まれぬ。

自ら修養の足らざるを悔むこと幾度ぞ、頭上に天光依然たり。然れども顧みて心裡の暗黒なるを如何にせん。

天意實に淡々として測量すべくもあらず人間之事亦愈々幽玄不思議なり。理想は語り易く信仰は語り易しされど人間は知り難し人間は秘密なり自然の最底なり

二十一日夜今井忠治氏に送られて獨影肅然京を發したる彼は三十日の正午滿腹の不平等を殺して佐伯に入りぬ。

途に大久保氏を舟根に訪ふ氏傳うて彦根城に登臨す驟雨の湖水今猶目にのこる。

歸省三日の間、萬感何に由りてもらす可

き天地のモノトニイを感じ殆んど自ら失ひし事あり、小生在京の間に死去せし老嫗の墓と乙女の墓とを訪ひ死を思うて多感の小生幾度か泣きし。

途に商估を見、漁夫を見、水夫を見、兵卒を見、官吏を見、小兒を見、鳥を見、海を見、山を見、村落を見る、漠々たり人生の事の小生は人生の事を思うて實に漠漠たるを感ずるものなり。

佐伯の事未だ語り易からず小生は何處までも神の愛を信ずる故に何處までも忍耐する積りなれども自由を奪はるゝ事其の度を過ぎなば驟然として去らん。

されど自由は心の自由なり心神の愛を懷はゞ自由は至る處に在らん之れ小生の信仰なり。

嗚呼親愛なる友よ相遇ふや何れの時ぞ相語る何れの時ぞ、されど兩心相照らさば相離するも何の憾かあらん生も亦書を惜まざる可し、大兄生の孤獨をあはれまば金石の言を惜む勿れ、嗚呼天地に生る何の縁ぞ生まれ相違ふ何の縁ぞ、

相違ひ相語り相信じ相愛し相知る實に何の縁ぞ、小生が懷を寛うする者は實に友

愛なり。友あり遠方にあれども弟あり傍に在り之れ皆めてもの慰みなり早々

十月一日(二十六年) 哲夫

中桐確堂机下

中桐確太郎氏に

與へしもの(其二)

中桐君足下

君の端書は昨日拜讀致しぬ君が上京せる事は已に之を徳富氏より聞きたり實は君より何等の通知なきが故に怪しみ居るなり余は佐伯に着するや直に君に向て一書を飛ばし置きたるなり君は定て受取られたるなる可し而して君よりは何等の返事も來らず僕之を以て竊かに心配し居たるなり今端書に接し君も相變らず壯健なるを聞くを得、且つ君の住所も同じく

元のまゝなるも知れて至極安心致しぬ君よ安ぜよ洪水は随分甚だしかりしも吾等兄弟は只だ一回轉居して之を避けたるのみ別に一物の損害をも被らざりし也而し已に全く平日に復し又た洪水の跡さへも見るべからざる程に至りぬ大分縣

大分縣

下にては佐伯は水膏丸もかりし也。
君が目下の事條は未だ詳細に君より聞くを得ずと雖も徳富氏の手紙によりて多少は想像を掻き定めて御心配事ならん内に精神上の憂愁絶えず、外より色々の事條迫り来る、かゝる時ほど苦しき者なきは僕の已に経験せる所なるが故に君の目下をも同情し得る也徳富氏より聞けば君は民友社に入社致すとか僕甚だ喜ぶ也心からして祝する也民友社が他の一人を納るゝならば君ならんことを欲し君が或る社に入るならば民友社ならんことを希ふ又た君は民友社に入るに付きて僕に對し遠慮する處ありとか君のあくまで厚き友情は僕實に謝する處を知らず君がかくまでに僕を思はるゝは僕の信に感謝致す處なりされど此遠慮は實に無用にして且つ寧ろ理に當らざる事也之れに付きて僕の考は徳富に申し送りぬ徳富君は信義を重んずるの士なり。僕は只だ彼を信ず、而して又た先進として彼に託しぬ故に彼が僕に關して爲す事は決して疑はざる也故に君をして入社せしめたるは僕の手を拍つて喜ぶ處

たるに過ぎず。僕は只だ君が十分致に足るを伸ばされんことを希ふのみ僕は只だ之を祈るのみ。

聞く家庭叢書の編輯に當らるゝとか之れ實に面白き趣向なり又た君の親切にして同情に當むるの心は必ず此の重要な事業に適することを信ず。されど一言の忠告を聞き給へ。君笑ふ勿れ。——一言忠告申さん。君の文章今少しく自在にして優しからざれば恐らく此點に於て此事業に成功を傷くる處あらん僕已に此事は自ら家庭雜誌を書きて多少感じ居るなり徳富君は自ら得意の様子なれども實は僕餘り感服せず。福地源一郎氏の文章恐らく尤も適せん。家庭の文章に民友社流は到底今しばらくは不適當なり。

僕目下の事條は至極安靜なり學校の教授は日々務め居るなり先方の人々の氣に入らねば其れまでなりと初めより無頓着にかまへ只だ僕が盡す可き職分と信ずる事を正直に盡すが故に案外自由にして心安らかなりされど殆んど三十名計

りの青年少年が今もかくの如く感じ、教の下に在るを思は責任の重きを感ず、驚かに恐るゝ所あるなり、されど僕がすべては前に託し在るが故に事、清果の如何感化、影響は只だ神のまにまに僕は只だ爲すべきことをなすの外はありじ。

爾後精神上の苦悶は少しも止まず、信、神の愛に一任すと雖も猶ほ存在、人性、自然等の疑問と煩悶は少しも止まず。山に登りて感じ、谷を歩いて思ひ、夕陽を遠山に眺め、雷聲を晴雲に臨む時、他郷に在りて自然に親しく交はる人間を修より觀、人性を特別に感ずるに従ひ大なる煩悶は心底最も微なる邊より涌き來りて暫も止まず。されど余は此の煩悶を如何ともなす能はず、而して又決して之を避けず。之れ也。神が人間、此の愚かなる人間を教へ導き給ふ法則にして人間は之によりて進歩し俗情を破り俗眼をくちり俗習より脱して神を親しく明白に信じ且つ認め且つ愛し得るに至らしむる者なることを信ず

ればなり。

凡ての者は逝かん然り凡ての者は逝かん凡ての人は消えんに逝きし者の如く吾等凡ても悉く逝かん羅馬は逝きぬ。江戸は逝きぬ。パビロンは逝きぬ。鎌倉は逝きぬ。明治も亦忽ち逝かん。余は只だ光明にゆき光明に歸らんことを希ふのみ。己に逝かねばならぬ然り、然らば互に相愛して而して共に逝く可き也余が友に對する信仰は之れ也余は相並びて寂寞の墓地に立つ墓を見る時は則ちかく感ず。愛は葬られざるが故なり。

今や余は大にして深き意味を保つ書籍の前に立つなり。自然は余が今の境遇ほど余を取圍みて其美と其變化とを示したることはあらず。山あるなり。煙其半腹より立ち騰るなり。夕影其頂にのこるなり。月其上にかゝる也。泉其谷に流るゝ也。茅屋其麓に村を爲すなり。河あるなり。孤帆漁夫を想はしめ漁歌は漁夫を思はしむ明あるなり。山上より瞰下するを得べし。然らば人間社會の活畫は目下に看らるべし。寂寞の谷ある也。

以て沈思の場所たらしむ可し。海あるなり、煙波微茫吾をして一種の悠思と哀感とを惹起さしむ。天遠くして秋高し。余は日々此書籍を繙きつゝあるなり。而して余の爲に時々註解の勞をとる者はウオーツウオース、カーライル、エマルソン等に外ならず。

金子馬治氏に一書を出さんことを期して未だ果さず甚だ心にかゝり居る也大兄御面談の節は小生の事條御傳言を乞ふいづレ近日必らず一書を送らん吉田友吉氏にも其後無音に過ぎぬこれまた宜しく御傳言を乞ふ其他の知人皆宜しく願ふ也。收二余が傍に在り無事なり大兄に宜しくとの事也草々頓首。

十月二十五日 (二十六年)

哲 夫拜

中桐愛兄机下

中桐權太郎氏に

與へしもの(其三)

中桐君足下

久しく御ぶきた 仕り候
新年來り 舊年去り 日出度く 存じ候

一昨夜熊本より歸り候 大兄十二月二十七日御認めの玉章漸々刊讀致し候 舊年二十五日佐伯を發して歸省致し正月三日國元を發して熊本に參り高木正雄氏にも遇事を得久しぶりに快談仕り候 座上只だ大兄の在らざるを憾み候 水谷氏を訪ひなど致し都賀五日間の熊本滞在 住り十日歸路につき候 九州の中央を横斷致し三十六里の山路、二十九里を徒歩して歸り 彼途中阿蘇の高峰をも攀ち噴火山の荒寥にして而も偉大崇高なる 光景は僕をして少なからざる感懷を抱かしめ候

此度の旅行日数は二十日(十二月二十五日より正月三日に至る)なり
或は父母の膝下に笑ひもし泣きも致し
或は小女等の家を訪うて久しぶりに情話し或は爐を圍みて村落の悲慘史を聴き或は一家零落の跡を弔うて蒼壁老樹に哀悼の涙をそそぎ或は屠蘇一杯の醉に乗じて村長たちと議會解散を論じ或は午夜燈前 欺かざるの記をつゞり或は大宰府天滿宮を見物して端なく人生の流轉を感じ歴史の長流の煙波縹渺

に驚魂し或は噴火山等に乾坤の變移默
轉の恐ろしき事實を今更の如く直感し、
或は寥漠たる高原平野、四顧人なき處
兄弟並びて且つ歩し且つ語り、且つ黙し、
日暮れ道遠き哀感に打たれ或は木賃宿
に寒夢、天涯の故人を懐ひ、或は雪の如
き大霜を踏み蹴りて朝氣神を爽にして
は高談闊歩し聞かざるに聞き見ざるに
觀、二十日間の旅行回顧し來れば一卷
の詩篇も畜ならず面白し旅行は實に活
る學問なり。

一面天來の鏡

磨がかんと欲して雄心轉た昂がる

僕今日の警句は

希望、愛情、義務、不死、確信自立、
言葉は何時と同じ但し其の中の意味消息
に至りては時と共に人と共に異なる幸
に例の陳腐語となす勿れ

僕の今日希望あり雄心ありて失神なく苦
惱なし只だ「シンセリテイ」の量の足ら
ざるを感むのみ但しこれも勉めて止まず
んば自から其境に到らんことを期す、人
間凡て神の兒なればなり吾はプラトーの

腦の所有者、基督の心の所有者なればな
りこれ僕の自信なり。

「未來に作ふの過去は愚童なり、未來
なきの過去は呪詛なり」此句則ち「不老」

中の名言僕甚だ其の高想に感ず實は僕
此旅行中に在りて甚だ強くこれを感じ
たれば也但し僕は更に一轉して「愛は

過去なり現在なり未來なり」と書しぬ僕
旅行中、半夜燈前に認めたる欺かざるの

記一節を抄記して君の同情深き心情に
訴へんと欲す。

二日は早朝柳井を出で、麻郷村なる吉見
氏を訪ふ。午後あや嬢、及び春嬢を伴

うて平生町に寫眞を撮る。

少女の愛らしき、無邪氣なる實に吾をし

此少女等が何時までも少女にして吾の
何時までも青年なるを希ふの情に堪
へざらしむ、哀哉老や、樂のしき罪な
き時は過ぎねばならぬか吾をして只だ
回想に泣かしむるか。

嗚呼現在短かく回想の恨みは永き哉。

待つ者は來ざる如くにして忽ち來り、來

りし者は去りて永遠に歸らず、人生は悲

哀なる哉。然り若し人間の前途に永久の

希望なくんば人生は咒詛なる愚童をして
只だ愛に生かしめよ、愛は過よなり、現
在なり。未來なり。

以上は五日の夜熊本市の旅館に在りて
寒燈の下冥思忖々禁ず可からざる者あ
りて認めし也

此は余が實験の記なるが故に余が眞實の
感なれども文は勿論出たらめ故思ひの
ばも他人に逆はし難きを嘆す僕近來の詩
句と稱するも實は此等の實験より痛感
し來りたる者に候、少女は老ねばなら
ぬか吾言かくして恨み永し。少女は美、

愛、無罪の化身なればなり。

されど少女に注ぐ愛情を以て青苔の下

に眠る老嬢に注ぎ得べし。
多くの意味深き物語(實話を聞き録へ
共筆口上にて君に語る能はざるを如何
にせん。

ゲイテ(十二文豪の一つ)及び歴史研究法

(平民叢書の一つ)

右御求め被下まじくや御郵送願上げ候

代金は月末に送り申す可し御てかず乍ら
なる可く早く願候

收二よりも宜しくとの事に候
諸女に御遇ひの節は宜しく御傳言を乞ふ
也早々

正月十五日正午十二時
認め了はる(廿七年)

哲夫

中桐大兄貴下

中桐確太郎氏に

與へしもの(其四)

中桐君足下

君其後御變もなき事と存候小生不相
變壯健且つ幸福平和なり幸に御休念被
下度候。久敷君の書にも接する能はず
小生も亦無音に打過ぎ候段千萬心外
の事に候されど小生は暫時も君を忘る
る能はず、諸君より君が目下悩み苦みつ
つあるを傳聞することに悲み申候君
は小生に打明けざるが故に果して如何な
る煩悶に悩みつゝあるや知らずと雖も、
煩悶とは無名の暗黒なるが故に、實は君
に在りても報知説明の致し様のなき事と
は推察致し居候それに付けても小生は
如何にもして早く君が神の光明希望慰
安を認めらるゝに至らんことを時々教

會にて祈禱仕り候之れ小生が君に
對する有りのままの心情に御座候神
を認め信する能はずして此悠々の天地に
對し此紛々の人界に立つ唯れか悲叫煩悶
に沈まざるものぞ。

小生は刻々冥想感想しつゝあること以前
の如し、欺かざるの記も已に積んで三卷
となり今は四冊目と相成候。熟々自ら
の目下心情の傾向を察するに確かに大
なる進歩發達の途に在ることを信じ候。
日々心坎の進みゆくを覺え候。小生は人
性を信ず。故に何時か此の一個の吾も人
として眞の人の域に達し得べしと確信希
望致し居候。

小生は已に此世に於て吾何を爲す可きか
を知りたれば只だ其れに向て進むのみに
候。小生今や全く美妙でふものに感想す
るを得るに至りたるが如く自から覺え、
自から書して「嗚呼美妙! 余は爾の宗
教を信ずる也」と認め申候。小生今や自
由なり、幸福なり、平和なり、而して慨然
として爲すあらんことを欲するの猛氣日
に益々昂る。只だ默契暗盟したる諸女の
様子に眼を轉ずる時に於て痛恨に堪へざ

ることに候。吾人は眼前に濟はざる可
らざる世を控へ救はざる可からざる民を
目撃し乍ら、薄志弱行、偏執自誇、却つて
徒らに彼の頑迷不靈の輩にのみ此國民
を蹂躪するにまかす。小生思つて茲に至
る毎に茫然と泣き衾を蹴て起つこと幾
度ぞ、此事を大久保に告げて多少罵言を
加へ候。處彼れ却て小生を目して知己
に非ずなど申し來る、而して又た更らに
頼みに頼みたる兄に至りては今や自家の
煩悶に忙がしくて又た其他を知らざるも
の、如し、小生の痛恨豈に故なしとせん
や。兄の反省を希ふや切。天地悠悠を思
うて小我消滅して哀情起り、哀情起り
て平等を感じて慈愛の念油然而して心
底より湧き來る。是に於て一種言ふ可か
らざる謙遜の念生じ來り、其間言ふ可か
らざる慰安を覺え満足と平和とを感ず、
是に於て鬱勃として而も亡びざる美妙善
徳なるもの、天地に充つるあるを信じ遂
に至聖唯一の眞神の道光を認むるに至
る。小生の感想略此の如し、されどこれ
只だ讀書哲學を學びて製造したるものに
非ずして只だ小生が魂の自然の作用

活動の結果のみ。

過ぐる三日、神武祭、學生七八名と共に黒澤と申す山奥に櫻見に遠行致したる節、途々、出放題のこしを左の如し御一笑を乞ふ。

鶯のなくなる方をふりさけば

木の間がくれに花の散り行く。

櫻花名もなき山に咲き出で、

ゆかしさまさる鶯のこゑ。

菊の屋を見こしに山の花さきて

春日のどかに翁眠れり。

黒澤の櫻已に散り居たれば

散りにけり、いざこと問はん村人よ

花のさかりをいかにながめし。

此黒澤の櫻と申すは只だ二株あるのみなれども非常の老樹にして幾百年を経過せしとも知れず。其處をすこし離れたる路傍の草むらのうち甚だしく古びて角碎けたる古墳四五並び居たるを小生、見て學生諸子を顧みて此墳と彼の老櫻と何れが古き。諸子の曰く、勿論老櫻なるべしと。小生歸宅して此事を懐ひ一首を得たり。

櫻花なれこそ知らめ此はかに

眠り一人の花の影。

別に俗歌一つ

はるの日に駕りぶら／＼山家を訪へば

座邊の花まで迎へが三

兎も角も小生は大兄の言を待つこと一日

に非ず候若し語り得べくんば君が目下の内部のすべてを明かされたし。

歴史研究法は大兄遂に送らざるが故に廣島に立寄りたる節求め候一發發見する

處少なからずと雖實は理論なかり、高尚

尚斬新なるが故に十分解する能はず、但しこれ勿論素見一遍したるまでの故なら

ん熟讀の上は小生の見る處をも申上げんと存じ候

今夏は大兄西遊すべし此事は唯眞々君に

すむ君は東北の人なり若し君にして大阪以西に一步を踏み來らば蓋し發見する

處必ず少からずと存候小生今夏は

多分國元にて消光浴潮せんに、大兄來ら

ば出來る丈け面白き趣向を以て迎へ申さ

ん瀬戸の水光風景を見ずんば未だ日本

天然の美を語るに足らず僕が郷國の近傍

も又た風景見て美なり、君人に見の美を

知らざるべし松島はさてはと感てしむる

に見らざりしがこれ成た見易き事ある

こと也、其道程は君が來道の面影、

経費は決して多きを要せず、今日より君

多少用意して置いて是非都合をつけて來

遊せんことをすむ。以上、日々、頓首

二十七年四月六日 君 大拜

中桐確堂親兄相杖

中桐確太郎氏に

與へしもの(其五)

拜啓、御健の御事と奉賀候小生至極壯

なり御安心被下度候

小生が愛好して措かざる夏日は今將に其

絶頂に達す小生日々海水に浴し面白ろく

消光致し居候但し心中の沈鬱は少し

も展ぶる不能カーライル、ウオーツウオ

ース、テニソン等かじり讀みして儼かに

友を得たる心地に暮し候實は語るに足

る程の友、生きたる人間は居らざれば也。

一、井君に與ふてふ題にて筆にまかして

已に三十枚程書きたるものあり、要する

に、小生胸中の虹蜺を無頓着にもらし
 たるものに候。大兄の如き哲學者先生に
 はノンセンスとして一笑を値ひするに過
 ぎざる可しとは知れども二枚三枚づゝ送
 るが故に試みに御一字被下度候。

君は僕の親友にして知己なり、君僕を氣
 の毒と思ひ給へ僕は此の秋上京して又
 も生活の餓兒となり地上の街に迷は
 ざるを得ず已ぬる戦地上は束縛なり倅
 者の舞臺也。但し此等の言は不信の徒の
 言には相違なし只だ僕は事實を言ふの
 み。面白ろし面白ろし、カレージ！僕は

戦はん
 僕と共に上京する青年佐伯に三人若し
 くは四人あり皆レクリスチャン也此のう
 ちには實に氣の毒の人もあり、僕は出來
 る丈け此の人々の爲め盡力する積りに
 候。

大兄の上京は何時ぞや、上京せよ。
 秋までには上京せよ。東京は沙漠なり
 只だ友ありて暮すに堪ふ御互も相成る
 べくは相接近して暮したきものに候。僕
 に在りては大兄の如きは方なり情なり
 僕も亦大兄の力となり情となるべし友

なくば此の世は暮すに不堪。人は知らず
 僕には然り
 僕は多少失望せり僕は愚者のみ未熟も
 の也人生の薄弱は僕に在りては肉の如
 く血の如く否な春んど心の如く僕を支
 配す

されど實を言へば僕は未だ吾國に僕より
 も賢なる人を見る不能。恐らくは僕の眼
 の暗き故ならん神獨り智なり嗚呼然り神
 獨り支配す早々
 七十五日(二十七年)

確堂愛兒机下

哲夫

地上の生命は幻のみ影のみ天に光あ
 り永遠あり是れ眞理なり僕は此眞理を信
 ぜんとす也

中桐確太郎氏に

與へしもの(其六)

親愛なる友、君は如何にして居給ふかこ
 れ余の間はざらんと欲しても得ざる所
 なりこれを大久保に尋ねたり、不知と答
 へぬこれを甲子に尋ねたり、亦た不知ら
 ずと答へぬ
 余は本月三日の夜、國元を出立して六日

の夜着京致したり、
 途に大久保を訪うたり。
 本日金子來りぬ、相携へて彼の家に到り
 ぬ。みちすがら君の事を尋ねたり。
 君は實に如何にして居るか。

余が上京して先づ失望したるものけ君
 の歸郷中なる事なり。殊にひそかに何故
 に上京せざるかに就て吾が心を痛め
 ぬ。余は君の心からの詳細なる手紙に
 接せんことを欲するや實に切なり。

余も再び都に迷ひ出で、教師の職は
 自から退きたり。余に取りては豊かなり
 し俵給も自から好みてなげらぬ。上
 京したり。うき世の波の荒きを知りし
 つも

樂は眞友との快談なりき。手とりて、
 涙もて流り得る女なりき。而して其の最
 初の一人なる君は不在。
 人生の不思議は余に念々其の不思議の度
 をますのみ。余は様々な關係に迫まら
 れて、此の不思議の黑暗をのみ視るに至
 らんとす。植村徳富、かゝる人々は吾が
 靈魂の力を渾へ得る人としも不覺、
 余の爲すべきは何ぞ。余は筆の力によ

りて、天に泣かんことを欲す。されど余が、根柢の大信念は一日もゆるぐことなし。僅に余をさへぬ。

余は小説を書くべきか、詩を作るべきか、馬にのりて人を殺すべきか、講壇に立ちて空呼すべきか。

只だ尤も自然に生活せんと思ふ也。

余は有體に言へば恆産ありて山林に一良民として過し得れば足るが如し。余に恆産なし、故に生活の方法にあこがれ迷ふ。人間は蜂よりも憐れむべきが如く見ゆ。

友なる哉。苦るしき生活のうちの樂みは友の愛なる哉。余は戀人の愛をのぞむ。これ余にとりて恐らくは目下唯一の救世主ならん。されど、これ余には出来可からざる處也。友愛は余が特權なりと信ず。故に君の上京を待つ。來狀を待つ。

自然の山河の美、夕陽の美、草木の美は余より遠ざかりたるが如し。都會は山林の生活を戀せしむ。早々

九月十日 (二十七年)

哲夫

中桐確堂愛兒座右

綱島梁川氏に與へしもの

拜啓

貴著病感録を讀み得たる幸福を謝する爲め敢へて此書を呈し且つ拙著獨歩集一冊を座右に獻じ候

獨歩集中「牛肉と馬鈴薯」と題する一篇は貴下に一讀の榮を賜はらんことを願ふものに候

小生の作物につき諸友の批評紛々たりと雖も未だ彼の一篇につきては何人も小生の意を得たる批評を與へられしものなし蓋し心の經驗の異なるが故かと存候然るに貴下の高著中驚異と宗教の一篇こそ實に小生が心靈の經驗と符合するやに愚考仕り候間

乍失禮御一讀を煩し度く願ふ次第に御座候

貴著に就き所感少からず候へ共未だ拜眉の榮を得ざる未知の人として多言するも禮なしと存じさし控へ候切に唐突の言説を許し玉はんことを謹言

十月十九日夜 (三十八年)

國木田獨歩生

綱島梁川様

因に申し上げ候小生は金子馬津中獨歩太郎等の諸氏と同志に御座候
「牛肉と馬鈴薯」は四五年前の作にて、大阪の小天地と申す雑誌に出したるものに候

著作年表

標 弟 通 題

掲載書目

發表年月

愛 星 忘 獨 源 獨 忘 星 愛

れ え ぬ 人 々

歩 を 歩 吟

を 火 ぢ

と き づ

菊 野 菊

今 野 菊

第 二 の 武 藏

絲 獨 歩 吟

詩 ぼ ろ し 想 づ

ま ぼ ろ し 想 づ

死 ぼ ろ し 想 づ

鹿 ぼ ろ し 想 づ

河 ぼ ろ し 想 づ

わ ぼ ろ し 想 づ

郊 ぼ ろ し 想 づ

小 ぼ ろ し 想 づ

置 ぼ ろ し 想 づ

武 ぼ ろ し 想 づ

歸 ぼ ろ し 想 づ

獨 ぼ ろ し 想 づ

牛 ぼ ろ し 想 づ

肉 と 馬 鈴 薯

小 天 地	明 星	新 小 說	單 行 本	太 陽	同 陽	太 陽	文 藝 俱 樂 部	國 民 之 友	國 民 之 友	「南高水長」の内	家 庭 雜 誌	國 民 之 友	國 民 之 友	文 藝 俱 樂 部	「抒情詩」の内	國 民 之 友	國 民 新 聞	揭 載 書 目	發 表 年 月
三 四 年 一 一 月	三 四 年 一 一 月	三 四 年 五 月	三 四 年 三 月	三 三 年 一 二 月	三 三 年 一 一 月	三 三 年 一 〇 月	三 一 年 一 〇 月	三 一 年 八 月	三 一 年 六 月	三 一 年 五 月	三 一 年 四 月	三 一 年 三 月	三 一 年 一 月	三 一 年 一 月	三 〇 年 一 一 月	三 〇 年 一 一 月	三 〇 年 二 月	二 九 年 一 一 月	二 七 年 一 〇 月

號	あ の 時	岡 本 の 手	運 命 紙	田 舎 教	獨 歩	夫 國	愛 國	決 闘	一 家 内 の 珍	女 難	寺 侯 陶 庵 隨 筆	第 三 者	馬 上 の 友	惡 魔 人	非 凡 なる 凡 人	日 出	從 軍 記	運 命 論	神 遊	園 遊	指 環 の 罰	酒 中 日 記	鎌 倉 夫 人	畫 倉 悲 しみ	少 年 の 悲 哀	非 倉 凡 日 記	錄 倉 日 記	巡 査 地
新 古 文 林	早 稻 田 文 學	中 央 公 論	單 行 本	新 古 文 林	單 行 本	太 陽	戰 争 文 學	文 藝 俱 樂 部	婦 人 界	文 藝 俱 樂 部	單 行 本	文 藝 俱 樂 部	青 年 界	文 藝 界	中 學 世 界	教 育 界	軍 事 界	山 比 古	太 平 洋	園 遊 會	婦 人 界	文 藝 界	太 平 洋	青 年 界	同 地	小 天 地	明 星	小 天 地
三 九 年 八 月	三 九 年 六 月	三 九 年 六 月	三 九 年 四 月	三 九 年 三 月	三 八 年 七 月	三 七 年 七 月	三 七 年 五 月	三 七 年 一 月	三 七 年 一 月	三 六 年 一 二 月	三 六 年 一 〇 月	三 六 年 一 〇 月	三 六 年 五 月	三 六 年 五 月	三 六 年 三 月	三 六 年 一 月	三 六 年 一 月	三 五 年 一 二 月	三 五 年 一 二 月	三 五 年 一 一 月	三 五 年 一 一 月	三 五 年 一 一 月	三 五 年 一 〇 月	三 五 年 八 月	三 五 年 八 月	三 五 年 六 月	三 五 年 三 月	三 五 年 二 月

昭和二年四月一日印刷
昭和二年四月五日發行

現代日本文學全集 第十五篇

著者 國木田獨步

發行者 山本美

印刷者 杉山愛二



發兌

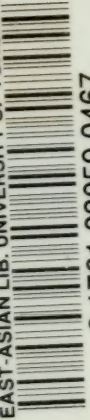
東京市麴町區內幸町一丁目參番地
幸ビルデイング壹階

改造社

東京八日〇二番
銀座一七三三番
銀座四一五八番
銀座五〇四六番
電話 銀座五〇四六番

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03059 0467